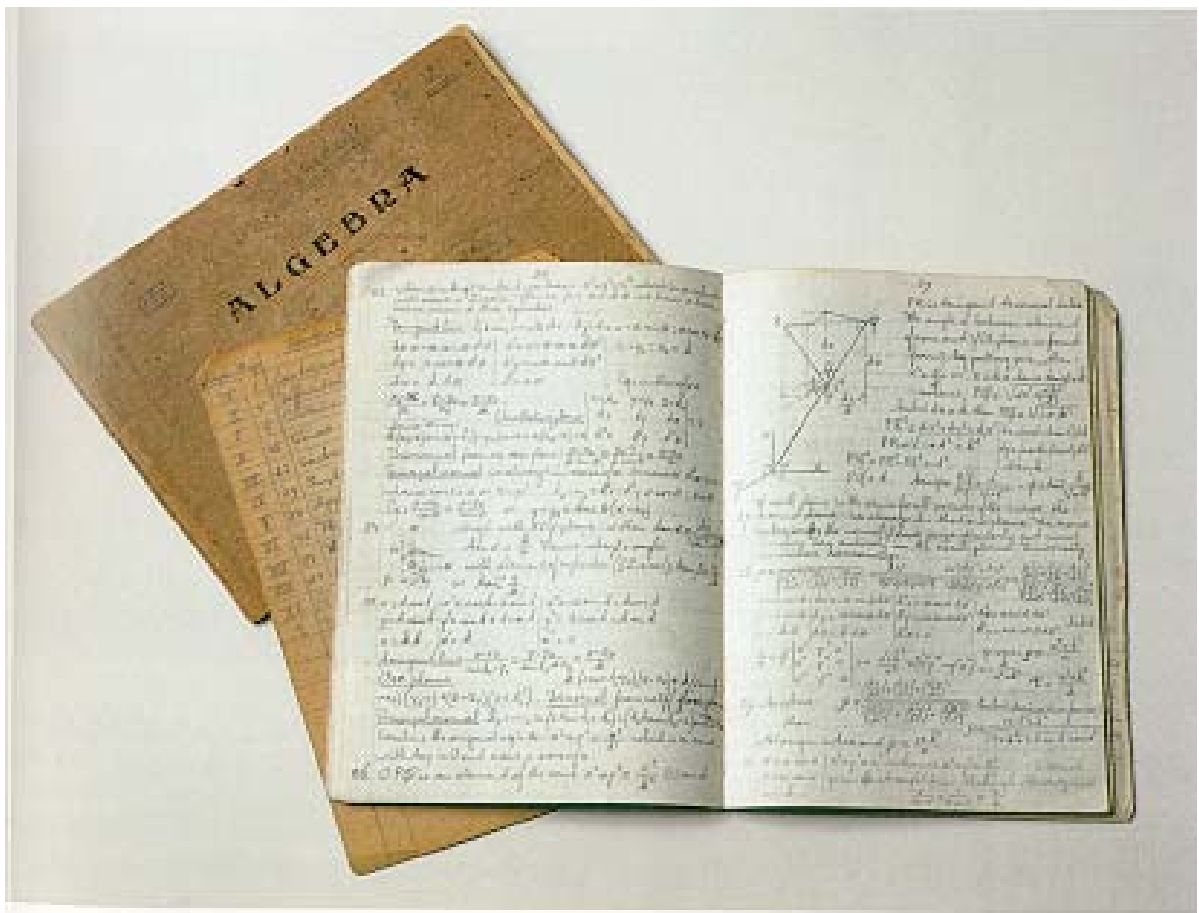


日記でみる日本占領時代の蘭印

収容所外に於いて書かれた日記



この出版物はオランダ戦争資料研究所が「日蘭歴史研究プログラム」の一環として行った『日記プロジェクト』の成果の一つである。「日蘭歴史研究プログラム」は、1994年に当時の村山富市首相が提唱した<平和友好交流計画>から生まれ、日本政府による助成金により運営されるものである。

2004年、オランダ戦争資料研究所

A digital version of this manuscript can be studied on <http://niod.nihon.nl>

日記でみる日本占領時代の蘭印

収容所外に於いて書かれた日記

編纂：Jeroen Kemperman

編集：Elisabeth Broers

翻訳：Tomoko Schenk-Onishi and Takako Shibayama-Reinhardt

目次

背景	1
収容所外部のオランダ人	3
日本軍の入城	35
居住	39
日本人による措置と規定	91
逮捕と家宅捜査	188
日本人との接触	240
インドネシア人との接触	261
食糧・物資事情及び就労状況	298
健康状態と医療事情	413
イラスト	443
教育・娯楽・宗教関係	445
雰囲気 / 終戦後の生活への思い	502
人間関係	519
印人委員会	557
市外との接触 / 戦争捕虜・民間人被抑留者との接触	568
戦況の報道と流言	626
平和通告	661

出版にあたって

日本の蘭領東インド占領に関して残された一次資料は数少ない。日本の公文書は終戦時に大量に破棄され、インドネシアの資料は殆ど無いか、またあったとしても、その入手は困難である。一方、オランダの資料は主に戦後になって作成された報告書や声明書に限定されるが、その中で例外が戦時中に記された日記である。この日記を基に十一巻からなる〈日記シリーズ〉が編纂され、これはそのシリーズの一冊である。シリーズのうち五巻分の日記集はすでに『日記の中の日本占領』シリーズとして、ベルト・バッカー社（アムステルダム、2001-2002年）からオランダ語で出版されている。日記は現実の主観的表現ではあるが、日本占領下での日常生活の様子を良く表している。

ここで言う日記はすべて、オランダ人が記したものである。日本人管理下の収容所では‘書き物’をする事は禁じられていた。収容所外でも、家宅捜索の際に日記が見つかることを受けられる可能性があった。それでも多くの人々が敢えて日記を付けていたことから、日記が書き手にとっていかに重要な意味を持っていたかが窺われる。彼らの個人的な語りは、これまでに形成されてきた日本占領のイメージに新たな視点を提供するものである。

シリーズでは各巻毎に強制収容所、あるいは捕虜収容所に焦点を当てたが、収容所外の生活にも関心を注いだ。シリーズにはある日記を一冊、丸ごと収めたわけではなく、日本占領下の西欧人の日常生活がはっきりしたイメージが得られるように、取捨選択が行われている。

選択に先立って、複数の日記からの情報をいかに明瞭な方法で組み合わせるにはどうしたらよいか、熟考され、長い議論が行われた。一見すると、それぞれの日記から部分を選んで、日付順に並べるのが最も妥当ではないかと思われた。しかしこのように並べると、日記の各々の部分が提供する収容所生活の独立した側面についての情報を全体の中から抽出する事が難しくなり、そのために情報が失われてしまう恐れがあると懸念された。また、我々は日記の部分を中心に細かく項目分けすることで、全体がさらに読み易いものになるではないかと考えた。さらに最終的には、シリーズには各収容所毎、独立した巻が設けられ、複数の日記が出版されるということがある、我々は複数の日記からの情報を並べ、比較することができるような方法を見いだそうとした。

そこで結論として、日記を各々、収容所生活の重要な側面を表す項目に分ける方法が選ばれた。項目毎に日記の部分を日付順に並べ、時の経過がはっきりと分かるようにした。さらに、こうすることで、シリーズ内の複数の日記に見られる話題の発展、例えば医療状況を、互いに比較することができる。しかし実際、項目内容はそれぞれ相互関係にあり、分け難い。したがって日記の部分の多くは幾つもの項目に跨るものである。

編纂にあたっては日記原本を使用した。ただし、読み易くするために、文章は現代オランダ語に統一する方法が採られた。また、紙不足から日記の書き手があまり考慮しなかった句読点や段落を付け加えることにより、読み易さを促進した。略語は幾つかの例外を除いて通常語に戻した。読み易いようにするためか、あるいは説明のためか、いずれにしても原本に後から書

き加えられた文章は、すべてカギ括弧で括った。プライバシー尊重の観点から、文中、書き手を著しく傷つけるような文脈、あるいは犯罪的な行為をしたとなどの非難の文章に限り、その個人名を伏せるようにした。時には書き手自身が、ある状況の中では名前を伏せている場合もある。全体として、書き手の認識は個人的なものであり、彼らが置かれていた極端な状況に影響されているものであることを特記しておきたい。

使用した日記の著者およびその近親者からは、我々が彼らを捜し出せる限りにおいて、この日記プロジェクトに彼らの日記を使う許可を得ている。

収容所外部のオランダ人

序

ジャワ島において、オランダ人とインドネシア人との混血であるオランダ人の大半は強制収容されなかった。¹ 収容所の外で居住を続けていたオランダ人は、12万人から20万人²に及ぶと推定される。彼らは主にバタビア、バンドン、スマラン、ジョカ、ソロ、スラバヤ、マランなどの都市に居住していた。なぜ彼らは強制収容されなかったのであろうか？ ふたつの動因が考えられる。すなわち概念的動因と実質的動因である。まず概念的動因として、日本人は印欧人をアジアの同胞とみなすことにより、「大東亜共栄圏」の建設に協力させることができると考えていたことにある。しかし、外領においては、印欧人も強制収容されたという事実から、同時に実質的な特質も考慮されていたとおもわれる。ジャワ島では、重要な職につく有能な（熟練した）印欧人は当座のところ必要とされたのである。おそらくより重要な点は、12万人から20万人を強制収容し、養っていくことは、明らかに容易な課題とならず、また過大な物資の投入をも強いられたはずなのである。

登録

1942年4月、17歳以上のオランダ人はすべて、有料（男子150ギルダー、女子80ギルダー）で登録が義務づけられた。この登録では、「トトック」（純血オランダ人）と印人に区別され、属するグループが登録証明書（ブンダフタラン）に明記された。これによって日本人は強制収容する該当者を容易に統制することができた。バタビアの中央公文書館で入手可能ないわゆるアサル・ウスルと呼ばれる家系証明書を利用して、その所持者はアジア系の先祖がいたことを証明できた。このアサル・ウスルのおかげで、多くの人々が強制収容を免れたのである。

「この書類入手のための狩りも大規模になされた。家系図の作成業務は旧公文書館に委ねられた。以前は周到にインドネシアの血が一滴でも混じっていることを否認していた相当数の印人が、インドネシア人の先祖がいることをあえて証明するために最善をつくしたのである」³

¹ この「序」では、彼らを印欧人、印人、東インドのオランダ人と呼ぶ。オランダ領東インドでは、純血オランダ人と印欧人の間に法的差別は存在しなかった。日本は、印人に特別な身分を与えたことにより、占領国における既成の法律の改正は許されないとする戦争に関する法律を侵害した。

² Manuscript Hans Meijer（未刊）54-55.

³ NIOD, IC 080.231: O.Pelzer, De Japanse bezettingstijd tot 16 December 1944, 5.

実際には、純血オランダ人と印人とを的確に識別することは容易ではなかった。多くの場合、西洋人的容姿（金髪、青眼）をある程度基準にして分類された。そのため、占領が進むにつれ、西洋人的な印人の多くが強制収容されてしまった。日本人の抱く不信度が女性よりも強かった男子においては特に時とともに多数収容されていった。時には、本人の態度によって収容の否かが左右された。欧州人同胞への連帯感を示すがため収容所に入った者がいた一方、生活費に欠いていたために自ら進んで強制収容させた人々もいた。

大部分の純血オランダ人が収容所に抑留された後、日本軍政当局は1943年4月、収容されていない印欧人に対する特別登録を決定した。家系証明書の多くが偽造されていたが明らかとなり、中央公文書館は閉鎖され記録係が逮捕された。M. モスコウ - デ・ラウターは、1943年5月にマランで行われた登録について以下のように述べた。

「収容所の外に居住していた欧州人は全員、取り調べのためにアルファベット順に呼び出されました。…中略… 私たちは、両親について詳細にわたって問うリストを記入しなければなりませんでした。それでもまだ十分ではありませんでした、なぜならヤップは口頭尋問で3代目、4代目までさかのぼったからです。多くの人々は真っ赤な嘘をつきました。突如彼らにはジャワ人の祖母がいました。というのはインドネシア人の血が1世代あるいは3世代に混じっていれば、自由を獲得できたからです」⁴

バンドンとその近郊では、1943年6月になって初めてこの登録が実施された。その際、17歳以上の印人は8つのグループに分類された。第1グループ：父親が純血オランダ人で母親が印人。第2グループ：母親が純血オランダ人で父親が印人。第3グループ：両親が印人。第4グループ：父親が純血オランダ人で母親がインドネシア人。第5グループ：両親が蘭印生まれの純血オランダ人。第6グループ：父親がインドネシア人で母親が純血オランダ人。第7グループ：父親がインドネシア人で母親が印人。第8グループ：父親がインドネシア人で母親が他のアジア国籍。この分類はバンドンのみで適用されていたようである。その他の地域では4つのグループに分類された。この登録の結果、日本人の基準での欧州人—及び、いわゆる第1・第2・第5グループに分類された人々がさらに強制収容された。この人数はバンドンでは約3000人⁵に及んだ。

日本人官吏が人々の属すべきグループを決定した。不確かな場合には、主に目と髪の色が決定的な基準となった。その際当然、誤りが発生し、有利となった者もいた反面、不利となった者もいた。バンドンでの登録者の中に、本当は第3グループに該当したはずの姉妹がいた。

「…そのひとは質問された後そのまま認められたが、他のひとは、たまたま濃い金髪と青緑色の目を持って生まれたため …中略… 簡単に『ボホン[嘘について

⁴ M. Moscou-de Ruyter, *Vogelvrij, Het leven buiten de kampen op Java 1942-1945* (Weesp 1984) 123-124.

⁵ R.P.G.A. Voskuil (e.a.), *Bandoeng. Beeld van een stad* (Purmerend 1996) 77.

いる]』のだと言われ第2グループに入れられてしまった。姉と妹がどんなに主張しても第2グループのままであった！」⁶

女性たちの中には、インドネシア出身ということを経易に認めさせるために髪を黒く染めた。それでも、いつかは収容されるという危険に絶えず冒されていた。

収容所の外に居住していた印人は、登録証明書を常時提示しなければならなかった。日本軍あるいは原住民警官は、彼らがプンダフタラン[登録証明書]を所持しているか定期的に路上検問した。西洋人的容姿を持った印人は、逮捕を恐れ敢えて外出を避けた。日本人は明らかにこの管理システムに依然満足していなかった。なぜならば、1943年10月、印欧人に対し3度目、今回は家族単位での再登録を実施したためである。家長は両親、祖父母の名前と国籍を父方、母方ともに届出なければならなかった。意図的な誤りまたは記載もれのある書類の提出、また登録証明書の偽造は3ヵ月以下の拘禁刑または最高100ギルダーの罰金に処された。バタビアの印欧人女性ヘルタ・アンナ・ハンペルは次のようなシニカルな意見を述べた。「何ヵ月ごとの再登録でその都度、出向いたことを示す書類が一枚加わります。こんな書類用の本箱を自転車の上に作ろうと思います」⁷

恐怖と不安

強制収容が始まった最初の年には、収容所の外に居住していた人々の暮らしが被抑留者より楽であったか多くの人々にとり疑問となった。初期の婦女子収容所での生活は、のちの1944年、1945年ほど悲惨なものではなかった。

「人々はかなり多くの荷物を携えていくことが許され、また収容所内で何でも入手することが出来、収容所は当初実にぜいたくであった。印欧人女性の多くは、確実に嫉妬の眼差しで眺めていた。自ら希望して収容所に入る人々もいたほどである。当時は、ブランダ・トトック[純血オランダ人]がまさに特権を与えられていたかみえた」⁸

大半の女性はこれを「特権」とは思っていなかった。彼女たちは重い足取りで親しんでいた家財を多く残し収容所に入った。大勢の人々が中央公文書館でインドネシア人の先祖を探し出すために最善を尽したのも無駄なことではなかった。

⁶ NIOD,IC 028.098: H.M. Keilman報告。

⁷ ハンペルの日記 1943年10月30日。

⁸ NIOD,IC 028.362: H.J. Kater報告、8。

このことで、収容所の外での生活が決して安易でなかったという事実は変わらなかった。収容所の外に残ったオランダ人は、外界のみならず、親しい人々からも隔絶されていた。欧州人学校は日本軍占領初期に閉鎖され、印人はインドネシア人学校で授業を受けることを禁じられた。ラジオは封印され、または引き渡さねばならなかった。オランダ語の新聞はもはや刊行されなかった。1943年2月以降、居住地以外を旅するためには許可を必要とした。登録、一斉検挙、そして家宅捜査は多大な恐怖と不安を生んだ。インドネシア人警官、政治情報局（PID）⁹、あるいは最悪な場合には、いかなる反日陰謀をも発見しようと試みる恐るべき憲兵隊のもとに通告される危険に絶えず脅かされていた。占領下のバンドンに在住していたベア・ダンドゥリューは次のように述べた。

「常に何らかの理由で逮捕され、半殺しの目にあわされた。路上で日本人に逮捕された人々を見た。理由は分からないし、その人たちが何をしたのかも分からなかった。おそらく何らかの根拠があったのだろうけれど、そのことは私たちには分からなかった。これらすべてが脅迫感を生んだ。そう。私たちは恐怖心を持っていた」

10

この恐怖心は、日本人占領者の下で事務・技術系の強制労働にたずさわっていた欧州人の中でことに顕著であった。彼らは、検挙されないよう白地に赤丸のついた腕章を装着していたことにより識別された、いわゆる「ニッポンワーカー」であった。職場では、日本人上司による体罰を受ける危険にさらされていた。加えて、何か間違いがあった場合には、妨害行為者と見なされてしまうという大きな危険に冒されていた。また不適切かつ不十分な保全作業にあっては、何らかの不幸は避けられなかった。ニッポンワーカーにはこれらのいわゆる妨害行為によって厳罰、場合によっては死刑が課された。1943年末の3ヵ月間に中部ジャワで起こった「鉄道事件」は悪名高い。憲兵隊は鉄道運行中に起こった事故を妨害行為と見なした。その結果、ジョカ、ソロ、スマランにおいて印人の成人男子と少年が大規模に逮捕された。拷問による自白が強要された。6名の容疑者が死刑を宣告され、その他の14名は無期懲役刑に処された。¹¹ また、1943年内に、ニッポンワーカーの大半がインドネシア人に代ったことで、彼らの安心につながることと

⁹ オランダ統治下、政治情報部（PID）は、主にインドネシア民族主義グループを監視するべく政治捜査局としての任務を果たしていた。日本軍政当局は、オランダ人警察職員を解雇しインドネシア人を採用した。PIDは日本人の直接指揮下となり、日本人により発令された禁止条項に違反する者を捜査する任務が与えられた。L.de Jong, *Het Koninkrijk der Nederlanden in de Tweede Wereldoorlog 11b. Nederlands-Indië II*. (Leiden 1985) eerste helft, 228-229.

¹⁰ Esther Captain, Annelies van der Schatte Olivier ; *Indië, een verre oorlog van dichtbij. Herinneringen van vrouwen in bezet Nederlands-Indië*. (Zutphen 1995), 234.

¹¹ M.P.van Bruggen en R.S. Wassing(e.a.) ; *Djokja en Solo. Beeld van de Vorsteden*. (Purmerend 1998), 71-72 en B. Brommer, E. Budihardjo, A.B. Montens, S. Setiadi, A. Sodharta, A. Siswanto, Soewarno en Th. Stevens; *Semarang. Beeld van een stad*. (Purmerend 1995), 58. Frans van Dompsele; *Een Indische Nederlander in Nederlands-Indië* .(Scheveningen 1997) 参照。

はならなかった。1944年中頃、日本軍政下で労働に従事していた欧州人はごくわずかであった。

12

たびたび行われた強制的な引越も同じように不安の原因となった。日本人に自宅を接収されたために、ある日突然路頭にさまようことになった。ハンペル夫人は1942年8月に次のように書き留めている。

「まったくみじめな暮らしです。毎日家を追い出される可能性があります。例えば、昨日は車が1台私たちの家の前に止まりました。4人のヤップが車から降り、一枚の紙を見てから家々に向かいました。私たちは皆思いました。ああ、始まるぞ！しかし、彼らは先に進んで向かい側の家々に立ち入りました」¹³

彼女は難を免れることができたが、他の人々はそれほど幸運ではなかった。バンドンでは夫婦と子供1人からなる家族は、住まいがたびたび接収されたため、占領期に少なくとも5度の引越を余儀なくされた。¹⁴

日本占領者に対する組織的な抵抗運動は、東インドでの実践にはきわめて困難な状況にあったためかなりの障害があった。オランダ人は混血系も含め外見が目立ち、原住民大衆の中へ潜伏することはほとんど不可能であった。加えて、島外からはいかなる支援も期待できなかった。敵対的または無関心な環境の中で、隔離され、弱い立場で離れ離れに暮らしている少数派として、収容を免れたオランダ人は形だけの抵抗しかできなかった。このように不利な状況にもかかわらず、推定では数千人のオランダ人が不法に行い、あるいは抵抗運動に参加していた。¹⁵ 彼らの多くは処刑や殺害され、あるいは刑務所で死亡した。1943年中頃からは、事実上、組織的な抵抗運動はなくなった。¹⁶

貧困化

日本人はオランダ人に対し貧困化政策を実施した。オランダ領東インド降伏直後、すでに多くの欧州人は、「敵性国人」の銀行預金の押収あるいは凍結、年金の支払い停止や給料平均3分の1の差し引きなどによって財政難に陥っていた。加えて、資産に対し特別課税され（いわゆる「赤玉税」あるいは「戦争税」と呼ばれた）¹⁷、登録証明書の入手にも比較的高い料金を支払わなけ

¹² Manuscript Hans Meijer, 27.

¹³ Manuscript Hans Meijer, 32.

¹⁴ De Jong 11b tweede helft, 904-905.

¹⁵ De Jong 11b eerste helft, 505.

¹⁶ B.R. Immerzeel en F. van Esch(red.); *Verzet in Nederlands-Indië tegen de Japanse bezetting 1942-1945*. (Den Haag, 1993), 33.

¹⁷ 1942年7月中旬、特別税の通告があった。2万5千以上の資産を有す欧州人は、1941年に課された税金の7倍を支払う必要があった。年間3千ギルダー以上収入のある欧州人は、1942年の課税額に加えて、その半分をさらに支払わなければならなかった。(De Jong 11b eerste helft, 328.)

ればならなかった。早くも1942年には、生活費を抑えるため、1つの住居に複数の家族が同居した。後に貧困家族は特別な「貧困者の家」に収容された。

(印) 欧州人の一部は、事務系・技術系の職務を続けることができた—鉄道や各種事務所、工場など—なぜならこれらの職種には適切な日本人やインドネシア人労働者がほとんど携わっていなかったためであった。ベア・ダンディリューは以下のように述べている。

「毎回仕事を得るのにまたうるさくせがんだ、耳をそばだて、触れまわることで毎回なにか耳にした。姉のバプスは年上だったし、リセウムとHBS（高等市民学校）に通ったのでタイプを打つことができた、だから彼女はいつでもまだ事務職を見つけることができた。でも私はまだそこまでいっていなかった。なにひとつ持っていないとお茶汲みになる、だから私は事務所のお茶汲みとして働きに出ることにする。なぜなら貿易会社の事務所は通常通り営業しているから。…中略… 後に私はタイプの講習を受けることができ、事務所で働いた。普通の事務、これはかなり重要な仕事なのだ」¹⁸

賃金労働から定収入を得ている人々は、強制収容されなかったオランダ人社会の中では次第に少数派を形成していった。一家の稼ぎ手の多くは職を失った。解雇、強制収容、会社閉鎖によって失業した公務員・被雇用者の家族は、定収入を得ることができなかった。人々は借金をしたり、家財を売ったり、お菓子や小間物を作って売ったり、いろいろな雑貨の物々交換などをして生活を維持しようとした。これに成功する人もあれば、不成功に終わった人もいた。

どの戦争でも、闇取引は器用な密売者に多くのチャンスを提供した。マーグリート・シェンクハウゼンの例にみられるように、彼女はスラバヤで「チャトゥテン」（直接販売による収益を得ること）することによってたくさん稼ぎ、お金に不自由することは決してなかったのである。「私は日本占領時代ほど大金を持っていた時期はない。時には1ヵ月の休暇が取れるほどの利益を上げた」¹⁹ マランではハリエット・マルスマン-ファン・デーベンターが「泥棒とペテン師との暗黒の世界」で仲介業を営んでいた。

「『悪事』を敢えて行わない女性たちがたくさんいた。10%の利ざやを得るためにどんなリスクをも負おうとしなかった。私はチャンスをつかんだ。仲介人として注意深く、そして慎重に行動した。後方の幽霊、すなわち憲兵隊にしっかり注意を払って。しかし望む、望まないにかかわらず、様々なことに巻き込まれてしまった。私には十分の利益があった」²⁰

¹⁸ Captain en Van der Schatte Olivier, 232.

¹⁹ Marguerite Schenkhuizen; *Memoirs of an Indo woman. Twentieth-century life in the East Indies and abroad.* (Athens 1993), 168.

²⁰ Harryet Marsman-van Deventer; *Meer dan alles... Verhalen van een plantersvrouw over haar leven en werken in het voormalig Nederlandsch indië.* (z.p. 1985), 66.

しかし、彼女たちは例外的存在であった。大部分の人々は、毎日の生活に悪戦苦闘していた。いかに食べ物を買うために十分な収入を得ることができるだろうか？という問いに日々直面していた。それに関連するモスコウ・デ・ラウター夫人の証言は典型的である。

「『お金を探す』ことに私は忙しかった。私たちには収入がありませんでした。時折義姉が叔母からお金をこっそりもらいました。それでほんのひととき荷が軽くなりました。でもまた『どうすればお金が手に入るのだろう、いかに食べていけばいいのだろう』という悪夢がまたはじまりました」²¹

メアリー・ファン・デ・キャンプ・バックーはお金を手に入れることを日課とした。

「何年もの間、私たちには一銭もなかった。お互いに助け合った。私は蘭印風の料理が得意だったし、お菓子やクッキーを焼いて作った。それからやみくもに編み物をした。絹糸で素晴らしい網み目を入れてパンツを編んだ。注文分のみ編んだ」²²

印欧人の女性たちが生計をたてるためにほとんど毎日町に出ていたことがわかる。家の外に出ることが危険だとしても、収入を得ることを余儀なくされていたのである。印欧人男子の多くは絶えず路上検問の的となったため、できる限り家の中にとどまった。

大部分の印人の困難な財政は、生活費が上昇し続けたためさらに悪化した。1938年と比較して、1942年6月には平均39%の物価上昇、1943年7月には170%、1944年4月には426%、そして1944年11月には1275%に上昇した。²³ 依然賃金労働に就いていた人々でさえも、生活を維持していくのはかなり困難であった。収入を食品の購入に当てねばならない比率がますます増えた。「共稼ぎ」している人々にとってさえ、ベア・ダンドウリュウの証言によれば容易なことではなかった。彼女と姉は共に仕事を持っていたが、食べ物の値段が高かったため飢えに苦しんでいた。「食糧を売るパサールがひとつあった。何でもあった。でも私たちにはそれを得るお金がなかった。何かを買うためには大金を持っていなければならなかったのだ」²⁴

印人の大部分は都市に住んでいたため、自給自足の農村生活に頼ることができなかった。彼らには、困窮したインドネシア人都市生活者の多くが持っていたような、ジャワ農村とのつながりはなかった。自宅の庭で野菜を作ることが精一杯であった。印人は都市の貨幣経済に依存していたため、日本人の敷いた貧困化政策で彼らはさらに弱い立場に立たされた。生存闘争に時間とエネルギーを費やさねばならなかったため、社会・文化活動への時間はほとんどなかった。

²¹ Moscou-de Ruyter, 44.

²² Captain en Van der Schatte Olivier, 198.

²³ De Jong 11b tweede helft, 888.

²⁴ Captain en Van der Schatte Olivier, 233.

貧困からのがれるために若干数の印人女性は日本人と性的関係を持つことを選んだ。占領中には日本人と印人女性とのこのような関係により推定800人の子供が生まれた。²⁵

援助

収容所の外に暮らす印欧人の大部分が定収入のない婦女子であったことから、身回り品をほとんど売り尽くしお金を使い果たしてしまった後には、多くの人々が遅かれ早かれ地方自治体や民間の組織に援助を求めなければならなかったことは当然であろう。これらの組織は中央調理場や、生活必需品、わずかなおこずかいを支給するという方法で最低限の援助をしていた。

バタビアは、日本軍政当局が組織的な援助機関をある程度是認した唯一の都市であった。ここでは様々な民間・宗教団体がそのスタッフを統轄援護機関であるGESC (Gemeentelijk Europees Steuncomité 地方自治体欧州人援護委員会) 内に併合することに決定された。おそらく日本当局は、統合組織の統制が容易に行き渡るという理由でこれを許可したのであろう。1942年8月に、GESCはバタビアにおける全欧州人住民の4分の1に当たる約9千人の貧困者を援助していた。1943年1月・2月には約1万1千人の欧州人が援助金を受けていた。これは当時大半の「純血オランダ人」が強制収容されていたため、ほぼ全員が印人であった。²⁶

GESCは地方自治体から補助金を得ていたが、その額は給付金、食糧、医療品、石けん、その他の物資の配給など、全業務の資金調達には不十分であった。1943年中旬までは、主に裕福な中国人から密かに資金を借り受けていた。組織の名称は1943年5月にPertoeloengan Orang Blanda-Indo Miskin(プルトルンガン・オラン・ブランダインド・ミスキン 貧困印欧人のための援助) POBIMと変更された。1943年11月には再度この組織名はオランダと欧州を示す「ブランダインド」という言葉が削除され、Pertoeloengan Orang Peranakan(プルトルンガン・オラン・プルナカン 混血系への援助)POPと改称された。

バタビアにのみ統轄援助機関が存在した。他の都市では、主に民間団体が援助を行っていた。大企業の中には資金の一部を隠匿することに成功し、その結果、解雇した元従業員に対し密かに財政援助を行った。こうしてBataafse Petroleum Maatschappij バタビア石油会社(BPM) は、憲兵隊によって停止させられた²⁷1943年2月まで手当を給付し続けていた。Koninklijke Paketvaartmaatschappij オランダ郵便船会社(KPM) はそれより長く、1943年の秋まで支払を続けていた。²⁸ 日本当局は、特にGESCの初代会長であるF. クラマーが地下抵抗運動へ資金援助していたことが判明した後、援助機関を信頼していなかった。クラマーは収監中に死亡した。彼の後任であるA. Th. ボーガールトも、1943年12月同様に不法行為の疑いで検挙された。その後POPの運営は、蘭印軍(KNIL) の退役陸軍中佐O. ペルツアーに引き継がれた。1944

²⁵ Manuscript Hans Meijer, 60-61.

²⁶ De Jong 11b eerste helft, 376-377.

²⁷ De Jong 11b eerste helft, 373.

²⁸ ハンペルの日記、1943年10月2日。

年12月、彼もまた逮捕される運命にあった。このことから援助機関は危険な活動だったことが分かる。

「反日運動」に関する1944年2月の憲兵隊報告書には、次のように援助機関について記されている。「ジャワ島全域のいわゆる慈善団体の活動は、敵国支持の感情を広めることに責任を負っていた」²⁹ この証言によって、援助機関は（存在する限り）行政監督下に置かれようになり、その自主的性格を失なった。加えて、1943年末以降、援助がますます制限されるようになった。日本当局は、年金を受けていない、疾病・身体障害のない50歳以下のいわゆる「就労可能な男子」に対する援助を禁止した。印欧人家族は、通常インドネシア人の「字長」（Wijkhoofd）から貧困者証明を得て初めて扶助を受ける資格があった。インドネシア人字長は、印人の生活水準がインドネシア人の貧困者レベルに陥ってはじめて援助が必要であるという見解であった。つまり依然自転車や余分な家具を所有している者、輪タクを利用する者には援助しないとされた。この方法によってバタビアにおける受給者数は、1943年末には約1万7千名（市内の印欧人の80%！）に増加していたのが、約6千名にまで減少した。³⁰

1944年8月、バタビアにおけるこの方針はさらに厳しくなり、今後POPは最も援助を必要とする約3千人にのみ援助を許可する規制が敷かれた。15歳から55歳までの男女への援助はすべて停止した。³¹ 彼らは何らかの職業に就く必要があった。ジャワ島の他の地域でも、マランのモスコウ・デ・ラウター夫人の記述からわかるように、同様の制限がなされた。

「中央調理場から食事がもらえなくなったのもちょうどその時期でした。新しい「責任者」任命の際、彼らはまた受給者の再登録を始め、プンダフタラン（登録証明書）の記載から私の年齢が明らかになりました。私は資格を得るには若すぎました。だんだんと私の病状は悪化しました。失神することもたびたびありました」³²

ジョカでも中央調理場がなくなり、援助は徹底的に縮小された³³。日本人は、失業した印人に自活できるよう仕事に就く手助けをしようとした。印欧人女性や少女は一般に日本軍のために靴下を編んだり、糸を紡いだり、衣類や袋を縫製する必要があった。青少年は好んで綱製造所や機械作業場の仕事に就かされた。印欧人のこれらの仕事に対する意欲は、賃金があまりにも低かったためほとんどなかった。闇取引の方がより大きな稼ぎになった。

²⁹ NIOD IC 002.183: ジャワ島の反日抵抗運動、ジャワ憲兵隊本部 1944年2月。

³⁰ De Jong 11b tweede helft, 891.

³¹ De Jong 11b tweede helft, 891. NIOD, IC 080.231: O.Pelzer, De Japanse bezettingstijd tot 16 December 1944, 10.

³² Moscou-de Ruyter, 153.

³³ Géza Szabó; *Van poesta tot polder*. (Bilthoven 1989), 93.

対等化

日本人は印欧人をアジア人とみなし、彼らが大東亜共栄圏の建設に協力させようと考えていた。印人たちはそのため困難な立場に陥った。日本軍政当局は彼らに重圧をかけ、彼らが占領者に積極的に協力し原住民との同化を強要した。一部の印人は納得し協力したが、大部分は否定的であった。早くも印人側からの反応は、日本当局が考えていたほどでないことが分かった。タシックマラヤ（西部ジャワ）で行われた演説の際、印欧人は態度を改め、できるだけ迅速にインドネシア人と同化すべきこと。さもなければおそらく「どこにも属することができないぞ」³⁴との警告がなされた。

警告は1度にとどまらなかった。1943年1月、ジャワにある日本軍政当局の公式報道機関誌「*Kan Po*（官報）」に『印欧人に警告』という見出しで記事が発表され、その中で日本軍は印欧人を原住民と同等に扱う旨表明した。だが「印人が注意を怠ったり、誤った態度や見解を改めなかったり、あるいは感情を抑制できない場合は、軍は印人を敵性国人として厳しく対処することをいとわないであろう」³⁵ この敵性国人として厳しく対処とは間違いなく強制収容を意味した。³⁶

およそ2週間後、インドネシアの日刊紙「*Tjaha ja*」に印欧人P. F. ダーラー（1873年生まれ）のインタビューが掲載され、その中で彼は、混血のオランダ人にインドネシア人と同化するよう呼びかけた。日本占領前、政府の情報機関で働いていたダーラーはオランダ本国から距離を保ち、インドネシア独立を支援する印欧人の小さな政治団体の出身であった。彼は欧州人よりもインドネシア人と感じていたことは疑う余地がない。インタビューでダーラーは、官報の警告に対して「非常に感謝」していると主張した。なぜならそれを通じて日本人の行為が「いかに寛容で正しかった」かが分かったからだ。彼は、印欧人は今その特殊な立場を認識しはじめるだろうし、特に「すでに何度も東西の選択を忠告されたが、今のところ忠告を無視している」印人は今その特殊な立場を意識しはじめるだろうとの希望を述べた。印人は「純粹に」インドネシア人になるべきであり、そのつもりのない人々は、東インドでは永久に外国人とみなされるであろう。

37

日本人は、新聞記事だけで印欧人を「大東亜」へ協力させることに成功するとは考えていなかった。それにはさらに不可欠なことがあった。そのため、1943年8月にウルサン・プラナカン事務局、すなわち「Kantor Oeroesan Peranakan 混血人のための事務局」（KOP）が設立された。この組織は、今後ジャワの印人全員の利益を保護するはずであったが、バタビアに所在

³⁴ W.H.J. Elias; *Indië onder Japanschen hiel*. (Deventer 1946) 107.

³⁵ Brugmans(e.a.), *Nederlandsch-Indië onder Japanse bezetting. Gegevens en documenten over de jaren 1942-1945*. (Franker 1960) 454.

³⁶ ハンペル夫人の1943年1月16日の日記にもこの見解が述べられている。「印人に警告が出されました。…中略…もし私たちが早急に態度を改めないと、私たちも収容所に入れられてしまいます」1944年2月22日のイルマ・ポールの日記も参照。

³⁷ Brugmans, *Nederlandsch-Indië*, 455. ダーラーが実際にこう言及したかどうか確かではない。戦時中、大部分がでっち上げられた内容の様々な「インタビュー」が日本側から公表された。

した事務局は、実際には日本の政策手段としての意味合いがあった。組織の責任者には日本人が就き、初代はナカツチという人、後にはハマグチであった。スタッフは印欧人で構成されていた。KOPには4つの部署があった。(1) 総務、政治、宣伝活動指導 (2) 援助組織及び失業者根絶 (3) 人民、特に印人の情報収集と調査 (4) 公文書、管理・庶務部であった。ダーラーは第1部署の責任者であったため、KOPは印欧人から「ダーラー事務局」とも呼ばれていた。

1943年9月19日、日本の宣伝部の責任者陸軍将官ヤマモトがラジオ演説を行ない、1週間後「*Kan Po*」に発表された。この演説で、印欧人は「大東亜」とオランダの間でいずれか一方を選択すべきだと再度強調された。

「印人は無関心な態度を改め、生活を心機一転すべきである。…中略… 印人が子孫の代にも他の国を持たずに、大東亜以外では生活できないと考えるならば、他の東アジアの国々と同化する道しか開かれていないことを認識しなければならない」

38

印人はアジア人であることを認識し、大東亜共栄圏のために闘う日本の後方支援に結集しなければならなかった。

新アジアに対するこのような忠誠心を印人に推進するため、日本軍政当局は彼らにジャワの他の住民と同じ地位を与えることを決定した。言い換えれば、印人はインドネシア人と『対等化』されたのであった。これはいくつかの差別的規則が廃止されたことを意味した。以後印人の子供たちは、インドネシア人小学校への入学が許可され（欧州人小学校は、日本軍によって当時すでに閉鎖されていた）、印人の銀行預金者は預金の一部を引き出す権利を得るであろうとされた。加えて、ヤマモトは、日本軍政当局が強制収容されている印人男子の釈放の要請に応じる準備があると表明した。しかし、この約束はわずかに実現されただけだった。

1943年11月1日以降、「非敵性」印人は戦前の預金残高の30%を引き出すことができたが、実際にはごく一部が現金で支払われた。日本人はインフレに対処するために現金による支払いをできるだけ回避しようとした。支払われた金額の大部分は借金完済のために手元に残され、残額はほとんど日本の銀行の預金口座に振り込まれた。³⁹

印欧人は子供たちがインドネシア人学校に通学できるということに関して満足感を持っていなかった。幾多の人々は自分の子供がインドネシア人の級友にいじめられることを心配し、一方、インドネシア人との対等化に根本的に反対した人々もいた。⁴⁰ バタビアの援助機関POPの責任者であるペルツァーは、戦後以下のように報告した。

³⁸ Brugmans, *Nederlandsch-Indië*, 456.

³⁹ *Indische tegoeden. Onderzoek naar de particuliere bank- en levensverzekeringstegoeden van Nederlanders in Nederlands-Indië/Indonesië 1940-1958*. (z.p. 2000), 37-39.

⁴⁰ Brugmans, *Nederlandsch-Indië*, 461.

「1944年、KOP事務局は、我々の子供たちにセコラ・ラックヤット[原住民学校]へ通学させることに努めた。…中略… それに対する私の抗議文をダーラー氏のもとに送り、彼に我々の子供たちの道徳低下をもたらことになるので決して同意しない旨を明らかにした。…中略… KOP事務局はこのことを断念した」⁴¹

印人はむしろ専用の学校を期待した。

1943年9月の末日には、印欧人あるいはインドネシア人の先祖がいたことを証明できた民間人男子被抑留者が7名釈放された。⁴² その正確な人数は知られていないが、さほど多くはなかったとおもわれる。印欧人の民間人被抑留者が釈放されるという約束も、ほとんどの地域において熱狂的に受け取られてはいなかった。ある印人は「印人が収容所から釈放されても仕事がなければ、生活はさらに困難な状況になることだろう」⁴³と述べた。ハンペル夫人は、釈放された男子は強制的に日本軍に入隊させられるだろうと考えた。⁴⁴ 1943年12月、日本人はバタビアでの集会で、家族が要請書を提出したならば男子被抑留者の釈放が可能であると再度強調した。この集会に出席していたある印欧人は、「家族や、友人・知人を釈放させる要請はほとんどなかった。『収容しておいて下さい』というのが愛情をこめたスローガンだった」⁴⁵ 彼らはニッポンの約束を明らかにあまり信用していなかった。

しかし、1944年5月には、ジャワ全土でおよそ250名から300名の男子が釈放された。概して、家族や親族によって養われることが確かな男子が対象となっていた。⁴⁶ 1944年の秋に、再度数十名の男子が釈放された。⁴⁷ このことはかなり注意を促したようだ。なぜならバタビアでは印欧人男子全員に対しその釈放が考慮されるという通達があり、2日間で印人女性が多数の要請をしたため、手続きを数週間停止しなければならなかった。⁴⁸ 他の人々は依然不信を抱いていた。「絶対にパパをあきらめない。まったく奇妙なことを、まるっきり信じられない」⁴⁹ 釈放された何人かの男子にとって、釈放は幻滅させる体験だった。抑留中にあれほど夢見ていた戦前の気苦労のない家族生活に代わって、生存への絶え間ない(新たな)闘争が待ち受けていたのである。ハンペル夫人の日記からもうかがえるように、ある者にとって釈放はあまり幸福をもたらさなかったようである。「彼らがそれを頼んだわけではないのです。彼らは自分の妻がやせ細り、子供たちはろくなことになっていない姿を見ました。学校はなし、母親は食べていくお金を

⁴¹ NIOD, IC 080.231: O.Pelzer, De Japanse bezettingstijd tot 16 December 1944, 12

⁴² De Jong 11b tweede helft, 874.

⁴³ Brugmans, 461.

⁴⁴ ハンペルの日記、1944年5月7日。

⁴⁵ De Jong 11b tweede helft, 876.

⁴⁶ これは親族が「正規の」職業を持つ必要があったことを意味していた。NIOD, IC 080.231: O.Pelzer, De Japanse bezettingstijd tot 16 December 1944, 11. ハンペルの日記、1944年5月14日。

⁴⁷ バンドン市内とその近郊の収容所から38名の男子が釈放された(スイデルハウトの日記、1944年11月10日)。女性たちは夫を養うことができる証明を必要とした(ハンペルの日記、1944年11月7日、12日)。

⁴⁸ ハンペルの日記、1944年11月23日。

⁴⁹ イルマ・ポールの日記、1944年11月18日。

得るためにチャットアウト[闇取引]をしなければなりません」⁵⁰ 再度の釈放に代わって、1945年1月には印欧人男子・少年逮捕の新しい波が続いた。

アジア人との対等化は大部分の印欧人により強く拒否された。人種差別的な先入観と優越感インドネシア社会統合にとって克服できない障害であった。インドネシア統合への最高支持者であったダーラーは、多数の賛同者は期待できなかった。「私はインドネシア人とは対等にされたくない。死んだ方がまし」と言った看護婦もいれば、他方の反応は「印人とインドネシア人と間にはほとんどつき合いがない。私たちにとってこのような方法でインドネシア人の中で生活するのは困難である」⁵¹ 日本人とダーラーは有利なことであると述べたが、大部分の印欧人にとっては格下げを経験することになった。占領者の政策は一貫性にも欠けていた。一方では印人をインドネシア人と対等化し、他方では彼らの職場は大幅に原住民に切り替えられた。専門職から印人就労者が計画的に追放されたことは、「競争相手」インドネシア人に対するかなりの反感を生んだ。大東亜共栄圏において東インドのオランダ人が格下げされた市民として扱われたことは、日本の美辞麗句ではおおい隠すことはできなかった。⁵²

印人委員会

印欧人が占領者への協力にあまり乗り気でなかったことは、日本側にも明らかであった。1944年2月、憲兵隊報告書には印人に関して次のように記載されている。

「彼らの発言と見解で反日感情においてはオランダ人と異ならない。寛容な軍政当局の真の意図を理解しない彼ら不従順な反抗的グループを厳しく統制するべきである。我々に協力することをほとんど拒否する最近の状況をみると、印欧人を指導し勧告することが必要不可欠である。親連合軍感情をいっきに喪失させることも同様に不可欠である」⁵³

その目的で、日本当局は、1943年末と1944年初めにジャワのいくつかの都市に印人委員会を設置した。⁵⁴ この委員会はKaoem-Indoカウムインド（印人のグループ）あるいはイインカイ（委員

⁵⁰ ハンペルの日記、1944年11月16日

⁵¹ Brugmans, *Nederlandsch-Indië*, 461. また、インドネシア人も印人の対等化に関してはそれほど熱狂的ではなかった。日本の反欧米プロパガンダは（東インドの）オランダ人に対するインドネシア人の反感を促した。

⁵² Elly Touwen-Bouwsma; Japanese minority policy. The Eurasians on Java and the dilemma of ethnic loyalty, in: Peter Post en Elly Touwen-Bouwsma(ed.); *Japan, Indonesia and the war. Myths and realities*. (Leiden 1977), 39.

⁵³ De Jong 11b tweede helft, 879.

⁵⁴ ジャカルタ(バタビア)、ボゴール(ボイテンズルフ)、バンドン(プリアンガン理事州)、プルウオケルト(バンジョマス理事州)、テガル、ペカロンガン、マゲラン(ケドゥー理事州)、スマラン、ジョカ、ソロ、マディウン、ボジョネゴロ、スラバヤ、マランにあった。マランの委員会は、ラワン、バトゥ、パスルアンと3箇所支部があった。(NIOD IC 080.231-V, ジャワの委員会管理に関するP.F.ダーラー氏のメモ)

会)と呼ばれ、KOPのハマグチとダーラーの責任下におかれた。理論的には地域の印人社会の利益を保護するためであったが、実際は印人社会を日本人に協力させ、また、インドネシア人と同化させることが目的であった。委員会のメンバーは、印欧人社会から慎重に選ばれた人物により指名または選任された。

委員会の作業要領は、相互間でかなり異なっていた。印人の利益保護を可能な限り推進しようとしたところがあった一方、日本人のいいなりになっていた委員会もあった。印人委員会の任務は、いずれにしても簡単なことではなかった、なぜなら印欧人大衆の後ろ盾は当てにはならなかったからである。委員会は厳しい統制下にあり、日本当局によって様々な命令の窓口として利用されていた。通常日本の措置を不必要な強硬さを避けて適用させようとしたが、これは常に成功したわけではなかった。いくつかの委員会では『民族の忠誠心と政治的協力』への正しい道を探すことに成功せず、地域の印人社会はただ悩みの種になっていった。⁵⁵

印人委員会の設置後、印人にとって4度目の登録が行われた。今回は登録と同時に誠意の宣誓が行われた。⁵⁶ マランのように印人がこの宣誓を個別に行なう必要があったところでは、かなりの問題を引き起こした。大多数が信条的にこの宣誓を拒み、何度もその返答のための期限が延期された。この登録の最終的な結果は知られていないが、全体的にこのことはあまり成果を生まなかったようである。⁵⁷これに反してスラバヤでは、地元の印人委員会が集団声明を出し、それでことが決まったのである。⁵⁸

印人委員会は貧困印人の援助への独占権を得た。そのためバタビアでは、援助機関POPは印人委員会として改編された。すなわち混血の住民を対象とした委員会である。援助はさらに制限された。「ジャワ奉公会」、すなわち「ジャワ勤労奉仕」は、人民運動の一環として印欧人を労働に従事させた。「国内戦線」の動員を目的にしたこの組織は、1944年3月1日に設置され、日本当局の厳しい統制下におかれていた。インドネシア人以外にも「従順な」中国人、アラブ人、そして印人がこの「民間人労働義務」に服従させられた。スカルノがこの組織の指導者で、ダーラーが印欧人社会を代表して参加した。

軍政当局の指令を最下層の社会にまで浸透させるために、時期を同じくして「トナリグミ(隣組)」が導入された。これは日本から移入されたシステムで、全住民が小さな組に割り当てられた。都市では、隣組は警防団の手配や食糧配給を担当していた。各隣組または居地区の責任者は「クミチョー(組長)」と呼ばれた。印人が大勢住んでいるところでは、印欧人が組長に指名された。様々な小集落が集まり「アザ(字)」を形成し、「アザチョー(字長)」、ある

⁵⁵ Elly Touwen-Bouwsma ; Tussen etnische loyaliteit en politieke collaboratie: De Indo-comités op Java, 1943-1945, in: Wim Willems en Jaap de Moor (red.); *Het einde van Indië. Indische Nederlanders tijdens de Japanse bezetting en de de-kolonisatie.* (Den Haag 1995)

⁵⁶ バタビアでは1942年5月の初回の登録で「日本政府に誠意を誓うか」を問われた者がいたが、何も問われなかった者もいた。ハンベルの日記、1942年5月25日、30日。

⁵⁷ Moscou-de Ruyter, *Vogelvrij*, 141-142. Julika Vermolen, *De Dampit-affaire. Een vergeten drama op Oost-Java tijdens de Japanse bezetting.* (Amsterdam 1999), 46-47.

⁵⁸ NIOD IC 033.897(2-3), 発議。

いはインドネシア語のルラ(村長)の管理下におかれた。字はさらにまた郡長の管理下にあった。隣組システムの成功は組長の努力に左右されており、彼らは非常に活動的で同調的であった。⁵⁹

隣組システムの階層的な特性を介して、インドネシア人だけでなく印欧人も民事・軍事目的の作業に呼び出された。これは主に自分たちの住んでいる地区の保全、菜園の耕作、ヒマシ油製造用ジャラックの種まきと収穫だけでなく、軍用飛行場の整備にも狩り出された。印人の多くは原住民と同じような重労働を行なうことに抵抗した。ラワンでは、印欧人婦女子が広場や通りを清掃する必要があった際、多くの抵抗運動が起こった。スマランでは、当初畑仕事を課された印人が現れなかった。彼らは旧ゴルフ場を専用の作業場として指定されて初めて、主にキャッサバの栽培を始めた。これらの印人は、付近にインドネシア人がいないところでのみ屈辱的なクーリー労働を行なった。バンドンのように印欧人のみが住んでいる地区では、隣組の義務はそれほど支障を生まなかった模様だ。⁶⁰

抑圧

父親は戦争捕虜、あるいは強制収容され、学校はなく、お金も仕事もなし。これが1944年の印人少年たちが陥った状況であった。誰にも命令がましく言われることなく、真夜中まで路上にたむろする者もいた。この状況では、軽犯罪をおかす少年たちの数が増加したのも驚くにあたらない。

⁶¹ バンドンに潜伏していたジャーナリストのヤン・バウワーは、1944年1月の日記に記した。

「都市の少年犯罪が恐ろしく増加している。少年ギャング団が活動している。…中略… 若者たちは一人住まいの女性の家から盗みを働くことを専門にしている。彼女たちはカナテコで気を失うほど殴られる。…中略… 数人の少女たちもこのグループに属しているようで、数多くの盗みや家宅侵入を犯していた」⁶²

印人同志、あるいはインドネシア人少年たちとの乱闘の数が増加していった。日本人はこの「問題」を解決するため次の方法を考えた。すなわち印人少年たちをバタビアと他の大都市から連れ出し、農園で労働に就かせることであった。この目的のため、1944年9月にKOPに特別部署が加わった。この部署はマカッサル出身でオランダ人の養子になった印人P. H. ファン・デン・エックホウト(1910年生まれ)の指揮下に置かれた。それまでファン・デン・エックホウトは様々な捕虜収容所に収監されており、そこで数十人の印欧人の支持者を身边に集めていた。急進的な親日的姿勢を理由に、ファン・デン・エックホウトはその支持者と共にKOPで働くために釈放された。

⁵⁹ De Jong 11b tweede helft, 947-952. Brugmans, Nederlandsch-Indië, 161-164.

⁶⁰ Elly Touwen-Bouwsma; Tussen etnische loyaliteit, 165. NIOD, IC 003.745-003.746: J.C.Raderによる公文書 NEFIS報告 2-4.(1946). Vermolen, Dampit-affaire, 26.

⁶¹ Brugmans, Nederlandsch-Indië, 323.

⁶² Jan Bouwer, *Het vermoorde land* (Franeker 1988), 233-234. (1944年1月19日)

その影響はすぐにも顕著に現われた。1944年9月、バタビアで16歳以上23歳までの印欧人少年たちがKOPに登録するため呼び出された。推定600名から700名の少年がこれに該当した。ファン・デン・エックホウトは自ら、印人少年たちを侮辱しおどしながら日本人に協力する意志の否かを要求した。少年たちの多くはこれに対するはっきりした回答を拒否した。拒否したことによって数十名の少年たちは、9月27日に検挙されグロドック刑務所に監禁された。協力に同意した少年たちは定期的にKOPに出頭する必要がある、そこで行進の訓練、日本語、マレー語、インドネシア民族歌の講習を受けた。⁶³

マランでも印人少年たちに対処していた。約300名から350名の都会の少年たちが、1944年9月から12月の間にダンピット（ジャワ東部）近隣のスンバー・ゲシンのコーヒー・ゴム農園企業に動員された。ラティハン（訓練）という名目で、少年たちは木を切り倒したり、水を汲んだり、野菜の栽培をさせられた。少年たちは農園企業でインドネシア人から宿舍に石を投げつけられたり、水源を汚されたりして脅かされた。10月以降状況はさらに悪化し、12月の末には大部分の少年たちが病気や栄養失調のため帰宅した。⁶⁴ 加えて、マランでは1944年10月17日に大多数の印人少年たちが不法行為の罪で検挙された。この逮捕のきっかけは、警防訓練中に2ヶ所で放火（ダンピットとマラン）が発生したこととおもわれる。尋問中には拷問が行われた。6名の少年が刑務所で衰弱と虐待が原因で死亡した。1945年6月、13名の少年が死刑を宣告され処刑された。他の数十名は長期の懲役刑を言い渡された。⁶⁵

1944年12月12日、バタビアにおいて印人問題を扱うKOP事務局で、ジャワの印欧人社会の代表者による会議が開かれた。各地の印人委員会はすべて、その地域における印人の状況を報告するために代表者を1人送る必要があった。この会議中、ダーラーはジャワ全土の印欧人の代表者として任命された。日本側からは、インドネシア小学校でのわずかな生徒数、印人の「頑固さ」や「うぬぼれ」などに関する印人に対する苦情の長いリストが出された。KOPにおけるダーラーの上司である日本人ハマグチは、1944年に日本当局は印人のための失業対策事業に約20万ギルダーを出費したと報告した。印人のなお一層の協力が期待された。なぜならこの協力は社会的・経済的な領域にのみに必要とされたからだ。ハマグチは出席者に対し、軍政当局は印人に軍事協力を強制することはないと保証した。住民部の責任者である日本人ウタダは、印欧人はジャワで生まれたこと、彼らには他に祖国がないことを演説で再度強調した。「そのため、私は印人の運命はその信念によって左右され、その地位は事実この社会の中にあるのだと率直に申し上げる」⁶⁶ インドネシア的要素が支配的な役割を果たすであろうことが回避できない社会の建設に協力するという考えは、大部分の印欧人にとっては特に魅力のないものだった。彼らは連合軍の

⁶³ De Jong 11b tweede helft, 883. Elly Touwen-Bouwsma; Tussen etnische loyaliteit, 166.

⁶⁴ Elly Touwen-Bouwsma; Tussen etnische loyaliteit, 166-167. Vermolen, Dampit-affaire, 59-64.

⁶⁵ Vermolen, Dampit-affaire, 69-80.

⁶⁶ NIOD IC 039.593 スアラ・アジア 1944年12月14日。 Elly Touwen-Bouwsma; Tussen etnische loyaliteit. 167. スイデルハウトの日記、1944年12月12日。

勝利と戦前の体制を信じていた。彼らにとって、インドネシア独立はほとんど想像できなかった。

67

印欧人社会の占領者との協力関係は—日本側の観点からすると—問題があったことは明らかだった。戦争はすでに長い間日本側にとって不利な形勢となり、連合軍のジャワ上陸によって、印欧人が日本に背を向けるのではないかという恐れもあった。この考えが背景にあったか、日本軍政当局は1945年1月、「共栄への危険分子」とみなされる印欧人を全員逮捕するよう発令した。⁶⁸ 1月25日、ジャワの都市で特に印人少年を標的とする一斉検挙が行われた。翌日、「政府に協力しようとしないう一部印欧人グループの強制収容に関する」布告文が「*Soeara Asia*」（アジアの声）に掲載された。

「頑固な一部の印人は政府の計画や度量の大きさを無視し、許されざる様々な事件を起した。…中略… 当局がそのことをひとたび認識した時点で、当局は彼らの態度が改まるまで社会から隔離すると決定した。この措置は、当局に協力するつもりがなく、他の自発的な印人の意志と支持を常に妨げようとする一部の印欧人グループに対するものである。…中略… 当局は以前に増して印人への指導と教育を強化するつもりである」⁶⁹

失業した印人少年たちや困窮した印人家族は、労働収容所や農園の仕事に就かされた。日本当局が就労すべき人数を通達し、その後印人委員会がそれに該当する失業者と家族を選んだ。このようにして、1945年の1月と2月、バンドンでは失業中の印人男子・少年が、チマヒ近隣に位置するグヌン・ハルーとパサール・ベンテンの農園企業で働くために召集された。パタビアでは失業中あるいは「反日派の」少年たちが1945年5月、KOPに出頭するよう個別に呼び出された。彼らはパタビアのハリムン収容所に監禁され、農業と牧畜に従事させられた。

強制労働キャンプと農園は、占領末期中ずっと存在した。収容所の外にとどまることができた印欧人男子・少年の大半は、このように社会から隔離されていた。これは、印人を日本に協力させインドネシア人と同化させるためになされた日本の試みの痛ましい結果であった。印欧人のインドネシア社会への統合を常に唱えていたダーラーは、おそらく深く失望させられたことであろう。1945年5月、彼はジャワ奉公会でインドネシア独立国における印人の立場に関して以下のように述べた。

「この問題は…中略… 2つの方法で解決することができる、すなわち欧州人かあるいはインドネシア人になるかを彼ら自身に選択させる。彼らが自分をインドネシア人と見なすならば、…中略… 新しい国家でインドネシア人民と同様の身分を得る

⁶⁷ Elly Touwen-Bouwsma; Japanese minority policy, 44-45

⁶⁸ Elly Touwen-Bouwsma; Japanese minority policy, 45

⁶⁹ NIOD IC 074.668: R. de Bruin, *De Indische Nederlanders tijdens de Japanse bezetting en de tijd daarna tot 1958* (1958), 6.

べきである。しかし彼らが欧州人ということに固執するならば、船に乗せて欧州に送り出すべきだ、おそらくどこかの国が彼らを市民として認めるであろう」⁷⁰

日本降伏後

日本は1945年8月15日に降伏した。2日後、スカルノがインドネシア共和国の独立を宣言した。独立宣言後の当初数ヶ月は、いわゆる動乱期と呼ばれ、混沌と無政府状態を特徴としていた。きわめて暴力的で残虐な数ヶ月であった。いたるところで襲撃、誘拐、殺人が起こり、主に中国人や印欧人が過激派インドネシア民族主義者たちの標的となった。この時期、収容所外部にいた印欧人はもともと弱い立場にあったが、被抑留者は収容所の中で日本軍に保護されていた。何百人もの男子、婦女子が残忍な方法で殺害された。加えて、何千人ものオランダ人がインドネシア共和国によって、オランダと対決するための人質として（新たに）収容された。多くの印人は動乱期のショックで、インドネシアが独立すれば居場所がなくなることを認識した。1949年12月の植民地委譲後、東インドのオランダ人の大部分が生国をあとにした。

日記の作者

ハンペル⁷¹

ヘルタ・アンナ・ハンペルは、1915年1月27日バタビアで生まれた。1937年12月1日、ゴロンタロ（北セレベス）で1905年4月13日に生まれたファン・Hと結婚した。彼はオランダ郵便船会社（KPM）の船舶機械技師であった。第二次世界大戦勃発当時、夫妻はバタビアに住んでいた。ハンペル夫人が最後に夫を見たのは、1942年1月23日であった⁷²。1942年3月2日、夫がセイロン島コロンボに到着したという知らせを受け取った。その3日後の1942年3月5日、彼女は日記を書き始めた。無防備なバタビアに日本軍が入城した日であった。

「私は今日、あなたにまだ便りができるかどうかを聞きに連盟に行こうとしていたところですが。でもこれらすべてを見ていると、不可能だろうことが眼に見えています。だからあなたのための日記をつけ始めることにしましょう」

⁷⁰ NIOD IC 036.756: スアラ・アジア 1945年5月24日。

⁷¹ ウィッセ - ハンペル夫人の日記の写真複写は、アムステルダムにある国際婦人運動情報及び公文書センター(IIAV)、オランダ戦争資料研究所(NIOD)に納められている。日記に登場する人物の名前は、イニシヤル以外はすべて解読不能にされている。

⁷² ハンペルの日記、第2部、90。

彼女は大きな家計簿に日記をつけ、本棚にある他の本の後ろに隠した。これはそれほど安全な場所とは思えないが、日記は家宅捜査の際には1度も見つかっていない。彼女は、1945年1月3日から5月21日まで日記をつけていない。なぜならこの時期の大半を憲兵隊のところに監禁されていたからである。

日本軍が市内に進軍した時期—ヘルタ・アンナ・ハンペルは27歳であった—彼女はスندا通りにあるパビリオンに住んでいた。早くも1942年4月、彼女はマドゥラ通りにある両親の家に移転した。彼女は全占領期中そのガレージを住居としていた。ハンペル一家は家から追い出されることを絶えず心配しながら生活していた。1943年4月9日、ハンペル夫人は「実際には、収容所に抑留されるほうが少しばかり得になります。なぜならば、ここで家から追い出されると、どこへ行かされるか全くわからないからです」と記した。彼女の父親は、オランダ貿易会社 (NHM) の社員だったが、かなり早い時機に失業し、検挙を怖れてほとんど外出しようとしなかった。母親はGESC (地方自治体欧州人援助機関) で働いていた。ハンペル夫人は、1944年から45年まで書簡でゴロンタロ (北セレベス) にいる義父母と接触を保ち続けた。彼女は1944年の8月から12月まで (おそらく終戦まで) 毎月郵便為替を彼らに送ることに成功していた。

ハンペル夫人は印人女性だが、かなり西洋人的な外見であった。1943年3月28日、彼女は「彼らが私の白い肌と金髪のために逮捕するならば、私はアサル・ウスル [家系証明書] を提示することができます」と記した。1944年1月1日には、「彼らは白人と金髪の人を一斉検挙しています。アサル・ウスルを持っていたとしても。だから私はもう通りには出ないことにしています」と記した。しかし、お金を稼ぐためにはやはり通りに出ざるをえなかった。だが彼女の容姿はさほど目立たなかったようだ。なぜなら頻繁に外出していたにもかかわらず、特に日本人の検問の標的になっているとは日記からはうかがえないからだ。

ハンペル夫人は日本人占領者を、嫌な匂いのする奇妙でかなり子供っぽい人間だと見ていた。ハンペルの父親によれば、日本人看護婦はバーミ [チャーハン] の匂いがし (1942年5月27日)、彼の娘も日本人の嫌な匂いを嘆いていた。「私はガスマスクをつけて歩きます。ヤップの団の傍を通るのはもうほとんど苦痛です。…中略… 彼らはすごく臭いのです! …中略… 彼らを見る前からすでに匂ってくるのです」 (1942年8月24日)。日本人が個々に接近しようとすることは周到に回避していた。ハンペル一家の斜め向かいに住んでいた日本人医師が、彼らにバターとタバコを贈ろうとしたことがあったが、一家は受け取りを拒否した。「とんでもないことです。ヤップの友人はおことわり。くたばってしまえ」 (1943年2月12日)。ハンペル夫人は、日本の宣伝活動にはまったく興味を持っていなかったが、日本当局がインドネシア民族主義者の政治活動を制限することに関しては同調していた。

「フレー! …中略… パリンドラのメンバーが逮捕され、インドネシア人の団体が解散させられると言われています。ヤッペンほとんど私の好きなタイプの人たち」 (1942年5月18日)

占領当初の数ヶ月、ハンペル夫人はインドネシア人に対する2種類の反応を記録した。ある「原住民」は、日本人はものすごい乱暴者でオランダ人のもとにいた方がよかったと認識していた。特に親オランダ派のアンボン人の信条に関しては、多くのうわさが出まわっていた。モルック人の蘭印軍兵士が日本への忠誠を拒み、戦争捕虜としてとどまることを選んだ時、ハンペル夫人は、「アンボン人は王室に法外なほどの忠誠心を持っています」と言っている。彼女は、この信条的な態度を「かなり愚かです。職業軍人の釈放が増えれば、ヤップを追い出す手助けができるのに」とみている（1942年6月12日）。

ハンペル夫人によると、大部分のインドネシア人はオランダ人を敵対視する態度をとるとしている。彼らは「私たちが憎んでいる」（1942年3月7日）、「殴ってしまいたいほど」（1942年3月21日）、「かなりずうずうしくなっている」（1942年7月27日）と記している。彼女は、ウィルヘルミナ女王は、戦後蘭印政庁の中でインドネシア人にもっと発言権を与えるつもりだと見なしていた。「彼女は何をしようとしているのかわからないのです」というのが彼女の反応であった（1942年6月30日）。兵補（日本軍へのインドネシア人補助兵）に関しては、まったく敬意を払っていない。すなわち「最初の爆弾で彼らは怖がって木に登り、お祈りすることだろう」（1942年8月23日）。1942年12月には、スカルノが新しい「人民組織」の指導者になるだろうとの通達があった。スカルノの名前を今まで聞いたことがなかったハンペル夫人は、彼のことを「私たちが島流しにしたひどい原住民」と形容してした（1942年12月26日）。印欧人として彼女は、日本人とインドネシア人双方から抑圧を受けていると感じていた。オランダに住んでいたならと彼女は嘆いた。というのはそこではオランダ人だけがいて、人々は同等だと感じただろうから。しかし東インドは、

「人種同志で裏切りばかり、その中で私たちはプラナカン[印欧人]として暮らしている。東洋人は、西洋人の血が混じっている私たちが嫌う。そして西洋人は、私たちの中に東洋人の血が混じっているので憎んでいる。私は気にしない。私は西洋人でも東洋人でもいい人だと思ったら付き合います」（1945年4月18日）。

日記からは、ハンペル夫人が飢えと欠乏に喘いでいたとは思われない。1943年の秋まで彼女は、まだ夫の雇用主であるKPMから援助金（初期は月に30ギルダー）を受け取っていた。これは生活するには実際十分ではなかった。1942年7月にはすでに彼女の母親は、お金を得るために結婚指輪を売った。そして8月、ハンペル夫人はコーヒーの売買を始めた。最初はもうけを得るためではなかった。彼女は収益をすべて貧しい知人に譲ることで助けていた。彼女は直接コーヒーをコーヒー工場から引き取り、トコから仕入れた売人より安価に販売できた。瞬く間にハンペル夫人の取引は、卵、石けん、タオル、クッキー、ケーキ、ピーナツバター、すぐりのジュース、ハチミツ入りケーキ、ジャム、シロップ、ココアなどの食品にも及んだ。これらをすべて彼女は貧しい人々に利ざやをまったく求めることなく販売していた。1942年11月、彼女は様々な布で作った小間物やフェルト、木材なども売り出した。

貧しい人々（主に女性）が家でお菓子類や小間物を作っている間に、ハンペル夫人は終日自転車で売ったものを運んだり、新しい売人を探すために市街を走りまわっていた。1942年12月2日彼女はこう記した。

「私は歩合をもらって売ることになります。そう、私は自転車で朝の6時半から夜の6時まで貧しい人々のために半死の思いで走り回っているのです。歩合は求めませんでした、すると彼女たちの髪にパーマが当たっている（ぜいたくをしている）のを見出すのです」

これ以後、彼女は全ての供給者から収益の一部を求めた。日本占領末期はずっと、彼女は仲介業で収入を得ていた。必要になった場合のみ、彼女は自分の家具、宝石、衣類を売って収入を得た。人為的な価格釣り上げや不法取引で逮捕されるという危険が絶えず伴っていた。

日記の中でハンペル夫人は、直ぐにはくじけないとても強い女性としての印象を受ける。しかし日本占領時代には、生活が身に余る瞬間もあった。

「時にはあらゆることに嫌気がさすことがあります。そうすると私は一日中泣きたいと思います。でもね、強くいるべきなのです、そして成すべきことをしていく。だからまた先に進みます。でもすべてが終わってあなたが帰宅したら、私は喜んで一日中泣き叫ぶつもりです。そしてガラクタを小さくたたきこわすつもり。警告しておきますよ」（1943年7月29日）

1943年12月20日、彼女は「わたしは落ち込んでいます、そしてこの状態のままでもあります、なぜならどんな助けでもここから這い出すことができないからです。這い出してもまたすぐ落ち込んでしまうからです」と記した。ハンペル夫人にとってひどく身にこたえた出来事は、シェパード犬のカザンが1944年3月に連れて行かれたことだった。「彼らが息子や夫を連れ去ったとすると、戻るチャンスは50%ですが、犬の場合は違います」（1944年3月8日）

ハンペル夫人は2度刑務所に入れられた。1942年8月、彼女はラジオを引き渡す際に日本人から殴られた時、彼を殴り返したために警察の監房に3日間入れられた。彼女はこのことをかなり冷淡に記している。

「ああ、ベッドと本があったら楽しかったのに。午後だけはとても長く感じられる。午前中は結構慌ただしい、でも暗くなってくると静かすぎて気が狂いそう」（1942年8月7日）

2度目の拘留は1945年1月から2月に起こった。1945年1月8日、警官がハンペル一家への家宅捜査の際、封印のないラジオを見つけたのだ。父親と娘は逮捕された。恐ろしいケンペイタイへ連行

される時に乗った自動車に関して、ハンペル夫人は「まあ、なんという素晴らしい車なのでしょう。乗り心地がいい。なんて長い間私は自動車に乗ってなかったのでしょうか？」（1945年5月21日）と記した。

憲兵隊は、父娘が抵抗運動にかかわっていたと疑っていた。尋問の際、逮捕者はひどい虐待を受けた。日本人はハンペル夫人に電気ショックなどを施した。彼女は不法な活動には何も関係していないと言い続けた。第1回の尋問の後、拷問は中止された。日本人はハンペル夫人に同情を持っていたように思われた。

「ケンペイが私に何を見たかは分からない、でも彼らはみんな私に笑いかけた。6週間後にもっとも愛すべき尋問…中略… 私がまだプラウン[処女]かという。殴り屋ヤン[日本人看守]が私の「バダン・クワット[頑丈な身体]」のことを絶えず話していた（1945年5月21日）

2月28日、父娘は約7週間監房で過ごした後釈放された。その直後、ハンペル夫人は3名の監房仲間が虐待された後死亡したと聞いた。彼女は「彼らから好意を持たれる、そうすればたとえひどいことをしていたとしても釈放されます。彼らから嫌われると、何もしていなくとも窮地に陥ります」と結論を下した（1945年5月21日）。この拘留はハンペル夫人にかなりの無理を強いた。釈放された4日後、彼女は神経症のため2日間入院した。

1945年7月19日、父親ハンペルが再度逮捕された。誰かが日本人に彼が連合軍のラジオ放送を聴いていたと密告したのだ。母娘は、何も知らなかったと申し立て、その後はさまたげられなかった。父親は戦争が終わるまで拘留されたはずだ。

ハンペル夫人は、日本降伏の知らせにかなり懐疑的だった。次第に本当に戦争が終わったということが明らかになっていった。解放感にはまったくなかった。米軍は現れれず、市内では不穏な動きが日ごとに増していった。1945年8月21日、彼女はこう記した。

「今日の夜中、クミチョウ[組長]に起こされました。ぐっすりとは眠っていきません。街灯が打たれたら、何か危険があるということ。なぜなら彼らはブランダ[オランダ人]をみんな殺したいのです」

翌22日、彼女の父親が監房から釈放された。

1945年8月末頃には、次第に多くのオランダ人被抑留者が閉じ込められていた収容所から去っていった。ハンペル夫人は彼らの話しにショックを受けたが、次のような傍注をつけた。「収容所にいた大部分の人々は、私たちがここ収容所外部でも愉快ではなかったことが分かっていない。彼らはトコで砂糖、コーヒー、米などが手に入らないことを驚いている」（1945年8月31日）。9月初旬、ハンペル夫人は赤十字社の郵便部に働きに出た。彼女は元収容所内外の郵便

を管理した。収容所の外のオランダ人は元被抑留者のために食糧を購入した、しかしこれは必ずしも高く評価されたわけではなかった。

「彼らは今収容所で得る食糧はすべて、米国赤十字社からだと考えている、でもそれはバタビアの庶民からだ。収容所で彼らは『そうだ、収容所外部の者たちが全部買い占めるため、被抑留者には食糧がほとんどない!』と言う。当然、私たちに対する憎しみ。そして私たちは本当に収容所にいる人々のためにすべて買い占める」
(1945年9月4日)

ハンペル夫人は、インドネシア共和国の独立宣言に関してはほとんど記述していない。1945年9月11日にはじめて書きとめている。「日本の旗はもう見られない、でもパリンドラの赤と白の旗は見られる。彼らが早く来なければ人々が殺されていく。彼らはすでに始めています」日本軍は今、オランダ人を保護する側に立っている。

「哀れなニッポン。彼らは人々が収容所から逃亡しないよう、インドネシア人が彼らを殺さないよう保護しなければなりません。昨晚私たちは叫び声と街灯を打つ音で起こされました。とても恐ろしく直ぐに衣類を身につけました。後から私たちは彼らがメンテン・プロで皆殺しをしようとしたと聞きました。そこはたくさんのカンボンに囲まれています。ヤップはすぐに到着しました」 (1945年9月13日)

郵便物を配達していた時、彼女は市街のカンボンの傍に来た。そこではインドネシア人たちが略奪をしていた。1人が肉切り包丁で彼女の方にやってきた。

「幸い私は自転車に乗っていて回避することができ、帰宅しました。ショックで真っ青に震えながら、それで彼女はとてもびっくりしていました。このようなことが起こるならもうできません。…中略… 昨日の午後、チデンで日本人とインドネシア人の殺し合いがありました。実のところ、2つの党派がここで毎回衝突しています。親日派对反日派、親オランダ派对反オランダ派、親スカルノ派对反スカルノ派。殺人と殺害、そして彼らは、あらゆる壁に反と親の落書きをしています。ノールトワイクーライスワイクのカリ[運河]には死骸が浮かんでいます」 (1945年9月13日)

収容所にいる元被抑留者には連合軍によって様々な品物が供給されたが、収容所外部にとどまったオランダ人はなにももらえなかった。「幸い私たちには収容所に知人が大勢いたので、時々彼らの余りものがもらえました、なぜなら今は私たちが忘れられたグループだったからです」 (1945年9月19日)。彼女は、1945年9月23日になって始めて夫のことを耳にした。KPMの役員によると「ファン・アウトホールン」号に乗船していて元気だとのことだった。「もちろん雲の上

にいる気分…中略…あなたが生きているのを聞いてなんて喜んだことでしょう」（1945年9月25日）2日後、母親ハンペルがKPMにさらなる詳細を聞きに行ったところ、前回の知らせは間違いだったことが分かった。ハンペル夫人の夫は、1945年3月16日にKPMの船舶「シビゴ」号でオーストラリアの北東で嵐に遭遇していた。船は沈没、ファン・Hは行方不明者として名前があげられていた。「いずれにせよ私は『夫が生きている！』という喜ばしい感情を短い間持てた」とその日にハンペル夫人は書きとめている。「この報せはつらい。でもなぜ他の女性が夫を失い、私はそうでないのか。私は数千人の中のひとりで、多くは家族全員を失っているのです」（1945年9月24日）。日付けのある最後のメモは1945年10月7日であった。日付のない最後のメモには、

「事故の1年後、オーストラリアで警官が人民の中に混じり込んでいる「シビゴ」号のインドネシア人船員仲間を数人見つけました、彼らは行方不明とされていました」⁷³とある。

1948年7月、彼女はハーグ市で、1912年3月19日ボイテンゾルフ生まれのヨハン・ヒューベルトゥス・ウィッセと結婚する。ウィッセは戦前スバンのスムバラン農園企業のアシスタントとして働いていた。彼にとっても再婚であった。結婚後、彼らはおそらく蘭印／インドネシアに再び戻ったと思われる。いずれにしてもウィッセ - ハンペル夫人は、1959年1月を最後にオランダに永住した。彼女の2度目の夫は、1969年11月4日ワーゲンニンゲンで死去。1995年4月20日にウィッセ - ハンペル夫人も同地で死去した。夫妻に子供はなかった。

ポール⁷⁴

イルマ・マリー・ポールは、1927年3月22日スラバヤで生まれた。1942年12月バタビアのジョハル通り14番地に父親ピエール・ウィレム・ジョージ・ポール、母親レオポルディーネ・コンスタンセ・ポール - ファン・リンブルフ・スティルム及び兄エーリック・コンスタント・ポールと共に住んでいた。父親ポールはラジオ修理工を職業としていた。イルマ・ポールは、ラジオで蘭印総督が日本との参戦を発表した翌日の1941年12月9日から日記をつけ始めた。12月10日に学校の建物が政庁に徴発され、そのため生徒は1942年1月5日まで休暇が繰り上げられた。父親ポールは警防団（LBD）のラジオ放送係に配属され、イルマ・ポールも警防団のために様々な仕事をした。1942年3月日本軍のジャワ上陸直後 - イルマ・ポールは当時15歳 - 警防団がバンドンに移り、イルマの父親も同行した。4月半ばになってようやく彼は、バタビアに戻ることに成功した。6月25日父親ポールが逮捕され、アデック収容所に拘留された。ポール夫人は、中央公文書館に行きポール家の家系の中にアンボン人の祖先がおり、彼らは収容所に入る必要がないことを発見した。

⁷³ 事故の1年後、すなわち1946年3月に書かれたと思われる。

⁷⁴ イルマ・ポールの日記の複写はオランダ戦争資料研究所(NIOD)に保存されている。

1942年10月30日に父親ポールは、再度家に連れ戻された。彼は、日本人のためにラジオを修理する必要があり、合計6本のビールをその報酬として得た。これは2ヶ月間続き、その後1943年1月に彼は再度アデックに行かねばならなかった。

ポール夫人は、アデックに収容されていた人々のために小包の受け取りをするいわゆるアデック業務の責任者になった。これは、1944年1月アデックに収容されていた男子がバンドンに移送された時点で終了した。イルマ・ポールは戦前応急手当の講習を受けており、初めは募金徴収者として、後に看護婦として地区の看護・衛生管理機関である緑十字社で働きに行った。兄エーリックは知人のために自転車やラジオなどを修理したり、石けんや鮮肉を取引きすることによってお金を稼いでいた。ポール一家には家を失った様々な人々が移り住んだ。同居人の1人であるスリナム人のジョージネ・デ・フリースは子供たちに初等教育、イルマ・ポールには中等教育を密かに施した。ジョージネは祝い事などを計画することを得意としていた。それには政治情報局や隣人の許可を必要とし、隣人たちは公式な許可書に署名をしなければならなかった。

政治情報局員がエーリックに警察署に出頭するよう書面の呼び出しをもって家に現れたことが数度あった。呼び出し書面の頭文字が間違っていて記載されていたため、ポール夫人はだれのことなのか理解できない振りをした。エーリックが家で潜伏していた9ヶ月後、エーリックを警察署に出頭させるよう政治情報局員が正しい頭文字を持ってやって来た。彼は実際には収容されず、その時以来また自由に路上に出て行くことができた。彼は、1944年9月にいわゆるダーラー事務局へ登録のために出頭しなければならなかった多くの印欧少年のひとりだった。数名の少年たちが検挙されグロドックに監禁された。エーリックもまた1945年1月逮捕され、グロドックに移送された。

イルマ・ポールの日記は、新聞の切り抜き、糊付けした手紙、メモや通達などが添付されていた。また挿し絵、特に肖像画が多数描かれていた。彼女は「こびへつらう様な」日記を書くつもりではなく「冷静な事実」を維持するつもりであった（1944年2月8日）。1944年9月10日に彼女は、

「私はこのノートを日記にしたいわけではない。本当は、親愛なるノートさん、感情の暴露など書くためにこのノートを作ったわけではないのよ。後でそうするのも知れないけれど」

と書いた。

度重なる家宅捜査によって日記を所持していることが危険になった時、イルマ・ポールはノートを庭に埋めた。彼女はその後また新しく2番目の日記を書き始め、後にインドネシア人の女友達に保管するよう手渡した。彼女が絶えず恐れていたのは、日記が見つかることであって、すべてを破棄しようとした瞬間が何度もあった。日記は次第に切り抜き帳になっていった。彼女は収集した新聞などを張りつけ、何度かに1度は注釈を書いた。1945年3月から日本降伏まで、彼女は何も記していない。

ポール夫人は新聞のニュースを目で追っていたが、高度なマレー語を理解できない時があった。彼女が理解できなかった時には、近所に住むインドネシア人医師のスタマの助けを借りた。ジョージネ・デ・フリースもエーリックが修理したラジオを持っていた。それでジョージネとポール夫人、その他の同居人たちは密かにニュースを聴いていた。ジョージネが検挙され、日本人はその時彼女がラジオを引き渡さなかったことを知った。家宅捜査がなされラジオが見つかった。1945年4月になってポール夫人が逮捕された。そして6月、イルマ・ポールも尋問のために政治情報局に連行され拘留された。

刑務所で母娘は悲惨な状態だった。病人の多い176名の逮捕者に対して便所が1つ、風呂場も1つあったのみだった。8月13日、イルマ・ポールは、近日内に母親の訴訟に証人として立つことを通告され暫定的に釈放された。2日後に日本降伏、その直後ポール夫人も刑務所から釈放された。8月末にはエーリックがグロドックから釈放された。結局9月半ばに父親ポールも強制収容所から逃亡し、身体が悪化した状態で帰宅した。動乱期、ジョハル通りは非常に危険だった。ポール一家と隣3軒を除いて、通りの家すべてが略奪しつくされた。1946年1月、エーリックはノールダム号でオランダへ向けて出港し、残りの家族もその年の3月に飛行機で続いた。ポール一家はハーグ市に移り住んだ。イルマ・ポールはサンダース氏と結婚し、2人の子供をもうけた。

イルマ・サンダース - ポールは現在、ウストヘーストに住んでいる。

ヒューセン⁷⁵

ヨハンナ・ヤネッタ・ヒューセンは、1899年6月26日スホーンホーフェン（南オランダ州）で生まれた。1933年に蘭領東インドに出発。太平洋戦争勃発時ヒューセンは当時43歳スマランの高等市民学校（HBS）の教師をしていた。

1942年2月27日スマランの学校が閉鎖された。ヒューセンは、その翌日の28日から日記をつけ始めた。彼女は警防団の医療部で活動していた。警防団には多くの中等学校の生徒も参加していた。スマラン近郊で日本軍上陸という噂があった後、3月1日早朝に移動・破壊工作部隊が埠頭領域を破壊し始めた。それに対応し警防団責任者と警防団警報部の人々が、他の警防団員（ヒューセンも含め）に説明することなく逃亡した。またほぼ大半の行政関係者、大半の警官そして市警備隊員なども逃亡した。小人数の警官のみが港の指揮権を守るためにとどまっていた。続いて下町では略奪行為が起り始めた。ヒューセンと残った警防団員は、略奪された主にインドネシア人と中国人犠牲者を救援した。「私たちの担架を乗せた荷車が何度も負傷者や死亡者を連れ

⁷⁵ ヒューセンの日記の複写はオランダ戦争資料研究所（NIOD）に保存されている。最初と最後の部分（1943年12月19日までと1945年10月14日以降の部分）は自筆の筆記の複写、真ん中の部分（1943年12月20日から1945年10月13日まで）はタイプしなおしたものである。NIODの公文書には戦後ヒューセン夫人自身の手によって改訂されたもの及び整えられた部分（日記B）の情報を見出すことができる。元の日記はヒューセン夫人の手で破棄された。日記に登場する人物の幾人かは架空の名前あるいは匿名にされている。

出すために走り続けた」（1942年3月1日）。欧州人に対する暴力蜂起は起こらなかったと思われる。

スマランが混沌状態という報告が外部にも伝わり、翌日には逃亡していた公職者、警官、市警備隊員などが戻ってきた。秩序が強硬な手段で回復された。反乱扇動者とみなされた罪のないカンボン居住者も含め、数10名の死者が出た。ヒューセンは3月3日に、「略奪行為のど真ん中に入り込んだ。うちの警防団員がブルーバンドのバターの箱やいろいろなものを探しているところだった。その時市警備隊員が到着し、怒り狂ったように射撃し始めた。すばやく箱の後ろに隠れた」と記した。

3月7日の日本軍入城まで、街の情勢はオランダ当局の統制下にあった。

1942年のうちに、次第に多くの欧州人が強制収容されていった。純血オランダ人のヒューセンは、しかし収容所の外にとどまることを決意した。1943年1月25日、彼女は日記に「ヤップの将校によると、ミス・ヒューセンは収容所へ入らなければならないので、「グローテ・ハウス」に届出しなければならないのだ！これをしないうもりだ。彼らに来させよう。でもどのようにしたらいいのかわからない。なぜなら、私は放浪生活をおくり、もう定住場所を届出したくないから」と記した。

彼女は言ったことをすぐ実行し『潜伏』した。ヒューセンは独身女性として、占領の全期間を日本人の手から逃れることに成功した。彼女は、『潜伏』時代の初期、オランダ人と結婚していたドイツ女性マリオン・ウルフ - ケルケンベルフの家に同居していた。彼女の所持品の大部分は、プテロンガン13番地に住んでいた知り合いのリーン・スミスおばさんのところに移した。ヒューセンは、マリオン・ウルフと強い友情の絆を築いていった。マリオンはドイツ出身にもかかわらず、2人の息子ハンス、エーリックと共に1944年3月に強制収容された。ファン・ブラムセン一家⁷⁶での短い滞在の後、ヒューセンは、1944年5月からモルック人のQ夫人⁷⁷のところに移転した。ウルフ一家に比べてQ夫人とその子供たちとはそれほど気が合わなかったにせよ、彼女は終戦までそこにとどまっていた。

最初ヒューセンは、オランダ人や中国人の子供たちを密かに教えることで収入を得ていた。その後は必要にせまられ、自分で作った衣類など色々な小物を売った。彼女は、これらを10%の手数料を取って他の人に売った。彼女は部屋で編み物をたくさんした。外の通りに出ていけないのだから（しかし定期的には隣人を訪問しに出かけたが）。日本占領の全期間中、彼女はお金には困っていなかったようだ。さらに驚くべきことには常に十分の食糧があったことである。ヒューセンには毎日日記を詳細に書く時間もあつた。それはまた膨大な量になっていった。彼女はかなりたくさん—いつもよいことばかりでなく—収容所の外にいるオランダ人同志の人間関係について容赦なく書いた。彼女は、批判的な眼差しで周囲を眺めていた。

1945年8月15日、ヒューセンは日本との戦争が終結したことを知った。2日後にインドネシア共和国の独立宣言。その他それほど変化はなかった。ヒューセンは、念のためまだ家の中

⁷⁶ これは匿名である。

⁷⁷ これは彼女の本当の頭文字ではない。

にとどまっていた。8月21日、彼女は初めて輪タクでまた市街を巡った。8月24日、彼女はランペルサリ収容所にマリオンを探しに出かけた。柵越しに収容所の住人とインドネシア人の間で忙しく取引がなされていた。

「飢えがひどい。卵数個のためにズボン、ピサンにドレスが供される、そして卵はもう支払不可能な額になる。原住民はこの悲惨な状況を悪用している」

柵の入り口、そこは鉄条網だけが張り巡らされていたところで、彼女は1年半ぶりにマリオンを見た。「ようやく彼女を見て、2人で感動、喜びで言葉がでない。手をぎゅっと握り締めているだけ」ヒューセンは他の知人とも話した。被抑留者は今のところまだ収容所にとどまっていなければならなかった。

「みんながっかりして、あとどれくらい続くのか尋ねている。私たちは静かになるまで励まし、衣類を売ってしまわないよう忠告した。というのは外部ではすべてが驚くほど高く何も手に入らないからだ。彼らにはそんなこと想像できなかった」

翌日、彼女は収容所にいるマリオンと他の知人たちにかご数個に入れた食糧を持って行った。その後バンコン少年収容所にマリオンの子供たちハンスとエーリックのところに行き、彼らの母親が元気だということ、そして明日彼らにも食糧を持ってくるつもりだと話した。

1945年8月末、収容所はほとんど開放され、誰もが出入りすることができた。インドネシア人民族主義者はほとんど姿を潜めていた。ヒューセンのインドネシア人の隣人が赤白の旗を振っていたのみである。ヒューセンは定期的にオランダのラジオ報道を聴いていた。9月3日も同様、「放送の前後に流れるウィルヘルムスを私たちの隣人パラダ・ハラッハップ⁷⁸を悩ませるために大きな音で聞かせた」。同日ヒューセン、マリオンと2人の息子たちはホテル・チアンジの2部屋に移った。彼らは残った小物、主に衣類を売ることでお金を得た。10月12日ヒューセンは、「9月3日以降衣類を売ることによって合計371ギルダー50セント受け取った。マリオンは656ギルダー、そのうちまだ180ギルダーが余っている。その他は40日間で使い尽くした」と書いた。ヒューセンは10月初旬から有料で3人の中国人生徒たちに教えた。

9月の半ば、マリオンは夫のウルフ医師がまだ生存しシンガポールにいたという知らせを受け取った。ハンスとエーリックは健康を害しており、そのため2人とも短期間聖エリザベト病院に入院した。ヒューセンはオランダのラジオニュースで、日本の収容所長たちが特別裁判によって裁かれると聴いた、なぜなら「非人道的な虐待は日本政府の命令ではなかった!!!」（1945年9月25日）と言われたからだ。その他、政庁の役人Chr. O. ファン・デル・プラスがオランダ政

⁷⁸ パラダ・ハラッハップは日本占領下のスマランで発行された日刊新聞シナル・バルー（新しい輝き/一条の光）の社主兼編集長。シナル・バルーは日本の指導による大東亜共栄圏のプロパガンダを作った。（Brommer e.a., 56, Brugmans e.a.,200）

権回復後には『証明できた犯罪』以外は誰も政治的理由で追求されることがないと宣言したことを聞いた。これに対するヒューセンの意見は、「私たちはまた道徳的になる」（1945年9月26日）。

急進的な民族主義の青年たち（プムダ）は、スマランでも9月後半を通して次第に影響を及ぼしてきた。9月24日ヒューセンは、「バタビアとバンドンでムルデカ党（民族主義者）の暴動が起こっていた。そして今、憲兵隊が武装し反撃している」と書いた。その後の週では、夜中もスマランのある地区では不穏だったが、日中はまったく影響なかった。「暗くなると『ムルデカ』[解放]と自動車は『止まれ』という叫びがたくさん聞こえた。でも後はすべて静寂」（1945年9月27日）。特にバタビアで9月29日から最初の英国軍が上陸した後は、事件の数が増えていった。10月初め、スマランの収容所は最初の連合軍の到着を待機しながら再度閉鎖された。ヒューセンとマリオンにとって、生活は暫定的にはあるが維持されていた。彼女たちは再びインドネシア人の家事手伝いを雇った。

「洗濯バブは…中略… 出ていった、なぜなら1ヶ月15ギルダで手伝いたくない（でも今はこれ以上払えない）ので。スーがいろいろ掃除洗濯をし、ミンナが手伝っている間私たちがいっしょに部屋掃除する」（1945年10月3日）

10月14日、インドネシア民族主義の若者のグループが不意にホテル・チアンジに現れた。

「印人（テオ・K）を先頭に英印人に引きつれられた奇妙な衣装とかなり変わった武装をしたインドネシア人の一団が、むりやりホテルに入ってきて、玄関を行進し『家宅捜査』をする。私たちは意に反して微笑まずにいられなかった。これは寄せ集めの混乱状態、フランス革命を思い出す。私たちはそれで『バステューユの襲撃』についても話す。ホテル・チアンディはだから今ゲリラ部隊に占領されている」

マリオンの息子ハンスを含む、17名の男子・少年たちが民族主義者によってホテルから連れ去られた。この絵に描いたような出来事は10月14日の朝スマラン全体で発生した。およそ全部で2700名の収容所の外にいた欧州人、アンボン人、メナド人がインドネシア人警官やペムダによって逮捕された。

同日夜11時に、

「突然下町のカンボンで『シアブ、シアブ』（危険、警戒!）という叫び声。これは多くのカンボンを巡り繰り返された。とても不気味で恐ろしい音だ。溪谷の灯りも消える。私たちが戸締まりをし眠ろうとした時、銃声が聞こえる、また1発。…中略… 私たちの周囲は夜間を通してものすごい銃火と機関銃の音」

これはインドネシア人によって5日闘争と名付けられた「スマラン最初の闘い」（1945年10月14日から19日）の始まりを意味した。スマランの日本軍分遣隊はインドネシア人に武器を差し出すことを拒否、そのため日本兵と民間人が民族主義者によってブルー刑務所に監禁された。日本軍は10月15日の早朝に戦闘を終えた。彼らは共和主義の闘争グループを市内から追放するために2師団で行軍した。ホテル・チアンディは早くも「解放」された。ヒューセンは1945年10月15日に以下のように記した。

「私たちは何も恐れることはない、日本の将校がエンゲルケス夫人に言ったように、『セバブ・ニッポン・ジャガ』（なぜなら日本が監視するから）だ。…中略… 彼は私たち女性に外出しないよう、なぜならまだ『バンヤック・プラン』（たくさん戦闘がある）からと忠告した。…中略… 自動車で日本人がやってくる。ガン・シユマルツはニッポンの監視所だ。私たちに少し安堵をもたらしてくれる」

マリオンはハンスの運命に関しかなり不安になっていた。日本人は大きな火災が起こった下町に継続的に行軍した。高い位置にあるホテル・チアンディからヒューセンとマリオンは全市街を見渡せた。

「下では重く白い煙雲が舞い上がっている、ニュー・ホラントとカラン・ビダラのあたりのカンボンである。炎が燃え広がって、大規模の火事になる。私たちはその街角でかなりの機関銃の音を聞く。火の勢いは長引くほどひどくなり、炎は激しく燃え、煙雲は黒ずむ。暗くなっても、私たちはみな階段の上に坐ってこのひどい出来事に引きつけられながら見ている。私たちは罪なき数多くの人々が犠牲になっただろうと自覚する、どれほどの死者、どれほど家がなくなった人々がいるのか？火の勢いは西に向かう。風がいくらか火に勢いをつけ、炎が燃え上がる。南へも一だから私たちのいる方向だ—炎はますます広がる。私たちはまた暗い物が上に舞い上がるのを見、鈍い音を聞く。中国人のカンボンかと恐れる。9時半ごろになってようやく炎の勢いが弱まる、もう風もなくなった」（1945年10月17日）。

10月19日には全市街が再度日本軍の手中におち、同日最初の英軍がスマランに上陸した。

20日にはハンスがまた戻ってきた。インドネシア人たちは、彼と他のホテル客をジュルナタン刑務所に連行し、監房に閉じ込めたのだ。彼らは正当な扱いを受けた。10月16日には日本軍がごく近くに接近したため、インドネシア人たちが逃亡、残された収監者たちが釈放された。

「ニッポン人から彼らはタバコをもらい、あとから食事も供された、かなりの量でうまく配分されていた。マンゴの木に登っていた男が、拳銃で監房の中にいた彼らを撃とうとしていた。あとで彼はヤップに撃たれた」（1945年10月20日）。

危険な状況のため、オランダ人は10月20日の朝まで刑務所の中にとどまっていた。

この戦闘の後、スマランは日本軍と英軍のセクターに分割された。インドネシア人警官たちは暫定的に職務にとどまり、路上ではまたかなりすばやくプムダのグループが出現し始めた。

「英印軍が英国旗を掲げて通っていると、ムルデカの男たちが沿道で赤白の旗を胸に、物売りの女性たちにオランダ人に売ることや話しかけることを禁じている!! とんでもない状況!」（1945年10月21日）。

マリオンは脅威を感じ、できるだけ早く東インドから離れたいと思った。ヒューセンは至るところでなびいている赤白の旗に脅かされていた。しかし同時にインドネシア人民は敵対した態度だとはまったく感じなかった。その反対であった。彼女の重い自転車を丘の上に有料で押し上げた2人のインドネシア人少年たちと話した際、彼らの1人は「率直に、昔の方がよかったよ!」（1945年10月23日）と言ったのだ。

10月末からヒューセンは、ホテル・チアンディで10名の子供たちに1ヵ月1人当たり15ギルダーで教えた。その他にも中国人の少女たちを教え続けていた。加えて、ヒューセンとマリオンは11月初めに蘭印政庁から給付金を受け取った。ヒューセンは1ヵ月195ギルダー（1日6ギルダー50セント）、マリオンと子供たちは500ギルダーを受け取った。3週間後、12月半期分として各々135ギルダー（1日9ギルダー）、315ギルダーを受け取った。11月の初めスマランから最初の避難者―主に元被抑留者―がバタビアとオランダに出発した。スラバヤでは英軍とインドネシア軍との間に激しい戦闘が起り、スマランでも急速に緊張が高まった。11月17日夜遅くヒューセンは下町で5発の銃声を聞いた、その他はすべて平穏だった。後に、3名の英印軍将校が路上で1人のインドネシア民族主義者に銃殺されたことが分かった。

翌朝には下町全体に銃撃戦があった。これは「スマラン第2の闘い」の始まりだった（1945年11月18日から21日）。英印軍と日本軍の兵士たちが市内の全戦略拠点を早急に占拠しようとしたが、激しい抵抗によって阻止された。今回はヒューセンにとってこの状況はそれほど脅威的ではなく、「私たちは連合軍と日本軍が権力を手に入れ、過激派たちより優っていると感じている」（1945年11月18日）。この戦闘はほとんど下町だけにとどまった。日本軍に警備されていたホテル・チアンディの周囲はすべて平穏であった。「子供たちが静かに泳いでいるここ山の手のチアンディと下町のテロ行為とは著しいコントラストだ」（1945年11月19日）。英軍はインドネシアの抵抗運動グループの拠点を破壊するために爆弾や高砲弾さえ投入した。英国と日本の掃討作戦によって、市内のカンボン数箇所は新たに火の海に化した。21日には民族主義者の抵抗は、次第にたち消えていった。

スマランは不穏なままで、続く日々もまだ銃声が鳴り響いていた。11月23日、英軍指揮官は中央ジャワで解放された元被抑留者全員をスマラン経由で避難させ、その後市街を退去す

ることと決定した。11月24日、ヒューセンは「私たちは冷静に待っている、私たちはここにどまりたい！」と書いた。12月1日、彼女は自転車で市街を巡り以下のことを見た。

「どこも物音ひとつしない。路上で死にかけている人はみえない。家は閉ざされ、事務所はすべて閉鎖、店のウィンドーにはバリケードが張られている。…中略…至るところに赤白の旗が吊り下がっている、でもすでに色褪せはじめ誰も見ようとしていない。BPMの事務所には銃弾の痕跡がたくさんあり、ANIEM⁷⁹（蘭印電力株式会社）の建物には壊された窓と銃弾の痕跡。すべてが放置され荒廃している。トコはどこも開いていない、交通の往来はまったくなし。英印軍の軍用トラックが数台ボジョンを走り抜けただけ。…中略… トコ・タンは全焼。まだ焼け焦げた匂いがただよっている。ホテル・パピロンにもいくつかの銃弾痕。向かい側はトコ『サクセス』と隣り合うトコがナム・ビーまですべて焼け尽くされている。ここは一大廃墟である」（1945年12月4日）。

新チアンジ通りの端にある街のカンポンの1つは、「溪谷の中、黒い焼死体と茶色い焦げあと。数軒の家が建っているだけ」だった。12月4日に彼女の日記は終わっている。

ヒューセンは1945年末までにタイへ避難した。日本占領期に彼女が収集した戦争の新聞記事、文書類、通達、その他は彼女の書籍、写真とともに、1946年1月インドネシアの「過激派」によって破棄されたか、あるいは持ち去られた。幸い彼女の日記は残存していた。おそらく彼女がタイに携えていったのか、あるいは誰かに保存するよう手渡したのであろう。彼女はオランダに帰国し短期間ハーグに滞在したが、1947年7月4日、再度東インドに渡りスラバヤの高等市民学校（HBS）で教鞭を取った。1950年10月、再度ハーグに戻り、そこで1986年9月22日に死去した。

⁷⁹ 蘭印電力株式会社（N.V. Algemeene Nederlandsch Indische Electriciteits Maatschappij）。

日本軍の入城

バタビア

ハンベル

1942年3月6日

パパと私とふたりでA. H.の家へ自転車で行きました。いたるところでヤッペンが行進して入るのを目にしました。彼らは私たちの市警備隊の車、トラックなどいろいろな乗り物に乗っていません。何人かはそれらを操縦できずに、道路の真中で転覆させたりしています。私たちは警備員を素通りしました。メースター・コロネリスの電話局はヤッペンで一杯で、原住民が近くに寄ると追い払っていました。クラマツト郵便局の隣りは自動車屋なのでしょうか？ 原住民は、はやくもヤッペンのそれら自動車をひったりさせてもらっていました。メースター・コロネリスでは、 balan[荷物]を持った原住民が家々から出るのを見ます。そして、彼らはヤッペンに挨拶し、自分は原住民であると言います。あら、ヤッペンは監視地区には来てはいけないのだと思っていたのに、彼らはいたるところにいます。スندا通りにもすでにいます。彼らは自転車や自動車で走り、ヤッペンの旗を持った原住民を連れていきます。ヤッペンは幸いにも警察と市警備隊を認めています。私たちは今日パサール・セネンを通りました。全てが固く閉ざされていて、中国人が重なり合って窓から外を見ていました。…中略…

私たちはひとりの警官と話をしましたが、彼はヤッペンは行儀よく振る舞うと語りました。私が恐怖を感じているのは原住民に対してです。彼らは横柄な口の利きかたをします。全てが高価です。でも、日本人がジャワ全土を所有することになったら、全体が普通のことのようになるでしょう。…中略… ちょっと前に、ひとりのヤップがママの反対側の家に入りましたが、すぐにもはい出て来ました。私たちには外界との接触がありません。私たちは現にヤッペンの手中にあるBRVだけ聴きます。NIROMを聴くことを許されていませんから。⁸⁰ これは敵地に所在しています。⁸¹ …中略… 私たちの家の背後がまだ燃えていることご存知？ ヤッペンが私たちを手中に入れたと聞いた時、私はとてもぎょっとしました。今ちょうど彼らがバンタムを撤退中だと聞きました。現在そのため冷静に待つのみです。…中略… あなたがここに戻るまで、一体何冊の日記帳を書き尽くすことになるのでしょうか？ また、その終末はどういうことになるのでしょうか？ 現時点では全てオーケーです。

⁸⁰ Bataviasche Radio Vereniging バタビアラジオ放送協会(BVR)及び Nederlandsch-Indische Radio Omroep Maatschappij N.V. オランダ領東インドラジオ放送会社(NIROM)。

⁸¹ NIROMは社屋をバンドンへ移転した。この町は依然日本軍に占領されていなかった。

バタビア

ポール

1942年5月10日

この大切な日記帳に最後に書いたのは大分前になる。…中略… ヤップが1時間以内にこの町に進軍して来ると、リリィが突然事務所から電話してきた時には家族全員が混乱におちいった。恐怖の波が私たちに押し寄せて、男のいない家、⁸² 何をすべきか！ 全部がすっかり燃やされた。LBD証明書、LBDの帽子、CONVIMの書類、⁸³ LBDや赤十字と記されている封筒が。全部すっかり。兄エーリックのLBDのシャツの肩章さえも燃やされた。その時は、防空壕にある長椅子の下に穴がひとつ掘られ、全部のお金や貴重品が金庫に入れられ、またはどこかに隠してからその穴が埋められた。1時間以内、1時間以内に。私たちはとり乱した様相で女王様やチャーチルの写真を探しながら走り回った。私の自転車に付けていたオレンジ色の小旗を花瓶の中に入れて、引き出しの奥に隠した。私にはそれを燃やす勇気がなかったのだ。

突然、誰かが走り入った。「参戦布告」バタビア市は降伏し、市民には平静を保つよう求められた。明日、入城がなされるらしい。⁸⁴ ひとまず安心。今日でなく、明日、「明日」になってだから。そして、その翌日の朝になった時、彼らはやってきた。葉っぱと花（我らが忠実な褐色の同志からの贈り物）を飾った自動車や荷車に乗った卑劣な切れ目どもが、私たちに向かってにやにや笑って手を振りながら。私たちはこわばった顔つきで冷静に見入っていた。大柄で太ったからだの黒く日焼けした男ども、通称「特攻隊」、その大部分が朝鮮人を乗せたたくさん車の車が続々と。

次の日、どの原住民も白地に赤の小旗を自転車に付けたり手にしていた。もちろんできるだけ大きいのをだ。嫌いだ。そう、私はヤップたち全員よりも彼らのことがもっと嫌いだ。彼らの小旗を振る偽善的な顔つき！市内では原住民が何もかもどっさり略奪した。ヤップは機関銃を発射して、大勢を一掃した。私はどんな時も（我々の市警備隊により酔ったヤップや強奪する原住民を封鎖して保護されている）安全地帯を出てはだめなのだ。

⁸² イルマ・ポールの父親はバンドンに行っていた。

⁸³ LBD（警防団）は、住民への空襲の警告、被害者の救済を主要な任務としていた。COVIM (Commissie voor de Organisatie van Vrouwenarbeid in Mobilisatietijd 動員時女子労働組合委員会)は、応急手当に関する講座の実施、衣類・食品の非常品の調達、野戦部隊と救援隊対象の移動調理を行っていた。(B. Brommer 他. *Semarang. Beeld van een stad* (Purmerend 1995) 35-37)

⁸⁴ 市民を保護するためバタビアは「解放」都市宣言された。蘭印軍は、そのためバタビア市内では戦闘を行わなかった。

スマラン

ヒューセン

1942年3月7日

やすらかな眠りのあと、鳥のざわめきで6時に目覚めた。さわやかな朝。7時にひとりの男の人が入って来て、ヤップが来たが立派に振舞っているとの知らせをもたらした。LBDのバッジとポスターを全部私たちは取り除いた。つまり、私たちは単に「医療班」と呼ばれるのである！

ブルックハイセンはまだ戻っていない。8時にファン・デル・ホルスト医師は、将校を伴うおよそ30人の日本人がクナリーランに到着し、シーレフェルト隊長⁸⁵へは生活のすべてが平常通りになされねばならないことが伝えられたとかなり形式ばった電話を受けた。彼らに対し間違った態度を示さない限り、スマラン住民は邪魔されないようだ。私たち全員は幾らか感動している。つまり、すべての男子が集合させられ、ファン・デル・ホルストとアディーのスピーチを受けるのだ。そのあと、私たちは冷静に仕事に就く。午前中に1台の自動車がウンガランへひどく噛まれた子供を引き取りに行く。1台のプリオク車（自動車にトレーラの救急車付き）が、本部のグヌクやサジュンから歩いてまたは本部のグロバック[牛車]で運ばれる負傷者を取りにスムルムブル（ドゥマク方面の道路）付近の爆破された橋へ向かう。この後者のことは、CBZ（中央市民医療施設）の医師と看護婦により行われる。私も同乗し、橋の写真を撮る。ガソリンを求めてたくさんの人々が来るが、これからは警察だけに提供する。モーイ薬剤師はチャンディに薬局を開業する準備に忙しくしており、私たちの車を借りる。自動車整備士がルート・ビルケンハウエルのビュイックを修理したあと、私は彼を上まで送る。⁸⁶ ステーン夫人は彼女の車を見に来て、その車が返されることを喜んでいる。午後には、プリオク車が再びジルナタンへ向かう。⁸⁷ 家でお風呂につかって戻る途中に、タナー・プティの下方で大群衆とそのそばに何人かのヤップを目にした。彼らの1台のトラックが転覆したのだ。負傷者がでた。私たちのプリオク車が出発し、彼らをCBZへ運んだ。ヤップは喜びに満ちて感謝していた。ボジョンはかなりにぎわっている。レシデント代理に関する発表が住民に行われる。その後ラジオで私たちは日本占領軍の命令を聴く。私たちは再び明かりを全部つけて暮らし、走行することを許される。だから事務所の窓も全部開ける。

11時頃にデッカー警察署長からヤップをひとりCBZへ連れて行くために車が必要だとの電話を受けた。ブロムベルフ薬剤師は、モーイとともに出発し、初めはさっぱりわからなかったが、あとになって、そのヤップは負傷した彼の友人をCBZに見舞いたいことがわかったのだと

⁸⁵ A. M. シーレフェルト中佐は、市警備隊の隊長であった。スタッフの本部はボジョン通りの住宅にあった。(Brommer 他.,35)

⁸⁶ スマランの住人は町の山の手にある（新）チャンディという名の小高い地域を「上」、スマランの下町を「下」と呼んだ。（また、「上」は山中にある（休暇用）地域を意味することもある）。

⁸⁷ ジルナタンにはスマラン-ジョアナ蒸気路面電車の駅の他にヴェルテンブルグ兵舎があり、その左側の大きな構内にはジルナタン刑務所が所在した。(Brommer 他.,117)

戻った時に語った。明け方、プリオク車が手首を切った女性を運ぶために手配された。それ以外は、静かな夜を過ごした。

ヒューセン

1942年3月8日

戦闘に関する報道はさらに減り落胆させる。待つのみ。バンドンが降伏したとの噂が出たが、私たちはまだそれを信じられないでいる。

ヒューセン

1942年3月18日

クララが食事に訪れるが、このことをしばらく続けられるだろう。彼女は、ヤップが軍隊とともにスマランに進軍するから、私たちは今日の午後は表に出てはだめだとファン・ネール（警察第2管区！）⁸⁸ から短い電話を受けた。私たちはそのためまずは一息つき、お茶を一服する。タナー・プティー沿いにたくさんの車が走るのを耳にする。

ヒューセン

1942年3月20日

町は日本人でいっぱいだ。私たちの市民公園、⁸⁹ ホテル・チャンディとホテル・ドゥ・パピロンを除いて、ホテル・ベレヴェュー、そしてドクター・デ・フォーゲル通りとワトゥグデー通りの何軒かの大きな家、HBS（高等市民学校）、ジャチンガレー野営地⁹⁰ 全体とほかのさまざまな建物が接収された。ニッポンの男たちがバイク、トラック、うまく盗んだ車に乗って走っているのを見るのは未だに奇妙な様子だ。

⁸⁸ スマラン市は4つの警察区に分割されていた。すなわち、第1管区がブバアン、第2管区がジョンプラン、第3管区がデボック、第4管区が新チャンディ。（スマラン・テレホンガイド 1941）。これらの区分は日本軍占領下にも維持された。

⁸⁹ この市民公園は、構内に大庭園の他、映画館、大理石のローラースケート場、ボーリング場などがあつた。（M. de Gruiter, *Semarang in fototour* (Den Haag 1995), 50)

⁹⁰ 日本軍占領下にこのHBSは、軍人の事務所、スマランの守備隊の宿舎として使用された。町の上手の地区ジャチンガレーには、蘭印軍の野営地があつた。1942年4月末から8月初めまで、この野営地は民間人強制収容所として使用された。（Brommer 他., 44 及び J. van Dulm e.a., *Geïllustreerd atlas van de Japanse Kampen in Nederlands-Indië 1942-1945* (Purmerend 2000) 134, 142)

居住

バタビア

ハンペル

1942年3月21日

これは、最終プランです。¹² K一家がオールド・タムの母屋へ私の家具とともに移り住みます。母屋の人たちはパビリオンへ移ります。全員家賃なし。A. H. と私はそしたらマドゥラ通りのママのところに行かれますが、犬のトリックスと猫のチェリロは手離さねばなりません。私たちは皆お金にゆとりがありません。給料をもう私たちはもらえません。ママは食用の葉っぱ¹³を十分持っているし、清水の井戸もあります。私たちは本当に大勢でいるので、お手伝いさんをもっと減らして置くことになります。

ハンペル

1942年4月5日

今日、引越します。D. 夫人は早くも旧タマリンデラーンのパビリオンへ行きます。マドゥラ通りのガレージは掃除され、あとで私がそこに入ります。実はあまり乗り気ではありません。むしろここに残りたいです。でも、お金をもらえないのだから…

ハンペル

1942年4月18日

私は、4月22日水曜日に引越する予定です。G. がこれに携わります。彼は、誰かの引越にあたっている最中だったと語りました。家財がヤッペンのいる空家を通りかかりました。「まずは、バラン[荷物]をそこに入れろ」と日本人が言いました。もう、嫌だ！ それで私は一日中私の持っているグラスや銀器を向うへ持って行くことに忙しくしています。そして、あなたのカメラもです。なぜなら、これを彼らに手渡したくないから。彼は片道5ギルダー請求しています。でも、私だからこそ彼はもっと安価にやってくれます。でも、私は同じく割り引いてもらったAではありません。G. も生活がかかっているのです。

¹² ハンペル夫人は、当時スダ通りのパビリオンに住んでいた。

¹³ パパイヤやシンコン（キャッサバ）などの新芽を野菜として食べていた。

ハンペル

1942年4月23日

あのね、私、引越しました。彼らは7時に開始し、最終の車は9時に出ました。食堂の家具は、D.夫人とともにオールド・タムへ行き、残りはマドゥラ通りへ。寝室の衣装ダンスが一番最後に出ました。積み込みの際、これが逆さまになり、ひとりの原住民の指に当たりました。当然、その指にけがをしました。彼らはダンスをそのままにしておきました。4回で全てが終了しました。そして、今私はここにいます。…中略… まあ、衣装ダンスはどこも壊れなかったけれど。かわいそうなクヌードル。ここに来たら全然スペースがないし、作りつけの洗面台もないのです。そこここに写真を貼りました。私のベッドと戸棚を5つ、加えてラジオを持ち込みました。木箱が母屋のあちこちにあります。…中略… 犬と猫と一緒にだけの安らかな生活は終わりました。

ハンペル

1942年4月24日

壁の格子窓から何と風が吹きまくることでしょう。完全に窒息してしまうのでそこをふさぐことはできません。ベッドを置いてあるガレージの後部は、日中格子窓からとても明るい日がさします。でも、ものすごく暑いです。午後ずっと日光が壁に直射します。

ハンペル

1942年5月15日

近郊の家々を明け渡さなければなりません。何に役立つのでしょうか？ プルワカルタ通りは政府関係地区であり、そこで、賃貸人は家賃を全額支払わなければならない、さもなければ、そこから立ち退かねばならないのです。通りの半分が空っぽで、現在、原住民の入居が行われています。彼らはいかにこれをまかなっていくのでしょうか？

ハンペル

1942年6月6日

ヤップがどのようにして自分の家を手に入れるのかわかりますか？ 彼らは1軒の家に立寄ります。住人はいくらかの衣服とともに立ち退くために数時間与えられます。そして、ヤッペンが戻ります。彼らの気に入らない家具は、路上に投げ捨てられます。彼らはほかの家を見に行き、そ

この家具を奪います。路上に置かれた家具は、クーリーが回収を許されていて、これが助力に対する支払いとなります。Nautica¹⁴も彼らは空っぽにします。でも、結局どんなことにもちっとも気にしなくなります。

ハンペル

1942年6月20日

B. の家に何人住んでいるかご存知？ ママB. と子供3人、女性ひとりと息子ひとり、女性ひとりと息子ふたり、そして子なしの女性ひとり。その家は何と満杯のことか。私たちは今、皆このようにして1軒の家に大勢の家族とともに暮らしているのです。

ハンペル

1942年7月5日

彼らは私たちを追い出すのでしょうか？ もう何度かお偉いヤッペンがここを訪れ、私たちの名前を書き留めました。以前、O. は彼女の名札を私たちのところにつけ加えるのを望みませんでした。私は彼女にそうしなければならないと言いました。なぜならば、彼らがここにこんなに大勢の家族が住んでいるとわかったなら、多分私たちをそっとしておいてくれるでしょうからです。R. は同じく彼女の名前を本当はそこに書き込む必要があります。今日、その名札をつけてもいいとのことでした。もちろん、D. はそうしません。パパと私はしました。今、名札はしっかりとクギ付けされています。でも、パパはまずいことに私の親指までも打ち付けたのです。

ハンペル

1942年7月7日

K. は自宅から追い出されました。自分のベッドと衣類だけを持って行くことが許されました。すてきな家に住んでいることの短所となります。T. R. は税務官に、今、家屋を所有することは二重の負担になると言いました。その人が何て言ったと思います？「じゃあ、私たちにその家屋を下さいな」

¹⁴ バタビアのザイダーボールド通りにあるHet Nautisch Instituut der Koninklijke Paketvaart Maatschappij(オランダ王立郵船会社海事研究所)。

ハンペル

1942年7月20日

今日もう私たちはマドゥラ通りでなく、ジャラン・マドゥラに住んでいます。パパは知人を訪ねたがりました。彼はそこでその人が他のところへ引越したと知らされました。彼はそこへ向かいました。そこからも、その人は引越したのです。4回目になって始めてパパは正しい住所を得ましたが、ここ二日以来、その知人は家にいないと知らされました。まるでどき回りのサーカスみたい。幾日かして家族は、誰がどこへ行くかの通知を受けるのです。それで、パパは家に帰った。彼はそのつもりだったのですが。彼は路上をうまく通り抜けることができませんでした。彼らは移動用防御柵で彼を封鎖したのです。誰一人として出入りすることは許されません。午後までこれは続きました。私たちは彼が路上で捕らえられてしまったとも思いました。

ハンペル

1942年7月26日

かわいそうなN. L.。ヤッペンが彼女の家を調べに来て、また戻って来るようです。彼女はその時、家具を持ってデブのN. のところへすぐにも引越しました。彼女がそこに住んで5日してもう追い出されてしまいました。今彼女たちもテロック・ベトン通りにいます。この家はドアや窓に鍵が付いてません。彼女たちは、自費でそれを整えなければなりませんでした。

ハンペル

1942年7月29日

かわいそうなデブのN.。ヤッペンが彼女を詰め込んだテロック・ベトン通りの家は、製氷工場のです。そして、製氷工場のヤッペンが来て、彼女がそこに無償で入居することを許可されている旨の証明書を持っているか彼女に尋ねました。彼女は持っていませんでした。それで、またそこから出されてしまうことを心配しています。私はそこを訪れましたが、とてもすばらしい家です。彼女たちは、証明書をもらうために彼女たちにこの家を指定したヤップのところに行きました。その人からは、それなら家族の中にこっそり入れと聞かされた。しかし、いろいろ話し合った結果、彼女たちはそこに留まることを許されました。どのくらい？ …中略… ある隣人は20分以内に家を出なければならず、彼女の下着だけを持って行くことが許されたのです。それでも、いつもニッポンは、人々を家から追い出したり、残忍なことは行わないと大声で言っています。

ハンペル

1942年8月1日

またまた、一ヵ月が過ぎました。いつになったら私たちはまた自由になるのでしょうか？ まったくみじめな暮らしです。毎日家を追い出される可能性があります。例えば、昨日は車が1台私たちの家の前に止まりました。4人のヤッペンが車から降り、一枚の紙を見てから家々に向かいます。私たちは皆思いました。ああ、始まるぞ！ しかし、彼らは先に進んで向かい側の家々に立ち入りました。

ハンペル

1942年8月16日

L. は、ヤップに追い出されるまで彼女の家に当座のところ留まります。スラバラ通り一帯がそんな人々で構成されています。すでに彼女の隣りにもヤップたちが訪れ、椅子の座りごごちを試していました。しかし、ニッポンのもので働いている者が住んでいる家には、彼らは手を出さないことになっており、その婦人の家にはちょうどニッポンのもので働いている淑女が住み込むようになりました。ヤッペンはそれゆえ手を出さずに先に進みます。パビリオンが付いていたので、彼らはその家にひどく興味を持っていました。一番上等なのを彼らは選び出すのです。そこに子守りの女の子を隠し置くのです。¹⁵

ハンペル

1942年8月19日

昨日、私たちは、家を立ち退く際、何も持って行ってはならないと記した紙切れをもらいました。もっとひどくなる前に米国が即時に訪れますよう。

ハンペル

1942年8月21日

私たちは全員、追い出される可能性があるという通知が原因でびくびくしています。その時が来たらば、少女たちはその家に残らなければなりません。彼女たちはもうニッポンのところで働

¹⁵ 「そこに女友達を隠し置く」ことを意味する。

きたがりません。私たちがその通知を受け取る前、私は、口ひげをはやしたデブのニッポン人がひとり私たちの家を調べに来て、中にガラクタだらけだったので彼は家の中へ入りたがらなかった夢を見ました。J. O. と私は、自分たちの家具、木箱、トランクを持ち込んだので、それらが到るところに積まれています。

ハンペル

1942年8月27日

現在、銅製品を磨いたり、自分の家具をきれいにすることは禁止されています。全ての物ができるだけ醜く見えなければなりません。ニッポンがある知人のところを訪れました。その家を彼らは気に入ったけれども、浴室とトイレが彼らにとって不潔すぎたのです。そのため、彼らはその家を受け入れませんでした。

ハンペル

1942年9月14日

そう、何から書こうかしら？ 全てが爆発寸前です。ファン・ホイツ大通り、ジェルクラーンやその他若干の通りの人々は、簡単に外に放り出されてしまいました。彼らはわずかの衣類を入れた小さいトランクをひとつだけ所持することを許されました。トランクを持って泣いている人々ばかり目にします。G. はニッポンのもので働いているため、引越を許されました。彼はグリセー通りとマドゥラ通りもそれが始まるのかと尋ねました。また、オールド・タムまでも同じように。ある婦人が言いました。「あなたたちは私が持っているわずかな物、私までも除くのですか？」。彼女は返事を受けた。「私は妻からもうとっくに離れているし、ふたりの息子をこの戦争でオーストラリアとスラバヤで失ったが、あなたたちは幾ばくかの荷物が取り去られることでわめき散らしている」。私は何を持っていこうかとしばし思案に暮れています。…中略…

ヤッペンはグリセー通りを食い荒らしています。まさに軒並みに。いつ私たちの番になるのかしら？ そして、現在その真っ最中にあるあのかわいそうなH氏。彼はもう何箇月も病床にありますが、その家はとてもきれいに整頓されています。私たちのところはいろいろな家具でガラクタの山となっています。私たちが衣類を持って行くことを許された場合に備え、私はトランクをすぐそばに置いています。しかし、ママは彼女のトランクを用意する気が全然ありません。私は写真アルバムを持って行くことが許されればと願っています。でも、まだ何も荷造りすることができません。なぜならば、このことを期待しているのを気付かせてはならないからです。いつ解放が訪れるのでしょうか？…中略…

私はヤッペンが去ったのを見た時に、ファン・H.のところに寄りました。夫人は、彼らが中に入る必要があります、ご主人は長いこと病床にあると言いました。しかし、彼らは敢えて何かする勇気がありませんでした。ヤップがひとりだけ中に入り、全部調べました。夫人は何か署名しなければなりませんでしたが、何であるかと質問しても反応がありませんでした。また、彼女たちがいつ出なければならぬのかを彼らは言いたがりませんでした。私はV. F.のところへも寄りました。彼女たちは住み続けることを許可した紙切れを受け取りました。なぜならば、彼女の娘は病身だからです。彼女は立ち退く必要がないようにと、それはそれは嘆願しなければなりませんでした。隣りの人々のところでは実施中です。そこで、彼らは自分たちの身回り品を守るために壁越しにバランをV. F.に渡し、そっと引越します。あとでニッポンはそれを目にします。彼女たちはその家から移転したいのですが、ヤップがその引越の車を止めたらどうなることやら？ そうしたら、彼女たちは引越の許可証を持っていません。このことはまったくいらいらさせることです。自分で経験しなければわからないことです。

ハンペル

1942年9月16日

彼らは昨日グリセー通り沿いの家々から16世帯を立ち退きにしました。午後6時になっても彼らはそれにまだ携わっていて、おまけに雨も降っていました。その様子では、グリセー通り一帯が「ヤップ化された」ようです。私たちはいつ？ パサール・バルーへ行きましたが、そこでは自分たちの見回り品を守るためにトランクを持ち歩く人々ばかり目にします。私には良いアイデアのように思われるのですが。自分の家に住んでいたのであったら、私もそうしたでしょう。しかし、ママは当然ナンセンスと思っています。彼女は戸棚からトランクをまだ出していません。前もってトランクをきれいにし、空気にさらしておくこともできるでしょうにね？ 現在私たちの家はいろいろな家具があつてかなり醜いですが、どうなるかまるっきりわかりません。

ハンペル

1942年9月17日

現在、彼らは立ち退くために24時間与えると言っています。しかし、もし彼らが午後か夕刻に何時までに立ち退けと告げた場合には、この24時間も何の役に立ちません。なぜならば、暗い夜には何にも作業できないからです。今回は自分の家具を半分持って行くことが許されています。私たちはマドゥラ通りのまさに一番すばらしい地点にいます。家があまりすばらしくなく、家具も同じような状態であるので彼らにとって何と運の悪いこと。

ハンペル

1942年9月18日

また新しい規制が。私たちは命令である以外は、引越してはなりません。このことは外国人に対して有効です。言い換えると、これはニッポンに対してでしょう。だが、ブランダ [オランダ人] に対してですよ！

ハンペル

1942年10月23日

彼らは最後の欧州人をグリセー通りから追い出すことに再び忙しくしています。ある事情を知っている人によると、グリセー通りとマドゥラ通り一帯がヤップ用ということです。ファン・ブレーン通りではもうブランダ [オランダ人] を全然見ることがありません。私たちの向かい側ではまたもう1軒が占拠されました。

ハンペル

1942年11月4日

ああ、同じくこれもまた禁止。収容所にはトック [純血欧州人] がいますが、彼らは自分たちの住居や家具をプラナカン [欧印人] に貸しています。ニッポンは、それに気づきました。その人々は追い出され、家具が没収されてしまいました。リュックをしょってうろつくのが君たちの宿命だ」と、彼らは冷たく言うのです。

ハンペル

1942年11月5日

そう、私たちは困惑しています。私たちの家の上にはボールがあります。それは私たちはもう何も家から持ち出してはならないことを意味します。…中略… 私たちは自宅を軍隊にくすねられるだけとなりました。いつこれが決行されるのかしら？

ハンペル

1942年11月12日

O. はヤップの訪問を受けました。そのヤップは彼女の家に住みたがりました。いつ彼女が出なければならぬか、今後知らされるようです。彼女は家具を持って行くことを許され、残りは彼が買い上げます。それでも「ありがとう」と言わねばならないのです。そうしなければ、彼女は路上に放り出されてしまうからです。彼女は他の家を探すことさえ許されました。すばらしいわ。私たち自身が追い出されない限りは、あとでヤップの隣りに住むことになる。私たちも善良なヤップに巡り会えることを祈りましょう。

ハンペル

1942年11月23日

また、ヤップに関して新しいことが。全ての家が彼らのものなのです。ということは、家主は家賃をもうもらえません。彼らはすでに全ての賃貸事務所の接收を開始しました。住人は以前の賃貸価格の60%を支払わなければなりません。まったく、しゃくにさわる。要するに、ママは現在まで住んでいる自宅のために、今日明日中に家賃を払わねばならないのです。マドゥラ通りはまったくほとんど空っぽになりました。そして、もし誰かその家に住んでいるとすれば、ヤップか原住民かドイツ人です。

ハンペル

1942年12月30日

M. 一家は、お医者者の居住区に住んでいますが、ここは1月1日までに明け渡さなければなりませんし、花名地区もです。そこの人々はどこに行かされるのでしょうか？この家族はアンボン人であるため、家具を持って行くことを許されていますが、他の人々はベッドと戸棚をひとつずつ持って行くことだけが許されています。こんな具合なら、収容所にいた方がましでしょう。現時点ではです。なぜならば、今後どういうことになるか皆目わからないからです。

ハンペル

1942年12月31日

M. 一家は、11時現在まだ住むところがありません。彼らは、子供のひとりが働いているコーニングスプレイン東の修道士学校に現在ひそんでいます。…中略… B. S. は家を追い出されましたが、皮肉なことに、彼はヤップのもとで働いていますし、彼の妻には二三週間で赤ちゃんが生まれるはずで

ハンペル

1943年4月9日

実際には、収容所に抑留されるほうが少しばかり得になります。なぜならば、ここで家から追い出されると、どこへ行かされるか全くわからないからです。彼らは私たち全員カンポンに住まわせたいのです。

ハンペル

1943年4月30日

私たちの原住民の隣人たちが去りました。彼らは家主に少しばかり家賃を支払いました。ヤップは全部の家々を没収し、人々に家賃を払わせています。原住民はぜいたくな暮らしをしたあと、本来の地位に戻ります。でも、私たちみたいに自宅に住んでいる者でも家賃を支払わなければならないようです。家主はその家が没収されたことの証拠を得ることができません。「なぜならば」と彼らは言います。「あなたが強制収容されたら、その証明を得ることもできないのです」。要するに私たちはいつこの家の家賃を払うのか、これが少額とも思えないが冷静に待つのみです。

ハンペル

1943年6月8日

ヤップはまた1区画全部、60軒の家々を必要としています。6月10日には、パサルアン通り、バンドン通り、スマラン通りを明け渡さなければなりません。どういうことになるのでしょうか？ 2日以内に人々は立ち退かねばならないのに、彼らは1ヶ月もそれらを空家のままで置きます。きっと爆弾が隠されているかもしれないことを恐れているのです。私はバンドン通りに毎週抜うお

得意さんを3人持っています。¹⁶ その人たちがあまり離れてばらばらに住まわねば良いと望んでいます。

ハンペル

1943年7月15日

スマトラ通り全体が引越さねばなりません。今度その人たちはどこへ行かされるのかしら？ もし家を求めると、彼らはカンポンにある家1軒を与えます。かわいそうなT. P.。彼らにとってこれで5回目の引越です。度重ねて彼らは追い出されているのです。彼らには、彼氏がヤップのもとで働いていることで、これまで自分たちの家具を持って行くことを許されているという利点があります。

ハンペル

1944年1月5日

ヒャー、またひとたび心臓が高鳴りました。ヤッペンがたくさんの書類を持ち金切り声を立てながら私たちの隣の空家を調べていました。私たちの家の前で彼は立ち止まり、私たちの隣家のジャガ[監視]に、「誰がここに住んでいたのか」と大きな声で叫んでいました。私にはその答えが聞けませんでした。ヤップは、「おー」と言って先に進みました。あとでそのジャガは、オラン・ジェルマン[ドイツ人]一家が住んでいて、彼らの持ち家だったことを言ったと語りました。ドイツ人と見なされることのすばらしさ。1月20日、私たちの隣りにヤッペンの飛行士が来たためもあって、彼らはさらにたくさんの家を没収しています。

ハンペル

1944年2月29日

ママは、現在カンリコーダン¹⁷ とプルワルカルタ通りの家¹⁸のことで交渉中です。彼らにそこを差し押さえられたので、これからはカンリコーダンへ家賃を支払わなければならないのです。自分がプラナカン[印欧人]であることを証明すれば、その家賃を個人で保有できると言われてい

¹⁶ コーヒーやレモネード用シロップの顧客。ハンペル夫人は戸別に注文を受けていた。（「序」参照）

¹⁷ 文中に記されるカンリコーダン、及びフドーサン（カンリコーダン）は、不動産・住宅開発の管理を担当する日本人の事務局であった。（I. J. Brugmans 他）, *Nederlandsch-Indië onder Japanse Bezetting, Gegevens en documenten over de jaren 1942-1945* (Franeker 1960), 641) 参照。

¹⁸ ハンペル一家は実際ここに彼らが賃貸していた家を所有していた。

ます。…中略… カンリコーダンには以前R. から水泳のレッスンを受けたことがある中国人がひとりいます。とても感じのよい男。そして、彼は終業時間後にママに来られるかと尋ねましたが、そうすると彼は残業手当がもらえるからです。

ハンペル

1944年8月2日

ダムブリック通りからグリセー通りまでの人々が追い出されます。そのあと、ニッポンは何ヶ月も軒並み空家のままで置きます。どこへ私たちは行かされるのでしょうか？ なぜならば、これらの家へもニップが入居することになるからです。ドゥリュアス通りから出された三家族は、数ヶ月間の予定で1軒の家に詰め込まれました。

ハンペル

1944年8月20日

パナルカン通りのB. T. の家がニッポンに奪い取られ、そこの住人は出されます。かわいそうな一家。彼らは自宅の庭を見事な家庭菜園に作り変えたというのに、出なければならぬのです。彼らは14人で暮らしています。彼らには住むのに不可能な家か、物が全て盗まれてしまった家が指定されるのです。水道は蛇口がないために流れっぱなしです。修理に1万2千ギルダ一支払うことになったあとに追い出されるなんて。メンテンを明け渡さねばならないけど、彼らはどこかから来た人々をそこへ詰め込むのです。ニッポンは気狂い！

ハンペル

1945年7月1日

彼らはまた通り全体を追い立てている最中です。幸いにも人々は自分たちの家具を持って行ってもいいのです。

バタビア

ポール

1942年11月22日

ノンお婆さんは現在私たちの隣りに住んでいる。

ポール

1944年2月21日

私たちの玄関の間が空いていた時、ママはそこをドクター・ピルスに貸していた。ドクター・ピルスは女医である。魅力的な小さなお人形のような顔をした背の低いきれいな女の人。私たちの玄関の間は当時、泣き騒ぐ赤ん坊や子供たちでいつも超満員だった。ドクター・ピルスは小児科医だったから。このページの横に貼ってある（日本語の）張り紙は、彼女が私たちのところで開業していたことの記しとして郵便受けにあったものだ。数ヶ月後して彼女がグロゴール¹⁹の医師として去ってしまったてもそのままあったので、すぐにはがして、腕白坊主の君に貼りつけたのよ。

ポール

1944年4月6日

[「注意 ガスを大切に」と自筆でト書きし日記帳に貼った「Berhematlah Dengan Gas」のポスター] 近ごろのガスはまったくひどいもので、ますます弱くなり、時たま全然出ないのだ。

ポール

1944年6月26日

これ[貼った紙切れ]は、1年前[1943年5月]に、リーベルト夫人が受けた神の恩寵[30の住所と家賃のリスト]により、彼女が住むことを許・さ・れ・た家々のリストを載せた引越命令書だ。彼女には今後3週間の期限が与えられた。しばしば人々は2日以内に追い出されてしまう。

¹⁹グロゴール強制収容所は、バタビア市外の旧精神病院に開設された。

ポール

1944年7月24日

家族：

日記帳よ、君が私にここで要求することはむずかしい。すばらしい我が家は、D. O. 一家により6ヵ月もひどく悪化していた。私は他の誰よりもその人たちを憎悪している。絶対に人を憎んではないことは神に誓ってもわかっているけど、彼らがママに対して行ったこと、まるで人間のクズ！ つまり、彼らに関してはできる限り早急に忘れたいのだ。7月24日現在、私たち6人で暮らしていて、デ・フリースの人たち²⁰ はパビリオンに住んでいる。内訳はつまり、私たち3人、ファン・ウォリンヘン夫人、ラッメルス一家（母親とウィーブラント）。かわいそうなファン・ウォリンヘン夫人は少し休養するためにここにいる。彼女は難病を患っている。ここでは彼女は発作を起こした時にママの看護を受けることができるが、彼女の家ではあまりうまくいかない。看護についてだが。レネーは家事をし、フレー・ファン・ウォリンヘンとエレンは出かけているし、一日中だ。そして今、我が家族は快適でD. 一家なしにほっとしている。ケンカなし、ののしり合いなし、悪態なし。敬虔なるカトリック信者たちよ！ ご用心！ 私はあまり快くおもえないところにいる時、家がなつかしくなり、同時に私はその家族の一員であり、そこでは何も恐れる必要がないという安心感を得るのだ。私たちの家族は、現時点では上々だ！ リリィのことを書くのを忘れてた。彼女は、でも「ドクター」のところで働き、食事もするようになってからまったくほとんど家にいないのだ。

スマラン

ヒューセン

1942年4月6日

お茶の時、クララと私はこれから一緒に住もうという結論に達した。経済的だからという理由でなく、できるだけ早くそれぞれが新車を買えるようにするためだ。²¹

²⁰ これらは、ジョージン（ジョージ）とエーフ・デ・フリースというスリナム人姉妹であった。（「序」参照）

²¹ 1942年2月末から、自家用車は全て軍当局に移管される必要があった。教師ヒューセンは、彼女のクライスラー・プリマスを警防団へ売った。この車は負傷者を4人運ぶことができるトレーラーを後部につけて救急車として使用された。（NIOD 蘭印日記コレクション；IC 89B J. J. Huussenの日記）

ヒューセン

1942年4月7日

ANIEM²² へ向かう。そして13.50ギルダの電気代を8.75ギルダ（つまり電力制御200ワット用）に下げた。今また私たちは何か考え出している。なぜならば、13あるコンセントのうち4つ取り除かねばならないからだ。…中略… そこから、クラーラの家主であるカラン・トゥリ・クレドゥンのブリーヴェへ。彼はそこのカンボンで見事な家に住んでいる。内部もよく手入れされている様子だ。彼には感じのよい、がっしりした原住民の奥さんがいて、彼の娘ティティは利口そうに見える。ブリーヴェは、クラーラの家から2軒先に住んでいるファーバー夫人が今月に15ギルダ払うと言ったのに、請求書が届いた時に彼女は10ギルダ払い、領収書には40ギルダにさせたと私たちに語った。彼はこのことに関係してごもっともなことだが、オランダ人「淑女たち」との彼の体験がいろいろと浮上ってきてひどく腹を立てていた。クラーラと私は、彼が若い時に（彼が官吏でなかったため）たびたびひどく不快な扱いを受けただけに彼の正当さを認めざるを得なかった。クラーラは3か月分の家賃を全額払って、私たちは暑い中自転車でタナー・プティエに向けて走った。

ヒューセン

1942年4月10日

早朝にバランを運んでクラーラの手伝いをした。…中略… 午後、クラーラはチョコ（＝犬）を第2警察管区へ持って行った。つまり、スタルト氏が犬を欲しがったのだ。別れは彼女にとって思ったより難しかったようだが、気丈に振る舞った。引越自体が彼女にとって困難なのだ。初めてマイホームでまた居心地よく快適にしてたら、今度は全てをあきらめなければならないなんて、些細なことではない！彼女は大分疲れていそうだ。

ヒューセン

1942年4月12日

カシッパ通り1番地から貯水池通り29番地への大引越が始まる。マンドゥール[現場監督]ひとり、クーリー4人、小さなリヤカー1台で、一方私たちとカスモは自分たちでいろいろな小型のバランを運んでいく。全てが順調に進行する。Pekope²³ のポルティール氏が訪れた。彼が人々を手配

²² N.V. Algemeene Nederlandsch Indische Electriciteits Maatschappij

²³ 太平洋戦争の勃発時、オランダ政府は戦争被害者を援助する機関の開設にイニシアチブをとった。インドネシア人には、独自の戦争被害者のための援助機関Pekope (Penolong Korban Perang 戦争被害者援助)開設が許可された。全国的にPekopeがカンボンで組織され、戦争行為が村に進行した場合に何をすべきか住民

したのだ。その代償として、Pekopeは一对の椅子、カーテン、小さなテーブル1台、中国製ダンス1台、ウォールケース1台を受ける。ハルジョにはいらいらさせられる。スディキット・チャベ[少し疲れた]と申し出たが、彼を無視した私は、自分でベッドを打って組立て、自転車で上へ運ぶ。彼がこういう具合だと、追い出す以外ない。なぜならば、私たちはお金のかかるジョゴス[下男]を今のところ必要ないから！

午後になって雨が降り出せば、私たちは引越を中止し、残りは明日。だが事は急を要する。ベップ・ニーケルクはまだ入居先が見つからず、とても疲れている。²⁴ 夕方に表のベランダを少し整えて、クララと一緒に本を選び出した。早々に寢床に就き、長い間クララとおしゃべりする。私たちはベップに当座は私たちのところに同居することを提案するつもりだ。ベップはクララの部屋で寝る。

ヒューセン

1942年4月13日

私たちはベップに総計20ギルダーで今月私たちのところで暮らす提案をする。私たちは小さいけど15ギルダーする貯水池通り19番地を見に行く。ベップが入居することになると、私たちは彼女のために家具を備えてあげられる。そこでまず代理人グーイ・イン・ヒー氏のいるガン・ガムビラン121番地へ向かう。その家はまだ賃貸されてなく、ベップはおよそ4日したら入れるかどうか知らされる。帰り道で、自身では使用人を置いていない模様だが、手伝いを申し出たタナー・プティー14番地のオビク夫人と話した。彼女には日本女性と結婚した兄がいる。この女性は今ここで通訳をしている。世の中まったく奇妙なものだ。オビク夫人は家具付き、水道代、電気代込み25ギルダーでパビリオンを賃貸できる。このことをマークしておこう。そのあと午前中は家の整理していたが、まだたくさんすることがある。…中略… クララとともに2時半まで彼女のバルンを待った。彼女のキッチン家具一式は、私のところには合わない。物が多くなりすぎる(残りは何とか大丈夫だが)。午後と夕刻は片付けたり、イスをあちこち動かし、表のベランダに心地よい居間を作った。クララはすてきな物を持っているし、趣味がいい。

に指導した。中にはインドネシア民族主義者がPekopeへ潜入することが可能となり、時にはスマランのように組織全体を獲得することに成功した。スマランのPekopeの責任者は、臨時に中央市民医療施設(CBZ)の局長代理をしていたR.Boentaran Martoatmodjo医師であった。(Elly Touwen-Bouwsma, "The Indonesian Nationalists and the 'Liberation' of Indonesia: Visions and Reactions" *Journal of Southeast Asian Studies* 27, 1 March 1996; 1-18 その7参照)

²⁴ ベップ・ニーケルクは、Vrouwen Automobiël Corps (VAT)により軍隊の車で派遣されていたバンドンから戻ったばかりだった。(NIOD, 蘭印日記コレクション; J.J. Huussenの日記)

ヒューセン

1942年4月14日

外へ出なかった。大分片付けた。…中略… あまり仕事にありつけなかったマランから戻ったヘント・リットマンから電話あり。²⁵ 彼女はエヴェリーン・クラネンドクと一緒に住むらしい。ティーネ・ホルツハイマーは、スナリオ通りにいるヒュガイ・フォス²⁶のところ移転した。彼女たちからまだ電話をもらってない。

ヒューセン

1942年4月18日

奥の部屋は今、用意が整い、そのあとクララが自分の部屋を整頓できるようベップはそこへ移る。

ヒューセン

1942年4月19日

クララと私は戸棚を片付けて中に収納した。ベップが出るのである。午後にニワトリ「ブロロー」(＝白黒の斑点)が卵をひとつ生んだ。養鶏場のなかでも初めて！ 動物小屋は現在、おんどり2羽、ニワトリ6羽、ひよこ7羽、雄猫3匹、子猫1匹、犬1匹、インドネシア人5人、ブランダ[オランダ人]3人で構成されているのだ！ 私たちには世話することがたくさん！

ヒューセン

1942年4月30日

ベップが我が家に立寄り、プロデット夫人を手伝うためにしばらく夫人のところに留まれるのだがどうかと尋ねた。もちろん私たちはすばらしいことだと思い、プロデット夫人が万一バンドン

²⁵ ヘント・リットマンは、スマランのHBSで教師を務めていた。彼女はマランへ逃亡し、当地では看護婦として届出た。

²⁶ ヘント・リットマン、E.J. (エヴェリーン) クラネンドク、C. (ティーネ) ホルツハイマー、ヒュガイ・フォスは、教師ヒューセンと同じようにスマランのHBSで教師を務めていた。

ガン²⁷へ発った時には私たちの家に来てよいと申し出た。ベップは彼女の家を解約し、電気と水道を止め安心して去る。

ヒューセン

1942年6月4日

テガロンボ10番地での午後の授業（同じ進度で勉強できる4人の生徒と）から帰宅すると、グーイ・トホワン・ホワツ氏のメモがあった。同氏（！）が訪れた時、クララは犬のハッピーと散歩中だったのでそれでメモが。彼はこの家の所有者であることを主張し、私がただちに全額支払わない場合には、来たる7月1日をもって賃貸を取り消すと言っているのだ！（このメモはファイルの中の家賃領収書のところにある）このことは非常に奇妙だ。というのは、私自身、克蘭ガン20番地にある事務所ですばらく何も支払わないことで約束したのだから！²⁸ フリッツとクララは明日それに必要な処置をとり、あらゆる手を尽くす予定だ。

ヒューセン

1942年6月5日

実際に、この家（貯水池通り21番地）は、既述の人物グーイ・トホワン・ホワツが彼の母親ティオ・シン・リオン夫人からもらったらしい！フリッツとクララはラトキャンプ（ペコジャン）のところで彼と話した。²⁹ 彼はとても無愛想で粗野で、後になって態度を和らげた。そこから彼女たちはヤップのいる克蘭ガンへ向かい、そこでグーイ・トホワン・ホワツが家主であることの確認を得た。そこで今度は家賃と完済法について彼に申し出ることが問題となる。だが私たちは3月分はすでに払ったので、1ヶ月分だけ遅れているのだ。私たちの申し出：家賃1ヶ月分22.50ギルダー、加え滞納家賃の追加払い。または：1ヶ月25ギルダーで、4月分を分割払いに。

²⁷ バンドンガンはスマラン近郊のウンガラン山の山腹にある小さな村で、当時多くの欧州人がバンガローを所有していた。

²⁸ クランガン20番地には、貯水池通りの住居の家主である、Thio Tjoe Pian, Handel- en Bouw Mij. N.V.の事務所が所在した。

²⁹ グーイ・トホワン・ホワツは、スマランのペコジャン19番地にある薬局Rathkamp & Co N.V.で働いていた。

ヒューセン

1942年6月6日

フリッツとクララは再び彼のところを訪れた。彼は今度はかなり柔軟で乗り気になり、明朝電話で私と話したいそうだ。彼はレーラント家³⁰の古い住居に沿って私用の入口とガレージすら作り直させた。

ヒューセン

1942年6月7日

本当に、グーイ・トホワン・ホワツ氏は電話をかけてきて、私たちが4月分をすぐに払えば、家賃を22.50ギルダーにする予定だと伝えた。そうすることにしよう。私たちが順守すべきことはもう分かったし！

ヒューセン

1942年6月16日

私たちは月に10ギルダーで住むことができる新チャンディ26番地の家を念頭に置いている。明日更に仕上げ作業にかかる。

ヒューセン

1942年6月19日

引越に伴ってたくさんの不平が出たが、私は今難問を解決したので、7月1日付けで私たちは新チャンディ26番地を賃貸することにする。

³⁰ レーラント-ファン・オーバーゼー一家は、タナー・プティー25番地に住んでいた。（貯水池通りはタナー・プティーに通じる裏通り）。英国領事館副領事A. J. レーラントは、1942年2月半ばにレンバンにある連合国本部で連絡将校として任務を果たすために同地へ発った。（NIOD, 蘭印日記コレクション；IC 89B J. J. Huussenの日記）

ヒューセン

1942年6月20日

家主（グーイ）は、7月1日をもって賃貸解約をする旨の私の手紙を受け取った。リノ・ローゼンタールはその手紙を持って来て、グーイ氏はそれに不満だと言った。

ヒューセン

1942年6月21日

グーイ自身がここを訪れ、私たちは、実際の家賃は20ギルダーだが、月に10ギルダー支払い残りはあとで完済することで同意に達した。このことに私たちは応じることにした。明日、このことを電話する。そうすれば私たちは引越す必要もないのだ。金額に差が出るし、スサー[厄介事]も少なくなる！

ヒューセン

1942年7月14日

ペンテロンガン13番地（リーンおばさん³¹）の住宅賃貸を手配した。フリッツは克蘭ガン20番地を訪れた。4月1日からの実際の家賃は24.50ギルダーだが、私は月に15ギルダー支払う。だからいいのだ！

ヒューセン

1942年8月23日

先週、バニユアニックのシーレフェルト夫人のところで略奪が行われた。スロンドル³²でも同様に安全でなくなり、みんな去っていく。つまり、同地の家主にとっては打撃！

³¹ リーン・スミスおばさん（あるいは「スミスおばあさん」）は、マランでのヒューセンの知人であるヨー・ビスホップの叔母であった。(NIOD 蘭印日記コレクション；IC 89B J. J. Huussenの日記)

³² バニユマニックとスロンドルは、ジョカとソロ方面道路に面したスマランの上手に位置する。

ヒューセン

1942年9月21日

この前の週末にはムリア通りに泊まった。そして私は、緊張した状況³³を理由に、できるだけ早い時期にポップとアンスのところへ入居する約束をした。全てを整えればすっかり安心できるだろうに。とっっても心地よいし、暖かい雰囲気だし、私はとでもくつろいだ気分になれるのだ。午後には、クララにこれからの変化と広まっている興味深いさまざまな事実を知らせるために貯水池通りへ自転車を走らせた。…中略…

1時頃にひとりのマンドュールがクーリーを連れて現われ、1時間以内に机と本棚とテーブルと椅子とベッドと鏡台を積み込んだ。私は、ウルフ夫人のところ立寄ってから、部屋をすでに整頓し、スペースの隅々まで配慮してくれたポップを訪れた。彼女たちの「サロン」は「居間」に改造され、非常に居心地よくなった。…中略… クララと一緒に貯蔵品などを分けた。明日からどういうことになるか興味あり。

ヒューセン

1942年9月24日

早くからえり分けたり用意することに働きづめ。ひどい騒ぎだ。8時半頃に、生徒たちが私を手伝いに来た。ありがたい。バクリは重たいバランのために更に1台の荷車とクーリーふたりをかすめた。2時前には、少年たちと女の子ひとり（エレン・ガウトベルフ）がムリア通りへ向けて書籍、そしてペテロンガン13番地へ向けてたくさんのバランを運んだ。また、私自身も何回か行ったり来たりしたが、午後に、まだ少し手配することがあるのでムリア通りへ出向く予定だ。なぜならば、まだ「私」の部屋にかなりのガラクタがあるからだ。アンスは私のために蚊帳とリングを用意してくれる。また、彼女は水道と電気を止める手配をしてくれた。彼女はすばらしい人だ！暗くなる頃、貯水池通りへ戻る。

ヒューセン

1942年9月25日

幸いにも、何人かの生徒が手伝いに来てくれ、バランが迅速にトランクに詰められた。また、こわれやすい物も運び出してくれた。リーンおばさんのガレージは一杯だが、食器やグラスを収納

³³ この緊張した状況とは、クララがたびたび訪れる愛人を持っていたため、クララとの関係が悪化したことを差す。（「人間関係」ヒューセンの日記 1942年8月23日及びNIOD,蘭印日記コレクション；IC 89B J.J. Huussenの日記参照）

できる戸棚を3つ中に入れるようはかってくれた。愛犬ハッピーとのお別れに、自転車に乗せて走った。悲しいけれど、ムリア通りへは連れていかれないのだ。なぜならば、もうそこにはリートメイヤー夫人（ヘティ）の犬が3匹いるからだ。

ペテロンガン13番地にバルンを幾つか整えたあと、「家」へ。疲れたが、この「自宅」では私の心配が和らぐのだ。ポップはまだいない。依然プルウォケルトにいる。³⁴ アンスはいろいろと私に対し気を配ってくれ、ここの雰囲気は心からの友情と親愛に満たされている。無意識のうちにこのようなことにあこがれていた。夕方遅くまでアンスとおしゃべりし、夜も深けた頃寝床に就いた。

ヒューセン

1942年9月27日

ファン・デル・ウェルフ夫人は、ちょうど良い時期に私が引越したと言った。9月25日からはこれが許されないのだ。そして、私は9月24日に第2と第3管区に引越済みとして届出た。また、全てのバルンはすでに移動完了！

ヒューセン

1942年11月22日

ここはまだ全て平静だ。丘陵地全体を明け渡さなければならないという話だけが出ているけれど、私たちは依然住んでいる。ティオ・シン・リオン通りのレーラント家の屋敷は、すでにヤップのエコノミスト³⁵に押収されてしまった。私はもう貯水池通りに住んでいなくてよかったと思う。

³⁴ ポップ・ウィーボルスは、スマランの蘭印商業銀行の代理店をまかなう彼女の夫ヘルマンを連れ出すためプルウォケルトへ行った。（「市外との接触／戦争捕虜・民間人被抑留者との接触」ヒューセンの日記1942年9月21日、22日、27日参照）

³⁵ 「エコノミスト」は、軍政を引き継ぐために侵略部隊に従った（技術・経済・法律専門家の）行政官であった。（D. van Velden, *De Japanse interneringskampen voor burgers gedurende de Tweede Wereldoorlog* (第4版 Franeker 1985) 26, 57)

ヒューセン

1942年12月4日

ウェルカル通りとラウー通りを即刻明け渡さなければならない。昨日、ブルゲルホウト夫人は軍隊の司令官と中尉ふたりが見に来たと語った。要するに気に入ったようだ。ここには再び侵略部隊がいるようだ。

ヒューセン

1942年12月14日

新チャンディ全体が大騒ぎ！私たちは全員家を退去しなければならないらしい。でも最悪なことは、ニッポンワーカー³⁶ がハルマヘイラ地区³⁷ へ行かされることだ。それは卑劣な策略だ。ポップとヘルマンは、ヒューゲンホルツ家³⁸、ハッカー夫人とその姉スプライトを訪れた。私たちは落ち着きを取り戻すためにシェリーを一杯飲む。

ポップとヘルマンが帰宅すると、私たちは表のベランダで一緒に食事する。なぜならば、誰一人として食卓につく気がないからだ。私たちはまた陽気になるのだ！私たちはうなだれないのだ。ウィー・キャン・テイク・イット！

ヒューセン

1942年12月15日

バクリは私のために書籍をペテロンガン13番地へ運び始めた。私は1時にちょっと家に帰ったが、ポップのことが心配になる。彼女は私たちふたりの運勢をカードで占う。まったく当たっている！彼女の説明では私たちはその家に留まるのだ。ニッポンワーカーは抗議した後もまだ何も達成していない。今手段を講じるのは困難だ。しばらく様子を見たほうがよいのだ！

³⁶ ニッポンワーカーとは、日本軍占領下、様々な（公共）事業や企業の稼働を維持させるため暫定的に働かなければならず、強制収容を免れた欧州人をいう。その目印として、彼らは上腕に赤い丸（日章旗）の付いた腕章を装着していた。（Van Velden, 76, 436-438）

³⁷ この地区は、ハルマヘイラ通りとハルマヘイラ広場付近にある50軒の家屋で構成されていた。1942年12月から日本降伏まで、ハルマヘイラ地区は強制収容所となっていた。初期から1943年6月までここには、労働中の男子とその家族が住んでいた（ハルマヘイラ I）、その後、この地区は1944年1月まで男子・少年収容所（ハルマヘイラ II）、そして1944年2月からは、婦女子が強制収容されていた（ハルマヘイラ III）。1944年12月から1945年1月まで、この収容所はバンコン、チマヒ、バンドンからの老人や病人約560人の一時収容に利用された。（Van Dulm 他., 136）

³⁸ E. H. テル・ブルッヘン・ヒューゲンホルツ一家を指す。テル・ブルッヘン・ヒューゲンホルツ氏はスマランのジャワ銀行頭取であった。

ヒューセン

1942年12月20日

午前中に、私の部屋を片付け、ガレージから戸棚を家の中に運ぶためにリーンお婆さんのところへ行った。スンビン通りでは、クラーク夫人とハネケ・ハイマンス医師が、12月22日火曜日までに家から出なければならないという通告を受け取った。

ヒューセン

1942年12月21日

引越しなければならない人のところへは、ニッポンが自分で来て持っていかれるものを指示するが、それはたいしたことはない。最も古いもので私たちには十分なのだ！時には、ベッド1台、小さなテーブル1台と何脚かの椅子と戸棚！

ヒューセン

1942年12月22日

丘陵地ではさらに大騒ぎが！今度はラウー通りで通告を受けた。そして、26人の女性や子供たちが住むファン・デベンター学校を含む新チャンディ通りの幾つかの家々が。彼女たちは明日明け渡さないといけなのだ。ウイ・ティオン・ビン通りのメールディンクも。また、パラレル通りとベンド通りを日本人が調べに来る。実際彼らは6人で一ひとりでは彼らはそれをする勇気がないのだーやって来た。

ヒューセン

1942年12月23日

グルガダイで私はマンガ街道を明け渡さなければならないと聞いた。クリスマスの翌日(!)におよそ1200人が外部から到着するはずだから。…中略… ハッカー夫人は保護区³⁹の責任者と話し、彼女のためにすでに「予約」してあった大きな家、ソンポック⁴⁰へ引っ越すことを認め

³⁹ 「保護区」またはマレー語「テンパット・プリンドゥガン」という表現は、強制収容所の意味に使用された。

⁴⁰ ソンポックまたはランペリサリ・ソンポックは、スマランの町の南東にある旧境界線に位置したランペリサリ通り両側の地区であった。1942年11月以降、ランペリサリ通り、ソンポック、マンガ街道、プリン

る決定をした。うまく行ったら良いのだが。役員たちによると、この認可には何の問題もなく、彼女は全部持って行かれるのだ！

ヒューセン

1942年12月24日

リー・ハッカーの引越用荷車で全体が通行止めになっているベンド通りへポップと向かう。パラルレル通りのガウトベルフ、(髭の)ハイマンス、そしてファン・デル・メールは、数日以内に立ち退くべき通告を受けた。…中略… 今5時半、トゥルーデがちょうど到着した。そこでは全てがスムーズに進んでいる。ベンド通りにヤッペンが訪れはしたが、トゥルーデによると何ともなかったし、彼女は上手に彼らを追い立てた。マリー・ハッカーは、その家とその他全てにととてもスナン [満足] している。

ヒューセン

1942年12月25日

11時半にポップと一緒に自転車で下へ行った。私はバランスを少し持ってリーンおばさんのところへ、彼女はヘッティのところに寄ってからリー・ハッカーのところへ。私があとで(12時半頃)到着した時、ちょうどヤッペンを乗せた自動車が走り去り、全員がともしょんぼりと見入っていた。大騒動のようだ。リー・ハッカーは引越が許されていなかったようだ。委員会はサラ[誤り]を犯したようだ。最終の引越用荷車が昨日ヤップに停車させられた。ベンド通りへ戻さなければならなくなった大量のバランスは、2時に引き取られた。加えて、彼女はこの家も立ち退かなければならない。なぜならば、そのような大きい家はニッポンワーカーを対象としているからである。また、向かい側のデ・ヘルトツホ夫人、そしてスタールチェス、ファン・デル・プール、エーカンプらご婦人たちは豪邸から立ち退かされる。全ての人々にとって何と楽しいクリスマス！ポップと一緒に上へ歩いて行き、この「ニュース」を色々と伝えた。暗くなる頃、ガウトベルフ一家に立寄った。彼女らは、何を持って行かれるか、またどこへ引越させられるのか、多分ソンポック通りだが、明日明確な回答を得る予定だ。同じく、メイヤー夫人もベンド通りから立ち退かなければならない。彼女はどこへ行かされるか知らない。なぜなら、彼女には17歳の息子がいるからだ。彼女たちは、多分コーラと一緒に「地区」へ行き、その息子はブラウエル家に。いつ私たちの番になるのかしら？

ビン街道、ジェルク街道にある約220軒の小さく粗末な住宅は、隣接した官吏養成学校とその別棟とともに欧州人婦女子を対象とした収容所に指定された。(Van Dulm 他.,137)

ヒューセン

1942年12月26日

ドクター・デ・フォーゲル通りの下手で出会ったメールディンク夫人は、結局、路上に立たされ、
ウイ・ティオン・ビン通りにある中国人の空家に野営していると語った。ケンペイタイと軍隊は、
要するに自分たちの住居を求めて争ったのだ。そのひとは立ち退かなければならなかったと言
い、他は暫定的に留まれると言った。そして、突然ヤッペンがバランとクーリーとともに現われ、
彼らがその中から持って行くことを許されているガラクタを外へ投げた。その際、ハンスエの自
転車が盗まれてしまった！彼女の義理の兄は、ハリマヘラ通りへ引っ越さなければならない。彼
女は多分、「地区」に収容されているフェルミューレン夫人のところに住める。

ヒューセン

1942年12月28日

帰宅する途中で、初めにソンポック通りのガウトベルフの家へ行った。彼女は結構うまくやっ
ている。私にとってはまだ良いほうだ。ゲールト・ガウトベルフは、明日の2時にヤマモトのど
ころの「グローテ・ハウス」⁴¹に彼が出頭すべき通告を示すいくつかの書類を私に出すと言った。
これが今度は何をもたらすのだろうか？

ヒューセン

1942年12月29日

ソンポック18番地へ。ゲールト・ガウトベルフはすでに帰宅していた。全員が居住のことでヤマ
モトのところへ出頭しなければならなかった。I-グループに属する者は（ゲールトのように）
家賃を払えばソンポックに住むことを許され、それ以外はハルマヘイラ地区へだ。鉄道関係者の
多くは現在、家探しをしており、「保護区」は、現在繁華街となった。苦勞して、私はランペル
サリに向かって自転車を走らせていると、43番地では、そう悪くもない、今は内装が整った小さ
な家にいるリー・ハッカーとトゥルーデに会った。彼女が「偏頭痛」のため、彼女の姉と子供は
パラレル通りのワイブル⁴²のところに泊まっていた。ボイケルマン夫人とクラールチェもそこ
にいる。彼女たちは狭い家や小部屋に苦勞している。…中略… リー・ハッカーもマンガ街道の

⁴¹ 「グローテ・ハウス」またはGedung Papak（「平屋」）は、中央郵便局の隣りにあった政庁。日本人はこの建物に軍政の事務局を設置した。（Brommer 他. 141参照）

⁴² ワイブルはデンマーク国籍を有していたため強制収容を免れていた。（NIOD, 蘭印日記コレクション；IC 89B J. J. Huussenの日記）

ランペリサリ - ソンポック収容所に入れられるはずのある若い女性とその子供を家に置いている。到るところでそのような人々を同居させている。

ヘティ・リートメイヤーのところでは、4人つまり母親と子供3人が加わり、食堂がそのために準備された。昨日にはまた、マディウンとサランガンから女性たちが到着したが、大半は避難してきたバリクパパンからのBPM⁴³ 関係だ。彼女たちはでも衣類や日用品で一杯のトラックを持って来たが、ほとんどの人は家財道具はないのだ。何でも役に立つのである。だから私は明日ペテロンガン13番地にある私のバランから何人かに家具を提供しよう。でも、これをするにはもう遅すぎる。暗くなる頃にやっと帰宅。

ヒューセン

1942年12月30日

デュ・モッサ一家の少年たちにドイツ語を少し教えたあと、重たいブセック[かご]を自転車の後ろに付けて下へ向かい、ペテロンガン13番地にちょっとマンピル[立寄る]し、ヘティ・リートメイヤーのところへ行った。小一時間すると、女性3人と何人かの子供たちがベチャ[輪タク]で私と一緒にバランをより分けるためにペテロンガン13番地へ向かった。…中略…彼女たちはお鍋、陶器、ガラス器をさっそくベチャに入れて持って行く。私は大きな物を午後にはベチャで運ばせる手配をする。

私はその悲惨さにすっかり打ちひしがれた。女性たちは、新チャンディ通りの立派な家に収容されると言われたらしいが、こんな状況におかされるとは！ビリック[竹で編んだ柵]の掘っ建て小屋に入れられているにもかかわらず、女性たちは全員とてもしっかりしている。彼女たちはそれでも喜んでいるし、あらゆることに感謝しているのだ。私は陽気な顔つきを試みているが、内面では泣いて怒っているのだ。恥だ！…中略…

ペテロンガン13番地で、バクリが2台の荷車（馬車）とクーリー6人を手配したので、大量に積み込まれるのだ。あとでもう1台荷車が出て、そしたら今日の方は全て終了する。雨が降りそうだったが、マットレスと戸棚が搬入されたあとで降り始めた。6時半（ニッポン時間）、私はクーリーに一括して2.50ギルダと荷車代0.50ギルダ払って打ち切る。要するに、大した金額ではないのだ。たくさんのバランが運ばれてきたが、まだまだ十分でない。これからも援助がもっと必要だ。私は濡れてくたくたになって、8時にムリア通り3番地に着いてすぐに「暖かい」お風呂につかった。今まだこれもできるが、あとになったら私たちもみじめな思いをする！ポップとアンスはガラス器、陶器、カーテン、敷物、壁掛けなどいろいろな物をひとまとめにしている。

⁴³ Bataafsche Petroleum Maatschappij N.V. (バタビア石油会社)の略称。

ヒューセン

1942年12月31日

大晦日！また、下へ自転車を走らせる。…中略… 再びヘティ・リートメイヤーと一緒に、全部を、ポップのクッキーも加えて分配し、ペテロンガン13番地から蚊帳などを取ってくる。そのあと、ヘティとドゥフラポント夫人とともに中央炊事場へ向かう。事務所のところで、私たちに全てを見せてくれるスタールチェス夫人に会う。確かに、多くがなされたが、まだまだ十分とは言えない。炊事場でベーコン入り煮豆とライスとアチャル[酢漬け野菜]を一皿頂き、すてきな事務所で平らげさせてもらう。ウィリィ・ファン・デル・プールが忙しそうに行ったり来たりしている。そのあと、私の残りのバランを取りに再びペテロンガン13番地へ向かう。マンガ街道ではそれはお金をどぶに捨てるようなことで絶望的なのだ。雨が激しく降り、そのため私はずぶぬれになって帰宅した。

ヒューセン

1943年1月1日

マンガ街道に収容されている480人の女性と子供たちはねたんでいるようだ。なぜならば、BPM 婦人たちが何もない他の人たちと平等に分けたがらないからだ。「人」は、「収容所」に柵を巡らすことに一生懸命だ。

ヒューセン

1943年1月12日

今日、再び新チャンディ通りに住む何人か、つまりホルトザップフェル（2度目だ！）、ブンデル、レーヴィエ（ウィレムセ医師とともに）、ヘンネマが、3日以内に家から立ち退くべき通告を受けた。ここはますます空っぽになっていく。ホルトザップフェルはアンドウン通りへ行かされる。なぜならば、彼はニップのために働いているからだ。その他の人々は、どこか入居先を探さねばならない。

ヒューセン

1943年1月25日

リーンお婆さんの誕生日を一緒に祝う代わりに、授業の途中でムリア通りへ自転車を走らせた。なぜならば、私たちは今日立ち退きを食らったから！まず、今朝ひとりのヤップが見に来た。その男はすっかり上機嫌になって、午後には6人も来たほどだった。ポップは我慢強く彼らの話を聞いて、そして彼女は全部払ったことをきっぱりと発言した。ポップはかなり上な英語を話し、物事をはっきりと言えるのはすばらしい。アンスは自分の部屋にある物でポップの椅子2脚以外全部持って行かれる。ポップは鏡台、化粧台などを持って行っても良く、食堂とサロンはそのままにしておかないといけない。サロンのソファ1脚と（ヴィエトール夫人の）照明スタンドと椅子だけ持って行かれる。表のベランダの長椅子1脚と椅子2脚と茶卓と。台所は折半にするが、冷蔵庫、ガスオーブン、エアコン、ガス湯沸器は残す。食器とガラス器は分ける。ポップのミシン（とサロンケース）は持って行かれるが、アンスの物は残す。ふたつのラジオはそのまま残す。床のマットなども残しておかねばならない。どうにかやって行けるだろう。私はベッドと鏡台を持って行かれる。ヤップの将校によると、「ミス・ヒューセン」は収容所へ入らなければならないので、「グローテ・ハウス」に届出しなければならないのだ！これをしないつもりだ。彼らに来させよう。でもどのようにしたらいいのかわからない。なぜなら、私は放浪生活をおくり、もう定住場所を届出したいくないから。すでに私はマリオンのところへ行ったし、私の時間をペテロンガン13番地とマリオン間で費やす予定だ。

ヒューセン

1943年1月26日

5時半（ニッポン時間）に私たちはもう起き、朝のコーヒーを飲む！生徒には授業がないと告げ、「ニュース」を伝えるためにしばしペテロンガンへ向かう。アンスとヘルマンは、引越の許可を依頼するために下へ行ったが、礼儀正しく扱われ、かなり早く終わった。昨日、私は「収容所」に入れられると言われたのに、私の名前はもう呼び出されなかった。私はレミューズ[運送業者]に引越について促しておいた。彼はあとで取り決めに来る。ポップ、ヘルマン、アンスはコペンラーン11番地を入手できるようだ。なかなかいい家だ。

本日はたくさんの人たちが家を追い出される。その中には、私たちの向かい側のファン・デル・ビルト、角のノールチェ・クライダヌス、シンドロ通りのタック、新チャンディ通りのマーセン、ウェンカル通りのベルフマンとダイネマ、テガロンボのウェストラとポッテンハイム、パラレル通りのコルヴィングだ。多分、もっと大勢が！

その間に、私はポップのために本、ガラス器、陶器やそのほか色々のバランを詰めた。どんどん進んでいる。私自身に関しては、ほとんどの物がすでに下にあるのであまりすることが

ない。バクリは何度か往復し、最後に毛布とサロン地で包んだ回転式本棚を自転車の後ろに載せて行く。一方、ヤップはファン・デル・ビルトの家にちょうど入ろうとしている。

ヒューセン

1943年1月27日

早めに荷造りと後片付けを始めた。なぜならば、引越は本日9時半に開始される予定だからだ。もちろん、大分遅れるだろうが。車が到着する少し前に、私たちは何かを探し回っていたらポップの帽子ケースを見つける。当然、ポップはどうしてもかぶりたがったが、ちょうどファン・デル・ホルスト医師が角を曲がって見に来た。彼は、家とバランのことを話したがるフェルカウテレン夫人と一緒に、ウィーボルス一家がすでに家を手したかどうか知らない。

バクリは、その間にバラにした鏡台を持ってふたりのクーリーと下へ行った。そして、許可なしでもうまくいった。1度だけ停止させられたが、通過を許された。確かに第2管区の警官だった。コペンラーン11番地への初便はうまくいったが、2便目が出たとたん、雨が降り始めた。その時は、ちょうどマットレスと衣類があった。まずいと思ったが、まあ大したことはなかった。びしょりと濡れていた物はわずかだったから。家を見に行く。彼らの家具、戸棚、タンスですてきになるかも。午後、バランを少し持ってペテロンガン13番地へ自転車を走らせたが、全部横道を通り、途中でシランダとグヌク。明朝残りを全部取りに行く。なぜならば、12時にイトー(=ヤップ)が全て異状ないか見に来るからだ。私たちはもっと早い時間に彼が現われることを予期している。

夕方、銀製品を選び出している時に、ポップはそれにしばし耐えきれなかったが、勇ましく振る舞い、私は彼女に脱帽するのだ。

ヒューセン

1943年1月28日

(ムリア通りそしてポップとアンスのもとでの最後の!) 朝のコーヒーを飲んだあと、私のベッドを分解し、蚊帳を取り外し荷造りし、残りのトランクやその他の私のバランと一緒に表のベランダに置いた。ヘティ・リートメイヤーの大きな木箱ををベッドのところに押し入れて全てが完了! 部屋全体、机、本棚、丸いテーブルと4脚のすてきな椅子からなっている私の初めての誠に申し分ないオフィスを見捨てなければならない。

8時(N.T.)にバクリがふたりのクーリーと来て、全部下まで一度に運ぶ。その間に、アンスと私はコペンラーンへバランを少し持って行く。9時にポップはコペンラーンへ向かうはずで、イトーが見に来て、ポップに引越用のトラックを提供する! 彼はこのとってもすてきな家具

付きの家に入居することにもものすごく急いでいるみたいだ。全て見事に残されているし、彼が来た時に使用人たちはちょうど拭き掃除中だった。1時間したら彼は自分のバランを送り出すはずだったが、彼だ去ってまだ10分もたっていないのに、トラックが入って来るなんて。私たちはその作業を中断させた。大勢いる使用人の中でも、カルト、ラ、そしてスカンデルはムリア通りに残る。そう彼らも望んでいた。高い賃金をもらおうと期待しているのだ！

私たちがポップのところへ向かわせるガス屋がちょうど来た。そして、私はコペンラーンに彼女を留めておくために先に行った。ムリア通りに戻ると、すでにふたりのヤップが着いていて、たくさんの物がすでに中へ運ばれていた。ポップは、あと自分の台所と戸棚をより分ければ、それで終了だ。そうこうするうちに、彼女とアンスはヤップの言うことを聞きながら、バランを置く手伝いをしていたのだ。競売人Bの娘で将校(!)と結婚したV夫人(!)が家の家具を配置するためにすてきな自動車に乗ってやって来た！！私とポップは、彼女をあまり丁寧でなく、愛想よく迎えなかった。私はそのあと自転車の後ろに包みを載せ、灯油入りの缶1個を私のレインコートにくるんで去った。ものすごく腹が立つ。これからうろつき回るのである。また、リーンおばさんのところに住み込むのはとても抵抗ある。あそこは思っていたよりひどいのだ。そこら中が汚いし、快適でない！

私の部屋の中には、何時間もかけて片付けなければならないほどのガラクタがあって、ベッドとテーブルの上が空になるのには結局夜までかかったほどだ。一日が暮れる頃は、それでも私の本を一杯入れたトランクが6個と、バクリには明日のための手順の長いリストができた。

ヒューセン

1943年1月31日

ガレージにあるほかのバランのより分けと片付けることを早めに始めた。たくさんの物がひどく汚れている。私自身で調べられてよかった！10個のトランクを私が隠る際使用したテーブルの内側や上に押し込んだあと、すでに詰めた木箱の番となる。11時にはストップする。ほかにもたくさんやることがあるからだ。

5時にクナリーラーンへずっと自転車を走らせ、マリオンを起こしてしまった。私が上で授業をする時には、彼女のところに泊まるのである。まるで砂漠の中のオアシス！…中略…午後後に再びバランをより分け、処分して今4個の木箱が一杯になった。バクリは明日文字を上を描かなければならない。

[1943年2月24日に、教師ヒューセンは最終的にペテロンガン13番地の家を去り、クナリーラーン19番地のマリオン・ウルフとそのふたりの息子ハンスとエーリックのもとに潜伏した⁴⁴⁾

⁴⁴⁾ 「日本人による措置と規定」、ヒューセンの日記 1943年2月23日、24日参照。

ヒューセン

1943年6月8日

聖エリザベト病院の人々はお金もなければ、幼い子供がふたりいてお金もない準身体障害者であるアロフス夫人は途方に暮れている。エリー・ファン・フリートのもとで小さな娘と一緒にもう長いこと歓待気分を満喫しているトゥルース・リンケルは、アロフス夫人も同じように同居させる提案を現在している。そしたら、エリーは敬虔なカトリック信者を3人も身近に置くことになるのだ！そして、5人プラス1人プラス3人プラス2人（子供）＝11人の子供たちが彼女の敷地でガヤガヤ騒ぐことになる！もし彼女が同意したら気が狂ってしまうだろう。彼女は幸いにもきっぱりと断った！

ヒューセン

1943年6月29日

全部の蛇口がここクナリーラン19番地では不意に漏れ出したようだ。事態は終局に向かいつつあるのだ！緊急に変化が起こらねばならない！

ヒューセン

1943年6月30日

漏れている蛇口は皮片でふさいだが、1箇所はどうしても修繕できない。外のお風呂場のシャワーはマリオン浴室へ移された。彼女のは上全体が漏水しているから。

ヒューセン

1943年10月5日

今朝、マリオンはクボン[庭師]のダジャと一緒にグダン[物置]をすっかり片付けた。このところネズミが住みついていたので。本当にウジャウジャといて、結局23匹もいたらしいが今は死んだ。とってもいやなのは、私たちは今朝またガサゴソという音を聞いたことだ。

ヒューセン

1943年10月8日

私たちは偶然早々と食事した。少年たちはもうベッドに入ったし、私たちはいつものように裏のベランダでタバコをもう1本吸った。そしたら、ハンスが駆け寄って来て、「マミー、大勢日本人が！裏に来ているよ」と。それは騒ぎを持ち込んだ。制服姿の3人と民間人3人。ひとりがリストを持って話した。マレー語で。

「ウルフ夫人はここにひとりで住んでるのか？グラニ・プトゥール[本当に勇気ある]！」

「彼女は家賃を払ったか？」「はい、30ギルダー」

「誰に？」「ウイ・ティオン・ビン社へ、領収書付きで」

「彼女はここに住み続けるつもりか？」「そうか、スカ・プトゥール[とてもすばらしく思う]！」

ひとりがすぐにも廊下に入って来た。それから、壊れた塀からホフステーデの家に向かって出て行って、そのあとヘックの家へ。⁴⁵ そして3台の自動車で去った。その間私は、ヤップが食堂の角に達する前に駆けて去り、離れのところ、それも使用人用浴室のドアの後ろに避難した。人目を引かないようにこのドアを開けておいた。ずっしりとしたブーツの音がして、ひとりはその通りすぎ、それから静けさが！安全になった時、ハンスが私に告げに来た。何を彼らは欲しかったのか？でも、今のところ私たちはまだここにいる。次は何だろう？

ヒューセン

1943年10月21日

私たちの向かいの家々は、特にヘックのは完全に修繕され、再び電話、水道、電気が完備される。ヤップが入居する予定だ！

ヒューセン

1943年11月1日

今日から、またハンスとエーリックに勉強を教え始めた。このふたりが発見したことには、私たちの向かい側のヘックの家がすでに入居され、それもふたりのヤップで、自分たちのジャワ人の女中を連れているらしい。彼らがこの隣りや私たちのところをかぎ回らなければいいのだが。私たちはこの庭園と見晴らしを相変わらず楽しんでいるのである。残念だが、私たちは暗くなる

⁴⁵ 公証人J.ホフステーデの家は、クナリーラン21番地、獣医J.ケックのはクナリーラン18番地。

と灯火管制のためにもう裏手にいることができないので、玄関側の「蚊の部屋」に入り込み、トランプでペイシェンスしたり、読書したりして楽しんでいる。

ヒューセン

1943年11月19日

午前10時。私たちはヤップを4人乗せて進入する車に驚かされた。だが、彼らはここにドイツ人のニョニヤ[婦人]が住んでいると聞かされすぐに去った。彼らは家探しをしており、ジエ・ティン・ハムのところへ行き、ホフステーデへ向かい、ファン・リヒテンのところ(ヘックの隣り)もちょっと見たのだ。また、今後の成り行きを見守るのみ。

ヒューセン

1943年11月21日

ジエとホフステーデのところ、そして向かい側に再びヤップが4人見に来た。クナリーラーンは人気あるようだ！

ヒューセン

1943年11月22日

マリオンは下へ向かい税務署に賃金台帳を提出しに行く。12時15分前に1台の車が私たちの敷地の前に止まると、スーがニッポン人が3人踏み段を登って来ると注意しに来た。彼らは中に入ると、ハンズに母親の肖像画について尋ね、家の配置を調べた。そのあと、ホフステーデとジエのところへ。彼らは離れと使用人用の小屋には行かなかった。マリオンは興奮して帰宅したが、これは大した意味を持たないと思っている。使用人用浴室(!)は修理が必要だ。これはハンズがする。トゥカン[職人]は高すぎる。

ヒューセン

1943年11月30日

先週の22日月曜日のヤップは住宅部門の者たちだった。彼らはジャングリにも訪れた。

ヒューセン

1943年12月6日

食事のあと、私たちは庭仕事をして中央の大きな花壇の一部を手入れした。土はまだ湿っているので裸足でだ。真ん中に鉢植えのペゴニア、その回りにハンスがノイベルガー医師の庭から採って来たセンジュギクを帯状に。外側はデブのメンドリ⁴⁶を2列に、残りは明日。

ヒューセン

1943年12月16日

ヤップの将校だったらしいが、ドアがノックされた時、私たちはちょうど食卓についていた。彼は、家賃が安すぎるので、遅くとも23日までに私たちは引越しなければならぬと告げに来た。出し抜けにまた何というスサーが！…中略… マリオンと私は寢床へは就かず、聞いたことに気をもんでいた。それでも私たちは落ち着いた気持ちだ。私たちは、助言を求めにハンスとエーリックがルート・ビルケンハウエルへ、マリオン自身はキースベリー夫人へ向かうことに決めた。少年たちはそのため宿題が免除になる。彼らは4時半に下へ行き、6時15分に戻ると、それと同時に、マリオンが出掛けるつもりだ。私たちはルートと彼女の母親の親切な助言にとってもありがたく思う。そして、マリオンが出る。エーリックは、新しい2冊の神話本と表のベランダで気持ちよさそうに横になり、ハンスは、アンドレアス・レリカカのところへ姿を消した。

7時頃に、ゴルフ場から来た自動車が1台止まり、そこからニップがふたり降りて私たちの敷地を歩き出した。彼らが来た目的は、リハット・ルマー[家の下調べ]。カルトとエーリックは、かかる任務を果たし（私はまた使用人用浴室に隠れていた）、「紳士たち」は彼らにとっても感謝していたのだ。エーリックは彼らに説明する要領を得ていて、どこもかしこも、ボチャル・カヤ・ラウト[濡れこぼれる]でジャレック・セカリ[最悪]と。8時にマリオンが非常に興奮した様子で帰宅した。キースベリーが明日彼女と一緒にジュルナタンにある事務所へ行く予定であり、彼はハラヤシ(?) 所長を知っていて、その人が感じいいはずなのだ。

ヒューセン

1943年12月17日

マリオンは8時半に下へ出掛ける。9時にラーピンがルート・ビルケンハウエルの手紙を持って来たが、マリオンは直接そこへ行くつもりであり、そうすれば結果が知れるからだ。…中略… 11

⁴⁶ 日記の作者は、おそらくインドネシアで花壇に多く生育する多肉植物の（アロエ・ベラ）（lidah boeaja）を指してゐる。

時半にこの隣りにふたりの日本人将校を乗せた車が止まり、そしてホフステーデとファン・リヒテンのところへ。そのあと、（およそ1時間後に）去った。1時半頃に、マリオンはフォスマールかレーセマの家への引越を免れないとの悲報とともに帰宅した。家主が彼女を手伝い、クーリーとトラックを手配してくれるらしいが、彼女は出る必要がある。というのは、トゥアン・ニッポン・マウ[日本人様が望んでいる]から。

マリオンがちょうどひと浴びしてすっきりさせた時、この隣りに高官らしい数人が乗った自動車が2台進入してきた。彼らはホフステーデ、トーマス、ジエの家々を称賛して、そのあと姿を消した。3時15分前に私たちは食事し、そのあとしばらく座って話していたら、再びヤップがふたりジエのところに行った。こんな状況が続くと、私たちはヤップに包囲されてしまう。…中略…

そのあと、ジャーネ・モーフがお茶に訪れ、落ち込んだ気分にある私たちを感じ取った。私たちは彼女に気分転換させてもらったし、あつという間に時間がすぎて楽しかった。マリオンはその2軒の家の様子を見るために彼女を途中まで送って行った。フォスマールの家は全くひどく荒れ果てているようで、42ギルダーもするそうだ。レーセマのは30ギルダーなのに。両方の家とも丸見えだし、また狭すぎる。

ヒューセン

1943年12月18日

あまり眠れなかった夜のあとに早く起きた。落ち着かない。9時頃また気分が落ち着いてきて、ここに住み続けられるとの確信を私は抱いたのだ。…中略… ジエの家（17番地）には戸口の錠を取り付けに職人が来る。つまりは、私たちはその家に事実ニッポンのお隣さんを迎えることになるのだ。

10時にイエッティエ・ホフステーデがヒュープと一緒に来る。彼女はカルト-ジャガ⁴⁷に注意された。…中略… 彼女は、現在ズス・エッセルのところ、自分の息子たちと荷物と一緒にひとつの部屋に住み込んでいると私たちに語った。そこでは全部で13人が暮らしている。

ヒューセン

1943年12月20日

マリオンは下に向かい、カンリコーダン[管理公団]でクナリーラーン22A番地の新居の鍵を受け取りに行く。やっぱり引越だ。彼女はある老いた運転手からひどい扱いを受けた。

⁴⁷ 教師ヒューセンの日記には、カルトという名のインドネシア人がふたり出てくる。監視/子守りのカルト-ジャガ(Karto-djaga)と使用人のカルト-ジョンゴス(Karto-djongos)である。

ヒューセン

1943年12月21日

[ヒューセンは、一時的にカランパナス62番地のマリー・スホーンホヴェンのもとに潜伏していた]

マリオンは今日荷造りしなければならない。その他何も起こらないのだろうか？何にもしてあげられなくてとってもやるせない思いがする。午前中は読書したり手芸したり、つまりマリオンのためにベルト（バックルなし）とパンツの後ろ側を彼女に代わって編んでいる。…中略… 朝は結構早く時間が過ぎていくが、マリオンがどうしているか知れたらいいのに。彼女にとってことのほか困難でしょうし、特にクリスマス前の日々には。

ヒューセン

1943年12月22日

それから、マリオンが12月21日（火）と22日（水）の報告に来る。火曜日に、彼女は息子たちと一緒に休まず荷造りし、大いにはかどった。自称スヘッペルスという男の人がやって来て、彼女に何か売物があるか尋ねた。はい、グランドピアノが。そして、彼は22番地の部屋までクーリーと一緒に運搬を手伝うはずだった。マリオンはハンスと彼とともにそこへ向かう。ケースの中にまだたくさんの銀製品があったらしく、それをスヘッペルスも目撃してた。彼のすることが終わると、使用人にいくらかの古紙を求めた。マリオンはクーリー賃金3ギルダーを支払い、彼を帰らせた。しばらくして、ハンスが駆け寄り、「銀がなくなった」。マリオンはひどく驚き、憤慨した。

水曜日の朝に、クナリーラーンでヤップの車のものすごい出入りと騒音がしたが、1時になるまでカンリコーダンから誰も来ず、あるジャワ人と中国人が修理に来るまでだ。でも、それももうまくいかなかったが。25日には完了させなければならないらしい。同じく、ANIEMも彼女を見捨てたのだ。ヤップが18人クナリーラーンに入居するらしい。スマランが突如あらゆるもの中心になるのだろうか？子供たちと使用人とで、彼女はできるだけたくさんの小さなバラを「運び居れた」し、ハンスはカルト - ジャガと一緒に新居に泊まる予定で、明日さらに引越作業が続くのである。マリオンはとても疲れている様子だ。彼女がちょっと立寄ってくれて私はとてもうれしかった。ああ、できたら一緒に運んで手伝いたいのに。

ヒューセン

1943年12月25日

[クナリーローン22A番地の新居で]

マリオンは、それでも大変心地よい居間にしたし、(トランクと木箱の)最大のガラクタは彼女の寝室にしまい、その他余計な家具のガラクタはふたつの小部屋に積み上げ、加えて食器室の中や表には各種ワインの名前がまだ付いているワイン収納棚などの上に置いた。柵なしの表のベランダには、私たちが人目に触れずゆっくりと座っていることができるよう、クリイ[布や竹製の日よけ]で部分的に覆った。ガレージには、まだ自動車(h. 27)が入っていて、マリオンができる限り小部屋に置いたレーセマ夫人の家具がまだたくさん残っている。…中略… 両方のガラクタ部屋には、エバレディーの懐中電燈を使っても私を発見できないよう、下と後部にはって逃げられるように家具が置かれている。マリオンは万全の備えをしたのだ。

ヒューセン

1943年12月26日

クリスマスの翌日。他の人よりもあまり早く起きなかったが、それでもマリオンよりは早く、家中を歩き回った。この上なく魅力的で、全ての角度からの見晴らしがスペースを持っていてすばらしい。そのあと、マリオンが起きたらコーヒーをいれ、家を詳しく偵察した。…中略… マリオンは2管区を転出し、4管区に転入を届出しなければならない。このことを彼女は明日する予定だ。

ヒューセン

1944年1月1日

午後に雨が降ることを強く望んでいた。だんだん暗くなり、日暮れに降り始めた。突然、食事に明かりが消え、30分間そこらじゅうが真っ暗に。そしたら激しく降り出し、10時頃に、居間、マリオンの寝室、そして浴室がずぶ濡れになった。私たちは椅子やベッドを移動させたが、あとは雨が上がるのを願うのみだった。でも私たちの草花には最高なのだ。

ヒューセン

1944年1月23日

エーリックが興奮する話を持って帰宅した。彼は前に住んでいた家のニップに呼ばれ、庭の後ろに何を埋めたか説明させられた（雄猫のミースエ！）。家は空っぽで味気なく、裏の鉢植えの植物はみんななくなっていたし、アセム[タマリンド]がすっかり刈られていたのを彼はすぐに気づき、マリオンを少し悲しい気持ちにさせた。彼女にとってはたくさんの思い出があるし、何年もいたところ大切に手入れしてきたのだから。待つのはひどく長くとも、気落ちしないようにがんばろう！

ヒューセン

1944年1月26日

マリオンはモーフ一家を訪問する。彼女は時々外出できて、私はかえってうれしく思うのだ。この待つことに殺される思いだ。長すぎる。2時になってやっと、彼女が12年間愛情こめて手入れしてきたのに荒れ果てた彼女の庭から戻ったのであった。前側の針葉樹は一部伐採され、残っているのは丸い先端だけで、パラ[ナツメグの木]もだ。見事なブーゲンビレアもなくなったし、植木鉢もないし、後ろ側は、鉢植えのヤシが全部消え失せたし、ボモンチアは刈られ、アセムは一部なくなった等々。家の回りは丸っきり空っぽでみすぼらしい！彼女は今にも泣き出しそうだった。…中略…

夜10時に、突如誰かが自転車で敷地内に立っていた（！）アンドレアス・レリカカだったようで、エヴェースの家にはニップが今日から入居し、彼はそこから出なければならないことを告げに来た。マリオンは、フォスマールのところに住まわせてもらえるか申し出たらどうかと彼に助言した。そこはさほどラクー[人気]ありそうでないことから。…中略… アンドレアス・レリカカはエヴェースのところ（4番地）をまだ出る必要がない。ニップの家具が間違っってそこに搬入されたのである。その家具は私たちの以前の家（19番地）に運ばれなければならなかった。

ヒューセン

1944年1月28日

私たちの隣りの家（ファン・リヒテン）に日よけが取り付けられた。つまり、私たちは、今日明日にも日本人のお隣りさんを予期しているのだ。私の窓の日よけは、のぞき見を考えて食堂の方に移し取り付けられる。

ヒューセン

1944年2月19日

(カランパナスの) 孤児の少女たちは、向かい側へ引越さなければならない。なぜならば、デ・ラート一家は不意に、隣接した家々とともに立ち退かねばならないからだ。…中略… ジエの家はもう鉄条網が張られている。急いでいるようだ。でも、何のために？

ヒューセン

1944年2月26日

朝食後、私たちは、日本人の上役を代表して名前リスト、同じく使用人のもの、のことで尋ねに来たクナリーラーン19番地（以前の家）のジョンゴスに驚かされた。マリオンがこれを与えた。彼は去った。10分後、彼が戻って来た。シンニョ[印欧人少年]も書き入れなければならないのだ。10分後に再び戻って来た。全員の住所が加えて必要で、ニョニャ[奥様]、スディリ[自分]でちょっと出向いてくれないかと。マリオンは行き、すっかり驚嘆して帰宅した。庭園はすっかり変わってしまい、それはことばでは言い表せないほど。家の中は、ほとんどの壁紙と廊下の羽目板がなくなり、全部空っぽで味気ない！電話口にマストホフ夫人が出たが、このような場合には、ジョンゴスがリストをすでに得ていて、全てに異常なしということ。このジョンゴス（オルデンボルフ家の以前いたジョンゴス）によると、トゥアン(ケンペ)[憲兵隊の旦那]自身が今日の午後か明日に来るとのことだ。つまり、ブアット・プリックサ・ルマー[家宅捜査のため]！ どうしてまた？マリオンは、ジャーネ・モーフのところも同じようなことがあったと言った。だから、ほっとさせてはくれる。

午後にジャーネが早くも到着した。天候は、激しい嵐のあと、そして雨、少しは回復したので彼女はあえて外に出て来た。彼女が来た時、ちょうど目隠しされた数台のバスが通過した。それらはジエの家のそばを進入していった。あとで、1台ずつ目隠しなしで戻って来た。女性と子供たち、褐色とブロンド、トランクを屋根に載せて。たくさんのニップの自動車が通りを往復していた。これら女性たちは一体どこから来たのだろうか？いろいろな慰安所に向けた志願者であると私たちは推測する。⁴⁸

⁴⁸ スマラン及びその近郊で慰安婦が不足していたため、1944年初頭、日本人は軍専用の慰安所で売春婦として働かせるために収容所から少女や女性を連れ出した。その目的で彼らは各地の収容所を訪れた。アンバラワ第六収容所では9人の若い少女が、アンバラワ第九収容所からは同じく9人、スマランのハルマヘラ収容所からは8人の少女たちが連れ出された。少女たちは何が待ちうけているか知らなかった。スマランのグダガン収容所では、日本人は志願者グループで満足としなければならなかった。少なくとも36人の少女と女性からなるこのグループは、1944年2月26日に、スマランのクナリーラーンの日本軍将校用慰安所「将校倶楽部」に集められた。この倶楽部は、ジエ・ティン・ハムの家にあったとおもわれる。そこでは、少女や女性たちは日本語で作成された承諾書にサインしなければならなかった。がさつな身体検査のあと、彼女たちは4ヶ所の慰安所に分けられた。慰安所は、1944年4月の最後の週に、東京の陸軍省の小田島大佐が強制収容所を視察したことがきっかけとなり、第16軍軍司令部の命令で閉鎖された。これらの少女や女

ヒューセン

1944年3月5日

ジェ・ティン・ハムのところに日本人の軍人がいる。やっぱり、そこは飲食店なのかしら？

ヒューセン

1944年3月8日

コーヒーを飲んだあと、（噂では3月10日前に外国人女性全員が収容所に入れられるということで）私は下へ自転車を走らせ、ペテロンガンの人々をびっくりさせる。⁴⁹ あとで、カルト・ジャガとハンスが、私のバランを2回に分けて運ぶので、万事オーケーだ。彼女たちが居残ることができるならば！この状況は危ない。というのは、リーン・スミスおばあちゃんは半分もうろくしているし、口をつぐんでいられないし、ヘルダの娘の幼いヘンダは2歳半で、とても強情で利口な子だからだ！鏡台の中にあるバランはまだ大丈夫だ。2着の新しいオーバーオールはまだあるし、2枚のブラウス、ショーツとたくさんのスカートも。しばらくの間は何とかなりそうだ。…中略… 午前中、戸棚を少し整理し、より分けた。それで疲れたけれど、いやな日々を子供たちとだけしているマリオンのことがとても心配になった。彼女らのもとに早く帰れますように。

ヒューセン

1944年3月9日

夜ぐっすり眠ったあと、続けて全部を片付け始めた。今それも終わり、玄関の間に座り、待ち、そして待つのだ！ハンスがバランと良いニュースを私にもたらししてくれることを半分だけ期待している。スミスおばあちゃんは元気にしているし、利口で何でも覚えているヘンダもだ。エリックが自転車の後ろに包みを載せて到着した時に、ちょうど私はトランクの中を調べようとしていたところだった。絵画だ。これらは適当なトランクを何度も試してから鏡台に入れる。上ではまだ何も「起こって」いなく、彼女たちはまだ相変わらず何も聞いていない。何と緊張することか！ここは長くはいられない。しかし、私はまだ希望を抱いている！

性たちは、5月初め、母親とともにボイテンブルグのコタ・パリス収容所に収容され、11月初旬からはクラマツト収容所（バタビア）に収容された。（Mariska Heijmans-Van Bruggen, *De Japanse bezetting in dagboeken. Vrouwenkamp Ambarawa 6* (Amsterdam 2001), 21-22, 353-356; Elly Touwen-Bouwsmma, 'Japanse legerprostitutie in Nederlands-Indië 1942-1945' : N.D.J. Barnouw 他., *Oorlogsdocumentatie '40-'45 Vijfde jaarboek van het Rijksinstituut voor Oorlogsdocumentatie* (Zutphen 1994), 31-45; L. van Poelgeest, 'Oosters stille dwang. Tewerkgesteld in de Japanse bordelen van Nederlands-Indië ; *ICODO-info*, november 1993, jrg. 10, nr.3; 13-21

⁴⁹ マリオン・ウルフと子供たちも多分強制収容されてしまうため、このことを憂慮して、教師ヒューセンは、数日間の滞在予定でペテロンガン13番地の叔母リーン・スミスのもとへ向かった。

ヒューセン

1944年3月10日

鏡台のバランを書き留め、靴は全部磨いた。そのあとは、また待つのみ。昨夜はとても心地よい天候だった。私は緊張するおもいで少年たちを待っている。そのひとりがあとで来てくれることを望みつつ。リーン・スミスおばあちゃんはまったくもうろくしているし、おまけに全然耳が聞こえないのだ。何でもごちゃごちゃにする。今朝、三人のバブそれぞれに古着をあげた。それで彼女たちは上着を作ってくれるでしょうし、1ヶ月に4ギルダーや3ギルダーを稼いでいるようでは、このような物を買うことができないからである。この期間に特別にかかった費用のために、ヘルダに10ギルダーあげた。…中略… そして今は、上、チャンディからの知らせを密かに願っている。全てそこではまだ以前のままであるように思われる。早く何かわかればいいのだが。

6時から7時半にわたり、ひっきりなしに雨が降っている。要するに、上からの知らせが来るチャンスはないということだ。マリオンが朝早く誰かを送り出してくれればいいのだが。彼女のことが心配だ。彼女はたくましいが、無鉄砲な人でないし、こんなではもっと大変になる。

ヒューセン

1944年3月12日

マリオンから何も知らせなし。ペテロンガンのおばあちゃんのところの状況は耐えがたい。いらした様子で私のところへ来たヘルダは、今、本気でとりかかろうとしている。結果：彼女が出かけ、マリオンに全て説明する。ルートが慰めに来てくれたが、同じく何の解決策を知らない。彼女がちょうど去ろうとしたら、ヘルダが戻って来た。…中略… 4時半頃、私は自転車で立ち去る。するとマリオンが来た。彼女はとても混乱しているように見える。幸いにも私が来ることを嫌がっていない。彼女は私以上にもっと混乱した時を過ごしたのだった。待つのみ、そしてまた待つ！そして、今やっと非常に慰めになることを聞いた。どこも一杯なので、彼女はしばらくの間立ち退く必要がないのだ。再び私たちは希望を抱くのである。夕方、一緒にあれやこれやおしゃべりした。同じように彼女も私がいなくて寂しく思ったのだ。

ヒューセン

1944年3月15日

夜、10時半 (N.T.) に出て、旧市街を通り抜け新しいマイホームへ。⁵⁰ こんなみじめさにもかかわらず、私はあまりよく知らない道を自転車ですべて楽しんで。そして、その住所に到着すると、すぐに中へ入れてくれた。ファン・ブラムセンと彼の奥さんはとても感じよさそうで、すでに私が来るのを勘定にいれてたようだ。彼はジャーナリストで、⁵¹ 髭をはやしている (カモフラージュ)。印人の彼女には7ヶ月の赤ちゃんがいる。長椅子、小さなテーブルと椅子が置いてあるその小部屋はとても愛らしい。蚊帳は持参した。私は1ヵ月分40ギルダーを前払いするので、これはもう済んでいる。私が出くわしたことは、階段を昇っていった時に「これも終わりが来る」の格言だった。これと同じ格言が、マリオンの以前の家の廊下に、そしてその次の家では長椅子の上に掛かっていたことは、実に象徴的だ。

私たちは、2.6 x 2.4メートルの小部屋を整え始める。スプリングの悪い長椅子と私の蚊帳、スカート用のクギを壁に、すてきなテーブル掛けのテーブル、椅子2脚。私がとてもうれしく感じている新しい滞在場所。格子付きの大きな窓、その前面に日よけ、そして古い建物と家々の屋根や上階の見晴らしつきだ。私たちはここ「パリの屋根の下」で暮らしている。ズワリュー通り、あるいは現在のプルウォ?⁵² は、オーレンロート⁵² のあるヘーレン通りの裏通りである。元ジャワ銀行の建物はニップの電話局あるいは郵便局である。…中略… 一日が静かにすぎっていく。まだなじまなければならないが、かなり上々だ。

ヒューセン

1944年3月21日

壊れたスプリングの長椅子の代わりに本物のベッドをもらった。完全なる改善。寝心地が良く、今度はぐっすり眠れたほどだ。調理したり、洗濯などをやる (後ろの) バルコニーからは、屋根ばかりが見える。大半が空家のだ。その間の左側のごく小さい空地には、ファン・ブラムセンが苦労して植えたパパイヤの木々が少しでも太陽を浴びようと、ものすごく高く伸び立っている。同じく左側に、もっとスペースがあるところだが、家屋に押しつけられてやせたイチジクの木が立っており、その先に1本のパパイヤの木が、ヤッペンか誰かが中で仕事をしているふたつの窓を覆っている。三つの屋根に沿って、大通りに交差する道にある四つ目の屋根が見える。ここも

⁵⁰ 教師ヒューセンは、ズワリュー通り沿いのジャワ銀行の旧オフィスの上にある住居へ引越した。マリオンと子供たちは、バンコン収容所に抑留されることになったため、ヒューセンは彼女たちのもとに以後同居することができなかった。「日本人による措置と規定」ヒューセンの日記 1944年3月14日、15日参照。

⁵¹ ファン・ブラムセンは、スマラン新聞編集部の夜間編集者として従事していた。(NIOD, 蘭印日記コレクション; J.J.Huussenの日記 1944年4月15日)

⁵² オーレンロート (Ohlenroth) は、スマランのヘーレン通り11番地の有名な宝石・時計店の名称。

ヤップがいる。私たちのバルコニーのすぐ前に閉まったよろい戸の正面がそびえ立っている元ジャワ銀行の一部、また、この隣りと下にヤップの家々が。

ヒューセン

1944年3月23日

トイレと浴室がいつもずぶ濡れでかなり汚いので、木靴を1足(0.15ギルダ)買って来てもらった。また、後ろのバルコニーではいつも汚れ水が流れ出し、足元を注意していないとここでも時々足を滑らせる。今日の午後には洗濯物(主にオムツ)と調理道具のガラクタの間で「日光浴」をする。でも、何と心地よくさせてくれることか。

ヒューセン

1944年5月1日

私たちにとりいやな日だった！ファン・ブラムセン氏がしばらく不在の時に、ベルが鳴った。それで、奥さんが上に通したニップの紳士がふたり。彼らは家賃とご主人のことを尋ねた。本人は赤ん坊のためにオバトゥ[薬]を取りに行っていることを知らされると、彼らは、彼にジュルナタン27番地まで出向くようにと言った。そこは住宅開発(カンリコーダン)の事務所だ。…中略…

彼はジュルナタン27番地へ行ったが、そのふたりがまだ戻っていなかったため、目的を達成しないで帰った。ファン・ブラムセンは、階下のニップ紳士たちは、赤ん坊にかなり迷惑を受けており、彼に何度も苦情を言ったことがあるので、私たちが追い出したいと願っているのだと憶測している。私は、ただ単に、家賃に関係したことだと思う。明日、彼は再び出向かなければならない。またまた、成り行きを待つのみだ。このような状況は少しも楽しくも安心にもさせてくれない。

ヒューセン

1944年5月2日

事実、私たちは立ち退かねばならない。どうしていいかわからない。家探しに出掛けたファン・ブラムセンは、ペンガポン、他にもふたつの住所に住まいを得ることができるという知らせを持って戻った。難しさは私自身！ふと、ペンガポンが私にとってベストと思った。ファン・ブラムセンは、私が未だバンドンに住む必要がある彼の姉であるヤーネ・ハリエット・ファン・ブラム

センの代わりとしてやり通すことに決めた。俗に、ジェニーおばさんと言われていたように！それで、私たちが言うべきことを素早く暗唱した。ファン・ブラムセン一家は、私を置いておきたいのである。なぜなら、私は支払いをするし、一家は家具以外は何も持っていないからだ。幸いにも、全てが安いし、まだ数ヶ月は私のお金で何とかなる。

ヒューセン

1944年5月3日

私の「弟」ルーウイ、今、お互いに呼名を使わなければならないのだが、と「義理の姉」メラは引越のことでけんかしている。幼子はその運命に任せられるのだ。

ヒューセン

1944年5月6日

8時頃に引越が始まった。私のことを何も知らない見ず知らずの人々がいることで、ほとんど自由にいられるペンガボンへ向けてメラと子供を乗せた荷車のあとを自転車で行く。私たちは全く空っぽの家に着いた。食堂に古い長椅子がひとつ、ぐらつく小さなテーブルと同じような椅子3脚だけ。ルーウイとメラは玄関の間に暮らす。私はQ.の長女のいる部屋で寝起きし、Q.家のほかの一員は食堂の床の上で寝る。到着した時、私は濃い褐色の肌をした、きゃしゃな女性が数人の子供と家の中にいるのを見た。そして、私たちは彼女目がけて歩み寄った。私は奥さんの義理の姉ファン・ブラムセンとして自己紹介した。ここに事実、テルナテ島出身と思われるQ.夫人が私の目の前にいる。彼女は貧相だが、快活で生意気なまなざしをしている。メラは丸でQ.夫人が存在しないように扱っている。つまり、この社会層とは比べものにならないと感じているのだ。

私たちはお隣りさんのウィーゲルス一家に寄った。NIS⁵³の従業員である彼は、現在、この会社の多くの者とともに逮捕され、ジュルナタン刑務所に監禁されている。バランが到着したら、私はすぐにできるだけたくさんウルス[手配]する。なぜならば、メラがまだいないからだ。そして、やっとルーウイがベチャで到着したが、彼は酔っているようだった。彼はしっかりと立っていることもできず、即座に私のお金を欲しがった。私は引越代を払い、メラに対して「全く、ルーウイは酔いどれね」とつい言ってしまった。これが原因であとでけんかとなったらしい。

ちょうどネルの誕生日だったので、私たちはQ.一家から特別にごちそうをもらった。隣りの家にいる女の子エチェ・メイヤーがQ.一家を訪れた。「ルーウイ」は私も同様にクミチョー[組長]（隣りのカンボン出身のアマト）ところに届出し、ルラ[村長]のもとにも私たちを登

⁵³ Nederlandsch-Indische Spoorwegmaatschappij N.V.（蘭印鉄道会社）の略称。

録するつもりだ。彼は、私の事情と彼の事情に関して、警察とは慎重にやっている。なぜならば、彼のプンダフタラン[登録証]には最新の登録チャプ[スタンプ]が依然押されていないからだ。

ヒューセン

1944年6月4日

今朝、私のベッドの中に南京虫を発見し、全部の物を外に出した。気持ち悪い生き物だ！

ヒューセン

1944年6月19日

ファン・ブラムセンが家探しをしようとしないので、⁵⁴ Q.夫人は飛びぬけ、住所をふたつ持って戻った。ひとつはペンドリカンで、もうひとつはカラン・ビダラのプフィステル宅だ。ルーウイとメラは丸で都合良いことのように振る舞っているが、私の判断では、彼らはここから出る気持ちはなく、全て承諾しないことになろう。

ヒューセン

1944年6月20日

メラは病気を装い、そのため、ルーウイがひとりでペンドリカンへ向かった。彼は、その部屋が狭すぎるのであきらめるとの知らせを持って帰って来た。午後に、彼らは一緒にプフィステル夫人のもとへ行ったが、私たちには何も聞かされていないけれど、これもきっとだめとなるだろう。また、プフィステル夫人は、彼が酒飲みなのでこの家族を入居させたくないとすでにピート・Q.に言ったのだ。要するに、彼のことは皆に知られているのだ。

⁵⁴ 日記の作者らとの大喧嘩のあと、Q.夫人はファン・ブラムセン一家に退去することを申し出た。教師ヒューセンは同居を許され、Q.夫人のもとに下宿することが可能となった。「人間関係」ヒューセンの日記1944年6月15日、16日参照。

ヒューセン

1944年6月26日

ここにはほとんど何も家具がないし、衣類やカーテンが何もないし、食器や陶器が全然なくて、私たちはあるもので間に合わせなければならないけれども、私はQ. 夫人のもとでは、以前いた「下宿屋」よりもっとくつろげるのだ。

ヒューセン

1944年6月30日

引越に関連してファン・ブラムセンのために「グローテ・ハウス」へ行ったピート・Q.によると、新住所はパンデアン・ランベル31番地である。ピートによると、ラッパ氏は初め、ファン・ブラムセンに対して引越のスタンプを押そうとしなかったが、ピートが自分の警察カードを提示するとこれが通用したのだ。しかし、ファン・ブラムセンは是非とも事務局に出頭するよう願われている。それだけに、ファン・ブラムセンはひどい恐怖を抱いている。

ヒューセン

1944年7月1日

ルーウイは5時半頃にQ. 夫人を訪れ、彼が明日引越すことを告げた。彼女が私のことを話し始めた時、彼はこのことに関しては明日話し合うこと、このことがたくさんの問題を持ち込むことであろうと言った。彼は要するにまだ気をもんでいるのだ。

ヒューセン

1944年7月2日

ルーウイは荷造り中である。…中略… バラン、同じく私の木製ベッドとマットレスとその他の所持品が持ち運ばれた。ルーウイはQ. 夫人に対して、このような結果となったことに遺憾の意を表した。そのあと少しおしゃべりして、全てを彼女のやり方にまかせた。これは、まさに私たちが望んでいたことだ。それゆえ、ルーウイは第2ラウンドも負けたことになる。ネルは私のためにマットレスを8ギルダーで、ベッドを4ギルダーで買い求めるので、もうこのことも大丈夫だ。…中略… 私たちが食事を始める頃は、彼はすでに去り、安らぎが再び戻った。この家の中は本当に空っぽになってしまったけれど、結構馴染むものだ。

ヒューセン

1944年7月3日

そんな間にも、ネルと私は、長椅子1脚、マットレス、蚊帳（私用）、チカル[ゴザ]付き長椅子1脚、小さなテーブルひとつ、椅子1脚、ラック1本、トランク1個とともに玄関の間へ移動した。別の寝室には、長椅子1脚、マットレス、木箱ひとつ、ラック1本が、食堂には、テーブルと4脚の椅子、ラック1本が置いてある。これが私たちの家具一式だ。

ヒューセン

1944年8月2日

今朝、私のマットレス全体にスレー[レモンガラス]オイルを塗った。南京虫による被害がますますひどくなったからだ。ベッドの脚も同じように処置した。効果あることを心から願う。

ヒューセン

1944年8月21日

暗くなる頃、プックおばあちゃんとハンナ・ウィーゲルスが私のところでおしゃべりしている時に、Q. 夫人が私の部屋に明かりが灯るようにと食堂の電球を持って来てくれた。ありがたい。

ヒューセン

1944年8月26日

ピート・Q. が、警察官から1ギルダーで買った15ワットの電球を持って来た。私はそれを1.50ギルダーで譲ってもらった。それで、今は室内に明かりがつくのだ。

ヒューセン

1944年9月5日

今日、私の木製ベッドが外に出された。Q. 夫人の甥ヤーピーがナイフと熱湯を使って大量の南京虫を殺したあと、私は灯油をそこにまき散らした。これが効果を示すことを願う。プックおばあ

ちゃんからアルコールの残りをもらい、これを使ってマットレスに散布した。現在、室内には不思議な香りが漂っている。

ヒューセン

1944年10月23日

昨夜は全然眠ることができなかった。その原因の大部分は南京虫の異常発生だ。今朝はそれですぐ作業に取りかかり、大量に殺した。今ではテカル[ゴザ]の中にもいるが、大半が木のベッドにいる。これに対する闘争は絶望的だ。なぜならば、家中にそれがはびこっているし、ほかの人たちはそんなに気にせず結構ぐっすり眠っている。

ヒューセン

1944年12月19日

離れを除いて、家中が5ギルダーで白く塗られた。また、Q. 夫人は食費が足りないと言い張っているのだけれども。

ヒューセン

1945年2月10日

イエチェ・メイヤースが3時にちょっと家に寄る。彼女は事務所の女の子ヨーピー・リュバイ・バウマンのところに泊まりに行くのである。彼女から聞いたのだが、エグベルト・キースベリーがすでに1944年8月7日に突然亡くなってしまい、キースベリー一家、スホーンホヴェン、クナーヴェンは家を明け渡さなければならなかった。なぜなら、その近くにあるヘイホ⁵⁵ 宿舎が原因で将校たちが入居する必要があったためだ。上階には、まだスヘッペルス夫人、デ・ラート一家、オリーヴェー家、レーベルト夫人、リントナー - ペティ夫人が住んでいる。…中略…

ペティ一家（バンコン収容所⁵⁶ 隣のペテロンガン）も立ち退きをくい、現在は旧ソンボックにいる。

⁵⁵ 日本軍に従事する原住民補助兵。

⁵⁶ この収容所は、ハイトハウゼン・フランシスコ会の修道院と修道女用の付属学校内にあった。修道院は2本の道路ペテロンガンとバンコンの間に所在した。ここは、1943年6月から1944年9月まで、婦女子と老人男子を対象に使用された。1944年9月からは、10歳以上の少年と高齢・病気の男子が強制収容された。(H.L.Zwitzer, *Mannen van 10 jaar en ouder. De Jongenskampen Bangkok + Kedoengdjati 1944 - 1945* (Franeker 1995), 91-92 及び Van Dulm 他., 138-139)

ヒューセン

1945年4月6日

多分、あと8人ここへ来る。私の部屋に女性ひとりと子供がふたり。これが実行されず、どこか違うところに収容されればと願う。

ヒューセン

1945年4月9日

八人家族が来るようだ。というのは、私がおそろしく仰天したことに、トランクとふたりの子供を載せた2台のグロバック[荷車]が突然到着したからだ。もし、これが決行されたなら（その模様だけ）、家の中は満杯となる。男子4人と女性ひとり（インドネシア人）がパビリオンに、Q.家が8人、新来者が8人、そして私とで合計22人だ。事実、この人たちは留まるようだ。家賃のことが理由であるらしい。家主がそばにいと、Q.夫人は非常におとなしい。彼女は私の部屋に移り、私は奥の部屋（つまり、私が以前いたところ、ネルと一緒にいたが）に住み、この家族が前側に入ると告げた。私は何でもいいと思ひ移動することにした。この人たちはかなりたくさんのバランを持って来た。一杯置いてある。Q.夫人と家族は今度、食堂と奥に移った。私のところには来たがらなかった。でも明かりをどう手配するか知りたいのだけれど。なぜならば、この部屋には明かりがないからだ。私は食堂の片隅で読書していたが、その他は前側か奥にいた。

ヒューセン

1945年4月10日

新来者である年配の女性は、ヒレブランドといい、既婚の娘はベルンハルトとかいう。残りは子供である。

ヒューセン

1945年4月12日

私の部屋に明かりがついた！食堂の電球が、ハンハルト夫人から借りた接続コードを使って、天井の照明前の真ん中に吊り下がっている。

ヒューセン

1945年5月13日

ルート・ビルケンハウエルは、彼女の家はふたりで住むには大きすぎると見たフドーサン・カンリコーダンにより送られた、幼いふたりの子供連れの女性を同居人に突如迎えことになった。イエット・フォールバイ - ラケット夫人は、明日調整するために再びペテロンガンへ向かう予定だ。

ヒューセン

1945年6月5日

今ちょうど、ヒレブラント一家は、玄関の間の家賃に1ヵ月6ギルダージョーだけで、電気と水に約2.50ギルダージョー支払い、6月分の合計は8.80ギルダージョーとはっきり聞いた。彼女たちは要するに非常に格安に暮らしているのだ。なぜなら、彼女たちは表のベランダや食堂なども使っているからだ。

ヒューセン

1945年6月8日

アラビア人の家主が訪れ、そこでQ.夫人は契約書を持っていないので、家主に賃貸を断られることを恐れている。そしてまた、玄関の間でけんかが。私はどこにも加わらないようにした、Q.夫人の言うことに辛抱強く耳を傾けた。食後に私はお隣のところへ姿を消した。10時帰宅すると、ベルンハルト夫人がQ.夫人と一緒に座って話していた。彼女がゆっくりと家を見つけるといふことで、この件は一段落した。

ヒューセン

1945年6月20日

ヒレブラント夫人は、Q.夫人との話しでは、ここは墓地⁵⁷ が近所にあるため彼女は病気がちとなるので、この家に留まるつもりはないと言った。

⁵⁷ スマラン下町のペンガボン沿いのQ.一家の住居は、欧州人墓地に近接していた。

ヒューセン

1945年7月17日

ヒレブラント夫人はカンポン・バティックに小さな家を借りて、保証金に250ギルダー支払った。

ヒューセン

1945年7月20日

年配のヒレブラント夫人と3人の娘たちは引越中で、ベルンハルト夫人と子供ふたりはここに残る。彼女たちは今日中に出る必要は全然ないのだが、私たちが思うところによると、一番年下の娘ヴォニーが押し通しているようだ。この年配の夫人はまたも病気だ。熱があり、たびたび吐き出し、毛布を二枚重ねた中にいても震えている。リーケは今日ちょうど床離れしたところだし、オイジェニーは回復してまだ3日目だが、引越とは！ベルンハルト夫人は何もできないし、自身もマラリアで混乱しているし、彼女のことは誰も耳を貸さないのだ。

ヒューセン

1945年7月28日

今日、私の部屋とベッドを念入りに大掃除した。でも、できるだけ早く引越できることを願っている。私の神経はひどく張り詰めている。

日本人による措置と規定

バタビア

ハンベル

1942年3月7日

午後7時から午前7時までにわたる夜間外出禁止令が敷かれました。実際にこのことは6時まででも良さそうなのに。というのは、すでに日が昇っているからです。…中略… T. のカチョン[使い走りの少年]が、夫人の自転車で走っていたら、ヤッペンにそれを奪い取られてしまいました。彼らはちよくちよくするのは。「ストップ、降りろ！自転車をここへ置いて歩いて行け」と。彼らは家に侵入し、自動車を取り上げてしまいます。お抱え運転手はそのハンドルを握ります。自転車は車の後部に結ばれます。ある中国人は自分の自転車に彼らの国旗を付けることを強要されて、腹を立てていました。…中略…

今度は少し遅く起きます。なぜなら、ヤッペンの訪問を受ける気がしないからです。また、散歩にはあまり朝早く出ないで、人々が自宅の前でお茶を飲む時間にします。

ハンベル

1942年3月8日

家々の到るところに日本人が自分たちの国旗を貼り付けました。彼らはR. の家に6回訪れたけれども、何も取り上げませんでした。原住民にランパッセン[略奪]させるヤップもいる一方、ほかのヤップに射殺される原住民もいるのを知ってますか。…中略… またまた、パパが在宅しているかと尋ねる落ち着いたかひとりの女性に出会った。市警備隊員である彼女のご主人は強制収容されてしい、そのため帰宅しなかったのです。雑誌「*d' Oriënt*」と「*Sport in beeld*」そして新聞はもう刊行されないと思います。そう、ラジオをかけてごらんください。マレー語だけで、オランダ語で何か放送されると、ものすごい片言で話すのです。彼らは、私たちがブスク[悪い]で、米国はカンピン[ヤギ]のごとく彼らから逃げていると言うのです。

ハンペル

1942年3月11日

「ヤッペン」と言うことは許されず、「ヤパナー」、そして全ての兵士へは、「様」呼びにしなければなりません。上級学校の教師が全員解雇され、その代わりに原住民が採用されました。ひどいです。こんな状況の中に、私たちはおそらくカンポンに住まわせられるのです。だんだん悪化しています。予言によると、あと百日もしくは3年もこれが続くそうです。⁵⁸

ハンペル

1942年3月14日

市警備隊員は全員グロドック⁵⁹ の刑務所へ行かされ、未だに戻って来ません。

ハンペル

1942年3月21日

近頃ここは、もうバタビア中央でなくジャカルタと呼ばれます。

ハンペル

1942年3月24日

今朝早く、ランボッカ[強盗]の斬首を一緒に見に行くかとある人に聞かれました。今日は20人が処されるらしいです。偶然そこを通りがかった人々は見なければなりませんでした。

⁵⁸ 日記の作者は、おそらく12世紀にジャワの王侯ジョヨボヨが行った「ジョヨボヨの予言」を意味している。この予言によると、ジャワ人は誤りを犯した罰として異国人、中でも白い肌の人種によって長い間支配される。最後に来る異国の支配者として、黄色い肌の人種が訪れるが、この支配は長くは続かないであろう。この予言に関する一説によると、トウモロコシが収穫されるまでの間（3ヵ月）、他に、雄鶏の寿命が尽きるまで（約3年）という内容のものがある。この支配を受けたのち、解放され、平和と繁栄が訪れるであろう。

⁵⁹ グロドックは、モーレンフリート東／ガン・リンデテベスに位置した。

ハンペル

1942年3月28日

ここでは今、車がないので、ローラースケートが盛んですが、ヤッペンはそれを良くみていません。⁶⁰ 彼らはすでに何人かの子供を連行したことがあります、効果はないようです。現在、自分たちの子供を捜し歩いている両親が何人かいます。もう2日も捜していますし、第5管区⁶¹の独房にも入れられてませんでした。私は今日2回も迂回しなければなりません。ヤッペンのお偉方が町の中を一巡するようで、彼らが走る道路が封鎖されるのです。…中略… お偉方が買物する時は、彼らは道路全体を封鎖してしまいます。

ハンペル

1942年3月30日

また新しいことが。私たちは明日からニッポン時間を使用しなければなりません。ちょうど今夜の7時ですが、明日の晩のこの時間は8時半です。私は、ひとつの目覚まし時計はそのままにしておいて、他のをニッポン式にするつもりです。それともこれはエープリルフールの冗談なのかしら？

ハンペル

1942年4月17日

彼らは、到るところにプロパガンダの文字AAAをつけています。何の意味かはっきりわかりませんが、私たちは「Amerika, Ampir, Ada ! [アメリカがすぐ近くに]」⁶² …中略… 彼らの太陽神の誕生日らしいので、私たちは全員4月28日、29日、30日に旗を揚げなければなりません。⁶³ …中略…

⁶⁰ 路上でのローラースケートは相当な面倒を引き起こした。続々と出る苦情がきっかけとなり、バタビア市長は、1942年4月20日に大通りと日本人が居住する建物近辺でのローラースケートを禁じた。(Brugmans 他., 138-139)

⁶¹ バタビアは、7つの(警察)管区に分割されていた。第1管区：タンジョンプリオク、第2管区：ペンジャリンガン、第3管区：パサール・バルー、第4管区：コーニングスプレイン、第5管区：ゴンガンディア、第6管区：パラパッタン、第7管区：メースター・コルネリス(バタビア・テレホンガイド 1942)これらの区分は日本軍占領下にも維持された。

⁶² Tiga A (Nippon pemimpin Asia, Nippon pelindoeng Asia, Nippon tjahaja Asia: 三A「アジアの指導者 日本」、 「アジアの母胎 日本」、 「アジアの光 日本」は、占領初期展開された日本軍によるプロパガンダ運動であった。(Brugmans 他., 548)

⁶³ 日本の裕仁天皇の誕生日の天長節は4月29日。

雑誌社と新聞社は、1941年10月8日から1942年3月8日の間に発行した分をヤッペンの検閲所へ提出しなければなりません。カメラマンは撮った写真とネガをそこへ持っていかなくてはなりません。彼らは、海外放送を傍受したため処罰を受けた人々の名前をラジオで読み上げました。ヤッペン政府は子供のために母親がするように私たちの面倒をみるがため、私たちは彼らの言うことを聞かねばならないとか述べたのです！

ハンペル

1942年4月19日

彼らはここで、次の祝日のためにヤッペンの旗ばかり売っていますし、ひとつでも備えている必要があります。でないと万事休す。

ハンペル

1942年4月23日

私たちは、やはり150ギルダーと80ギルダー払わなければならないのです。⁶⁴ 初めは、4月30日までだったのが、今は5月31日までです。ラジオ1台に対して彼らは80ギルダー要求します。要するに、オランダ女性はラジオ1台と同じ値打ちなのです。冷蔵庫、犬や猫に対してもいくらか要求します。私たちは市役所で登録のために届出しなければなりません。ラジオによると、そこは超満員！ 原住民が背後にいて、何枚かの新聞紙が前に付いてるとっても長いテーブルを目にします。…中略… 私たちの国旗を引き渡さなければならず、王室の写真なども。

ハンペル

1942年4月24日

登録に来ない者には厳しい措置を敷くと、彼らは昨日放送していました。私は、混乱することになると思いました。

⁶⁴ 登録の際、男子は150ギルダー、女子は80ギルダー支払う必要があった。（「序」参照）

ハンペル

1942年4月25日

その登録の際には、中国人と何人かの欧州人以外、誰もいませんでした。中国人は店を持っていますが、もし、ヤッペンが来て登録に代金を払ったかと尋ねられた時、まだこれをしていないと全部取り上げられてしまいます。日本人はすでにあらゆる物を非常に安い値段で買っています。私はふと「案内所」とあるのを見かけたのでそこへ行きました。船会社の事務所がもうないために収入が全然ないから、もし、この80ギルダーを払わなかったらどうということになるかそこで尋ねました。そうしたら、どうお金を得るか人々に告げるためにここに座っているのではないという答えが返ってきました。私たちはどのお金でそれを払ったらいいのかと質問したら、「もし、強盗が現われてあなたが『助けて』と叫んだとしたら、家の前にいる警官は、あなたが支払っていない場合には警官はあなたを助ける必要がないのです」との返事をもらったのです。だから、常に証明書を首に付けて歩かなければならないのです。なぜならば、強盗が現われた時、それを探し出す前にすでに殺されてしまっているからです。やっぱり、私は払わないことにします。どうせ奪われてしまうのですからもったいないです。

ハンペル

1942年4月30日

そして、不名誉なことが。ファン・ホイツ像の頭部が切り落とされました。⁶⁵ ゾウの上のその男はなくなり、文字も消されました。これは原住民の仕業だと思います。なぜならば、彼らはその他、クーン像、ミヒールス記念碑のライオンやアチェ記念碑に覆いをかけたからです。⁶⁶ ナッサウ大通りとオランエ大通りも違う名前が付きました。⁶⁷ R. は丸坊主です。彼らは戦争捕虜を全員丸坊主にしました。また、カンポンの原住民もそうしなければなりません。「カンポン」という言葉も今は日本語の名前が付きました。ところで、たくさんのことが今は日本語で話されています。彼らはそれをラジオですごいスピードで放送し、それも1度だけなのです。

⁶⁵ ヨハネス・ベネディクトゥス・ファン・ホイツは、アチェ戦争（1873年 - 1903年）で名高いオランダ人将官であった。彼は1904年10月から1909年12月の間、オランダ領東インド総督を務めた。彼の彫像は、ファン・ホイツ広場に立っていた。

⁶⁶ これら彫像は、ビリック（竹で編んだマット）で覆われた。（L.F. Jansen, *In deze halve gevangenis. Dagboek van mr dr L.F. Jansen, Batavia/Djakarta 1942-1945*. G. Knaap (red.), (Franeker 1988) 154, 398）。ヤン・ピーターズゾーン・クーン（1587年 - 1629年）は、1619年から1623年及び1627年から1629年までの間、総督であった。土着民の町ジャカルタが廃墟に化したのち、がれきの山の上にバタビアと呼ばれる町を再建した。クーンは、東インド列島におけるオランダ支配の生みの親とみなされた。彼の彫像はウォーターロー広場に立っていた。ライオン像は、同じくウォーターロー広場にあった。アンドレアス・ビクトール・ミヒールス（1797年 - 1849年）は、スマトラ西部沿岸の文民・軍人の省知事として有能な指導者であった。彼はバリ島へ遠征中に戦死した。このミヒールス記念碑はウォーターロー広場の南側に立っていた。アチェ戦争（1873年～1903年）を記念したアチェ記念碑は、ウィルヘルミナ公園にあった。

⁶⁷ ナッサウ大通りとオランエ大通りの名前は、それぞれ明治通り、昭和通りに変更された。

一体どう忘れないようにしていただいいのかしら？新聞はマレー語のもの以外発行されていません。…中略…

3日間の強制旗揚げは終わりになりますが、彼らはライフル銃に銃剣を付けて旗が掲げられているか家々を見て回りました。旗は雨の中に立っていたので、色がにじみ出しました。笑いころげてしまいます。みんな長い旗ざおにごく小さい旗を付けています。私たちの旗はほとんど見ることもできませんでした。私たちの三色旗の場合は、どの色が上部にくるのか気を付けなければなりません、この白地に赤い丸は揚げるのが簡単です。幾人かは、最初にこの旗につばきを吐いたと得意げに語りました。私はそれはかなり卑怯だと思います。単に「布きれ」なんだし、ヤップに対してはことのほか恐れているのですから。このような過激な人間とのつきあいは危険になることもあるし、共同生活をとっても乱すのです。…中略…

4月29日には、郵便局と銀行がオープンすると放送されました。実際その通りでした。しかし、私たちには関係ありません。お金を引出すことが許されていないからです。原住民だけが自分のお金を引出せます。郵便は、葉書に、それもマレー語で書かなければなりません。コバとミーに葉書を送りました。ママが文章を作ってくれました。今日、警官がここに来て、私たちが登録したかどうか質問しました。彼によると、私たちはプラナカン[印欧人]なので、支払う必要がないのです。

ハンベル

1942年5月3日

2602とは何の意味か知ってますか？これは私たちの新しい年号です。⁶⁸ 私たちはもう1942年と書いてはならないのです。毎日、何か新しいことがあるのです。…中略… 私はL.のところに行きましたが、そこへも警官が来て純血の者がいるか尋ねました。彼は私に何人であるか質問しました。彼は、私がプラナカン[印欧人]であることを信じようとしませんでした。警官は未だに蘭印の制服を着ていますが、ボタンは普通の白いものです。なぜならば、以前は小さい王冠が付いていましたから。彼は、自分にとってははにかみやであると言い、ポケットの中にそのまま入れておいたボタンを見せました。そのような連中には本当に気を付けなければなりません。私たちが登録のためにお金を一銭も引出せないと聞いた彼は、そのためには当然お金を引出すことができると言いました。その旨届出しなければいけないのです。でも、このことは本当ではありません。私たちはどの銀行にも全然お金がないからです。お偉方が持ち逃げしてしまったと、ヤッペンと言ってます。私は登録証明書を見ました。その人の「国籍」には「印人」となっていました。

⁶⁸ 日本の紀年法では、初代天皇が日本を建国したという神話に従って、西暦紀元前660年から始まる。

ハンペル

1942年5月5日

すでに私たちは登録証明書用に写真を撮ってもらいました。その意志があるとは言えても、お金をどこから得たらいいのかしら？私たちはむしろそのお金を食事に利用した方がいいのです。

ハンペル

1942年5月15日

また、新しいことが。私たちはラジオ受信機を登録させなければなりません。NIROM[オランダ領東インドラジオ放送会社]は、証拠を廃棄してしまったのかしら？そうでない場合は、この登録は奇妙です。その際は無料だと特別に言われています。彼らがすぐにもラジオを奪い取らなければですが。その際、どこで買ったか、いくらしたかを言わなければなりません。

ストリウスウェイク⁶⁹の所長であるV. M. は、彼らが丈夫な男子全員を逮捕し、万一、ヤッペンがこの国から追い立てられれば、人質としてこの一団を連行すると言いました。彼はまた、女性80人が投獄されていると言いました。

ハンペル

1942年5月18日

フレー！それでも何事かが起こったのです。パリンドラのメンバーが逮捕され、インドネシア人の団体が解散させられると言われています。⁷⁰ ヤッペンはほとんど私の好きなタイプの人たち。彼らがこれを行うことを願っていると、私はかねてから言っていました。

⁶⁹ ストリウスウェイクは、パタビアの印刷所通りにあった刑務所の名称。

⁷⁰ 日本軍が進軍した直後、インドネシア民族主義者たちは、ジャワとスマトラの各地で自発的に「解放委員会」を結成した。この委員会は、以前の植民地行政機構を独自の行政組織に変える努力をした。しかし、日本人は、全てに自ら陰で糸を引きこうとし、この新編成の委員会を早急に排除した。1942年3月20日、全ての政治活動は禁止された。インドネシア民族主義政党*Parindora* (パリンドラ) - *Partai Indonesia Raya* 「大インドネシア党」の略称 - は1942年のオランダ領東インドでの最大な政治運動であった。1942年4月、東部ジャワと中部ジャワでパリンドラのメンバーが略奪並びに不和の種をまいた罪で逮捕され、7月末にパリンドラは撤廃された。(Touwen-Bouwsmas, 'Indonesian Nationalists', 8-12, 14, 16)

ハンペル

1942年5月21日

何か驚くほど幼稚なことを知りたいなら、良く聞いてくださいな。私たちの自転車は後輪の泥よけにその一部が白くて上に赤色の丸いガラスが付いています。そのため、私たちは路上で停止させられ、彼らはそこを黒く塗るのです。どうしてかわかりますか？あのね、ヤッペンの旗は白地に赤い丸なのです。今度、それを私たちの自転車の後ろに付けたので、ちょうどお尻の外側にぶら下がっています。このことをヤップは気に入りません。私はこのことで大笑いしてしまいました。今朝、自転車を飛ばし、郵便局の前を通る時、彼らにストップされないようものすごいスピードで走りました。あとどのくらい続くか興味深々です。

ハンペル

1942年5月23日

フー、急いで後輪の泥よけを黒く塗りました。まだ黒く塗っていないと、泥よけ目掛けて撃つヤッペンがいます。ああ、あなたに会って話したいわ！…中略… 今、ラジオで、海外放送を傍受したために3人が射殺されたと伝えています。

ハンペル

1942年5月25日

そう、今日、私は80ギルダー分貧しくなりました。登録させたのです。彼らは私の名前、年齢、何人子供がいるかを尋ねました。どこで生れたか、ジャワにどのくらい居住しているか。このことで半日つぶされてしまいました。「日本政府に対する誠意の宣誓をしますか？」と聞かれました。言うことがはっきりわからないうちに、私は、「そうしざるを得ないでしょ」と言ってしまいました。感じの良い男の人に当たったようです。彼は笑っていましたから。何人かは、どこに夫がいるかと質問されました。私にはこのことを質問しませんでした。

最初、臭いアラブ人や中国人のいる列に1時間も立たされました。窓口で番号をもらうのです。私のは702番。そのあと、長いテーブルに向かいました。自分の番号の順番が来ると、席に着くことができます。カードに記入し、それを持って次のテーブルに進みました。そこで、カードに番号が付けられました。これは21259でした。そして、また次のテーブルへ。そこでは、写真が貼られ指紋が押されました。そして、やっと支払いです。その上に「領収」（もちろんオランダ語でないが）のスタンプが押されて完了。私の国籍は、「ブランダ・プラナカン[印欧人]」となっています。カードの中には登録日が全然記されていません。彼ら自身でもきっと2602年と

付けることを変だと思っているのです。ヒャー、ものすごく私も老けたものです。1915年に生れて、2602年に生存中なのです！

ハンペル

1942年5月27日

私たちは、ロシア艦隊に対する1905年の勝利を記念して、また旗を揚げます。ソ連軍は今度ヤッペンを攻撃すべきではないのかしら？ヤッペンにはあれやこれやと祝うことがあるものです。しかし、彼らは日曜日というものを知りません。なぜならば、彼らはそのような日も同じように熱心に働かなければならないからです。要するに、原住民とオランダ人も。…中略… 昨日、パパは登録しに行き、笑顔で戻りました。「身ごもっている人は先に受け付ける！」と大声で言った人がいました。でも、親切なこと。ひとりの婦人が前に出て言いました。「私は妊娠中です」。その人が言うことには「どこに？」。「ご覧ください」と答えた彼女は先に受け付けてもらえませんでした。敷地内に赤十字の車があり、それらの車は出たり入ったりしています。みんな暑さと長時間待たされて卒倒してしまいます。…中略… パパのある知人は支払いができませんでした。彼らは彼の家を調べに来ました。彼らはお金を探すために戸棚を全部ひっくり返しましたが、何も見つかりませんでした。それで、彼らはラジオを持って行ってしまいました。登録所では、積み重なったラジオ、冷蔵庫、ケロ⁷¹のベッドなど、80ギルダー以上の価値がある全て高価な品物を目にします。

ハンペル

1942年5月30日

ママはやっぱり今日登録しました。なぜならば、彼女がこれを行わないと、彼らは私たちの書類を破棄する可能性があるからです。…中略… 私たちのうち誰一人として日本に対する忠誠を誓いませんでした。ママとR.の場合には、彼らは一枚の書類を置いて、それを読んだか尋ねました。ママたちはそれを読みましたが、宣誓などしませんでした。ママはほぼ三ヶ月後に初めてまた外出したのです。彼女は小さな椅子を持って行きました。幸いにも、彼女は他の人より早くやってもらえました。…中略… 今、彼らはこの登録によって、自由の身にある男子の名前と住所を全部知っているのです。お金がまだ十分あって、全然持っていない人に代わって支払う人々がいます。電気、ガスや水道の修理サービスに電話すると、彼らはまず登録したかを尋ねます。してない場合には、サービスに来てくれないし、来た時にその提示を要求されます。

⁷¹ これは、バタビアのライスワイク通りの移動式ベッドと家具を扱う大型店であった。

ハンペル

1942年6月5日

H. C. 氏をご存知？彼はもうオランダ政府から年金をもらえないので登録料を払えないと言う目的でヤップのところへ行きました。彼はあれやこれやとののしられました。オランダ政府はもうないし、ニッポンのだけです。そして、彼らは、銀器かそのたぐいの物を持っているか調べるために彼の家へ「代表」を送るそうです。もし、彼の奥さんが払えない場合は、ニッポンに仕えるためにチデン通りへ行かされます。V. R. 一家は一銭も払いませんでした。この人たちは、ヤッペンが6月15日から撤退を開始すると主張する占い師を信じているのです。すでに彼らは移住計画に取り組んでいて、それもオーストラリアへだが、残りの者は私たちの面倒を見るためにここに留まり、非常に機嫌を悪くしています。

ハンペル

1942年6月14日

とても卑劣なことだと思います。登録料を払わない場合は、これとあれがなされると初めに言っ
といて、今は5回か10回の分割払いが許され、1年の延期さえできるのです。B. はそれをしました。彼は12人の子持ちなので1回分すら払えないのです。

ハンペル

1942年6月16日

またまた、誰かが射殺されたとの放送がありました。なぜかと言うと、彼は自分の工場のヤッペンの旗を下ろし、切り裂き、踏んでから、自分のさおにあるそんな物を見る気がしないし、ヤッペンは3ヵ月したら去る⁷² と叫んだためです。ヤッペンはこれを「国際法に反する行為」と述べるのです。一体この連中は国際法の何がわかっているのでしょうか？

⁷² 脚注481参照。

ハンペル

1942年6月19日

現在、布告第21号⁷³ が敷かれました。ラジオ受信機は、私たちが海外放送を傍受しないよう封印されます。彼らがこれをどう行うか私は知りません。外からでもラジオ受信機が封印されていることがわかるよう、表のベランダに何か貼る物が与えられます。NIROMは私たちに関する全てのデータを燃やしてしまったので、私たちはラジオ受信機を提出しなければなりません。G.のお父さんは違うところは電池で作動するだけで、私のと全く同じ受信機を持っています。彼の受信機はどうせもう私たちのグダン[物置]で使い物にならなくなっています。私のラジオの番号は359Aで、パパのは359Bです。私の番号はもう付いていますが、間違いはいとも簡単になされるものです。私の受信機を隠し、パパのを封印させます。女中たちには交換されたとはどうせわからないのです。というのは。まるで同じだからです。だから、その方からの裏切り行為はありません。この様にして、私たちは海外放送を聴けるのです。なぜならば、ここのニュースばかり聴いていると、頭がすぐにも狂ってしまいます。

ハンペル

1942年6月24日

今日から6月30日の間に、ラジオを封印させなければなりません。自分で持っていかなければなりません。A. H. はもう彼のを封印させました。周波数のつまみの回りにひもを結び、その端っこが封印されています。ラジオの箱がすぐにも台無しになります。人込みでごったがえしていたため、多数の人々が持っている受信機を落してしまいました。A. K. はそこにニッポン時間の9時半から4時までいました。封印処理自体は10分以内に完了しました。彼らは男子を連行する予定で、そのため、彼らは明らかにラジオが封印される所で見張っているのだと言われています。そして、彼らは男子とラジオを楽に得ることになるのです。

⁷³ ラジオ受信機の登録に関する規定。(Jacob Zwaan, *Nederlands-Indië 1940-1946 II: Japans Intermezzo 9 maart 1942 – 15 augustus 1945*. (Den Haag z.j. [1981]), 22参照)

ハンペル

1942年6月26日

また、新しいことが！ 昨日、欧州人へは居住する特別な地区が指定されると通告されました。彼らはどこへ私たちを押し込めるのでしょうか？ 私たちにはすでに7つのニッポンによる災いがあります。

銀行からお金の引出し不能、給料なし、年金なし

欧州人児童の学校なし

公用語にインドネシア語

登録料の支払い

男子全員を連行

ラジオの封印

欧州人全員をある地区に押し込める布告

どんなことがもっと加わるのでしょうか？…中略… これも体験してみないとわからないわね。彼らは印人の男子たちを釈放しました。その期間はどれだけ？

ハンペル

1942年6月28日

私のラジオが封印されました。でも、私のラジオがどんな姿で戻ってきたか見ないほうがいいでしょう。チナ・ロワック[中国人の古着回収業者]のラジオのほうがまだましです。今日明日にも私は射殺されてしまいます。封印のひとつが取れてしまったのです。残念だけど、どうせ何にも役に立たないのですから。これはまったくの醜態なので、あとで新しいラジオか違う箱を求めようと思います。私の受信機の封印番号は8282です。

ハンペル

1942年7月1日

P. E. は印人の両親を持つ少年ですが、それでも牢屋にまだいます。彼の母親は彼を救うために全力を尽くしましたが、だめでした。彼は、自分も同じように牢屋に入りたくてブランダ[オランダ人]として届出したのだと母親は思っています。彼がそこから出れば、母親は彼をムチで打ちます。外にいられるよう全力を尽くす人もいる一方、そこに入りたがる人もいます。変な世の中ですね！

ハンペル

1942年7月5日

私たちの市長に、バタビアの銀行もしくは団体か何かの元所長だったヤップがなります。私たちにはインドネシア人の市長がいましたが、彼は不十分でした。⁷⁴ ボスを演じることができて素晴らしいと思っていた彼も何と運が悪いこと。ヤッペンはやっぱり奇妙です。彼らはこれとあれがオープンしたと昨日通報しましたが、1ヶ月前にもまったく同じことを伝えたのです。彼らは全部2回オープンするのかしら？

ハンペル

1942年7月8日

B. 夫人がここを訪れ、またたくさんニュースを伝えてくれました。でも、全部本当なのかしら？ 彼女は、ヤップの市長のもとで働いている人と話したのです。それは、彼らがオランダ人全員と一緒に押し込めようとしていることに関してです。その時が来れば、メンテンにです。というのは、そこはずっと欧州人用の居住地だったからです。しかし、今は神父や牧師が貧しい人々を援助するためにいつも訪れますし、実際それが行われており、毎回新しく貧者が加わり大きな出費となっています。現在、それらの神父と牧師は、人々をひとつにまとめないよう忠告しています。なぜならば、そうなると伝染病がすぐにも発生するし、ヤッペンもこれに関しては非常に恐れているからです。そのため、これは棚上げにされるのです。あり得ます。というのは、ラジオでこのことをもう何も伝えてないからです。…中略… 最近連行された男子はアデック棟⁷⁵にいます。そして、あとに残された妻たちは、記入する用紙を受け取ります。滞納家賃はどれだけか？家にまだいくらお金を持っているか？水道、電気、ガスの料金を払ったか？1日に付きいくら支出するか？等々。そのあと、彼らは家宅捜査を行い、もし何か見つければ横取りするので。そのあと何が起こるか、私たちにはわかりません。

⁷⁴ 1942年8月25日、日本人のツカモト・サカエは、1942年3月3日に日本人から市長に任命されたインドネシア人で元助役のH.バギンダ・ダーラン・アブドゥルラーと交代した。解雇理由として「無能力」と発表された。(De Vletter 他., *Batavia/Djakarta/Jakarta. Beeld van een metamorfose* (Purmerend 1997), 53 Brugmans 他., 138-139, 474)

⁷⁵ アデック (Algemeen Delisch Administrateurskantoor [一般デリ管理者事務所]の略称) 収容所は、デリのタバコ栽培農園に向けたクーリーを募集する目的の事務所内にあった。アデックはバタビアの郊外に所在した。

ハンペル

1942年7月11日

ここにひとりの印人少年がいます。いたと言ったほうが適しているかも。なぜならば、彼は死刑を宣告されたからです。彼はラジオの海外放送の報道を速記で記録したのです。これを印刷し、人々に売りました。その売上を彼は貧しい人にあげました。このこと自体は素晴らしいのですが、かなり不注意でした。ヤップがそれを知って彼を逮捕しました。彼らは農園企業にある受信機を廃棄します。なぜならば、全てを封印することは面倒だからです。

ハンペル

1942年7月16日

私は、あなたの両親の婚姻証明書を持っているのでうれしいです。再び、平常通りになったら、パパとママのも欲しいです。戸籍謄本がまだあればですが。どんな羽目になるか全くわからないからです。彼らは、祖父母の出生証明書さえ要求するのです。

ハンペル

1942年7月20日

彼らは戦争税を課すようです。要するに、私たちは、彼らが解放軍をねらう大砲や弾丸に支払うことになるのです。何ということでしょう。でも、私たちは幸いにもこの支払いに該当しません。一銭も持っていないからです。

ハンペル

1942年7月26日

原住民女性の母親を持たない者は自由に歩き回ることを許さずと、今度彼らは言っています。

ハンペル

1942年8月25日

彼らは「家系図病」に取り組んでいる。家族に原住民がいることを証明できる者は、拘束されないのです。中央公文書館⁷⁶ へ行ってごらんください。超満員です。人々はそのために全財産を費やしています。そのあと、市役所へ行ってから、政治情報局、そして最後にケンペイタイのところに行かされるのです。何人かは数ヶ月にわたってこれに携わっています。T. B. は、J. のために数週間忙しくしていました。そして、彼女は彼が出所を許可された通知を得ました。T. は、職業軍人なので当然だめでした。このことは民間人だけなのです。到るところに、すごいものしりの声がしています。彼女の件がこんなに早く行われた理由は、彼女は自分の両親と義父母の出生証明書と婚姻証明書を持っていたからです。そのコピーですが。彼女が持っていなかったものは、ここで生れたり、死んだ人でした。彼女は実の祖父の代までたどりました。彼はドイツ人で印人女性と結婚しました。

ハンペル

1942年8月31日

ピパも「家系図病」にかかっています。でもデータが不足しています。彼の場合は効果ありません。彼の血筋は中国人とドイツ人です。

ハンペル

1942年9月7日

再び、KPM従業員の何人かがストリウスウェイクとアデックから出所しました。D. はストリウスウェイクからです。彼らはチラチャップで働かされました。そこから出ることを残念に思っていたようです。彼らの友人から離れることをですが。また、ヤップのために働くのもずいぶん苦勞することになるでしょう。かわいそうなN. は、平手打ちをうんざりするほど食らっています。…中略… かわいそうなS. は、ヤップのために航行したくなかったためで殴られました。J. R. によれば、彼は傷跡でいっぱいだということです。J. D. B. もブキドーリ刑務所に監禁されていますが、印人少年なのにです。彼は出所を許されていますが、自分は純血種だと言っています。何というくだらない奴。

⁷⁶ モーレンフリート西の中央公文書館では、印欧人のオランダ人の先祖、あるいはインドネシアシ人の先祖を有する家系に関する証明（いわゆる「asal oesoel 家系証明」を行った。（Jansen, 400）

ハンペル

1942年9月10日

町はパニック状態にあります。外の世界はこのことをすでに知っているのでしょうか？ここでは民族の大移動が行われます。ニッポンのために働いている男子を除いた純血の人々は、子供ともに収容所へ入れられます。16歳以上の少年は、男子収容所へ入れられます。60歳以上の男子だけは女子収容所への入所が許されます。ペトジョ…中略…とラーデン・サレーとふたつの収容所が開設されます。⁷⁷ …中略… 全員がその地区から立ち退かねばならず、純血の人々がそこに移り住まわせられます。私はどうなるのでしょうか？人々はすでに食べていくお金がないのに、今後、引越の費用を払わなければなりません。これが実施されないことを望みます。もし全員が拒絶したならば？…中略… 到るところで、女性たちが興奮しながら寄り集まっています。

ハンペル

1942年9月11日

市役所ではひどかったらしいです。9月20日までに、純血のオランダ人、英国人、米国人は届出しなければなりません。そして、10月1日から大移動が始まります。家族単位で部屋がひとつ与えられます。家族が小人数の場合には、ほかの人も加わります。自治体は家具を競売価格の半分、貧しい人には10%引きで買い上げます。ですから、無に等しいのです。今回、収容所に入れられる人は10月1日までに引越さなければなりません。どこへ行かされるのでしょうか？全ての家々はまだいっぱいです。神父と牧師がそれに携わっています。使用人にとってもこれはいやなことです。なぜならば、収容所に連れて行くことは許されていないので、彼らは職を失うことになるからです。トゥカン・ジュワラン[物売り]も入りことはできません。それでまた、お金を稼ぐことができなくなった人がさらに増えます。

ハンペル

1942年9月12日

バタビアの婦人たちは、丸印の男の人を求めています。ニッポンのもとで働いている男子は、丸がひとつ付いている腕章を装着しており、家を明け渡す必要がなく、何人かの女性を保護する目

⁷⁷ バタビアのペトジョ地区は、ジャガ・モニエ通りの蘭印軍元騎兵隊野営地ジャガ・モニエ・キャンプにあった。ラーデン・サレーの反対側には、「クラマツト」と呼ばれた「保護居住区」があった。(De Vletter 他., 70-71)

的で自宅に置くことができます。⁷⁸ 現在、女性たちは男狩りをしています。彼女たちは、お気に入りのペットとしてすばらしい生活を得られるかも知れません。C. T. の話によると、彼女は市役所でそのような女性たちの言うことを聞かなければならないのです。彼女はもう大分うんざりしています。彼女たちは、大き目の部屋を手配してくれと彼女に尋ねるのです。

ハンペル

1942年9月16日

オランダ人全員をボルネオかセレベス島に収容する計画があったことご存じ？しかし、そのためには過大な問題を伴っていました。そこで、彼らは人々を収容所に押し込めるのです。

ハンペル

1942年9月19日

G. G. 夫人[総督の妻チャルダ・ファン・スタルケンボルフ・スタハウエル - マールブルフ夫人]も婦女子収容所へ行かされます。失礼。「収容所」と言うてはいけないのです。居住区なのです。そこでは、夜間外出禁止令が出ます。…中略… 大半の人々は、小さな家々のあるチデン居住区を望んでおり、そうすれば、家族だけで住める可能性がもっとあるからです。一方、ラーデン・サレーでは、古い大きな家なので、他人と共同で暮らさなければならないのです。

ハンペル

1942年10月13日

町は今、まったく死んだようになっています。人々はみんな収容所へ移り、外部の者は中に入ることを許されていません。どの通りにもアンボン人の見張りが立っています。特別要請。特に、土着民でないことと。住居が適さないとして、再び数本の通りまでが引き込まれました。H. はラーン・ウィーヘルトに15人でいます。幸いにも、彼女たちのところには上と下に浴室とトイレがあります。彼女は、部屋を見ず知らずの女性と3歳の子供と一緒に分かち合わなければなりません。ユダヤ人のH. は、暫定的に外で暮らせましたが、もしそうすると、バグダードやシンガポールのユダヤ人とともにユダヤ人収容所へ入れられてしまうので、それを望みませんでした。彼女はオランダ系ユダヤ人です。

⁷⁸ 初期には、幾多の女性が、「保護者」を得て強制収容から免れることに成功した。保護者は、このような女性を同居させていた欧州人男子であった。(Van Velden, 84)

ハンペル

1942年10月15日

毎週60～80の家族が引越します。町は空っぽになります。到るところに、すてきな家に住んでいる原住民がいます。人々の中には、自分の使用人をそこに住まわせています。そうすれば、ヤップに自宅を押収されないからです。（今のところはですが）。

ハンペル

1942年10月19日

今朝、そのようなトトック[純血欧州人]地区を走りました。鉄条網に囲まれて暮らさなければならぬことは全然良い気持ちもしませんし、「ストップ、ここまでで、それ以上はだめ」と、彼らが言っていると思うと。このトトック用の収容所はとても大きいです。一体、印人用の収容所はどのくらいの大きさになるのでしょうか？私たちは、メースター・コルネリスへ押し込められると言われています。アメリカが早く現われることを願うのみ。

ハンペル

1942年10月26日

11月3日に、私たちはアジアでの戦争勃発の最初の誕生日を5日続けて祝います。⁷⁹ その日は12月3日ではなかったかしら？誰もが参加できて、結局彼らが言ったことは、「欧州人もその申し込みができる。しかし、ニッポンは誰が参加できるか言う権利を有するのだ！」もちろん、欧州人は誰一人として参加しません。なぜならば、全員牢屋に入れられているからです。彼らは何と申すのでしょうか？私たちが無愛想であること、関心を示さないこと等々。それを私たちはわかっています。

⁷⁹ 11月3日には、明治天皇の誕生日「明治節」が祝われた。この祝日に際して、スポーツ団体も参加した子供たちの行進が行われた。(Jansen, 66)

ハンペル

1942年10月29日

その引越はもう3週間ずっと続いています。収容所は満杯で、まだ多数のブランダが外にいます。引越の車の様子はすごいのですよ。まさに競技会です。行進みたいです。引越作業員ははくたくたに違いありません。

ハンペル

1942年11月6日

収容所の外は味気なくなりました。路上に乳母車を押す女性を全然見かけません。およそ600の家族を除いて、みんな収容所にいます。

ハンペル

1942年11月25日

近頃は、マレー語で電話しなければなりません。このことはラジオで放送されたのでも新聞で通告されたわけではありません。オランダ語を話ただけですすぐ気付くのです。というのは、その途中で冷たく接続が中断されてしまうのですから。

ハンペル

1942年12月2日

G. 夫人はつい最近退院したばかりですが、トコ・マンパン⁸⁰ に電話しようと思いました。家の者たちはマレー語を話さなければならないとすでに彼女に注意してました。でも商店に対してはそれが不必要とも聞かされてました。そのため彼女はオランダ語で話したのです。しばらくして、電話交換手に名前と住所を聞かれ、彼女はそれに返答しました。そうしたら、自宅にケンペイタイが行く予定と聞かされたのです。彼らが何を行うか、これは単なるおどかしなのかと冷静に成り行きを待つのみです。

⁸⁰ トコ・マンパンは、バタビアのマンパン通り56A番地にあった飲料・デリカテッセン食品・玩具を扱う商社であった。

ハンペル

1942年12月6日

今日から3日間、私たちは太平洋戦争1周年のため旗を揚げなければなりません。今度はサオの高さが指示されました。旗の大きさも同様で、それを特別に家の右側に立てなければいけません。憎たらしいヤッペン！

ハンペル

1942年12月7日

彼らは今、お祭りの真っ最中です。でも、何かを予期しているようです。銃を持った兵士が見回りしています。原住民の子供たちとヤッペンを乗せたトラックがゆっくり走ってきました。何台目かの車にはヤップが乗っていて、ボンネットに機関銃を構えていました。何と楽しいお祭りか！ヤップのもとで働く人たちは、このお祭りへの参加を強制されたのです。その人たちが本当に出席したかどうか確認するために、自分の名前を記入しなければならないノートがどこかに置いてあるのです。そう、そう、聞いて！これは最新ニュースです。明日からラジオでオランダ語のニュースがもう入りません。なぜならば、うぬぼれたオランダ人はマレー語を覚えるために十分時間があつたのだからとか何とか、ほかにも意地悪なことを言っていました。ヤップのみがよろしいのです！

ハンペル

1942年12月8日

ああ、私たちは丸1年戦争の中に暮らしています。私たちを苦境から救い出すために、一体いつアメリカは救助隊を連れて現われるのでしょうか？彼らはここでお祭り騒ぎをし、すばらしいスピーチをしている。彼らは一体どこからそんなことを言う勇気を出しているのだろう。その全てに耳を傾けねばならないのです。彼らによると、1月1日からブランダは誰一人としてオフィスにいられないのです。全てが「デ・ブラウン一族[インドネシア人]」の手に落ちるはずで、その他いろいろとばかげたことを言っていました。…中略… 今日路上にほとんどブランダを見ませんでした。いまいまでも、白人の私は走る場所が制限されていますが、原住民は大丈夫なのです。L.氏は、旗が家の右側に立っていなかったため、呼び出されました。隣りの原住民も同じ間違いをしましたが何も言われませんでした。

ハンペル

1943年1月1日

彼らは、到るところの看板にあるAAAの文字を取り除くことに忙しくしています。このことについての新しいジョークをご存知？オランダ人は原住民に学校を与えたが、もう大分長いことかかっているのに、まだ彼らはAAAきり書けません。わかるかしら？

ハンペル

1943年1月3日

彼らはまた男子たちを連行し、すぐにラジオも持って行きました。収容所へ入らなければならなくても、居場所がない家族がまだ200います。この連行により、400家族が加わることとなります。ということは、彼らにはまた収容所を広げる必要があります。そしたら、誰が立ち退きを受けるのでしょうか？同じく、収容所の近くに住むのもいいものではありません。

ハンペル

1943年1月16日

印人に警告が出されました。彼らは原住民に対して逆らう態度をとります。日本人は期限を決めました。もし私たちが早急に態度を改めない、私達も収容所に入れられてしまいます。その他、アサル・ウスル[家系証明（インドネシア人とわかる）]により釈放された男子はヤップの後ろに整列しなければなりません。収容所へこっそり戻った方がましだと言っています。

ハンペル

1943年2月15日

数日前に、彼らは祝賀の際に演説をしました。⁸¹ 働いている人たちは、最後に「バンザイ」（万歳）と唱えなければなりません。ブランダ[オランダ人]だけでなくインドネシア[インドネシア人]もそれを拒否しました。ガス会社のインドネシア人は、罰として30分間「バンザイ」と唱えなければなりません。彼らは幼い子供同然です。ブランダ（女子と男子）たちは、ケンペイタイへ連行されました。E. 夫人も同行しました。そこから出された時には、彼女たちはも

⁸¹ 天皇即位による日本の建国を祝う2月11日の祝日「紀元節」を指す。

ちろん解雇されることになります。唱えることに応じたほかの人たちに対して彼らは、「君たちは、アメリカが来るかもしれないなど考える必要はないのだ。我々が親分であり、君たちは我々の言うことを行うべし」と言いました。アーメン！

ハンペル

1943年2月27日

私たちはすでに1年近くもヤップの支配下にあります。彼らは3月8日[オランダ領東インド降伏記念]のために、到るところに凱旋門を作っています。こんな時突如、米軍の飛行機が現われることを願うのです。到るところにポスターが貼られています。青い目が描いてあって、その下に「Awat mata moesoeh! [スパイに気を付ける]」と。あるいは、くちびるが。⁸² 宣伝ポスターには、原住民が私たちに高射砲を向けているのがあります。最初の爆弾で彼らはおもらしするのです。

ハンペル

1943年3月7日

E. 夫人は、ガス会社のほかの女子や男子とともに刑務所から戻りました。彼女たちはそこに3週間も入れられていました。何も話すことは許されていません。その女性たちは婦女子収容所に入れられ、男子はアデックへ送られました。…中略… J.P. クーン像が今日取り除かれました。彼らはそれを録画していました。一押しごとに児童がその回りで喝采を送らなければなりません。そういうことをブダック[奴隷]はやりたがるのです。

ハンペル

1943年3月10日

あーあ、それもやっと終わりました！10日間旗を揚げてのお祭り。でも、アメリカはどこにいたのでしょうか？私たちは、その期間中に爆弾が落とされることを、あるいは偵察だけでも行われることを望んでいたのです。強気の人であってさえ、この期間が終わって気を沈めてしまいました。私たちはひどく、ひどく、本当にひどく意気消沈しています。毎回彼らは何か違うことを考え出すのです。援助金が底を尽いています。あと数ヶ月、そして狂った人がさらにたくさん歩き

⁸² これは、「(西側の)敵 (=スパイ) の目」を表現した青い目の図柄で、敵に対する注意を促したものである。くちびるの図柄は、ことばに気を付けるべきことを意味する。

回ります。また、そのあと、ソ連が数カ所で負けたことを聞かされるのです。また、そして、行進を見なければなりません。汚れた戦車かケッテイ馬の不潔で、だらしない装いをした臭いヤッペン。たまに立派な馬にまたがるヤップがひとり。でも、原住民も彼らのことをあまり期待しないほうがいいのです。なぜならば、彼らはその機会があれば、原住民を追い出すでしょうから。町の到るところにポスターが掲げられていて、それが表現するヤップの戦利品は、飛行機240機、自動車6桁の数字、何千人の戦争捕虜、戦車何台等々と。違うポスターでは、アメリカの旗とその後ろに日本の戦艦が。

ハンペル

1943年3月17日

平の兵役義務が施行されると言われています。10軒ごとに応急処置をするEHB0-担当場所となります。加えて、ベチャ[輪タク]の運転手は不平を言います。一方では、誰一人としてブランダを乗せてはならないと言われているし、他方では、解放となればベチャが撲滅されてしまうのです。解放者に自動車がないかのように。しかし、ベチャの運転手はもっともうけることができるでしょう。なぜなら、ヤップからは蹴られるだけですから。

ハンペル

1943年3月29日

ヤップがまた新しいことしています。全部の図書館ではブランダを封じ込めました。彼らが書籍を押収してるとしたら、何とも膨大な財産に結びつくでしょう。かわいそうなV.H.氏。もう彼は読書できません。というのは、私がいつも彼のために本を貸出してもらっていたからです。今、良いことといえば？ 原住民の血が片親にある男子は強制収容所を出所できるのです。以前は、両親にそれがなければなりませんでした。しかし、登録料150ギルダーを支払わなければいけません。今度また、純血人用の場所が空いたようです。しかし、何もかもまったく奇妙で、あれこれと毎回変わるのです。父方の身分が認められるのです。父親が純血で、母親はプラナカンあるいは印人。母親の肌と同じ色であったら、純血の人と同じように腕章を着けて歩かなければなりません。

ハンペル

1943年4月13日

ユダヤ人迫害がここでも始まったことをもう書いたかしら？⁸³ ヤップによると、ユダヤ人は卑劣なのです。彼らは違う国籍を届出します。実際に彼らはユダヤ人であっても、オランダ、英国、ドイツ、フランス等々と言うのです。ヤップによると、彼らはユダヤ国籍だと言わなければならないのです。私たちだって、ブランダであると言うのですけれど。しかし、ヤップはブランダ、ブランダ・インド[混血オランダ人]、ブランダ・プラナカンとの間で差をつけるのです。⁸⁴ 私たちは再登録しなければならなく、夫のことを全て言わなければなりません。

ハンペル

1943年4月20日

最近とても静かです。もしブランダを目にすることがあると、その人は右腕に赤いブランダ用の腕章を着けています。ヤップのもとで働いている人は、ヤッペン労働の腕章を左腕に着けています。両腕に着けている場合には何ともいただけません。ブランダ・インドは何を着けるのでしょうか？彼らは今度、プラナカンと結婚したプラナカンと、ブランダと結婚したプラナカンとの間の違いを付けようとしています。

ハンペル

1943年4月22日

全てのブランダ・プラナカンは、アサル・ウスル[家系証明]を記述させなければなりません。でも、私たちにとってはまだ余裕があります。というのは、騒ぎになるようだからです。最初に、各種の書類を取り寄せるために下町にある地方裁判所へ行かなければなりません。このことは1人に付き1ギルダーします。そのあと、作成してもらうために公文書館へ行かなければならず、

⁸³ 1943年4月初め、憲兵隊の高官がバタビアで記者会見した。彼は、アメリカとイギリスの政策は、ユダヤ人により決定されたこと、ジャワにも隠れ潜むユダヤ人がいると論じた。1943年4月5日に、バタビア発行の日本人編集長がいるマレー語の日刊紙「Asia Raya」上で、ユダヤ人は追放されなければならないとする非常に反ユダヤ人的な記事が掲載された。この記事では、ユダヤ人は詐欺師でアメリカの同志であるとされた。スラバヤとバンドンのインドネシア語の日刊紙も同様に反ユダヤ主義の記事を載せた。1943年8月とそれ以降にわたり、これまで拘束されていなかったドイツ系とイラク系のユダヤ人が強制収容された。(L. de Jong, *Het koninkrijk der Nederlanden in de Tweede Wereldoorlog 11b, Nederlands-Indië II* (Leiden 1985) tweede helft, 852-853 Zwaan 106)

⁸⁴ ブランダ・インドとブランダ・プラナカンとの違いを示す根拠は明らかでない。おそらく、ブランダ・インドはオランダ人とインドネシア人の両親を持つ人を意味し、ブランダ・プラナカンは印欧人の両親からの子供であるとおもわれる。

これは0.75ギルダーかかります。そこでは数人だけでこの仕事をしています。現在、そこにはヤップがひとりいるので全然おもしろくありません。彼らは偽造のアサル・ウスル[家系証明]が発行されたことを発見しました。

ハンペル

1943年4月24日

死んだヤッペンを追悼！私たちはまた旗を掲げなければなりませんでした。9時にサイレンが鳴りました。全ての通行がストップされ、しばし黙祷しなければなりませんでした。幸いにも、雨が降っていませんでした。また、昨日は非番の日でした。そして、今またヤップのために。ああ、彼らはお祭りのしどうしです。旗は4月29日まで立ててないといけません。4月29日は、テン・ノー・ヘイカ⁸⁵ とか何とか呼ばれる奴の誕生日です。去年と同じように、戦争捕虜が釈放されるとの噂が広まっています。あり得るかもしれませんが、彼らはここでは相変わらず民間人を強制収容しているのです。どうなっているのかしら？

ハンペル

1943年6月4日

今日、私は毎週のお客さんをふたり失ってしまいました。夫たちは解雇され強制収容されました。そして妻たちは収容所に入れられます。この状態が続く様子です。ヤップはブランダに強い恨みをいただいています。収容所の外で暮らすための通告が全て撤回されました。今後、義理の兄弟のもとに同居することはできません。

ハンペル

1943年6月21日

一体、プラナカンはどうなるのでしょうか？父親は純血、母親はプラナカンか原住民：子供たちは純血、それでも彼らは収容所へ行かなければならず、仕事も与えられないのです。ブランダと結婚した人も収容所へ行かなければなりません。またまた、およそ800の家族が場所もないのに収容所へ押し詰められます。現在、彼らは自宅に監禁され、外出を許されていません。

⁸⁵ 日本の裕仁天皇の称号を示す天皇陛下のこと。

この状況はさらに悪化しています。オランダ人はすでにみんな収容所にいるため、彼らは、オランダ系でないユダヤ人も逮捕しています。今度は、あらゆる国籍を持ったユダヤ人の番です。

ハンペル

1943年6月23日

区長が家々を回り、水と砂を用意してガラス製のかわらを取り除き、防空壕を建設しなければならぬと言っています。何かを予期しているのでしょうか？

ハンペル

1943年7月1日

ヤップは15歳の少年たちを連行するよう要請しました。また、アサル・ウスル[家系証明]ももう通用しません。というのは、白人で金髪の方は全員鉄条網の中に入れられるからです。

ハンペル

1943年7月3日

ラジオが改めて封印されなければなりません。誰も受信機を開くことができないよう、そして傍受できなくするために、彼らの考えで、今度は後ろに付けられています。

ハンペル

1943年7月9日

あーあ、まったく何たるお祭りだったことでしょう。何がしかのヤップのお偉方がここへ視察に訪れ、すぐまた去りました。⁸⁶ クマヨラン飛行場から総督の宮殿までの道路は、学童やさまざまな人々で一杯でした。新聞には、何千人かの人々が沿道にいたそうです。あり得ます。全員参加しなければならなかったし、それも早朝から午後遅くまで。参加者は食費として5セントもらいましたが、病人のようになって帰宅しました。到るところの道路が再び通行止めだったり等々。

⁸⁶ 日本から東条首相が、1943年7月7日から10日にわたりジャワ島を訪問した。

ハンペル

1943年9月26日

インドネシア人は静かなお正月⁸⁷を望んでおり、そのためにブランダは全員引きこもっている必要があるのです。彼らはかなり急いでいるようです。私はまた多数のお客を失ってしまいました。東になって出て行くのです。この人たちは労働キャンプ、つまりクラマツトへ行かされます。彼女たちは全部持って行くことを許されています。何とご親切な！でも、一家族当たりひと部屋だけです。結局、全てあとに残さなければなりません。また、家具を売ってはなりません。鍵はPIDへ渡さなければなりません。オランダ貿易会社の数人は明日からそのキャンプへ入ります。

ハンペル

1943年10月13日

私たちは、またまた登録手続中です。彼らは何かやることがないと気に食わないようです。私たちは何十もの空欄がある縦1メートル横50センチのリストに記入させられます。家系図全体を調べるのです。また、ひとりの人物に関する縦50センチ横25センチのリストも。見れば見るほど、頭がおかしくなります。彼らには何も理解できないでしょうに。なぜならば、これは高地マレー語であるし、同じことば使いで記入しなければならぬからです。政府はすでに何千人ものプラナカン⁸⁸を数えたし、ボーガールトは、その援助活動に2千人さらに増やしました。⁸⁸ おやおや、どうなっているのでしょうか？「東洋系外国人」⁸⁹も今度から援助の対象となります。

ハンペル

1943年10月13日

ブランダ・インドの子供は今度、インドネシア人と一緒にの学校へ行かれます。誰もこれをしません。もちろん、彼らは何か理由を調べ上げるでしょうが。でも、人生は本当に楽なことではありません。

⁸⁷ インドネシアの正月は、断食終了を祝うイスラム教の祭りルバランである。

⁸⁸ A.Th. ボーガールトは、1943年12月までパタビア市の援護機関GESC (Gemmentelijk Europees Steuncomité 地方自治体欧州人援護委員会)の会長であった。この組織の名称は、1943年5月にPertoeloengan Orang Blanda-Indo Miskin、略称POBIM (貧困印欧人への援助)と改称させられた。1943年末、受給者数は約1万7千人を記録し、これは市内の印欧人全体の80%であった。

⁸⁹ オランダ領東インドの住民は、法的には、ヨーロッパ人、「原住民」(インドネシア人)、そしていわゆる「東洋系外国人」(中国人、アラビア人、マレー人、英領インド人等)と3つのグループで構成されていた。

ハンペル

1943年10月19日

国民参議会がにぎやかに開かれた。⁹⁰ ヘルトーク公園から総督の宮殿まで、インドネシア人が木製の銃を携えて立っていました。私は、彼らがちょうど「気を付け」をしている最中に間をぬって走りました。わめき声で神経のけいれんを起こしてしまいました。

ハンペル

1943年10月21日

今日、彼らはユダヤ人女性を連行し、列車に押し込めました。行く先は誰も知りません。みんな何でも知っているのに、どうもおかしい！昨日彼女たちは小さなトランクを持ってどこそこへ行き、家は現状ののままでおくようにとの通告を受けました。

ハンペル

1943年10月22日

今日から灯火管制が始まりました。いつまで続くかわかりません。少しも楽しくない。スラバヤではもう2年間も灯火管制があるそうです。本当かどうか知りませんが。サイレンは鳴りません。というのは、それが鳴ったら本物なのですから。トントン [信号盤の音] と午前中は赤い旗に注意しなければなりませんし、そのあとは誰かがメガホンを持って走り回ります。私はすでに2回も停車しなければなりませんでした。町の半分が通行できて、他の半分は停車してました。彼らは防空壕をどんどん作っている。彼らは、私たちが自分で前側の敷地に作るべきことを言いに、私たちのところへは来ませんでした。そして公共「塹壕」掘り！電気の小屋が立っているところはどこも、掘っている最中です。ショートには最適！

ハンペル

1943年10月30日

バンザイ。また書類が増えました。何ヶ月毎の再登録でその都度、出向いたことを示す書類が一枚加わります。こんな書類用の本箱を自転車の上に作ろうと思います。

⁹⁰ スカルノを議長とした「中央参議院」を意味する。（脚注227参照）。この諮問機関は、元国民参議会の建物に所在した。

ハンペル

1943年11月9日

また、ブランダ・プラナカン用の新しい張り紙があります。彼らは今度、インドネシア・プラナカン [混血のインドネシア人] と呼ばれます。彼らはインドネシア人の後ろに整列しなければならず、要するにヤップの後ろでもありますが、ヤップは逸脱した印人をやさしく扱うようです。そして、こんなことも書いてあります。「プラナカンであり、オランダ人だと自称し、祖国インドネシアのために戦うと言うオランダ人」。そうよ、ヤップを追い払うため、ヤップとともにではないのです！

ハンペル

1943年11月18日

まだ外に住むブランダは、その者のヤップ班長のもとへ出向くようにと通告を受けました。彼らは空襲警報の際にはどうしたら良いかを教えるのです。お茶とお菓子を出してくれる班長がいれば、殴る班長もいるのです。

ハンペル

1943年12月1日

私たちは10日間旗を揚げなければなりません。到るところに、「Kita moesti menang [我々は絶対に勝利する]」、「Antjoerkanlah, moesoeh kita [我々の敵を壊滅せよ]」等々と書かれた凱旋門が立っています。また、市内を走るのも愉快ではありません。ここは通行止めであそこは通過してはならないと。

ハンペル

1943年12月10日

私たちは、12月8日（宣戦布告記念日）に、ラジオを通してものすごいのしりを聴かされました。アメリカとイングリシス [英国] を壊滅せねばならない等々。町の不良少年たちは、「Amerika, moesoeh kita, kassi beras sama goela! [我らが敵アメリカよ、砂糖付きの飯をよこせ!]」ともう唱えています。インドネシア人の兵士全員は、食べ物、衣服、住みかを持っているゆえに志願兵となりました。おまけに、彼らは殴ったり蹴ったりを強化しています。私たちは、もうア

シア・ラヤ [大アジア] でなく、アジア・ティムール・ラヤ=大東亜とされています。トルコがアジア・ラヤに加わる意志がなかった理由だけで。

ハンペル

1943年12月16日

1月1日から、私たちはもう外でオランダ語を話してはいけないのです。

ハンペル

1943年12月20日

ここで彼らは、まだ拘束されていなかったほとんど全ての外国人を連行しています。男子はアデックへ、女子はクラマットへ行かされます。そのような人々とブランダのバラン [荷物] を私たちのところへ運ぶことに一日中忙しくしていました。その人たちは私たちのところを安全と思っているのです。もし、私たちが家を立ち退かされたらば、彼らは一度にその人たちのすてきな物品を得ることになります。

ハンペル

1944年1月13日

プラナカンにとって、あまり良くないようです。17歳から45歳までの男子は、ヤップのために兵隊さんごっこをする申し出をしなければならぬとされています。大半が自分から強制収容されるように計らっています。収容所の外にいる病気のブランダは全員同じく収容所へ入れられます。明日、M.B. は彼女の母親とともにいきます。H. が外にいらればと思います。なぜならば、彼は死にかかっているのですから。でも、私は彼に収容所のことについて何も話しませんでした。

ハンペル

1944年2月14日

今週起こったことをここでよく考え直さなければなりません。私の涙も尽きました。2月7日月曜日に、H. 夫人はそれでもPIDへ行かなければならなかったのです。彼女は帰って来ました。というのは、その日もまた休みだったので、再び出向くべき時があとで知らされるということでした。

そして、2月10日木曜日。当日彼女は、2月14日に入所しなければならず、家の中の物を何も処分してはならないと聞かされました。それにもかかわらず、同じ日に全ての物を私たちの家へ保管するために、私の荷物運搬用の三輪車に何度も積み入れては往復し、忙しくしていました。午後、目覚めると、私の目前に警官が立っていました。すごく驚きましたが、もっと嫌なことがありました。2月11日金曜日にコーニングスプレインの警察本署まで私の犬のカザンを連れて来てくれるかということでした。ヤップはシェパード犬を奪うのです。そのあと私は一日中泣きどろどろしました。知人たちとも。

午前中に、私はカザンと一緒にベチャ [輪タク] に乗ろうとしましたが、カザンは乗りがりませんでした。ジャワ時間の7時半にそこに着いていなければならぬのに、その時はもうジャワ時間の7時でした。それで、歩いて行ったのです。大分遅れて到着しました。そこにはシェパード犬が相当いました。何匹かにはリボンが付けられました。私は木の後ろに隠れていたため、ヤップは私に気付きませんでした。「リボンを付けていない犬は帰ってもいい」と言う声がしました。私は即座にリボンなしの列の後ろに並びました。でも、がっかりしたこと、正門で私は捕まり、リボンを付けられて戻されました。ずっと、木の後ろでカザンを抱きながら幼い子供のように泣いていました。カザンは歩く気力がありませんでした。カザンは最後の順番となり、走ったり、小走りさせられて審査されました。彼は疲れていたため、かなり鈍かったです。カザンを叱ったニッポンはすぐにも反撃を受けました。しばらくして、第三審査の番号が呼び上げられましたが、カザンの番号はありませんでした。ああ、本当にうれしかった。あの時の走行が救いとなったようです。なぜならば、その際に私はカザンが2歳半と言いましたが、彼らはそれを信じたりませんでしたから。立派な犬4匹を連れてた中国人：4匹全部取り上げ。身ごもった1匹は：取り上げ。ああ、箱に入れられた愛犬が運び去られるのを目にするのは… 帰宅してから、G. が私たちが戻ったか知るために訪れました。カザンがほえたので、その隣人もいつもの通り、カザンの存在がわかったのです。…中略… 翌日の午後、私はカザンを連れて第5管区へ行きました。彼らは私の方に目を向けました。私は第5管区の責任者のところへ、カザンが不合格だったと直接言いに行きました。私がうれしそうな様子だったので、彼も同じように喜んでいました。30匹もの犬を彼らは得たと言われています。それらの犬は軍用となるのです。

これ以下は、今日のことについて。私は本当に空虚な思いがします。H. 氏を収容所へ運ぶために、私は赤十字の車を予約するはずでした。ここでは全体がニッポン時間でなされているのですよ。9時半に、私はラーン・カンナへ行きました。その車は2時半に来る予定だと告げるために、10時15分に戻りました。私が話し終えないうちに、その車は戸口に着いていました。H. が乗るまでは大変でした。劇的でした。幸いにも、彼はちょうど入浴したあとで、洗ったばかりのパジャマを着ていました。しかし、奥さんはまだ用意ができていませんでした。幸いにも、ママが赤十字の看護婦として同伴しました。それができたのには驚きでした。全てが混乱、混乱でした。収容所では、彼らの入所について何も知りませんでした。ああ、でもこれでよかったのでしょう。不意の別離で。まだあと何時間あるなど思うだけでもたまりませんから。H. 夫人は予定通り2時半に出発しました。私たちは正門の前へ見送りに行きましたが、追い返されました。私

はそのあとPIDで家の鍵を渡しました。そして、今、私はひどく孤独に感じます。またも、親友が去りました。いつまで？その家には自由に入出入りしていたのに、今は固く閉ざされています。彼らは、ベッド2台、椅子2脚、テーブル1台、戸棚1本、台所用品だけを持って行くことが許されました。残りは、そのまま残しておかなければなりませんでした。

ハンペル

1944年2月29日

空襲警報と雨にはもううんざりです。私たちは2月28日からまた訓練をやらされています。氷のように冷たく何時間も雨の中に立たされたり、太陽の下に立たされたりしているのです。今後また、一方の道路では通行し、他の道路では停車しなければならないため、かけ声と旗を使って行われます。警察は今ではもう担当していませんし、ライフル銃の上部に剣をつけたニッポンが代わりに行っています。彼らはとても厳しいです。何かを予期しているのでしょうか？

ハンペル

1944年3月8日

きっと、今夜はよく眠れないでしょう。カザンはまた出向かなければならないのです。何でしょう？彼らがこのことを毎月行わないよう願うばかりです。また、数時間して、私たちのほかの犬を記録するためにひとりの警官が訪れました。彼らが何をしようとしているのか、私にはわかりません。いらいらしてきます。彼らが息子や夫を連れ去ったとすると、戻るチャンスは50%ですが、犬の場合は違います。

ハンペル

1944年3月9日

実行されてしまいました。カザンはもう私たちの犬ではありません。彼を疲れさせるために、私は一緒に30分間走りましたが、今回は何の役にも立ちませんでした。また、その際に、プラナカン[雑種]であり、純粋のシェパード犬でないと私が言っても同じでした。「アンジン・バグス、バグス！[すばらしい犬だ。すばらしい]」とニップが言いました。嫌な奴。ああ、彼を殺したくなるほどでした。そして、最高なことが。彼は私たちに犬のお礼を言ったのです。私たちは犬を連れて家へ帰ることを許されました。これらの犬はニッポン軍用で、私たちがその世話をさせられます。犬が病気になったり、死にそうな時は、それを届け出なければなりません。いつか彼ら

は犬を取りに来るはずです。今回彼らは25匹のシェパードを獲得しました。現在、カザンは私たちのところに宿をとっているのですから、彼らはその費用を私たちに払うべきだと思います。…中略… ああ、そう。カザンは何歳かと彼らに尋ねられたことがありましたが、私ははっきりわかりませんでした。でも、「とても老いている」とだけ言いました。彼らは良く知っているかのように見えてから、「4歳」と言いました。本当は2歳になったばかりなんですよ。引き取る時に、私たちはお金をもらえますが、私は受け取らないつもりです。

ハンペル

1944年3月16日

町は混乱しています。女性たちが群れをなして収容所に入ります。ニッポンは「国際法」で行動しています。これもまた新しいことです。オランダ人と結婚したドイツ人、スウェーデン人、スイス人の女性等は2日以内にクラマツト収容所、それも質屋の中に押し込められます。同じようにいやなことが。12歳以上の息子たちが連れ出され、男子収容所へ移されました。…中略… オランダ人と結婚したプラナカン、あるいは父親がオランダ人である人も収容所へ入ります。そのため、現在路上で目にする人々はみんな「純血種」だけ？ふー、どうかしらね。ニッポンフレンドと一緒に女性は、外に住み続けることを許されています。

ハンペル

1944年3月20日

カザンが去りました。今日初めの日程を終えて帰宅したちょうどその時、警察の手に落ちました。カザンをコーニングスプレインの警察本署まで連れて来るようにと。私は途中ずっとカザンを自由に歩かせました。なぜなら、彼がひかれて死んだとしても、もうどうでもいいと思ったからです。ニッポンに手渡すよりその方がましです。でも、私たちは無事到着しました。そこには、すでに真新しいジャティ[チーク]材の檻が50も並んでいました。ひどい悪臭がしました。カザンはクサリをひきちぎり逃げてしまいましたが、しばらくして、おとなしく檻に入りました。その檻の番号、98番をもらいました。ことが完了すると、呼び出しがあり報酬が出されました。嫌だ！拇印を押され20ギルダーを受け取りました。私は、「ティダ・マウ・トリマ[受け取れません]」と冷たく言って去りました。本当は、ニッポンの面さきでそれをひきちぎるつもりでしたが、そうしたら、また平手打ちを食らい、懲役刑になるだろうし、ケンペイタイもすぐ向かいなので。ああ、愛犬を狭すぎる檻の中に残して去るのは何とも言いようがありません。その時の顔つき、うめき声といったら。くだらない奴に涙する気はないけれど、檻の前で泣く男たちを見ると自然に泣けてくるのです。カザンが去った時に、ママは家にいませんでした。これまでのように夜、

私がちゃんと横になっているか蚊帳に鼻先を突っ込んで見に来ることはありません。家の中は死のような静けさで、女中たちさえも彼を恋しがって私たちと一緒に泣いています。2年前の1942年3月8日に子犬のカザンが家に来て、もういなくなっていました。ああ、彼らは何もかも私たちから奪ってしまうのです。彼らを殺したくなるほどです。憎たらしい奴ら！

ハンペル

1944年5月7日

ああ、暑いこと、暑いこと。軽い日射病になってしまいました。ほこりと蚊！その都度お風呂に入ったらとおっしゃって。くやしいけれど、ニッポンからそれを許されていません。およそ1カ月前、彼らはリストを持って家々を訪れました。もし、井戸があったら、「アダ・スムール[井戸がある]」と書いてあって赤い四角が上に付いている紙をもらいます。もちろんそれは次の爆撃のために違いありません。壁の前面にこれを貼らなければなりません。⁹¹ ニッポンがまたまた新しいことを考え出すと一体誰が思ったのでしょうか？すでに、お米、油、ガスなどは一定量が与えられています。現在、私たちは水も決められた立方メートルの量まで使用が許されています。そして、この暑さなので。私たちのところの井戸は豊かなのでうれしいです。…中略…

ニッポンは昨晚、チキニの動植物園でプラナカンのために集会を開きました。赤十字の中心的な女性としてママは最前列に座ることを許されました。彼らが言ったこと？恥知らず。超満員だったけれど、終わりの頃には半分が家に帰ってしまいました。全然理解できなかったのです。彼らはプラナカンを助け、刑務所から釈放するつもりなのです。すでに3千人もの戦争捕虜が釈放され、その人たちはきっとニッポンのために戦うことを許されたのです。お見事！それなら、その人たちは自分のブランド[オランダ人]の奥さんも収容所から連れ出すべきです。なぜならば、純血の人と結婚した者がいるのですから。でも彼女たちはそこにいた方がいいのです。現在決まった時間に飲み物と食べ物をもらっているのだし、ふたりともすでに全て失ってしまったからです。…中略…

ニッポンは、私たちが誤って扱っていたことがわかったようです。彼らは事務所でオランダ語のスピーチをしました。ニッポンをもっと理解するために、彼らの風俗習慣の学習をオランダ語でやったらどうでしょうか。「私はオランダ語で話します。なぜならば、他のことばであるマレー語が上手でないし、君たちもわからないだろうから」とある日本人が言ったのです。「進行状況に関しては、プラナカンがほかの人種より上位にいる」。彼らにとって、もちろんインドネシア人のことを意味していましたが、はっきりこのことばを出しませんでした。

⁹¹ この章のポールの日記 1944年6月26日及び「市外との接触／戦争捕虜・民間人被抑留者との接触」ヒューセンの日記 1945年6月20日参照。

ハンペル

1944年5月14日

250人のプラナカンが釈放されたという話が広まっています。それは民間人収容所から、それとも戦争捕虜収容所から、それとも刑務所からでしょうか？また、彼らは何をニッポンのために行うのでしょうか？兵隊さんごっこをするのでしょうか。彼らはラパット・ブサール[大集会]で、何名か釈放するであろうことを言ったのです。そのラパット・ブサールは、ひどかったらしいです。人々は平然と退場し、ケンペイタイに会場へ戻されたのでした。ニッポンに向かいお辞儀しなければいけないと言われました。ニッポンがどの方角にあるか誰も知りませんでした。一番後ろにいた人々は、広場で何か起こったと思い、椅子をもって最前列を得るためにすごい勢いで走りました。そして、全員がそこに出席していなかった人と同じ程度だけしか知りません。

ママは昨日、GESC⁹² 関係者を対象としたほかのラパット・ブサールに行きました。ニッポン語で話され、マレー語に訳されました。私たちはウィレムス教会のニッポン人の遺体にお辞儀する必要はないが、自主的にこれを行います。というのは、18歳から21歳までの青年がオランダ政府に向けて私たちが目を開くようにと、私たちプラナカンのために死んだのですから。私たちは給料をもらうためではなくて、私たちのお国のために働くのです。そして、その他くだらないことをたくさん言ってました。彼らは勝手に、あきれます。

ハンペル

1944年5月18日

ユリアナ通りは今、ジャラン・カパスと呼ばれます。そこにカパス[綿花]が栽培され、今後は各家が相当量の綿花を手入れしなければなりません。綿花は通りの端にあります。午後に、ケンペイタイが大きな自動車に乗って来ます。車から降り、土が湿っているか指で感触を試します。

ハンペル

1944年5月27日

5月25日に、パパは自分のラジオを断線させなければなりませんでした、彼は行きませんでした。今後はどうなるか成り行きを見守るのみです。彼らは到るところでラジオを簡単に取り上げていますが、パパは彼らがこのことに気付かなければと願っています。彼らは新聞に、「この日

⁹² Gemeentelijk Europees Steuncomité

とこの日に何番何番の者は出向くよう」と載せています。しかし、ニッポンは、全くもって「ピントール・ブスク[悪賢い]」のです。

ハンペル

1944年6月1日

私たちは不愉快です。新聞にバンサ・プラナカン[印欧人グループ]について大きな記事が出ています。ジャワ全域で私たちはサボタージュ中です。電車は、私たちが到るところで遅く発車させて、彼らが薪に使用するジャティ[チーク]材をぬらしているために、大分遅れて到着します。ああ、無惨なチーク林。線路の盛り土は、私たちがそこに穴を開けるので壊れます。スマランとメースター・コルネリスにあるグダン[倉庫]は、私たちによって放火されました。全てがムス[敵]の仕業。インドネシア人はそれを楽しんでいるのだと思ったことがありますか？インドネシア人は、「何かに疑いをかけられた者がいたら、我々はそんな者の後ろに隠れるから、その彼が自分で罰を受けるのだ」と言います。しかし、ニッポンは、「その者がやったから、その人種全体に関係する」と言うのです。プラナカンなしでどのようになるか静観すべきでしょうか？彼らは到るところで解雇されています。

ハンペル

1944年6月26日

町全体が区分けされ、現在、17歳から50歳までの女性は全員塹壕を掘らなければなりません。私たちにはまだ呼び出しがありません。スندا通りでは、すでにニップのもと畑作業が行われています。どの区にも監視小屋があって、夜間は年配の男子が監視しています。彼らは見回りの時間毎に、外灯の柱を叩きます。これは泥棒を隠れさせるサインなのです。J.R. もこれを担当していますが、反オランダの人たちと一緒に見回りに歩きます。

ハンペル

1944年9月6日

私たちは、トナリグミ[隣組]5、アザ[字]10、メンテン・ク[区]に住んでいます。⁹³ 私たちのアザチョー[字長]は、マムとか何とかいう名で、あなたとあなたのお兄さんと同じ学校にいた

⁹³ 「序」参照。

人です。今ここは快適ですし、いろいろと達成させました。ママは米票の検査に引っかかってしまいました。彼女は6人用を持っていますが、私たちは全員で4人です。余りの2人分を彼女は、食べ物のためだけに働いている女中たちにあげるのです。私たちのところで、アザチョーは、「ぼくがそれを調べなければならないのか?」と言って、見たふりをしました。タバコ用のカードをもらうために彼のところへ行かなければなりません。私はそれを簡単にもらいます。

ハンペル

1944年11月7日

バタビアは静観状態にあります。15人か20人の被抑留者が釈放されました。このことは日に日に増加しています。妻たちは、夫をバンコンで引き取るようにとの通知を受けました。これらの男子たちは、出所されるほど神経症であったり、盲目だったり、死にかかっていたりしているのでしょうか? 私たちは成り行きを待つのみです。⁹⁴ …中略… ママはこれから日本語を習います。これは義務ではありませんが、POP⁹⁵ の婦人を首にされないようにするには、それをしたほうがいいし、貧しい人々への扶助を続行しなければならないのです。また、扶助は初め自治体に移管されるはずでした。幸いにも、これは実行されません。…中略… カンボンではほかの所と同じように自分の庭に野菜を栽培しなければなりません。今日はその摘み取りが始まるはずでした。結局、ニッポンが来て全部取り上げてしまいました。女中はひどく怒って戻って来ました。

ハンペル

1944年11月12日

私、何を言ったかしら? 引き取りを許された男子たちは、昨日バンコン行きの列車で到着しました。H.氏は盲目です。彼らはみんなどこかが具合悪いのです。プラナカンと結婚した純血の人たちも釈放されました。しかし、妻たちは夫を養護できるか証明しなければなりませんでした。町中でこのことについて話しています。

⁹⁴ スマランのバンコン少年収容所には、1944年10月1日現在で、少年約830人、ローマカトリックの修道女30人、360人の成人男子、そのうちの約300人は61歳以上の男子が収容されていた。修道女は看護婦として従事していた。病気の老人の増加により、彼女たちの任務の遂行は不能となった。日本人はこの異常な現状を察し、1944年11月6日にさらに15人の修道女を（スマランのランペルサリ婦女子収容所から）バンコンへ送った。(Zwitzer, 101-102, 108)。尚、同じ理由で、病気の老人に帰宅する許可を与えたことも十分考えられる。

⁹⁵ *Pertoeoengan Orang Peranakan*（混血系への援助）は、*Gemeentelijk Europees Steuncomité*（地方自治体欧州人援護委員会）(GESC)の1943年11月からの新名称。

ハンペル

1944年11月16日

一体ニッポンはどうなっているのでしょうか？十分な食べ物がないのかな？今日から、女性たちは夫を引き取りたいかどうか、赤十字に申し出ることができます。健康な男子も釈放されました。民間人の被抑留者でなければいけないので、だから戦争捕虜ではだめです。出所した夫たちは、出されたことをまるで喜んでいません。彼らがそれを頼んだわけではないのです。彼らは自分の妻がやせ細り、子供たちはろくなことになってない姿を見ました。学校はないし、母親は食べていくお金を得るためにチャットウット[闇取引]をしなければなりません。夫の衣服は食べ物を得るために売られました。そのため、彼らには着る服もないし、再び食事が一人前増えたのです。一方、抑留中は、きちんとした身なりでいる必要はなかったし、定刻に食事をもらっていたのでした。出所したあるブラナカンは、純血の妻を婦女子収容所から出す努力をしたあげく、親類のところに同居しなければなりませんでした。ほかのひとり、帰宅すると子供が2人増えたことを知りました。哀れな人。…中略… でも、自由に世界中を歩き回っていた夫が、収容所にいた妻に向かって、どこかに何人か自分の子供がいるということもありえるでしょうね。出ることを拒否した夫たちもいます。「友人がみんな収容されているので、私も同じく！」そして、彼らは妻に収容所の外の困難な暮らしをそのまま送らせるのです。病気や盲目の夫の場合は違います。彼らは家にいた方が無難です。しかしながら、名医は収容所にいて、おそらく薬も持っています。

ハンペル

1944年11月17日

自宅にずっと隠れていたP.氏は、また表に出るようになりました。なぜならば、たくさんの元抑留者が歩き回っているし、88キロあった彼の体重は60キロになってしまったので全然目立たないからです。

ハンペル

1944年11月23日

民間人男子の引き取りは、12月15日で中止されます。2日間で1000件の申請がありました。しかし、奥さんにご主人を引き取りたいか尋ねると、「彼は無事のようにだし、そこにそのままにしておいて！」と答えるのです。隣の奥さんがこう言う場合には、私は理解できます。というのは、彼女のところには結構多くヤッペンの訪問があるからです。

ハンペル

1945年6月6日

0. はロームシャ労働⁹⁶をほかの人と一緒にやる予定でした。でも、彼らは帰宅しませんでした。続けて強制収容されたようです。どこへ移されたのか誰も知りません。男子用の場所がまだ余っているのでしょうか？

ハンペル

1945年7月15日

今また、彼らは新しいことをしています。12歳以上のプラナカンの少年たちは7月21日金曜日のお昼に各所の広場に集合しなければならず、そこで彼らは「バリース[軍事訓練]」を受けるのです。もっと、厳しくなりそうです。いつこれらの少年たちが連行されてしまうのでしょうか？

バタビア

ポール

1942年5月10日

一度、映画を見に行った時、初めに、卒倒しそうなプロパガンダ映画を見せられた。褐色の兄貴たちが、気が狂ったように熱狂的に大喜びして拍手していた。私たちは、顔色を変えずに背筋をのばして座り、いらだっていた。

バタビアの町は、登録、男子たちの突如の連行などなど、ありとあらゆる気の狂ったことにモルモットとして利用されている。⁹⁷ …中略… ニッポンは、もうオランダ語ではなく、全員がマレー語で書けと主張している。でも、私たちは移住者なので、神様の恩寵でこの国にいられるのだ！…中略… ある時、あのばかな奴らが町の上空からビラをばらまいた。あわれにも私たちは、アメリカのビラであるとしか考えられなかった。私たちは夢中になってそれを拾い集めたけれど、この写真とすばらしい国歌があっただけだった。[貼付：日本の飛行機の写真とマレー語で書かれた日本の国歌を載せた紙片]

登録：18歳以上の男子は150ギルダー、18歳以上の女性は80ギルダーを支払わなければならない。そうしないと、ニッポーンンの保護はなし。

⁹⁶ 道路の保全工事のような仕事に従事する、土木作業のいわゆる「志願者」。

⁹⁷ イルマ・ポールは、1942年3月12日にメモしたあとは、しばらく日記を綴っていなかったため、その間に起こった出来事を回想して5月に書きとめている。「日本軍の入城」ポールの日記 1942年5月10日参照。

ポール

1942年6月21日

「2062年」6月21日。この2062年は最新版だ。1942年はもう存在せず、2062年が正規の年号なのだ。⁹⁸ 突然、ものすごく年をとった感じがする。2062年と1942年なのよ。120年の「小さな」差があるんだから。

ポール

1942年9月19日

女性の登録は明日で終了する。新しいことの中で一番新しいこと。純粋なオランダ人の血が流れる女性と子供の多くが、柵で囲まれた収容所に一家族一部屋の割り当てで入れられる。所有物についてヤップは何も考えないし、水道タンクについても同じだ。彼らはキチガイみたいだ。当然また、一連のうわさが町に広まっている。ほとんど誰も登録させようとしない。彼らが今度何を実行するか興味ある。ならず者が。毎日、人々が家から自分の衣類だけを持って追い立てられ、残りはもちろん我らが解放者用。ママとノンおばさんは神経を高ぶらせていた。私たちは何をしたら良いのかももう全然わからない。みんなが大混乱。誰もなすべきことを知らない。たくさんの人々が収容所入りを逃れるために早々とバタビアから去っている。去る？ほかの町でも同じことを経験するため。兄エーリックについてはいかにすべきか？登録をしない？登録をする？ママは頭がおかしくなるほど迷っている。彼女が良く知っているファン・W.氏のところで、……. 登録をしない！ とアドバイスを受けた時までだ。成り行きを見るのみ。

ポール

1942年10月2日

何か起これば良いと思った。毎日ますますヤップの気が狂ったような措置が続いている。

⁹⁸ ここは、いずれも2602年が正しく、年号による年の差は660年である。

ポール

1942年10月26日

[貼付の新聞記事]

蘭軍の非人間的行為。日本人捕虜がいかなる扱いを受けたか。

[以下は、バタビアの同盟社の元リーダーで、開戦とともにオランダ政府によって強制収容され、オーストラリアに移送されたあと捕虜交換されたアンドー・トシオ⁹⁹ の証言文]

敵国の臣民、目下インドネシアの異人なるオランダ人よ！上記の報告を熟読せよ。あなた方の同国人によりなされた犯罪と非人間性に関する撰集を読むべし。あなた方の同国人は何をすべきか読みとるべし。…中略… 日本軍政は、あなた方に対して実際のところ「マニス（甘）」過ぎ、寛大過ぎると思いますか？あなた方にはこれを比較し、結論を下す機会が与えられました。あなた方に対する日本軍政の行為とあなた方の同国人の非人間性とを比較せよ。日本政府は、軍政に忠誠を誓ったあなた方の国の多くの男子たちのみを労働に課するのであります。軍政は、あなた方の妻や子供に対し支障を及ぼすことはありません。彼女らは、どこでも自由に行動することが許されているだけでなく、軍政によって彼女らに必要な保護がなされています。しかし、ほかのことにも注意せよ。馬鹿げたことは行わない。なぜならば、政府は、直接的または間接的な敵意もしくは反抗を帯びたいかなる行為に対して容赦なく行動するであろうから。それゆえ、ここに警告するなり。

(日刊紙*Asia Raya*の記事)¹⁰⁰

このすばらしい紙切れは、市役所でみんなに配布されている。そこに書かれたナンセンスなことは、読むとおもしろい！ジョージン・デ・フリースが私のために持ってきてくれた。彼女は、これをくれた男の人に、このすばらしい話を2度読むことができるよう2部くださいと言ったのだ。その男の人はおどろき、とまどいながら紙切れを2部彼女に手渡した。ジョージンは上機嫌で歩いて帰宅し、私にこのすばらしき出来事をもたらしたのだ。…中略…

収容所へ行かされないためには、ブランダ・プラナカンであることが必要だ。多くの人たちと同じようにママも、そのため家族にインドネシア人がいるか追求し、調べるために中央公文書館へ行った。私たちの家族にあることを見つけようとするママをみんなが笑っていた。でもどうでしょう。1715年に生粋のアンボン人、ランキット嬢がポールの家系にいたのだ。ランキットに乾杯。それで、私たちは収容所に入らなくてもいいのだ。…中略…

⁹⁹ バタビアの日本の宣伝組織同盟通信社元社員アンドー・トシオは、事実、東インド政庁によって強制収容され、クレイマー号でオーストラリアに移送された。彼は捕虜交換され、ロレンソ・マルケスからの出港前に、日本人に対する残虐行為の罪に対してオランダ人を痛烈に非難する証言を行った。

¹⁰⁰ マレー語の日刊紙「*Asia Raya*」の第1号は、1942年、裕仁天皇の誕生日の4月29日に発行された。この新聞は日本人の編集長が従事し、閉鎖された「*Java-Bode*」の印刷機を使用してバタビアで印刷された。(De Jong 11b eerste helft, 242)

日本人は突如お金に欠いている。そのための不意の戦争税が。¹⁰¹

[貼付の規定]

特別戦争税は、欧州人を対象に、1941年すでに税務署が確定した資産税合計の70倍及び/または1941年すでに税務署が確定した所得税合計の6箇月分とする。戦争税は、3回の分割払いが可能だが、税額査定書送付日後、2箇月以内に完済されなければならない。

ポール

1942年12月8日

続けて、全員が祝っている。¹⁰² かわいそうなリリィとゾッピーも同じように、競技を見るためにケボン・ビナタン[動物園]へ行かなければならなかった。リリィはむしろ上へ¹⁰⁴ 行きたかったのももちろん腹を立てていた。彼女たちは解放者の祭事を強制的に祝わされたのだ。

ポール

1943年1月20日

ゾッピーとリップフェ¹⁰⁴ は、ふたりともほかのブランダの場合と同じように解雇された。彼らは、アデック¹⁰⁵ に行かされるまでお互いのきずなを保つことが許されている。

[貼付の紙片]

日時：2602年12月5日から10日まで

総則：全ての外灯を消すこと

サイレン：1分間の発信音2回は、態勢を整えること

5分以内の短い発信音は、空襲である

1分間の長い発信音1回は、空襲終了である

2分間の長い発信音1回は、解除である

1秒から5分までの短い発信音は、全ての乗り物は道路の端に停車すべきことであ

る（道を空けること）

¹⁰¹ 「序」参照。

¹⁰² 日本軍の真珠湾攻撃により始まった太平洋戦争を記念した祝賀。

¹⁰⁴ リリィとゾッピーは、ポール家の同居人であった。この「上へ」とは、ボイテンズルグ - シンダンラジャ - チャンドール方面に通ずる有名な山道「ブンチャック」を意味する。また、ブンチャックは、広く知られる行楽地でもある。

¹⁰⁴ 同じく、リップフェ（ゾッピーの弟）もポール家に住んでいた。のちに、チデンへ移されたこの兄弟の母親もポール家に同居していた。

¹⁰⁵ 脚注75参照。

これらのナンセンスな事柄の複雑さはそのばかな奴らと紙一重だ。…中略…

[貼付の規定]

S. S. (Staats Spoorwegen国鉄)全職員への通告

誠に遺憾ながら、ここに私は以下の点に関しまして皆様のご理解をいただかざるをえません。昨年の終わり頃、若干のオランダ人職員が解雇されましたが、当時、私は彼らの職務を早急に遂行する必要があることを全ての業務責任者へ報告いたしました。しかしながら、私がさまざまな業務を徹底的に調査した際に、上司が印欧人であることから、各部のインドネシア人はその者の上司の命令に従って実行していないことが判明し誠に残念におもいます。自分の上司の命令を良く知りながら軽視するという態度は、恥ずべきことであります。このような態度では高い理想（つまり、大東亜の建設）が忘れられ、彼ら（印人）は大東亜の建設において熱心に協力しているにもかかわらず、印欧人は全ての面で優れているとする、ごう慢さがあなたの人格であるゆえ、このような行為により大きな影響が生じることを自覚なさってください。

印欧人に関しましては、彼らのからだには敵国の血が流れているゆえ、私はここで警告いたしたい。すなわち、彼らが注意を怠り、彼らの間違った見解や扱い方を改善せず、彼らの生活様式を現今の変化に適合させず、彼らの持つ悪感情を抑制しない場合には、私は容赦なく、彼らを敵として扱うことになろう。

通常、各部長の命令は私から出したものであります。我々日本人は、強い道徳心を持っており、高みからの命令には無条件に従います。この気質は、権力と強制の影響のもと従順でいなければならなかった以前のオランダ統治下のものとは完全に異なります。我々の従順さは、外部からの権力や強制の影響のもとにあるのではなく、テンノー・ヘイカ¹⁰⁶ のため、そして我々の両親のため、公益にもとづく純然たる影響のもとにあります。本日以降、ほかの人の模範となるよう、私がこれまで述べたごとく、高みからあなたへ出された命令には全面的に従い、業務を献身的に遂行しなければなりません。

これは、私からあなた方全員へ宛てた緊急通告であります。

西部 陸輸局長 (S. S.) [西部ジャワ陸輸局 (Staats Spoorwegen国鉄)]

ヒガシ・ヨシタネ

2603年[1943年]1月15日 於：ジャカルタ

¹⁰⁶ 日本の裕仁天皇のこと。

ポール

1943年3月9日

今日は、いたるところで大きなお祭りが。¹⁰⁷ 町は、ヤッペンの旗を持つ原住民の金切り声と、歓喜の悪態で荒らされている。

ポール

1944年2月18日

私たちが警防団の訓練を受けた1943年7月のある良い日までのこと。これは沿道で使われるサインの紙切れだ。サイレンは故障している。何と面倒な？

[貼付の紙片]

- 1) ケイ カイ ケイ ホー / Ada bahaya oedara (警戒警報)
- 2) ケイ カイ ホー カイジョ / Bahaja ilang sekali (警戒警報解除)
- 3) クーシュー ケイ ホー / Ada serangan oedara (空襲警報)
- 4) クーシュー ケイ ホー カイジョ / Bahaja ilang? Tetapi haroes hati-hati (空襲警報解除、続けて要注意)

[この紙片の裏面]

2603年7月24日 [1943年7月]16日から25日まで灯火管制 スラバヤとチェプが爆撃された。これは空襲を予期した我々の新政府による規定である。

ポール

1944年2月22日

少年たちがアデックへ去ったと同時に、ファン・ノールト夫人は「無保護」にあったので収容所へ入らなければならなかった。¹⁰⁸ この小柄なファン・ノールト夫人はそれを恐ろしく思っていた。彼女はもうどうでもいいようなことを言っていたが、ひどくしり込んでいる様子が誰の目にも明らかだった。私たちみんなから、彼女へは想い出に(石けんなど)をあげたのだ。この小柄な夫人が出発する日に、私たちはもちろん彼女を見送りに行った。フレーは自分の引越用荷車で

¹⁰⁷ 蘭印軍降伏1周年の祝賀。

¹⁰⁸ 初期には、幾多の女性が、「保護者」を得て強制収容から免れることに成功した。保護者は、このような女性を同居させていた欧州人男子であった。(Van Velden, 84)

先に行き、私たちはしばらくして3台のベチャに分乗してついて行った。チデン¹⁰⁹ への旅そのものがとてもスリルに富んでいた。ベチャが次々に事故を起こした。エーフ嬢と私のいたベチャのチェーンが外れたので、私たちは乗換えなければならなかった。その時、タイヤが破裂したりしていろいろとあったのだ。

やっと、私たちは遠くにゲデック[竹で編んだ]柵に囲まれた女子刑務所（収容所）を目にした時、私たちのしばしの大げさな陽気さは消え失せてしまった。遠くに死んだように静かな女性たちの町を見ることは何とも恐ろしい。私がここを最後に見た時には、まだ開放されていて、陽気さや活発さでいっぱいだった。今は、全体が死のような静けさで、人けがないのだが、実際は女子と子供が満杯に詰め込まれているのである。この収容所はカリ¹¹⁰ で囲まれている。私たちプラナカン、ムス[敵]のすぐ近くに行ってはならず、そのため、私たちは掲示板に記されていたように橋のそばで止まらなければならなかった。

あの小柄で勇敢な夫人が、小さなトランクを持ってこっそり泣きながら独りぼっちで橋を渡たる様子にはぞっとさせるものがあった。私たちは、彼女がいかにおずおずとヤップのもとに届け出し、そのあと彼女の背後に門が閉まる様子を見たのだ。ああ、それはぞっとさせる以上のことだった。私たちは今にも泣き出しそうだった。気をめいらせて、私たちは再びそれぞれのベチャに乗って帰路についた。不機嫌な気持ちから、私たちは競走し始めて、ジョージンとラッメルス夫人がニッポン車にひかれそうになってしまった。私たちが帰宅した時になって初めて、あの小柄な夫人がとてもいとおしく思ったのだ。幸いにも、彼女から便りがある。彼女は元気で、今もかなり健康であるようだ。ママは定期的に野菜やくだものを彼女に送っている。というのは、あそこでは、これを手に入れることは非常に困難だから。これまでも彼女が元気であったことを願う。

ある日、ダーラーおじさんの頭には、¹¹¹ 私たちプラナカンがダイ・ニッポン（大日本）により、いかに良く扱われているかを特別に悟らせる目的で、私たちに立派なスピーチすることがひらめいたのだ。この横は、ダーラーおじさんがマレー語でラジオを通してわめきちらしたことの訳である。[貼付の「政府刊行物 印人なる重要なことば 2603年9月19日」]¹¹² その先、私たちはみんな心配でたまらなかった。というのは、全員が印人収容所を予期しているからだ。（これはまず間違いなくこの岬にだ）。ダイ・ニッポンの約束にもかかわらず、起こらないことが残念ながら起こり得るのだ。

ダーラーおじさんがもっとおもしろいことを考え出した時までのこと。私たちは全員再び登録させなければならなかった。ものすごいわさがまた広まった。印人収容所の話が到る

¹⁰⁹ バタビアの西側に位置した欧州人居住地チデンは、1942年8月以降、バタビアで最初の婦女子用「保護居住区」となった。また、占領の後期にはジャワ全域からの被抑留者の集合キャンプとなった。(Van Dulm, 他., 90-91)

¹¹⁰ 日記の作者は、おそらくチデン - バンジュール運河を指している。

¹¹¹ 東インド社会民主党の元国民参議会議員、日本支持派のP.F.ダーラーのこと。ダーラーは、Kantor Oeroesan Peranakan（混血系のための事務局）を代表して宣撫活動家として行動した。(De Vletter 他., 64) 並びに「序」参照。

¹¹² 「序」参照。

ところで浮上した。国勢調査と人種分離の話が燃え立つ火のごとく町に広まった。だが、何と騒がしい声と驚きか。現在まで、私たちは幸いにも何も気付かなかったが、本来の目的は… このことはいまだにわからないし、ヤップはあいまいなので、何かが起こらない限り、私たちは決して知り得ることもないのだ。

ポール

1944年2月23日

何でこんなばかげた登録のために、私の日記帳にこんなに大きな場所を空けたのだろうか？それについて何を書いたらいいかわからない。ここの紙切れ、[Soerat pendaftaran pendoeoek peranakan (=印欧人居住登録証明書)]をプラナカンであることの印しに各自が所持しなければならない。書類の次のページは、世帯主により正確に記入されなければならない。¹¹³ その紙をもって、提出しにどこかの施設へ行かなければならない。ママは（みんなと同じように）、何時間も行列していたのだけど改めて出向かなければならなかった。なぜならば、彼女は全部普通の年号、つまり1943年と記入したからだ。これを2603年と書き直し、生れた年には660年を加えなければならなかった。

ポール

1944年3月1日

1943年11月にイタリアが降伏した時までのこと。その時、ニッポンは再び何人かの男たちを閉じ込めることが必要であると見た。ここのリストを参照。

〔貼付：「1943年11月9日付けアデッキからの要求が果たされる」（9人の名前と裏にその人の以前の住所と「マットレスとバラン」（荷物）の載っているリスト）

特に、ふたりのイタリア人にご注意：アリチエロとガサピーニ。¹¹⁴ 彼らはいつものように何の予告もなく、衣類も持たずに連行されたため、フレーには、それぞれの奥さんのところへ行くために、このリストが渡された。その妻たちには、夫の欲しいものが知らされて、彼女たちは署名させられた。デンリヒャーだけは、特別なもの、つまりドリルのコードを要求した。

¹¹³ 日記の作者がここでいう記入する書類は、インドネシア人の先祖いる家系を示すアサル・ウスル（家系証明書）のことである。

¹¹⁴ 1943年9月以降、イタリア人が日本人により強制収容された。ムッソリーニが失脚したあと、イタリアの新しい首相バドリオは、連合国と停戦条約を結んだため、イタリア人は連合国の一員とみなされた。ドイツ軍により監禁から解放されたムッソリーニは、バドリオ下の政府とは別に、共和・ファシスト党の政府樹立を宣言し、これを日本は認めていた。日本のイタリア人は、ムッソリーニ支持者か反ムッソリーニかを表明させられ、それに基づき強制収容か否かが決められた。占領地で、イタリア人はほかのヨーロッパ人とともに既存の収容所に強制収容された。(Van Velden, 233-234)

ポール

1944年3月16日

西暦1944年に、私は17歳になる。スウィート・セブンティーンでもネヴァー・ビーン・キスト（ムー）。ちょうど今年、つまり17歳になる年にはブンダフタラン[登録証明書]が有料になる。そのため、私たちはみんなで元の英国領事館、今は市役所とかになっているけれども、そこへ出向いた。¹¹⁵ 私たちは全員そろって行ったのだ。フレともう一組の友達、ママと証人と私。全員がもちろん延期を申し出るためにだ。でも、私だけは、赤い頭髪のことであってイチラン（分割払い）を申し出た。私たちは写真を持っていなかったのだから、もちろん、追い返されてしまった。2度目は、許可を出すヤップは不在だったし、3度目に私たちが出向いた時には、ママは、最初に市役所へこの件を処理するために戻らないで、許可の申請にPOPへ行かなければならなかった。4度目に私たちが出向いた時、やっと私はパスをもらったのだ。私は登録証明書入れを買うことを許され、これを身分証明書としてとても役立てている。デ・サッケルがそのことで干渉し、エーリックと一緒に、相変わらず赤い頭髪のことをおもう私が80ギルダーを支払った時までのこと。

ポール

1944年4月6日

[貼付：マッチ箱の日本の宣伝シール]

これらのすばらしきプロパガンダのスケッチはマッチ箱に貼ってあったもの。あまりにもきれいなので、私はシールを熱心に収集するのだ。スケッチでまったくいけないのは、理解するにはしばしば幼稚であいまいすぎるからだ。特に、「tentoe dapat kemenangan[勝利は確実]」はきれいだ。

ポール

1944年6月26日

一緒に（ヴォン&私）が通りを歩いていたら、インドネシア人の若い少年がこの紙切れの分厚い束を持って歩いているのを目にした。

[貼付：「Ada soemoer」のはり紙]

日記帳よ。君のために愉快的ことしたのよ。

¹¹⁵ 英国領事館は、バタビアのライスワイク通り29番地に所在した。

「Boeat apa, tjong? [ぼくちゃん、それ何のため?]」

「Moesti tarok di roemah, kalau ada soemoer [もし、井戸があつたら家につけるんだよ]」

私は彼にちゃんと約束したので、その結果、ここに貼ることになったのだ。何のため？ ヤップのあいまいさのため。今は、たくさんの家にこれが貼ってある。¹¹⁶ この件で、もはや彼らは私たちのところを訪れなかった。私の良心がむしばむ。

ポール

1944年7月7日

[貼付の招待状：1944年5月6日、チキニ動物園でのラパット・プサール・オラン・プラナカン[印
欧人のための大集会]]¹¹⁷

この紙切れに合うような気がいじみたナンセンスを書き留める気がしない。真剣なことばのスピーチを受けるため、すべてのプラナカンにあてた招待状。それを信用するのに役立つ。彼らは私たちが良く思っている。笑ってはだめよ。ニッポンのことを良く思っているプラナカンや捕虜の味方であること。つまり、ことばを変えれば：男の人たちが釈放される。本当よ。日記帳君、信じないの。バカね。5月6日とその晩だった。そして、今日は7月7日。誰一人として釈放されなかった。何人かが釈放されたとうわさが出たが、誰もそんな人を見たことも、話したこともないのだ。そうよ、このスピーチは、プンティン・スカリ[重要]だったのである。…中略…

私たちには、近頃、20軒を担当するクミチャー[組長]がいる。この人は、クチャー[区長]の下にある。クミチャーが現在は、配給品を割り当てている。たびたびミーティングが開かれていて、みんな出席しなければならない。ヤッペンさえも、彼らのクミチャーの賢い話を聞きに来るのである。

ポール

1944年10月27日

日本式隣組の設立について

なつかしの古都ジャカルタは、現在、ブロックともいわれるトナリグミ[隣組]に分割された。各隣組(20から30軒)の責任者はニップにより選ばれたクミチャー[組長]である。さまざまなトナリグミはアザチャー[字長]、つまりアザまたは地区の責任者だが、その管理下にある。さまざまなアザは全部、市内の地区を監督するハンチャー[班長]のもとにある。また、ハンチャーは市長

¹¹⁶ この章のハンペルの日記 1944年5月7日及びヒューセンの日記 1945年6月20日参照。

¹¹⁷ この章のハンペルの日記 1944年5月14日参照。

の座やジャカルタ自治体を形成する。でも、非常に活動的なクミチョーとのろまのクミチョーがいるのだ。私たちののは幸いにも、のろまのタイプだ。彼は、私たちにあてられた油やタバコなどが定刻に配給されることだけを手配している。そのほかのことは、一切かかわらないのである。でも….. 変わったクミチョーを持つこともある。毎日、訓練とか練習を行うような人だ。彼のトナリグミに属する者は全員防火訓練に参加しなくてはならず、バケツの水を順々に渡したり、屋根に登ったりさせられるのである。このことすべてが見物人やクミチョー自身の非常な喜びとなる。

1ヵ月に1度か2度、ミーティングが開かれる。各家族から最低ひとりがミーティングに出席するようすべてのメンバーに通達される。全員が出席すると、東京方向にお辞儀し、そのあとこの戦いにおける戦没者に対しても1回するのである。ミーティングの議長が、東京の位置が事実上どこにあるのかわからなかったため、どこを向いてお辞儀をしたらいいのか合意が得られなかった時にはおそろしく悲劇的だった。Très, très baboon !¹¹⁸ …中略… このようなミーティングでは実際には何も発言されないのだ。私たちがクテラ[サツマイモ]やサユラン[野菜]を植えなければならぬこと、私たちが鉄を集めなければならぬこと、反米であれなどなど。

ヤンとディックにはNSB党員のクミチョーがいて、その人はふたりを1ヵ月に付き1セントでジャワホーコーカイ¹¹⁹のメンバーに求めた。また、その人はふたりが楽しい夕べを過ごせるとかいろいろナンセンスなことを願ったのだ。そうそう、隣組の男子は全員泥棒の見回りをしている。お気の毒に。さらに、ケイ・カイ・ホーの際には、自分の塹壕へ入れと要求する活動家もいるのだ。でも、私たちのクミチョーへはあとでケーキを届けよう。彼がやってる床屋にお客さんがいない時には、一日中居眠りしているのだ。

ポール

1944年11月18日

変なことが起こっている。

誰もがそのことを疑いのまなざしで話している。そうよ。私たちは疑うことを習ったのだし、時には親友が疑っているのを見ることさえあるのだ。気を付けろ。気を付けるんだ。べらべらしゃべるな。彼らの言うことを簡単に信じてはだめ。ともかく、そのことに戻るけど、私たちには疑う理由があるのだ。ねえ、きいて！ある良い日、あるいは悪い日といってもいいけれど、町の21人の女性がすぐにも夫が家に帰ってくるかもしれないという驚くニュースを聞いたのである。多くが信じていなかったが、狂ったように喜ぶ人もいた。女性たちの間ではいつも盛んにささやかれていた。それも、本当に21人が出所して来た時まで。聞くところによると、ジャワ全体で300人！その中には、マックス・ラッメルスもいた。そこで、私はある日「オー、ダーリン。いとし

¹¹⁸ 正しくは、「babouin」でヒヒのこと。

¹¹⁹ 奉公会は勤労奉仕をする組織。

き君よ」¹²⁰と一緒に、このことをいくらかでも感じ取るためにマトラマンへ行った。でも、この話はおしまいにする。変なことは、このあとに始まるのだ。

ある時期から、ど・の女性もプラナカンの夫を収容所から出させることが許されたのである。妻は彼の名前だけを伝えれば、彼が戻ったのである。町中が混乱状態だった。夫がトトック[純血欧州人]で、妻自身が12人の子供をかかえていたり、あるいは病気の場合、または夫が病気の場合にも出所を許すと知らされた。彼らはさらに、この条件を満たさない人にも出所できることにまでしたのだ。ニップのこのような愛情あふれる行為を理解できるかしら？ 私たちには全然できないわ。絶対にパパをあきらめない。まったく奇妙なことを、まるっきり信じられない。ニッポンから良いことなぞお期待できないんだ。これは全部プロパガンダでニッポンの巧妙なトリックだと誰もが聞いている。まあ、成り行きを待つことにしよう。

ポール

1945年1月30日

[貼付の通達]

Soerat panggilan.

Dengan hormat,

Harap bermakloem bahwa toewan besook pada tanggal 12-1-2605

Djam 6 pagi haroes bersiap di roemh [*…*] oentoeck bekerdja Romusha soekarela di [Karel Tangsin?] oentoeck kepentingan dan kebaktian terhadap Pemerintah Balatentara Dai Nippon.

Kepara

Toean [*…*] Pool Djakarta 11-1-05

[通告拝啓すでにお知らせした通り、大日本軍政に対し忠誠であるがために、[カレル・タンシン?]にて志願労働者として働くため、明日、2605[1945]年1月12日午前6時に、[*…*]の建物に出向してください。[*…*] ポール殿於ジャカルタ ' 05-1-11]

ロームシャとは、志願して働くことである。同じく、エーリックも、志願して行った！
得にはならないのである。そんな具合で結局彼も行ってしまった。¹²¹

¹²⁰ このことばは、マックス・ラッメルスが妻と再会した際に言ったことである。

¹²¹ 軍政は、1945年1月25日に「国家にとって危険な」印欧人とみられる者全員を連行する命令を発した。その日にイルマ・ポールの兄エーリックは二人の刑事によって自宅から連行された。彼は第5管区の事務所へ移され、そこに集合していた他の少年たちのグループとともにグロドックへと移送された。（「序」参照）。
「連行と家宅捜査」ポールの日記 1945年2月4日参照。

ポール

1945年3月16日

[貼付：隣組長の手紙2通]

夜警をする呼び出し。こういうことは、トナリグミでよくあるのだ。男はみんな見張りを交代でしなければならない。さらに、ラティハン[訓練]をする呼び出しとか、バケツを振り投げたり、もっとばかげたことに終わりが無い。…中略… グロドックから少年18人が釈放されたが、まだ相変わらず良い知らせがない。¹²² なぜ？総じて、あそこでは良好のようだ。早く詳しいことがわかるればと願う。

スマラン

ヒューセン

1942年3月8日

昼食後に、ひとりの警官が来てヤップのために何台かのバスとトラックを要求した。アーレント・モーイとの1台の車に対するあれこれと煩わしい言い繰り返しのあと、全てうまく整った。運転手として、スバルジョ、スリ・ハルドノ、カスワディがこれらのバスで行く。

ヒューセン

1942年3月19日

私たちは、この地区の市警備隊と欧州人警察署員がジュルナタン刑務所に監禁されていることを知った。

ヒューセン

1942年3月21日

ガソリンの蓄えを全部、ニッポンの殿方に供出しなければならないと新聞で読んだ。ひどくくやしいが、どうしようもない！

¹²² ここの「良い知らせ」とは、彼女の兄エーリックの釈放を意味する。

ヒューセン

1942年3月27日

新聞のニュースで私たちの気分は沈みがち。特に、私たちが3月31日まで車の運転を許されているという報道で！そうしたら、ブトゥール[本当に]お手上げだ。

ヒューセン

1942年4月22日

欧州人の男子と官吏は全員午前11時から正午までに、総督事務局とSoos¹²³に出頭しなければならない。はらはらする。教師、教育関係者、事務員、医師などで、ファン・デル・ホルスト、ブロムベルフ、スカルジョ、サルジト他)がそれに含まれている。私たちはここスマランの町の上手からトラックを1台1台見つめるのである。…中略…

警察は、欧州人またそれと同等の男子は全員4月24日の午後6時前までにニッポン軍政まで届け出なければならないという通知をちょうど配布したところだ。つまり、全員強制収容されるのだ。これが私たちが考える妥当な結論なのだ。それだけに、冷静かつ快活でいることはむずかしい。

ヒューセン

1942年4月27日

クララとラート先生と一緒に学園祭に関する会合に出席するために市役所へ行く。4月29日の朝早く行進が行われるようだ。¹²⁴

ヒューセン

1942年4月28日

帰宅すると、クララが再び4月29日の件で市役所のID¹²⁵長からのマレー語の手紙を見つけた。このスラット[手紙]も一日遅く届いたために、もう私たちの生徒を集合させることができない。

¹²³ ボジョン通りに所在したSociëteit 'De Harmonie' (クラブ「デ・ハーモニー」)。

¹²⁴ この行進は、日本の裕仁天皇の誕生日を祝うことと同時にスマランへ進軍した占領部隊の入城式であった。(Brommer 他., 43)

¹²⁵ おそらく、教育関係のInspectie Dienst (調査部) の略とおもわれる。

私はヒュガイに電話し、彼女がスマルノに伝えて私たちは電話でできるだけ多くの子供たちに連絡して、彼らの友達と一緒に集させるようにした。それ以外仕方がないのだ。ベップ・ニーケルクは不機嫌で、行進に参加する気が全然ない。私たちも同じだ。その晩は電話が引っぱりなしにかかった。たくさんの親たちから電話があり、男の人たちのために大半が協力を申し出た。各自が参加すれば、学校が再開されるだろうとささやかれている。

ヒューセン

1942年4月29日

テンノー・ヘイカ[日本国天皇]の誕生日。5時半に起床すると、すぐにもヒュガイから電話があつて、私がスタジアムに来るかとのことだったが、すでに生徒たちとルックス¹²⁶で約束していたこともあつて当然ながら断つたのである。ベップはひどく不機嫌。雨だったが、私たちが自転車でそこへ向う途中で上がった。まだ、真っ暗だった。クララと私は自転車をルート・ビルケンハウエルのところへ置きに行ったが、彼女は何も知らなかったのも、こんなに早い時間に私たちを見てひどく驚いていた。私たちは駆け出して、ルックスで20人の子供たちを出迎えた。私たちはそのままヒュガイとティーネ・ホルスヘイマーとイット・スキッペルのグループと合流するまで歩き続けた。しばらくして、私たちは全部でおおよそ80人もいることが明らかになった。私はこの人数を急いで「祝賀」委員会へ届け出た。

もうひとつのグループが到着し、全部で100人にもなった。私たちはみんな「しゃくに」障っているのだ。私たちは、HBSの残り、中等普通学校、スタジアム方面から来てひとつのボードを持っている中等商業学校と一緒にいる。そのため、ひとつにつながるように私たちのグループを列に沿って走らせうまいいった。この分隊はスマルノの指揮下、後ろに女性たちデ・ブール、リットマン、エヴェリーン・クラネンドンクが続き、しばらくしてデ・ヨンゲ・ファン・デル・ハーレンが加わった。私たちはゆっくりとHBSに向かって行進した。そこで長く待たされ、ニッポンの将校が外で整列した時に、ひとりが私たちのところに近づき、彼らに向かい3回「バンザイ！[万歳]」をするよう忠告した。これは実行されたが、そのバンザイ三唱は原住民側からで、私たちからはなかった。順調に私たちは行進を続けた。

地方裁判所付近で、¹²⁷ 監視のそばを分列行進し、彼らの小旗を手にした全員が調べられ、撮影された。そして、ボジョン通りを経由してアローン・アローン[町の広場]へ向かった。そこで私たちはシロップをもらってから解散した。私は、朝食にクララと私を待っているルート・ビルケンハウエルのところへ向かった。彼女のところで私たちはすっかり満喫したのである。その間に、パレードはHBS付近で行われていたが、私たちはそこに近づくことができな

¹²⁶ スマラン下町のセテラン広場沿いに所在したルックス映画館のこと。

¹²⁷ ウィルヘルミナ広場沿いの地方裁判所内には、日本軍の占領中、中部ジャワ憲兵隊の本部が置かれていた。

った。11時半に帰宅すると、今日の午後の2時から4時までジャチンガレーの男子に面会できることを知った。

ヒューセン

1942年5月2日

ブロデット夫人と一緒に登録のために市役所へ行き、登録料の80ギルダーを銀行からの支払いが許されるようインドネシア人の教員に手紙を作成させたベップ・ニーケルクが家に訪れた。1時にクララと私を登録するためにふたりの警官が来た。彼らはまだ給料をもらっていないが、業務を放棄することも許されていない。…中略…

昼休みのあと、私たちはハッピーと一緒にペテロンガン方向に散歩した。ハッピーはクサリなしで歩き、心行くまで楽しんだ。運良く、ほとんど車が走っていない。さもないと、ハッピーはとっくに引かれてしまったであろう。私たちはフリッツに出くわし彼と一緒に歩いて戻った。私たちは第2管区に立寄り、スタルト署長から、ブランダは全員ラジオを提出しなければならないと聞いた。いやなことなので、私たちはしばらく驚きを隠せなかった。帰宅すると、バクりに私のラジオ受信機の箱を隠させた。夕食後、フリッツと私はそれをきちんと包んだ。その底に私の名前を切り込んだ。あとで私の手元に返ってくるかわからないけれど！フリッツは私のコレクション用に白紙の登録証明書を持って来てくれた。¹²⁸

ヒューセン

1942年5月3日

ファン・デル・ホルスト医師と一緒に私たちの家へ来て泊まり、インドネシア料理を食べて過ごす予定だ。フリッツも来る。4人でなごやかな時を過ごす。ドクターと私は、モーレース夫人とエヴェリーン・クラネンドクに会ったが、その際、彼女たちはラジオを提出する必要がないと私たちに告げた。E. A. オリーヴェが訪れ、ジャワ銀行についてとても悲観的な気持ちになっていた。¹²⁹

クララはその間に第2管区へ行き、彼女もそこでラジオを出す必要がないと聞いた。私はそれでもラジオをしばらく包んだままにしておく。…中略… 10時半（ニッポン時間）にフリッツが家に帰った。しばらくして、電話が鳴った。ティーク・シーモンスが灯火管制だから明かりを消すようにと注意してくれたのだ。クララが警察へ電話をすると、事実外灯を消さなけ

¹²⁸ 教師ヒューセンは、日本軍の占領初期からさまざまな新聞、通告のチラシや物品を収集していた。「序」参照。

¹²⁹ E.A. オリーヴェ氏はジャワ銀行で簿記係をしていた。

ればならないということだった。HBSの校舎は真っ暗だった。私は路地を下り、ラフルール、キリアーン、ウェーニクの三夫人に注意した。ドクターはファン・ブリュッセルに電話したら、彼らのところではすでに知っていた。ドクターは私たちの家に泊まることになった。そうする必要があるかのようにだった。最初の灯火管制を3人で。それだけに、よりなごやかな気分になる。

ヒューセン

1942年5月4日

クララ・ハオウインクと一緒に、欧州人が長い列を成して登録させている市役所へ行った。そこで、ファン・ウールコム一家やかなり大勢の人と話した。私たちは、支払いの延期または郵便貯金からお金を引出す許可を得るつもりだ。BPM¹³⁰ では、ヤップ将校と話すことになり、彼があまりにも下手なマレー語をしゃべるので、私が彼に英語で始めたら激怒した。また、彼は何もわかっておらず、スラバヤから詳しい情報が入るまで待つようにと私たちに言った。ユング家に寄ってから帰路につく。途中第2管区へ向かい、スタートからおよそ10人の欧州人が登録したことを知った。警官はまだ何も給料を受け取っていない。部分的な灯火管制が続いて敷かれた。

ヒューセン

1942年5月7日

灯火管制は再び解除された。

ヒューセン

1942年5月9日

第2管区で登録にかかわる。ニッポン兵士4人と役人4人がいた。私は、オランダ語で話しかけられた。バタビアの行政部のインドネシア人が私のために記入した。私はズス・ラゴネと一緒に、ほかには一人もいなかったのに順番（68！）をもらった。¹³¹ …中略…

帰宅すると、第2管区のサリープが記入する用紙を持って来た。多分、今後手助けしてもらえるかも。あとで、私たちの署長のスタートが自らやって来た。なぜならば、きちんと記

¹³⁰ ボジョン通りのクラブ「デ・ハーモニー」の隣りにあったBPM (Bataafsche Petroleum Maatschappij N.V. バタビア石油会社)の建物は、日本軍により政務部の事務所として使用されていた。これは、蘭印内務部に代わり最初に任務を務めた行政組織であった。(Brommer 他., 42, 147, 149)

¹³¹ 大半の人々が市役所で登録を行った。「食糧・物資事情及び就労状況」ヒューセンの日記 1942年5月9日参照。

入されていないところがあるので、その作業を手伝ってくれたのである。そんな訳で時間が早く過ぎ、私たちには気分転換となる！

ヒューセン

1942年5月21日

私たちは、郵便貯金銀行用の通知に記入しなければならない。なぜ？

ヒューセン

1942年6月12日

明日か月曜日に、ラジオを市役所へ。それゆえ受信機は無益にされる！

ヒューセン

1942年7月1日

私はブロンベルフのところで、ファン・ホルスト医師、ハネケ・ハイマンズ医師、そしてCBZ（中央市民医療施設）の欧州人看護婦全員が解雇されるだろうと聞いた。薬剤師のブロムベルフとファン・ドルト医師だけはまだ必要とされている。ファン・デル・ホルストにはまだひどい驚きが残っていた。

ヒューセン

1942年7月2日

ほとんど全てのブランダ・トトック〔純血オランダ人〕男子が、7月3日金曜日の9時に地方裁判所へ出頭するよう呼び出しを受けた。誰もが強制収容を予期していた。到るところで激しい動揺が。私は、クリプス夫人がとても落ち込んだ気分で告げに来たテガロンボのウェストラ夫人のところでこのことを初めて知った。

ヒューセン

1942年7月3日

いつもの時間にグルガジへ行った。ディック・ブロムベルフも出頭しなければならず、詰めたリュックサックを持ってケースとヘンクに連れられて行く。授業がなかなか進まなかったが、みんなで何とかがんばった。ブロムベルフ夫人はもう我慢しきれず、自分で地方裁判所へ行くことにした。というのは、リーンチェがディックは「不利な」側にいるとの知らせを持って帰宅したからだ。彼女は、ステーネケル夫人から息子のゲルブラントをうまく釈放させたと聞いた。ブロムベルフ夫人もこれと同じように、彼女の夫は1ヶ月に依然475ギルダー稼いでいると伝えたことにより成功した。ちょうど到着したミス・ファン・オールト医師も同じことを彼女の息子ピートのために行きこれも成功したのだ！

私の授業（上級生10人中の4人の生徒！）が終わったあと、しばらく残っておしゃべりし、ブロムベルフ夫人が薬剤師モーイからプレゼントされたチェリーブランデーをディックが本当に戻ることを祈って一杯飲んだ。私は、授業の合間にクナリーランでブロムベルフのところへ電話したら、ディックは事実、家に帰っていた。要するに最悪のことは起こらなかったのである。大勢が今晚はお祝いすることになる。

ヒューセン

1942年7月24日

新たなショック！「ブランダ・トック」の男子は全員さまざまな管区に出頭しなければならない。事実、ほとんど全員が強制収容される。赤い腕章、いや、むしろ赤い丸が付いた白い腕章¹³²を装着した人だけは免れる。また、ディック・ブロムベルフ、リノ・ローゼンタール、その他多くの少年たちも含まれている。ピート・ファン・オールトは今は病気だが、あとで行かされるだろう。さらに詳しい情報によると、ボイケルマン（NIS）とブルックハイセン（SCS）¹³³も連行されたようだ。ムリア通りでは、男子3人全員、つまり、ウィーボルス、D. ファン・ウールコム、リートマイヤーが！授業のあと、急いでそこを訪れた。彼らは立派に振る舞っている。

¹³² ニッポンワーカーが装着させられた腕章。脚注36参照。

¹³³ 技師H. R.ボイケルマンは、Nederlandsch-Indische Spoorweg Maatschappij N.V.（蘭印鉄道会社 略称NIS）の本社に関係していた。彼はNISの取締役会会長であったほか、スマラン商工会議所の会頭、HBS委員会の会長も務めていた。技師M.Ph.ブルックハイセンは、Semarang - Cheribon Stoomtram Maatschappij N.V.（スマラン-チレボン 蒸気式路面電車会社）及び Samarang - Joana Stoomtram Maatschappij N.V.（スマラン-ジョアナ 蒸気式路面電車会社）の開発部長だった。また、彼はスマランのHBSを含む、さまざまな学校の委員会でも役務を果たしていた。

ヒューセン

1942年7月26日

本当にびっくりしたことに、バーレンツがまた家に戻ったのである。彼は昨日、フェルミューレン、ウェストブルック、（眼科病院¹³⁴ の）ピロン医師を含むほかの5人の技師とともにジャチンガレーから釈放されたのだ。クララと私は、さっそく「キャンプ用」バラン [ここでは、強制収容された場合に必要物品をいう] を、まずは、登録証明書に「ブランダ・インド」と明記されているフリッツのためにえり分けているところだ。昨日の朝、私は、ボジョンでの授業前にふたつの水筒と一組のゲートルを男の人たちにとポップ・ウィーボルスへ手渡した。

ヒューセン

1942年7月27日

さらに詳しい情報によると、ファビウスと市外のふたりの技師も釈放されたい。クララ・ハオウインクは、自分の証明書にある「トトック[純血]」を「インド」に変えさせようと考えている。食べ物などはまだジャチンガレーへ差し入れできるのでとてもよい。2時、授業のあとで、CBZへ行きファン・デン・ホルスト医師を訪れた。ブントラン・マルトアドモジョ医師は、彼を計略にひっかけ、ファン・デン・ホルストの代理の者がすでにいるとケンペイタイのヤブに告げたのである。¹³⁵ その人は、60歳以上の退役したお年寄りで、病理解剖学のことを全然何も知らないことを認めすらないタンカウ医師であるらしい。

ヒューセン

1942年7月28日

本日、「話」によると、ゴールドマン、エイド、ストラテマイエル、アルガウエル、ブルックハルスを含む男子57人が釈放されたそうだ。多くの人々にとり真の安堵となる！でも、いつまで？クララはBPM（ケンペイタイ）¹³⁶を訪れたが、そこは非常に立て込んでいたようだ。

¹³⁴ チャンディ地区の救世軍「ウィリアム・ブース」眼科病院。

¹³⁵ ブントラン医師は、インドネシア民族主義政党パリンドラの支部長であったと同時にスマランのPekope（戦争被害者援助）の会頭であった。脚注23参照。

¹³⁶ 日本軍占領中、憲兵隊の事務局はスマランのウィルヘルミナ広場沿いの地方裁判所内に所在した。クラブ「デ・ハーモニー」の隣りのBataafsche Petroleum Maatschappij N.V.（バタビア石油会社 略称BPB）の建物には「政務部」があった。（Brommer 他., 147, 149）脚注 129参照。

ヒューセン

1942年7月30日

今朝、ジャチンガレーの男子の最初の分隊が出発した。どこへ？¹³⁷ ディック・グロートホフとパウル・ファン・デル・ウェルフも同行しているらしく、たくさんの年配の男子もだ。スターペルが再び連行された。明日またグループがひとつ去り、リノ・ローゼンタールもだ。テガロンボでの授業のあと、ファン・ウールコムのところへ寄ったが、ディックは在宅していなかった。理解できない。彼は自分の会社を持っているはずなのに。アンス・ファン・ウールコムは、現在この会社を処分したがついている。多くの女性にとって、今はつらい時だ！

ヒューセン

1942年7月31日

二番目の分隊が不明な目的地へ向かって出発した。その中には、ボイケルマン、リノ・ローゼンタール、ハン・ワルメンホーフェン、ウィーボルス、ヘンネマンが。雰囲気はどこも非常に沈んでいる。ブルックハイセン、ファン・ウールコム、リートメイヤーもだ。

ヒューセン

1942年8月2日

昨日、ディック・ブロムベルフがほかの大勢と出発した。そして、今朝、私がハッピーと外を散歩していたら歌声が聞こえた。そう、四番目のグループに出会ったのである。私は一緒に歩き、歌ってはおしゃべりした。彼らは気分上々で「ああ、すばらしき色合いのあなた」などと歌っていた。彼らによると、明日は残りの約50人が出るそうだ。両側から厳しく監視されていたが、ヤップは私を追い払わなかった。

¹³⁷ ジャワ南東部のクシリール農園エステートへ。そこでは中部ジャワと東部ジャワからの被抑留者が強制労働に課された。（「市外との接触/戦争捕虜・民間人被抑留者との接触」ヒューセンの日記 1942年11月6日から12月12日までを参照）。

ヒューセン

1942年8月9日

欧州人女性が全員解雇されてしまった。私は今朝、やはり解雇された不動産登記所のウィース・マウリックと話した。同じく、政庁のエンゲルケス夫人とその他多数も。この後者の夫人は、一週間に全てを経験した。ご主人がクシリアルへ、自身は解雇され、自宅にランポッカー [略奪者] そして引越と！

ヒューセン

1942年9月4日

フリッツ・レーペルが、私に代わって戦争税15ギルダを支払った。¹³⁸

ヒューセン

1942年10月1日

トトックの女性の間で、強い不安が抱かれている。彼女たちはまず間違いなく、収容所へ入れられるからだ。英国人男子が先週逮捕され、私が知るかぎりでは、スラバヤへ移送されたのだ。数日前、英国人女性も強制収容され、カリサリの修道士学校へ移された。ウッドフォード夫人もそこにいる。彼女は本当は印人である。彼女たちがどのようなことになるか明らかでない。オーストラリアで日本人との捕虜交換と思われている。

ヒューセン

1942年10月2日

今日、「保護居住区」のことでリストに記入しなければならない。ヘッティ・リートメイヤーは、自分もそれに該当することを知って、とてもとり乱していた。…中略… 今日の夕方に、「赤丸税」の通知が届いた。¹³⁹ 私は10月15日前にこの税金について決めなければならない。だから、できるだけ明日中にそこへ相談に出向く。

¹³⁸ 「序」参照。

¹³⁹ この「赤丸税」とは、戦争税を意味する。（この章のヒューセンの日記 1943年8月12日参照）。

ヒューセン

1942年10月3日

「財務部」へ行った。私の税額をまだ決めることができない。3月1日の会計課の書類がないため、支払済みの所得税を彼らは今まだわからないのだ。「赤丸税」に対してまだ何も査定され得ないのである。そんな訳で、私は10月30日には全額支払い不能なグループに属するのである。バタビアから新しいクテランガン [通達] が来るまでしばらく待つべし！

ヒューセン

1942年10月23日

たくさん話し合い末、「保護居住区」が準備完了した。ミス・ファン・オールトによると、私はそこに入る必要がないが、ヘッティは入らなければならない。その場所はソンポックが決定的だ。また、先週、男子全員がスラバヤから西部へ移動されたらしく、女性たちはみんなひどく意気消沈している。どういうことになるのか？

多数の自家用車が引き取られた。私のプリマス車H - 59は、アンヘネント医師のところにはなく、総督の家に置いてある。この医師は損害賠償の証明書を持っていたらしい。…中略…

7時半帰宅。全員がいらいらしており、ヘッティとアンスは泣いていた。ヘッティに「収容所」の記入用紙が届いた。つまり、彼女はそこに入らなければならない。私はまだその必要がない。ヘッティはジャングリの女友達3人に見捨てられたのだ！彼女たちはその収容所にヘッティと一緒にいたくなかったのである。私たち全員はこのことを恥すべき態度であると見て、彼女がほかの人と同居できる解決策を探すことにした。ハッカー夫人がちょうど自転車で到着し、ヘルウィッヒ夫人とふたりの子供にはまだ誰もいないと語った。明日早々にその対策を打つ。

ヒューセン

1942年11月3日

高貴な日本の祝日である。¹⁴⁰ インドネシア人は出席しお辞儀しなくてはならない。私は、クスマーの子供たちエマとイキンから、彼らはスタジアムへ行きスポーツなどをしなければならないと聞いた。この日のために特別な曲が歌われる。

¹⁴⁰ 11月3日の明治天皇の誕生日を祝う「明治節」。(Jansen, XLVIII)

ヒューセン

1942年11月27日

今朝、ヨーチェ・ウイからニッポン人の挨拶についての宣伝ポスターをもらった。コレクションが増す。

ヒューセン

1942年11月29日

夕刻に、下の女性や少年たちの多くが、11月30日月曜日にデポックへ出頭すべく呼び出しを受けたとの電話がベエー・ブロムベルフからあった。これは混乱を生じさせた！今度は何が起こるのだろうか？

ヒューセン

1942年11月30日

女性たちに対する呼び出しは、デポックの警察による誤りであった。しかし、男子のことは悲痛なる真実だ。ベエー・ブロムベルフと、授業の合間にデポックへ行った。第3管区の構内に大勢が集まっていて、その中に、息子ヤンのためにノールトフック夫人、家族で最後に残った息子マーリウスのためにローゼンタール夫人がいるのを見届けた。彼女は相当打ちひしがれたようだが、気丈に振る舞っていた。ピート・ファン・オールトは、ダイネマ(!)の助力により、(コーヒー・ファン)での仕事を理由に再び自由の身にある。同じくエイドもその中に含まれる連行されてしまった男子もたくさんいる。上では、ロッピー・ストラテマイエルがほかの人とともに捕まった。ヘルマンは「清算中の諸銀行」のためにまだ拘束されていない。

ヒューセン

1942年12月2日

昨夜、プロテスタントの孤児院(ボジョン)へ立寄り、マーリウス・ローゼンタールと話した。新たに強制収容された人たちがそこに移されたのである。前述の人たちのほかにも、トリーゼンベルグ(ホーホフェルト)、フェルベルクト、カピッツ、公証人ファン・デン・ベルフ、(「ゼ

ージヒト」¹⁴¹ の) カウスブルックなど、私が間違っていて覚えていないとすれば、合計約40人である。また、ウッドフォード夫人ともしばらく話した。彼女は元気なさそうだったが、快活に振る舞い、なんとかがまんでくる状態であると言った。彼女のご主人は、スラバヤのブブタン¹⁴² にいる。

ヒューセン

1942年12月4日

12月5日から10日まで灯火管制が敷かれると、ブロムベルフのところで聞いた。アンスは、ヤップのエコノミストのところで、ラジオが取り上げられたと話した。なぜか？ トリーゼンベルグは拘束されており、今、彼の奥さんは軍隊のためにパンを焼かされている。彼女のご主人が釈放されることを望んでいる。クナリーラーンのウルフの隣りの17番地で、警察が大宴会の開催を計画している。それは何を意味しているのだろうか？

ヒューセン

1942年12月6日

ジャワ全域にわたり灯火管制が敷かれたが、新聞によると訓練らしい。夕刻に私たちはそれでもアンスの部屋でなごやかに過ごし、食事もそこで取るのである。うまくいっている。夜間に空襲警報が1回あった。ニッポン時間の4時頃！

ヒューセン

1942年12月26日

さらに、私はメールディンク - ファン・フェーレン夫人から、鉄道 (NIS, SCS, SJS, Lindeteves)

¹⁴¹ 「ホーホフェルト (Maison Th. Hoogvelt)」は、スマランで1898年に開業した製パン・菓子店で、ヘーレン通り37番地に所在した。「ゼージヒト (Pension Zeezicht, Excelsior)」は、スマランのドクター・デ・フォーゲル通り6番地に所在した。

¹⁴² ブブタンは、スラバヤのブブタン / コブレン・キドゥールにあった服役刑務所。占領直後の数ヶ月間、ブブタン刑務所は、東部ジャワと中部ジャワの一部からの強制収容された官吏やその他民間人男子の集結場所であった。1942年7月には、ブブタンはクシリール農園エステートへ移送される被抑留者を対象とした集結地点でもあった。占領全期間にわたって、ブブタンは、強制収容所であった以外に本来の服役刑務所としても使用された。(Van Dulm, 他., 169)

¹⁴³の欧州人職員が全員即時解雇されたと聞いた。加えて、ブラウエル、デ・フォス・トット・ネルデルフェーン、グルーネフェルト、ウェステルマンは、AVC要員¹⁴⁴として派遣されるためにトランクを持って届け出しなければならない。メリー・クリスマス！私は自転車を走らせて行ったブロムベルフ医師のところ、この全てが本当であると知った。コー・ノールトフックも解雇された。

ヒューセン

1943年1月1日

ANIEM、PTT、ガス会社の多くが解雇された。印人と数人の「不可欠な」トトック [純血オランダ人] のみが職に留まった。アンス・ファン・ウールコムも解雇が予想され、ひどく神経質になっている。

ヒューセン

1943年1月3日

ランベルサリ収容所が1月8日をもって封鎖され、新チャンディ通りでは1月10日までに立ち退く必要があると言われている。各所の図書館の本の返却が要求されている。私たちはもう本を読むではないのだ。

ヒューセン

1943年1月10日

昼休みのあとで、「ソンポック」が1月12日火曜日にブトゥール [本当に] 封鎖されるとの情報とともにトゥルーデ・ハッカーがムリア通り3番地に駆けついた。今朝、このことが女性たちに通告されたのだ。そのため、「しばらくの間」誰もそこを出入りが許されず、使用人は全員解雇される。明日、早急にヘティ・リートメイヤーのところに本などを持っていこうと思う。

¹⁴³ ここの略称は順に、Nederlandsch-Indische Spoorweg Maatschappij N.V. , Semarang-Cheribon Stoomtram, Samarang-Joana Stoomtram, Lindeteves-Stokvisである。この最後に述べた企業は、オランダ領東インドにおける有力な貿易会社として鉄製品等を供給していた。(Brugmans 他., 645)

¹⁴⁴ このAVC要員とは、蘭印軍のAfvoer- en Vernielingscorps (移動・破壊工作部隊) の隊員を意味する。破壊工作部隊は、1940年にジャワ島の全てのレジデンシーと市町村に配属された。その任務は、日本軍の上陸が成功し進軍した場合を考慮し、重要な施設と備蓄品を最低6ヶ月間使用不能または安全な場所に移動することにあつた。特別に設置された移動・破壊工作委員会により、自治体ごとに破壊もしくは移動を必要とする物件が決定された。スマランのAVC委員会の会長には、スマランにおける最大企業のひとつであった石油会社Van Dongen's Industrie Mijの経営者J.ファン・ドンゲンが務めた。(Brommer, 他., 36-37)

ヒューセン

1943年1月12日

今、ランペルサリは閉ざされた。いつその状況を知ることができるだろうか？これこそ本物の強制収容だ。

ヒューセン

1943年1月31日

テガロンボのウェストラ家で、驚いたことに、ウィーボルス一家やほかの家族が2月6日までに引越し、「スマア・バラン[全部の荷物]」を持っていかれるが、明朝、第2管区へ出向くべく通達を受けたことを聞いた。すぐに彼らのところへ！ええ、本当にそうだった。彼らはこの前の引越のあと、カーテンは吊ってなかったが、その他はやっと整ったばかりだったのに！ポップはこの二日間に、家中を整頓し快適にする機会を得たのである！隅々が片付けられ、隅々がきれいになり、隅々が快適に！彼女は全く元気がない様子をしているが、見かけは落ち着き払っている。…中略…

昨日、デッポックでたくさんの少年たちが立っているのを目にしたが、事実、多数が再び連行され、サラティーガへ移されたのだ。ピート・ファン・オールトは釈放された。ラガーイ一家の息子たちがその中にあるようだ。ほかの人の名前はまだ知らないが。

ヒューセン

1943年2月1日

チャンディの人たちのことで一日中緊張して過ごし、ガウトベルフ一家での午後の授業の際に、彼がヘルマンと話したところによると、引越はしばらくの間決行されないとのことだ。彼らは全員ジョンブランでの行進に赴くらしい。

グルガジでファン・デル・ホルスト医師と話している時に、彼からも引越の否かについてのもすごいお話を耳にした。彼は、インターナチオ¹⁴⁵ で働いていてスラバヤへ行かされるフェルカウテレンの家にいる。しかし、このことは依然、決定的でなく、いつも延期されている。1月30日土曜日にサラティーガへ移された人の中には、ジャック・ファン・レース、ラガーイ家のひとり、仕立て屋のセンス、オースターリング、コー・ノールトフックがいる。ヘルマ

¹⁴⁵ Internationale Crediet- en Handelsvereniging 'Rotterdam' N.V. (Internatio)

ンも第4管区へ届け出しなければならなかったが、どうも間違いだったらしい。彼の奥さんポップは、ことのほか驚いている。

ヒューセン

1943年2月3日

全てのトトックの女性を探し求めて、集めることがなされているらしい。今度は、グルガジの番だ。ブロムベルフ夫人も警察に出頭しなければならないし、上の人たちが1月31日日曜日に受けたのと同じスラット[呼び出し]をらしい。…中略…

(クナリーラーンの)ファン・フリート夫人は、「収容所」へ行かなければならない通告を受けたためにとり乱していた。彼女は東インドで生れたので、これは誤りであったようだ。だが、ヴォーテーと同居しているグルゲン夫人は行かねばならない。彼女はトトックであり、ヴォーテーがずっと「保護」¹⁴⁶ しているのに何の助けにもならないのだ。スナリオ通りでも、すでに「人」が通告を配布したらしい。聞いたところによれば、ヒュガイ・フォスは、女性ニッポンワーカー¹⁴⁷ として居住を許され、ホルスヘイマーは日常業務をすることを許されているが、ステーション・ブリュントは「収容所」へ行かされるのだ。ラクロワ夫人もふたりの子供とともに同じ運命を定められている。

ヒューセン

1943年2月4日

バンドンガンでも、「人」は、連行を始めている。お年寄りと病人、みんなアンバラワへと連れて行かれる。¹⁴⁸ ウォルサック一家も家から追い出された。彼の病気が原因で全部燃やされることになる。彼らが今度はライ療養所へ行く必要がないように！聖エリザベト病院からは、ファビウス夫人¹⁴⁹ と子供たちを除く、女性の患者全員が出される。コース・ステーネケルによると、(ゲニーラーンの)グリーデー家が家を立ち退かされ、「収容所」へ行かされるとのことだ。

午後、授業の前にアンドゥン通り2番地へ自転車走らせポップのところへ寄った。引越に関しては、幸いにも今のところ何の問題はないが、早々に鉄条網で囲まれるようだ。アンス

¹⁴⁶ 脚注78参照。

¹⁴⁷ ヒュガイ・フォスは、「南部・東部ジャワ農業試験場」の南部ジャワ部門で働くことになった。教師ホルスヘイマーは日常業務のヘルパーとしての役目を果たした。(NIOD、蘭印日記コレクション、IC 89B; 2b, J.J. Huussenの日記)

¹⁴⁸ これらの人々は、婦女子用と男子用の収容所がさまざまな地区にあったアンバラワに強制収容されたことを意味する。

¹⁴⁹ ファビウス夫人は、ドイツ出身であった。(NIOD、蘭印日記コレクション ; IC 89b, J.J. Huussenの日記)

は「労働カード」のために写真を2枚撮ってもらわなければならなかった。私のことは2度尋ねられたが、彼らは私の住所を知らなかったのである！

ヒューセン

1943年2月5日

ノールドフック夫人と同居人たちは「収容所」へ入れられるし、ほかにも大勢がだ。ボジョン通りのメゾン・マリノへ自転車をとばした。ローゼンタールとヘンネマン両婦人は、2月12日にブリンビン通りの「収容所」へ引越さなければならない。その前に彼女たちは、1942年12月にクシリールへ私が行ったお返しに、タダでパーマをかけてくれた。¹⁵⁰ とても上手にやってくれて、私は間違えたようになって2、3時間したあとに家へ向かった。ふたりはたくましい！フレディ・メールディンクから聞いたけれど、ヘント・リットマンが「収容所」に入るべく通告を今朝受けたということだ。

ヒューセン

1943年2月10日

同じく、ファン・エイゼレン夫人もふたりの幼い子供とともに今日入所しなければならない。ブランド・トックの全ての会社は近日中に閉鎖させられる。…中略… 昨日、ウェストフーフエ技師が、(起こるはずのないことだったが)強制収容されてしまい、今日はメールディンク技師がだ。¹⁵¹ ふたりは何ヶ月にもわたりニッポンのために働いたのだ！これは感謝の印しとして。でも、彼らは当然知りすぎているのである。

ヒューセン

1943年2月11日

今日はまた高貴な祝日だ。¹⁵² 大勢がスタジアムに出席し歌ったりなどしなければならない。ペ

¹⁵⁰ 「市外との接触/戦争捕虜と民間人被抑留者との接触」ヒューセンの日記 1942年12月8日参照。メゾン・マリノは、ボジョン川沿いの37番地の美容院が付いた理髪店であった。ローゼンタールとヘンネマン両婦人は、この店のふたりいたマネージャーのそれぞれの妻であった。ヘンネマン夫人の夫W.J.M.ヘンネマン氏とローゼンタール夫人の息子リノ・ローゼンタールはクシリールに収容されていた。

¹⁵¹ K.L.J.ウェストフーフエ技師は、「セラノ水利部」に関係した建築家であった。J.G.メールディンクは、水利部の部長を務めていた。

¹⁵² 当日には、紀元節（天皇即位による日本の建国日）が祝われた。

テロンガンからカラntenガーへの道中、私はボジョンでインドネシア人の民兵の前を通りすぎた。最前列の者は木刀を持って緑色の服装をしていた。残りは、制帽だけをかぶっていた。

ヒューセン

1943年2月21日

私たちは、イット・スキッペル、ティーネ・ホルスヘイマー、カウスブルックのお嬢さんたち、スワーン夫人、グライダヌス他、非常にたくさんの人々が収容所へ行くべく通告を受けたと聞いている。私は目立たないようにする！

ヒューセン

1943年2月22日

まず、第4管区を通らないようにしてペテロンガンへ。ペテロンガン13番地で、ヘルダ・ズーフエルクロップが第2管区へ出頭すべく呼び出しを受けたことを知る。彼女は9時にそこへ向かい、1時になってやっと帰宅した。彼女は父親が「トトック」なので3月1日月曜日に「収容所」に入れられる。私がともしっかりしていると思ったのは、彼女は父親を否認しよとしなかったことだ。あとどのくらい私が外に住み続けられるか興味をそそるのである。私も去ってしまったら、マリオンはきっとうんざりしてしまうだろう。

ヒューセン

1943年2月23日

ヘルダ・ズーフエルクロップは、第2管区のスタルト署長のもとへ赴いたが、彼女の年老いた祖母のことで、多分「収容所」入りを延期してもらえるかもしれない。彼女たちは私のことも話した。スタルトは、「もしヒューセン先生が今後表に現われると、私の部下が彼女を放っておくであろうとは保証できない。全管区で彼女を捜すであろう」と言った。私はペテロンガン13番地から去る予定だ！

ヒューセン

1943年2月24日

大騒動。ソンポック通りの女性と子供たちは「居住区」へ行かなければならず、それも明朝になるのだ。そして男子はハルマヘラへ向かう！同じくレーシクとケース・ブロムベルフも呼び出された。…中略… 私はマリオンのもとへ行った。昨日私の助けを求める声に対する彼女の返事は、私がおっと冷静な気持ちでいるようにとのことだった。…中略… 午後4時になって、私はトラックを詰め終え、バクリにはそれを上へ持って行くよう、そして、レインコート、帽子、ベガネは自分で上へ持って行くと告げた。その途中で、6人の見張り（警官）にめぐり合ったが、捕まらなかった。タナー・プティでイット・ワウドストラに会ったが、彼女はまだ自由の身にあり、これまで運がよかったのだ。

ヒューセン

1943年2月25日

男子や婦女子の強制収容に関するニュースがさらに増す。全員がごく早急に収容所入りしなければならないのだ。ハルマヘラは、至極ご満悦の男子対象として閉じられた。バクリは私に代わって買物やいろいろなところに手紙を届けてくれる。

ヒューセン

1943年2月28日

スース・ホーヴェンが挨拶に来た。彼女と母親は3月1日月曜日に収容所入りする。ヘルダはクラーク・ハオウィングが別れを告げに来たと言った。クラークは1週間前にレーペル夫人（！）となったが、このことで収容所入りを免れることはできなかった。ガン・シュマルツとシンゴトロ通り全体が収容所へ入らなければならない。リントナー - ペティ夫人とホイベル一家だけがまだそこに住んでいる。コーブス嬢、デ・ブール一家、デ・ブラウン夫人たちはみんな追い立てられた。

ヒューセン

1943年3月1日

運命の日！¹⁵³ 本日から3月9日まで、私たちは旗を揚げなければならないのだ！

ヒューセン

1943年3月8日

今日と明日は降伏¹⁵⁴ 存続の祝賀がある。彼らのいる下へ私たちは行かないのだ。ボーン・ファン・オスターデ夫人は第2管区へ出向かねばならない。そのことは「収容所入り」を意味する。マリオンはボーン・ファン・オスターデ夫人に会いに下へ行き、全員の警官がボジョンの本署にいるため、彼女をここに連れて来た。彼女がとても元気ないが、おまけに彼女はアフタに雇われているのだから疑う余地もない！

ヒューセン

1943年3月10日

ファン・フリート夫人、ハウトザーヘル夫人、フォスマール夫人は明朝、第4管区へ出頭すべく呼び出しを受けた。ハンス君がウィーボルス家へ私の手紙を届けて戻って来た時、彼はこの呼び出しをほとんど全員が受け取ったと語った。また、リンケル夫人はヒューゲンホルツ氏へこれから来るはずと伝えた。同じく、エルナ・リーフヘイトとリュバイ・バウマンもだ！マーセンとウィーボルスだけはこの呼び出しを受けてなかったようだ。

ヒューセン

1943年4月8日

午前中に、エルナ・リーフヘイトとポップ・ウィーボルスがお茶に訪れ、この件で、「忠実に」「収容所」へ入ったほうが良いかもしれないという話になった。私はしない。幸いに、マリオンもだ。

¹⁵³ 1942年3月1日は日本軍がジャワ島に上陸した日である。

¹⁵⁴ 一年前の蘭印軍降伏。

ヒューセン

1943年4月9日

ボアッセヴェン¹⁵⁵ が「欧州人の地区長」として解雇され、まだ家族等が収容されているゾンボック収容所が完全に封鎖されると言われている。

ヒューセン

1943年4月14日

バンドンガン、コペン、スマランの「西洋系外国人」（ドイツ人、スイス人等）は全員「グローテ・ハウス」へ出頭すべく呼び出しを受けた。彼らはお決まりの質問に答えさせられただけだった。マリオンは呼び出されなかった。

ヒューセン

1943年5月26日

ノイベルガー医師とリニの自動車が一昨日引き取られた。45分後に彼らのジョンゴス[使用人]は、クライスラー車がタナー・プティエの手下で粉々にされているのを見たのである。自動車は全部、すなわち徴用されるのだ。また、1942年3月に自動車（クライスラー・ウインザー 1941年型）をすでに取り上げたのに、ここにも警察が何度か訪れた。

ヒューセン

1943年5月28日

ファン・フリート夫人とリンケル夫人は赤い敵の腕章をもらった。彼女たちはこれから、それぞれ社会の敵416番と417番である。その腕章は右腕に付けるのだ。例えば、ヒュガイ・フォスのように、ニッポンのために働いている者は「赤丸」を左腕に付けるのだ。…中略… リントナー夫人は初めグローテ・ハウスでトックとして赤い腕章をもらったが、管区でその腕章を取り上げられてしまった。というのは、彼女は「印人」として登録されていたのだ。

¹⁵⁵ H.E.ボアッセヴェンは、日本軍占領時までスマラン市長であった。（「食糧・物資事情及び就労状況」ヒューセンの日記 1942年5月6日参照。

ヒューセン

1943年6月2日

マリオンはドイツ生れの人たちを助けるためにグヌン・サウオへ向かうべく葉書を受け取った。

ヒューセン

1943年6月3日

彼女はそこへ向かう予定で、財政援助を拒否し、彼女はナチスに傾倒していないことをはっきりと述べたのである。

ヒューセン

1943年6月10日

12時半にリーン・ファン・フリートが、ANIEMのドゥ・モッス氏やほかのトトックたちが解雇され、男子はハルマヘラへ、女子はバンコンへ行かされるとの知らせを持ってきた。2時にマリオンが戻り、ANIEMとともにガス会社でも解雇がなされ、今日明日にも番が来るとの知らせを持ってきた。マリオンとトースが寝床についたあと、私はまだ読書をしていたら、そこへファン・ヘット・ホーフト夫人（トースの同居人）がトース宛の通知を持ってきた。トースは明朝9時にトランクひとつとその他の balan・プルンニャ[必需品]を持ってバンコン（修道院）に行かねばならない。何と悲惨な！マリオンと私はそのことでひどく狼狽した。

エリー・ファン・フリートとトゥルース・リンケルがお茶に訪れた時、ふたりはまだこのことを知らなかった。そのあと、ドゥ・モッス夫人が来て、マリオンに彼女たちのエアデーテルリア犬を2、3日（！）預かってくれないかと尋ねた。夫人は、明日9時に警察が自宅を封鎖しに来ると言った。彼女が去ると、ホフステデー夫人が興奮して入って来た。夫人がレーベル¹⁵⁶ のところを訪ねたら、そこには人がたくさんいたそうだ。彼女はそこでクナリーラーンの女性たちも呼ばれるのを聞いたらしい。彼女が去ると同時に、リーンとエルスが来て、エリー、トゥルース、タヤ・ハウトザーヘル、フォスマール夫人、ブランド氏の名前と、明日の9時に第4管区に出頭すべきことが載っているリストを持って警官がひとり訪れたことを告げた。ひどく意気消沈！どうなることだろう。

暗くなってドゥ・モッスがルーズベルト（ロース）と言う名の犬を連れて現われた。立派な犬でとても愛らしい。彼は数日以上かかるだろうと考えている。夕食のあと、空のカゴを

¹⁵⁶ H.レーベル技師は、ANIEMの在スマランのエージェントであった。

いくつか持ってエリーのところへ歩いて行き、10時に、いっぱいになったカゴを持って戻った。私たちが彼女のバラン[見回り品]の一部を保管しておくのである。このことはこっそりとやる必要がある。なぜならば、警察に見つかるのであれば、「盗み」とされるから。自分のバランのだ。感情が高ぶって私たちはぐったり疲れてしまい、早めに寢床についた。

ヒューセン

1943年6月11日

マリオンは早々と下へ行った。トゥルース・リンクルが泣きながらここへ駆け入り、ひどく取り乱して椅子にしがみこんだ時に、私はまだ授業を始めていなかった。第4管区では、誰もトランクを持っていなかったのが驚いていたようだ。それで、みんな12時前までに準備を整え、第4管区のところまでバスを待たされる。5人も子供がいたり、3人の子供を持つタヤの場合は大変だ。私はマリオンの息子のハンスとエリックを手伝いに送った。私は残念だけれど行かないのだ。なんと無惨な！神経が高ぶってくる。何かひとつでもしようと思い、私の部屋を片付ける。その最中に、ブランドがお別れの挨拶に訪れた。30分後に、ヘーエー・ファン・デル・ホルストが来て、ルート・ビルケンハウエルは母親がトックなので心配になってできるだけ早く家へ戻りたがったが到着していないと知らせてくれた。また、私はヘーエーからノイベルガー夫人とトーマス夫人がエリー・ファン・フリートのところすでに食事などの世話を手伝っていると聞いた。ハンス君は、バラン[荷物]の車を予約するためにパンデアン・ランペル26番地へ行く。そのあと、彼はいろいろなものをここへ持って来る。エリーを励ますために行ったマリオンが時間通りに戻ってきてくれたなら！ノイベル夫人からは犬を預かってくれないかとのメモが届いた。私は、ドゥ・モッスの飼い犬がここにいるのでできないでしょうとの返事を送った。そのあと、私は緊張しながら待っていた。

正午にマリオンが下から戻って来た。彼女はトース・ボーンに代わって新しい証明書をもらいにノイベルガー医師のところへも行ったのだ。ハディノトによると、彼女は収容所へ入らなければならないのだが、彼女はCBZ中央市民医療施設に入院させてもらおうとしており、多分これが彼女を救うことになるだろう。再びマリオンは、とても混乱して、意気消沈したエリーとトゥルースのところへと向かった。…中略…

1時10分前。エリーとフランスと子供6人が、リュックサックとバランをいっぱい積んだ荷車を引いて歩いてきた。第4管区へ行く途中だ。まったく嘆かわしいことだ。その10分後には、タヤ・ハウトザーヘルがバランと幼い子供を3人を入れた乳母車を押しながら通った。2時15分にマリオンがまだ戻らないので、私はハンス君を自転車でファン・フリートの家まで見に行かせた。30分してふたりは一緒に帰宅した。その家は封がされたのだ。苦心した末、エリーは大きな戸棚ひとつと一組のベッドを持ち出したのである。一部のバランは私たちのところに持つ

てきて、残りは全部そのまま置き去りだ！ひどい。マリオンはもうだめだ。彼女は今日、バンコンの修道院に500人の女性と子供が着く予定だと聞いた。ぞっとする。合計千人と言われている！

マリオンと私は全然眠れないし、このことで私たちの神経をすり減らしてしまうのだ。マリオンは助けてあげられるからまだいいが、私は必要に迫られ、失業して家にいる。でも、マリオンには心から感謝している。4時半にテオ・バウマンが授業に来たが、私はその気分が全くしなかった。テオは、エリーたちがいる二つ目のグループは、第4管区のところで長く待たされたと私たちに話した。2時半頃に彼女たちは「トラック！」で発ったのである。幸いにも、近隣の人がスープなどを用意したのだ。私は彼からまた、その中に、ゼーゲルス氏もいて、マリン・メイヤー、ユース・プリンス、そして、驚いたことにアンス・ウールコムもいたことを知った。彼女も要するに解雇されたのだ。ポップ・ウィーボルスにとって、すごい打撃となったにちがいない。アンスは今度バンコンでも大いに貢献するだろう。彼女はウルス[手配]することが好きだし、彼女がする仕事が多分あるだろう。¹⁵⁷ これらの感情的なことのあと、マリオンと私は外に座っていたが、奇妙なほど静かだ。ズワーンも呼び出しを受けたが、彼の血圧は260だったので行かないのだ。ノイベルガー医師は、トースのために新しい証明書を（ドイツ語で）作成し、その中で彼女の病状の悪さが明らかになるようにした。もしトースが診察のためにCBZへ6週間入院することになれば、彼女の balan は押収されないのである。

エリー・ファン・フリートのジョンゴスのジョヨは、全員が到着したということづけとともにバンコンから戻った。エリーは今晚の食事を欲しがっていたが、この手紙が9時になってマリオンの手元に届いたことから彼女は今、食事なしで過ごさなければならないだろう。明朝、マリオンはパンを届けるようだ。ノイベルガーのところから帰宅したマリオンは、エリー、トゥルース、タヤ、そして彼女たちの子供9人が一緒にひとつの部屋に収容されたと言った。彼女たちは戸棚と椅子をいくつか欲しがっている。全員が小さいトランクひとつとチカル[ゴザ]だけを持って行くことを許されたサラティーガからの女性と子供たちを乗せたトラックが何台か着いたと聞いた。トトックの父親と原住民の母親を持つ人たちもみんな強制収容されたのである。

ヒューセン

1943年6月12日

ジョヨが指示を仰ぎに来た。私たちが持つてゐるものを全部使ってエリーたちに食事を作るのだ。その他に、彼はスプラプトが昨日にはちょうど遅すぎて持つてきた修繕済みの靴とタヤ・ハウトザーヘル夫人がすでに頼んでいたものであり、サラティーガのケッティング夫人が今朝早く持つてきたブラジャーとスポンも届ける。そのあと、私はエーリックとハンスと一緒に勉強を始めた。11時半頃に、ワイブル・フェルブラウ夫人が訪れ、エリーたちの balan [荷物] のことでマリオン

¹⁵⁷ A.J.(アンス)・ウールコム - ファン・デル・ワル夫人は、1943年6月から1944年9月までバンコン婦女子収容所のリーダーを務めていた。(Zwitzer, 356)

の助けを求めた。エリーは戸棚、アイロン台、テーブルと椅子を、タヤは子供用ベットを必要としている。マリオンは彼女に直接第2管区へ行ってバランを持ち出すための許可をスタルトから得たらどうかとアドバイスした。そのあと、マリオンはまずバンコンへ行き、中に入ってみんなと話した。大きな部屋とバルコニーがあった。パンをととてもおいしかったということだ。調理することはできないけれど、バブが来て洗濯をする。全てすっかり整頓されているが、腰掛ける家具が何もない。

マリオンはポップ・ウィーボルスと話した際、驚いたことにヘルダ・ズーフェルクロップとヒュヒリスターラー嬢もそこにいると告げたのである。リーンおばさんはどうしているだろうか？ポップは形勢を見極めるためにそこへ向かう。マリオンによると、バンコンは無秩序で大混乱しているということだ。応接間の家具を持って来た人もいれば、ほとんど何もない人が大勢いるのである。ワイブル夫人によると、ドゥ・モッス夫人のバランは一部だけが届いたらしい。マリオンはバンコンからバスでパサール・ジョハールへ行き、6月14日月曜日かいつかすぐにも解雇を予期しているケース・リーフヘイトに会った。第4管区でマリオンはユッリマン署長にあたったがだめだった。なぜならば、鍵は全部ニッポナーが持って行ってしまったからだ。私たちは、ここに蚊帳付きの子供用ベッド、籐のテーブルとベンチと2脚の椅子、木製のテーブルと私の最後の食堂の椅子、トゥルース・リンケルのアイロン台を集めた。トーマス夫人が見に来て、長椅子をもうひとつ加えたらどうか言った。こうして全員が座る場所を得るし、ミシン用のテーブルも。そのあと、マリオンと私は食事をする（4時）。子供たちは2時半にすでに食べた。マリオンは運搬作業でくたくたになっているが、それでも私がしていること、つまりじっと待つだけよりましだと私には思える。愚痴をこぼすのはやめよう。バンコンなどにはいたくないから。マリオンはもうひとつ情報を持って来たのだ。つまり、トース・ボーンはCBZに入院できなかったのだ。ブンタラン医師は、その必要がないとみたのだ。彼女はあと数日は延期してもらっているが、結局、ブトゥール[本当に]収容所へ入れられてしまうだろう。

ヒューセン

1943年6月13日

5時にエーリックが大急ぎで自転車に乗って裏手に着き、「警察だ！」と伝えた。私はホフステーデの庭へ姿を消した。ひとりの警官が住んでいる者を記録するためだけに来たのだった。このようにして、いろいろと驚かされるのだ。

ヒューセン

1943年6月15日

テオ・バウマンが来て、昨日BPMでクライト、エンゲルハルトなどを含む何人かが続いて解雇されたとの知らせをもたらした。リーフヘイト、スキリング、ローレンツ、ヘンドリックスだけはまだ雇われている。解雇された人たちは、6月16日水曜日にハルマヘラやバンコンに収容される。

「プルリンドウンガン[保護居住区]」に入ることをまだ許されているバブを介してトゥルース・リンケルからのスラット[手紙]を受け取ったが、彼女はその手紙の中で、エナメル皿を8枚、ガユン[手桶]ひとつ、ぬりえ帳を6冊か12冊、赤青の色鉛筆4本、頑丈な子供用スクーター2台を求めた。彼女たちは元気で、もう大分慣れたようだ。大部分がきちんと整理されているようだ。テオはまた、ファン・ウールコム夫人がクパラ[収容所リーダー]となり、ドンケル夫人は彼女の助手となったと私に話してくれた。

ヒューセン

1943年6月16日

マリオンは、今日水曜日、つまりヤップの休日であったのにもかかわらず、とても苦勞してスクーター以外は全て買物を済ませバンコンに届けた。彼女はエリー・ファン・フリートやその他の人と少し話したがあまり知ることができなかった。年長の子供たちは、倉庫の掃除などをして働かなければならない。

ヒューセン

1943年6月22日

1時頃に、ノイベルガーのところのジャガ[監視]アンドレアスが来て、ファン・フリートの家にある全てのものが取り除かれたと伝えた。これは競売の一種で、大きなカーペットが5ギルダー、食卓が5ギルダー、最高にすてきなテーブルと椅子が10ギルダーという具合なのだ。全部ヤップに買い上げられるのだ。残りは管区に運ばれる。そして、クーリーのふところなどに消えていくのである。

ヒューセン

1943年6月25日

トンネアイク夫人はグローテ・ハウスに呼び出され、親日的な女性と反日的な女性のリストを知人に作成させる要請を受けた。その背後に何が隠されているのだろうか？若干のリーダー格のIEV員は今日、貧しい印人に対する援助のことでグローテ・ハウスに出頭しなければならなかった。

(その先は?) NISのヤンセンはつい最近、オフィスにウィッテルラント氏とアंकの訪問を受け、親日・反日のことで人々にサインさせるリストを回すよう頼まれた。リストに日本のスタンプがなかったため、彼はこのリストをヤップのお偉方のもとへ送った。しかし、この高官たちはその意に添うことはなくリストはなくなってしまったのだ。おそらくこのことは全部、いろいろな人種のミックスであるラッパの仕業である。

これらの殿方は、回収要請とかで家々の戸口に訪れ、潜在する禁止事項を探っているのである。そのあとは、警察に届け出されるのだ。何と嫌らしいことをする人たちだろう。それらの名前を覚えておこう。

ヒューセン

1943年6月30日

エリーのバブであるトゥムが来て、12時に使用人全員が呼び出され、それぞれに賃金が与えられてそこから追い払われたと涙を流しながら話した。今、バンコンは外界から遮断されてしまったのだ。ますますひどくなる。…中略… BPNの最後の4人、つまりリーフヘイト、スキリング、ローレンツ、ヘンドリックスも7月1日付けで解雇される。リーフヘイトとスキリングは、好意から、旧ゾンボックの家族強制収容所へ入れられる。第2管区によると、最初、エルナ・リーフヘイトはドイツ人なので入所できなかったが、あとでこれが許可されたのである。

ヒューセン

1943年7月1日

2時頃マリオンが帰宅した。彼女が身を持って体験したことで非常にまいている。エルナ・リーフヘイトが持っていかれるもの：寝室の家具一式、食器戸棚ひとつ、食堂の小さいテーブル一台と椅子2脚、そして、彼女が病気であるため、特別な許しで自分のオープンレンジ。その他はほとんど何もない。指示しに来た日本人は、それほど穏やかでなかった。なぜならば、彼自身この戦争が勃発した時にここに強制収容され、着替える時間もなくて荷造りしたくらいだから。寝巻きのまま彼はスタジアムへ連れていかされたのだ。要するにこれは報復！BPMのニップである

ワタナベは、トラックを1台手配し、彼女たちをソンプックへ送るために自分の車をあてがい、加えて灯油を1缶と石油を1瓶もあげたのである。彼はこの強制収容を避けることはできなかった。エルマ・リーフヘイトは今度収容所へ同行することが許されているが、万一、ケース・リーフェルトが出なければならぬことになれば、彼女はそこに留まることができないであろう。その場合には、彼女はここへ来る。ソンプックにいる何人かの「婦人たち(!)」はすでに悪口をたたかれた。なぜならば、スキリングとリーフヘイトのために1軒の家を空にしなければならなかったからだ。このふたりが車の中に入れば、彼女たちはもっといやらしい目つきで見るとであろう。

ヒューセン

1943年7月11日

午前中に、人数を記録するために警察が訪れ立派な名札を読んだ。M. A. K. ウルフ - ケルケンベルフを理解することはとても困難で、彼らはトゥアン[主人]がいないのを非常に気の毒だと思っている。新たな登録のたびに私たちは驚かされるのだ。というのは、私は即座にどこかに隠れなければならないから。

ヒューセン

1943年7月16日

NISなどで解雇された印欧人も、一部がハルマヘラやバンコンに強制収容されたが、その中にはファン・グムステルやアンヘネント夫人の兄もいた。同じく彼の息子、妻、娘も入らなければならなかった。その娘は「グローテ・ハウス」で働いていたが、彼らが彼女に解雇を要求した時に、彼女の上司であるニップはギリ - カナン[左右]に電話などをした結果、彼女と母親はバンコンから一日遅れて引き取られることになった。父親だけはハルマヘラに留まるのである。

ヒューセン

1943年7月25日

私服の警官が外国人全員が載っているリストを持って訪れた。マリオンは7月28日水曜日にドイツ領事館の委員会の会議が開かれる予定であるグローテ・ハウスへ出向かなければならない。いかなる結果を生むであろうか？

ヒューセン

1943年7月28日

私はとても心配して、下へ向かうマリオンを見送った。でも、彼女が1時頃に帰宅した際には、この出向はまるで無駄だったことがわかった。ドイツ領事館のお偉方は現われなかったし、ペカロンガン、サラティエガ、キンテランなどから来た人たちさえも無意味に訪れたのだ。お偉方は多分、爆撃のためどこかに身を潜めていたのかしら？

ヒューセン

1943年8月2日

5時半頃、テオ・バウマンに勉強を教えていた最中に、エーリックは入ってきて「警察だ」と告げた。それは、マリオンがプルカラ・ジャルマン[ドイツ問題]の件で明日1時に管区へ出頭すべき呼び出しの通知を持ってきたふたりの監視員だった。ホフステデー夫人が7月31日土曜日に、スラバヤにいるオランダ人と結婚したドイツ人女性は収容所へ行かされたという、「信頼できる情報源」からの話を伝えただけに、私たちにはひどくショックだった。私たちはいろいろと計画したり、提案したりしているが、様子を見守る以外どうしようもないのだ。読書やゆっくり寝ることもできない。

ヒューセン

1943年8月3日

1時半過ぎに、マリオンはすぐに帰宅するだろうから心配する必要がないとのジャーネお婆さんからのメモが届いた。このことは安心にさせてくれたが、待つことは気楽でなかった。2時半過ぎにマリオンが帰って来た時には、何とうれしかったことか。彼女は疲れきり、「気力が尽きて」しまった。彼女はこれ以上何もできない。管区には60人いて、個別に尋問されたのだ。主な質問は、「ピサ・ヒドゥップ[どうにかやってるか]？」と「スナン[満足しているか]？」であった。要するに、援助が必要かどうか知りたかったようだ。とても黒い肌をしたドイツ人の祖父だけを証明できた人もいたということだ。私たちはまたしばし自宅に安住するのである。

ヒューセン

1943年8月10日

サトゥル-アッセム[タマリンドの実入りクッキー]作りの最中に、テオ・バウマンがやって来て、砂糖とコーヒー関係者も強制収容されたこと、ヴォーテー、ベルフマン、デ・フリース、アルガウエル、ステーネケル兄弟、ピート・ファン・オールト?の8人であるらしいことを伝えた。彼らは8月11日水曜日の9時半にバラン[荷物]を持って管区に出向かなければならない。

ヒューセン

1943年8月12日

さらに、ノイベルガー医師のもとにケンペイタイから3人訪れ、その結果、ヘーエー・ファン・デル・ホルスト医師が強制収容のために連行されることになったが、その行き先は不明だ。彼らはトラックで彼を連れに来るそうだ。また、トトックがひとり去るのである。…中略… 明日また、医師全員が強制収容される。…中略…

暗くなって、ヘーエー・ファン・デル・ホルストが別れの挨拶に訪れ、ほかのニュースを伝えてくれた。彼とともに、ブロムベルフ薬剤師、グートハルト医師、ピロン医師がハルマヘラへ行かされるのである。フーフエル医師と夫人はバンコンへ。ベエー・ブロムベルフとふたりの子供も同じくバンコンで、グートハルト夫人もそうらしい。アンヘネント医師も名をあげられたが、彼は印人なのでおそらく大丈夫なのだ。聞いたところによれば、強制収容される家族の家々には、警察が各自が所有するバラン[見回り品]の窃盗を予防するために見張っているらしい。

マリオンはまた、今日（3つのことからなることのほか不愉快なこと）パジャック・プラン[戦争税]（または、赤い丸が上に付いているので私たちが呼んでいるような「赤丸税」）の件で税務所から呼び出しを受けたのである。

ヒューセン

1943年8月13日

マリオンは朝早く税金のことで下へ向かった。ルート・ビルケンハウエルが来て、そのことは何でもなく、もし税金を払えない場合には自分のバラン[見回り品]のリストを記入して、あとは様子を見るだけだと説明してくれた。アンヘネント医師とジーケル医師は事実上、拘束されないよ

うだ。¹⁵⁸ ルート・ビルケンハウエルと母親はいわゆる「道徳的な行い」を証明する必要があると、一日中振り回された。あとでこれも不必要とされた。ノイベルガー医師のところには、一日中敷地内に派出所が立っていた。「人」は、ヘーエー・ファン・デル・ホルスト医師が持っていない医療器具を欲しがったのだ。

ヒューセン

1943年8月14日

再び「役人」が、ブランダ・アシン[外国生まれのオランダ人]のリストを持ってやって来て、マリオンはそれに全てを記入しなければならなかった。…中略… エーリックは午後フロリイ・ホイベルを訪ねにシンゴトロ通りへ自転車で向かった。彼が戻って、家は閉ざされ、ホイベル氏はハルマヘラ、夫人は3人の子供たちとともにバンコンへ行ったとの知らせを持ってきた時、私はちょうどサトゥル-アッセム[タマリンドの実入りクッキー]を作っていた最中だった。このことは昨日決行されたらしいのだ！

ヒューセン

1943年8月20日

6時半に、モーイ夫人がマリオンにデ・ハーモニーの向い側にあるロイヤル映画館へ明朝ニッポン時間の11時に出向く要請を受けたと告げに来た。ドイツ人の集会。彼女はそのことに関してノイベルガーに相談したが、彼はしないほうがいと忠告した。私はむしろ行ったほうがいいと思うのだ。

ヒューセン

1943年8月21日

マリオンが下（ロイヤル映画館）へ10時に出頭すべき公式の通達を受けた時には、私たちはまだ朝のコーヒーを飲んだあとにおしゃべりしていた。すぐに着替えてバスで行った。2時にマリオンが戻った。

¹⁵⁸ W.J.アンヘネント医師は印欧人であることに基づき強制収容を免除された。E.F.ジーケル医師はスマランで生れた。彼の父親はルーマニアの高貴な家柄に生れ、ジーケル医師がまだ幼年の頃にオランダ国籍にさせた。しかしながら、ジーケル医師は父親のルーマニア人の家系を提示することで収容所の外に居住を続けることができたのである。そのため、彼は日本軍占領中も開業（婦人科並びに一般開業医）を継続することができた。(NIOD, IC 000.238-248)

奉天の総領事が書記官とともに来ていた。ドイツ人全員が会場にいて、総領事は7人の日本人に取り囲まれていた。総領事は長いスピーチをし、この政権に従うべきこと、いかなるラジオの報道を広めてはならないことなどを全員に命じた。計画では全員を奉天へ移動させるはずであったが、技術的支障でこれができなかった。ここは一応平穏ではあるが、私たちは最前線にいるので、多くの人にとってはきっと大きな失望となるえるとおもわれている。「ハイル ヒットラー」とは言わず、代わりに「ハイル ジーク」と！「Deutschland über alles」と「Horst Wessel曲」¹⁵⁹が歌われた。この後者のことに関しては、マリオンは誠実に行った。被抑留者の妻たちにとって、総領事はあまり役立たなかったが、彼女たちは夫と離婚し、再びドイツの市民権を申請できる。同じく、帰化した人もこれを行うことができるのである。現在まだすることがたくさんあるので、そのことはもちろん、この先何年かかかるはずなのである。彼はまた、（フューラーでなく）「ファーターランド（祖国）」、「ゾルダーテン（軍人）」と唱えたのである。¹⁶⁰

ヒューセン

1943年8月25日

夕方にカルト・ジャガが、目と口が描かれているヤップのプロパガンダというよりむしろ警告ポスター¹⁶¹ を2枚私に持って来てくれた。テオが来て、ファン・レーウエン（港）¹⁶² は解雇され、彼と奥さんが明日収容所（多分バンコン・ハルマヘラ）へ行かされると告げた。イルゼとヤン・ブルゲルホウトもそこへ行かされるが、母親はだめなのである！さらに、83歳の老いたホーヴェン夫人も！まったくひどいものである。

ヒューセン

1943年8月27日

私たちはまた、アードリアンセイ一家と港の誰かも収容所へ行かされると聞いた。高齢のホーヴェ

¹⁵⁹ この行進曲は、ドイツ人の国家社会主義宣伝要員ホルスト・ヴェッセル（1907年 - 1930年）により作曲された。彼は、戦いによる負傷が原因して1930年に死亡した。ホルスト・ヴェッセルはナチから殉死者とみなされた。彼の曲はNSDAPナチ党の党歌となり、ヒットラー政権下はドイツ国歌とともに公式な国歌となった。

¹⁶⁰ 1943年半ばに、数人の外交官が日本の支配下にある南方を訪れた。その一行には、経済顧問ヘルムート・ヴォールタート、奉天のドイツ総領事E.ラム、神戸から領事E.プロイネルトがいた。彼らの訪問の目的には、占領地におけるドイツ人特にドイツ人女性に対する経済援助の必要性を調査することが含まれた。彼らは8月にジャワ島を訪れたが、おそらくジャワ島以外でもその翌月から行われたユダヤ人の強制収容に影響を及ぼしたとおもわれる。(Van Velden, 316)

¹⁶¹ これは、「(西側の) 敵の目」を表現した青い目の図柄で、敵に対する警戒とことばに気を付けるべき注意を促したものである。

¹⁶² H.A.レーウエンは、Semaransch Stoomboot- en Prauwenveer N.V. (スマラン蒸気船・プラウ船フェリー社)の社長であった。

ン夫人（83歳）はトラックで運ばれた！これを目にした時、原住民さえも泣いていた。さらに、ファン・ヘーケレン老伯爵（同じく80歳以上）と90歳近くの老人ひとりも収容所へ行かされた！

ヒューセン

1943年8月31日

テオによると、まだ就労中のブランダ・トックは今日の午前10時にボジョンの本署まで出頭すべき通告を受けたらしい。彼らには今朝その場で、労働者を対象とした収容所となるハワ通りへ引越しなければならないことが発表された。明日2時前までに入所しなければならない。該当者の名前は、ゲールロフス、ヒュガイ・フォス、イエレス、クライガー、クラッサー他。今後どうなるかはまだはっきりわからない。リニが今朝来て、外国人も全員収容所へ入れられる予定と話した。

ヒューセン

1943年9月10日

午後5時に、マリオンは明朝9時に第2管区に出頭すべき呼び出しを受けた。

ヒューセン

1943年9月11日

夕刻から夜遅くまで荷造りした。2時半に再び起きた。眠れない。でも、うまくいく気がする。朝早く下（ペテロンガン13番地）へ向かう。スタルト署長はマリオンが本当にドイツ人かどうか聞いただけだった。ペテロンガンは全て大丈夫だった。再び上へ向かう。

ヒューセン

1943年9月12日

私たちは再びいくらか落ち着いた。日曜日！私たちは念のため各自にあて、必需品と少量の非常携帯食を入れた手提げカバンをひとつずつ詰めた。

ヒューセン

1943年9月21日

トーマス一家とフォスマールのバラン[荷物]も引き取られた。私たちはここで唯一の「最後に残った人」になった。クナリー通り全体が今はもう収容所入りした。

ヒューセン

1943年10月6日

バルソニー歯科医、レーヴィー、ラングザーム、ユダーを含むユダヤ人全員が連行された。¹⁶³ また、たくさんの印人もいて、ファン・ラーヴェンスワイクがその中にいた。彼らはトラックで連れて行かれたが、行き先は不明だ。レーベルトとトーマス家の少年たちもその中に含まれていたらしい。

ヒューセン

1943年10月9日

ルート・ビルケンハウエルが手紙の中で、ウィッセリング夫人は夫（戦争捕虜）がトトックなので収容所に入らなければならないとの通告を受けたと伝えた。だが、彼女は詳しい情報を待つ必要がある。彼女自身は印人だ。このようなことが他にもあるのだろうか？

ヒューセン

1943年10月14日

同じく、ウエストブルック夫人とスヘーペルス夫人も捕虜になっている夫がトトックなのでトトックとして認められた（このふたりの女性は丸っきり印人系なのに）。印人の登録は3日前に中止されたが、多分演習のためか？ヤップ兵士が大勢ここに到着した。

¹⁶³ 脚注160参照。

ヒューセン

1943年10月20日

カルト - ジャガが夕方来て、この2日間にまたたくさんの印人が連行され、ブブアンとかに閉じ込められていると話した。

ヒューセン

1943年10月23日

夜中の2時にトロン[呼び出し]人が通りかかり、表のベランダで「ランプ・マティ[消灯]」とけたたましい声を出していたため、マリオンとハンスが起き出したのだが、私は何の音も聞かなかった。つまりこれは全域が灯火管制だったのだ。

ヒューセン

1943年10月26日

私たちがおいしいコーヒーを11時にちょうど飲み終えたら、イエッティー・ホフステーデが自転車で到着した。ジャーネ・モーフのところを訪れた彼女は、再登録が彼女の場合はどういう具合か伝えにきたのだ。彼女自身がトトックと結婚しているため、自身の印人としての長方形のチャプ[スタンプ]とともに彼女の夫に基づくトトックとしての丸いチャプを持っているのである。ミース・ファン・ダイクは、夫も印人（いつも彼女は彼が生粋のゼーラント人だと言い張っていたが）なので印人のチャプだけである。ドイツ人のモーフと結婚してすでに23年になるジャーネ・モーフ夫人は信用されず、彼らにこのことを詳しく調査すると告げられて帰された。彼らはシウ（グローテ・ハウス）に全ての書類を持っているらしい。グルガジの10家族のうち半分がトトック・チャプを押されたらしいので、この人たちは収容所へ行かされる可能性がある。当然のことながら、いたるところで大きな騒ぎとなっている。…中略…

ノイベルガー家の敷地では、昨日から馬の検査が行われている。¹⁶⁴ 同じくリントナー夫人も自分の馬を連れてそこへ行ったが、カンボンのど真ん中へ住まわされても悪くないなど言い張った。なぜならば、彼女はすでに一部カンボンに暮らしていたから！馬には全頭スタンプが押され、少年たちの説明によると、近日中に、飼育係りとともにパダラランへ送られるということだ。

¹⁶⁴ 日本人の命令により、乗馬用の馬を飼っている者は全員馬を検査させなければならなかった。（NIOD 蘭印日記コレクション J.J.Huusenの日記、89b）

ヒューセン

1943年11月6日

四六時中、ヤップ式の信号盤が叩かれているので、現在全域が灯火管制下だ！

ヒューセン

1943年11月12日

ハンス君はリュバイ・バウマン夫人のところへ向かったが、スカレラ[志願兵]¹⁶⁵ とヤップ警官が路上にいっぱいいたために戻って来た。アンドレアス・レリカカによると、全員が訓練に出なければならず、それも一人残らずだ。

ヒューセン

1943年12月8日

ラジオは、バタビア - スラバヤ - スマランの放送だけが傍受できるように封印される。内部の電線は100メガヘルツ以上の周波だけが受信できるように切断される。そして、スイッチでなく後ろ側が封印される。モーフ一家はもう登録所に出向く必要がない。区長がリストを持って彼女たちのところを訪れた際に、印人、チモール人、アンボン人、メナド人は全員出頭しなければならないことがわかった。…中略…

下で激しく発砲されているのが聞こえる。プラン[戦争] 2周年を記念してスタジアムでのお祭りだ。スカレラとヤップはお芝居を演じ、このことをあまり良く見ない住民のジャグン[トウモロコシ]畑をめちやくちやにするのである。

ヒューセン

1943年12月20日

ベルギー人女性が強制収容され、明日はフランス人女性が。管区の中のあるブランダ・トトックと結婚した印人女性も。警察はビンゲン[途方に暮れている]のだ。

¹⁶⁵ この志願兵とは、PETA(Soekarela Tentara) Pembela Tanah Air (ペタ=郷土防衛義勇兵) のメンバーを意味する。(Brommer 他., 56)

ヒューセン

1943年12月21日

ノルウェー人もポーランド人（ラングザーム？）とともに今日強制収容され、昨日はレーヴィー夫人（イラク人？）¹⁶⁶ がだ。

ヒューセン

1943年12月31日

ルート・ビルケンハウエルが私たちに送ってくれた新聞に、1月1日にはバンザイ三唱を各所の旗に向かってする必要があると書いてあった。だから私たちは外へ出ないのだ。少年たちもだ。ハンスは食事のために2時でなく3時に帰宅した。彼はアンドレアスと一緒に町へ行ったのだが、3台のバスを見送らねばならなかつたのだ。彼らは自転車が見送られ検査などされることが記されている張り紙を目にしたのである。すなわち全てに不足することになる。

ヒューセン

1944年1月11日

マリオンは、印系外国人の少年は全員出頭せねばなく、15歳以上の者はヤップを手伝わなければならないと聞いた。ひどいことだ。

ヒューセン

1944年1月22日

鉄製のドラム缶やその他の金属はニッポンの命令で区長のもとに供出しなければならないらしい。ミンナがそのことを語り、マリオンはいろいろなものが区長のところにあつたのを目にした。何のために必要なのだろうか？カンボンの人たちも何も知るはずがないのである。

¹⁶⁶ 1943年末に、ジャワ島とその他のところで依然居住を続けていた連合国市民と残りのユダヤ人男女が強制収容された。メソポタミアからのユダヤ人は収容所において「イラク人」と呼ばれた。(Van Velden, 317)

ヒューセン

1944年2月11日

ジャーネ・モーフが今日の午後にお茶に訪れた。彼女たちは火曜日に度重ね驚かされたのだ。最初にヤップの装いをしたひとりの原住民を連れて区長が訪れた。彼女たちはキャッサバを栽培しなければならず、ジャガを雇っているために収穫の15%を得るのである。近頃は庭でなく、みんな家を貸している。午後に、ラジオの真空管の数と国籍などを記録するために警官がひとりジャーネのところに来た。15分後に、その男と一緒に協議された。数時間して、3番目が。そして、十分でなかったのか、夜中の12時に彼女たちはベッドからたたき起こされた。再びラジオのことで警官がふたり！この前のラジオの番号が一致していなかった。1時に同じくラジオのところで料理人が警察に起こされた。私たちはラジオを持っていないのでよかった！…中略… インドネシア人は彼らの友人に大いに協力しなければならないとラジオで通達された。また、彼らは100ギルダー以上家に置いてはならないのだ。

ヒューセン

1944年2月14日

マリオンは、何人かの人のところで真空管が7本及び9本付いているラジオが警察に持って行かれたと話した。要するに、100メガヘルツの周波数の受信機でも新しいある海外放送を傍受できるとおもわれたのだ。

ヒューセン

1944年2月23日

カンボンではVaubek¹⁶⁷ 運転手が多数募集されているが、見つからないらしい。ニップは軍用車での部隊の移動に彼らを必要としているのだと言われている。カンボンの警察は爆撃があると警告したが、不安の原因とはならないのだ。というのは単に予行演習であろうから。

¹⁶⁷ Vaubekとは、Vrijwillig Autobestuurders-Korps (ボランティア運転手グループ) のこと。日本軍占領前には、職業軍人または「短期のボランティア」でないインドネシア人は、Vaubekとして申請することができた。(Brommer 他., 37)

ヒューセン

1944年3月3日

10時半、コーヒーと朝食をとる直前にひとりの警官がマリオンに第4管区へ出向くよう告げに来た。彼女は3時までに行けばよく、書類を持って行かなければならない。外国人は全員「詳細のコントロールのため」呼び出されている。それ以外何もないのか？

ヒューセン

1944年3月4日

10時15分に、ふたりのワキル警察[インドネシア人警官] (ケイボーダン?)¹⁶⁸ が訪れ、ニョニャ・プサール[奥様]、あなたは第2管区へ出向かなければなりませんととても丁寧に告げた。またまたひどい驚きだった。マリオンはすぐに着替えして、重い足取りで行った。私たちふたりは、これはマリオンの夫ハンスに関係しているのかもしれないと思った。でもしばらくして私は強い安心感を抱いた。その間に、リュバイ・バウマン夫人が立寄り、マリオンがクリルー[間違い]だったが、再び彼らは全てを記録したとの知らせを持って帰るまでいた。子供のことである。ブランド・トックと第4管区のインド・ジャルマン[ドイツ系印欧人]！マリオンは疲れ果て、まだ震えている。

ヒューセン

1944年3月7日

昨日マリオンは、ハッピーが敵の犬だったため、コバンの犬用の墓地に埋葬することを許されなかったと語った。インド犬のみが神聖なる土に埋葬されるのである。その他の犬は焼かれるのである。全くばかげたことだ！ルートはひどいことと見ているが、このようなことに関して、私たちはかなり冷淡になった。

ヒューセン

1944年3月14日

12時半にちょうどマリオンがしばらく出かけた時に、ひとりの警官が呼び出しに来た。マリオン

¹⁶⁸ 警防団は日本式の警察補助あるいは自警団の一種で、地域的な自給自足の実行、防空、スパイの捜査、消火作業、米の供出の際に動員された。(Brugmans 他., 643)

は水曜日の9時に第4管区へ出頭しなければならない。彼女はとても気落ちして戻った。ジャングリでは全員がこれを受けたのだ。まったく良い兆しでない。食後、彼女はすぐにバスに乗るためにデ・イオン市長広場を経由して下へ向かった。バスは来なかったが、マリオンについて書かれたワイブルからのスラット[手紙]を受け取ったリュバイ・バウマン夫人がいた。一緒に彼女たちは彼のところへ行ったが、彼はバルソニー - ゴンヤ夫人が家族全員とともに監禁されることを知っていて、非常に心配していた。そのためにマリオンはとても落ち込んで帰宅したのだ。最悪のことが起こるような場合には、彼女らのうちの誰かひとりが自転車で駆けつけることをリュバイ・バウマン夫人と約束した。

ヒューセン

1944年3月15日

私たちの「最後の」おいしいコーヒーのあと、マリオンは判決の道へ向かう準備をし、私は荷造りを終えて、悪い予感とともに行ったり来たりしていた。テオが、全員がタングカップ[逮捕]されるという、ぞっとするような知らせとともに自転車で到着した時も私は全然動揺しなかった。バンコンとなるようだ！マリオンにとってこれ以上悪いものはない。彼女はほとんど何も持って行くことが許されていない。下に行く途中で、マリオンにとって完全に恐ろしいことが身にしみたのである。私は何にも彼女を助けることができない。ファン・アルプエンのところで私は警察がいるのを見たので、彼女たちもそれに関係しているのである。突如彼らがものすごく急いでやることは、ジャワの外部で何かあったに違いない。

ペテロンガンでもこのことをすでに知っていた。ヘルダ・ズーフエルコップは、手伝いに来た私を全く拒否したので、5分後に私は自転車で戻ると、帰宅して刑事とともに立っている死人のように青ざめたマリオンにちょうどまだあいさつできた。ひとりの少女を連れた女性もそばにいた。彼女たちは明日マリオンを手伝うことを許されたらしい。マリオンに私の状況を説明して、慌ただしく別れを告げ、在宅していないワイブルのところへ自転車で向かった。私の考えはマリオンを全てのことから遠ざけることにある。彼女にはほとんど克服できないことなのだ。このあとは、彼女が今とても必要としている独りになれる場所もないバンコンの人ごみの中に。私は自転車で新チャンディ通りを終わりまで走り、警察の見張りのもと荷造りしているファン・ラーヴェンスワーイがいるグルガジを通った。そのままルート・ビルケンハウエルのところに向かって走り続け、全然慣れていないこんな長い走行でくたくたになって到着した。そこで私は、ハーヴァー夫人も入所するのだが、「ドイツ帝国国民」として入所を許可されない彼女の年老いた母親のことが理由で一日の延期を得たと聞いた。…中略… トレーベルスも収容所へ入らなければならないが、家族はその必要がないのだ。ここではハンガリー人、ラトビア人、白系ロシア人(?)、人種上のドイツ人に関係する。男子はランペルサリへ行かされるのでモーフも同じくだ。友人のワイブルが自転車で到着した時には、私はまだ感傷にむせていた。私たちが彼の援助

と救いを望んでいても無駄なことではないのだ。そして私は時計を見つめながら、マリオンが大事にしていた全ての物を残して自由を奪われたことを思いやるせなくなった。1時に彼女は入所しなければならない。ワイブルが戻り、良い計画を打ち出した。今日はルートのところにとどまり、明日ワイブルと発つのだ。終日、マリオンをととても心配に思いいらいと緊張した時を過ごした。夜、早々と長椅子で休む。

ヒューセン

1944年3月19日

印人と結婚した外国人女性、つまりファン・ラーヴェンスワーイ夫人、ラザーレ夫人、ボアッセヴェン夫人は家に戻ったらしい。ファビウス夫人も外で見た。マリオンから何も便りなし。

ヒューセン

1944年4月29日

旗を揚げる。¹⁶⁹ 私には祭事や行進などがあったとは思えなかった。ここでは何も気付かなかった。音楽もなかったし！

ヒューセン

1944年5月24日

早々と区長がやって来て、アナック・アナック・プラナカン[印欧人の子供]用の学校を開くのを手伝うためにボジョンのロイヤル劇場へ全員集合するよう告げた。でも、誰も乗り気がしない。

ヒューセン

1944年5月25日

今朝は私にとってまたも特別な驚きとなった。新しい登録リストを持ったひとりのマス - オブパス[インドネシア人警官補佐]が。一体また何なんだろう？私の「兄[ルーウイ・ファン・ブラム

¹⁶⁹ 裕仁天皇の誕生日のため。

セン]」が確か全て届け出たはずなのだが？彼と家族がどこにも登録していなかったために、彼は私を J. H. ファン・ブラムセンとして記録させようとした。¹⁷⁰

ヒューセン

1944年5月26日

またまた警官が！全員がリストに記入しなければならず、家長がこれを自分で記入し1時前に第1管区へ持って行かなければならない。ルーウイが行ったが、彼が生粋の印人ということを証明する家系図を月曜日前までに用意しなければならなかったため自分のリストを持って帰って来た。危なくなる！

ヒューセン

1944年6月3日

新たな驚き！ルーウイが第1管区に呼ばれた。彼は妻のメラと一緒にそこへ出向いた。彼は自分の父親がどこで生まれたか知らないふりをしたので「グローテ・ハウス」へ行かねばならないのだ。しかし、彼は本物の印人チャプ[スタンプ]をまだ持っていなかったので、まず問合せなければならぬとラッパが言った。要するにまた延期。ルーウイがまずいことになれば、私はすぐについて行くであろう。

ヒューセン

1944年6月20日

今朝ひとりのマントゥリ - ポリシィ[インドネシア人警官]がジワ[人]数のことでここを訪れた。その際に、私はQ.一家に属する者として届け出た。¹⁷¹

¹⁷⁰ ヒューセンは、1944年3月15日から5月5日までズワリユ通りのファン・ブラムセン一家のもとに同居し、1944年5月6日にファン・ブラムセン一家とともにペンガポンのQ.一家のもとへ引越した。「居住」参照。

¹⁷¹ 教師ヒューセンはその後Q.一家のところに下宿した。

ヒューセン

1944年7月6日

暗くなって、ふたりのインドネシア人がQ. 夫人を尋ねて来た。今度は、アンボン人であるか否かについてである。彼女は3日以内にアンボン人用のリストを全部記入しておかなければならない。Q. 夫人の母親は生粋のテルナテ島人であり、夫人は今度アンボン人として登録させようと思っている！興味深々！一体その結果はどうなるであろうか？

ヒューセン

1944年7月13日

クパラ〔村長〕が、各自の敷地内に家屋から5メートル離れたところに塹壕を掘らなければならないと通告に来た。ここの敷地の幅は3メートルもないので、これは実行されないだろう。

ヒューセン

1944年8月29日

11時ごろふたりの警官にびくっとさせられた。…中略… 防空壕掘りのコントロールだったらしい。私たちも29番地もそれがないので、クミチョーのアマトが呼び出され、私たちは庭に直径1メートルで膝の深さのロバン〔穴〕を二つか三つ作らなければならないと説明した。

ヒューセン

1944年9月7日

Q. 夫人は、区長の家でニッポン時間5時に開かれる会合に出席するようクミチョーから呼び出しを受けた。ハンナ・ウィーゲルスも行く。彼女たちがそこへ行くと、女性は必要ないと区長から言われた。スマランを保護するためにジャカルタから来たプラジュリット〔闘士〕とヘイホに対しホルマット〔敬意〕を表するためだけだった。これは学童とケイボーダン〔自警団〕などを目的としたもの！

ヒューセン

1944年9月12日

第2管区（ジョンブラン）ではバディノト（署長）が相変わらず全ての欧州人を捜し出すことや関係書類を調査することに携わっている。特に男子と少年は徹底的に取り調べているらしい。

ヒューセン

1944年10月31日

明日からレコードは提出し、登録させなければならない。プレーヤー自体も聞いたところによると、封印されるらしい。「新」政府による最初の措置のうちのひとつだ。彼らにはそんなことうまくいくはずないのだ。町内では一昨日「反」政府のポスターが貼られた。犯人は不明。

ヒューセン

1944年12月13日

本日から、金、プラチナ、ブリリアントは登録させなければならない。

ヒューセン

1944年12月19日

第2管区では夫がトックで妻が印人である家族は全て強制収容される。ジャカルタからの命令だ。アブカウデー家もその中に含まれる。数日前に、レーベルト少年とトレベルス少年がジョルナタン刑務所から出所した。アーレント・モーイはそれ以前に釈放されていた。

ヒューセン

1944年12月26日

今ひとりの警官がピートとフレddieも記載されているリストを持って現われた。16歳から35歳までの男子の強制収容に関係しているらしい。また、様子をうかがうのみ。しばらくして、刑事がジワ[人]数のことで訪れた。…中略… 私はフレddieのことで神経質になっているQ. 夫人と続けて少しおしゃべりした。彼女は、いたずらで何の損にもならないピートのことに関して

は心配していないが、フレddieは17歳（12月27日が誕生日）だがまるで12歳程度の子供であって、ひどく低能で世間知らずなのだ。

ヒューセン

1945年1月5日

「ジャガ・マラム・カンポン[カンポンの夜警]」所は男子に不足しているために閉鎖された。ここからは各自が自分の家を警戒しなければならない。

ヒューセン

1945年5月5日

プルウォディナタンの区長が訪れ、12歳以上の者を対象に明日「ググル・グヌン」¹⁷²があると伝えた。ジョンブランの別館¹⁷³に集合したあとクナリーランへ！私は今マラリアに罹っているので行く必要がない。…中略…暗くなってクミチョーが名前をもう一度記録するために訪れた。しばらくして、彼は明日の呼び出し状を持ってきた。私たちのところからは、ネル（彼女はまた病気だが）とアーリである。前側の家族では、ヒレブラント家の女の子たちとベルンハルト夫人。隣りは、ハンナ、エティ・ウーシック、イエチェ・メイヤースだ。

ヒューセン

1945年5月6日

明け方からすでにググル・グヌンのために大騒動。5時（N. T.）に彼女たちは出発した。…中略…午後5時頃にググル・グヌンから人々が戻った。町全体から千人以上だった。ルート・ビルケンハウエルもそこにいた。彼女たちはチャンディ・スポーツクラブで働かなければならなかったが、あまり厳しくなかったのだ。

¹⁷² ググル・グヌン（「山を平らにする」）は、無償で土木作業に協力する一種の勤労奉仕である。（Brugmans 他., 638）

¹⁷³ 「市民公園」協会の別館。脚注10参照。

ヒューセン

1945年5月14日

5時にここの組の会合があった。上陸が行われた場合には、私たちはお互いに協力しなければならない。5月18日・19日・20日には大ラティハン[訓練]。パスールはなく、できるだけ(イジン[許可証]付きで)外出を避ける。彼らは本当に何か予期しているのだろうか?再び希望がよみがえる。私たちはとても興奮気味だ。ピート・Q.は、非常に神経をとがらせている。今朝インドネシア人の少年たちが呼び出されたが、少年たちは5月18日に訓練のためアンバラワへ行かされる。ピートはスラバヤへ「避難」する。彼はイジンをすでに所持しているのだ。

ヒューセン

1945年5月17日

私たちは「ムス[敵]」を防御するために、先の尖った竹棒を買わされた。1本につき0.35ギルダ。家のすぐ近くの通称防空壕である庭の丸い穴を掃除し、さらに深く掘らなければならない。…中略… 「ラティハン[訓練]が1日延期された」とピートが言った。「ラティハンは決行されない」とイエチェは聞いた。Q.夫人から聞いたところによると、セテラン・ダーレム(彼女が働いているデ・リザーがいるところ)の家々は全部立ち退かなければならない。そこはニップ軍人のために必要とされているのだ。

ヒューセン

1945年5月19日

本日再び「ググル・グヌン」。今度は地区ごとだ。そうしないと、たくさんの人々で混雑するからだ。そのため早く起きる。私にとっても同じである。「その」明かりをつけなければならないから。4時半(N. T.)にはすでに持って行くご飯を炊き始めていた。私たちのところからは、ネル(ピートは行かない)、ヒレブラント家からはリーケ、隣りはエティ・ファン・ウーシックがだ。ピートは今日スラバヤへ行く予定。…中略…

ピート・Q.は、スラバヤへ行かないのかしら?ボビーは彼を12時頃にコボンで見たのである。また、マントウリ-ポリシイ[インドネシア人警官]は今朝9時に彼を尋ねに来た。ググル・グヌンはやはりまたスマラン全域であった。約2千人が出て、各自の名前が記録された。再び、クナリーラーンでだ。私も一緒に行けたらいいのだが。ルメートル(フェルディナント)氏はこのググル・グヌンについてかなり挑発的な発言をした。彼は、誰も彼に対していかなる命令

をすべきでないなどと言ったらしく、その結果、現在彼はケンペイタイのところに捕らわれている。

ヒューセン

1945年5月31日

今日この地区を対象にまたググル・グヌンが。若者たちは6時半(N. T.)にチタルムラーンの角に集合し、7時にはスタジアムへ向かわなければならない。…中略… ググル・グヌンの従事者は、スタジアムでまずキャッサバの根茎を抜かなければならなかった。

ヒューセン

1945年6月3日

またまたググル・グヌン。今度はスマラン全域を対象とする。

逮捕と家宅捜査

バタビア

ハンベル

1942年5月11日

ふう、収容所の中はなんという騒動。ジャワ時間の6時15分前に犬たちと散歩に行きました。いたるところに欧州人男子を連れ去る警官が見えました。本当に束になって。パパをすぐに起こしました。彼はすばやく髭を剃り、お風呂に入り、朝食を摂り、トランクを詰めました。でも彼らはパパを連れ出しには来ませんでした。派出所を見に行ってきたところです。押し込まれた男子で満杯、外では夫を見ていた女性たちが立っていました。彼らは寝起きがしらを逮捕されたのです。Kは毎朝のようにパサールに行きたがりました、でも警官に家に送り戻されました。修道士や神父さえも連行するのを知っていますか？ ジョンゴス[下男]たちが泣きながらトゥアン[主人]の後からトランクを運んでいるのが見えます。彼らは憤慨しています、なぜならご主人様には朝食を摂る時間さえなかったからです。なぜ彼らはこんなに男子全員を連行するのでしょうか？ 登録証明書のお金を支払った人たちでさえ今は豚箱の中。

うちの家の前にも警官2人と私服刑事1人が立ち止まりました。その私服刑事は見張りをする必要があって、後にまた立ち去りました。男子は誰ひとり通りに出ることを許されません。Kは持って行くのに私の水筒を借りました。彼は真っ青です。私も1日中家にいました。私たちは釈放された男性と話しました。同名の違う人が連行されるべきだったのです。彼はこれが何のためなのか分からないと言います。でも彼らのテーブルには整頓され積み上げられた書類があったのです。だからこれはもうかなり前から準備されていたのです。

ハンベル

1942年5月12日

現在、街はまったく死んだような静けさ。女性がいたるところにいるほかには、男子は誰も見かけません。腕章をつけて歩いている男子がみられるだけ、その腕章には日の丸の印がついています。これはヤップが必要としている人という証拠です、さもなければ彼らも監禁されることになります。中国人も腕章をつけて歩きまわっています。今、Kは朝にもうちにコーヒーを飲みに来ています。彼は外出することや家の前で坐る勇気がありません。…中略… パパが検挙されたことのある人と話しました。彼らはまだ健康かどうか聞いたそうです、彼は60歳でした。彼はとても惨めそうに立っていて、家に帰って寝るべきだと言われました。…中略… 神父さまや修道士た

ちさえもみんな監禁されています。登録証明書は役立ちません、彼らは冷淡に破ってしまいます。パパは警察の監視に出くわし、すばやく向きを変えました。でも彼らは私たちの味方です、というのは、夫を見ている女性たちに彼らは静かに「ストリウスウェイク、ストリウスウェイクだ！」とささやいていましたから。それに彼らは、道を歩いている男たちには直ぐに帰宅してトランクを詰めよと、なぜなら連行されることになれば衣類が必要だろうからと言いました。…中略… 現在いたるところにヤップが銃剣をもって監視についています。彼らは武器なしでは外出しません。そして戦闘的な男子をみんな検挙します。なにがあるのでしょうか？ 刑務所では、彼らは魚とご飯をもらいます。釈放されても暴れないよう、弱らせておくためです。

ハンペル

1942年5月15日

彼らはまだ男子を検挙しているところです。彼らは好んで登録事務所の前に立ち、登録証明書のお金をすでに全額支払った後の男たちを捕らえ、その後で登録証明書を破ってしまうのです。

ハンペル

1942年5月29日

1人の婦人はパサール・バルーで、外国に関してラジオの放送で聴いたのを知人に話しました。知らない婦人が傍に立ち、聞き耳をたてて、それは本当かと尋ねました。その愚かな婦人はいつも外国放送を聴いていますよと言いました。彼女は今窮地に陥っています、なぜなら密告者だったからです。パパが誰かと話していた時、やはりそんな女性が振り向いたのです。でも私がさもしいと思うのは、ある人が貧しい人を家に連れて来て彼に毎日食事を与えました。そして彼が外国放送を聴いていた時、その貧しい人は感謝のしるしとして彼を密告したのです。

ハンペル

1942年6月25日

ブルッ、何という日、それにまだ終わっていません。朝6時15分前、私たちは散歩していて、警官の一团と出くわしました。すぐにパパとKに警告。Aは気がつきましたが、Bは気づいていません。うちの前に私服刑事がひとり立っていました。そのときRがテンパット・マカナン[調理用の鍋]を持って行って、Bに警告しました。その時彼らがどれぐらい近くに来ているか見に行きました。彼らはマドゥラ通りとジャワ通りの街角にいました。すぐに戻ってパパが袋を詰めるのを手

伝いました。裏のドアからO. H. の義姉が来て、彼らがO. H. を検挙しようとしていたところだと
言いに来ました。でも幸いすでに彼は準備を終えていました。Bが連行されました、P. A. もす
でに準備できていました。それから私たちの順番がきました。Rと私は家の前にいました。私が彼
らの話しを聞きました。

「ご主人はどこだ？」

「KPMです、ニッポンがここに来る前に出航しましたよ！」

「この家には他に男子はいないのか？」

「いません。H医師はチマヒに収監されていますし、Dさんはバンドンです！」

すべて記載された。嘘はついてはいません。家に男子はいません、なぜならパパは裏
戸からプルワカルタ通りに行きましたから。3匹の犬たち、とくにシェパードがすごく吠えまし
た。私は彼らに家宅捜査をしたいのですかと聞きました。彼らは窓から見ただけでした。パパ
は今のところまだいます。でもドアの外に頭を出してはいけません。彼らは物売りたちに男子が
住んでいるのを知っているかと聞きます。彼らはどこでも敷地内に入って来るわけですから。私
はある婦人が、男子を探すためにすでに3度彼女が家宅捜査を受けたと話すのを聞きました。で
も奇妙なことには、男子たちがヤップの腕章を巻いて戻ってくることです。彼らになぜ腕章をも
らったのかと聞くと、彼ら自身にも理解できないのです。本当は隠れているのは愚かなことです、
なぜなら登録事務所にもう名前がのっているからです。彼のラジオ、私は当局にそれを封印して
もらうために行かねばなりません。

移送される男子はトラックに押し込まれ、歓声を上げながら立ち去らなければなりま
せん。ここまで聞こえてきます、私たちは派出所の近くに住んでいますからね。見たところ、彼
らは現在男子全員を捕らえました。O. H. は私のガールスカウトの水筒を持ってきました。とこ
ろで、あの男子たちが登録証明書を支払ったことは無駄になります、彼らはやはり収容されたの
ですから。すでにジャワ時間の1時、まだ衣類の束を携えた男子がやって来ます。

ハンペル

1942年6月26日

さてW氏は幸運。男子検挙の際の先月からこれまで、彼はずっと外出しませんでした。ところが、
彼は捕らえられ、自由にまだ歩き回ってもよいという書類をもらいました。小さなカチョン[イ
ンドネシア人の不良少年]たちがいました、彼らはオランダ人が検挙されているとやじで迎えま
す。私はそこで年老いた白髪のバブに出会い、彼女はなんと彼らを虐待したこと！…中略… 彼
らは今、腕章をつけている男たちも検挙しています、なぜなら偽の腕章が出回っていることが判
明したからです。

ハンペル

1942年7月16日

今朝、A. K. が裏戸から飛び込んで来ました。彼らのところで家宅捜査をしていました。Rは日記をつけていたところで、とてもうまく隠してしまったので、再び見つけることができませんでした。ここにいつ来てもおかしくありませんでした。でも幸いまだ来ていません。男子の検挙はまだ続いています。パパの荷物はすでに準備終了。彼らはN. K. のところにも行きました。彼らは戦闘用の武器や鋭利なものがあるかを尋ねました。彼らは6人でやって来ました。O. P. は彼女の部屋にいました。その部屋にも彼らは入って来ました。鋭利なものを持っているかという問いに対して、彼女はガルカン[削り道具]を取ってきて、これは鋭利かと聞きました。Nはその時笑ってばかりいました。B. K. は連行されました。Nが連れて行きましたが、幸い彼は来年にならないと17歳になりませんので、また釈放されました。本当は、彼らはNのところで家宅捜査はすべきではないのです、というのは彼女の夫は日本の腕章をつけて歩きまわっているからです。A氏も検挙されました。前はプラナカン[印欧人]だったので釈放されています。

ハンペル

1942年7月17日

ボイテンゾルフでは7月13日、14日、15日は街から出ることが許されていません。17歳から60歳までの人々は、警察に出頭しなければなりません。修道院は収容所に整えられました。人々が自ずから出頭する方が本当は賢明です、そうすればここで起こっているように、何度も検挙されまた釈放されるという奇妙なことがおこらないでしょう。A夫人の弟は夜中の12時に連行されました。4時にまた帰宅、なぜならプラナカン[印欧人]だったからです。6時にまた寝床からたたき起こしに来ました。彼は起き上がることをはっきり拒否しました。警官が彼を寝床からひっぱり出さねばなりません。彼はともかく彼らを寝床で迎えたのです。O. J. の知人は3回続けて警察署に連行されました。釈放して外出してもよいという書類を手渡したらいいのに。彼は逮捕され、また釈放。ほとんど家に帰っていた時また逮捕されました。彼がまた走り去った時、彼らはしばらくしてまた彼を路上で逮捕。こんなことを経験すると、神をののしりたくなるのもわかるでしょ。…中略… 警官が知り合いを逮捕した時に言ったことが分かりますか？「プラナカン[印欧人]だと言いなさい、そうすれば釈放されるだろう！」って。でもずっと家に潜伏していたその人は、家宅捜査で捕まりました。

ハンペル

1942年8月3日

私はヤップの顔を1発殴りました！こういう訳です！Bと私はパサール・バルーから帰宅し、家の前と中に警官がいるのを見ました。私たちが最初に思ったことはもちろんパパが連行されたのだということ。でも彼らは私のラジオに取り組んでいました、封印はすでに破れていました。私はラジオを持って警察の第4管区についていかなければなりません。彼らは私にあらゆることを尋ねました、あなたがどこにいるのかさえも。パパが私の後を追ってやってきました。そんなことしなければよかったのです。彼らに彼が自由なことが分かります。現在彼の名前がリストに載ります。彼は立ち去らねばなりませんでしたが、私は1時まで待つ必要がありました。封印されていないラジオを持った人々が次第に増えてきました。1時にこの件を調査したヤップが来ました。数人の人々は書類をもらってラジオを持って帰ることが許されました。その警官は彼らがラジオのボタンを強くまわしすぎたため封蝋を破ってしまったのだと発表したのです。まあこう認めるのはやはりさっぱりしている。

彼らは私になぜ蝋が壊れていたのか尋ねました。私は、もらった時からでそのままにしていた、なぜならボタンはすでに壊れていたからですと言いました。私は家に帰ることを許されましたが、そのラジオは返してもらえませんでした。でも私がラジオをそこに残したという証明書を求めた時、頬を1発殴られました。幸い耳ではありませんでした、なぜなら耳だと鼓膜が破れますから、私の頬はまだ熱っぽいままです。思わず彼を同じくらい強く殴り返していました。私は常に殴られたら殴り返そうと思っていました。彼らはみんなびっくりして私を見ました。警官と群衆。婦人がひとりすばやく私をつかみ外に押し出しました。そして彼らが私を呼び戻さないうちに、私は家に帰りました。そして今、私を連行しにやってくるのかどうか冷静に待機しています。

本当に理解できないのは、彼らがラジオを検閲する予定だということがうわさにならなかったことです。男子を検挙するときには、瞬く間にバタバタ中に広まるのに。そして愚かなやつらは今ようやくラジオの放送で、蝋がひび壊れていたり封印が破れているラジオは新規に封印されるということを伝えています。

ハンペル

1942年8月7日

ふう、3日間グリセー通りにある派出所の監房にいたのが、やっと終わりました。今は気分を害することなくヤップを見ることができません。すべてできるだけ正確にお話するつもりです。まだかなりぼんやりしていて青あざがいっぱい、骨にも痛みがあります。汚いやつら、ふん！

あの殴り合いはだから8月3日でした。4日火曜日、私のラジオについて話すため地方自治体事務所に行きました。私はラジオを手渡したのでその証明書をもらえないかと、なぜならもらえなければ私が隠していたとヤップが思うからです。担当のヤップと話ことができました。私は「アンブン[謝罪]」し、この件を説明しました。彼らは笑いこぼした状態！手紙をもらいました。それを持って第5管区に行く必要がありました、ですからグリセー通りです。そこに歩いていくために、まず自転車を家に持って帰りました。手紙の中ではKPMという字だけアルファベットで書かれていたので解読できました。私が到着した時、そのヤップは私を見ようともしませんでした。彼は手紙を読み、私はいっしょについてくるよう冷淡に言い渡されました。私は彼が証明書を書いてくれるのかと思いました。とんでもない。彼は怒り出しました！カバンを取り上げられ監房に閉じ込められました。そこにはW夫人が日曜の朝から入っていました。ニッポン人のひとりが彼女のラジオの封印を壊したのに認めようとしなかったのです。彼女はまだいます。

監房は2.5メートルx1メートルで、睡眠用に2メートルx0.5メートルのコンクリート製の長椅子がありました。ちょうど婦人がひとり前もって釈放されていました、やはり封印が破れていたのです。でもそれは隣の男の子が破いたのでした。少年は1晩だけ拘留されただけでした。彼女の家族は、彼女に毛布、チョコレートと石けんを差し入れました。彼女が出て行った時、W夫人がそれを借り、あとから返すということでした。私はハンカチ以外なものも持っていませんでした。すでに何度か家に伝言するよう電話をしてほしいと彼らに求めました。とんでもない！私は警官から罵りと叱責を受けました。でもそのヤップが出ていった時、すべて好転しました。警官たちが見に来て、衣類のために電話するつもりだとのこと。そしてジャワ時間7時に衣類も受け取りました。あまりたくさんではありませんでした。体操用のズボンと本当は洗濯すべきブラウスと足を拭くためのタオル。いずれにしる何かではありました。彼らは当然私の家の鍵を持っていなかったのですから。W夫人はかごを持っていました。私はそこに衣類を巻き、枕として使うことができました。もちろん眠りにつくことはできませんでした。コンクリートの上で1度試してみてください。兵舎のラジオが鳴り続けていました。

2時間ごとに監視の交代、彼らは懐中電灯で私たちを照らします。声を張り上げて何人囚人がいるか数え、そして私たちは毎回自分の監房に何人いるのか言わなければなりません。白人女性が監房にいるのを彼らは明らかにおもしろがっていました。ほとんどの警官はやさしかったといえましょう。でも何人かは狙い撃ちしたいほど。1人は監視の間中私たちを懐中電灯でからかい「ブランダ[オランダ人]が刑務所にいるのはよい。おまえたちはいい給料をもらい、おいしい食べ物、よいお風呂、きれいな家がある。おれたちはもらえない！」といい続けました。まだまだいろいろ。あまり理解できなくて幸いでした。ブムドルッケン[大便]と入浴はもちろん原住民の囚人たちと同じ場所でしなければなりません。警官は「トゥアン[さま]」付けで呼ばなければなりません。ひとりが特別に私たちのところにどの警官がそうしないと殴るのかを警告しに来ました。食事はまずまずでした。朝はクタン[もち米]とココナッツにお茶。他の人たちが普通、缶なのに私たちはマグカップをもらいました。午後と夜はご飯といくらかのサユール[野菜料理]とテンペ[発酵豆腐]かタフ[豆腐]、そしてまたお茶。便所はおそろしく臭く、彼らは時々

扉を開けたままにし、私たちの監房のなかにまで臭ってきます。私たちは「トゥアン・ポリティエ、トロン・トゥトゥップ・ピントゥ！[警官さま、お願いですから扉を閉めてください！]」と呼びかける必要がありました。そして彼らはそうしてくれました。でもこんなところにずっと入っているのは愉快的なことではありません。

私たちのお隣のひとはトゥカン・ボトル[古着回収業者]でした。彼には2人奥さんがいて、お産をする予定のひとりをととても心配していました。彼は盗まれたらしい自転車を買ったのです。もう1人の盗人は警防団（LBD）の制服を盗みました。彼らはふたりとも愉快的な人たちでした！私たちは彼らと、そして警官ともかなりの会話をしました。その古着回収業者は、釈放されたらトゥカン・サユール[野菜売り]になりたいと思っていて、私に買ってほしいと頼みました。

大便がしたければ、監視さまに外に出してもらおうよう尋ねる必要がありました。そこで1度だけ入浴しました。少しずつ、でも何でも手に入れました。スリッパ、練り歯磨き、ブラシとくし。ママが魔法瓶にコーヒーかお茶を持ってきて、私が必要としているものを聞きました。でもあのヤップが来るやいなや監視たちはまた嫌なやつになります。時には食事が多すぎこれを他の囚人にあげてもいいのか尋ねました。そうすると彼らは私を外に出すか、あるいは隣の人たちを呼ぶかして鉄格子ごしに彼らに与えます。彼らはオランダ人といっしょに収監されているのを喜んでいますが、なぜなら私たちからなんでももらえるからです。でも同房の人、彼女がそこにいるのは気の毒だとおもいます。でも当然のむくいなのです。彼女はそこの食事をしようとしませんが、なぜなら家からパンをもらうからです。それならチーズか卵がのっています。彼女は上に乗せてあるのをみて憤慨していました。彼女が嫌いなものを知っているはずなのに！と。その時私が食べました。おいしかった。3月からチーズや卵をパンの上に載せたことがありませんでした。彼女はもらった衣類に関しても嘆いていました。そこにいる原住民にも彼女は口やかましかった。ああ、ベッドと本があったら楽しかったのに。午後だけはとても長く感じられる。午前中は結構慌ただしい、でも暗くなってくると静かすぎて気が狂いそう。そして家からの小包を待ち望んでいるのです。

8月5日の木曜日、2人の老いた白髪の婦人たちが、もう1つの監房に来ました。1人は目の周りに青あざ、もう1人は腕にけがをしています。ニッポンがいなくなった時、私たちは彼女たちと話すことが許されました。夜中、街に空襲警報が出ました。1人の方は下男の少年がランプを消し忘れ、もうひとりの方は真っ暗にしていたのですが、後ろ隣の人が電気をつけていたのでちょうど彼女のところで灯りがついているようだったのです。そのため彼女たちは棒で20回叩かれたのです。彼女たちは泣き言ひとついいませんでした。この女性たちも何も携えていませんでした。翌朝、6日ジャワ時間の7時に彼女たちは釈放され、それから警官が私に12時に出ていってもよいと言いに来ました。ようやくその時間になった時、収監者がみんな「スラムット・ニャ！[ごきげんよう、奥さん]」と言いました。そして今私は家にいます。まずW夫人の家と彼女が働いているオランダ薬局に行ってきました。そのあとすぐにお風呂に入り、髪を洗い、食事をし眠りました。でも最初はベッドに慣れる必要がありました。…中略… 私たちの家を見に来た時だけ私はそのヤップを見ました。幸い彼は私が釈放された時にはいませんでした。あの男は私にと

って悪夢です。彼の顔がいたるところに見えます。彼はケンペイの一員で、殴ることが許されていたのでしょ。だから私はさんざんだったのです。知らなかったのです。彼は帯のついた白いシャツを着ていませんでした。気づくべきだったのでしょうか？…中略…

地方自治体事務所を訪問した時、私はC. T. と話しました。彼女はそこで働いていて私はそれを家で話しました。私がどこにいるのかママにわかった時、ママはすぐにCに電話し私が早く出られるよう手配してくれたのです。素晴らしい！Cは占領前からすでにヤップのところで働いていて、進攻の際彼らはまた彼らのところで働けるよう尋ねたのです。やはり収入を得るためには働かねばなりませんから。彼女がいなければどうなっていたことやら。ヤップのところでこのように働くことができるのは他の方法よりもよいことです。

ハンペル

1942年8月10日

ママの従姉妹がコーニングスプレインの法科大学にあるケンペイタイのところに監禁されていました。彼らが彼女に何をしたのかはわかりませんが、なぜなら彼女は話す勇気がないからです。外では何も話さないよう書類に署名する必要があります。彼女はずっと「とてもつらい、とてもつらい！」と言っています。

ハンペル

1942年8月31日

私たちはアデックの傍を通ってきました。…中略… そこでA. K. くらいの年格好の少年たちを見ました、15、16才ぐらい。メースター・コルネリスのベテル教会のところで、市電が止められヤップが身分証明書を持っているかどうか人々を検閲しているのが見えました。このようにして彼らは、「恥じらいの腕章」をしないで歩いている男子を捕まえるのです。…中略… 15、16才の少年たちが窮地に陥っているということです、それは彼らが出生証明書を持っていないからです。だからすべての書類を携えておくことが必要なのです。両親の書類でさえも。

ハンペル

1942年9月29日

また興味深い話し。B. K. の女友だちが母親といっしょに税務署に行きました。彼女は外にいてオーストラリア人がその建物の前で働いているのを見ていました。彼女はその中に知り合いがいる

のを知り、そして監視からは話しかけてもいいと言われました。彼女の母親が外に出てきた時、彼女は口笛を吹きながら近寄りました。でも監視は彼女が口笛でオーストラリア国歌を吹いたと思ひ、呼び戻しました。そんなばかなことしなければよかったのに。彼女は捕まり、ケンペイタイに連れて行かれました。そこで顔を60回殴られました。彼女は数えたわけではありませんよ、でも60回殴るぞといわれたそうです。さて、すぐに失神するか叫べば彼らは殴るのを止めると言われています。でもその子は打たれ続けました。彼女は男たちを見つめるだけでひとことも泣き言を言わなかったのです。その後、彼女はWも入っていた監房に閉じ込められました。15才のこの少女は、3日間拘禁されていました。彼女は見る影もない状態でした。1人の監視はやさしく彼女の顔に氷を差し出しました。いくらか快方に向かった時、彼女は帰宅することを許されました。そして医者がそのあとの処置をしました。Wは半日早く釈放されました。彼女は挨拶しなかったため監視に殴られたので入っていなければなりません。彼女は殴り返そうとしましたが、監視は逃げてしまったのです。オランダ女性を怖がったのでしょうか？なんという男！

ハンペル

1942年10月3日

第5管区は逮捕された男子でまた満員。彼らは「トマトクラブ」の一員でした。これはニッポンのためには働いてはいないが、友だちなどから収容されることを免れるために赤丸の腕章をもらった人たちです。今はだから働いている男子だけが自由に歩き回っています。KPMだけからでもすでに72名いました。彼らは3名忘れていました。現在、多くの家族が収容所に行かねばなりません、彼らには保護者がもういないのです。

ハンペル

1942年10月9日

いったい私たちはどうなるのでしょうか？彼らは現在女子を検挙しています。朝6時から始まりました。乳児を抱いた女性たちが警察署の横を歩いているのが見えます。彼らは英国とオーストラリアの女性を強制収容するために検挙に慌ただしく、英国人と結婚しているオランダ女性もです。登録の際、女性は自分の国籍を保持できると彼らは言いました。現在、これはドイツ人の女性か、いかなる人種でもドイツ人と結婚している女性のみ有効なのです。これは混乱状態です。M. B.のお姉さんもそうです。彼女は南アフリカ人と結婚しているのです。…中略… 哀れな母親はすっかり取り乱しています。幸い全ての女性が痛ましいわけではありません。私たちは、彼女たちのために食べ物とミルクを取ってくるため家々に立ち寄りました。ヤップは女性を逮捕するほど叱られたのでしょうか？

ハンペル

1942年10月10日

ニッポンは本当に誰のことも気にしていない。Hさんの知人は、彼女の最初の夫との間に2人子供がいました。夫はオランダ人でした。その後、彼女は英国人と再婚し子供が1人生まれました。もちろんその英国人は即座に収容されました。昨日、彼女と3人の子供たちが連行されました。あとからオランダ人との間に生まれた2人の子供が釈放されました。彼女と英国人の父親との間に生まれた3番目の子供は、とどまらなければなりませんでした。誰が今残された2人の子供の面倒を見るのでしょうか？悲惨な状況です。

ハンペル

1942年10月20日

ママBが誰かがケンペイタイの訪問を受けたという話しをしました。彼女は誰かにハガキの中に「サヤ・ビキン・ディ・バンタル・ワーペン・ダリA' dam[アムステルダム（紋章）をクッションにします]」と書きました。彼らは「ワーペン」（武器という意味もある）という言葉が気になりました。彼女はそれを引き渡さなければなりませんでした。それに「A' dam」とはどんな意味だったのでしょうか？

ハンペル

1942年12月3日

KPMのLさんが検挙されました。彼は、すでに数ヶ月間隠れていることに成功しましたが、現在彼らに連行されました。もちろん密告されたのです。T. J. さんと同様です。あの通りの家は上から下まで捜査されました。彼らは3人の男子がいた家を探し、彼らの家がそうだったのです。捕らえることができないという書類を偶然持っている男子がいました。Eは壁の向こうに登るのにちょうど間に合いました。

ハンペル

1942年12月26日

ヤップもクリスマスのお祝いをしました。彼らはその日80名の男子を監禁しました。お祝いの日で新年にも近いというのに。残された女性たちと子供たちが哀れです。PTTとニロムの人たちが

今回連行されたのです。Wはすでに数週間ケンペイタイに拘留されています。彼は何もしていません。でも彼を嫌っている誰かがいて彼を閉じ込めるために何かをでっちあげました。哀れな奥さん。

ハンペル

1943年1月9日

また愉快的、お向かいの最後のオランダ人男子を、彼らは食事中に連行しました。トラックに入れと、衣類一抱えとラジオもいっしょに。彼が食事を終えていたことを願っています。

ハンペル

1943年1月24日

S氏が逮捕されました。彼らはまたいたるところで忙しく取り組んでいます、だから街ではまた緊張した状況。Sは長い間逃れつづけることができました。今、彼の奥さんは収容所に入らねばなりません。

ハンペル

1943年2月5日

ふう、また何が起こったのでしょうか？警官が家の中に入ります。人々を追い出しています！扉に封鎖してすべてをひっくり返します。母親たちは子供の衣類のところにさえ行きません。…中略…マドゥラ通りでは1人の婦人がとても古くなった手紙を持っていました。彼女にとっては大切な意味合いを持つものでしたが、彼らはやはり持ち去りました。ああ、もし彼らがあなたからの手紙をみつけたら、そして私の日記。どこに隠せばいいのかわかりません。それから彼らはすぐにラジオも持っていきます。

ハンペル

1943年2月6日

家宅捜査がなぜ大規模に行なわれたかご存知？ 誰かが衣装タンスの中に銃を隠していると密告したのです。さて、彼らは腕にいっぱい銃、拳銃と銃弾それにオランダ国旗を取り上げました。

ある人たちは徹底的にやろうと思って保険証書を持っていきました。衣装の本さえも持って行かれました。昨日人々はたくさん壊したことでしょう。警官もそれ以上は探しませんでした。彼らはどこかで不合法に教えている学校を見つけ、子供たちと女性たちがみんなケンペイタイのところに連れて行かれました。

ハンペル

1943年2月7日

ああ、家宅捜査の話をしてください。彼らは、イタリア人の音楽家のところにも行きました。そこを訪問していた女性がちょうど立ち去ろうとしていたところでした。許されませんでした。彼女はそこに残らねばなりませんでした。彼女は近所に住んでいて、家に乳児がいました。今、赤ん坊は放っておかねばならなかったのです。そのイタリア人は翌朝まで家にいなければならず、夜間の演奏は許されませんでした。彼は分解した封印のないラジオをトランクに持っていました。彼らがやってきた時、ちょうど溝に捨てようとしていたところでした。彼らはそれを見ましたが持って行きませんでした。6時になってようやくその訪問者が家に帰ることを許されました。パパの事務所の誰かが、収容所に行かねばならない知人から家具付きの家を借りました。そこで彼らは戸棚の中に武器や銃剣といっしょに海軍の制服を見つけました。彼は何も知りませんでした。今度は彼が犠牲者。

ハンペル

1943年3月28日

さて、新しい法律で全てのブランダ[オランダ人]は収容所外部にいる人も赤い腕章と番号をもって歩かねばなりません。多くの人々は不機嫌！彼らが私の白い肌と金髪のために逮捕するなら、私はアサル・ウスル[家系証明書]を提示することができます。彼らはRも検挙しました。彼は4月3日か5日に収容所に入らねばなりません。

ハンペル

1943年3月31日

街はパニック状態でした。昨日彼らは厳しい家宅捜査をしました。セレンバの病院聖カロルスでさえも。病人は全員上から下までひっくり返されました。修道院長様の部屋は見るも悲惨なほどでした。ヤップは、連行されないために男性・女性が患者として入院したことに気がついたので

す。伝染病患者でさえもチェックされました。ヤップが病気を伝えられることを望みます。今朝は通りであらゆる包みをほどこきました。私は2度止められました。身分証明書を見せる必要がありました。私がプラナカン[印欧人]なのを見た後、通ることが許されました。…中略… ヤップが卑劣なのは、同じ場所には立っていないことです。私たちは会う人ごとにすぐにあそこあそこにいるということを伝えます。でも彼らはたえず場所を変えるのです！

やれやれ、彼らはバッジを作って売る女性のところを家宅捜査しました。私たちは彼女たちが赤・白・青のバッジを作っているのを知っています。ところで、私たちも窮地に陥りません。¹⁷⁴

ハンペル

1943年7月10日

C. T. がケンペイタイにいます。彼女が働いていた日本人高官の紳士たちが出発し、さて彼女はあつ夜連行されました。いくらかの情報収集のためだけでしたが、もうすでに8日拘禁されています。家では彼女が病気だという知らせを受けました。そして今日彼女の父親が連行されました。いつもは衣類を取りに行くことができますが、彼はそれさえ許されません。彼は事務所にいました。彼の自転車、腕時計とタバコケースは家に持っていかせることができました。今彼女の母親はひどい有様です。彼女は人々が訪れないことを望んでいます、なぜならさもなければ人々も連行されてしまうからです。でも私は何にも知らず、どうしているかちょっと覗きに行ってきました。日本人高官はどこにいったのでしょうか？来月で彼女がそのヤップのところに働いて8年になります。彼らはもちろん彼女が連行されたことをまったく知らないのでしょうか。私たちは彼女が元気なことを願うだけです。

ハンペル

1943年7月16日

C. T. はとてもひどい肺炎になってケンペイタイから戻りました。彼女は地面で寝なければなりません。彼女はとてもかよわい人なのに。

¹⁷⁴ ハンペル夫人はこれらのバッジを仲介取り引きしていた。

ハンペル

1943年7月21日

F.M. のところにケンペイタイが来ました。彼らは彼が海軍に入っていたのを発見したのです。彼は看護師でした。彼はアルバムを見せる必要がありました。そしてそこにはもちろん海軍のスナップ写真がありました。彼はそこに写っている男子の名前とどこにいたのかを列挙しなければなりませんでした。すべてを知っているかのごとく。彼が少し口ごもると、平手打ちをくいます。彼の親族のひとりがケンペイタイで拘留されたことがありました。大きな部屋で一日中地面の上、しゃべることは許されません。拘留されているのはそれほど悲惨ではありません、でもそこで経験せねばならない痛みは悲惨です。彼らはよく考えることができないように何かを注射します、だから嘘もつけません。ガソリン蒸気の上に乗せ、水の中に入れたり、腕に吊り下がったりします。そこから出てきた人々はみんな、何も言う勇氣もありません。すべては後から聞くことになるでしょう。そこに入ることがないよう望むばかりです！空襲警報の時に走り抜けた人々は、叩かれたり縛られたりするだけでなく、まったく歩けないよう足の裏を傷つけられると言われていきます。

ハンペル

1943年7月24日

テレシア教会の主任神父がケンペイタイに拘留されています。彼は教会で神の灯火をつけたままにしていたのです。彼はそれを消すべきでした。もう一人の知り合いも拘留されています。隣の灯りが彼女の家を照っていたので、彼らは彼女を連行したのです！彼らはやはり奇妙なやつらです！

ハンペル

1943年8月16日

今日は登録証明書を表示させるため、私たちはいたるところで再度呼び止められます。彼らが路上で逮捕した白人は全員政治情報局に連れて行かれ、その後尋問されそして釈放されます。そしてもちろん私は偶然赤、白、青の服で歩いていました。幸い私はいたるところ回り道をしていくことができます。

ハンペル

1943年8月20日

何という日。彼らは今、白人女性の狩りをしています。彼女たちはいたるところで呼び止められます。働いている夫のいる白人女性も腕章をつけています。番号の入った赤い腕章と日の丸と番号の入った白い腕章があります。赤い腕章の人々はみな政治情報局に行く必要がありました。隣の奥さんは4度呼び止められ、2度政治情報局に連行されました。ですから全部で6度。彼女の夫はまだプラジョー¹⁷⁵で働いています、だから彼女は収容所外部に残ることが許されたのです。私は彼女が絶対帰宅しないだろうと思っていました！男子は政治情報局にいったことの証明書がもらえました、でも女子はもらえません！そして今、24時間以内に白人全員を収容所に送り込もうとしています。…中略… K.C. は15才になったばかりでプラナカン[印欧人]です。でもいたるところで彼女は呼び止められます、なぜなら純血のオランダ女性のようにみえるからです。

ハンペル

1943年8月21日

おやおや、彼らは今日私のところに家宅捜査にやって来ました。家にいなくてよかった。ママは彼らに遠慮せず中に入ることを許し、私のガラクタを見せたと言いました。たいした物はないと思いましたが、そして他の日に戻って来て引き延ばすつもりなのです。ママはそれなら即座に持ち物を調べるべきだと言いました。彼らが持ち物を開かなかったのは一方では残念です、そうすれば全部終わっていたのに。私はある場所にママが取り出せるように鍵を置いていたのです。それは私が検挙され衣類が必要になった時のためです。

ハンペル

1943年8月31日

8月28日土曜日、彼らはまた集団をケンペイタイに連行しました。かわいそうなSがそこに入っています。彼はいずれにしても1年ほど自由でした。彼はどこに収容されるのでしょうか。いずれにしてもストリウスワイクではない、あの刑務所は満杯だとのこと！彼らは彼を午後寝床からたたき起こしました。Rは子供たちと散歩していて彼が車に乗るのを目にしました。W氏は彼がちょうど事務所から帰って来た時連行されました。ひどいことです！銀行ではブランダ[オラン

¹⁷⁵ スマトラ南部のバタビア石油会社 (BPM) の工場は、原油からガソリン、灯油、潤滑油を製造していた。

ダ人]全員が解雇されています。RとSだけはケンペイから釈放されれば居続けることが許されています。

ハンペル

1943年10月20日

P夫人が政治情報局に呼び出されました。彼女が外出していた時、彼女の息子がオランダの歌のレコードをかけたのです。彼らは彼女の家をめちゃくちゃにひっくり返しました。彼女は殴られず、これだけで済んだことをまだしも喜ぶべきです。

ハンペル

1944年1月1日

彼らは、白人と金髪の人を一斉検挙しています。アサル・ウスル[家系証明書]を持っていたとしても。だから私はもう通りには出ないことにしています。空襲警報の際、また人々の一団を連行し殴りました。CAS¹⁷⁶はまた兵舎に変わり、監視に挨拶をしないと1時間も太陽の下に立たされ、それに加え虐待します。「プラナカンのリーダー」[印欧人のリーダー]として自己主張した人は、家族全員がケンペイタイに捕まっています。だからいい方に向かっています、ヤップがまた打撃を受けたことがはっきりしているということです。

ハンペル

1944年2月21日

Sさんの件を私はまだ話していなかったと思います。その人は誕生日の夜、友人たちと騒ぎ過ぎました。ケンペイがやって来ました。ピシャ！ガラスに石が投げつけられました。フーッ、お客の半数が身を隠しました。もちろんかなり愚かなことです。そのケンペイが中に入って来て、なぜこんなに騒いでいるのか何人いるのかと尋ねました。ああ、これだけです。なぜこんなにコップや椅子があるのか？人々は部屋の隅々から連れ出されました。ペンダフタラン[登録証明書]が取り上げられ、翌日ケンペイのところに取りに来るようにしました。そこで彼らはまず1日中太陽の下に立たされ、そして翌日また戻って来る必要がありました。その間にSさんは彼の日本

¹⁷⁶ Carpentier Alting Stichting (CAS) はコーニングスブレイン東にある教員養成学校及び高等市民学校 (HBS)。

人ボスと話し、すべてを語りました。彼らがそこに翌日戻ってきた時、ペンダフタランがまた戻され何も罰されませんでした。戦時にあまり騒いではいけないと言われたただけでした。

ハンペル

1944年4月23日

彼らはこの頃また路上で女性を尋問しています。女性は誰もが小包を取り出さねばなりません。布切れや他のものを何か持っていて彼らの質問に即答できなかったなら、困ったことになりました。私たちは物を売ることでお金をもうけることは許されていません。現在、トラックは囚人たちで満杯です。布は警察署で細切れにされます。これは価格上昇に対するためです。1メートルの布が時には25ギルダーや30ギルダーというのも狂っています。

ハンペル

1944年5月18日

目下、町中のうわさはジャカルタで愛されている医師Lさんのことです。彼とその父親は政治情報局に捕らえられています。彼の妹が海軍士官と婚約していて、その人は純血オランダ人です。彼らは今まで彼を隠しておくことができました。家宅捜査の際ヤップたちは2度Lさんのところを訪れましたが、彼らはその人を見つけていませんでした。ところがその人はトゥカン・ボトル[古着回収業者]によって密告され、連行されました。それからLさんと父親が連行され、この土曜日には清潔な衣類を得ることが許されます。彼らはムス[敵]を隠したことでとても困ったことになっています。それにLさんのかわいそうな奥さん。彼らは結婚したばかりなのです。

ハンペル

1944年5月27日

Lさんと彼の父親が帰宅。警官はこの件がもう1週間あとに起こっていたら大変だった、そうすると彼らは窮地に陥っただろうから！と言いました。彼らは新しい法を作りブランダ[オランダ人]の隠匿は終身刑になっています。Lさんたちにとって幸いだったのはケンペイタイの手中に落ちなかったことです。彼らはトゥカン・ロワック[古着回収業者]ではなく、お隣のバブによって密告されたのです。

ハンペル

1944年9月6日

あの人たちは気が狂っています。8月31日に一団が検挙され、彼らは家宅捜査をしました。W夫人と娘さんもケンペイタイに監禁されています。彼女たちが国歌をピアノで演奏していたのを、たまたまニッポン人が聴いたのです。街中を彼らが持ち去ったレコードや楽譜で満杯になった自動車が走っています。なぜ彼女たちは自制しなかったのでしょうか？なんの役に立つのでしょうか？外に表すより、心にしまっておく方がいいのに。

ハンペル

1944年10月7日

W. L. の息子のひとりが政治情報局に、明かりが入ってこない独房の中でズボンだけはいて8日半入っていました。他の独房ではズボンなしシャツだけ身につけてもよい。食事は6セントでもらえます、でも毎回2セントは誰かの懐に消えます。彼が帰宅した時には蒼白で感覚がありませんでした。最初は、警防団[民間監視]に挨拶しようとしなかったと言われ、それから米国のレコードでダンスをしたのだと言われました。ああ、彼らはいつも誰かを検挙するのに何らかの理由を見つけ出します。

ハンペル

1944年10月29日

V. O. 一家は全員3日間豚箱に入っていました。警官たちがレコードを取りに来ました、その時彼らは警官に許可書があるのかと尋ねました。そんなことは尋ねてはいけないのです。

ハンペル

1944年12月21日

さあ、大変！ 街はまた緊張の中。ケンペイが精を出しています。政治情報局で最も憎まれかつ愛されているインドネシア人ポーハン氏¹⁷⁷が逮捕されました。彼はものすごく大声をあげ殴るこ

¹⁷⁷ E.S.ポーハンは、すでにオランダ統治下での政治情報局（PID）の一員であった。日本占領下でポーハンは刑事グループと共に任務を遂行し、特に外国のラジオ放送の盗聴、ラジオ封印の有無、スパイ活動、禁止物（旗や武器）の所有などを調査していた。他の重要な任務は、国民意識の判断で、すなわち新しい規

とができます、でもとてつもなく優しくもあるのです。たくさんの人々が今捕らえられています、なぜなら彼らを助けるため書類を隠していたことが分かったのです。彼に対立する人々には大声をあげ殴ります、でも彼は後でいっしょにアイスクリームを食べます、それで今では親友なのです。彼から何も助けられなかった人々からは憎まれています。2番目にペー氏が「赤十字社」から連れ出されました。彼とポーハン氏は厳しくなかったとのうわさです。

その他、スワルトと名乗るのは愉快的ことではありません。アンチェ・スワルトは12月18日ジャワ時間の朝5時半に連行され、まだ帰宅していません。誰も彼女がどこにいるか知りません。彼らはスワルト少佐の奥さんを探しています、そして逮捕されたアンチェ・スワルトの夫は大尉です。その少佐は逃亡中のはずで、彼らは彼が妻のところだろうと考えています。彼女は寢床にいるのを起こされました。もう1人のスワルト夫人は2度ケンペイに尋問されました。後で彼女はボイテンゾルフにいる病気の母親のところに行くために政治情報局の許可を求めなければなりません。彼女がスワルトという名前だと聞いたとき、また尋問がはじまり、彼女は逮捕されました。幸い彼女の夫は医師です。彼女は書類を持っていました。電話局でも大問題です。Lさんはすごく危険な状況の中にいます。電話局のチーフがひとりずつケンペイのところに来ます。彼女は捕らわれるのを待つばかりです。

ハンペル

1944年12月24日

彼らは今慌ただしく地位のある軍人の妻や婦人警官を連行しています。ちょうど4人が第5班の中に入って行くのを見ました。W一家のところには婦人警官がひとりと士官の妻がひとり住んでいます。彼女たちは逮捕される時のためにすべて用意し、とても心配していました。幸い彼女たちは第5班まで数歩踏み出せばいいだけです、なぜならすぐ傍に住んでいますから。

ハンペル

1945年5月21日

人生はまったく生半可なものではない。なんとまあ、長い間日記を書いていなかったことでしょう。1月3日水曜日が最後。私たちは混乱状態でした、でもすべて話してみようと思います。

1945年の1月8日月曜日でした。私はまたニュースがあり、それを書くつもりでした。何かあって私は「写真をもう一度みなきゃ」と思い、戸棚を開けて見始めました。突然自転車で2人の男たちがやって来ました。私が犬たちをくくりつける前に彼らはもう中に入り「我々は政

則の適用に伴ない親日あるいは反日を判断することにあつた。(De Jong 11b eerste helft, 480 en NIOD, IC 002221)

治情報局のもので、おまえは収容所にいる人のバラン[荷物]を持っている¹⁷⁸という知らせを受けた！」と言いました。アレッ、まずいことだと私は思いましたが「まあ、家宅捜査をなさって下さいな！」と言いました。彼らは戸棚に向かいアルバムを奪い取りました。これは誰、あれは誰か？N.R. がやって来ました、彼女の名前と住所を申し出、彼女を送り出さねばなりませんでした。彼女が真っ青になったのが分かりました。私の戸棚や箱はすべてひっくり返されました。彼らは日記のある場所を通り過ぎました。本箱の中は見たのですが、日記は他の本の後ろに置いてありました。私の部屋の後、他の部屋にも行きました。ママは家におらず、戸棚を開けることができませんでした。彼らはまた翌日に戻ってくるつもり。ママがちょうど今帰宅しました。戸棚からの取り出しは彼女の部屋から始まりました。私は彼女に「政治情報局の人たちよ。私たちは収容所にいる人のバランを持っていると密告されたの！」とだけ言えました。

Dさんの木箱を私たちは、Rさんのもので、彼は刑務所にいて鍵がどこにあるのかわかりませんと言いました。こじ開けてもいいですよと言いました。彼ら箱を見て突然「Dさんって誰だ？」と尋ねました。というのは私たちが箱はRさんののだと言ったからでした。ママと私はお互いに見詰め合い「ああ、Rさんはそう呼ばれているのです、私が本当は違う名前なのにヘティールと呼ばれるように！」と言いました。ママが戸棚に身を隠すのを見ました。大丈夫でした。彼らはRさんの写真機と顕微鏡を持ち去りました。パパのところでは写真機2台と双眼鏡と拡大鏡。私のところからはまだ無し。90ギルダーあるオランダのお金のことが心配でしたが、H夫人のトランクのところでは、私は主人が詰めたものですよと言いました。彼のガラクタで鍵は主人が持っていました。彼らはこじ開け、KPMの写真を見つけました。だから大丈夫でした、なぜならあなたはKPMで働いていたから。彼らはそれ以外見ませんでした。

それからグダン[物置]を開ける必要がありました。まあ、びっくり。私の心臓は今でも考えただけで止まりそうになります。彼らは木箱を指差しました。これは何だ？「ああ、私の主人の蓄電池付きラジオです」それはパパのラジオで、私たちは保管していたのをすっかり忘れてしまったのです。外に出さねばなりませんでした。私は鍵を持っていました。何が出てきた？ワーッ！封印のないラジオ！何か見つけ出したので彼らの喜んだことといたら。ママは知らなかったことですよと言ひ、私が同行すべきですかと聞きました。「もちろん」と彼らは言いました。1人は自転車にのって去りました。私はすばやく入浴し、食事をし、つめを切り、衣類を詰めて待ちました。長くかかりそう、それでお昼寝するためにベッドに潜り込みました。どれほど長期間自分のベッドで眠れないのかは誰にも分からないですから。その間、もう1人のインドネシア人が家宅捜査を続けていました。

ニッポン人の乗った素晴らしい車が走ってきました。だからまたベッドから出ました。私は彼に観察されました。それからラジオ、それにあなたの写真そして彼は軽蔑的になりました。家が偵察されました。これは閉めて鍵をかけねばなりませんでした。私の心臓は止まっていました。家族みんな同行しなければならないのかしら？かわいそうな犬たち。私の部屋に鍵をかけ、

¹⁷⁸ 1944年3月に戦争捕虜及び民間人捕虜の所有物は引き渡す必要があると定められた。「食糧、物資事情及び就労状況」1944年3月4日参照。

鍵はママに渡さねばなりませんでしたが、そして私は同行しました。私は少しため息をつきました。日本人はパパを見ました、それから私、そしてパパも一緒に行かねばなりませんでしたが。彼はパジャマのズボンとタオルだけ携えて行きました。日本人はパパとママにお別れをさせました。私はママに「私の日記！」とだけ言えました。前もって売りに出したものはすでに外にだしてあり、書類は破いていました。それは他の人のバランでした。それから私たちは車に。パパがラジオを持ち、私が蓄電池。私は前の席に坐らねばなりませんでしたが。まあ、なんという素晴らしい車なのでしょう。乗り心地がいい。なんて長い間私は自動車に乗ってなかったのでしょうか？ニッポン人だけがいじわるそうに笑っていました。車が走り出す時、私は向かいの隣人にだけ手を振りました。彼らがすぐにパパと私が連行されたことを言ってまわることでしょう。

私たちはケンペイタイの建物の前、そして最初の門を通りぬけました。私は「よかった、政治情報局に行くのだわ！」と思いました。でもケンペイタイの2番目の門に入り込みました。家宅捜査をした男たちの1人が車を運転していて、私のため息を聞き真っ青になっているのを見ました。「そうだ、我々はケンペイタイの者だ！」と言いました。車は後方に戻って止まり、私たちは車から降り、部屋に連れて行かれました。誰が地面に坐っていたと思う？E氏です。だから私はやはり収容所の人々のバランに関してだと思いました。なぜならE氏もW一家のバランをあずかっていたからです。私たちの名前が記載され、私たちは外に出なければなりませんでしたが。

私は寝台が2台ある部屋に連れて行かれました。なんて恐ろしい。何がおこるのでしょうか？坐って誰が我が家を訪問していたかを話す必要がありました。さあ、あまりたくさんいません。ママが働いている援助組織にいて名前を知らない人。K.N.とL氏、などなど。なぜなら彼らが家にスパイをよこしていたら、なんでも正確に知っているはずだから。他には誰だ？そして彼らは私をなぐり始めました。鼻が曲がりました。私がまず考えたことは「小さな鼻でよかった！」ということでした。「立ってここにある椅子に坐れ！」彼らがプラグを取り出し、それで私の方に来ました。「彼らが何かしたら叫ぼう！」と思いました。尋問がまた始まりました。なんとまあ、何だったと思いますか、電気を流すつもりかしら？彼らは私に写真を見せました。

「この女性は誰だ？」「知りません！」（電流！）

「この男性は誰だ？」「知りません！」（電流！）

私はできるだけ激しく叫び続けました。足を地面から離そうとしました、なぜなら椅子はやはり木製ですから。でも私は電流を感じつづけました。彼らはきっと椅子の脚に鉄を入れたのです。私は「パパはこの叫び声を聞いてどう思うかしら？」とも思いました。そして彼らは誰が家にやってきたのかを尋ね続けました。どうして私が言うことができるのですか、私は絶えず外出していたのですから。彼らのスパイだって知っていたはず。「知っているはずだ、なぜなら何時から何時まで外出していて、彼らはおまえの部屋の横を通るはずだからだ」あるいは彼らは知っていたのでしょうか。

私が何も知らなかったので、ドアの前で待っている必要があったパパのところに行きました。私は電気を流されることを彼に言うことができました。叫び声は聞こえませんでした。彼は少したってから出てきて、私の方をもの問いたげに見ました。2人とも何も知りませんでした。

た。封印のないラジオといっしょに中に入れられました。そのラジオは船に乗せていて海気でさび付いていました、それから彼らは写真に写っている知らない男女のせいで虐待します。再びE氏のいる部屋に来ました、私たちはお金と指輪を渡す必要がありました。E氏に笑いかけようとしましたが、彼は床の隅にみじめに坐っていましたが、この年老いた人は私の叫び声に明らかにびっくりしたはずです。私たちは後方に連れて行かれました。靴を脱いで、ベルトを外し、衣類も全部仕切り棚に。E氏は2号房へ、私は6号房、パパは9号房に行きました。

6号房では、私を見守っていた女性たちが床に坐っていました。私たちはしゃべってはいけませんでした。この家宅捜査はジャワ時間の午前10時に始まり、午後6時に私たちは監房に入っていました。家では時計をニッポン時間に直す余裕がありました。監房で私たちはすぐに親しくなり、彼女たちは私が逆上しているのを面白がりました。なぜなら私はずっと「クヤシイ、私は封印なしのラジオで連れて来られたのに、彼らは私の知らない男の写真のために私を虐待する！」といい続けましたから。D.B.は腕をぐったりさせ、手首にかかった縄のために傷がありました。彼女は数時間吊り下げられており、私に印象づけようとしていました、なぜなら彼女は絶えず特に見せたがっていましたから。S. v. Bは殴られたためにすっかり青あざができていました。Kさんだけが普通に見えました、でも彼女はもう5週間監房に入っていました。彼女たちは私に食事をしたかと聞きました、なぜなら私は夕食には遅すぎたから、ジャワ時間の4時半に夕食がもらえます。朝食の後は、何も口にしていなかったと言いました。それなら翌朝7時半まで待つ必要がありました。彼女たちはどんな慣わしなのかささやきました。すべて号令なのです。6時に起床。それから顔を洗うために水を瓶にもらいます。その後7時半に食事とお茶一杯。入浴は監視に依存します、彼らが連れ出す気持ちになった時だけ。4時半に夕食とお茶。6時に水を1杯もらい、8時半に就寝。すべて号令で、話しはなし、すべて正確にするように気をつけて、なぜなら彼らは強く殴るからと彼女たちは私に言いました。隅には溝の上に穴がありていました、それがトイレでした。用を済ませたら、「ポリティーサン、カーマル6・ミンタ・アイール・ベンジョ！」[警官さん、6号房でトイレの水が必要です]と言います。警官が外で水道管を開き汚物が流れ去ります。

その間、就寝。私たちは女性4名で十分スペースがありました。S. v. B. とKは電話局の人たちでD. B. は外国放送を盗聴したことで拘留されていました。3号房のB夫人は外国放送を聴き、また地下運動もしていました。彼女は逮捕されすべて関係のない名前を言いました。ケンペイは全員B夫人と電話局の人々の件にたずさわっていました。電話局の人は妨害行為を疑われていました。私たちは夜のために備えておくよう言われました。彼女たちは私がすべて2枚づつ着ていたのを見て笑いました。身につけていたよかったです、なぜならだから彼らが背中に電気を流した時それほど感じなかったのです。私は運がよかったです、なぜならたいていは衣類を脱がされ胸や性器に電気を流されるからです。

彼らが私を連れ出しに来たのは、ちょうど私がうとうとしていた時でした。だから私は外に。Eさんがちょうど監房に連れて来られたところ、きっと尋問されていたのでしょう。「食事はもらえるのかしら？」と私は考えました。とんでもない。また知らない人の写真。今回はニ

ッポン人による棒での拷問。最後に彼は写真の女性を指差しました。でも私は彼女も思い出せませんでした。私は彼にこの男女の名前を尋ねました。それなら少なくとも何か知っていることになりすから。これはスワルト夫妻でした。良く見て、そうこれはスワルト夫人、口元で思い出しました。これは若い時の写真で帽子をかぶり襟付きのコートを着ていました。私が彼女と何も関係がないのを理解してくれません。彼女を知っていることは認めました。「そうだ、おまえたちは彼女の夫スワルト大尉をかくまい、彼はおまえたちの裏に住んでいる夫人のところまで壁をよじ登ったのだ！」なんとまあ、私はただ呆気に取られました。スワルト夫人は占領の後になって知り合った人で、私は彼女の夫のことはまったく知りませんでした。…中略… 私は暗くなってまた戻されました。食べ物はもらえないのかと尋ねました、まだ何も食べていませんでした。必要ない、死ね！何か飲むものは？それは許されました、庭に水道がありました。少なくとも何かあったわけです。再び板の上に横たわれた時はほっとしました。もちろん最初の晩は眠れず、眠った時は泣きながら「アンブン」[謝罪]と夢で叫んでいたと、後から彼女たちは言いました。

朝私たちは「バンゲン」[起床]の号令で起こされました。労働許可されている「クルジャ」[収監者]が連れ出されました。お椀に入ったお水が扉の穴から差し出され、私たちはベンジョ[トイレ]の上で顔を洗うことが許されました。お椀を外に戻し食事を待ちました。何がもらえるのか尋ねました。米とカンクン[水草]、時にはなにか別のもの。食事が来ました。まあ、家の犬たちでも食事はお皿にのせてもらえます。私たちは長方形のブリキ缶に2本のスンプット[お箸]とマグカップにお茶。この缶にご飯とカンクンが半分ずつ入っています。すべて平らげました。ブリキ缶とマグカップを出し、それから監房を掃除するためにほうきと雑巾がもらえます。掃除は私たちに許されている唯一の運動でした。さもなくば私たちは板床の上でずっと膝をまげて坐っていなければなりません。おお、何とおしりが痛いこと。でも慣れることでしょう。11時に入浴。浴場は外でした。一方は長いレンガの湯船にお水。ガユン[手桶]としてマグカップをもらいました。それではだかで立って、ヤップやインドネシア人の看守に眺められます。私は普通にしました。日本では男女混合で入浴するのでしょうか？でもKはなんとシャツを着て入浴しました。気持ちがよかった、裸身に陽が当たって。…中略… 入浴の後は食事待ち。それからマグカップにお水、そして就寝。

インドネシア警官の監視は夜中の1時に交代、すごい叫び声なのでビックリして目覚めました。朝9時と午後4時です。ニッポン監視は2人のヤップと6人の警官からなり、毎週新しい警官になりました。幾人かは撃ち殺したいほど。1人はトイレのお水を求めると「バルー・マーケン・ランタス・ムスティ・ブラック」[食べたばかりだ、その後はきっと用を足すはずだろう]と言いました。収監中はずっと封印されていないパパのラジオと私の日記のことが心配でした。誰かに話す勇氣もありませんでした。彼女たちは彼らが何か見つけたらすぐに連れ出されるだろうと言いました。1月9日、あるいは10日にE氏が虐待を受けました。「神様、神様」そして「アンブン、アンブン！」と叫ぶ彼の声が聞こえました。翌朝私たちはみな監房から出され、8号房に入れられました。そこは男子が入っていたところで私たちはそこを清掃せねばなりません。…中略… 女性は時々外で日光浴できましたが、男子はできませんでした。

1月11日の夜、スワルト夫人は赤いあざだらけになって入ってきました、彼女は息を切らしていました。私を虐待した男は私を指差し、尋ねました。「おまえたちは知り合いか?」「はい」「おしゃべりに気をつけろ!」「まだ同じ服をきているのか?」彼がそれに気づいたとはおどろき。「はい、私は『ハリ・ブサル』[生理]で布も毛布も石けんもありません」と言いました。「手配してやろう!」と彼は言いました。2日後に2枚の布をもらいましたが、その時は幸いもう終わっていました。スワルト夫人と私はびっくりして見詰め合いました。ひそひそ声で私たちは話し始めました。彼らは彼女も「ゲリストリック」[電気を流す]されました。そして私たちが彼女の夫をかくまったと話しました。彼女の夫は私たちのことを全然知らないのにと彼女は憤慨していました。彼女を含めスワルトと言う名の人7名が疑われ連行されました。スワルト大尉に何があったのでしょうか?彼は収容所から逃げ出したはずで、スワルトのためにみんなが虐待されています。

夜、7号房の2人の女性がおしゃべりをしたため向かい合って殴られました。私たちの監房のKは、私たちがしゃべっているのをみて襲いかかり「あなたたちが口を閉じなければケンペイを呼ぶわよ!」と言いました。笑わずにはいられませんでした。…中略…翌朝、A氏が医師のところへ歩いて行くのを見ました。彼はかなりやられたようでした。彼はほとんど歩くことができずでした。B夫人は医師のところへ担がれていきました。彼女は半身麻痺し、日中は死ぬまで外に出されていましたが、なぜならとても臭かったからです。朝食時にスワルト夫人が連れ出され、1日中戻って来ませんでした。私たちには叫び声なども聞こえませんでした。彼女が戻ってきた時、私はとても驚きました。彼女は左腕を骨折していました。なんとまあ、私は気を失っただろうに。彼女をととても気の毒に思いました。彼女は年齢が60歳の女性で、夫がどこにいるか知らなかったため吊り下げられたのでした。彼女は最初の8週間政治情報局に入っていました。とても気丈な女性です。私たちは彼女の叫びを何も聞きませんでした。私なら感じるより前に叫んでいます。

このようにして数日が過ぎました。ある晩、電話局の少女が8名入ってきました。だから私たちはみんなで12名。後から女子がもうひとりノールトワイクでの放火¹⁷⁹の疑いで加わりました。彼女の夫は9号房にいました。この人は10日間いました。電話局の少女たちは14日間入っていました。彼女たちはほとんど虐待を受けませんでした。彼女たちの尋問者は分別のある日本人ミオサキでした。B夫人とスワルト夫人の件はケンペイの中でいちばんいじわるなココ（キングコング）でした。ミオサキは時々私たちがタイソー（体操）をするために外に連れ出し、その後私たちはグラス一杯の砂糖入りの冷たいアイスティアーをもらいました。パパの封印のないラジオ、私の日記、家においてある40キロのコーヒーのために、私は神経質になり高い熱を出しました。看守のチェバが私に2錠のキニーネをくれました、突然私はまた「ハリ・ブサル」[生理]になり止まりそうにありませんでした。…中略…ミオサキが私は毛布も石けんも持ってないと聞いた時、彼について行く必要がありました。彼から戦前の石けんをもらいました。彼は私が必要

¹⁷⁹ 1944年末、ノールトワイクの鉄道沿いにある旧オランダ郵送船会社の建物で火災が発生した。そこには日本のプロパガンダ映画が保管されるとのことであった。（ハンペルの日記、1944年12月29、31日）

としているものを書き留めました。でも、苦労は水の泡でした。コカが私のトゥアン・プリクサ[尋問者]でした。毎朝ミオサキが私を見に来て、綿を持ってきてくれました。親切な日本人でした。

14日後のある朝、午前中に電話局の集団、午後に残りの人々が出ていきました。それからまた2人が加わり、私たちは6人になりました。1ヶ月後私たちは連れ出されました。スワルト夫人とKと私は7号房、他の3人はすごく臭いB夫人のいる3号房。…中略… 私が親切だと思っている日本人がひとりいました。私たちは彼を殴り屋ヤンと名付けました。彼がそこから私を連れ出すよう祈りました、なぜなら彼のところで働くことが許されたからです。翌日、連れ出され、書類を順序良く並べなければなりませんでした。すべて乱雑でした。それは日本語でした。でも筆跡で何がどこに属すのかが分かりました、殴り屋ヤンは私が日本語を読めると思ったようでした。「つり目」「切れ目」「チャイニーズ」が時々誰かを連れ出し食事を与えました。でも殴り屋ヤンはけちで有名、何もくれませんでした。でもまあ、監房の外に出られたのを良しとします。

監房では楽しいこともありました。特に日本人のところで食事したあと、彼女たちがどのようにそれが料理されているかを話した時には。私たちは釈放されたらガン・ホレのケーキ屋テルマーテンにケーキを食べに行くことを約束しました。それから食事時間になる頃に私たちはカンクンの匂いを嗅ぎました。ブン！何度か私たちはバービ[豚肉]をと1度魚がでただけでした。最後の日々はご飯と豆がでました。まあ、これは食べられるものではありませんでした。それも生煮えでした。9号房からパパが私の残り物をもらってもよいかと言う手紙をもらいました。女性にも食事は十分ありませんでしたから、男性だとなおさらです。私の監房にいるほとんどの女性は警官が密かに何か中に持ってきた時に食べるだけでした。彼女たちは警官に家への手紙を渡します、1枚の手紙につき10ギルダーから15ギルダー払って食事を密かに持ち込むのです。密かに持ち込むことは緊張する瞬間でした。私は加わりませんでした。発見されたら、警官、同居人、そして私が殴られることになるでしょう。とんでもないこと。この刑務所の食事で生き長らえるつもり。

朝と夜、私は注意を引くよう咳払いし、9号房の父から返事をもらいました。私は外で何かしたら、9号房から見えるようにしています。時々少し9号房と話しをする時もあります、ある日チバがそれを見ました。ああ、私はなにか罰せられると思いました。彼は幸い見て見ぬふりをしました。やはりいい人。看守「ヴィム・プリンス」から棒で頭を殴られました、監房の真ん中に衣類を持ち込んだから。7号房はダニだらけ、私たちは1日中互いのノミ取りに励んでいました。入浴は監房ごとに順番です。9号房の人たちが7号房に沿って来ると、私は鉄格子の傍に坐り手を出して挨拶します。パパは監視に殴られました、なぜなら入浴をゆっくりし過ぎたから。パパは何回か尋問のために連れ出されました。1度は空襲警報の際で、すぐにまた監禁されました。日本人も彼の監房に入っていました。1人は殴り倒されていました。8号房はかつてヤップが1人だけいて、彼はマレー語を話さず、彼が小便をするのを聞いたら私が水を流すよう尋ねる必要がありました。…中略…

5週間後にミオサキが私たちの体重を測りました。みんな1キロから15キロ痩せていました。私だけまだ50キロありました、なぜなら他の人が残した食べ物を平らげたからでした。ケンペイが私に何を見たのかは分からない、でも彼らはみんな私に笑いかけました。6週間後にもっとも愛すべき尋問を受けました。その日は全てのココの当番兵が呼び出されました。監房が開けられ、連れ去られます。それぞれの監房にはココの当番兵がいました。私にタバコをすすめました。私は受け取りませんでした。彼らは私にパパのラジオについて聞きました。私は売ってしまい、私のラジオに関してはすでにグリセー通りの第5管区で収監されていたと言いました。持って行かれた封印のないラジオはもちろん壊れていました。最も奇妙なことを彼らは言いました。家が恋しいのか、あるいは夫に会いたいかのか、なぜなら彼はここにいたからだとか。ハンサムな夫を持っていると言いました。私がまだ「プラワン」[処女]かという。殴り屋ヤンが私の「バダン・クワット」[頑丈な身体]のことを絶えず話していた。彼は私たちが入浴しているといつも間を歩いていました。彼は手を洗うのに私の石けんさえも使いました。

ある日、殴り屋ヤンのところで働いていたら、彼がいない時に家宅捜査をした男がやってきてアイスティーを自分のグラスに注ぎ、私も1杯もらいました。彼は私のことを少し尋問しました。「そうだ、おまえの家には封印のないラジオがあるはずだが、我々はまだ見つけることができない！」私は彼をただ見つめただけ。殴り屋ヤンが入ってきましたが、立ち去りました。殴り屋がすごくけちな男なのは残念です。「肉屋」でさえもっと気前がいい。他の人たちはおいしい食べ物がもらえました。Sさんは「切り目」に彼が監視だった時、食事に誘われました。彼らの家で尋問があったら、ピサンカランブタンがもらえます。監房に何も持って帰るのが許されないのは残念です。彼らのチョコレートは素晴らしかった。ミオサキがある夜監房にピサンの房を持って来ました。これはまたお祭り騒ぎ。皮までも私たちはしゃぶりました。…中略… 午後になるといつも私はどうでもよくなり、陽気に小声で歌い監房でも居心地良く思っていました。どういことでしょうか？…中略…

ある午後、Kが連れ出されました。彼らは彼女を午後ずっと殴り続けました。彼女は体中腫れ物だらけでした。ただ殴り続けたのです。後から彼女は警官に中へ運ばれました。…中略… B夫人の件のために拘留されていたのです。彼女は12月25日に検挙されました。3日後に釈放、なぜなら彼女は潔白だったからです。彼女は家宅捜査の時にひったくられ、1月1日に突然また入ってきました。彼らは彼女をやはり虐待しました。私ที่บ้านに帰って数日後、彼女は死亡しました。B夫人も死の床に就いていました。彼らは彼女をどうしても生かしておきたいとっていました。ある日彼女は亡くなり、中央市民医療施設(CBZ)に運ばれました。Gはある日むくんできました。彼女は4時間吊るされていました。彼女は実に完全に衰弱していました。彼女はヤップの医師に注射され、もっとむくみました。彼らは監房からM医師を連れてきて、彼は「糖分が欠乏している！」と言いました。それから彼らは監視に余分の糖分を与えられました。彼らは、拷問する必要がなければ親切にしてくれます！1人が監房から出て行くとなんと淋しく感じることでしょう。彼女が衣類を外の小屋から出し、立ち去るのが見えます。新入者がくると、その人はあらゆることを尋問されます。前もっていつ帰宅が許されるのかは誰にも分かりません。

1945年2月28日水曜日でした。コカが監房に来ました。1号房から誰かが連れ出されました。私たちには誰だか見えませんでした。3号房からLさんの妹が連れ出されました。7号房からはスワルトさん、Sさんと私が連れ出されました。9号房から「パパ」。何だろう？私たちは期待を持ってお互いを見詰め合いました。私たちは衣類を監房から取ってくる必要がありました。…中略… 私たちは部屋に連れて行かれました。説明があり、私たちの所持物が戻され、帰宅が許されました。だから自由！Sさんと私は互いの首に抱き合いました。所持物が戻された時、コカが私の旅券用写真をみて「ムカ・チャンティック」[きれいな顔]と言いました。ほとんどみんなにそう言いました。少なくとも私をきれいだと思う人種がいるということです。監房に坐っていたので手と脚が柔らかくなりました。そしてもうそれほど日焼けしていませんでした。パパはひどい有様にみえました、もう少し長く監房にいれば死んでいたでしょう。家宅捜査をした男マスフル(金色売春婦)が私を別にして、私の部屋の鍵を自分で戻しに行くつもりだと言いました。家に帰る途中、私たちは知人に出会い、彼らは歓声をあげました。ケンペイタイから生きて帰ってきたのですから当然ですよ？私たちは楽しげな様子をしていました。ガン・ホレのテルマーテンでケーキを食べるために中に入りました。奥さんは私たちがどこから来たのか分かったようで、私たちにポートワインを飲むようすすめました。その店にいたHにもうすぐ帰りますと言ってもらうために家に行ってもらいました。私たちはテルマーテンで全部支払うことができありませんでしたが、私が明日お金を持ってきますと言ひ、彼女は承諾しました。…中略…

ママは私たちを見た時はパニック状態。ところで、彼女が体験したこと。私たちが車で出ていった時、彼女は私の部屋をすばやく開けました。M.T.さんにお金を持っていきました。ママはマスフルが彼女をののしり鍵をもらおうと家に来た時、ちょうど私の日記を始めようとしていたところでした。彼は私の部屋に閉じこもり、その後私の部屋で盗んだもので一杯になったカバンをもって出てきました。翌朝、彼らは家を上から下まで捜索し、ママはスワルトさんについて尋問を受けました。もちろん彼女は私たちと同様何も知りませんでした。なぜ私たちが灯りの合図をしたのでしょうか？パパがラジオを隠したから、でも彼らはそのことを言いませんでした。パパはラジオを防空壕にちょうど持っていき、木の枝を上へのせ隠したばかりでした。彼はママにそう言い、ママはそのまま隠しておいたのです。私はそれを知っているべきでした。なぜなら私はずっとラジオのことを心配していたからです。40キロのコーヒーはお隣に持っていきました。マスフルはずっと私たちの家に泊まり込んでいたのです。彼は私の自転車と予備タイヤとママのベッドを持ち去りました。彼らはTさんのパビリオンへの裏口をもちろんすぐに見つけました。Tさんは戸棚にもう1台封印のないラジオを持っていました。ママはしかたなく届け出ました。彼らは家宅捜査でどうせ見つけるでしょうから。私は手紙を収容所に配布し、私のアイロンはヘッドホンだと疑われていました。彼らはアイロンを分解していました。2月28日のちょっと前、私の部屋を片付けることが許されました。マスフルは私のベッドに横たわったままでした。パパは5回拷問にあいました。電気を流され、殴られました。彼の監房のM医師がパパをベンジョ・ペーパー[トイレットペーパー]で治療しました。…中略…

2時間待った後、マスフルが鍵を持ってきました。私はすばやく部屋を開け、すべてを外に吊り下げました。あなたの腕時計、私の金の腕時計、旅行用目覚まし時計、コティエの香水、ポンスクリーム、石けん、オランダ紙幣、地図の入った大きなカバン、万年筆一式、そして衣類はなくなっていました。私は届け出るつもりはありません、なぜならKはそれで死ぬほどの拷問にあいましたから。…中略… 私は3日間何がなくなっているのか木箱や戸棚を取り出していました。4日目、痛みに襲われ、2日間病院に入りました。医師は「神経症」だと言いました。…中略… ケンペイタイでは真夜中に人が検挙され尋問されるのを知っていますか？朝になると私たちはみんなパニックになっていました。それから私たちはケンペイたちが家からくるのを見ました。私たちがココの当番兵を見たら、私たちはお互いに恐怖心でオシッコをするためベンジョ[トイレ]のため押し合いへし合い。朝、監房の中は暗かった。それから彼は鉄格子を通して見に来て、一緒に行く人を指差します。夜にはずっと明りが灯っていました。なぜなら彼らは私たちを見張る必要があったからです。そして懐中電灯でも照らされ、彼らが私たちのことを笑いしゃべっているのが聞こえました。M夫人はニッポン語を理解でき、彼らが何をしゃべったか私たちに話してくれました。…中略…

数日後、私はB.L. が亡くなったと聞きました。彼女は中央市民医療施設（CBZ）に運ばれました。さて、それは前以て分かっていたことでした。また数日後にSさんが亡くなりました。その2人は病気のために出ることができると考えていました。看守「ベビーフェイス」はその2人が病気だと信じられず、なぜなら彼女らは家からのおいしい食事は全部平らげていたからだと言いました。…中略… Kは拘留されたままでした。ココは彼女を嫌っていました。私はルーデス水を含んだハンカチを送るよう彼女の母親を訪れました。それを私は彼女から頼まれたのでした。14日後、彼女の遺体をCBZから引き取ることができました。彼女はとてもいい人でした。そのハンカチは受け取られませんでした。私たちが体験した最後の尋問では、彼女は殴り屋ヤンがベッドに横たわり、彼女にティンタ[愛人]になりたいかと求めたと言いました。¹⁸⁰ 彼女は彼から2本のピサン・アンボン[大型種のバナナ]をもらいました。奇妙なことです。彼らから好意を持たれる、そうすればたとえひどいことをしていたとしても釈放されます。彼らから嫌われると、何もしてなくとも窮地に陥ります。そしてココは彼女を嫌っていたのでした。

3月12日、私を連れ出すためのココの当番兵たちが来て、私はまたケンペイタイに行く必要がありました。ただ驚いただけ、理解できます。それについて行って確かに自転車を返してもらいました。幸いなこと、なぜなら自転車なしではなにもできませんから。後から、ボールベアリングが盗まれていて、素晴らしい自転車タイヤが交換されていたのが分かりました。150ギルダーと中古の自転車を手に入れるためのあらゆる助けを得て、今私はまた自転車を乗りまわしています。…中略… 何回もマスフルがTさんのパピリオンの鍵を返すと言いに来ました。1度彼はあなたの腕時計をしていました。私は見て見ぬふりをしました。オランダのお金が置いてあった場所で、私は自分ののではない2.5ギルダー銀貨と3ギルダーの入った財布を見つけました。そ

¹⁸⁰ おそらく尋問は殴り屋ヤンの自宅で行われたと思われる。

れをマスフルに返しました。彼がそこにおいたはずですから。ある午後、マスフルのヘルパーが来て、パパの自転車をケンペイタイに譲り渡すことを求めました。「はい」という以外は言えません。なぜならマスフルがパピリオンの鍵を持っていますし、彼らは封印のないラジオのことを知っており、彼らはそれをケンペイタイに届け出ていなかったし、私たちが収容所の人々のトランクを持っていたことも伝えていなかったからです。…中略…

5月9日水曜日、マスフルが政治情報局のアブドゥラといっしょにパピリオンの鍵を渡しに来ました。彼らはたくさん盗むものがあること、そして私たちが届け出る勇気がないことを知っていました。アブドゥラは金の腕時計、ドレス、お皿、コップ、スプーン、トランク、タオル、レコード、などなどを持ち去りました。そしてそれをみんな許さなければなりませんでした。なぜなら彼らが封印のないラジオと収容所の人々のトランクについて知っているからです。Kさんの自転車も彼らは持ち去りました。ママは自分で盗品をベチャ[輪タク]に積み込む必要さえありました。

5月11日金曜日、パパが第5管区から呼び出しを受けました。彼は何を持ち去られたか報告書を作る必要がありました。彼らはケンペイの高官から彼らのことをよく見張っておく命令を受けていました、なぜなら彼らは彼らが人々から品物を盗み取るのを知っていたからです。家の近所の第5管区にスパイを置いて彼らは捕まったのです。…中略… 5月12日土曜日、地位の高いケンペイの車が来ました。ママは泣き続け、何も話したくありませんでした。なぜなら神経質になっていたからです。パパと0さんは寝室に残りました。だから私がすべて話しました。なぜなら彼らは証明書を手に持っていたからです。ベッド、それから自転車も書類といっしょに渡されました。彼らは3時間も私たちのことにかかわっていました。この様なマレー語での尋問は通訳なしでは厄介です。なぜなら誰もマレー語を正確には話さないからです。翌朝、5月13日の日曜日、彼らは午前中ずっとマスフルといっしょに家に上がっていましたが、マスフルは全部否定しました。ベッドと自転車と腕時計にだけ「はい」と言いました。あらゆることでニッポン人が彼を手助けしたのが分かりました。所詮彼らは同じ穴のむじなです。そしてなぜなにも取られていない収監者が帰宅した時に元ケンペイにサインをする必要があり、私たちはそうでないのでしょうか？なぜならこの日本のケンペイもいっしょに盗んでいるからです。そして彼らからのがれるためならすべてサインします。私たちは5月14日月曜日にケンペイタイに出頭する必要があると聞いた時には震え上がりました。

その月曜日、ママと私はどうなるか分からないので重ね着をしてケンペイタイに行きました。「牛」とチェバと殴り屋ヤンを見ました。殴り屋ヤンが親しげに私の頬をなぞりました。「肉屋」と別の1人が私たちを尋問しました。ケンペイ全員が私たちのことにかかわっていました。4時間後、私たちは帰宅が許されました。なんとまあ、私たちは重ね着をしていて暑かったことでしょうか。マスフルとアブドゥラはすべて返却せねばなりませんでした。アブドゥラはもちろんその日旅行していて、彼らはもっと言い訳があるのを知っています。何がもっと持ち去られていたのかマスフルはもちろんもう分かりませんでした。私たちはいずれにしてもまた帰宅できるのを喜びました。5月19日土曜日、ママが1人でケンペイタイに行く必要があり、彼女は彼

女の赤いカバンとお皿、コップ、スプーン、ドレスと壊されていたあなたの腕時計を持って帰りました。そしてオランダ貨幣の代わりに私のものでない2.5ギルダー銀貨と3ギルダー入った財布をもらいました。それから、ママはすべて返還されたことにサインする必要がありました。だから彼女はサインしました。自転車2台とベッドも帰ってくる予定です。なんとという奇跡。5月19日土曜日の午後、パパの自転車、そして翌朝Kさんの自転車が戻ってきました。あとはベッドだけ。

私たちは本当にかろうじて窮地を脱しました。2台の封印のないラジオを持っていたらどんな刑罰にあっていたことでしょうか？まあ、1台は壊れていましたし使用していませんでしたが。それに収容所の人々の木箱とトランク。それにパパがラジオで外国放送を聴いていたことで捕らえられたらどうなっていたことでしょうか？私たちの友人、知人、家族は毎回恐怖心に捕らえられていました。なぜなら彼らがいつ捕られるのか誰にも分からないからです。パパはあのマスフルをののしりました。私は何故か分かりませんがそれほど彼を嫌っていません。ただ哀れだと思うだけです。彼は義務を行ない、むしろそれ以上したのです。彼は私の収集したオレンジのバッジをそのままにしていました。私にはそれほどひどく虐待しませんでした、ヤップがいなくなった時、彼は拷問を止めました。彼がよい環境にいたなら、よい人でもあったことでしょう。彼らは無料の食事と宿泊、それにタバコがもらえるだけでした。そしてある人たちはそのためだけになんでもするのです。彼はもちろんチンタ[愛人]がいて、お金が必要なはず。彼はLさんのトランクから愛人のために毛糸を持ち去りました。私たちは彼のために全部を話したわけはありませんでした。

ハンペル

1945年5月28日

Jさんはプラナカン[印欧人]で、ケンペイタイのところで働いています。何回かに1度彼はS夫人のところにお金を求めたり、品物を持ち去ったりするためにやってきます。そして彼女は盗まれます。他に何ができるのでしょうか？ケンペイは決して生易しいものではありません。私がまだ書いていなかったことは、パパがプラグを口の中に入れる必要があったこと、両手にプラグ、背中の衣類の間にプラグ、そして彼らはそこに電気を流すのです。

ハンペル

1945年6月6日

まあ、まあ、まあ！彼らは私たちのことを忘れていません。誰かって？ケンペイタイです。昨日の午後、第5管区のボスが家に来ました。自動車かモーターバイクが家の前に止まるのを見ると

私は心臓が止まりそうになるのですが。昨日の午後は知らないうちに私の目の前に立っていました。彼はケンペイタイの高官の名で私たちがまだ厄介な問題があるか尋ねました。そして私たちがJとかいうひと[ケンペイタイで働いている印欧人]について聞いたことがあるか尋ねました。彼は女性たちに「お金を与えたら、夫を釈放しよう」と言ったはずだと。私はJと関係なかったことをよかったと思っています。普通のケンペイの上部にはジャワ全土を守るケンペイがいて、彼らが現在疑わしい問題を扱っています。助けにはならないでしょう、なぜなら誰もケンペイに苦情を申し出る勇気はありませんから。

ハンペル

1945年6月16日

街はパニックの真っ只中。彼らはたくさんの人々を逮捕しました、男たちと女たち。彼らはラジオを聴いたことや封印のないラジオを持っていたことを密告されたのです。彼らは正確に場所を知っています。一緒に盗聴していた同国人によって密告され、そして仕返しのため通報されます。1人が逮捕されると雪だるまのように続きます。なぜなら彼らは他の人にしゃべり、その人はまた他の人に話すからです。ところでニュースを売る人たちもいるし、購入する人たちもすでに捕まっています。

ハンペル

1945年7月15日

なんとまあ、ひどいこと。逮捕者数がものすごく増えています。彼らはお互い同志喧嘩をし、盗聴していることをお互いに届け出あったといううわさです。7月11日水曜日に私は政治情報局の傍を自転車で通りました。私の前をSさん、誰かが隣に走っていました。私は「彼が監禁される」と思いました。彼が中に入る前に彼を追い越し「おはよう！」と言いました。「おはよう」と返事しました。後ろをちょっと振り返ると、彼が政治情報局に入るのが見えました。本当に愚かな私、なぜならもう少しすると彼らは私も逮捕するでしょうから。彼は全ての刑務所をくまなくまわっています。最初は戦争捕虜としてグロドックに入っていました。その後はストリウスワイク刑務所に移されました。彼の事務所の前で釈放されました。彼はフリーメーソンのためケンペイタイによって連行され、そして今彼は政治情報局¹⁸¹に行きました。彼はバンドンのスカミスキン

¹⁸¹ 知られている限りでは、日本占領者はフリーメーソンを組織だては追求しなかった。おそらく同盟国ドイツがこの組織を追跡していた。ナチ占領下のオランダでは結社が禁止され、フリーメーソンは強制収容所に監禁され、その支部の建物や財産が接収された。(Th.Stevens, *Vrijmetselarij en samenleving in Nederlands-Indië en Indonesië 1764-1962* (Hilversum 1994) 279-295)

¹⁸²に入ることになり、何年も収監されるでしょう。現在逮捕されている人々はケンペイタイには行きませんが政治情報局です。というのはそこにはもっとスペースがあるからです。彼らはすぐに家から食事がもらえます、1日1回、日曜日は無しです。現在誰もが取り調べられています。奇妙なこと！それから彼らはいたるところに出撃します。家の前に自転車修理工がいるか知りたいものです。私たちがケンペイタイに逮捕されてから彼の姿が見えなくなりました。彼はずっと立っていたのでしょうか、私たちを偵察するためだけに？なんと名誉なこと！彼は私のタイヤもかつて修理したことがあります。彼らは偉大なるスパイでトゥカン・ロワック[古着回収業者]もそうです。¹⁸³ ああ、誰も信用できません、同じ人種でさえも。

ハンベル

1945年7月20日

「ご覧なさい、驚かないで下さい、なぜならすべて起こったことだから」私のモットーはなんて言ったかしら？これはひどい。とてもひどい。なにもかも話しましょう。…中略…7月19日木曜日、私は50リットルのカチャン・イジョ[小粒のグリーンピース]をE夫人のところに納めました。彼女は私に帰り道にグリセー通りに住んでいるうちのお向かいのF一家に本を渡すよう求めました。そうしましょう。オラニェ・ブレバードで私は不意に「彼らはパパを連行する！」という感じがしました。F一家のところに着いて、私は我が家の方を見、壁に自転車が2台立っているのが見えました。私はF一家に「私の家を見張っていて下さい、彼らがパパを連行する気がします！」と言いました。家にすぐに飛び込みました。そうです！パパが外に連れ出され、ベチャ[輪タク]に乗せられ、家はまたもやひっくり返っていました。パパは今政治情報局にいます。おそらくケンペイタイにいた人たちの報復かと思いました、そして第5班のボスが何かあったら即座に言う必要があると言いました。ですから私はそこへ行きました。私は「でも彼はどういう容疑ですか？」と尋ねました。「ドイツ的な傾向のためだ！」どういうことですか？彼が親ドイツ派。ドイツ人とは一言も話したことの無い彼が。それにドイツと日本は同盟しているのでは？ここでは私たちのことを嫌っている人がいるようです。…中略…

さて、すべてを話すために私は家に。どんな拷問を彼らがパパにしたのかは分かりませんが、でも少し後から彼らは戻ってきて「我々は防空壕を探す必要がある。パパはすべて、彼がラジオを隠したことを自白した」と言いました。不思議なことに私は驚かず、「どうぞなさってください！」と言いました。でも彼らは何もみつけませんでした。1人が電話しに行きました。「さて、彼らが何も見つけることができないからパパが連れて来られる」と言いました。そうです、

¹⁸² バンドンのスカミスキン刑務所には主に政治犯が収監されていた。1944年3月、バタビアのチピナン刑務所に監禁されていたオランダの政治犯はスカミスキンに移送された。

¹⁸³ 自転車修理工や古着回収者だけでなく、草刈り人を装い日本のためのスパイ活動をしていた。Op de muurにエリザベス・ケーシングは、いわゆる草刈り人が何時間も家の前に座り彼女の家や他の家をいかに偵察していたかを記載している。(Elisabeth Keesing, Op de muur, Amsterdam 1993 p.110-111)

少したって彼がやってきて場所を指差しました。私は何も知りませんでした。ラジオが出てきて、たしかにかつてはラジオだったものと分かります。だからやはり外国放送を盗聴したということ。でもこれはすべて彼の責任です。私たちは彼に何度も他の人に告げないよう言っていたのですから。彼らもちろん逮捕されるでしょう。私は親しい人にも言わなかったことを喜んでいます。彼らは私が何も知らなかったのをおかしいと思いました。なぜなら私たちがケンペイタイに逮捕されるまでパパは盗聴していたのですから。

私は長くて14日だと思います、それ以上いると彼は死んでしまいます。彼はいまだに血便があります。ケンペイタイから戻ってきた時からです。そしてこのような環境の中。ケンペイタイはこれと比べると天国です。彼は衰弱して立つこともできません、そして彼は彼らが今朝連行しにやってきた時まだ寢床の中にいました。今朝はママが着替えを試み、オバットゥ[薬]と食事を与えようと思いました。でも彼女は月曜(8月1日)になってはじめて許されます。Soはパパがベチャ[輪タク]に坐っているのを見、彼に親しく挨拶しました。でも彼女は政治情報局の2人が彼の後ろを走るのを見た時、震えあがりました。彼女はF一家のところに走り何かと尋ねました。彼らは、その時は何も知りませんでした。彼らはパパが連行されるのを見ましたが、その時なぜかは知りませんでした。でも彼らは「ああ、おそらくSさんのことに関係があるかも」と言いました。かわいそうなSo。彼女は「家に帰る勇気がない、私もいつもSさんのところを訪問していたからです」と叫びました。それを聞いた時、私はすぐになぐさめようと彼女のところに行きましたが、彼女は帰宅していませんでした。パパはSさんを知りもしません。そして私はそこに注文のために行くだけでラジオのニュースのためではありませんでした。

政治情報局の人々はパパを夜中の1時に寢床から連行する必要があったが、カシアン[気の毒]だと思い、朝早く来たのだと言いました。とんでもないことです。彼らうちに犬がいることを知っていて、怖がったのでしょう。それに彼らは眠りたかったのでしょう。彼が逮捕される1週間前から私はそんな感じが朝していたのは奇妙なことです。「防空壕のガラクタを燃やす方が賢明よ！」そう私はパパに言いましたが、パパはナンセンスだと思いました。そうするとラジオは完全に壊れてしまうでしょうから。何年間かのスカミスキン行きは決定的です。

ハンペル

1945年7月23日

今日、Sをマドゥラ通りの街角で見かけました。驚きました。彼がパパを政治情報局でみかけたかどうか尋ねるのに立ち止まるつもりでした。でも彼が通り過ぎるよう合図しました。少し後、ママが彼をみて自転車から降りると「ぼくと話してはいけない。でももう遅い」と言われました。またどういうことでしょうか？他の人を捕らえるために釈放されたのでしょうか？彼の両親によると彼は釈放され、誰も迎えることを許されないそうです、彼らは何も言おうとしません。

今日はママがまた食事と衣類を政治情報局に持っていきました。彼女は上官のところに行く必要があり、パパがパラパッタン¹⁸⁴に移送されたことを聞かされました。彼が新築された監房にいれば幸いです。ママはですからそこへ行きました。衣類は全部渡すことが許されました。そしてランタン[調理用の鍋]の食事全部とパン、ナイフとフォーク、モック、ジャム[原生の薬草]さえ取り上げられました。彼女は1日1度、2回分の食事を持っていくことが許されます。彼がそれをもって、彼らが半分たべてしまわないことを願います。彼が病気のためにズボンを汚すので、彼女は毎日清潔な下着を持っていくことを許されています。彼女は汚れた衣類を取り戻しました、少し後、警官がパパといっしょにやってきてホールに立ち去ります。きっと尋問のためでしょう。2ヶ月間のケンペイタイの後、彼は私がいなくて寂しがっているかしら？現在彼は1人だけ捕らわれているのです。

ハンペル

1945年7月25日

ママは今のところ毎日パパを見、昨日は話しました。彼は3日間血便がありませんでした。刑務所でよくなったのかしら。ケンペイタイで電気を流されることで彼のリューマチが直りました。彼らは本当にリストを全部終わらせたことを信じてください。またたくさんの人々がラジオの件で逮捕され、彼らとニュースを話した人々も逮捕されました。彼らは何度かラジオを再登録させ、封印させました。そして誰もが古いリストはなくなっていると思っていました。そして今ラジオのために2度目には現れないことがわかりました。何も聞かれませんが、外国放送も聴けません。彼らは通りすべてを空っぽにしました。1人が盗聴し、通り全体に話すのです。政治情報局でも外部でも誰もお互い同士知りません。彼らはみんな逮捕された人の知り合いとして捕らわれることを恐れているのです。

ハンペル

1945年7月26日

普通の時間にママが食事を持っていき、途中でパパが警官の隣でベチャに乗っているのに出合いました。彼は第5管区に移され、だから家のすぐ傍です。そこでは、外部からの食事はジャワ時間の2時から3時まで許されました。…中略… 7つの監房に49名が入っています。私は第5管区に拘留されていたのでいかに監房が狭いのか知っています。2人にちょうどいいくらいです。そして監房のいくつかは10名が入っています。どうして私が知っているって？壁に黒板が掛っている

¹⁸⁴ パラパッタンはバタビアの警察第6管区である。

のを見たのです。たまたま分かったのです。まあ、最初私で、今はそこにパパがいます。彼らは私たちのことをスバラシイ家族だと思っていることでしょう。

ハンベル

1945年8月1日

またさんざんな目に合いました。昨日ママと私は第5管区に行くために連れ出されました。最初ママが尋問を受けました。ああ、まず月曜日（7月30日）にあった出来事を話させて下さい。私は食事を持っていきました。パパの件はもちろん「政治的」なものでしょう。ドアが開いていて私は彼が誰の手にかかるのか見るために中を覗きました。誰もいませんでした。でも長椅子の下に彼のラジオがありました。完全に清掃され分解されていました。さて、私はちょっとでもその男を見る必要がありました。私はドアの前の階段に坐りに行きました。少したって、彼がやって来ました、私は彼にうなずきました。

「マウ・アパ・ノン？」[何でしょうか、お嬢さん？]

「パウ・マカナン・トゥアン！」[食事を持ってきました。旦那様！]

「バカル・シアパ？」[誰のためなのだ？]

そして私は彼に説明する必要があり、その後話し終わりました。翌日私たちは警官に連行されました。本当に私は通りに住む隣人や知人に同情を覚えます、なぜなら彼らはもちろん毎回驚かされていますから。最初はママの番でした。彼女は半時間後に泣きながら部屋から出てきました。実際彼女は、生きての間決して干上らない涙の源を持っています。その後私の順番で、私は彼女の書類がテーブルの上にあるのが見えました。シマッタと私は思いました。「これは逮捕だわ！」もちろん彼らはまず私の名前などについて知る必要がありました。彼らは私が結婚していることさえ知りませんでした。私の夫がどんな人種かって？私がどこで働いているのか？「どこでもありません」どこかのバーでなぜ働かないのか？すでに結婚していてそれは私には1人の夫がいて他にはいないこと、私とその帰宅を待ち望んでいることを言いました。「おお、彼は家に帰ってこない、もう死んでいる！」と彼らは言いました。でも彼は私が夫を待っていることをやはりよいことだと思いました。私は宗教も申し出る必要がありました。その後、私が盗聴したのか、あるいはそれがパパのラジオかどうか、どの商標のものなのか尋ねました。盗聴はしていませんでした。ラジオか自動車かは分かりますが、どのように扱うかは知りませんでした。

それからパパと私をいっしょに直面させ、後からママも加わりました。パパはパビリオンで盗聴しました、そしてそこにラジオを隠していました。ですから彼が決して家の中では盗聴しなかった、そして私たちは彼がパビリオンで何をしているのか知らなかったと真実を申し立てることができました。結局私たちはパパのためパビリオンの外に立つ必要がありましたが。そ

れはもちろん言いませんでした。ですからこれはケンペイタイが言っていた灯りの合図¹⁸⁵のことでした。彼らは昼夜様子をうかがうために監視のスパイがいたのです。パビリオンのことも彼は言いました、ですからすべてつじつまが合いました。そして私たちは帰宅を許され、パパはまた閉じ込められました。私たちはまた家宅捜査されるでしょう。ですから冷静に待つことです。

ハンペル

1945年8月7日

私はまだパパに相変わらず食事を持って第5管区に行きました。あの尋問の後、その「トゥアン・プリクサ」[尋問者]は私にもう挨拶しません。彼は私が見ていないと、上から下まで眺めているとやはりそこに食事を誰かの為に持って行く女性たちが言いました。でも昨日から私は彼と笑いあうことができました。どういうことでしょうか！私が彼の立場だと私たちの話しも信じられません。ランタン[調理用の鍋]を手渡しました戻されてくるのを待っていると、なんでも体験します。叔母から盗みを働いた8歳の少年を彼らは自白させようとしています。彼らは彼を吊るすでしょう。縄はすでに用意されています。違う機会には同居人から盗みを働かれた老婦人をみました。それからまた石油やお米を闇で持ち込んだインドネシア人の集団。

バタビア

ポール

1942年5月10日

日本軍入城の後、ある程度何らかの意味を持つ自由人を逮捕しストリウスワイクやグロドックに収容した時期があった。その間私たちは、バタビア侵入の少し前夜中の1時にパパが立ち去ったことについて死ぬほど恐怖心を持っていた。

ポール

1942年6月21日

さて、私たちが体験した多くの訪問に関する悲劇。それはある午後2人のヤップが3時ごろあきれ

¹⁸⁵ おそらくハンペル氏は、ラジオを取り出すため、そしてまた隠すためにパビリオンの灯りをつけたのだろう。1945年1月、ハンペルと父親が監房に入っていた時、母親ハンペルがこれに関して憲兵隊による尋問を受けた。1945年5月21日の脚注参考。

たことに呼び鈴を鳴らし、落ち着き払ってグラスに1杯の氷水を求めたことから始まった。あつかましい！ともかく後から私にこのことを尋ねたら私は最初の悲劇から話そう。それから2人でまた走ってきて、不意にパパがラジオなどを持っていたかとか尋ねた。この話しも完全に話すには複雑すぎる。パパは積極的に全部見せた。彼の送信機も、そして厄介事が起こったの。彼らが信用しなかったことといたら、その送信機に関して何度もまた戻って来る。彼らはパパが米国人と話していると考えていたと私は思う。それからその送信機に封印もされた。私たちはよろしいと思った。彼らが放っておかないなら封印させましょうと。でもヤップはこのような素晴らしい送信機を使うことができる素晴らしいチャンスと見たらしい。とつぜん翌日彼らはすべてすべて持ち去った。彼らはメルツァ[猫]さえも欲しがり、肉挽器も盗んだ、くずみみたいなやつら。ともかくもう私は眠る。日記に鍵を3つかけて隠す。また次回ね。

ポール

1943年6月28日

ところで、彼らは合計7回うちにやって来た。そのうち4回は送信機を持ち去るため。誰一人すでに持ち去られたことを知らないなんて組織としては劣悪だ。最初はケンペイ(ゲシュタポ)から、2度目はPTTからで、あと2人は軍からとケンペイタイ(これが何なのかは知らないよ)から来た。私は発音が少し違うだけかもしれないけど、まったく違うのかもしれないと思っている。ともかくそれはどうでもいい。月曜日、6月25日だったと思った、ばかなやつらがまた一斉検挙をした。彼らはまた男子全員を逮捕した。男子や息子がいるか尋ねながら家に入出入りしていた。幸いなことにうちでは男子だけを求め、今のところパパだけが刑務所(アデックの建物)に連れて行かれただけだ。エーリック(兄)、ベン、ラマースはまだ家にいる、それが可能な限り。この一斉検挙はおよそ5日間続くと人々は言っている。すでに3日間彼らは逮捕に慌ただしい。願わくば本当に火曜日に終わって欲しいものだ。そしてなぜ、なぜ彼らは逮捕するのだろうか？両親がここで生まれた人はまた家に帰ることが許される。でも実はこの空中に送信機がある。いわゆる「デ・ヨング中尉」と呼ばれているもので、米国にここのすべてのことを知らせている。そして彼らはそれを見つけることができない。¹⁸⁶ だから彼らはパパの送信機に熱心で、みんなを逮捕しているのだと思う。昨日と今日はまた厄介なことが起こった。

これはママからノンおばさんへの手紙、あまり信用できないうちのカチョン[使い走りの少年]を送りつけたもの。

¹⁸⁶ デ・ヨング中尉は蘭印軍(KNIL)の1等の中尉だった。彼は蘭印軍の降伏後セレベス島の山岳地帯に逃亡し、小さなゲリラ部隊を指揮していた。彼は送信機を使って連合軍に情報を流していた。1942年8月9日、デ・ヨングは日本人に刑務所に入れられ、1942年8月25日メナドで斬首刑に処された。(Brugmans e.a., 642 en Jansen 35, 390, 427. Michiel Hegener, *Guerrilla in Mori. Het verzet tegen de Japanners op Midden-Celebes in de Tweede Wereldoorlog* (Amsterdam 1990))

[張られた手紙]

親愛なるノン、
いかがお過ごしですか？これを運んだ人を1時間つかまえておいて下さい。
後でなぜなのかお話しします。 コンより。

[返事]

親愛なるコン、
私はいくらかよくなりました。我慢できない子をもう送り出します。
幸い訪問者がいました。

さよなら！

ノンより。

彼女はエーリックとベンを本当は隠したがっていた。そしてそのカチオンは喜んで私たちを密告するだろうから。ラマース氏は、ヤップが彼を事務所で探していて、今我が家に向かっている途中だという電話を事務所から受けた。ともかく全員がパニック、もちろん理解できることだ。まずエーリックとベンを防空壕に隠し、それからママが彼らをお隣に連れて行った。

ポール

1942年7月21日

ヤップがまた何日も続けて逮捕をしていた。パパ、ラマース氏、ファン・ワースダイク氏、ピッテル、L.フィス、ベンみんな今アデック、つまり刑務所にいる。エーリック1人だけ収容されなかった。彼らはまったく彼のことを尋ねなかった、だからなぜ私たちがここにもうひとり男子がいると言う必要があるのだろうか？16歳から60歳まで逮捕、逮捕。木や天井裏に隠れたり、すでに家宅捜査のあった他の人の家で眠っていた人も全員だ。パパは最初の日には逮捕され、その後L氏、なぜなら彼は印人だから。今はもう誰も釈放されない、祖先の1人に原住民がいる人だけ。

彼らが家に入ったり出たりして男子を連行していた時には、エーリックは衣類をつけ、ナップサックといっしょにベッドで「眠って」いた。L氏は髭を剃っていた。だからかわいそうなパパだけが連行された（6月25日）。ベンは2週間後、玄関でガラス繊維の縄を作っていた時、通りかかった警官が彼を逮捕した。2週間後また通りかかった警官がちょうど家に入りかかったファン・ワースダイク氏を逮捕した。ところでその警官は、観葉植物の後ろにL氏が隠れて坐っていたのも見た。逮捕、今日は逮捕者が多い!! ピッテルはともだちと木に登っていた。下からは私には彼らが見えなかった。木はとても高く、まったく何も見えなかった。でも警官が彼らを連行しにやってきた時、ジョンゴスが密告した…。その警官は立ち去ろうとしていたのに、でもうちの原住民がちょっと手を貸したわけだ。

ポール

1943年3月8日

2月5日に突然いたるところで家宅捜査があった！スミットさんとバプティストさんのところはすべてひっくり返され家が封鎖された。私たちはもちろんちょうど一日中うちにいるエーリックとゾッピーとライフに目をつけられ家も捜索されるのだろうかともものすごく怖かった。これは間違いです。ちょうどエーリックがその時はセッドのところのいたと叫んでいる、でも私たちが恐怖の中にいたことは拭い切れない。…中略…

2月15日、30人くらいといっしょにケンペイタイに行く必要があったというリリーからの手紙が来た！！バンザイをしなかったのだ、それはテンノーへの侮辱だった。¹⁸⁷ 20人の少女と10人の男子、ある人はもう50歳以上が歩いて行った。長い3週間が過ぎて彼らは戻ってきた、2人は完全に殴られ病院に、他の人たちは虐待にあい、地面に横たわっていたことで青あざでいっぱい、やせ細り、蒼ざめていた。私たちの高慢な敵…

こんな小さな違反でこの気丈な男子と少女たちが拷問されたのだ。少女のうち誰一人臆病にみえた人はいなかった。もっともひどく蹴られ殴られた2人は気を失い、他の1人は神経発作を起こした。誰も泣かなかった。気丈だった少女たち、不屈なオランダの少女だ！男子は幸いアデックに送られた。ここはどこも安全なところはない、アデックでは安らぎがある、とりわけ安らぎ…。

私はリリーの話しを聞いた後では、いちばん嫌いな人でもケンペイに入れられることを望まないだろう。

ポール

1944年1月22日

[張られた日本のポスター]こんなポスターがガス会社の人みんなに家に持って帰るために配られた、これで必要ならば盗難を予防するためである。こんなことが書かれているはず。ここでは何かを持ち去ることを禁ずる。ヤップはだれも気にもしていないのに。私たちはていねいに絵の上に張りつけ食堂に掛けた。ある日、2人のヤップが我が家を見に来た、1943年の5月1日だった。ポスターの横にユリアナ王女の写真がていねいに掛っている。ヤップがひとり食堂に入ってきて批判的な眼で、その2つのものが彼の目につくまで部屋を観察した。まず彼は壁の張り紙をサーベルで見下した態度で破き、それから無愛想な声でユリアナが壁で何をしていたのかと尋ねた。ママはおののいた声で今日が誕生日（ユリアナの）で、だから私たちは壁に掛けていたと言った（写真は長い間掛っていた）。ヤップは「ティダ・クマリン・ディア・トゥアン・タンガル」[い

¹⁸⁷ 「日本人の措置と規定」ハンペルの日記、1943年2月15日参照。

や、彼女の誕生日は昨日だった]と答えた。ママは嘖然としてしまった。ヤップは幸いほかにはなにも言わなかった。家を周到にみまわし、それから迅速に立ち去った。彼らは幸い今までのところまだ戻ってこない。

ポール

1944年2月18日

この時期（1943年）、街中一種のパニック状態。いたるところでブンダフタラン[登録証明書]がチェックされ、赤の腕章の人々が収容されている。

[張られた手紙]

通りにははいけません。
ブンダフタランのチェック
オリフィエールに警告

コニー

オリフィエール・ファン・ノールトはコレッテのところに泊まっていて、毎日スندا通りからジョハルと通りまで危険な腕章をつけて自転車で走っている、だから私は急いで警告しに行く。後に私は通りが自由かをチェックし終わってから、毎日彼をピックアップした！

ポール

1945年2月4日

木曜日の朝（1月25日）5時半頃、今日は何が起こるか知らずに気持ちよく雨が降っているのを見ながら目覚めた。私は一度気持ちよく寝返った、なぜなら私は雨を愛していたし、特にこんなに朝早く暖かいベッドに横たわっている時には。でも私が気持ちよくほとんど目を閉じかけた時、外の庭で自転車の呼び鈴が騒がしくなり、そのすぐ後ブンタとクウィックの猛烈な吠え声をした。ママが部屋からキモノを身にまといながら走り出し、私はこの日記を安全な場所に隠すため急いで食堂に行った。それから私は、ママがエーリックを連行しに来た2人の「刑事たち」と話したところへ駆け足で走って行った。ついにその時がやって来た、3年たった後に。まず食事をし、雨の中荷物をまとめ第5管区へ行った。

私は急いで衣類を身につけ、レインコートも、雨用の帽子をかぶってフレ・ファン・ウォリンヘンのところに必要ならば彼の取引を手伝うためにおもむいた。でも彼はこぼれた顔つきで家中を走りまわっただけで、連行されなかった。私は女性や少女で超満員の第5管区へ

向かった。私はピルの傍に入り、私たちは両方とも雨の中この困難な時期についてぐちをいいながら立っていた。おぼれた猫のようにぬれて、2人の刑事に導かれて中に連行された少年たちみんなを見た。次第にたくさんの少女がやってきた、そしていたるところグループになってしゃべり、幾人かは泣き、そしてすべてがゆっくりとでも気分が悪いほど降りしきるひどい雨の中であった。

エーリックはもう見えない、ヤンもディックも。いたるところ悲しみ、慰めにならない雨、悲惨さと涙。私たちはこれをもう何度も体験した。ピルはとても悲しんでいた、男友だちが入っていたのだ。私は彼女を私も誰かがいなくなり長い間いかなる手段でも会うことができないという感覚がどういうものなの分かると慰めようとした。それからこんな奇妙な規則はすべて無意味だという絶望的になる考え、ののしりたくもこぶしを握りたくもなるし、あるいはピルのように雨の中哀れっぽく泣く。黒いレインコートの小さな姿、ずっと顔を流れる涙を手でぬぐっているのに顔に涙をあふれさせている。そのことを思い出すと。

私たちは3台のトラックで少年たちが出発するのを見た。どのトラックにもエーリックもヤンもディックもいなかった。その時私たちは警官の男たちによって追い出された。他のトラックを見ることは許されなかった。彼らはグロドック刑務所に送られ、そこで今待機している…。そして私たちはここ家で、私たちも待っている。

ポール

1945年8月15日以降

戦後に記述!!!

いかにポール一家の最後の何人かが結局つかまったのか!

それは1945年6月15日ごろだった、不意にジョーハル通りの半数が逮捕され、2日もたたない後デ・フリース一家。何という驚きと恐怖。ヤップに対する私たちの知識は的確でない。あらゆる点で私たちは彼らに対し「間違い」を犯した。ハンスはその日、政治情報局へジョージとエーフと…のために衣類を届けに行った。そして家に帰ってこなかった。神様、なんてひどい、私はどうしていいかももう分からない。私はその時ちょうど夜間勤務で幸い逃れられた、そしてできる限り定期的にキタン通りの第6管区に食事と衣類を持っていった。私はこじきの夫婦や原住民の間をハンスが裸足で髪をみだして歩いているのを見た。彼女は手に食事をいれるブリキ缶を持ち挨拶として頭をおおげさに搔いていた。彼女の前にも彼女の後ろにも警官たち!

最終的に私も情け深い!友人ポーハンに呼ばれるまで。彼は私を政治情報局 (PID) に来させ、ひとりで部屋の中に入れた。彼はラジオを大声で指差し、私に見たことがあるかと尋ねた。もちろん否定した。それはハンス、ジョージ、エーフがいっしょに外国放送を盗聴したうちのラジオでした。彼は自白を強要する方法を使用するといつて、早くもテーブルをサーベルで叩いた。私はどれほど知られているのが分からなかったのです、ただ泣き続け同情を引き起こした。

「よろしい」とポーハンが言った。「自白したくないなら、一度すぐに放り込まれるところをみせてやろう」彼は私をいろいろ通路を通過して2つの大きな鉄格子のドアで完全に閉め切った建物に連れて行った。そのドアは彼らがポーハン¹⁸⁸を見た時その施設から這い出した半裸で坊主頭によって開かれた。いたるところほの暗く、私たちは右折し、みんなが静かに恐怖で這って隠れている人たちでいっぱい8つの暗い監房の前に立った。彼は私を女性でいっぱいの監房に連れて行った。彼女たちは乱れた髪で裸足でした。私は驚いて「イルマ」と叫ぶ声を聞きました。それは私たちの通りに住むトレース・ファン・ヴェーレンでした。¹⁸⁹

スマラン

ヒューセン

1942年4月1日

ファン・ウールコム一家が…中略…日本人は輸送・破壊部隊¹⁹⁰のリーダーであるファン・ドンゲンを逮捕したと話した。喜ばしいことだ。彼は実は破壊させる必要のない様々な工場を破壊させ、自分の工場はしっかりと残してあるのだ。クラーラが少し後からやって来て、歯医者¹⁹⁰のトーマス医師のところへスヘッペルスが戻ってきて、残った人々は卑怯者で、逃亡した人々は英雄だ！と声明したことを聞いた。こんなことは信頼できない人々からだと予期できる！

ヒューセン

1942年4月2日

ハン・ワルメンホーフェンによればファン・ドンゲンはすでに銃殺されたとのこと。それが事実かどうかは分からない。やはり大変なことだ。

ヒューセン

1942年6月8日

朝とても早い時間に輸送・破壊部隊の人たちが逮捕された、ディック・ブルムベルフがちょうど泊まっていたハルトツホなど。でもアドリアーンセ博士とあと1人は刑務所から釈放され、ア

¹⁸⁸ ポーハンに関する脚注参照。

¹⁸⁹ これ以上はイルマ・ポールはここでは述べていない。

¹⁹⁰ 一般破壊部隊はここでは輸送・破壊部隊を意味している。AVCとファン・ドンゲンに関する脚注参照。

ードリアーンセは元の任務に復帰している!¹⁹¹ きっとよいインドネシア人技師がいないのだから！

ヒューセン

1942年6月10日

収容された輸送・破壊部隊の人のうち、およそ20名が拘留され、ジャチンガレーに移送された、残りは（兵士たち）また釈放された。

ヒューセン

1942年8月23日

ファン・アルプエンが5日前に拘留され、ケンペイ（ゲシュタポ）にいる、つまり法務省の建物に捕らえられている。彼の奥さんはもう衣類などを持っていてもよい。彼は事務所（ジャワ木材）から直接逮捕された！

ヒューセン

1942年12月20日

私たちはおよそ80名の重要な中国人が、寝床から直に捕らえられたという知らせに驚かされた！そして所有物は封印された！

ヒューセン

1942年12月21日

80人の中国人がすべて逮捕されたのではないことが分かる。およそ35人がボジョンにあるプロテスタント孤児院に収容されている。誰にも理由は分からない。ある人たちはお米の取引のせいだと思っているし、他の人たちは政治的な理由だと考えている。

¹⁹¹ J.アードリアーンセ博士は「中部ジャワ州の水利局」の責任者であった。

ヒューセン

1943年1月2日

ペロラン8番地のルームのところでファン・デル・ホープ通りのティオが大晦日にグタンカップト[逮捕]されたと聞く。そこでもだからすべてパニック状態！

ヒューセン

1943年1月17日

今日ミス・ファン・オールトが（教会の後）捕らえられた。彼女はケンペイタイにいる。¹⁹²娘のマウドによると彼女は正當に扱われた、でも戻って来るまで長くかかるとのことだ。彼女は通訳ともう一人日本人の監視下、家でいろいろ手配したりするために1時間半の時間をもらった。ちょうど彼女の息子ピートの誕生日だ！

ヒューセン

1943年2月10日

アンボン人とティモール人の下士官や伍長たちがみんな捕らえられたようだ。彼らは兵士たちだけ解放した。その人たちは職場から帰ってくる途中、路上で逮捕された！¹⁹³

ヒューセン

1943年3月4日

朝ノイベルガー夫人がやって来た！午後、マリオンがファン・フリート夫人のところに立ち寄り、ボーン・ファン・オスターデ医師がケンペイタイに連行されたというニュースを聞いた。なぜな

¹⁹² 中央市民医療施設で皮膚科医をしていたM・ファン・オールト・ラウ夫人は占領初期の数週間、彼女の所有物や収集した物資から定期的に米配給を貧困者に対し行なうことに成功した。彼女は連合軍の無線情報を戦争捕虜に伝えた容疑で逮捕された。日本はファン・オールト・ラウ夫人を5年の懲役刑に処した。

(Brommer e.a., 55)

¹⁹³ 1942年中旬アンボン人とティモール人の元蘭印軍人たちが中部ジャワの様々な場所でいわゆるV(ビクトリー)部隊を組織した。この部隊は連合軍上陸を手助けするために設立された。1943年1月、スマラン部隊を例外としV部隊のほぼ全員が憲兵隊に捕まった。スマランでは全てのティモール人は1943年2月1日に出頭しなければならなかった。そのうちの男子は日本のために働くことを要求されたが、このことは地域のV部隊の男子数人によって拒否された。彼らは逮捕された。多くは3月に釈放された。部隊のリーダーヨハネス・ヌドンは斬首され、他の6名は長期の禁固刑に処された。(De Jong 11b eerste helft, 425-427)

のかは誰も知らない。¹⁹⁴ またノイベルガー夫人はオリーヴェ氏が数日来ケンペイタイに収容され、彼らはニッポンに対する従属と忠誠を要求したと話した。彼は印欧連合（IEV）の議長で、だからそれは重要なことなのだ。¹⁹⁵

ヒューセン

1943年5月23日

私たちはバターが今のところ入手できないと聞く、なぜならレンス夫妻が両方ともケンペイタイに引越したから！彼らの知能の遅れた息子だけ家にいる。これは何を意味するのだろうか?!

ヒューセン

1943年5月31日

シンゴトロ通りのホイベル一家のところに昨日訪問者がたくさん来たようだ。クンプラン[集会]が禁止されていて、ホイベルさん自身が夜中にケンペイタイの兵士によって連行された。白ロシア人のクストジルリンさんと奥さんも連行された。ホイベル夫人は子供がいたので連行されなかった。

ヒューセン

1943年6月7日

午前中トース・ボーンに銀行のウィル・ホーヴァールス氏が帰宅したというスワーンからの手紙が来る！銀行の男性みんなと、BPM、コーヒーなどが彼らの仕事場から家に送られ、そこで詳しい知らせを待つ必要がある！どうなるのか？少したってエリー・ファン・フリートとトゥルース・リンケルが男子のいる家の前に警官が立っているという知らせを持ってくる！私たちはだからまた興奮した雰囲気！何日かうちに泊まったトースは今日午後下に行きたがる。4時ごろその使い走りの少年が2番目の手紙を持ってきて、彼女がまだいまのところ上にとどまることができ、

¹⁹⁴ C.H.ボーン・ファン・オスターデ医師は日本ジャワ侵攻の際には陸軍中佐であった。スマランでの降伏の後、彼は診療所を継続するチャンスとみた。彼は密告され、逃亡士官、反スパイ、偽造書類の所有の嫌疑で憲兵隊に連行された。密告者は報酬としてCaro商標の自転車と50ギルダー相当の日本円を得た。

(NIOD、IC 020065) ボーン・ファン・オスターデはチマヒの戦争捕虜収容所に移送された。（「食糧・物資事情及び就労状況」ヒューセンの日記、1943年6月8日参照）

¹⁹⁵ 印欧連合（IEV）は、1919年にバタビアで結成された政党。蘭印における印欧人の社会的、倫理的、教育的進歩を目的としていた。（Brugmans e.a., 641）

彼自身は5時半にやってくるだろう。小規模の家宅捜査があっただけでそのほかはなにもない！
…中略…

5時半に実際ホーヴァールス氏が知らせを持ってきた。今日の午前9時半に電話局のマ
ンドール[現場監督]が銀行のトトック[純血オランダ人]7名の男子に、彼らへの召集があり、す
ぐに帰宅しそこで引き続き命令を待つ必要があると言う。朝のうちに実際ヤップとハディノトと
5人の警官が家宅捜査にやって来た。ほとんどすべてのトランクと箱が空にされ、戸棚がチェッ
クされる！「*Hollands Glorie*」や「*Gedenkboek Koninklijk Huis*」などの本やバッジ、ピンタ
ン[勲章]、星章などが持ち去られた。その他は何も起こらなかった。同じことがすべてのトトッ
ク就業者に起こった、ANIEMやインターナテオなどでも同様。解雇には誰もなっていない。彼
らは明日普段通り職場に行く！！

ヒューセン

1943年6月18日

ファン・デル・ホルスト医師が、昨日街ではみんな呼び止められすべて完全に調べられたと話し
た！…中略…テオ・バオマンが呼び止められる可能性があるため本を持たずにレッスンに来た。
幸い私は何でも持っているので続けることができた。

ヒューセン

1943年6月22日

ウィーボルさんのところで家宅捜査があった。彼のお金、宝石、書類などが接収された。こんな
ことまったく愉快なことではないと思う。

ヒューセン

1943年6月23日

ホフステーデ夫人が話すことには、夫の事務所を引き継いだズートムルデル公証人が6月17日に
路上で呼び止められ、ゲタンカップト[逮捕]されたとのこと。彼女の残った家具が置かれた事務
所のは接収された。またファン・ダイク - ミウレットの4人の息子たちが17日に班に連行さ
れたが、彼らがやっと15才かそれ以下だと証明することができた。

ヒューセン

1943年8月20日

午後テオ・Bが、今朝ハディオトの荷車と警官の自転車がたくさんトース・ボーンの家の前に立っていた、なぜなのかは分からないと話した。…中略… その上マリオンがノイベルガーから、トース・ボーンが直ちに収容所に入る必要があり、インターナティオのお金のために家宅捜査され、スワーンとファン・ヘット・ホーフト夫人のほうがもっとよく知っているだろうと話した。私たちはトースの件がいちばん悲惨だと思った！

ヒューセン

1943年8月21日

マリオンが診療所に立ち寄った。トースは昨日警官に導かれて2時間内にバンコンに連れて行かれた！彼女は監視の下で荷物をまとめ、聖書などさえも持って行くのを許されなかった！ファン・ヘット・ホーフト夫人はまだ家にいた、でもほとんどすべて封鎖されている。ファン・ヘット・ホーフト夫人はすでに3回手紙を警察に送った。スワーンは班に入れられていて、あらゆる種類の尋問に答えるため下男たちも応じる必要があった。マリオンと私はトースの件に関して本当に落ち込んでいる。私たちにはまったく何もできないのだ！

ヒューセン

1943年9月9日

10時前にノイベルガー夫人がもう来て、マリオンがいないのをとても困ったことだと思った。彼女は1時間いてから、敷地に自動車の音を聞いたので家に帰った。あとからそれは正しかったことが分かった、なぜなら後から、マリオンがすでに帰宅した時、カーペンター・アルティングのリニとヘンクが収容所に入らねばならなく、ヤップが家全体をひっくり返した！と聞いた。彼女たちは冷静、でも私たちはみんなとても気の毒に思っている。

ヒューセン

1943年9月10日

ノイベルガー医師とその奥さんジャンネがボジョンの警察本部に呼ばれた。…中略…何という日！誰もノイベルガーさんたちに話しかけてはいけない！

ヒューセン

1943年9月11日

まだ警官がお隣にいる！彼らはほとんどなにも持っていけない！11時ごろノイベルガー一家が警官に導かれて立ち去った！ペンドリアン（診療所）は昨日彼らが警察署から帰ってきた時すべて封鎖されていた。ハッサンの自転車さえなくなっている。ノイベルガー氏はハルマヘラ収容所へ、ジャンネはバンコンへ。プレラー一家も同様らしい。ちょうどノイベルガーさんのところで同居していたトーマス夫人も同様に呼び出された。市民権を与えられ、彼女もバンドンへ。彼女の息子たちはまだバンドンガンにいる。私たちはもう何もできない。私たちは疲れ果て、神経質になっている。この緊張感は大きすぎる。

ヒューセン

1943年9月12日

ブロムベルフにも昼夜、警官がたくさん来ていた、すでにアードリアーンセのところにも！

ヒューセン

1943年9月23日

お茶にリュバイ・バウマン夫人がやって来て、ワイブル-フェルブラウ夫人がやはりランペルサリ収容所に入ると言った、というのはすでにバンコンには看護婦たちがたくさん入っているからだ。バウマン夫人は連れ去られる時に同行し、ランペルサリにいる幾人かの女性を見た、彼女たちはみんな元気そうにみえた。…中略…

ワイブル氏はケンペイタイにまだいる、¹⁹⁶でも夫人は月曜日5分だけはなすことが許された。彼女は宝石と200ギルダー余りのお金を返してもらった。警官が彼女の家を監視している、なぜならワイブル氏がまだ収容されておらず、だから戻って来ることができるからだ！

ヒューセン

1943年9月26日

私たちは、奥さんが収容所に入った日に、ワイブル氏自身は釈放されたと聞いた。彼のお金1万

¹⁹⁶ おそらくワイブル氏は自宅に大金と貴重品を所持していたことが判明し拘留されたと思われる。（以下の日記1944年9月26日参照）現金を蓄えることを阻止するために、日本軍政当局は1942年3月に100ギルダー以上の紙幣あるいは硬貨を所持することを禁じた。（De Jong 11b eerste helft, 193）

ギルダーは銀行に預金され、彼は生活維持費のために定期的に引き出すことが許されている。

ヒューセン

1943年10月14日

ジュルナタンとブルー刑務所は超満員、ワインベルグ夫人（ジャワ・ストアーズ¹⁹⁷の）とアーレント・モーイもそこに収監されている。スワーンが頭に包帯を巻かれて班から中央市民医療施設（CBZ）に行くのや、警官といっしょにベチャ[輪タク]に乗るトース・ボーンが最近見られている！

ヒューセン

1943年10月16日

夜中のうちに多くの印人（男子）が連行された、トラック1台につき300人。

ヒューセン

1943年12月3日

その他、街では裕福な中国人が数人逮捕された、ウイトリーム（ウイ・ティオン・カウなど？）という名で呼ばれた。

ヒューセン

1944年6月5日

昨日、老紳士ミヒュール氏とプフィステル少年が武器所持の容疑で逮捕された。

¹⁹⁷ ジャワ・ストアーズ株式会社は紳士服、既製服、靴および旅行用商品を販売していた。店舗はスマランのボジョン支店だけでなく、スラバヤとバタビアにも支店があった。日本占領時代はジャワ・ストアーズ株式会社は名称が変更され「Mendjait Java」となった。（Telefoongids Semarang 1941 en Jansen, 3）

ヒューセン

1944年6月30日

ここスラバヤや他のところでもたくさんの中国人が逮捕された。共謀が見つかったのだ。

ヒューセン

1944年8月3日

今夜はハンナのところで楽しく過ごした。彼女の義姉がいていかにケンペイタイで虐待されたかを話した。手首を吊り下げられ、背中で縛られ、1ヵ月間手錠され、太い竹棒で何度も殴られた！

ヒューセン

1944年8月24日

デ・ヴィレネウベ夫人がお隣にケンペイタイが怖いと泣きながらやって来た。彼女のことが調べられている！今朝私はかなりの警官の車が私たちの家の前を通ったのをみた。後から太った R. v. L (またはQ夫人が「あなたの弟の愛人」とも呼んでいる) がガソリン泥棒を助けて捕らえられたことが分かった！このような少女たちはもちろんなんでもするのだ！

ヒューセン

1944年9月2日

午後6時、友好的な警官がひとり来てラジオを探している！どこで盗聴ができるのかまた調べているのかしら？

ヒューセン

1944年12月10日

4日前ジーケル医師が逮捕され、家が封鎖された。…中略…今朝はここに警官がひとり来た、彼は31才の金髪の女性を探す必要があり、写真を持っていた。

ヒューセン

1945年1月8日

クンツとマゲナーのところで刑事たちによる家宅捜査があった。彼女たちが家に白いドリル¹⁹⁸を持っていて暴利をむさぼって売るつもりだと誰かが密告したからだ。だけど何も見つからなかった。

ヒューセン

1945年1月25日

プックおばあちゃんが神経質そうにやって来て、ジュラナタンで車いっぱい印人が連れ去られたと話す。すなわちスマランが一掃されたらしい！（ジョンブランの女性たちも呼び出しを受けた！これはピートによる）。待つしかない！後でハンナから午後遅くまでバスがジュラナタンに行くと聞いた。2時にすでに合計8台、それに加えて歩いている一団が少し。通りはとても静かだ。ガン・ワグハルスとニュー・ホラントにはサーベルを持った警官たちが監視！何が起こったのだろうか？…中略… マディウンでは1月16日にすでに男子の一掃があった！…中略… 現在の収監者は今までに調べたところによると、すでに以前刑務所に入っていた男子・少年たちだ。

ヒューセン

1945年1月26日

ピート・Qがケンペイに呼び出された、でも彼の母親によればほかの収容者とは関係ないとのこと。彼は匿名の手紙によって間違って何か疑われている。現在この件は調査中。

ヒューセン

1945年1月27日

イーチェ・メイヤースがその間やって来て、レーシク少年も収容されたと話す。彼らは新聞（パラダ・ハラッハップ）¹⁹⁹によると全員挑発的な態度のために捕らえられたとのこと！！私たちは態度を改めるよう忠告された！

¹⁹⁸ 頑丈な麻と綿とを織り込んだ布、かずら織りのこと。

¹⁹⁹ この新聞は日本占領時代スマランで発刊されたシナル・バルー（新しい輝き/一条の光）を意味している。シナル・バルーは連日、日本の成功を賛美し、日本の指揮下「大東亜共栄圏」に関するプロパガンダ活動

ヒューセン

1945年1月28日

アンバラワで30人、サラティエガで38人の全員インド・チャップ[印人の証（登録証明書）]を持っている印人が逮捕された。この逮捕で現在ここではおよそ400人の男子・少年がジュルナタン刑務所に収容されている。

ヒューセン

1945年5月24日

ボーイ・ファン・デュセルドルプは今日が誕生日。今朝工場の（ファン・ドンゲン²⁰⁰）少年たち全員といっしょにケンペイタイに呼び出され殴られた。オイル（ココナッツ）でいっぱい寄せ集めのブリキ缶がいくつか盗まれたとのこと！ボーイは罪がないと言い続け、釈放された！

をした。パラダ・ハラッハップ、本名マハラジャ・グヌン・ムダ・パラダは*Sinar Baroe*（シナル・バルー）の社主兼編集長であった。（Brommer e.a., 56 en Brugmans e.a., 200）

²⁰⁰ ファン・ドンゲン工業株式会社は工場と事務所がケボン・ラウトにあった。表題のヒューセン日記断片1942年4月1,2日参照。

日本人との接触

バタビア

ハンペル

1942年3月8日

メースター・コルネリスで私たちはヤップの一团を冷ややかに走り抜けました、彼らのなんと臭いこと！汚くてゴミのような外見、ふん！彼らは教会にさえいます。

ハンペル

1942年3月10日

ジャワ・ホテルがヤップに占拠されました。私が何を見たか知っていますか？2人のオランダ人が出てきました。彼らは監視に行儀よく日本のお辞儀をしなければなりませんでした。そしてヴィリブス²⁰¹の若い女性が、お辞儀をしたがらなかった人を虐待したのを見たと話しました。ところで、ドイツ人は私たちにそんなこと望まないでしょう？

ハンペル

1942年3月11日

タンシ[兵舎]の隣に住んでいた女性が引越しました。この引越しの家財道具を見たヤップは何をしたと思いますか？荷車はすでにマンパン通りでした。彼らはランポッカー[略奪者]たちだと思ったのです、彼らはインドネシア人の男たちを荷車にしばりつけ、そのまま3日間留まらねばならず、解き放そうとする者は殺すと書いた板を据えました。この婦人は彼らを釈放するためにヤップの高官たちを訪問、ようやく翌日になって釈放されました。一晩彼らは雨の中で立っていなければなりませんでした。これで2つのこと、すなわちインドネシア人はヤップを憎むこと、そしてブランド[オランダ人]のためには働きたくないということになるわけです。

²⁰¹ ジャワ・ホテルはバタビアのライスワイク5 - 6に所在した。カトリック系書籍の販売・出版業を営む Viribus Unitis N.V. (ヴィリブス・ユニティス株式会社) はノールトワイク10番地にあった。

ハンペル

1942年3月14日

T一家が日本人紳士たちの訪問を受けました。彼らは家を追い出され、パビリオンに移転せねばなりませんでしたが。でも今はとどまってもいいように話しをしました。彼らの娘に赤ん坊が生まれ、乳児が泣き続けるだろうからです。ヤップたちは水道水で割った糖蜜のレモネードをもらいました。でも彼らはそれを欲しがりませんでした。毒が入っていることを恐れたのです。Jがその時、彼らの目の前で水道水を飲み干しました。それで死なないことがわかりました。

ハンペル

1942年3月15日

ママが日本人将校たちの訪問を受けた知人の話しをしました。彼らはお水を一杯求めました。お水を得、後で彼女は本物の蘭印ギルダールを見つけました。…中略… ここではオランダよりずっと友好的です。オランダではドイツ人が来ると立ち上がるという話しを聞きますが、ここではみんな座ったままで静かにアイスクリームを食べています、たとえ彼らが隣に坐って来ようとも。

ハンペル

1942年3月17日

通常ヤップは道を譲りません。私はむりやり自転車を彼らに向けて走らせます、そうすると彼らが憤慨するのを見てみて。最悪なのは、彼らがうちの向かい側にある学校²⁰²に住んでいることです。彼らは私たちの自動車に乗り、歩くときには変なダジャック[腰布]をしています。彼らはうちの犬を可愛がりますが、トリックシーには触れないでよ！…中略… プンチャックで彼らは「嚴格娘」²⁰³を暴行しようとしてました。理解できますか？あんな年取った人を！そのヤップはよほど必要だったにちがいありません。彼女はこれを話すにはあまりにひどい体験をしたと思います。私は彼女が帰宅したのを聞いたので見に行きました。彼女は、私たちがこの家にとどまることができるし、家賃は払らなくてもいいとすぐに言いました。彼女は私がいるのを喜んでいて、私の首に抱きつきました。彼女の夫はチラチャップにいました。…中略… パパはヤップが学校にいる

²⁰² スンダ通りとロンボック通りの中間にあったDe 1ste en 5de Ardjoena School (第1、第5アージュナ学校)のこと。

²⁰³ 当時ハンペル夫人が同居していたスンダ通りにある家の家主のあだ名。

ので、直ちに引越すべきだと望んでいます。²⁰⁴ Sから彼らはお皿を借りました。ここにたくさんのストラートブルメン[売春婦]が来ることを願っています、そうすれば私たちは安全です。

ハンペル

1942年3月21日

彼女（Wさん）が働いている通りでは、大勢ヤップが来て、女性はもっと長い丈のスカートをはき、「化粧」をせず、髪を結い上げねばならない、そうすれば何もしないだろうと話しています。マドゥラ通りの家を覚えていますか？古い家のまわりに建てられていたでしょ、その植木鉢に素晴らしいシダが植わっています。6人のヤップを乗せた2台の自動車がグリセイ通りを走って、その家の前で止まり、中に入りました。彼らは植木鉢を持っているかと婦人に聞きました。彼らはシダが欲しかったのです。彼女は、植木鉢は持っていませんでしたが、シダはいくらでも持っていてもいいと言いました。でも彼らは欲しませんでした。彼らはとても礼儀正しい態度を示し、その後立ち去りました。…中略…そうそう、その6人のヤップは、マドゥラ通りの婦人の逃げ場所用テーブルも観察して、これはヤップが爆弾を落としたり下にもぐるためにあるのだなど言って、大笑いしたということです。

ハンペル

1942年3月23日

あるヤップがBさんに彼の長女をもらっていいかと尋ねました。彼は娘を全員一部屋に閉じ込めています。Sさんの息子はともだちとローラースケートをするために道に行きました。学校にいるヤップはとてもうまいと思い、彼に25セント与えましたが、彼のともだちには10セント、彼があまりうまくできなかったからです。彼らはSさんのところにミルクを温めるためにやってきました。そのときSさんたちは彼らからオランダギルダールをもらいました。ヤップに、自分はスندگانだと言えば蹴られます。でもジャワ人ならよいのです。

ハンペル

1942年3月26日

Rさんと私はスندا通りで学校のヤップ監視のそばを散歩していました。みんな彼に挨拶しなけ

²⁰⁴ 1942年4月22日、ハンペル夫人はマドゥラ通りに住む両親の家に移転した。（「居住」参照）

ればなりませんので、私たちも挨拶しました。そして毎回気を付けの姿勢をしなければなりません。挨拶をしない人たちは、呼び戻され整列させられます。自転車に乗ってれば、自転車から下りて挨拶します。でも人々は、挨拶はその歩哨のためではなく学校に葬られている死者のためにすべきだということを知らないのです。死者は焼かれ、彼らは灰を骨壺に保存するので、だから挨拶しない理由はありません！

ハンペル

1942年4月2日

ヤップはすべて命令に従って行動すると私は思います。朝、彼らが輪を作って歯を磨いているのを見てみて。水も歯磨き粉もなく。一人が何かを言うとみんな口に歯ブラシを入れたまま聞いています。…中略… そうそう、私が何をみたかわかる？ヤップのおしり。彼らは向かい側を素っ裸で歩きまわっています。彼らのおしりは真っ平らなのよ。

ハンペル

1942年4月7日

R. D. は昔ヤップの配下、ゴム農園企業で働いていましたよね？彼が道を自転車で走っていたとき、自動車が彼の前で止まりました。ヤップの高官がひとり降りました。彼のボスだったにちがいありません。彼に元気かと尋ね、また走り去りました。…中略… 2人の兵士が赤十字社の看護婦から自転車を取り上げました。それをヤップの将校が見ていました。彼女は自転車を返してもらい、走り去らなければなりません。彼女は後ろで2発の銃声があったのを聞きました、2人の兵士は死亡。自転車のために2人の命がついやされたことを彼女はとても悔やんでいます。もう1人の女性は腕時計を盗まれました。彼女は将校に話しました。パンと音がして、ヤップがまた1人減りました。

ハンペル

1942年4月25日

スダ通りからまたヤップの一団が立ち去ります。彼らは夜Sさんのところにお別れにやってきました。でもまず、Sさんは灯りを消す必要がありました。というのは彼らが来ているのを将校たちに見られたくなかったからです。彼らはタンゲランに行きます。彼らが出発するのを見ました。

ハンペル

1942年5月5日

Bさんがヤップの友人のところに行った時、インドネシア人の物売りが入ってきました。彼はピサンをかなりの値段で売りがったのですが、ヤップが彼の「スダラ」[同志]だったので、すこし安くなりました。「原住民の同志」だと呼ばれたので、そのヤップは憤慨していました。

ハンペル

1942年5月8日

ある夜ジャワ時間の11時、あるヤップがマドゥラ通りのうちの前で落馬し、ひどくうめいていました。夜間外出禁止令のせいで、だれも家から出て行こうとはしませんでした。そのヤップが死んでいたら、おそらく私たちの責任になったことでしょう。彼らには専用の医師と看護婦がいます。私が何を見たと思う？私は「落ちればいいのに」とは絶対にいわないことにしましょう。最初私がそう思ったのはヤップが暴走した馬に乗っていた時で、彼は落っこちました。2度目は自転車で同様。今回はスピードを出していたモーター付き自転車に乗っていた時で「彼が何かにぶつかればいいのに」と。そしてボン、彼はグロバック[荷車]に衝突。モーターが燃え上がり、ヤップは火のたるま。彼は痛くて叫んでいました。だれも手を貸しませんでした。この家の前に立って事故を見ていた監視さえも。あとからヤップが手助けするために走ってきました。

ハンペル

1942年5月27日

パパが日本人の看護婦を見ました。とても背が低く、足腰はなくバーミ[チャーハン]の匂いがしたと言いました。

ハンペル

1942年6月21日

今日ヤップが家に入って来ました。「私は日本人です、水槽をもらえますか？」とマレー語で言いました。「私はオランダ人です、まずこれを持ち去ってもよいというケンペイタイ（憲兵隊）の手紙を見せてください！」とママが彼に言いました。彼は持ち去ってしまうつもりはない、ただもらってよいかと尋ねたのだ。持って行くのはかまわない。彼はひどい英語とマレー語を話す。

彼は自国語のみ話せるのです。ママは彼がすごく愚かだと言います、なぜならオランダ人はオランダ語、英語、フランス語、ドイツ語、それにマレー語を話せるから。彼は英国領事の家に住んでいると言いました。英国人はいまましい、退却するばかりだ、でもオーストラリア人は勇敢に闘っていると言いました。彼は私たちの名前と年齢を知りたがりました。彼は25歳でした。私たちは彼が年の割りには背がとても低いと思いました。ヤップはみんな背が低いのだと彼は主張しました。彼は水槽だけで魚は欲しがりませんでした。彼は水の入った水槽を持ち上げようとしたのですが、うまくいきませんでした。私たちは笑わずにはられませんでしたが。彼はそれが気に入らず、ママを叩きました。彼女は、ここは日本ではないから殴ってはいけないのだという言葉と同時に、同じくらい強く叩き返しました。彼は同意しました。私は今、日本についての本を読んでいます。彼に絵を見せ、彼がどこから来たのか聞きました。突然彼はハンカチ代わりに使っていた朝食用のナプキンで鼻をかみました。彼はきっとホームシックだったのでしょう。彼は数時間とどまっていました。私たちは彼を家の中には入れませんでした。ママは彼の腕時計と引き換えにと求めましたが、彼はそれを与えようとはしませんでした。

ハンペル

1942年6月24日

あのヤップが戻ってきました。今彼は魚も欲しがっています。幸いなことに魚はもういません。パパが彼を追っ払いました。

ハンペル

1942年7月18日

一人の男性を捕まえた直後、ヤップ、あるいはインドネシア人がその家に来て、夫人か娘さんが日本の下で働く気があるかどうかと尋ねました。彼らはお金や宝石を見せました。R夫人はヤップに、なぜ彼がカンポンに行かないのか、そこにはヤップの下で働く人を見つけることが出来ますよと答えました。彼は原住民の女性はヤップにとっては不潔だと言いました。私たちを欲しがるとは思いがけないこと。

ハンペル

1942年7月23日

これは日本正義の最近の見本です。盗人がアイロンを盗みました。今、女性がそのアイロンをト

ウカン・ロワック[古着回収業者]のところで見つけました。彼女は警官を連れてきて、その男を警察署に連行してもらいたがったのです。数人のヤップが来て何事かと聞きました。彼女の話しを聞くと、彼らは「おまえらは日本の優秀な警官ではない。おまえたちはオランダ人のもの全てを盗むべきだ」と言いました。パパはその夫人に1100の番号にかけるよう忠告しました。ケンペイ(隊)の番号です。

ハンペル

1942年8月1日

T. B. がここにいます。彼女が駅から出たとき、ヤップは彼女の「カバン (tas)」をみせるよう求めました。彼女は見せました。また彼は「カバン」と言いました。彼女はもうカバンは持っていないと言いました。すると顔を一発殴られました。彼は彼女の身分証明書(pas)を意味していたのです。

ハンペル

1942年8月17日

今朝、昨日亡くなったO. V. さんが柩の中に横たわっているのを見ました。彼はとても高く横たわっています、なぜなら制服の上に臥せていたから。彼の制帽は足の下にありました。²⁰⁵ 午後、柩は彼の家を通り、特にここにも立ち寄りました。かなりのスピードを出していました。まったく儀礼的ではありません。何人かのヤップは自動車を止め、死者の屍を拝んでいます。でも過ぎ去ったり、ずうずうしく見たりするヤップもいました。A. H. は謙虚なヤップは当然カトリックだと主張しました。Bさんはかっとなりました。なぜ屍を拝むのに特別カトリックでなければならないのか？と。どの人種にも謙虚な人間はいるだろう？でも先週G. Hが亡くなったとき、彼女の日本人ボスが来て、彼はだれよりも熱心に死者に敬意を示していました。

ハンペル

1942年8月24日

私はガスマスクをつけて歩きます。ヤップの一団の傍を通るのはもうほとんど苦痛です。彼らがやってくるのを見ると、私は息を深く吸い込み、彼らが通り過ぎると息をはくのです。彼らはす

²⁰⁵ O. V. は引退した海軍将校だった。

ごく臭いのです！私は長い列が続く間、息を止めておくとほとんど窒息しそうになります。彼らを見る前からすでに匂ってくるのです。停車している市電を通り過ぎるときには、大便の匂いが鼻につきます。またたくさんのヤップが加わっています。いつ彼らは立ち去るのでしょうか？

ハンペル

1942年9月7日

パパがまたSさんのところに行ってきました。彼はドイツ人で日本人女性と結婚しています。彼らはちょうどある日本人将校とお別れをしたところ。彼はとても高い位の貴族に属しています。彼は人間が不足していたので軍職につかねばなりませんでした。彼は足が悪いためいっしょに行くことができませんでした。家族が扉をたたく音を聞いたら、それは自分の霊なのだと言いました。彼も突然鼻をすすり、日本軍はオーストラリアで軍用機を失ったと言いました。本当かしら？

ハンペル

1942年9月26日

0家にいた日本人の友人が出発しました。夜中の2時に扉を開くようノックされました。最初彼らは扉を開けたくなかったのです、でもヤップが泣いたのです。彼らは「パパ」と「ママ」に出発前に挨拶したがりました。ヤップは英国と米国の国歌を歌いました。彼らはやめて下さいと拝みつきました、さもなければ刑罰ものだからです。それで歌いませんでした。0さんはすでに彼らが盗んだ品物、すなわちミルクの箱、果物の缶詰などをもらいました。彼らは、ここは奇妙な状況だと思っていました。彼らのところでは男性優位でその他は些末なことなのに、ここでは女性を中心なのです。

ハンペル

1942年10月24日

現在、K夫人のパビリオンに2人の女給がいます。パビリオンは裏の敷地内に建っていて、家の前は犬が放し飼いにされているのでK夫人は垣根に常に鍵をかけています。時々彼女は、女性たちと友人を中に入れるためにベッドから出る必要があります。今晚もそうです。どんなに遅い時間なのかは知りません。トン、トン、トン。彼女はベッドから起き上がります。ヤップの話し声。「中に入って！」ちょうど彼女がうとうとしている時、またドアがノックされました。彼女は不

愉快になり、玄関の明りを灯しました。ブルッー、出て行けヤップ。彼女が灯りを消すと、また新たにヤップが中に入ってもよいかとやってきました。でもすでに1人中にいます、Kさんは殺害、殺人を怖れていました。だから彼女は知らないふりをしました。こんなことはすべてKさんの子供たちにとってよくありません。

ハンペル

1942年11月14日

E一家は犬を飼っています、いいえ、一匹飼っていましたがいいでしょう。ヤップが1人彼らの家の傍を通りました。その犬が彼に吠えたのです。彼は怒って、一家が考えていた通り中に入ってきました。自分は盗人ではない、なぜこの犬は自分に吠えるのか？一家はこの犬を殺さねばならない、などなど。すごい事件になりました。一家は全員終日警察署に捕らえられていました。彼らはこの犬を差し出さねばなりませんでした。なんて嫌なヤップなのでしょう。

ハンペル

1942年12月26日

今日またひとりヤップの訪問がありました。彼は植木を欲しがりました。どうぞ持って行って！クボン[庭師]かバブなら土から掘り起こせるでしょう。でも彼らはみんなすでに帰宅しています。幸いAさんのカチョン[使い走りの少年]が手助けに来て、掘り起こしました。なぜなら私はそれをする気持ちにはなかったからです。彼は私の夫はどこにいるのかと尋ねました。彼はあなたがトゥカン・カパル[船員]だと聞いたとき、すごく楽しんでいました。彼によるとあなたの乗っている船はもちろん日本軍の「爆撃」にあっているとのことでした。何も言わなければよかった、なぜなら船の名前も言わなかったのですから。彼は医者として中央市民医療施設で働いています。立ち去るとき、彼はまた戻ってくるといいました。くたばってしまえ！

ハンペル

1943年1月2日

今朝ヤップがベチャ[輪タク]から落ちるのを見ました。ベチャがひっくり返ったのです。私は大笑い。でも数時間後、私は2人のヤップが乗っているベチャに引っかけられました。その時は彼らが笑っていました。

ハンペル

1943年1月3日

私たちの知り合いにはヤップの男友だちがいる。まあ、彼女は昔も男性には不足していなかったけれど。いずれにしても誰も裏切ってはいません、なぜなら彼女は結婚していませんから。彼女のヤップは母親がアメリカ人で父親が日本人。彼によると日本人はアメリカ人、ドイツ人、フランス人、英国人と結婚するが、オランダ人とは結婚しない。だから彼女も心得ている。でも現在、彼はいつも彼女に「愛しているか？」と聞き、彼女は「もちろん、バイブルには敵を愛せと書いてあるでしょ！」と言っています。ある夜、彼女はアデックに収容された男性からもらった手紙に返事を書いているとき、そのヤップが突然彼女の横に立っていた—彼はケンペイタイのひとりです。彼は「我々は手紙が送られているのを知らないわけではない。しかし我々は見えないふりをしているだけだ」と言いました。思いやりがあるでしょ！

ハンペル

1943年1月18日

彼らは「止まれ」の交通標識を塗り替え、マレー語と日本語で「止まれ」と書いた。彼らも止まってくれることを願って。というのは彼らが止まらずに走り抜けてしまうのは不名誉なことです。立ってヤップに止まれという勇気のある警官は一発殴られます。

ハンペル

1943年2月12日

私たちの植木を求めた日本人医師が、またやってきました。彼は現在、うちのななめ向かいに住んでいます。私はちょうど出かけようとしていたところで、彼は私がどこに行くのか知りたがりました。彼には関係ないでしょうに。彼に私は毎週火曜日と金曜日にうちのトコでタバコを1箱買うことができ、私たちにとってなんでも手に入れることは厄介になっていると言いました。それを聞いたとき、彼は私たちにバターとタバコを贈りたがりました。とんでもないことです。ヤップの友人はおことわり。くたばってしまえ。

ハンペル

1943年5月10日

日本軍はひどくいらだった雰囲気です。知り合いの家にも来るヤップがひとり挨拶にきました。彼はシンガポールに行きます。「アダ・バンヤック・スサー！」[たくさん問題がある！]と言いました。ヤップの事務所で仕事をするのは地獄だそうです。自動車にいっぱいの兵士たちが市街を走っています。

ハンペル

1943年7月28日

Nさんの日本人ボスが、一度夜間警報の時、道にでてみようと思いました。これは禁止されています、でもインドネシア人はヤップとしての彼に何もしないだろう。でもお見事に彼は通りがかったケンペイタイに捕まりました。現在彼は目の周りに青あざをつくって歩いています。

ハンペル

1944年1月11日

新しいヤップのお隣さんができます。彼らはバスで来ました、そして彼らが旅行する時には、インドネシア人をブクサン[束]にして携えてきます。彼らはすでにうちを訪問しました。彼らは隣に住むこと、そして怖がらなくてもいいことを言いに来ただけです。ジャガ[監視]によると、彼らは4ヶ月ここにいるだけで、ソロモン諸島に行くということです。最近のジャガはなんでもよく知っていること。

ハンペル

1944年2月21日

哀れな哀れなJ. R. 君。ここでは戦争がいついつに終わるのかというのを人々は狂ったように賭けています。特に中国人。さて、JがM. I. と戦争がいついつに終わるのかという賭けをしました。賭けの賞品は映画。Jが負けて、昨日彼女と映画に行くことになりました。I一家の向かい側に日本人が住んでいて、この家族をずっと偵察していたようです。Jが彼女を送っていくと、すぐにケンペイタイに連行されました。彼らは彼に彼女をどう思っているのか、いかに扱ったかなどなどと尋ねました。その後、顔を殴られ、私たちは鼻骨を折られたのではないかと心配しています。

彼は医者に行ったとRさんから聞きました。現在彼は行状を調べられています、だから目下私は彼のところを訪れません。

ハンペル

1944年2月22日

J君から彼の件を詳しく聞くことができました。2人のごく一般の日本人だったのです、彼らはケンペイタイの連中になりすましていたのです。²⁰⁶ Jはこの2人によってさらに本物らしくみえるように第5班に連れていかれ、そして班の連中も信じたわけです。

ハンペル

1944年7月6日

犬のトリックスは、私を心臓麻痺で死にそうな目に合わせました。朝早くに私たちは毎日の散歩をしていました。彼は飛び出しました。そばを通りかかった日本人に猛攻撃。吠え付きました。日本人が振り向きました。これはけんか、あるいは犬を殺されることになると思いました。でも突然私は気がつき、笑いながら「ジャ・ビラン、スラメット・パギ・トゥアン・ブサール」[彼はおはようございますと挨拶したのですよ]と言いました。この日本人はひどい人ではないようでした。彼も笑っていました。彼はトリックスの年齢と私がここに住んでいるのかと尋ねました。ブルッ、彼がどうするのか冷静に待っていることにしましょう。²⁰⁷

バタビア

ポール

1942年5月10日

状況はだんだん耐え難く、人々はますます不満に。ああ、神の子たち、あなた方は何を始めたのか。罰は重いだらう。モスクで豚を殺す、礼拝中にやかましい音をだす。神様はこんなことを許しはしない。あなた方のような子供は、思考と行動は14歳以上ではなく、でもずる賢くて無慈悲さでは満点。あなた方は人間。

²⁰⁶ この2人の日本人はM.I.に好意を持っていたと思われる。

²⁰⁷ ハンペル夫人はこの件に関して何も知らされなかった。

ポール

1942年7月21日

今日はこれで不潔なヤップが家にやってきたのは9回目。…中略… 8回目はラッメルスさんとピパとLさんのことを尋ねにやってきたのだ。彼らはアデッキにいた！それから彼らはいくらかメカジキを欲しがり、そのためにすぐに戻って来ると親しげに約束した。それで今朝彼らはガニ股で魚を取りにやってきたわけ。彼らは魚と魚のエサとしてオートミールをいくらかもらった。今度はオートミールの缶を持ってくるためにまたすぐに戻ってくる、それから手を振って挨拶した後、親愛なる！お客様が消え去る！

ポール

1942年10月26日

もっとおもしろいお話、続いて起きたこと。昨日の午後、私たちの「旧友」のヤップが魚を見にやってきた(13回目)！ママがそのしつこさからのがれるため、水槽全部を約束した。ヤップは喜んで、ママのもの悲しそうな目を見て「ポール氏はちょっとの間帰宅してもよい」と気前のよいしぐさで約束した。私たちは飛びあがって喜んだ。でも私たちは実現しないと思っていたけれど。チャブラック[犬ダニ]の約束なぞ当てにはできない。

ポール

1942年11月1日

ピパが帰宅！！あのヤップは約束を守った。2日前ヤップに付き添われて車で帰宅した。ピパは彼らのために働き、それが終わるとまたアデッキに戻らなければならない。でも今彼は少なくともしばらく家に滞在できるし、私たちは彼に余分な食事を与えることができるのだ。ああ、この瞬間を私は決して忘れない。彼が劣悪な食事といらだち、妻や子供がおらず、時には死ぬほど不安だった4カ月の後、そこに立っていたのを。彼は18キロ体重が減り、私たちが彼と再会した時には白い髭！ああ、私はまだ彼が目に見える。私たちはみんな感情を抑えることが出来なかった。

彼は、アデッキでそれほどひどい扱いは受けなかった。食事は常に同じ物で、いつも同じくずや石の入ったお米とサユール[野菜料理]、でも最近少しは改善されていた。でも砂糖や塩、塩の一粒も無く、筋肉が弱り、もちろんそれが目的、身体全体が弱っていく。その他、ほんのささいなことで棒切れや皮のバンドで気を失うほど虐待される。ひどいことだ。とにかくこれに関してはあまり目についたことは話したくない。なぜなら誰かが知ることになると死刑なのだ。

ピパは何も言いまわるなど厳しく命じた。…中略… 私たちはみんなピパが帰ってきてものすごく喜んでいる、ポール一家全員。

ポール

1943年1月20日

パパは、今晚ジャワ時間でちょうど11時半にアデッキに連れ戻される。実にいまましい。本当はすでに1月8日に立ち去るはずだった、でももう1週間の猶予を求めたのだ。それで20日になってから連行しに来ることになった。ともかく、彼はかなり長期間家に滞在していた、約3ヶ月。もちろんたくさん女性の押し寄せてきた、理解できることだ。

スマラン

ヒューセン

1942年3月26日

平穏な日だった。夜中の12時15分以外は！ちょうど私が窓を閉めた時、下から耳をふさぐような騒がしい音がして私たちを驚かせた。ハルジョとバクリがすぐに道に飛び出る、私はけが人がいたかどうか聞きに後ろに続く。幸いけが人はいなかった。日本人将校2人を乗せた素晴らしい自動車だった、1人はかなりのマレー語とオランダ語を話した。みんなで力を合わせて自動車を溝から引き出した。やはり見に来たポルティール氏は、私の車のことを聞いた。その時私は「私の車は警防団（LBD）のところです」と言った。将校が振り返って、「なぜ警防団は立ち去ったのか、彼らはスマランにとどまるべきだ！」²⁰⁸ と言った。私はすぐに彼に医療局はとどまっていますよと話した！

ヒューセン

1942年4月2日

お茶の時間にハン・ワルメンホーフェンがやってきて、ロー・フェルミューレンがテニスコートで傍を自転車で通りかかった日本軍人をあざ笑い彼に舌をだしたとか、いろいろまた話すことを

²⁰⁸ 「序」参照。

知っている。その男は憤慨して、彼女をテニスラケットで彼女をひっぱたいた。彼女には当然のむくいだ！そんなこと私たちはしない。

ヒューセン

1942年4月3日

クララが滞在していたヤング一家のところへ。そこに泊まっている紳士はモジョケルトから来たそうだ。そこは彼によるとかなりの被害がでたとのこと。彼がそこでよく話した日本人将校は「3ヵ月以内に戦争に勝たなければ、負けるだろう」と言ったとか。この日本人も他の人たちと同様、闘い続ける気持ちやここ東インドに住む気持ちにはなっていない。

ヒューセン

1942年4月8日

その日の朝遅く街に行ってきた。…中略… ユリアナ病院の傍で自転車から降りて、警備員にうなずいて挨拶。彼も礼儀正しく挨拶を返す。うんざりしそうな仕事にみえる！

ヒューセン

1942年9月10日

ミス・ファン・オールのところで、2人の日本人がテガルワレンで彼女の息子ピートをむりやり自転車から降ろし、登録証明書と40ギルダーを取り上げたことを聞いた！

ヒューセン

1943年6月13日

食事を囲んでいる時、カルト・ジョンゴスが来て「マウ・ピンジャム・クルシ[椅子を貸してもらいたい]というトゥアン・ニッポン[日本人様]がいる」と言う。マリオンが見に行くと、本当に民間の日本人が彼女にホフステーデの庭で「リアット・ラウット」[海を眺めながら]²⁰⁹食事を

²⁰⁹ スマランの山の手からは港とジャワ海が眺望できた。

するのに椅子を2台要求している。彼らはたくさんのあめを持っていて、カルトが彼らに氷水を持っていくと、袋にいっぱいあめがもらえる！「ブアット・ニョンニャ！」[奥さんへ！]

ヒューセン

1943年6月26日

ヒューゲンホルツさんのところにもヤップたちが自動車で「植木」を買いにやってきた、とファン・デル・ホルストさんが話す。鉢植えにヒューゲンホルツさんは1ギルダー要求。彼らはそれを持ち上げ、車に乗せた。ヒューゲンホルツさんは目が覚め、2つ目に5ギルダーを要求した。高すぎる！彼らは植木だけを取り出した。植木だけ？2ギルダー50セントです。高すぎる！植木をまた鉢に戻し立ち去った！占領国にいるヤップたちは暴君のよう！

ヒューセン

1943年11月21日

私たちはいかにヤップがノイベルガー一家のバラン[荷物]を取り扱ったかを聞いて、またしても驚いています。なんでも投げつけてしまうかクーリーに分け与えられる！まったく敬虔な気持ちがない！

ヒューセン

1943年12月30日

暗くなりかけた時 …中略… 私たちはヤップが1人敷地にやってくるのを見る、それから家の隣の方を行ったりまた前に来たりしている。マリオンがちょうど扉を閉めようとする、彼女に話しかける。後で子供たちとカルト - ジャガが加わる。このヤップは26歳になったばかりで、エコノミスト、彼はマリオンが家から移転させられるのはとても変に思う、なぜなら彼が欲したからで、彼らはその時彼に「それは出来ない、ドイツ人の女性が住んでいるから」と言ったことを話す。彼によれば他の日本人が1月15日にここに住みに来る。17番地に6人、19番地に2人、ホフステデーでのところに4人。このヤップもペラン[戦争]を無意味だと感じている。彼の3人の兄弟、1人はソロモン諸島、1人は飛行士としてハワイで、1人は中国ですでに戦死していた。彼はとても「セピ」[孤独]だと感じ、「米国と英国がムスティ・ダタン[必ずやってくる]」と言い、彼は米国とオーストラリアがとても強力でここに来るはずだと分かっている。でも彼は逃げないだろ

う。彼も死にたがっている、なぜなら彼の家族はみんなすでに死んでいるから。その間私は風呂場の傍のガラクタ部屋にいた、深く潜伏しながら。

ヒューセン

1944年1月19日

新チャンディ通りの日本人は、もう奥さんと子供たちにお金を送らなくてもよいとの便りを受け取った。みんなフジャン・アピ[砲火の雨]を受けて死んでしまったのだ。これはヤップといえども嫌なことである。

ヒューセン

1944年1月21日

午後（私は着替え、エーリックは私のところで働くため坐っている）5時、私たちは突然近くに「タベ・ニョンニャ[こんにちは、奥さん]」と騒がしく叫んでいるヤップの声を聞く。マリオンはちょうどベッドから起き上がったところで、部屋着を羽織って玄関に行く。2人の日本人で、前に来た1人とその同居人。彼らは「バブット[敷物]」を買いたがっている、なぜならマリオンがたくさん持っているから。マリオンは最初断ったが、かなりの値段で古いカーペットかココヤシのマットを売ろうと考える。彼らはまたすぐに立ち去ったが、また戻ってくるつもり。

ヒューセン

1944年1月23日

私たちが議論していた時、白い衣装を身につけた女性がこっちに向かってきた。それはマリー・スコーンホヴェンだった。彼女は昨日の午後、おそらく兵士のニッポン人から一発殴られたと話した。彼女はパチンコで鳩を撃っていたカチョン[使い走りの少年]を敷地から追い出した。ヤップが来て彼女を殴った。それでキースベリーさんが外に出てきてヤップを落ち着かせようとした。彼（ヤップ）は、彼女がカチャンを見逃すべきだと考えた、なぜなら鳥はカンポンから飛んできたからだ。

ヒューセン

1944年1月24日

お茶の時間のあと7時半頃に、マリオンの日本人「チンタ」[崇拜者]がエーリックと自転車でやってきて、かなり長時間居続けた、1時間と15分くらい。彼はマリオンが売りたいと思っている敷物を見たり、彼女にタバコ2箱を与える！彼は現在、車は5人に1台で、だから彼らはバスで下町に行く。下町にはまだたくさんいい車があるが、それはペラン[戦争]がジャワ本島に来た時に備えて保管しておかねばならない。またバスやトラックなどもある。とても古いものだけ今走ることが許されている。この人は日本を離れて5年半、最初の3年半は中国で兵役を勤めた。全家族の中で義理の姉とその子供2人が残っているだけ、彼がとてもセピ[孤独]と感じるのも不思議ではない。

ヒューセン

1944年2月20日

突然2人のヤップが敷地にやってくる、でもまたすぐに立ち去る狩猟者たちだと分かる。

ヒューセン

1944年3月2日

夜9時ちょっと前、私たちがまだ食事をしている時、玄関で突然「今晚は！」という呼び声を聞く。すごい驚異！（車で来た）ニッポン人でひどいマレー語でマリオンに「ボンバ」[爆撃]があったら近所を手助けなどをする必要があると説明しようとする！幸い彼女はこのことを以前他の通りでも聞いていたので理解できた。こんな通達をなぜ真っ暗な時間に伝えなければならぬのか、不可解なことである。

ヒューセン

1944年5月23日

朝、私が部屋に坐って編み物をしている時、突然重々しい足音と「スパダ」[人民よ！]と呼ぶ声が聞こえた。刑事部長のニッポン人で、長男のピートを連れに来たと後から聞いた。この18歳の若者は戦前からすでにバンドンの地方少年院に収容されていて、他の印人少年たちといっしょに

ケンペイタイのために働き、かなりのお金をもらっていた。彼はまったく1セントも母親に手渡さない。

ヒューセン

1944年6月26日

ピートがまたイノセによって港の刑事訴訟のために呼び出されている。彼は現在イノセからの証明書を持っていて、それには彼が「日本軍事警察」に属し、1つ星を着装すべしと書いてある。

ヒューセン

1944年8月17日

ピート・Qが昨晚、フレddie・レーマンがケンペイタイの将校に殴られて腕を折ったと話した。この少年はピートのグループの1人でバーの女給を好きになったのだ。彼はパサール・マラムのバーで酔っ払いヤップとケンカ、だからこの刑罰！だからすばらしいことになったのだ、でもこのような意気地なしには当然のこと！

ヒューセン

1944年8月20日

イエチェ・メイヤースがまた回復。事務所で彼女はとても楽しく過ごした。みんなで事務所を掃除する必要があった。日本人ボスたちもいっしょに手伝い、その後チーフがタバコとコーヒーアイス、ジェルックス[柑橘類]とクッキーをおごった、その中から私にも持ってきてくれた！

ヒューセン

1944年9月5日

イエチェは夜遅くに仕事から帰って来る。お金をたくさん数える必要があったのだ！彼女はすばらしい長い鉛筆を持ってきてくれた、近ごろではすごい所有物、なぜならもうほとんど手に入ることができないのだ。イエチェはボスの買い物をするために自動車に乗っていたと話した。私は名前を汚さないため次回には強く拒否するようにと言った。

ヒューセン

1944年9月9日

オランダ郵送船会社（BPM）の太ったニッポン人がヤシの木を探している。ブック・ファン・ウーシックも2本提供しなければならなかった。彼らは現在いたるところ建物をヤシの木で『飾って』いる。なんとすばらしいアイデア！太った奴はここにも見に来たが、幸い直ぐに去っていった。家と同様に庭もまったく空っぽ！

ヒューセン

1944年9月13日

イエチェが頭痛薬、日本のノーシンを彼女のボスからもらった。

ヒューセン

1945年1月16日

イエチェがボスのハシモトの訪問を受けた。これはよくない徴候、私は彼が「チンタ」[愛人]を探していると思う！彼は奥さんを長い間みていないとこぼしていたのだ。

ヒューセン

1945年2月19日

イエチェの事務所にケンペイタイの男が一人来て、印人の少女たちに、家族のこと、チンタ[愛人]のことなどをいろいろ尋ねた。これはすでに多くの事務所でなされていることだ。

ヒューセン

1945年4月24日

イエチェの事務所でボスのひとりハシモトが、とても悲しそうに近々シンガポールに行かねばならず、他の人々も徐々に引き継ぐことになるだろう！と彼女に話した。

ヒューセン

1945年4月26日

(お隣で食事をした) 食後、おいしいコーヒーを一杯飲んだ、これはハンナがお鍋を貸したニッポン人からもらったもの。

ヒューセン

1945年5月3日

チャンディ(スマランの山の手)でもすでに日本人との混血の子供たちがたくさん生まれている。

インドネシア人との接触

バタビア

ハンベル

1942年3月9日

ヤップは狂っているとうちのメイドが言っています。…中略… 彼らは人々に略奪行為をさせています。立ち去る。そして戻ってきてランポッカー[略奪者]をみんな撃ち殺すのです。でももちろんそれは他の一団。彼らは素晴らしい自動車に乗っています。原住民の子供たちを呼び止めて中に押し込み、すごいスピードで木に追突する。とんでもないこと。

ハンベル

1942年3月10日

現在、いたるところパリンドラの旗が日章旗の横に見えます。原住民共産主義者²¹⁰たちのものです。

ハンベル

1942年3月14日

ママがトゥカン・サユール[野菜売り]を呼び止めています、でも彼は中に入ってくるのを拒絶しています。ママが路上に出て行かねばなりませんでしたが、むしろ彼女はそんなことしなかったけれど。

ハンベル

1942年3月21日

原住民たちは殴ってしまいたいほど。彼らは、グリセー通りに米の配給票を発行する事務所を持

²¹⁰ インドネシア民族主義者（独立後はインドネシア共和国）の赤白の旗を意味する。パリンドラ（Partij Indonesia Raja大インドネシア党）は共産主義ではなかったが、原住民の社会的・経済的地位の改善を目標とし、徐々にインドネシア独立に向かう穏健な民族主義運動であった。

っています。そこでは絶えず騒動が持ち上がっています、でも私はごく普通に通り過ぎます。今日、彼らは道を譲ることを拒みました。私は自転車から下りねばならず、誰かが私の自転車を引っ張りました。頭になにかを投げつけられたと感じました。でも落ち着いて通り抜けたわ。

ハンペル

1942年3月26日

うちのアラップが愚痴を言いに来ています。彼はヤップのために働かねばなりません。1日当り2ギルダー50セント、彼のクーリーは25セントもらえるだけ。ヤップは、バラン[品物]を半額で買い入れ、さし出すのを拒めば、ただ取り上げるだけ。…中略… ベチャ[輪タク]はここではまだ全部赤・白・青のオランダ国旗を掲げているし、たった今カチョン[街の少年]はハーモニカでオランダ国歌を吹いています。

ハンペル

1942年3月30日

東京は、原住民は信頼できないとの警告を発する必要がありました。なぜ？というのは、原住民はヤップが侵攻したときにいっしょに闘ったから。市警備隊が移動させられた日²¹¹、ヤップは原住民がブランダ[オランダ人]をやじで迎えるはずの通りに行きました。でも何が起こった？最も貧しい物売りまでが市警備隊にくだものを差し入れています。彼らも、オランダ側について方がよかったと気が付いたのでしょう。

ハンペル

1942年5月5日

当初いたるところにパリンドラの共産主義者の旗が見えました、でも数日以内にヤップが禁止しました。

²¹¹ グロドック刑務所からストリウスウェイク刑務所までの移送。「市外との接触/戦争捕虜・民間人被抑留者との接触」1943年3月25日参照。

ハンペル

1942年5月24日

メースター・コルネリスで、頭を銃で撃たれた2人のヤップを見つけました。現在、脱走したアンボン人戦争捕虜がやったと言われていています。というのは兵士だけがこのようにうまく狙い撃ちができるからだ。今アンボン人は、ドイツでのユダヤ人と同じようにみなされています。あらゆるものが彼らの罪にされます。パパがアンボン人のひとりと話しました。彼はどこそこの補給廠にアンボン人の大隊があって、そしてどこかに武器が隠されていると話しました。…中略… 私たちは反ランポックベンデ[反略奪者集団]NODのメンバーになりました。これが何を意味するのかわかりません。でも夜警のようなもの。何かあれば彼らに電話しなければならず、そうすれば助けに来るのです。おそらくそれで略奪者が敬遠するのでしょう。²¹²

ハンペル

1942年5月27日

反略奪者集団のリーダーは逃亡したアンボン人です。旧タマリンデ通りで、インドネシア人略奪者たちはものすごい盗みを働いています。でも彼は今、彼らを自分の仲間に入れる機会を得たと考えています。それで彼らは食べるものを得るわけです。D夫人はリーダーに夜一杯のコーヒーをあげるし、彼が疲れていたならベランダで寝ることを許しています。

ハンペル

1942年6月12日

アンボン人は王室に法外なほどの忠誠心をもっています。ヤップはすべての原住民兵士に政府への忠誠を宣誓させ、そして釈放しています。でもアンボン人はそれを拒否します。彼らはむしろ囚われることを好むのです。かなり愚かです。職業軍人の釈放が増えれば、ヤップを追い出す手助けができるのに。

²¹² モルック人の夜警は、日本人の許可により設置された。蘭印降伏後の混沌とした状況の中、占領者はまだ自ら全域の秩序を維持できなかった。1943年中頃、日本がバタビアを完全に統制下に措いた際、この夜警は廃止された。モルック人組織のいくつかは抵抗運動の隠れみの的役割を果たしていた。(Frank van Esch, *Het Molukse verzet in en om Batavia*, in B.R. Immezeel en F. van Esch(red.); *Verzet in Nederlands-Indië tegen de Japanse bezetting 1942-1945* (Den Haag 1993), 37-55)

ハンペル

1942年6月14日

なんと原住民は愚かなのでしょう。彼らの旗は、日章旗の横か同じ高さでなびく代わりに下方でなびいている！それなら旗をあげない方がいいのに！

ハンペル

1942年6月30日

私たちの家の向かい側に幾人かのトゥカン・ジュワラン[物売り]が座っていました。1人がもう1人にオランダ人はみんな撃ち殺すべきだと言うのが聞こえました。もう1人は何も言いませんでした。ヤップから罰せられたらいいのに、そうすれば態度をがらりと変えるだろうに。そして女王様は、原住民にもっと蘭印政庁の中での発言権を与えようとしています。彼女は何をしようとしているかわからないのです。

ハンペル

1942年7月17日

私たちはインドネシア人の訪問を受けました。彼はパパ²¹³の事務所の人です。ママは彼にインドネシア人は厳格で公平な統率者を選出したいと思っているけれど、現在は獣の下にいたいのだと言い、かつてオランダ人が原住民のためになしたことを並べ挙げました。無料の薬品と医療、宗教の自由などなど。彼はすべてを肯定しアーメンと言いました。また彼は、今月の20日以後、これから緊迫するはずなので、必要がなければ我々は路上に出るべきではないと女王さまが話したと言いました。…中略… パパは1人のインドネシア人がもう1人に「日本は今我々に鞭打っている。しかし米国が来ればどうなるかだ！」と言っているのを聞きました。早く来て欲しいものです。原住民が私たちからまたランパッセン[略奪]を始めないことを願っています。ヤップはその時私たち擁護したのです。…中略…

そのインドネシア人訪問客には刑務所で働いている妹が1人いて、彼女はそこで3000人増の料理を作らねばなりません。だから刑務所に3000人を収監したという話は本当です。また彼は、インドネシア人所長が日本人に給料を上げるよう要求した、というのはオランダ人のところではもっともらっていたから。どれくらいもらっていたのか？1100ギルダー？彼らはすごくうろたえました。日本の大臣でももらえなかったほど。そして彼は、ここでもすでにグナ・グナ[魔

²¹³ ハンペル氏はオランダ貿易会社(Nederkandse Handel-Maatschappij, NHM)に勤めていた。

術]で太った腹のヤップが病院で臥せていると話しました。アンボン人たちは、私たちがそのまま降伏したと聞いた時にはさぞかし泣いたはず。そのために家と会社を譲り渡す必要があったのでしょうか？

ハンペル

1942年7月27日

真っ昼間、E. R. が原住民に乱暴されました。彼らはかなりずうずうしくなっている。彼らは私たちに結婚したいかと尋ねます、なぜならオランダ人の男子は全員連行されたし、オランダ人はお金を稼いでいないから。原住民警察もオランダ人の顔を殴り始めまています、これはヤップから学んだのです。

ハンペル

1942年8月1日

原住民の若者がここではドイツ人のように一種のユニフォームを着、棒を武器にして歩いています。でも現在、棒を持つことは禁止されています。あるカンポンの若者が、他のカンポンの若者をそれで殴るのです。

ハンペル

1942年8月9日

ほぼ全ての通りの街角に小屋が設けられています。これはラジオ送信のためです。こうして彼らは人民を煽動することができるのです。常に原住民であふれています。²¹⁴

ハンペル

1942年8月23日

白い手袋をはめ我々の制服を着た原住民兵士たちが、ここいらを歩いているのを見てみて。すぐ

²¹⁴ ジャワの全都市と大きな町及び外領では、日章旗をかかげたスピーカー小屋が設置された。このいわゆる「歌声タワー」を通してラジオ所持者だけでなく他の多くの人々も日本のラジオ放送を聞くことができた。(De Jong 11b eerste helft, 243)

に汚れ汗だくになるだろうに。最初の爆弾で彼らは恐がって木に登り、お祈りすることだろう。

ハンペル

1942年9月16日

F. d. V. 夫人も家から追い出された、新しい夜警を事務所にかくまったにもかかわらずだ。ニッポンから制定する許可をもらったアンボン人たちです。だから今すでにこういう組織が2つあります。ひとつは原住民を使っている私たちのD. O. N、²¹⁵そしてこれはアンボン人だけのもの。見る価値があるわよ。清潔な服を着てさっそうと歩いています。

ハンペル

1942年9月29日

ウォーターロー広場の獅子の像がなくなりました。パパはそれを傍で見っていました。彼らは通りの向こう側に引きずって行きました。J. P. クーンの彫像もなくなります。当然これらは、すべて「デ・ブラウン一家」のしわざです。原住民はここでそう呼ばれています。でもヤップはここで白人と原住民との間の憎悪をかきたてています。このような時期にお互い同志親しくすることは考えられません。

ハンペル

1942年10月25日

A. B. さんは、原住民の医師たちと親しくしています。ヤップの医師たちに関する彼女の話しを聞くべきです。彼らはやぶ医者にちがいないとのこと。マントリ[看護人]でさえ優れています。いたるところマレー語を話さないヤップの看護婦ばかりです。だから共同作業はすごく厄介。お互い同士理解できないのです。

²¹⁵ ハンペルは、この組織を前述の1942年5月24日の日記ではNODと呼んでいる。

ハンペル

1942年10月28日

トゥカン・ボトル[古着回収業者]たちは本当に強欲です。誰かの引越しがあるとすぐ、ガラクタを買いつけるために敷地にやって来て、気を付けていないと盗み取ってしまう。デ・ブラウン一家は、ヤップから素晴らしいことを学んだのです。V夫人は、原住民が武器を持たずに並んで待っている兵舎のそばを走り抜けました。彼女は挨拶しなかったので呼び戻されました。そうすると、彼女は原住民に自転車ごと地面に投げつけられました。

ハンペル

1942年12月4日

かわいそうなメイド。家に帰ると彼女の家が燃え尽きていました。カンボンでも人々が亡くなっているはず。彼らはヤップのすることを罵倒しています。オランダ人なら消防隊がもっと早く来たでしょう。とても暑い日だったので、そのカンボンの家は瞬く間に燃えつきました。今、彼女の夫はRさんの衣服を着て歩いています。彼には何も残っていません。そしてヤップはオランダ人のように、カンボン居住者のためにお金を集めたりはしないでしょう。

ハンペル

1942年12月26日

現在ニッポンは、私たちが島流しにしたひどい原住民を政府の指導者²¹⁶に据えました。彼がまず言ったことは、オランダ人全員を殺すべきだということ。すばらしい、それで彼はヤップに呼び付けられて叱られました。

²¹⁶ ハンペル夫人はスカルノを指している。スカルノ(1901-1970)は民族主義者の指導者で、インドネシアの初代大統領。オランダ統治下では他の地に追放され、最終的にはスマトラ島のブンクルンに遠島されていた。日本人が彼をジャワへ連れ戻した。1942年12月、スカルノはムハメッド・ハッタ、キ・ハジャール・デワントロ及びキアイ・ハジ・マス・マンスールと共に新たに「人民組織」を指揮することを通告。これは1943年3月から正式にスタートした「プテラ」Poetera (Poesat Tenaga Rakjat (戦闘への) 人民強化センター)となる。(Brugmans e.a., 655-656 en De Jong 11b eerste helft, 280-282)

ハンペル

1943年2月15日

政治情報局がパパを捕らえるためにここにやってきました。彼のアサル・ウスル[戸籍証明書]は無効だとのこと。最適の人々、あのヤップとの喧嘩と私の拘留をまだ覚えていたのです。²¹⁷ 彼らは、行儀よくコーヒーを飲みおしゃべりしていました。彼らもヤップを嫌っているのです。ささいなことでも殴られるのだから。1人が何か失敗をするだけでみんな殴られるのです。立ち去る際、彼らはパパを連行しませんでした。彼らは、もちろん向かいの男性と同じようにパパが家にいることを知っていました。でも彼らは、まだ彼を逮捕する命令は受けていなかったのです。

ハンペル

1943年4月22日

今日、ここに昔使い走りをしていた少年が仕事を求めに来ました。私たちは、なぜ地方自治体に行ってヤップに求めないのかと聞きました。彼はそうしたのでした。でも兵士にならねばならず、彼はそれには気乗りしなかったのです。

ハンペル

1943年4月26日

私の部屋にまたラジオ、これはJ夫人のもの。インドネシア人なら家から放り出されないだろうと考えて、彼女はバラン[荷物]をインドネシア人の知り合いのところに保管していました。でも彼は出なければなりませんでした。どうして彼がこのような素晴らしい家具を手に入れたのかと彼らは尋ねました。「購入した!」と言いました。彼らは、領収書を要求しましたが、彼はもちろん持っていません。さて彼らは、彼がヤップの敵と結託しているという罪をかぶせました。だからこういうこともあるのです! 彼らはいくらか荷物を守ることが出来、これを彼女に返却しました。すべてが売られます。でもラジオは買い手がないでしょう、というのはラジオの周りはキクイムシにかじられてしまっているから。時折オランダの音楽を聴くのはやはり楽しいことです。音がするだけでも。

²¹⁷ 「逮捕と家宅捜査」ハンペルの日記、1942年8月3日,7日参照。

ハンペル

1943年5月28日

インドネシアは満足していません。これは驚いたこと！スカルノが再度演説しました！そしてうちのコーヒー農園主²¹⁸はなんて言う？「あの男は話し上手だ。我々に家と給金だけでも与えよ。彼には飢えが見えていない！」こんなふうには彼は話し続けました。彼らは今カンポンのどこかに住んでいます。以前オランダ政庁下では紳士だったのです。戦争が長びけば、彼らも闘わねばなりません。

ハンペル

1943年7月3日

今日ほとんど石を投げられ殺されそうになりました。私は、毎日ウィレム3世王学校²¹⁹の傍を通り、そこの原住民監視には挨拶する必要がありません。ところがその男は武器を持って追いかけてきました。私は彼を見ただけで通り過ぎました。石が耳の傍に飛んできました。私は隣の家に注文を渡す必要がありましたが、その時は通り過ぎました、なぜならその男がその家まで後をつけてくるかもしれないからです。そうなるかと殴られるか蹴られるのです。

ハンペル

1943年7月29日

コーヒー農園主の甥っ子が学校に行きます。もちろんオランダ語を学ぶのは禁止！誰がムスー[敵]かと彼に聞いたら「米国とオランダ」と答えます。そしてニッポンはすばらしい。ヤップはひどいと言ったら、彼は飛びかかってきます。5歳の子供です。年長の子供たちはオランダ語が話せます、でも話すことを恐れています。

ハンペル

1943年8月15日

これまた我慢できないこと。アンボン人の知人は、白人女性と子供が自転車から落ちるのを見ま

²¹⁸ ハンペル夫人はインドネシア人の豆加工業者から大量のコーヒーを購入し、それを売り利潤を得ていた。「食糧・物資事情及び就労状況」参照。

²¹⁹ ウィレム3世王学校は、バタビア市サレンバ28番地にある5年制公立高等市民学校。

した。彼女は助け起しました。1人の原住民がやってきて、彼女が誰でどこに住んでいるのかを知りたがりました。後に彼女は政治情報局から呼び出されました。「なぜ敵の臣下を助けようとしたのか？」彼女は、何と返事をすればいいのかわかりませんでした。

ハンペル

1943年10月2日

今日私は、インドネシア人のところに新年の訪問をし²²⁰、おいしいクッキーとポートワインを1杯さえもらいました。これはとてもおいしかったです！

ハンペル

1943年10月30日

うちのメイドは、群衆がバンタムに行くと言います。そこで彼らは飛行場を建設し、ひどいマラリアに罹って戻って来ます。そして私たちの果物売りは、ウディック[田舎]に住むより都会に住んだほうが良いと言います。田舎では連行され、兵士にならねばなりません。都会では少なくとも潜伏することができます。いかに都会での生活が厄介だとしても。ここではお米を得るために何時間も列に並ばねばなりません、田舎にはたくさんあるのに。でも彼は両親から田舎に戻ることは許されていません。

ハンペル

1943年12月16日

今日、トコ集配所レンバンに行きました、そこには私を監禁した警官が座っていました²²¹。彼は私の方に来て手を握り、タバコを1本くれました。やはりいい人。私たちは30分ほど座っておしゃべりをしました。どんなことを話したか本当はわかりませんが、なぜならマレー語だったからです。

²²⁰ 脚注参照（ラバランに関する）。

²²¹ 「逮捕と家宅捜査」ハンペルの日記、1942年8月3日及び7日参照。

ハンペル

1944年2月19日

政治情報局のインドネシア人たち、100ギルダー札を見せたら彼らは何でも話してくれます。それはオランダ政庁下でもそうでしたし、ヤップの下ではなおさらのこと。彼らは、日本人は鼻持ちならないと思っています。M. T. さんのトゥカン・ボトル[古着回収業者]が怒りをぶちまけました。彼らはいつかヤップのところに略奪にいくつもりです。

ハンペル

1944年2月22日

街はまたもや怒涛の中。ある兄妹がオランダ時間の11時にパーティーから家に戻る途中、インドネシア人兵舎²²²になったCAS[Carpentier Alting Stichting]の傍を自転車で通りました。彼らは呼び戻されました。そこでこの兄は、6人の原住民兵士たちに半殺しにされ、その後妹がその6人の男たちに暴行されました。憲兵隊がそこにやってきて、その6人の兵士たち²²³を捕まえものすごい拷問にかけました。さてニッポンは、酔ったニッポン人でもこんなことはしないだろうと言っています。

ハンペル

1944年7月24日

うちの元カチョン[使い走りの少年]が死にました。彼は日本軍の兵士になっていました。食べなければならぬでしょ。彼は病気になり、ニッポンにとって田舎への乗車券のほうがここでお墓を買うより安いため、病気なのに死んでいくために田舎へ送ったのです。彼は母親のベッドカバーに包まれて埋葬されました。

ハンペル

1944年8月29日

あのスカルノったら！彼は、オランダ人がインドネシアを愚かにも見捨てパチョル[鋏]のみ使うことができるようにしたと非難しています。Mさんはインドネシアの私立学校で教えています。

²²² おそらく日本のために働くインドネシア人補助兵である兵補の兵舎であろう。

²²³ この6名のインドネシア人は直ちに死刑が執行された。

彼女らは96人の生徒を試験に送り出し、94人が合格しました。日本政府の学校であるセコラージャット[原住民小学校]は、百何人かを試験に送り出し、百何人かが不合格でした。彼らにはパチヨルを使わせましょう。

ハンペル

1944年9月9日

おやまあ。ニッポンは何か新しいことを発見しました。昨日彼らはインドネシア独立宣言を出しました。²²⁴ 何でしょうか？それは明らかに女王が解放後に自治を約束したからです。²²⁵ 新しい統治にどれくらいの議席がくるだろうかと私が尋ねた人々は、誰も答えようとしません。「好きなように考えることができる。我々はブントウット[末端]でニッポンがクパラ[首長]！」そのため我々は、現在7日間旗を掲げねばならず、インドネシアは自らの新しい旗を持っている。半分が赤で半分が白。でも誰ひとり旗を1つ作るための布を持っていません。今朝ひとつだけなびいているのを見ました。

ハンペル

1944年9月11日

すでに多くの赤と白の旗が見えます。解放後はすぐに青色の布を下に縫いつけることができる、そうすればまたオランダの国旗です。賢い人たち。1人のジョンゴス[下男]は、インドネシア人の主人のために旗を掲げねばなりませんでした。「赤が上だ、ジョンゴス」と言われました。そのジョンゴスは旗を1度、それから主人を見ました。彼は「イツ・ベンドラ・チダ・ツクップ、トゥアン」[この旗は完全じゃないですよ、ご主人]と言った。その主人は、意味が分からなかったのです。「ブラウ・チダ・アダ・トッホ」[青色がないですよ！]これは本当にあったことなのよ。このジョンゴスはもちろん全生涯赤・白・青の旗を見ていたのだから。

Nさんが通りを歩いていました。彼女は街の少年たちを通り過ぎ、ニッポンとインドネシアの旗を持つ学生たちに出会いました。突然街の少年たちは「チダ・アダ・ブラウ」[青がない]と言いました。彼らは紅白を優先します。オレンジ色の丸はすでにあります。なぜなら日の丸の赤は、すごく色褪せオレンジ色になっているから。その他彼らは、3日間街の中を無料乗車

²²⁴ 1944年9月7日、日本の小磯首相は、明確な日付は述べなかったがインドネシアが将来独立するであろうと声明をだした。日本の好意で、その後日章旗の横にインドネシアの赤白の旗を掲げることが許された。

²²⁵ 1942年12月7日、ウィルヘルミナ女王は王国内の政治政策の規定が徹底的に改革されるべきだとの発言をラジオ演説で行なった。オランダ、インドネシア、スリナム、キュラソー島は全議会の一部を占め、各国自らの国内問題に関して独立して自力で対処するが、お互いに必要とあらば支援するという国家体制が考慮された。(L. de Jong, *Het Koninkrijk der Nederlanden in de Tweede Wereldoorlog 11c. Nederlands-Indië III* (Leiden 1986) 92-94)

できます。すべて超満員。結果はまた死者の一团が出たことです。タナー・アバンの丘では、ブレーキがきかなかつたため2輛の市電が衝突しました。市電は転覆し、その後は当然のこと。

ハンペル

1945年7月1日

以前Bさんは庭に使い走りの少年がいました、彼は現在ニッポンのために働いています。ママは昔一度何かで彼を助けたことがあります。ある日、その少年がバター1箱とおむすびを持ってうちに来ました。おむすびは豚肉が入っていておいしかった。彼は正装していました。もっともニッポンのために働く人たちはみんなきちんとした身なりです。彼らはもちろん何でも盗みます。このような人を後で雇うなんて冗談ではない。

ハンペル

1945年8月7日

さて、またなんて日なのだろう？私たちは、突然旗を掲げる必要がありました。今ムルデカ[独立]だと言う人がいるし、他の人は9月7日になってから独立²²⁶だという。だから現在、スマトラ人とジャワ人のどちらがより多くの議席を取るのだろうか待機しています。セレベス人とボルネオ人は考慮されていません。スマトラ人はスマトラに行かせればいい。学校でさえスマトラの若者は、ジャワの若者を奴隷にしようとしています。事務所が始まる前に、人々は上から下まで着替えます、なぜならお互いを刺し殺すためにナイフを持って歩いているから。私たちは、悪ふざけの時代に向かっています。

これが本当かどうか分かりません。インドネシアの集会がありました。ムルデカが叫ばれました。ブン・カルノ²²⁷が槌を打って決定しようとした、すると突然誰かがニッポンからはムルデカが許されていないと言うために走ってきました。

²²⁶ 1945年8月7日にジャワでは8月中旬に「インドネシア独立準備委員会」が設置される予定と発表された。
(De Jong 11b tweede helft, 1027)

²²⁷ 日本占領時代、スカルノ（「ブン・カルノ」=兄/同志スカルノ）はバタビアとジャワで様々な重要な地位にいた。プテラ（日本側に監視されたジャワの大衆運動）のリーダー、一般行政顧問、バタビア中央顧問議会の議長、ジャワ奉公会（ジャワにおける人民奉仕と犠牲精神の機関）などである。1945年8月17日「ブン・カルノ」とムハメッド・ハッタがインドネシア独立を宣言した。（Brugmans e.a., 655-656）脚注参照（スカルノに関する）。

バタビア

ポール

1942年8月25日

そうこうしている間に大きな悲劇が起こった。実はうちでは、「信頼できる」メイドのサジが出ていった後、彼女の息子のスルダリを庭仕事に7ギルダー50セント（この時期では王様の給料）で雇った。1ヵ月後にジョージョの財布から100ギルダーがなくなっていた。現在うちには、病気になったら戻れるようたくさんの新しい使用人がいる。だから誰が盗んだのかは誰にも分からない。誰にも証拠がない。スダー[しかたない]、どうしようもない。そして2週間後、ママの戸棚から10ギルダーが消えた。そう、なんてこと。たぶん何かに使ったのかも、もちろんもう分からない！そのメイドがうちのスルダリが一瓶の油（ほとんどもう手に入らなくなっている）を台所の戸棚から盗むのを見るまでは。彼女は、庭の中にある計量箱にSが隠した瓶といっしょにママに言った。また何も言わなかった、でも翌日には二重の錠前を戸棚にかけた。やっぱりそうなのかと言いたいけれど…でも。その次の日曜日ママは、現行犯でSを金庫の前で押さえた。袋1杯のお金、加えて2つのシリンダー錠。彼の母親のサジが、ママから盗む事が出来るとずっと言っていたのだ。サジがすでに何年間もしていたように。これが私たちのところですごくいい思いができた後の感謝なのだ。

ポール

1942年12月8日

チデンの収容所の中、何人かの少年がローラースケートをしていたところで、何人かの長い三編みをしたシッセン[インドネシア人の少女たち]が通り過ぎた。少年の1人がシスを1人からかった。彼女は怒った。「なによ、この国が今私たちのものだ知っているの？」と言った。少年は「ちがうぞ、僕らのでも君たちのでもない、ニッポンのものだぞ」と叫んだ。ローラースケートをしていたほかの少年たちもみんな大声で「ニッポン、ニッポンのものだ」といって叫ぶ!!!

ポール

1944年2月21日

私たちの安全な街バタビアは、今不穏なジャカルタになった。それで突然アンボン人の一団が現れ、市の夜警を名乗り出た。ともかく不穏なジャカルタの人は、みんなこの申し出を受け、PMA

の文字が書かれた三角形が張られた。びっくり、PMAすなわちアンボン人の夜警として働らいた人が全員捕らえられ、アデッキに押し込まれるまでは。

現在どうなっているのか？ 事実をはっきりわからないけれど、聞いてノートさん、私が嘘をついているとすれば、人から聞いたから責任はもてないけれど。PMAはアンボン人の夜警の意味ではなく…米国軍隊のこと。どう思う？ これが少なくとも実際本当なら。ともかくおもしろい話しでしょ²²⁸？

ポール

1945年1月30日

2つのバナラ

もちろんフォンと私は冗談でトコ・ウンに行くという考えが頭に浮かんだ。もちろんそれは愚かな考え、というのはウンには実はドイツ人²²⁹と彼らに連れ添う女性たちのくず！のせいで、上品な人々はもう行かないからだ。でもいいや、もちろん頭でこれは愚かなことと考える。でもおいしいアイスと冒険に引き寄せられたのだ。それで私たちはお客がいっしょに入って行くのを確かめた後、自転車を駐車した。恐れた顔つきと震えた足で中に入り、それから驚いたことにドイツ人の人数が思ったより多いのを確かめた時には、すでに後悔していた。ホールの一番奥、私たちは暗い隅にびくついて隠れ、ジョンゴス[ボーイ]に合図した。これがその会話：

私： 「ジョンゴス・アダ・ライスト？」 [ボーイさん、メニューありますか？]

ジョンゴス： 「ピサ・ベステル・サジャ・マカナン」 [食事のみ注文できるんだよ]

私、驚いて： 「チダ・アダ・エス？」 [アイスはないの？]

ジョンゴス： 「アダ・ナポリターナ」 [ナポリ風のがあるよ]

私： 「エン・イトウ・ブラパ、ジョンゴス？」 [いくらですか、ボーイさん？]

ジョンゴス： 「1ギルダー50セント」

²²⁸ 最も重要で強力な夜警グループの1つは、カリスマ的なA.I.タナサーレのPendjaga Malam Ambon（アンボン人夜間警備隊、PMA）であった。PMAは、抵抗運動も行っていた。軍の情報収集および武器の回収などにより1943年10月タナサーレが日本軍に逮捕され、拷問された。彼の組織は解体させられた。(Inmmerzeel en Van Ech, 43-51)

²²⁹ 1943年ドイツと日本は限定的に軍事同盟を結んだ。この年の後半、ドイツ海軍は数隻の潜水艦をインド洋に送った。彼らの基地は始めマラッカのペナン、1944年10月以降はジャワのタンジョン・プリオック。ドイツ海軍はペナン、バタビア、シンガポールに自らの部署を得た。1944年終わり、この潜水艦に魚雷がほとんどなくなり、1945年1月後半以前にゴムを積載しドイツに引き返せとの命令を受けた。(De Jong 11b eerste helft, 47-48)

私たちは一撃を受けた。

私： 「エン・ライン・エス・チダ・アダ？」 [他のアイスはないの？]

ジョンゴス： 「オー・パネリ・アダ・ジュガ」 [ああ、バニラもあるよ]

私： 「ブラパ・イトゥ？」 [いくらですか？]

ジョンゴス： 「75セント」

私たちは失望して彼をじっとみつめた。

ジョンゴス、同情しながら： 「ジュガ・ビス・ベステル・ストロープ」 [レモネードも注文できるよ]

私： 「カッシー・サジャ・パネリ」 [じゃあバニラ下さい] (ため息をつきながら、というのは私が支払うつもりだから！)

ため息をつきながら私たちは待ち続けた。いつまでもドイツ人が私たち怖がった顔を観察しながら周りを歩いたり、裏にオシッコとかに行ったりしていた。ようやく私たちの友ジョンゴスがやってきて、私たちに無頓着な態度でアイスを投げつけた。しばらくして私たちは彼が2人のドイツ人にバニラアイス2つをうやうやしく持っていきのが見えた (お盆にのせて、アイスだよ)。ともかく私たちはアイスをお腹に入れた (おいしかった)、そして色々な嫌な人間からじっと見つめられながら外に走り出た、こんなことはもう絶対しない！

スマラン

ヒューセン

1942年3月21日

クララとアシスタント・ウェドノ [郡長補佐] と話すために第2班まで歩いた。この人は寝ていた、でも私たちはマントゥリ・ポリシー [インドネシア警官] と楽しくしゃべった、彼は私たちのためにプリオクス [警防団の救急車] などがまだ街の公園にあるかどうか見てくれた。実際まだ全部ある、オリーヴェ氏の報告ではすべてなくなったとのことだが、にせの噂だったようだ。

ヒューセン

1942年3月24日

私たちはもう少しバンバンと話し続けた。彼は実は彼が属すべきクラトン・ファン・ジョカ [サルタンの宮殿] の伝統に関して話した。彼は昔そうだったようにまた奴隷になるだろうと心配している。また彼の近所に住んでいるインドネシア人が、すでにニッポンの男たちの態度に関して、

彼らが鶏を撃ち殺し焼いて食べるとこぼし始めているとも聞いている！パリンドラは禁止されている、共産主義的だから。²³⁰

ヒューセン

1942年4月25日

バクリは今、1ヵ月10ギルダーでジョンゴス[下男]になっている。シマはゲンドック[鍋]を4ギルダーで持ってきて、8ギルダーもらった。家事は通常通り営まれている。…中略…ドゥルラーが22日の水曜日に（捕虜の男子を移送する）トラックと自転車で同行した。彼は彼の主人がどこにいったのか知りたがったのだ！彼は泣きながら帰宅した。

ヒューセン

1942年5月1日

省知事事務所で新しい「副理事官」と話した。彼はオランダ語を話したがった、でもマレー語が「新しい」公用語なので、私はマレー語を話す！「新しい」役人は何も知らない、上役の「クテランガン」[指令]をずっと待っている。だからろくなことにならないだろう！

ヒューセン

1942年6月3日

さてバクリが10日間いなくなった後、土曜日（5月30日）にやってきて、日曜日に賃金をもらい、また病気になって月曜日（6月1日）スロンドルに立ち去った。現在、彼の弟ブーアンがワキル[代理]としてここにいる。私たちは彼をととても気に入っている、とてもよく働く！

ヒューセン

1942年7月10日

今夜初めて、元軍事警察²³¹にいた新しいジャガ[監視]がやってきた。彼は9ギルダー（私たちがそのうち3ギルダーを支払う）で3つの家を監視するつもり、ファン・アルフェンとモルと私たち

²³⁰ 脚注参照。（パリンドラに関する）

の家だ。クララはジャガを敷地に住まわすことを話していたが、彼には奥さんと子供が4人いるので取り止め、騒がしいからではなく水の使用などのためだ。私が結局は支払わねばならない、だから私に決定権がある。

ヒューセン

1942年12月28日

バクリが、「義勇軍」に行く必要があると私に話す。明日は役所、その後徴兵検査。私はどうなるか興味がある。彼はまったく行く気になっていない。

ヒューセン

1943年3月5日

夕方頃にバクリが徴兵義務のため10日間アンバラワに行く必要があると言いに来る！おそらく演習の始まりだ！

ヒューセン

1943年3月6日

アンス・ファン・ウールコムが第2班でアクサン[郡長補佐]と話し、彼は私とクララ・Hのことに関しても話した、彼女はレーペル夫人として²³²連行された。部長刑事としてアクサンは、私を捜査することはないが、彼の部下に関しては保証できないとのこと！

ヒューセン

1943年3月9日

夜中の1時半ごろ、ちょうど私が立ち上がって灯りを消そうとした時、マリオンが部屋の中でカルト（監視）を大声で呼んでいるを聞く。盗人が彼女の窓を開けようとしていたようだ、彼女は

²³¹ 蘭印軍の軍事警察はオランダ本国の軍事警察とは無関係である。1890年のアチェ紛争の際に設置された。蘭印軍事警察は、アチェにおける抵抗運動に反ゲリラとして任務を果たした。後に軍事警察隊は蘭印軍の軍事警察の正規の歩兵師団となった。

²³² クララ・ホウィंकはフリッツ・レーペルと婚姻していた。彼女は印欧人との婚姻で強制収容を免れると考えた。「日本軍の措置と規定」ヒューセンの日記、1943年2月28日参照。

前にある椅子に何だったのか見るために飛び上がったのだ！もちろん外ではものすごい騒ぎ、でも成果なし。マリオンのバブ全員は私の件²³³を知っていて、いいことだと思う。彼女たちは私を絶対密告しないだろう。

ヒューセン

1943年3月10日

バクリから今晚ハガキを受け取った、宛名は「ノンナ・ウォルフ」で、彼は10日ではなく15日間滞在するだろうと知らせている。アンバラワからテルス[直接]クラートンに送られている。

ヒューセン

1943年3月21日

バクリが突然また現れる、義勇軍の演習が終わったのだ。

ヒューセン

1943年4月28日

バクリは、日曜日（4月25日）から家に来ないし、便りを送っていない！

ヒューセン

1943年5月19日

バクリは、今日ようやくまた家に入ってきて、ペトロンガンから私の地図帳と石鹸と包帯を持ってきた。私は今知恵をしぼりだして、彼が家の中に入らない日には10セント払い、その他は丸々25セント払うことにする、なぜなら絶え間なく「義勇軍」や「警察」へ出かけることにイライラし始めだしたから。

²³³ ヒューセンがマリオン・ウォルフのところで潜伏している事実。

ヒューセン

1943年5月26日

私たち(マリオン、ファン・フリート夫人と私)が紅茶を飲みながら芝生に楽しく座っていた時、バクリがやって来た、靴をはいて(!)、頭巾なし、ショートパンツで彼は、3日間第4班(新チアンジ通り)の演習に行く必要があるとのスロンドルのルラ・デッサ[村長]からのスラット[手紙]を手渡した。

ヒューセン

1943年6月13日

マリオンが昔から信頼しているハッサンが、彼女のバランを返却しにやってきた。カンポンでは家宅捜査がなされる惧れがあるので彼の家にもうこれ以上おいておけないのだ。

ヒューセン

1943年6月19日

トーマス医師のケボン[庭師]が「義勇軍」のためボルネオに今朝早く出発。バクリはもう10日以上家に来ていない。私は彼もそこに行っていると心配している!

ヒューセン

1943年6月22日

カルト - ジャガから今朝すでに5000人のジャワの若者が出発したと聞いた、彼らは呼び出され、ムリチャンに行く、翌日にはボルネオに出発。彼らはこずかいをもらい、ボルネオまで食事は無料、その後はすべて自前だ。ミンナも同じような話しを持ってやって来た。すべてのカンポンから若者たちが去る、多くはすばらしいことだとさえ思っている!でもだれも銃や他の兵器はもらっていない。タウン駅で多くの女性が別れを告げたが、ニッポンによって強制退去させられた。みんな泣いていた!

ヒューセン

1943年6月25日

ラーピンも、バクリの家族も彼がどこにいるか知らないとルート・ビルケンハウエルに話した。だから私はボルネオだと思う。

ヒューセン

1943年6月26日

カルト - ジャガは…中略…今夜来ない、カンボン監視だ。彼もこれからはニッポン人のために働く必要がある、すなわちテヌンの工場のために竹筒を削るのだ。あるいはジャガエン[監視する]ためにここにいることができるだろうか？

ヒューセン

1943年7月2日

バブのスーが（私たちの隣の）カンボン・ウォノティンガルから若者10名が義勇軍のために連れ去られたと話す。おこずかいの10ギルダーはまだもらっていない。人々はとても気にしている。ジョカの誰かがジャワ人は息子たちが戦死したとの便りをもう受け取ったと話した。彼らはスラマタン[宗教的な感謝の食事]を供すために15ギルダーもらった！

ヒューセン

1943年7月9日

今朝ウンガランからバクリのハガキ。彼はだからボルネオではなくヌグレレップにいる。15日に戻ってくる。

ヒューセン

1943年7月10日

うちのバブの夫スパーが、市で働いている50名のうち20名が突然プラン[帰宅する]が許されず、だから義勇軍に割り当てられると話した。

ヒューセン

1943年7月11日

カンボン・コンシーはゴルフ場の傍を訓練場として明け渡す必要があるとの通達を受け取った。

ヒューセン

1943年7月15日

午前中にバクリが突然やって来た。第4班に行く途中で、今のところ家に来ることができない。第4班で彼はムダルブロン（ウンガラン）水道の監視である。前にルート・ビルケンハウエルの元庭師のシミンは、すでにラウト[海]に連れ出された！他の30名と共に。バクリはだからまだ幸運！私は彼に6月分の3ギルダー60セントを支払い、出来るだけ長く1ヵ月3ギルダー払うと約束した。

ヒューセン

1943年8月4日

ブントラン先生が中央市民医療施設に別れを告げ、人民議会²³⁴の準備をするために他の20名の傑出しているパリンドラの男子たちと、それぞれ5キロの荷物を持ち、日本に送るために汽車でバタビアに連れて行かれた。

ヒューセン

1943年8月9日

ノイベルガー家では何日か厄介な日があった、下男がケンペイタイによって封鎖されたルッシュ（英国人、BAT工場の人）の戸棚から数枚の上下服を盗んだのだ。

²³⁴ 脚注参照。（中央諮問委員会/スカルノ）

ヒューセン

1943年8月14日

毎朝夕、カルト・ジャガが私に「ノンナ・ブサール・ヒューセン」[ヒューセンさん、こんにちは]と挨拶すると微笑まずにはられない。

ヒューセン

1943年8月20日

バクリが坊主頭に日本の制帽でやって来た！彼はまだ唯一の武器として棒を持っている！私は彼に7月分の3ギルダーと8月分の2ギルダーを加え5ギルダー与えた。私のお金はだからかなり減っている。

ヒューセン

1943年9月15日

エーリックがカナリー通りからアンドレアス（ティモール人の友）のところに行く途中、泣いて帰ってきた。バリサンス[軍務]の演習をしていた若い原住民警官から、彼の自転車のベルが悪いということで顔を3ヶ所殴られたのだ！なんと勇ましいこと！！

ヒューセン

1943年9月20日

コキのカッシラは、16歳の少年たちが（沿岸警備など）支援のためすでに呼び出されているという話をしている。

ヒューセン

1943年9月30日

6時ごろ、ミンナが少年たちのためにロントシ[バナナの葉で包んだご飯]、鶏、そしてクパット[ヤシの葉で包んだもち米]を持ってきた、でもうれしいことに私とマリオンもミンナのご馳走にあやかった。

ヒューセン

1943年10月12日

年老いたランガナン[花売り]のトノがやってくる。私たちは数本の花を買う。すると彼はぐずぐずして、古着がまだあるかと尋ねる。マリオンは古い継ぎ当てたドレスをみせるが、彼はとてもカッシアン[気の毒]と思う。それから彼女は「大きなハンス」の数枚の古いシャツを探し出して与え、彼はとてもはずかしそうに彼女の手に食べ物を買うために10セント玉を渡す！目に涙をさそう！幸い私たちはこれほどひどくはない！

ヒューセン

1943年10月14日

アンドレアス（ティモール人）がハンスに、ラジオが全ての旧軍人（ティモール人など）を召集していると話した。

ヒューセン

1943年10月19日

カルト - ジャガが2晩家に来なかった、でも幸い今日またやってきた。彼は病気だったのだ。私たちはグタンカプト[収監された]と思った、でも彼は、それはオラン・アンボン[アンボン人]とオラン・メナド[メナド人]が「監禁」されただけだと話した。

ヒューセン

1943年10月22日

新米警官たちが今朝ここを通り過ぎた。そしてハンスは自転車修理屋から、彼らがクレワン[銃剣]に通したアメリカの国旗を持っていて、大声で「アメリカ・ディハンチョル、アメリカ・ディビキン・ブブール」[アメリカを破壊し、アメリカを粥にしまえ]などと叫んでいたと聞いた。

ヒューセン

1943年10月24日

スー（バブ）が、彼女の夫スバルがすでに数日帰宅していないで、グダンガンで働く必要がありバレバレ[寝台]などを作らねばならないと言った。彼はこう伝えるために他の人を送り、その人は、昨日スラバヤから1700名のオランダ人婦女子が到着し、男子の手助けもなく自分でトラックからバラン[荷物]を取らねばならなかったのがとても気の毒だったと言った。睡眠用マットレスを自分で携えていなかったら、彼女たちは寝台にマットを敷いて眠る必要があった。「人々」によるとグダンガンには1500名分の場所があった、だから現在かなり満杯ということだ！

ヒューセン

1943年11月16日

午後ジャーネ・モーフがお茶を飲みに来る。…中略… ブンタラン医師が日本からまた戻る。彼はとても彼女を気に入っていた。

ヒューセン

1943年11月21日

カルト - ジョンゴスがウイ・チョン・ビン通り（いわゆる新しいゴルフ場の傍）の向かいにある4つのカンポンは引越す必要があると話している、コンシー、カリウィルーともう2つのカンポンだ。人々はすべて残していかなければならない、小さな荷物と戸棚、ベッドだけは持っていてもいい。50ギルダーの手当てがもらえる、それは月ごとに5ギルダー支払われる！彼らはスマランの家族のところに入居することが許されない。「パンギラン」[召集]が来次第、トラックに乗りセラジュ（？）のバラックが用意されているソロの方に行く必要がある。みんな落ち込んでいる、なぜなら多くの人々は自分の家と土地、それにヤギ、鶏、雄牛を持っているから。いつ強制的な引越しがあるのか興味がある。

ヒューセン

1943年12月2日

ハンスとエーリックの理髪師が、マカッサルの商船学校に自主的に申し込んだと言った。昨日すでに何百人もの若者が去っていった！彼は次の召集に行く。

ヒューセン

1943年12月6日

お茶を飲みにバルキがやって来る。彼は14日間病気になったばかりで、中央市民医療施設に臥せていて、半身が何もできなかった。彼は、カンボンでケイボウダン[警防団]がバタ・ムスー[敵側スパイ]を探さねばならないと言う。彼らはそれで家に入っていくのだ！恐ろしくて心臓がとまりそう！

ヒューセン

1943年12月7日

山手方面のバスには嫌な切符売りや車掌がいる。彼らはマリオンに3セント区間（カシッパ通りージャチングレー）のくせに6セント要求する。マリオンはぴったりのお金を持ってなかった、でも一横柄で、傲慢な彼らの態度にもかかわらず一冷静を保っていると、身なりのいい原住民女性が彼女に3セント与えた！…中略… マリオンはその中国人のバスの車掌をすごく憤慨している。

ヒューセン

1943年12月8日

警防団については誰も少しも知らない。ミンナも知らない、彼女の孫が警防団なのに。カッシラがまた戻ってきた。

ヒューセン

1943年12月26日

突然警官が自転車に乗ってやってきて、マリオンに愛想良く出迎えられる。マリオンは、後で私にミンナのカンボンから引越しのためにクーリーを雇った²³⁵と言う。一日75セントの約束だったが、彼女は彼らに1日1ギルダーを払ったので、彼らはとても喜び、引越しが終わった後、また引越しを手伝いに来てよいかと尋ねた。だから彼らはここでいかに遇されているか知っている。

²³⁵ 「居住」ヒューセンの日記、1943年12月20日から25日参照。

午後、また警官が1人自転車でやって来る、別の派出所の所長だ。彼も愛想良く出迎えられた。彼は前にエーリックを殴った同じ警官らしい、でも今はすごく愛想がいい。

ヒューセン

1943年12月27日

マカッサルへ行って商船学校に入るはずだったインドネシア人の若者たちは、まだ出発していない。何人かがここに戻ってきている、他の若者たちはスラバヤでインドネシア人補助兵に割り当てられている。

ヒューセン

1944年1月1日

新年

カルト・ジャガと他の下男たちみんなが「スラムット・タフン・バルー」[新年おめでとう]と長短の挨拶とともにやってきた。11時半にバクリがスーといっしょにやって来た、彼は私たちを通りて歩きながら探した。現在、彼は古い通関事務所の監視で、先月（1943年12月）マティ[死]を覚悟した5人のアンボン人によって放火された火事があったと話した。

バクリは今、腕に日本の腕章と右胸のポケットに文字の書いてある布をつけており、その上、新しい日本の帽子を被っている。彼はペトロンガンにも行き、そこではすべてうまくいっている。また彼はシンゴサリでリブート[暴動]があることや、とくに1月10日からよく関しすべきだということを知っている。どういうことかしら？

ヒューセン

1944年1月2日

ハンスは多くの原住民が新しい腕章をしているのを見た。新しい警察なのかしら？昨日彼らはこの腕章をもらったのだ。

ヒューセン

1944年1月3日

少し後に警察がやってきた、というのはこじきが庭からジャルック[レモン]を盗んだからだ。エーリックは警官に私たちはタム[お客]があると話している。想像できる、こんな時期に。そのマス-オプパス[インドネシア人警官補佐]はこれに反応して、マリオンにこのタム(お客)について尋問している、その間私の心臓はかなりドキドキしていた。

ヒューセン

1944年1月6日

とかくするうちに、下男たちは12時に行われるスラムタン²³⁶の準備に忙しくしている。カルトの奥さんとミンナが手伝いに来る。カンボン・ウォノティガルのムディン[ムアッジン]が来る、その他にはカルト-ジャガと彼の弟ムルジョ、でもハッサンは突然ジャパラに出かけている。最初は通常のサムバジャン[お祈り]、それからトゥアン・ドクター[お医者様(ウルフ)]のために特別の壺がひっくり返されると、カルト-ジャガがやってくる²³⁷。これはだからウントン・ブサル[大運]。この時期にスラムタンを行なうのは大変なことだ。もうすでに10カティ²³⁸のお米が供されている、これはマリオンが米配給票の10日分である。それにカモの卵に1ギルダー15セント。全部でおよそ5ギルダーになる、これはこの時期私たちにとっては大変な金額である。

ヒューセン

1944年1月9日

午後というより暗くなってから、エーリックが私服警官とやって来る、彼はいくらかデルモトル²³⁹を欲しがっている。

²³⁶ このスラムタンは、木曜日(ジャワ人にとって魔術的な意味あいがある)に行われ、ウルフ一家の新居に幸福をもたらすためになされた。中部ジャワでは新しい住まいに入居する際、このような宗教的な感謝の食事が供された。ここでは建設された新居の方角など様々な数値で計算された特別な日を選ばれる。(Ki Sura, *Buku Primbon Jawi lengkap*. Edisi Bahasa Indonesia (Surakarta 1995), 59)

²³⁷ ウルフ医師は内科医で、1943年4月飛行場建設のためスバラヤからフローレス島に移送された2100名のオランダ人戦争捕虜のグループに属した。2週間以上の船旅の後、この移送はマウメレ港に到着。もうすでに彼らの中には多くの病人がいた。戦争捕虜の収容や病人の看護に関してはまったく設備がなかった。捕虜たちは自ら3つの収容所を建設する必要があった、すなわち労働収容所2つと検疫所兼病人収容所。病人収容所は指揮する医師の名をとって「ウルフ・キャンプ」と呼ばれた。(Van Dulm e.a., 209-210. J.H.W. Veenstra e.a., *Als krijgsgevangene naar de Molukken en Flores. Relas van een Japans transport van Nederlandse en Engelse militairen 1943-1945* (Den Haag, 1982))

²³⁸ カティは重量単位で約600グラム。

²³⁹ デルモトルは皮膚の傷に対する消毒用パウダー。

ヒューセン

1944年1月17日

10時半近くにカルトが「警官だよ」と警告に来る。マリオンが対応、これは外に置いてある小さな荷物をしまうように言いに来た派出所の所長だ。このままではいけないのだ。また彼は火打ち石を求めたが、マリオンはもう持っていないのでマッチを1箱あげた。彼はまた第4班のタンシ[兵舎]ではもう3日間米がもらえず、今日は手のひら1杯のブル[お粥]を食べただけで、今『ラパル』[空腹]だと話している。彼は日に60セントもらう、でもこれでは服を買うことができない。…中略…

食後、3時にマリオンと私が座って話していると、敷地に1台のトラックが全速で乗り込んできた。荷物を取りに来たインドネシア人らしい、でもマリオンがガレージを指差すと、彼らは索具を取り外された自動車を持っていく気になれないようだ。彼らは成果無しで走り去り、私たちは2度と彼らを見ることのないよう願っている。

ヒューセン

1944年1月24日

ミンナはマリオンに、すでに2週間前カルト - ジョンゴスがブルフンティ[仕事を止める]し、サンコー²⁴⁰を作りたいと言っていると話している。これにはびっくり。今は望ましくないことだ。

ヒューセン

1944年1月31日

午後の5時15分前までは何事もなく過ぎる。それからスーが私に、バクリが話したいと警告に来た。この若者はスサー[厄介事]を抱えていて、明日の朝早く4時半にカパル[ボート]でセイネンダン[青年団]²⁴¹の他の45名とシンガポールに行かなければならないのだ。彼はすごく落ち込んでいて、衣服を取りに行くため少し自由時間をもらったのだ。今、彼は少なくとも母親に挨拶できる。私は彼に手渡すことができるようマリオンから10ギルダーを借りた。私たちは2人とも同情し、彼は苦勞しながら平常心を保とうとしている。出発のため向きを変えた時には、彼は泣いて

²⁴⁰ サンコー協会のために麻袋を作ること、1943年5月28日から貧しい印欧人及びインドネシア人のために仕事を提供した。「食糧・物資事情及び就労状況」ヒューセンの日記、1944年5月28日参照。

²⁴¹ ジャワ青年団は日本軍が1943年4月29日に設置したもの。この青年団ではインドネシアの若者は日本軍のやり方で訓練された。(Brugmans e.a., 515,654)

いる。私たちは彼が戻ってくることを心から願っている。…中略… 私は、明日の早朝不確実な現実に向かわねばならないバクリのことをずっと思わずにはいられない。

ヒューセン

1944年2月1日

昨日マリオンは大型船が海に浮かんでいるのを見た。この船は今朝出発した、バクリが乗っているはず。カルト・ジョンゴスは給金をもらったが、ブルフンティ[仕事をやめる]に関しては一言ももらさなかった。

ヒューセン

1944年2月7日

午前中にマリー・スコーンホヴェンが立ち寄った。彼女は盗難の件²⁴²で呼び出されていた第4班から戻ったのだ。男が1人見つかったのだ、ベッドカバーを売ったのが彼女のそれと似ていたのだ。彼らはやはり盗人を探していたのだ！彼女からバブたちも現在「レイショウ」²⁴³=体操をする必要があると聞く。サロンなしで彼女たちが広場で立っているなんて一度見てみたい！！

ヒューセン

1944年2月22日

カンポンの住民が呼び集められ、金持ちは貧者を助ける必要があると言われのだとミンナが話している。上着などをたくさん持っている人は貧者に与えるべきだ、同じく食糧も。それで不満がつもの。ガプレック[乾燥キャッサバ]は少なくとも2年前のもので、有毒だ。カンポン・ランシルではおよそ20名の人々がこれで死亡している。

²⁴² 1943年大晦日の夜にマリー・スコーンホヴェンの住居で盗難があった。「食糧・物資事情及び就労状況」ヒューセンの日記、1944年1月2日参照。

²⁴³ 「体操」のこと。

ヒューセン

1944年2月28日

若者たちが下町に行き、近くの競技場でみかけたトノ[花の小売商]の花を持って戻る。彼はむりやりグラジオラスとガーベラを彼らの母親のために持たせようと思ったのだ。これはやはり感動的！

ヒューセン

1944年2月29日

すでに朝早くマリオンが私のためにペトロンガン13番地（リーン・スミスお婆さんの家）に行つて、3月と4月分の50ギルダーを運び、小さな容器を取りに行つて来る！彼女が私の洋服を尋ねると、バクリが盗人で悪賢い奴だとのこと。あとから考えるとバクリが本当に全部盗んだのかそれほど確かではない。彼は1月にヘルダ・ズーフェルクロップのところに来て、私が全ての軍用品や警防団やVAC²⁴⁴のものや破れたドレスがほしいと言つた、そして彼が私のショートパンツ、シャツ、オーバーオール、雑巾、布巾などなど、それにトランクと素晴らしいナップサックを盗んでいったのだ。ここに来て彼は出発しなければならないと話した時なのだ！それに10ギルダーももらったのだ!!これは私にとってかなりの打撃だ！彼は私が全面的に信用していた人だったのだ。

ヒューセン

1944年3月1日

片付けている最中に、マリオンはハンスのシャツとエーリックのシャツとズボンが開いたタンスからなくなっているのが見つかる。これはカルト - ジョンゴスのしわざだろう。彼は今病気で、私たちはもう戻ってこないことを心から願っている。ハンスは今タンスの積み替えをしている！マリオンが食後、トゥルース・リンケルの鍵なしの手提げトランクから子供服とおそらく他のものもなくなっているのをみつけたのには止めを刺された。このトランクは風呂場とマリオンの寝室の間にあるガラクタ部屋にあったもので、だから下男にとって簡単に手が届くものである。これもカルト - ジョンゴスのしわざなのだろうか？だんだん気持ちがくじけてくる。

²⁴⁴ Vrouwen Automobiel Corps（女性機動隊）。

ヒューセン

1944年3月2日

カルト - ジョンゴスが残念なことにまた中に入ってくる、きっと給金をもらうためだ。みんなもカルトに関しては取り乱し憤慨している。でも私たちはまだ今のところすべて我慢しなければならない。

ヒューセン

1944年4月5日

私たちの家の下方には2人の貧しく哀れな人たちがいる、老いた人と若い人。彼らはゴミをあさる。ファン・ブラムセン氏がいくらか食べ物が入っているブリキ缶を下ろすと、またたく間に全部きれいになくなる。そうすると彼はまたガブレック粉[キャッサバ粉]を満たし、私は彼らにそれぞれ5セントづつ与える。彼らはやせ細っている。年老いた方はひどい咳をし、少年は芝の上に痛々しい顔つきで寝そべっている。そしてこのような人たちがパサールには列をなしている。彼らはみんな小さなティカール[竹で編んだマット]と汚れた布を身体に巻いているだけ。見ているとぞっとするほどだ！私たちはまだなんと恵まれていることだろう！

ヒューセン

1944年4月25日

ファン・ブランセン夫人が急に新しいバブを欲しがっている、なぜなら自分でしなければならないことが多すぎるから！「多すぎる」なんて私には分からない。彼女がしている唯一のことは、赤ん坊の世話とバブの傍にすわって料理しているのを注意してみているだけ。その他はまったくなし。このバブは料理が出来ないと彼女はこぼしている、でも彼女が赤ん坊のために中央市民医療施設に行った際、私たちは時間通りにおいしく食事をしている。素晴らしく繊細でないにしても（でも彼女自身でもできないことだ）。彼女はなにも言う必要がなくても何でもするバブを持つべきなのだ。そうすれば彼女は寝そべってぶらぶらすることが出来るから。

ヒューセン

1944年4月27日

2人目のバブが手伝いとして来る！彼女も住み込み！だから風呂場などに関してはなおさらもう少し気をつける必要がある！彼女たちは階段の横の踊り場で寝ることだろう、なぜなら私の隣の小部屋は幸いスペースが十分でないから。だから奥さんは望みがかない、これからは休息に甘んじることができる。でもおそらく部屋や風呂場がいくらか掃除がなされることだろう。私の下宿代もだから十分らしい！

ヒューセン

1944年7月18日

3時に刑事が、いったい誰が今この家の家長なのかと聞きに来た、というのはファン・W夫人が何かおかしいと自分で申し出たからだ。Q夫人は賃貸し票を見せ、だから確かだ！彼は長話をし、スタルトなどが第2班から第1班（私たちの警察班）に移されたことや、彼がいいボスだということなどを話した。

ヒューセン

1944年9月8日

ミレ・ファン・ウーシックが、現在政権がインドネシア人に委譲されたのだから²⁴⁵、今日から9月13日まで旗を掲げる必要があるという知らせを持って帰宅。

ヒューセン

1944年9月9日

「インドネシア・ラヤ」、最初は禁止されていた民族歌が、現在ラジオや通りで鳴り響いている。

²⁴⁶ このお祭り気分はあとどれくらい続くことだろう？

²⁴⁵ いわゆる小磯声明を指している。脚注参照。

²⁴⁶ 「インドネシア・ラヤ」の民族歌は1929年スプラットマンによって作曲された。パタビアの青年議会のために作曲され、そこで初めて演奏された。その後公の民族主義的集会において定期的に演奏されたが、人民にはあまり親しまれていなかった。日本軍はこの歌を民族主義の表明とし禁止していたが、禁止令は1944年9月7日インドネシアの独立の後解除された。（Brugmans e.a., 580）

ヒューセン

1944年9月10日

私たちのアマット[組長]はあまり信用できないようだ。昨日彼は私たちのパビリオンからジャガ・カンポン[カンポン監視]票をマンドール[現場監督]に持っていき、その監視は25セントで買い取った。その後アマットはミレ・ファン・ウーシックのところに行き、同様に25セントで買取、それはアマットがそうするだろうことをすでに予測していたのだ。その後アマット自身が監視をするのだ！昨日、彼の奥さんがここにカンポンの死者のために（他にも）お金を取りに来た、でもスラット[手紙]なしで、それは「彼女の旦那が仕事で時間がなかったから」だ。彼女はいろいろな10セント硬貨を徴収し、今日夫妻はカリウングルに出かける！このように最下級の役人はしている！上級役人は何をしていることか？

ヒューセン

1944年10月13日

13日の金曜日だから今日は何事かが起こるはず！ほら、クミチョウ[組長]アマット（私たちが嫌っている）を通じてパビリオンの住人からQ夫人に対し告発がなされた！彼女たちは、洗濯物のシャツが盗まれたのを彼女の責任だとしているのだ！それでマンドール・サイドと組長が警察に行き、警察班は直ぐに刑事をここに送り込んだ。彼はQ夫人を尋問、オランダ語を話した！彼女はマンドールと彼の第2夫人との喧嘩を説明し、アマットの嘘を論破した！警官はこの件を「くだらないこと」とみなし、私がトイレにいた間に立ち去った。マンドールが帰宅したとき、奥さんがすぐに進み出て、彼があの方夫人にケンカをしかけ、アマットが嘘をついているのを今警官は知っていると言った。この件はもう終わったことだけれど、パビリオンのみんなが出て行く方がいいと私には思える、彼女たちは今7人で住んでいるのだ！

ヒューセン

1944年10月14日

夜、Q夫人はマンドール・サイドと彼の奥さんと長話をしていた。アマットが扇動者で自分を部外者にしがっていることは明確である！彼女たちは今彼を無視している！

ヒューセン

1944年11月1日

マンドール・サイドの奥さん（あるいは家政婦）がパピリオンから永久に立ち去った。現在あと3人の男性、女性がひとりと赤ん坊ひとりが住んでいる。

ヒューセン

1944年11月3日

夜の10時頃、私が部屋で本を読んでいる時に、突然家の前でものすごいのしり声と叫び声を聞く。マンドール・サイドとサラマの喧嘩に首をつつこんだQ夫人をのしる組長の奥さんと他の人たちだ。彼女たちがまったく間違っているというわけではない。私は夫人に何度も彼女たちとしゃべらないよう警告したのだが、夫人のほうはなんでもよく知っていて、サルマと1度話し、彼女がいないときにはまたマンドールと話すのだ。私は立ち入らないことにし、まるで何も聞いていないようにしている！誤解が生じるはずだから！

ヒューセン

1945年1月6日

Q夫人に食事客がある。バチャン出身（彼女と同様）で、漁師の息子でマカッサルにおいて2年間米国の宣教師学校で学び、現在宣教師としていたところを巡回している1人のアンボン人である。彼はヤン・ガブリエルという名だ。彼は本当に神の使命から行動しているという印象を受ける。彼はスマトラやボルネオ²⁴⁷のクブーたちの下での生活を話した。彼は容易なマレー語を話すので、私は良く理解できた。彼は中央ジャワで説教したり働くための許可をもらうために現在このグローテ・ハウス（政庁）にいる。彼はとても開放的で、きびきびしておりかなり育ちがいいようだ。

²⁴⁷ オラン・クブーはムシ沿岸及びバタン・ハリ（東スマトラ）に生活する半遊牧民。政府の努力によりクブーの多くが定住地を得た。ボルネオのクブーはヒューセンによるとおそらくポンティアナック（西ボルネオ）の「クブー自治区」の住民を指している。この地区は当時アラビア出身の「シャリフ」の自治体であった。（G.F.E. Gonggryp, *Geïllustreerde Encyclopaedie van Nederlandsch-Indië* (Ongewijzigde herdruk van de oorspronkelijke uitgave te Batavia en Leiden, 1934, Wijk en Aalburg 1991) 661)

ヒューセン

1945年1月7日

午後、突然驚いて目覚める。ミレ・ファン・ウーシックが、寝室の窓から目覚し時計を取ろうとする盗人を捕らえたようだ。彼はまず一つ殴り、それから組長のところに連れて行った。今、組長がまだかなり病気なので、ルラー[村長]の息子が彼を警察に連れて行く。

ヒューセン

1945年1月8日

あの盗人は、国家法によって40日の判決が下された。

ヒューセン

1945年1月29日

Q夫人は、誰もいないところでこっそりとマンドールの息子からリットル1ギルダ―15セントでブラス[米]を買う。これはきっと喧嘩が始まる！

ヒューセン

1945年4月19日

パラダ・ハラッハップ²⁴⁸が、インドネシアは今とてもよくなり、飢えはもうないし、たくさん衣類もあると新聞に載せた!!! これはあざけり、それとも自分で信じているのかしら? その間にいたるところで騒動がある、そして不満に充たされている。ここだけではない、バンドン人の間でも。

²⁴⁸ パラダ・ハラッハップはスマランの日刊新聞「シナル・バルー」（新しい輝き）の社主兼編集長。

ヒューセン

1945年6月9日

ブックが私に「インドネシア・ムルデカ」²⁴⁹の第1号を持って来る。これもまたイスティメワ[並れたもの]! この時代のあらゆるものと同じように。

ヒューセン

1945年7月5日

事務所でイッチェ・メーヤースがまた失敗をしでかした。今回は中国人に対して。彼はイッチェとヨッピーにもっと感情を抑制するべきだといったのだ。イートは直ぐに怒って「そうよ、あなたたち中国人は簡単に言うわね、あなた方はいい待遇だもの」と答えた。彼はそれに対して静かにそして堂々と「ぼくの弟は収容所で死んだ」と言った。

ヒューセン

1945年7月19日

(日本時間) 1時にピート・Qがかなり頭から出血して帰宅した。…中略… 彼が見つめたので、兵補が銃で殴ったのだと言った。

²⁴⁹ 「インドネシア・ムルデカ」(文字通りインドネシア解放)は、1945年4月1日からバタビアで発行された雑誌である。(Brugmans e.a., 641)

食糧・物資事情及び就労状況

バタビア

ハンベル

1942年3月9日

パパが汽車でNHMの事務所に行きました。全部超満員でした。建物の中に入るのは誰にも許可されませんでした。でも彼は裏口から中に入りました。彼の事務所は全部ひっくり返っていました。昨日T.B.は、彼女の事務所を開いてもよいかと尋ねに警察署に行きました。そこでは通りの見張り番が署長として坐っていました。彼はとても内気でした。彼女は、静かに家にとどまっているよう忠告されました。でも今日、金銭出納係が彼女を迎えに来ました。物資が封印されるかもしれないので、お願いだから彼といっしょに中に入ってほしいと。ヤップがひとり来ました。彼はずうずうしく見廻りました。T.B.は、彼に何をしたいのかと尋ねました。彼は返答せずに立ち去りました。

ハンベル

1942年3月11日

KPMに関する最も新しいニュース。閉鎖されました。夫がここにいる女性はまだヤップのお金を稼ぐことができます。それなら私は、家を閉じてマドゥラ通りの両親の家に行かねば。…中略…まだ2ヵ月は何とかやっていけます。税金はもちろん支払いません、なぜならあなたがないのですから。

ハンベル

1942年3月23日

私たちはお米を買いにパサール・セネンに行ってきました。どこに行ってもお米は手に入りません。原住民は配給票でのみ入手します。いたるところお米を満載したヤップの車に出合います。

ハンペル

1942年3月26日

ラジオを介して、月に30ギルダー銀行からお金を引き出すことが出来ると申し渡されました。ここ以外はどこでもそうです。それは、市長が何かを署名しなかったからです。²⁵⁰ ある人々はバンドンに逃避しています、なぜならここはまだ正常ではないからです。まだすべて閉鎖されています。

ハンペル

1942年3月29日

これはもう真っ赤な嘘。彼らはラジオを介して、原住民にお米がないのはブランダ[オランダ人]が橋を破壊したからだと言っています。彼らが何俵ものお米を積んで運送している車をご覧下さい、全部ヤップたちのためなのよ。

ハンペル

1942年5月29日

以前、彼らはワニ皮のカバンを売るために家々を歩き回っていました。そして今、同じ人たちが、今度はそれらを買戻すために歩き回っています。Dお婆さんは昔カバンを5ギルダーで購入しましたが、現在、15ギルダーで売りました。ヤッペンはこんなものを好んでいるようです。彼らはただ奪い取ります。持ち歩く女性は誰もいません。私も結婚指輪や腕時計は持ち歩きません。彼らは私からは奪い取れません。

ハンペル

1942年6月1日

B. は、友人たち数人と自転車修理店を設立することでいくらか収入を得ていました。彼らは家に自転車を取りに行くことさえします。…中略… ある人たちはとても貧しくただヤップのところ

²⁵⁰ 1942年3月7日、E.A. フォールネーメン市長は日本への忠誠宣誓に署名することを拒否した。バタビアの理事官、2人の副理事官、市長代理及び地方自治財政検査官らも拒否。彼らは刑務所（当初はグロドック、後にストリウスウェイク）に拘禁された。(L. de Jong, *Het Koninkrijk der Nederlanden in de Tweede Wereldoorlog 11a. Nederlands-Indië I*. (Leiden 1984) tweede helft, 1034-1037)

に行って「私を収容して下さい、そこには住むところと食べ物があるから！」と言います。ヤッペンが蘭印からすべて奪い取ります。タンジョンプリオク港にトラックに満載された家具、巻き紙、鉄が運ばれています。私たちが解放された時には、もう何も残っていないでしょう。

ハンペル

1942年6月4日

バンザイ、今日所得税額査定書を受け取りました。696.84ギルダ。1942年7月から12月までの間に支払うこと。明日、私たちには支払えないと言いに行くつもり。おそらく彼らは実際毎日聞いているはず。…中略…H氏は、副収入として家で野菜屋を開くつもりです。彼は、ヤップにそれが可能かどうか尋ねるつもりです。そう簡単には許可されません、なぜなら原住民の競争相手になるでしょうから。彼は訴訟をおこします。さて、彼はすべてをインドネシア語で解決しなければなりません。

ハンペル

1942年6月5日

今朝うちのパン屋が、もう私たちはパンを手に入れることができないと言いました。それでは日に3度お米を食べます、お米もなくなったら死にましよう。

ハンペル

1942年6月12日

誰かがお金を手に入れるために競売をしました。でもヤッペンがそのお金を全部差し押さえました。私たちには収入があつてはいけないのです。郵便為替を送ることはできます、でもお金は占領者あるいはインドネシア人によって横取りされます。なんという状況。

ハンペル

1942年6月16日

すでに3ヵ月間私たちには給料も年金もありません。オランダ人の子供たちは学校にも行けません！蘭印政府が私たちのお金を持ち逃げたので銀行を開くことが許されないのだと彼らは言い

ます。でも彼らはやはり偽札を持っています。²⁵¹ 彼らは人々を家から追い出し、家具を自国に運びます。

ハンペル

1942年7月3日

ここはすでにもものすごくみじめ。大きな家に住んでいる人々さえ。ジェンネ²⁵²ではスープや残り物の骨を無料で貧しい人々に与えています。そこは鍋を充たしに来る人々で満員です。R. は残飯のために週1度行っています。そうすると私たちはたっぷりのスープと犬たちがおしゃぶりする骨をもらいます。…中略… N. は引越してから出るガラクタ屋になりました。顧客1人を連れて行くと私は10%の歩合がもらえます。こうして私もいくらか稼ぐことができます、今はだれもが引越しをしているのです。

ハンペル

1942年7月7日

現在、A. K. は野菜、ジャガイモ、糖蜜などを家々に売り歩いています。このことからいかに緊迫感が増してきたのかがわかります。オランダ人少年たちは、通りを歩きまわり、まるでトゥカン・ジュワラン[物売り]のように「テロル・アシン[塩漬けの固ゆで(カモの)タマゴ]、ジャガイモ、砂糖」などと叫んでいます。彼らが、パサールで売り物の入ったかごをもって坐っているのがみられます。残念ながら彼らからは何も買うことができません、なぜなら原住民より高いからです。彼らの稼ぎはほんのわずかです！でも彼らに仕事があれば、ヤップのところでもそれほど多くは稼げません。私たちにはまた新しいことわざがあります。ものすごく低い値段で買いたい時には「日本人ではないですよ？」と彼らは言います。…中略…

ところでニッポンの信用度に関する面白い話し。T. がKPMの事務所にあるBPMの事務所に行き、いつ給料がもらえるのかと尋ねました。彼女の夫はプラジュで働いたではないですか？これは書面での約束だったのです。彼女はそこで働いていたオランダ人に話しましたが、それはできないと彼はささやきました。彼らは男子をまず働かせ、すべてを盗み見て、知識を得た後に男子を収容所に送り込んだのです。彼女たちはいまだに夫たちがどうしているか尋ねていますが、ニッポンは何も言おうとしません。

²⁵¹ 日本当局は、1941年1月にはすでにオランダ領東インドその他の地域で軍票を印刷し発行するすべしとの命令を出していた。1941年3月に最初の紙幣が出来上がった。(Zwitzer, 35)

²⁵² Jenne & Co. はバタビア、バンドン及びスラバヤに支店を持つ精肉、保存食品、缶詰工場であった。

ハンペル

1942年7月18日

今日、ママは食費を得るために結婚指輪を売らねばなりませんでした。

ハンペル

1942年7月20日

蘭印政府は、なんとたくさんの食糧物資を蓄えていたことでしょう。中国人のお店ではほとんど何も手に入りません。でも街ではいたるところ、歩道の上で原住民がマットに坐って缶詰を売っています。パサール・バルーは、彼らがいるためにほとんど歩くことができません。街中が不潔になっています。彼らはオートメール缶でやぐらを建てています。もちろんとても高いのです。私たちは、その値段で10リットルのお米が買えます。彼らは缶詰1個に95セント求めます。私たちのオートメールの予備はなくなり、今様々な種類のブブール[お粥]を食べています。

ハンペル

1942年7月22日

NHMはお店を設立し、そこでは中国人の店長の下でNHMの原住民店員が働いています。そこでの利益は、NHMの人々を援助するために使われます。薬あるいは医師が必要なら、NHMの誰かのところに行くと「支払いは戦後」!という言葉が載っている手紙がもらえます!…中略… 今日私はパサール・バルーに行く必要がありました。さて、オランダ人の子供たちがお店のそばで自転車を見張っていてもいいかと尋ねているのが見えます。彼らは痩せ細り、蒼白くみえ、破れた衣類を着ています。もちろん私はオランダ人の子供のひとりに見張ってもらい、彼に倍額を払います。

ハンペル

1942年7月23日

あなたがKPMの援助を受けられることご存知? 私たちの住所は知られています。彼らは人々を探り出し検挙していました。あなたは日に75セントもらえます。私はこの件を手配している人を知っています、一度行ってみるつもりです。その他シスターGと牧師様あるいは神父様からの援助を受けている人を見つけました。そして今彼らはそれらを合せて、全部がひとつの財政源になります。

ハンペル

1942年7月28日

Padjak Perang Teristimewa[特別戦争税]²⁵³を受け取りました、全額371.80ギルダで、2ヶ月以内に支払うこと。普通の所得税の額は696.84ギルダ。…中略… T.C.は3月1日に賃上げを得ましたが、今まったくヤップの下で管理されています。そうヤップは天気予報が必要なのです。男子検挙で「Kantor Angin[風力事務所]の男子も、腕章があるにもかかわらず次第に検挙されていきました。だからもちろん災難でした。ヤッペンが彼らが釈放されるよう配慮する必要がありました、さもなければ天気予報が間に合わないからでした。男子たちは、帰宅も数日間許されませんでした。女性たちが食事と衣類を持っていくことは許されました。ヤップは、彼らに中国人から食事を手に入れ、夜は私服で彼らを訪問し、いっしょにビールを飲みました。ある朝、2人の警官が事務所にやって来ました。彼らはもちろんいい獲物を得たと思いました、一度にこんなにたくさんの男子。男子たちが同行を拒否した時、彼らは援軍を呼び出しに行き、そしてB氏はそのヤップに電話しました。そのヤップはすぐにやってきて警官たちを追い出しました。事務所の人々の待遇は王子様のようなものでした。以前は手でパンをごく普通に食べていました。今は特別な時間があるのです。屋外に食卓がだされ、そこでコーヒーが出されます。後から彼らはそれを懐かしがることでしょう。

ハンペル

1942年8月1日

ママは、1日にある金額だけ食費についやします。高くなってしまうと翌日は、食事は少なくなります。

ハンペル

1942年8月15日

丸ぼちのS.は、ニッポンから日に5ギルダ稼ぎます、G.も働いています。彼女たちはみんな一緒に住んでいます。彼女たちはできるだけお金を使わず、残額をKPMの援助資金に入金しています。

²⁵³ 脚注参照（援助に関する）。

ハンペル

1942年8月25日

今晚、スラバヤのL.V. が来てあなたと出会い、あなたがとても痩せていたと言った夢をみました。彼女は、150ギルダー入っていたあなたからの小包を私に渡しました。私は食卓で話した時、両親は「あなたはまたお金のことを考えている」と言いました。この時代お金のことを考えない人がいるでしょうか？私たちはもう長い間バターを食べていません。まだ売ってはいます。蘭印政府はかなりの予備を残していましたが、でも私たちのお財布では高すぎます。今私たちは食事に植物性のバターをミルクの上皮と混ぜ合わせています。おいしいわよ。私たちは朝夕3回に分かれて食事します。A. は5時に、B. と私は6時、そしてピパは7時半に食事します。午後だけいっしょに食べます。

それは、何か購入する際、住所と名前を申し出る必要があることから始まりました。購入が多すぎ、税金を支払っていないと窮地に陥ります。メイドたちにも彼らはいくら稼いでいるかと尋ねています。バブは5ギルダーで、彼女はT.B. のメイドです。アマは4ギルダーといい、彼女はママのメイドです。タスは4ギルダーといい、彼女は私のメイドです。彼女たちはもちろんもっと稼いでいます。

ハンペル

1942年8月31日

R. はコーヒーを販売しています。

ロブスタ	500グラム35セント	利益12・5セント
ルワック ²⁵⁴	500グラム42.5セント	利益10セント
アラビア	500グラム55セント	利益10セント

私は今彼女を手助けしています。私たちは1番に知り合いのところに行き、彼らからまた別の住所をもらいます。私たちはすでにたくさん顧客がいます。利益は全部R. が得ます。コーヒーはW. D. のところから手に入れます。彼女はそのコーヒーをコーヒー売りのところから取ってきます。私たちがやって来るともうすでに用意してあります。私たちは通常のパサールの値段で売ります。そのコーヒー売りは自分で工場を持っていて、私たちは歩合をもらいます。家々をまわる物売りはほとんどトコから購入し、それに歩合をつけて売ります。この場合、価格が高くなるのです。どれくらい彼らが継続できるか興味があります。…中略… ところでR. は、すでに14日間ポンプ

²⁵⁴ ルワックはテンあるいは*Paradoxurus hermaphroditus*のこと。テンの糞の中で分別されたコーヒー豆のコーヒーは最高品質とみなされた。

汲みで私を手助けしています。水道水を使用するのは高すぎます。だから彼女がバケツやじょうろを満たすのです。彼女が必要になるとベッドから連れ出すだけです。

ハンペル

1942年9月1日

私たちはタマゴの取引もしています。売り値は1個3.5セント、私たちには1個当り半セントの利益です。私たちにはすでに数人のために150個あります。でもこれはあまりしたくありません、なぜならリスクがあるからです。タマゴはすぐに壊れます。私たちがタマゴを取りに行っているところの女性は、原住民の下で働いていると言います。彼女から「タマゴなどなど」を売っているという日本語で書かれた手紙をもらいます。署名が下に入っています。だから私たちが捕らえられても、彼らはなにもできないということです。オランダ人はお金もうけのために取引をすることは禁じられています。うれしいことにはその手紙には「タマゴなどなど」と書いてあるのです。だから私たちはコーヒーにも使うことができます。さらに何が加わるかみてみましょう。

ハンペル

1942年9月2日

さて、私は石けんを売ります。B一家のためにしています。値段は1本につき現在18セント。歩合を取るつもりはありませんよ。ものすごい大家族ですから。私は物売りにはむいていないと思います。もう知り合いのところに行く勇気がないのです。最初はR.のためにコーヒー、次はタマゴ、今また石けん。

ハンペル

1942年9月8日

援助金のためにKPMに行ってきました。本当は援助金ではありません。なぜなら私には受け取る権利がありますから。夫はまだKPMの船にのっているのです、と願っています。レンバン通り何番地かのB氏のところに行く必要がありました。彼はうちのすぐ後ろに住んでいるのです。彼はあとで私がいくら受け取ることができるか報せを送ってくれるでしょう。

ハンペル

1942年9月9日

すぐりのジュース	1瓶30セント
ロビ - ロビジャム	40セント[甘酸っぱい果物のジャム]
ピーナツバター	45セント
ハチミツ入りケーキ	50セント、40セント、25セント
ココナツクッキー	250グラム25セント
飾りのないケーキ	250グラム30セント
塩味のボール	100グラム15セント
アセムシロップ	1瓶35セント[タマリンドのシロップ]
カカオ	500グラム90セント
アセムジャム	30セント

これらを私は、現在カジ通り何番地かのK夫人のために売っています。これも歩合なし。それほど需要がないでしょう、なぜならぜいたく品ですから。でもどうなるか試してみましよう！今日はすでにシロップ2瓶、500グラムのカカオとココナツクッキーが売れました。タマゴはおよそ500個、常連のお客に持っていかねばなりません。コーヒーと石けんもうまくいっています。今になっていかに蓄えられていたかがわかります。人々は石けんをかなり蓄えていましたので、まだ今でも数箱あります。他の人々は、石けんは14セントで買えるといいます。でもそれは商標なしの「粗悪な石けん」です。それだと、私の石けんだと1本で十分なのに、同じ洗濯物に2本の石けんを使用する必要があります。それに衣類を損なうこともないのです。でもそんなこと彼女たちは理解しません。

ハンペル

1942年9月10日

私はもう売のをやめます。やはり神経質な叫び声を聞くばかりですから。²⁵⁵ とてもうまくいっていたのに残念です。もうたくさんの固定客を得ていました。その他、KPMがここに来て、私は10月、11月、12月分として120ギルダー受け取りました。だから毎月30ギルダー。²⁵⁶ 予想外です。Z. K. は45ギルダー、他の誰かは20ギルダー（1ヶ月に）です。

²⁵⁵ ちょうど2つの地区のトトック女性が強制収容されるだろうとの通告があったばかりである。このことはオランダ人グループに大きな狼狽をもたらした。「日本人による措置と規定」ハンペルの日記、1942年9月10日参照。

²⁵⁶ この計算は間違い。3ヶ月120ギルダーは月に40ギルダーである。後述のハンペルの日記、1942年11月29日には月30ギルダーが確認されていることから、おそらく4ヶ月に120ギルダーだと思われる。

ハンペル

1942年9月22日

彼らはB氏を連行しました。アサル・ウスル[家系証明書]を探すのに長くかかりすぎたのです。…中略… だから石けんの販売は今のところ続行できません。…中略… 私たちのタマゴ販売も今週は中止。ボスによるとタマゴは電球で検査されるとのこと。彼にとっては厄介なことです。タマゴは検査場に手渡され、彼らが今全部残させると、彼にとっては損失ということ。

ハンペル

1942年9月24日

ものすごく栄養失調になっている女性のためにお金を集めているところです。誰かが彼女に月15ギルダーで特別食を補充しがっています。この人が唯一というわけではないでしょう。大勢が栄養失調で歩きまわるでしょう。

ハンペル

1942年9月28日

また所得税の猶予を求めました。税務署の人はとても親切でした。どれくらい猶予してほしいか、1ヶ月？ 私は「出来るだけ長く」と言いました。今のところ12月30日までで、あとはみてみましょう。でも戦争税はやはり払う必要があります。私は、お金があったら戦争税よりも所得税を支払いたいと言いました。所得税ならお国のためですが、戦争税なら私の主人を撃つ弾丸のお金を払うことになるでしょうから。あとで彼らは私を監禁します。…中略…

ママはまたチューリップの苗を売っています。売らなければやはり盗まれますから。そのほか、彼女は紙を売り、空き瓶を薬局に返却しました。だからまたお金があります。現在彼女は乾いた状態のピーナツバター、サゴ・アンボン、そして色々な種類のジャムを売っています。彼女はそれをW.に売らせています、というのは彼女によると私が歩合を取っていないとしても、私の事業の邪魔になるから。理解できませんね。私なら全額渡して、W.が歩合の金額を取るようにするでしょう。

ハンペル

1942年10月1日

私は戦争税のために税務署に行った人何人かと話しをしました。彼女らは家屋を抵当にしなければなりません。幾人かはそうしましたが、「純血オランダ人には抵当権はありません」と聞かされました。どうすればいいのでしょうか？まだ所有しているものを申し出なければなりません。知人のひとりは、300ギルダーと言いました。すべてを手放さなければなりません。どうして生活すればいいのか尋ねました。収容所に入ることになるだろうし、そこで食事がもらえるだろうとのこと。また別の人、そこでは彼女のラジオと冷蔵庫が持ち去られるでしょう。彼女は家具を売らねばなりませんでしたが、それでも充分でなければ衣類を売る必要がありました。メイドがひとりいることを彼らが知るとメイドを解雇し、全部自分でなす必要があります。家から連行された人々はどうなるのでしょうか？彼らは何も売ることがありません。さて、彼らはいずれにしても私のラジオを接収することはできません、なぜならもうニッポンの手中にあるからです。

ハンペル

1942年10月3日

ほら、そういうこと。戦争税のため税務署に行ってきました。また書類に全部記入しなければなりません。もちろん収入はなし、全くなしなどなど。実際愉快的なものでした。4人の男子が半分ケンカになりました。家具を売る必要があったと言われたのです。ひとりは私に丸印のついた通知を受け取ったかと尋ねました。これは家財がすべてニッポンのものだという意味です。それはそうだったのです。最初の人、それならば家具を売ることが出来ないと言いました。2人目の人は売れると言いました。3人目はまた違うことを言います、すなわち私の場合は違う、なぜなら母親がもらったもので、私のではないからと。また他の人は、私の場合はそうだ、なぜなら1つ屋根の下に同居しているからだ。私が住んでいるガレージは屋根があるとは言いませんでした。さて、いずれにしても11月3日まで延期できます。私は、300ギルダーのうち20ギルダーを支払うと思います、それで私が良心的だということを示しました。

ハンペル

1942年10月8日

私に厄介事が起こりそう。私は配給所で購入します、それはレンバン通りにあります。そこの持ち主はゴロンタロ人、そして奥さんはメナド人です。彼はあなたの家族のことを何でも知っています。²⁵⁷ それに彼は、あなたといっしょに「ニュー・ホランド号」に乗船していました。彼は荷役係です。私は思いました、彼に私が売っている品物のリストを渡せば、あるいは、いろいろ彼のお店で売って助けてくれるかもしれないと。納品する人たちは、彼女たちの望む価格さえ受け取れば、彼は望み通りの価格で売れるのですから。見たことのない誰かがやって来て、そのリストを覗きました。「この石けん、あなたは市場価格より高く売っていますよ」しばらくして「ちょっと電話する必要がある」といいました。私がまず思いついたのは「私のことをケンペイタイに告発するつもりだ」ということです。

それから私はさっそく石けんを納品しているB夫人に話しに行きました、なぜならどうなるか分からないからです。そこで何を聞いたと思いますか？彼女もちょうど知ったところでした。彼女たちを助けている人は仕入れ値で彼女たちに売っていると言いました。さて、彼女たちは彼が石けんの箱を売り値で売って、自分だけがかなりの歩合をとって儲けていることが分かったのです。彼はあきれたことにB夫人に売べき価格を言いました。彼女は書面にはしていませんでした。だからその人がどう対処するか冷静に待つのみです。私の名前と住所は彼らの帳簿に載っています。その上、他の人も関与しています。私たちは、知り合いにだけ売っていると言うことが出来ますが、D一家は家ごと売り歩きました。それはブラダには許可されていません。そうするとコーヒー売りも関与してきます。コーヒーはほぼ売り値で売っています、それでRは500グラム売れるごとに10セントの歩合を得るのです。

ハンペル

1942年10月11日

高い値段を請求した罰は何かご存知？ 戦争が続いている間ずっと刑務所入りです。でも彼は私を告発しないでしょ。あの変な人は彼のいところで、あの店は彼のものだと思います。彼がそのお店のボスです。

時々1人日に1箱のマスコットタバコがもらえます。でも配給所で何か買う必要があります。同様に1週間に250グラムのバター。昨日は葉巻1本余分に買う必要がありました。あの礼儀正しい荷役係が本物のオランダ葉巻をくれようとして、でもそれはあのいところから許されませんでした。それは古い顧客用のみでした。今日は俵型の塩を買う必要がありました。こんなこと本当は許されていません。ニッポンが知ると厄介なことになります。最初のタバコ1箱と3本の葉巻きはピパのためでした、今日のはV.H.に上げました。塩はママが受け取りました。明日またタバコが買えるか見てみましょう。買うと、それらは開封されます。なぜなら、さもな

²⁵⁷ ハンペル夫人の義理の家族はゴロンタロ（北セレベス島）の出身。

ければされに高い値段で売る人がいるからです。時々いい顧客だと、1人1缶のヤシバターを買うことができます。たくさん書類に記入する必要があります、缶は開封して手に入ります。また売りを防ぐためでもあります、なぜならその缶を使用するしかないのです。

ハンベル

1942年10月27日

引越しのための原住民が不足しています、だから今、9才や10才ぐらいの少年たちが原住民の指揮で重い荷車を引いたり押したりしています。この少年たちはオランダ人です。少年たちは明らかにねんざになったり、そして裸足で歩いています。愚痴を言っている1人の少年と話しました。彼のともだちは原住民のパン売りを知り合いで、1日何セントかもらえますが、彼は何ももらう事が出来ませんでした。彼は15才です。昔はオランダ人がパン屋を持っていて「デ・ブラウン一族[インドネシア人]」がそれを配達していたのです。今は反対です。でも母親がヤップを友人にするよりこの方がましです。

ハンベル

1942年10月31日

K.のお姉さんはガス会社で働いています。彼女たちはみんな仕事の前に体操をする必要があります。原住民も、でも彼らはやる気がなく、遅くやってきます。原住民を指揮しているオランダ人は、そのため顔を殴られます。それから自分の場所に戻る必要があります、10分後に解雇という書類をもらうことになる。なんとまあ、こんなふうに働くなんて。朝早く外出すると、オランダ人が列に並んでいるのが見られます、そして小柄なヤップがその日のプリンタ[命令]を与えます。彼の身長はオランダ人の肩までも及ばず、哀れな男たちは彼にへりくだっています。

ハンベル

1942年11月1日

また新たに売っている品物

もち米クッキー	100個40セント
アンボンバナナのもち米クッキー	100個40セント
パイナップルのもち米クッキー	100個50セント
パイナップルの小型パイ	100個70セント

水牛の薄切り肉で作ったせんべい	100個12.5セント
砂糖菓子	100個40セント
ピーナッツクッキー	1個0.01セント
サゴ粉のパンケーキ	1個0.01セント

これはR.が全部売ります。その他、D夫人のためにタオル、大型が1ギルダ―25セント、小型が25セント。大型のはかわいらしい。でも、私はそれを買うのはもったいないと思います。

ハンペル

1942年11月13日

また新しい品物を売ります。H夫人が毛糸で小さな靴下作ります、それは出来上がっていません。そこにはリディ[ヤシの葉脈]から作った3本の編み針が入っていて、ブローチとして使用することが出来ます。それを25セントで売ります。商売はうまく行っています。身につけて売るので。身につけているのを見せる必要があります、さもなければ無用なものです。彼女は注文でも作ります。ある人たちは赤・白・青やオレンジ色の玉をつけてとか、全部オレンジ色にしてとか要求します。今彼女は、鍋つかみを小さくしようとしています。彼女の夫がリディを削ります。

ハンペル

1942年11月23日

なんていやなやつ。今私はある人と取引をしています。彼は大きなお店の店主で、人々が作るものを何でも買い占めます。昨日、靴下を持って彼のところに行きました。彼は人々がどれくらい払ったかと私に尋ねました。私は10セントから15セント、時には貧しい女性のためだから100セント。私は儲けを取っていません、彼女たちを助けているだけですと言いました。彼はすべて1個10セントで買うつもりだ、そして私はもっとたくさん持ってくるべきだと言いました。私はフェルトの動物も持っていました。売り値は50セントと35セント、私たちの売り値です。彼はそれを35セントと25セントで買いました。もちろん、私は35セントの動物をすぐに50セントにしたのです、だから彼は全額支払ったこととなります。誰かが私に人形を売る事が出来るかと尋ねました。彼女は75セントもらいたいと。私はそれで彼のところに行き、2ギルダ―しますと言いました。彼は1ギルダ―払おうと言いました。よし、私はその女性のために25セント余分にもらうことができます。

今朝、私はまたそのお店に行きました。1人の女性が入って来て、その半靴下がかわいいと思い、いくらか買っていました。さて、彼がいくらで売っているのか想像してみてください…。

一足50セントです。だから彼にとって40セントの儲けになります。しかも彼は、支払っている10セントに留め金を加える事を望んでいます。とんでもないことです。私は29足持っていました。だから2ギルダー90セントになります。彼は3ギルダー支払いました。私は彼に貧しい女性のためですから10セント余計に払って欲しいと言いました。とんでもない。私は彼がものすごい儲けをしているのを恥じるべきですとも言いました。フェルトのものも同様に高く売っています。彼は木製のものも店で売りがっています。たまたまひとり作っている人を知っています、それでさっそくその人に倍の値段を求めると言いました。そうすれば本当の値段を受け取ることができます。ほかのお店にも行きました。これらの雑貨をステキだと思いましたが、そのいやな奴がすでにウインドウに飾っていました。彼は私から買ったのだと言いました。自分用にその女性たちはいくらか欲しがりました。私は他の雑貨を売ることができました。上手くできます、なぜならこつが分かり始めましたから。

ハンペル

1942年11月29日

フー、今日はなんてぐうたら。まるで日曜みたい。だから今日販売はなし。毎日本当に何キロ自転車で走っているのか興味があります。聖ニコラスに距離測定器をもらいたいもの。でも聖人は、戦争の危険があってやってきてくれません。私たちは一度数え始め、およそ1日30キロになりました。私はだからまるで太陽の下で働かねばならないオーストラリア人と同じようです。時々私は袖なしのワンピースを着ています。それで私の上腕も日に焼けています。私はヤップたちがいるので冷静ではられません、なぜなら彼らは日焼けをひどいと思うでしょうから。まあ別方向をみるべきです。私の下着ももうなくなりました。綿製品などはどこにも手に入りません。いずれにしても買うためのお金はどこにもありません。今日はKPMから30ギルダーの援助金が入りました。そのうち20ギルダーを、私と犬のトリックスと猫のチェリロからなる家族の生活費のためにママに渡しました。…中略… かわいそうに、オランダ少年たちはほとんど着る物がありません。ズボンだけで歩きまわり、背中が日に焼けて水膨れができています。…中略…

まだなにかニュースがあるか考えてみましょう。一日中自転車に乗っているので、ほとんどおしゃべりする時間がありません。私は服飾品専門店に行き、そこはたくさん買ってくれました。フェルトの小物、そこでは75セントの値段で出ています。彼女は私に1個50セント払いました、だから作っている人が支払われるべき価格です。こつが分かり始めました。今、人形の先生が私のために人形を1個作っています。無料で、なぜなら彼女を無料で助けてあげたから。その人形はボイラー服を着て、KPMの帽子を頭に被っています。白いユニフォームです、でもボタンがありません。この人形はあなたを想像してということです。

ハンペル

1942年12月2日

私は歩合をもらって売ることになります。そう、私は自転車で朝の6時半から夜の6時まで貧しい人のために半死の思いで走り回っているのです。歩合は求めませんでした、すると彼女たちの髪にパーマが当たっている（ぜいたくをしている）のを見出すのです。母親も娘も。それでは彼女たちはお金をもっているはず。今私はみんなからいくらか求めます。あの若いH. は木製品を作ります、彼女は10%今までの分も私に支払ってくれます。素晴らしい。C. さんにも言いました。でも彼女も今までの分を支払うかどうかまだ分かりません。彼女はフェルトも小物を作っています。V. Raのところでは、私は帽子と木靴に自分の値段をつけることができます、彼女たちがそれぞれ75セントと60セント受け取ることができれば。R. からは糖蜜とコーヒーを50セントで買うことができます。K夫人…さあどうなることやら。J. R. はすべて10%の歩合です。S. からは何も受け取れません。Ro. のところも同様。たくさん集金できることを願っています、なぜなら私には思っていることがあるのです。W夫人は収容所の小包に関与しています。さて、家族がここに住んでいないために、もちろん何ももらえない男子がいます。そして私が集めたお金でそんな男子のために石けんやタバコなどを買うとしたらどうでしょう？

ハンペル

1942年12月6日

すでに小包を送る男子がアデッキにいます。Wさんのところに行き、尋ねました。彼女がさもないければ手配することです、今私が代わってすることになります。彼らには、衣類は送れません。なぜなら私は彼らを知らないのです、サイズが分からないからです。彼らにはタバコ、石けん、木靴、オバットゥ[薬]を送ります！昨日C. から歩合をもらいました、そしてそのお金をWさんに渡しました。薬局で彼女の名前で買い、そうすると割り引きしてくれ、だからより多く買うことができます。

ハンペル

1942年12月15日

ママはダイヤモンドの指輪を持っています、私が30才の誕生日にもらえるはずだったのですが165ギルダ（日本円で）売りました。だからまた食糧を買うことができます。そして私が30才になれば、おそらくまた別の時代になっているでしょう。

ハンペル

1942年12月16日

かわいそうなJ. v. R. ! 彼のために大豆ソースと石けんを売のを手伝っています。私は歩合を彼に尋ねました。彼の利益の10%もらえるはずでした。私たちは計算し始め、その時私は10本の瓶あるいは棒状の石けんに対して1セントしかもらっていないことが分かりました。その提案は続行できないと言いました。彼は哀れな様子に見えました。

R. は何か考え出しました。毛糸の西インドの顔人形。35セントで売り、10セントが刑務所にいる戦争捕虜たちのため。かなりたくさん売りました。なぜなら何か目新しいものですか。それを葉巻の箱に入れて、それにはオレンジの幸運と書いてあります。木製とフェルト製のブローチはそれほどもう売れていません、なぜなら町中に出回りましたから。最初のお店がしみったれただったので、もう彼のところに新しいものを提供しなくなりました。現在とても親切な店主が2人います。E夫人がお店においてくれますし、その他V氏とその奥さんはとても優しい人たちです。最初にすばらしいものを申し出できます：サイコロ、ウサギとトンガリ帽子、全部彼のために作ります。でもどのお店にもそういうものがあるのでそれは実行しませんでした。彼は私に他のお店で買い、彼のお店で売つためのお金さえくれました。私の西インドの顔人形も、彼は儲けなしでお店に売つたがっています。なぜなら利益は捕らえられている男子のためだからです。彼の国籍がどこなのか私は知りません、なぜなら彼はまだ検挙されていませんから、でも彼はオランダの名前なのです。

ハンペル

1942年12月19日

1ダースごとでタオルを売っています。でも残念ながら蓄えがほとんどなくなりました。ママは怒って、ずっと愚痴をこぼしています。「家にいなさいよ、私が毎回起きて返答しないとイケないのよ！」彼女たちはみんなここに注文にきます。でも私は販売の残りを止めてしまうわけにはいきません。売ってしまうべきでしょう？そうしないと顧客は別の人に行ってしまうからです。

ハンペル

1942年12月28日

所得税が1943年1月31日まで猶予になりました。でも戦争税に関して、税務署は何も知りません。すでに家財などを取りたてるため執行史が任命されました。私を手助けした人は、まず傍に誰かいないかよく見てからオランダ語で話しました。それは許されないことです。彼は軽減を求める

書類記入を手伝ってくれました。普通でも税金のことは理解できません、マレー語ならなおさらです。

ハンペル

1942年12月29日

まあ、木底靴を売るのは大変です。ここ数日他の小物は全く売れません、というのは木底靴を人々のところで合せなければならないからです。私は1足につき25セント儲けがあります、でもとても重労働です、毎回自転車で往復する必要があるのです。ほかの小物の販売は、もうそれほどうまくいっていません、聖ニコラスとクリスマスが終わりましたから。…中略… 木底靴は飛ぶように売れています。ほら、また目新しいからでしょう。…中略… 私はだんだん自分では売らなくなっています、でもそれを代理人たちに持っていきます、だから仲介人です。

ハンペル

1943年1月20日

ああ、それからF.R.。私は彼女のために帽子を売っているでしょう？約束は彼女が作り、私が売るといこと。1人の婦人が彼女の家で帽子を買いに来ました。私からは誰も私がなんでも取りに行く住所を知らないはず、すぐに商売を取られてしまいますからね。F.R. は仕上がった帽子がありませんでした。その婦人の目の前で1つ作り始めました。さて、どうなるか分かるでしょ。彼女は真似をして、帽子を売るつもりなのです。

ハンペル

1943年1月26日

ある女性たちはぜいたくに生活するためだけにヤップの男友達を作ります、彼女たちはそれを平気で言うのですよ！

ハンペル

1943年1月28日

3月には戦争が終わりますよ！すばらしい！私はまた所得税の猶予を求めるために税務署に行ってきました。彼はどれくらい猶予して欲しいかと尋ねました。私は、戦争が終わるまで、そして夫が帰ってくるまでと言いました。その人は、3月にはすべて終わるだろうから、3月20日まで猶予しておこうと答えました。戦争税には猶予がききません。近々家具を取りに来るだろうという警告を受けました。彼らはBさんのところではもうなされました。どうでもして下さいよ！

ハンペル

1943年2月7日

売り上げはほとんどありません。女性たちはみんな収容所に閉じ込められています。ほとんど全部停止しています。

ハンペル

1943年2月22日

彼らはまた新しいことを見つけました。生活扶助が現在インドネシア人の管理下²⁵⁸になります。彼らはすごく略奪することでしょう。ママは解雇されました。配給所はもう収容所の女性たちに納品することが許されません。どちらにとってもうれしい事ではありません。でもどうして彼らは収容所に入っているのか否か分かるのでしょうか？現在私は配給のジャガイモを売り、それで無料のタバコがもらえます。それは自分用だけで、販売用ではありません。私はタバコを吸わないので、他の人に売っています。

ハンペル

1943年2月27日

私はスラバヤからの木底靴を売っています。ひとりの中国人が私に売るように求めました。それだけで毎日午後には力尽きてしまいます。バタビアの木底靴とは比べものにならないのです！ク

²⁵⁸ おそらくここでは、GESCの援助活動がジャカルタ地方自治体の管理下になったことを指している。これ以降はインドネシア人区長に、誰が援助されるべきかの決定権があることを意味する。「序」参照。

ラマット収容所では、毎日5時私がカワット[鉄条網]に立っているのを知っています。そして戦争捕虜も気がつかないでかなり私の手助けしています。5時ごろになると少年たちを乗せたトラックが3台女子収容所の傍を通り、女性たちはみんな彼らがやってくるのを見るためカワットの傍に立っています。ただオランダ女性は足のサイズが大きく、木底靴は小さな女性の足だけに合うのは残念なことです。さもなければもっと売ることができるでしょうに。…中略… 3月1日から皮靴は買ってはいけないという話しです。オランダ人ですが。それもいいでしょう、木底靴を作るひとはもっと儲けることになるでしょう。ただ素材がほとんど手に入らないのは残念なことです。これはすべてがそうです、でも彼らはまた何かを見つけることでしょう。人々はみんな親しみやすいですよ！それから競争相手。チデンではたくさんの家ごとに木底靴あるいは雨用の帽子、あるいは糖蜜などを作っています。必要なのです、なぜなら全く監禁されていますから外部からは何も入ってこないのです。

ハンペル

1943年3月3日

現在収容所の人々にサンバラン[インドネシア料理用香辛料]を売っています。どの収容所でも注文をするヘルパーがいてそれをカワット越しに手渡すのです。利益は2人で分けます。いくらかの儲けになることを願っています。女性たちは調理する時間があまりありません、だから彼女たちがいくらか注文するチャンスがあるのです。

今日1人の婦人が雨用の帽子を買いに来ました、彼女は日よけ用の帽子を買って帰りました。ブローチはあまり売れていません。たくさんの人が作り過ぎるのです。今私は他の収入源を探する必要があります。ヘアーネット？みんなステキといいいます、でも彼女たちは合せてみて、それから自分で模倣して作るのです。頭にきます…!!!

ハンペル

1943年3月4日

新しい収容所のカワットの傍には立ってはいけません。すでに何度も警官に立ち退かされました。でも彼がいなくなると、またすぐ戻ってきます。でも今日は1人の警官が私の後をオランエ大通りまでつけて来ました。

ハンペル

1943年3月7日

以前はブラウンだったら職を見つけるのが厄介でした。D.H. は、すでに数ヶ月職を探していますが、でもどこでも「ごめんなさい、あなたは白人です！」と言われます。こんな問題も加わります。

ハンペル

1943年3月12日

今日…中略… 私たちはみんな所得税の税額査定書を受け取りました。私たちのところにはいつも名前の下に等級が入っていますが、今はありません。月曜日に行くつもりです。土曜日は全部閉まっているのです。こんなものを送るほど彼らは狂っているのかしら？誰も収入などないのです。そして戦争税に呼び出された人々は、呼び出しに4ギルダ―50セント支払う必要があるのです。いや、こんなこと度を越していますよ！

ハンペル

1943年3月15日

私の査定書を納め、「夫がどこにいるか知りません！」と言いました。彼らがどうするか冷静に待っていきましょう。

ハンペル

1943年3月17日

ママがホフ・ファン・ホラント²⁵⁹の「バーのママさん」を訪問しました。少女たち数人が援助を求めたのです。彼女たちの稼ぎは少なすぎますし、いやな仕事です。ものすごく化粧をし、敵に親しげにする必要があります。ある少女たちは、以前は給料300ギルダ―くらいありましたが、現在はこんな仕事をする必要があります。誰も本名を名乗りません。「バーのママさん」の夫は戦争捕虜収容所にいます。

²⁵⁹ Hof van Hollandは、バタビアのノールトワイク2番地にあったレストラン。

ハンペル

1943年3月20日

執行史が戦争税に私の家具を取りに家に来ました。今は冷静にいつ彼らを取りに来るのか待つのみです。私在家にいればいいのですが。今日私はもちろんちょうど家にいませんでした。ベッドさえも記載され、手放さなければなりません。J.K.によると推定200ギルダー以下のものは対処になりません。私の戦争税は370ギルダーです。ママは家を抵当にしました、でもまだ彼女の順番ではありません。だからあとどれくらい私は家具の中で眠り、いられるのか冷静に待っています。

ハンペル

1943年3月22日

私はまた猶予を求めるために税務署に行ってきました。でも彼らはまず執行史の結論を待たねばなりません。数日たってから戻ってこいとのこと。そう、「デ・ブラウン一族」がなんでも買い占めています。私たちのパダンの隣人は、うちの隣に住み始めた時には何も持っていませんでした、今彼の奥さんはすばらしい鏡台を持っています。知り合いが戦争税を払うために家具を500ギルダーでヤップに売りました。彼はすべて1度に支払い、彼女が10ギルダーを戦争税に支払い、残りは食糧に使うようにと言いました。何も支払わなかった女性たちは全員呼び出しを受けました。10ギルダーを払っておいてよかった。ほかの誰かのところでは、彼らは目の前ですべてを売ってしまいました。彼らが競売をするつもりだという警告さえしませんでした。

ハンペル

1943年3月24日

Kが呼び出されたため、私は彼女のために猶予を求めに税務署に行ってきました。なぜなら彼女の家がここ数日間で接収される順番になっているからです。でも彼らはいつも彼女のところを飛ばし、彼女は神経発作を起こしそうです。書類に関して話すためにまた税務署に行きました。彼らは私の家具を170ギルダーだと見積もりました。皮製の家具や大型トランクさえ含まれていました。200ギルダー以下に見積もられた家具は接収しないと言われていました。私はそのことを尋ねましたが、ナンセンスだと彼らに言われました。ママは私の家具を救うため、家の抵当での借金を増やしました。それを彼らに言いました、そして税務署の人は出来るだけ早く支払始めるべきだと言いました、なぜならすでに私の件は競売になりそうだからです。でも家具を今失うか、それとも近々失うのか、いずれにしても失うのです。猶予というだけです。

ハンペル

1943年3月28日

さて、私の戦争税について。現在銀行から書面で、私の家具が抵当に含まれていることを約束されました。でもそれはもちろん税務署から許可されませんでした。私たちは家具を売ってもよいかどうか自治体に尋ねる必要があります、なぜなら家にニッポナーチャップ[日本のスタンプ]が押されてあるからです。自治体のヤップはそのことを知らず、見に来るとのこと。彼は丸印を破きました。でも家具を売ってもいいのかどうかは書面では約束しませんでした。ステキな家具はなくなります、なぜなら彼らはやはり接收するでしょうし、みにくいものなら、おそらく置いておいてもいいのでしょう。私のベッドも接收されます。私たちは封印されている家具をS夫人に売るプランをたてています。彼女は分割払いをするのです。でも実際は支払わず、戦後に私がすべて取り返すというものです。そして税務署には、私が2ギルダー50セントの分割払いしてもいいのか尋ねるつもりです。私にJ.を指示しないことを願っています。なぜなら彼はすべてを売り、そのお金を税務署に納めるからです。

ハンペル

1943年3月30日

税務署の人は、私が望む金額だけ税金を払ってもいいと言います。ただ私のベッドとシンガポール・トランクは、売る必要があります。彼は土曜日にベッドを買いに来ます。ママは彼と親しくするつもり。お金が必要なので、だから彼は1つ選んでもいいのです。彼は、私のベッドはクロ・ベッドだと思いました。その間、封印された家具をS.に売りました、みせかけですけどね。なんという嘘でしょうね！

ハンペル

1943年4月2日

今私の部屋は空っぽです。緑色のソファは、7ギルダー50セントで売られることが決定。籐製品はすぐ飽きてしまいます。私の書机と洋服タンスの1部はみせかけで、20ギルダーで売られました。備え付き棚の中は25ギルダーで売られました。S夫人の家にそれはあります。そこでは私の家具がきれいなおいてあります、特に赤い大理石の床の上に黄色の壁を背景においてある私の緑色のソファ。書机として、私は母船飛行機と潜水艦²⁶⁰があり、残りは表のベランダにありま

²⁶⁰ おそらくいろいろな家具に名前を付けているのであろう。

す。今ここは本当にみすばらしい部屋になりました。…中略… 昨日KPMの女性が、KPMは援助を停止すると言いました。本当かどうか分かりません。まだ行く必要があります。彼らはとても長い期間続けていたのです。NHMもだんだん少なくなっています。最初は100ギルダー、現在は64ギルダー50セント、そしてなんでも次第に高くなっています。救援が早く来るべきです、なぜならこんなふうでは長続きしません。

ハンペル

1943年4月5日

私たちは衣類を売るのに忙しいです。でも誰もあなたのグレーのズボンとベストを欲しがりません、なぜならジャケットがないからです。3ギルダー50セントのワニ皮のカバンに、私は10ギルダー受け取りました。こんなふうにはここでは少しずつなんでも売られています。

ハンペル

1943年4月22日

「デ・ブラウン一族」の管理下になってから、かなりの援助が打ち切られています。彼らは家を訪問に来ます。犬、自転車、あるいはステキな家具、それともラジオ？があると、援助がなくなります。1人の婦人は、なぜ援助が打ち切られたのか尋ねに自治体に行きました。でも彼らは何も知りません。地区長がきつと全部盗んだのです。彼らには何も任せられません。

ハンペル

1943年5月4日

今日は50ギルダーで金の鎖を売りました。ファン・モーク²⁶¹が外国から、私たちは金を売るべきではない、無価値の紙幣しか手に入らないのだから呼びかけたとのこと。でもその価値のない紙幣で、私たちはやはり食糧を買うことが出来るのです。だから金は売ります。戦争が終わったら、私に金の鎖を買ってください。ここにはあなたの重い金の指輪があります。これも売ってしまうのかしら？

²⁶¹ 副総督及び植民地省大臣H.J. ファン・モークのこと。1942年3月7日、蘭印総督の要請と書面許可があり、彼は蘭印からほぼ最終便の飛行機でオーストラリアに亡命することができた。

ハンペル

1943年5月9日

ようやく新しい自転車の車輪。ヤップのお金で7ギルダー50セントしました。さて、取り返すために、一生懸命働く必要があります。手に入れるのに苦労しました。あのKPMの荷役係で、配給所を持っている人が助けてくれました。そう、私が仲介業で商売をするなら、新しい車輪が必要でしょう？さて、信頼できる人に修理してもらする必要があります、なぜなら私が新しい車輪を持っているのを警官が見たら、2人とも厄介なことになるからです。

ハンペル

1943年5月17日

N. のKPM援助金が打ち切られました。彼女はまだ売ることの出来るステキな家具を持っていました。それから、彼女の従姉妹がまだ働いています。日本軍侵入の際、彼女はおよそ3年間くらい生活できるお金をおろしたと言いました。だからもうすでに援助されているとすると、とても大きなカプリオールをしたことになります。でもすべてが飛びあがるほど高くなったこともあります。KPMは、すべての援助を打ち切るヤップのようです。ミシン、あるいは自転車を持っていると援助はなくなります。まずそれらを売る必要があるのです。でも裁縫者としてお金を稼いでいる人はどうなるのでしょうか？ベッド1台と戸棚1つだけ持っていてもいいのです。そして援助を受けている人は、出来るだけ大勢で同居する必要があります。援助を受けている人は、犬も持つことが許されません。有料で世話をしている犬もだめ、なぜなら収容所の人々のほとんどが犬を外部で世話をさせているからです。

ハンペル

1943年5月25日

1週間ずっとおしゃべりしていません。忙しい、忙しい、ものすごく忙しい。もうすぐここでは神経発作が起こるでしょう。ママは私たちの時間で夜の11時まで糖蜜を作っています、そして甘い嫌な匂いがこもっています。今週はすでにヤップのお金で、25ギルダー歩合として稼ぎました。そして成功すれば、オランダのお金を買うつもりです。ある人たちは縫いあわせ、2枚を1枚にして、あるいは3枚から1枚作り、さらにヤップのお金を得るために売ります。私も今、子供服を売っています。この包みを見るだけでたくさんの子供たちがいてほしいです。1包みごとに25セント利益があります、糖蜜は10セントです。それからトリュフ、半ポンドが5セント。ほんとうにかなり問題です。届けなければならない赤・白・青のブローチの注文が2つあります。ときどき

路上でひっくり返す必要があり、私はそのブローチをズロースの裏につけています。家に帰ってきた時には、1つなくなっていました。誰かが、私が落とすのを見て尾行したらと想像してみてください。そうすると厄介なことになります。でも、まあ今のところ何でもありません。その他、私はコーヒー風味のキャンディーを1つ1セントで売り、10%の歩合をもらっています。まったく死ぬほど働いています。…中略… 事務所にもコーヒーを納品します。かなりの稼ぎになります。戦争が終わった時には、私が売らなかったものはないでしょうね？私は闇市でも取引をしています。そこではたくさん稼ぐことが出来ます、でも危険な仕事です。捕まえられると、チピナン²⁶²に行くことになります。捕まらないようにしてください、解放されたら、私はユダヤ人、アラブ人、中国人全部合わせたやり方を学んだことになります。睡眠中でさえ、私は取引をしながら町中を走っています。

ハンペル

1943年5月26日

また不運な日。ああ、こんな日もあるのです。コーヒー売りのところで注文していました、すると、突然大きな音が聞こえました。「私の糖蜜！」私がまず考えたことです、そしてすぐにカチヨン[街の不良少年]たちの一団が逃げていくのを見ました。まあなんてこと！私の自転車は、ベタベタした糖蜜と壊れた瓶の中で横たわっていました。幸い浴用石けんとマッチは乾いたままでした。さもないと私の被害は過大なものだったでしょう。このほかに、私は今日2ギルダー50セント稼ぎ、毎週の顧客が数人増えました。だから、災い変じて幸となると言えるでしょう。

ハンペル

1943年5月27日

コーヒー売りを介してタオル工場と接触しました。以前タオルはD. から手に入れ、儲けはゴバン[2.5セント硬貨]でした。現在コーヒー売りの名義で仕入れ値で入手することが出来ます。今朝5ダースの小型タオルをダース2ギルダーで受け取りました。売り値は1枚25セント。1時間内にすべて売り尽くしました。本当は10ダース注文しましたが、もうそれ以上はなかったのです。今日の収益はだからちょうど8ギルダー。…中略… 原住民ももう銀行からお金を引き出すことができません。そのお金は戦争に勝つためのもの！貧しい人のためにどこかからお金を引き出し、それがヤップに分かっとうお金は取られてしまいます！援助ももうありません。どうなることでしょうか？靴工場バータと事務所は封鎖されました。ブランダは解雇、お店はかなり長い間続い

²⁶² チピナンは、バタビア南東に位置する犯罪者や政治犯対象の刑務所。(De Vletter e.a., 71)

ていました、その間ヤップが彼らの家から家具を接収しました、なぜならすべてヤップのものだから。

ハンペル

1943年6月4日

新しい仕事がありました。獣医V. d. H. の請求書配達人です。今私は、知り合いみんなに病気の動物たちをそこに連れて行き、現金で支払わないようにと言いまわっています。5%の歩合です。今日は75セントもらいました。でも明日はあまり稼ぎがありません。彼のところは月初めにいくらか稼げるだけです。

ハンペル

1943年6月6日

現在、共同で働いているインドネシア人がいます。私は、彼に家具などを売りたいと思っている人の住所を教え、それで歩合を受け取ります。別の人のためには布切れを探し出します。そうする必要があります、なぜなら私の顧客や、私がなんでも取り寄せる人たちはみんな収容所に行くからです。だから私は与えられる仕事は、すべてを受け入れる必要があるのです。

ハンペル

1943年6月17日

K. G. は現在、20%の歩合でパン配達人になりました。彼女は、同じ仕事をしている原住民にとって打撃になります。プラナカン[印欧人]の子供たちはみんなパンや、お肉、牛乳を配達しています。このようにしていくらか稼ぎ、またすることがあるのです。

ハンペル

1943年6月21日

すでに現在収容所が閉鎖されたのが感じられます。私は水曜日の糖蜜やキャンディーの売り上げが減りました、それは収容所にいる人が外に出てきた時に与えるため、外部の人が買ったものです。…中略… ああ、収容所からのタオル注文も継続しないでしょう。収容所にいる人々に、彼

女たちがすでに持って行き、外出できる水曜日に支払うはずだったバラン[品物]を納品したことによってやはりかなりの損害になります。V. d. H. 医師の請求書で取り返せることを願います、なぜなら彼の手伝いもうなくなりました。でも彼はユダヤ人で、もうすぐ彼も連行されます。

ハンペル

1943年7月29日

私のKPMの援助金が20ギルダーに減少しました、ヤップのお金です。私は9月、10月、11月分を受け取りました。でも副収入で今のところはなんとか生活できます。どうなるかは分かりません。糖蜜販売は平均以下! 私がすでにこのように感じるなら、お店での販売はどうなるのでしょうか? これは収容所から女性が出ることが許されないからです。ほとんどの女性が「ごめんなさい、私は今毎週糖蜜を買えません、なぜなら収容所の女性がもう来ないからです!」と言います。コーヒー、コーヒー風味のキャンディー、トリュフ、すべてです。私は今、アラン[木炭]を売ることになりました。コサンビ、ラバン²⁶³とシャンプール[混合]です。これはカゴに30キロで買い取られ、私は5%の利益になります。どうなるかはまだ分かりません。いずれにしても今週は他のもので10%ほど儲けがありました。75セントのコルゲート練り歯磨きを95セントで売り、4ダースありました。ナセットカミソリ10個入りの箱、それを400箱売りました。すぐなくなりました。10ダースの小型タオルと5ダースの大型タオルが早く来ればいいのに、そうなるのかなりのお金を持つことができますし、3人の戦争孤児たち²⁶⁴にそれぞれパジャマを提供できます。彼らのサイズは知らないけれど、でもサイズを伝えることができるでしょうし、他の人と交換することもできます。

ハンペル

1943年8月15日

私がコーヒーを売っている顧客のひとり、事務所のある部署のチーフです。彼女はオランダ人での管理下と同様厳格なやり方で働きました。でもインドネシア人は何をしたと思います? 苦情をヤップのボスに書いたのです。さて、彼女は解雇され、原住民が代わりに彼女の職に就きました。

²⁶³ コサンビ (Kosambi) とラバン (Laban) は、木炭の種類だと思われる。

²⁶⁴ ハンペル夫人が「養子」にし、定期的に食糧、衣類や薬を与えていたアデックの捕虜3名のこと。

ハンペル

1943年8月17日

1日が終わり、なんと喜んだことでしょう。ひどく忙しかったのです。この世には奇妙な人たちがいます。昨日ある人に糖蜜を納品しました。今朝そこに行くと、彼女はこの糖蜜を交換してもいいかと尋ねました。彼女は、この味が好みではなくすこし試しただけだからだと。そんなことしませんよね？トコでも出来ません。誰かがおいしいと思わないので交換すると考えるだけでも交換しました。家で飲みます！その後コーヒーの顧客に1キロのアラビカを持っていきました、最も高品質なものです。「いりませんよ、私たちは家を出なければならないの、だから自分で飲んで下さい！」と言われました。私は、これにお金を払っているのですよ。そんなことは考えないのかしら？でも幸いほかの人が買ってくれました。糖蜜のお客のところでは、彼らが収容所に入れなければならないので、これが最後だと聞きました。またお客が減りました！食事中に臼歯が折れました。こんなことも加わります。利益は歯医者に行くことになります。でもまあ、結局彼も生活しなければなりませんから。

ハンペル

1943年8月31日

彼らは、まだ就労していたオランダ人を半数解雇しました。数日以内に、男子も女子もそれぞれ収容所に入る必要があります。バー、なんという状況でしょう。このために、3人の顧客を失いました。私が闇市で働くと言ったらビックリするかしら？私たちは生活しなければなりません。捕られ刑務所に閉じ込められたら、ケンペイタイのところでは愉快的ことになることでしょう。

ハンペル

1943年9月23日

税務署の人が昨日、私の戸棚を引き取りに来ました。ママが彼を接待しました。いい人でした。私のキパス[扇子]とタイプライターは見ようともしませんでした。私の衣類は「ビアサ[慣習]」でした。

ハンペル

1943年10月1日

こんなふうにおランダ人がいなくなって、占領が長引くほど街はさびしくなっています。誰に私は何かを売ればいいのでしょうか？でもインドネシア²⁶⁵新年の前の8日間で、私はおよそ数百瓶の糖蜜を売りました。そしてプラナカン[印欧人]は、私のところで収容所にいるオランダ人の知り合いのためにコーヒーを注文し、収容所に入らねばならない女性に持って行ってもらいました。でも現在は収容所への何度目かの大きな移住はありません。私の顧客リストを見ると、「線」が引かれている名前ばかりです。まだ外部にいる顧客は、離れ離れに住んでいて、私は一日中自転車で走りまわらねばなりません。今月はどうなるでしょう？あと数ヶ月で今年も終わります。もう1年これが続くのでしょうか？

彼らはプラナカンが職を得るのを助けようとしています。職業安定所に申し出ると、アサル・ウスルといっしょに申し出る必要があります。G. B. は、初任給35ギルダーで職を得ました。彼らは65ギルダーまで昇給できます。彼らはあまり支払いません！彼女は4分の3インドネシア人の血が混じっているので採用されました。彼女は旧KPMビルで働いています。エレベーターは壊れていますが、彼らは修理しません。彼女は大部屋でヤップたちといっしょに働いています、唯1人の女性です。彼女の仕事は栽培に関してで、この時期ヤップの米収穫はすでに10度失敗し、死亡率が急激に上がっています。

ハンペル

1943年10月2日

KPMの援助は打ち切られました。ケンペイタイに知られ、現在、責任者がケンペイタイに連行されました。J. はまだいるはずですが、幸い帳簿は一致していました。援助金をもらっている人の名前は、全部申し出ました。他の事務所は1943年12月まで給付されていましたが、KPMはすでに1944年2月まで援助金を給付していました。全部返却しなければならないと想像してみてください！

ハンペル

1943年10月24日

私は新たに、タペ・ワイン[発酵させた米あるいはキャッサバのワイン]を一瓶50セントで販売しています。瓶は自分で届ける必要があります。これを携えて走るのはものすごく危険です。発酵

²⁶⁵ 脚注ルバラ参照。

酒のため栓をしてはいけないのです。路上を通り揺れるため、発酵が倍ほど強くなり、瓶が壊れることがあり、破片がおしりにささることになります。今日は私の得意客のK一家を失いました。彼らは収容所に行きます。さて、誰が水曜と日曜に糖蜜3本を買ってくれるでしょうか？そう、日曜日にも私は商売をしていますよ！

ハンペル

1943年10月30日

タバコを買うのも厄介です。幸い私は3つの配給所で私のためにタバコを集めておいてくれる人がいます。でも今は検閲が厳しくほとんどうまくいきません。空箱を毎回渡す必要があり、家の住所と署名をしなければなりません。そして18セントのマスコット1箱と25セントの紙巻タバコ、そして7セントの紙を買うことが義務づけられています。だからタバコより高くなります。さて、11月5日、アデックに閉じ込められている私の男子たちはそれぞれ1箱のタバコがもらえます。10日には紙巻タバコと紙、15日には葉巻です。収容所の男子の外にも、私は別の男子にもタバコを蓄え、彼らは10%チップをくれます。幸い私自身はタバコを吸いません。葉巻はここでは十分入手できます、安価で5本が3セントです。最高品とのことです。

おやまあ、今月の初めは獣医のJ. から請求書をもらいにいくことができません。彼はケンペイタイに連行されました。またもや何%か収入が減ります。長引くほどひどくなっていきます、でも、今年の12月には解放されると思っている人もいます。成り行きを見守ります。ママも働き過ぎで疲れ始めました。自治体の援助²⁶⁶に、人が次第に増え、だから援助金は減少しています。なぜならお金は増えないですし、時間がかかります。考えただけで、もう半死状態でこのような年を過ごさなければなりません。でも、人間は思っているより忍耐強いものです。

ハンペル

1943年11月9日

本当は糖蜜が何本売れたか書いておくべきです、そうすれば戦争が終わってから分かるでしょ。その後は糖蜜には指1本触れません。ママはやはり糖蜜作りを継続するといいます、でも友人と知人に無料であげるためです。まあ、私が自転車にのって運ぶ必要がなければいいですけど。

²⁶⁶ Pertoeloengan Ogang Blanda-Indo Miskin (貧困印欧人への援助) POBIMのこと。「序」参照。

ハンペル

1943年11月18日

昨日以前の第5管区監視のひとりと話しました。²⁶⁷ 彼らはタバコがインドネシア人によって18セントで買い占められ、30セントで販売されているのを知っています。お米はリットル当り8セントで買われ、25セントで売られています。でも彼らは何もしません。でもやはりE.は警官に同伴して人為的な価格上昇の証人として第5管区に行く必要がありました。そしてそのインドネシア人は、彼女の目の前で拷問を受けました。明らかに新しい警官の仕事でしょう。彼らは、民衆と警官との間に友人関係ができないよう絶えず街を交替します。

ハンペル

1943年11月21日

コーヒーの収穫は失敗。ヤップの下ではすべてうまく行くと自分たちでは話しています。でもすべて失敗。米、お茶、コーヒーなどなど、戦争の成果さえも。でもそれでコーヒーの値段が500グラム当り5セント高くなりました。アジア・ラヤ [大東亜]!!! 砂糖入手もかなり厄介です。私たちの糖蜜売りには打撃です。油もありません。現在、ある地域ではジャラックの種 [唐胡麻の種] を庭に植える必要があります。これは油を保持し、6ヶ月後には油のための実をつけます。その時には解放されていることを願います。D夫人は90本の苗木をもらいました。もうすぐすると彼女の家はウタン [森] のど真ん中です！私たちはチーズを食べました。すばらしい、おいしかった！T夫人は戦争前からすでにモデルナ²⁶⁸のお客です。何ヶ月毎にお客はバンドンバターとチーズがもらえます。私たちはチーズ半分をもらいました。人は決して満足しないものです。彼女がバターもくれたらなと思います。バター付きのパンにチーズ！もう1年以上食べていません。マーガリンさえも。私たちはパンにジャムをつけるだけ、私がたくさん稼いだら、100グラムのハムあるいは他のものを買います。でもすべてヤップの味がついています。

ハンペル

1943年11月25日

私が現在販売している品物：

化粧石けん	以前は10セント、現在日本円で1ギルダー25セント
コルゲート練り歯磨き	以前は37.5セント、現在日本円で3ギルダー75セント

²⁶⁷ 「逮捕と家宅捜査」ハンペルの日記、1942年8月3日、7日参照。

²⁶⁸ バタビアのブラウン・コップス通り15番地に所在するバンドン乳業所（ミルクセンター）の支店。

スカイブル歯磨き	以前は???, 現在日本円で2ギルダ―50セント
サンライト石けん	以前は8セント、現在日本円で75セント
口紅	以前は1ギルダ―25セント、現在日本円で12ギルダ―50セント
	などなど。

今私が捕まったら、彼らにはすごい収穫になります。ニッポンのために働く人々は配給票がもらえ、すべて以前の価格で買うことができます。ヤップの下で働く価値があります、でも収入は低いし、殴られます。

ハンペル

1943年11月26日

販売する糖蜜はありません、お砂糖、コーヒーもありません。どうなるか見てみましょう。それでリネンをトゥカン・ボトル[古着回収業者]にいくらか売ります。テーブルセンターくらいの大さの残り布に日本円で5ギルダ―、毛布に20ギルダ―受け取りました。

ハンペル

1943年12月1日

ママは昔ドレスを作る時、布を常に多めに買い、残り布をブクサン[束]にして保存していました。彼女はほとんど売ってしまい、日本円で200ギルダ―を受け取りました。彼女はすぐにそのお金を持ってパサール・セナンに行き、財布をなくしました。幸い日本円で200セント入っただけでした。人々はテーブルセンターからもすでにドレスを作ります。とてもステキです。そしてハギレからも、ちょうどハギレ毛布みたいです。ただものすごくたくさんの糸を使う必要があります。今の流行はどんなものでしょう？ここでは自分たちで流行のものを作り、工夫して作るものはすばらしいです。縄の靴、クレーブ紙の靴などなど。

ハンペル

1943年12月5日

先週は、あまり利益がありませんでした。たとえば、私は家政学校からトランク一杯の赤ん坊の衣類を持っていました。半分だけ売れました。私の指輪2つも売ります。お米はまた高騰し、彼

らは未熟なお米を売っています、だから栄養価値がありません。そして彼らはヤップにだけ売ることが許されています。デッサでは、外でお米かと聞かれないように袋にスタンプを押しています。さもなければヤップが取りあげてしまいますから。ウビ[サツマイモ]やシンコン[キャッサバ]さえヤップのためです。日本が優先されます。

ハンペル

1943年12月16日

私たちはまたガスがなく、アランも手に入りません。私たちは米の配給票をもらいました。4人で1リットルです。この措置は何の役にもたちません、それともこれは嫌がらせ?メースター・コルネリスに住んでいる人はメンテン地区に行く必要があります、私たちはメースターの中ほどまで取りに行かねばなりません。それが1日に1リットルのお米のためなのです。自転車がなかったらどうでしょう。驚くべきことに、私たちはお米の配給票第1番を受け取りました。彼らは明らかにもうこれ以上運搬することができないのでしょうか。

ハンペル

1943年12月20日

ある人のために、売るための金製品を持っていました。測定などして、私は35ギルダー50セント渡すことができるでしょう。お金は今日の午後受け取ることになっています。私は買手にそれを溶解させ、鉛が含まれていて日本円で12ギルダー50セントの価値だとわかりました。その夫人は憤慨しました。彼女は35ギルダー50セント受け取るはずだと。余分に支払うほか何が出来るでしょうか?金のブタも同様でした。でもそれにもう彼女は、100ギルダー受け取っていました。溶解すると、ほとんど金は混じっていませんでした。彼女は奇妙なものを持っています。本当は私にとってひどい状況です。私が「あの人とあの人捕まった」と聞くと、すぐに「また顧客が減る!」と考えます。

ハンペル

1943年12月23日

かなりだまされたみたいですね。金とか宝石を売っているでしょう?ある婦人から売ると宝石を受け取りました。彼女は日本円で2000ギルダーを求めました。さて、私は元宝石商のドイツ人で、鑑識と販売を助けてくれる人を知っています。私は歩合と利益をすべて受け取ってもいい

のです。彼はまさにドイツ人です、でもヒットラーを嫌っています。ここにいるドイツ人は彼を嫌っています、なぜなら彼がオランダ人と反ヒットラー派をよく助けているからです。私は、その婦人がその宝石は2000ギルダールの価値があると言ったことを彼に話しました。彼はちょっと見て、それは2ギルダールなら売れる、なぜならガラスだからと言いました。私には分かりません。だからまたその婦人のところに話しに行きました。彼女が卒倒し泣くかと思いました。とんでもない。彼女が祖母からもらったものでした。やはり金や宝石を売るのは危険です。

ハンペル

1943年12月27日

ママは、以前は2ギルダールで買った女性用ハンカチを1ダース持っていました。現在、日本円にして24ギルダールで売りました。私たちは、さっそく食卓で1ギルダールの鶏肉を食べました。タマゴは今1個7セントです。A夫人は現在、援助を受けている人たちにスープを地区に配る必要があります。彼女は2つの大きなドラム缶に満たされたスープを受け取ります。配った後、まだ残っていたら、私たちにもいくらもらえます。純粹の肉スープです。すばらしい、これが水曜日と金曜日にあります。

ハンペル

1944年1月1日

新年なのに、パンは手に入らないのです。お米は1回分の食事にやっと足りるぐらいもらえます。ウビとシンコンも手に入りません。メルバブ²⁶⁹ではもう10日間屠殺していません、だから肉はなし。私のアラン売りも中止、なぜならアランがないからです。いずれにしても、調理するものが何もないでしょう？野菜も探さねばなりません。でもあと数ヶ月したら、野菜に関しては良好になると思います。なぜなら町中の庭や何も植えていない土地は全部、歩道までも彼らは野菜を植えましたから。ほとんどの動物たちがありがたがることでしょう。

²⁶⁹ Merbaboe-Bedrijven (精肉、魚、牛乳配達、冷蔵食品、パン、ケーキ) は、バタビアのストラウス通り35番地に所在した。

ハンペル

1944年1月31日

配給米では誰もやっていけません、だからその外で買う必要があり、今リットル当り1ギルダー60セント、その上収入はありません。売り手はほとんどみなストライキしています。仕入れ値よりも安い値段で売るぐらいなら、売り物のお米を腐らしたほうがいいのです。パサール・セネンは死んだような静けさになりました。今夜は厳しい夜でした。私は1.5リットルのお米を持っていて、それを突然探すはめになったのです。夜中ずっと探し続け、目が覚めた時にもまだ見つかりませんでした。おそろしい夢。

ハンペル

1944年2月6日

お天気がいいので戸棚に空気を入れようとしていると、夫の時計の鎖を見つけました。金かどうか知りません。それを持って今日の午後、F. のところに行き、S. のところで彼と出会いました。私は彼に道のど真ん中でほとんどキスするほどでした、なぜならこれに87ギルダー70セント受け取ったのです。なんて大金。なんて聞かされたのか分かりませんでした。あなたが後で悲しまなければいいのですが。結局、私たちは食べる必要があるのです。その他、ママは彼女のグダン[物置]を見て、あなたのズボン7本を見つけました。あなたが痩せていた当時のもので、もう着られないものです。毎日1本トゥカン・ロワック[古着回収業者]に売ります。価格は6ギルダーから7ギルダーです。フー、お金を少し持っているのは気分がいいものです。

ハンペル

1944年2月29日

誰かが彼女の誕生日にマッチを贈り、彼女がとっても喜ぶなんて誰が思っていたでしょう。私は2日間で50箱のマッチを1箱30セントで売りました。でもS. は私の競争相手です。ある顧客はマッチが必要にならないよう、彼に電気ガスライターを作らせています。彼は昨日25セントで私のランプを修理しました。

ハンペル

1944年3月4日

また新しい措置。収容所に入っている人や戦争捕虜のバラン[荷物]はニッポンに引き渡すべし。さて、私の夫のは分かりません。そもそも彼はもうたくさんは持っていません。さて、彼のハンカチを売るつもり、パダンから彼が持ち帰ったものです。これは大金になります。新しいハンカチはここでは4ギルダー50セントします。

ハンペル

1944年3月8日

今トコ・マンパンのボスと取引きをしていて、彼から熱心に働いたので缶入りバターをもらいました、なぜなら彼は私が卒倒するのを怖れているからです。本当はヨーグルト療法を始めなければならぬのです。それは止めました、牛乳が高すぎるからです。N. は時々昔の（インドネシア人）遊び友達の訪問を受けます、彼は使用人の息子たちのひとりです。彼はニッポンのために働き、すばらしい小麦粉とお米をもらっています。N. は彼からお米を密かに配給以外で売ることを禁止されています、なぜなら罰が厳しいからです。彼はみんな与えるつもりです。とても親切です。そしてN. は私たちにいくらくれます。その小麦粉はとてもおいしい、外で売っているのはどうしようもないもので、古着の匂いがします。

ハンペル

1944年3月16日

もう何週間もパンを食べていません。配給のお米は1回分の食事にさえ十分ではありません、3回分などんでもないことです。ジャガイモは高すぎます。何を食べればいいのか全く分かりません。あと2ヶ月すると援助者の給付金が終わります。そうすると彼らには何もありません。そして今少年たちを植民地²⁷⁰に送ろうとしています。給付金をもらっている少年たちは、1日30セントで仕事を始めます。街灯は取り去られ、その代わりにジャラックピッテン[唐胡麻の種]を植えています。さて、私はなぜタマゴがこんなに高いのか分かりました。ニワトリやカモのための飼料がないからです。パサールでは毒素を含む地下茎を売っています。人々が集団でシンコンの毒素にやられて死亡しています。

²⁷⁰ 農園企業の作業に就かせることを意味している。この計画は1945年1月になって初めて開始された。（「序」参照）

ハンペル

1044年4月1日

ここでは毎日朝食や夕食を探す生活です。少しのスープとわずかなお米。数枚のビスケットと1本のピサン。そしてそれだけで眠りに就きます。朝はサゴ・アンボンのお粥、あるいはお米、ホン・クウェー粉[小粒グリーンピースの粉]にフルーツを加えたものとコーヒーか水を加えたミルクのココア、やはり一日中空腹です。1時には少しの間だけ満腹します。戦争が終わって、主人が戻ったら、お金があれば衣類をまた買う必要があります。今6枚の赤と青の布巾から、1枚の赤、1枚の青、1枚の青と赤のブラウスを作らせます。それからエプロンを見つけ、今ジャンパースカートになりました。主人のワイシャツ3枚は、ブラウス3枚になりました。古いものでも、今また何か目新しいものになりました。こんなふうが続いていると、朝食用のテーブルクロスをドレスに使うことになるでしょう。今のところは売らないことにしましょう。今週はまた売ってかなり稼ぎました。

ハンペル

1944年4月17日

両親は結婚指輪を売り、140ギルダーを手に入れました。幅の広いものでした。私のも売りましょうか？売ってしまうほうが、戸棚の中で眠っているよりいいでしょう。私の指にははめられていません、抜けてしまうからです。数日前ママは知人から、娘さんに注意を払った方がいい、だんだん痩せていっているからと言われました。私のしているこの仕事では誰でもそうなるでしょう！今何を食べなければならないのでしょうか？パン、お米、ジャガイモ？見つけ出すのは困難です。ビスケットや4分の3がお水の牛乳やコーヒーで太れと言うのでしょうか？それさえ近々手に入れることが出来ません。ミルクは今30セント、以前はリットル10セントでした。1日牛乳1本取ると、1ヶ月に9ギルダー支払うことになり、だから5分の1が牛乳で、5分の4はお水です。白色になればいいわけです。

コーヒー？私の取引きしているコーヒー煎りは、およそ14日前に就業停止になりました。いつまた始めるのでしょうか？彼らは最も長い間就業していたのです。停止になる前の数週間、私は1日2ギルダーの利益がありました。糖蜜売りは、砂糖不足のため継続できません。だからアラン売りだけ。でも以前キロ当たり半セントと売り上げの5%利益だったのが、今はどんな重量でも1かご当たり10セントしか稼げません。コーヒーや糖蜜なしでは、他のものも販売できません。最後に私が売ったのは3ギルダー50セントのドロステのココア缶を12ギルダー50セントで、でもできるだけ10ギルダーを渡す必要がありました。今日中雑誌を読んでいます。おそらく一度はよいことでしょう。バンド・マティ[帯]をして走るのとは全く不可能です、とても重労働です。

ちょうど今、中国人がひとり私に彼のために1個1セントの利益でタマゴを売ってくれないかと尋ねに来ました。タマゴ…こんなでこぼこ道で。ブルッ！壊れたら私が支払わねばなりません、それにとっても不潔です。まずは一晩寝て考えてみることにしましょう。

ハンペル

1944年4月23日

収容所の中でもまだまだ引越しがあります、それは14才、15才の少年たちの手でなされます。収容所外部のブランダやプラナカンが手伝い、収容所内のブランダは愉快だとは思っていません。でもやらせています、というのははさもなければプラナカンはニッポンの兵士にならなければならぬからです。どの少年も1日45セントもらえます、そのうち10セントが彼らの手に入ります。残りは貯金、なぜなら17才になると登録のお金のために150ギルダー蓄える必要があるからです。そしてそれをなし遂げると収容されます。彼らにとって愉快的ことではありません。

ハンペル

1944年4月29日

どれほどの原住民が死亡しているのか興味があります。彼らはこの暑さの中、1日中²⁷¹また大がかりな徒歩行進をしました。私が知っているだけでも2人疲労のため死亡しました。すでに身体は栄養不足、それに疲労が加わります。私は2日間で、2人の遺体が歩道に横たわっているのを見ました。彼らはやつれ果てていました。これが街でごく普通に見られる風景です！

ハンペル

1944年5月14日

また数日コーヒーを売っています。でも今私はコーヒーカンリカ[コーヒー管理課]の管理下です。1ヶ月200キロ売ることができます。でも現在の状況では、1ヶ月300キロ以上売ってしまいそうです。糖蜜販売も全力を尽しています。死ぬほど働いています。残念なことには、私たちにはコーヒーを入れる袋にする紙がなく、コーヒー缶で作業しなければなりません。それは何回もの往復を意味します、なぜなら私のバスケットは小さ過ぎるからです。でもかなりの儲けになります。

²⁷¹ 裕仁天皇の誕生日のため。

ハンペル

1944年5月18日

ゴミはすでに数週間回収されていません。労働者階級がないのです。経済はひどく後退しています、それは通りを見るとわかります。整頓はされています、穴の上にはほうきでひと掃き、いくつかの石や泥を掃き入れてうち固め、それで終わり。

タバコは日ごとに小さく、そして高くなっています。12セントだったものは20セントに、18セントだったものは30セントに、そしてそのために何時間も列に並ぶ必要があるのです。油、お米、砂糖、塩、すべて配給票になります。コーヒーの蓄えもなくなりました。コーヒーは十分あるのです、でも運搬ができないのです。

ハンペル

1944年5月20日

5月19日、こじきがうちの前で倒れ、もう歩くことができませんでした。私たちは彼に食事と衣類を与えました。それから警察に告げるために第5管区に行きました。私は、知り合いでいつも挨拶する親切な警官と話したいと思いました。ブルッ、なんと監視が怒りだしました。「Tida boleh kenal politie[警官と親しくしてはいけない]」とか言いました。彼らは報告書を作るつもり。でも朝、そして午後もそのこじきがまだいました。このような人に食事を与える以外何ができるというのでしょうか？再度第5管区には行きたくはありませんでした。それでもう一人の婦人がそこに行き、長時間そこで、警官がいっしょに来てそのこじきをベチャ[輪タク]に乗せるまでくどくど言いました。彼らが何をしたのは知りません。私にはどこかで死人が横たわっているのをみて電話すると、彼らは何人いるかと尋ねます、そして「ひとり」と返答すると「もっと遺体が増えるまで待て」という答えが返ってきます。1日30人の遺体を回収するのはごく普通のことなのです。

ハンペル

1944年6月16日

新しい流行：ドレスに手で署名させること。数ヶ月前、私はエプロンからジャンパースカートを作ってもらいました。今私は糖蜜、コーヒー、アランの常連の顧客たちにエンピツで署名してもらい、それを色々な色の糸で刺繍するつもり。その目的で、またみんなにいくらか糸を求めました。赤、白、青、そしてオレンジ色。1人の婦人はL.Hollanderという名前。その名は、オレンジ色で私の胸の上にあります。彼女は、すでに私が名前全部をつけてケンペイタイに行くことを

予測しています。幸いみんなすぐにサインしてくれました。売春婦たちはしていません、それこそ私が欲しいと思っているサインなのに。

ハンベル

1944年6月20日

ニッポンはとてつもないうそつきです。私の名前の下には、200キロのコーヒーを入手してもよいと書いてあったのに、私はなんとか100キロ得ただけ。それは受け入れられません。私はキロ当たり5セントの利益のために、死ぬほど働くつもりはありません。キロ当たり45セントの利益で、キロ当たり1ギルダーで売ります。幸い彼らは書類を持っていません、だからチャップ[スタンプ]や商標はありません。私は缶で届けます。私が捕まったら、それは人為的価格上昇のせいでしょう。こうしてみると、私はかなり裕福です。クランブーを売ると100ギルダー得ることができます。私のベッドはどれほどの価値があるのでしょうか？それに私のドレス、35ギルダーから95ギルダーで売れると多すぎます。時々、私は30セントくらいの利益で働いているなんて愚かなものだと思います。すべて売ってしまい、死ぬほど働くのを止めます、なぜなら時々耐えがたい顧客たちがいますから。でも日本のお金は何になるのでしょうか？食べ物を買うことさえできません。アー、もしかして試してみるかもしれません。でも今ベッドに行き、この日を忘れることにします。

ハンベル

1944年6月24日

瓶を手に入れる方法を見つけました。糖蜜は50セントです。そして瓶は、今1本75セント。現在顧客は瓶で支払うことができます。だから納品すると2本の瓶が戻ってきます、私が納入した瓶プラス支払い用の瓶。たくさん瓶が手に入るとは思わないで下さい。どこから彼女たちは手に入れることができるのでしょうか？

ハンベル

1944年6月26日

知人の1人は、人為的価格上昇で4ヶ月の拘禁刑か、罰金400ギルダーを支払わねばなりません。さて、7月1日に彼女は4ヶ月チピナン刑務所に行きます。善良な人たちの中に入ります。

ハンペル

1944年7月2日

今日はこじきの日。だからみんな何かもらえます。うちの前の樹の下に横たわっていたこじきもいました。彼らは、CBZ[中央市民医療施設]でこじきたちの生命をなんとか維持させ、また通りに送り出します。傷はまだ直ってもいませんでした。

ハンペル

1944年7月6日

オー、オー、オー!!! なんという人間のくず、なんという盗人!!! まずママは、彼女の受給者たちにミシンを持っているかどうか尋ねる必要がありました、なぜならミシンをもらえることになるでしょうから。すべて迅速に進みました。さて、今彼らはミシンをみんな奪っています。ほかには言いようがありません…ええ、本当に何と言えればいいのでしょうか？受給者、あるいは受給者でなくても登録料の80ギルダ、あるいは150ギルダを支払わなかった人は、埋葬されません。存在しないのです。それでは死なないことにしましょう。遺体がたくさんできて愉快的なことでしよう。受給者は劣悪の素材で作ったひつぎしかもうもらえないですから。

ハンペル

1944年7月12日

ニッポンはまた慌ただしい。給付金受給者が飼っている犬、猫、その他すべての動物は、昨日連行され、殺されました。おそらく今日の午後か金曜、彼らにスープが恵まれます。ものすごい嘆きの涙だったことでしょう。私はそこにいなくて幸いでした、カザンのことが思い出されますから。²⁷² でもこれはまだ死ぬほど笑える話です。家を接収された知人がました、家の家主たちは賃貸し料をもらえるといううわさが広まりました。彼女は事務局へ。こういうことでした！この数ヶ月間彼女は金額がもらえました。彼女はあれこれサインする必要があり、それから立ち去ろうとしました。「いいえ、奥さん、まだ終わっていませんよ。まずあの4つの窓口に行ってください」彼女はまだもっとサインする必要があるのだと思いました。1番窓口：まあ、あなたはプンダフタラン[登録証明]をまだ支払っていませんよ！80ギルダがなくなりました。2番窓口：彼女は何ヶ月か分の戦争税を支払う必要がありました。3番窓口：またしても税金、お金はなくなっていました。でも彼女は4番窓口へ：そこでは、彼女は覚えてさえいない何かに17ギル

²⁷² 「日本人による措置と規定」ハンペルの日記、1944年3月20日参照。

ダー50支払わねばなりませんでした。だから彼女は来た時よりも貧しくなって立ち去りました。とても意地悪、でも私たちは笑い転げてしまいました。

ハンペル

1944年7月19日

ぐったり疲れている人を見たいなら、私を見てみるべきです。今はまた立ち直っています。一日中寝ていました。ここ数日でおよそ200ギルダーほど稼ぎました。ジョクジャ・シルバーをたくさん手に入れました。H. は1200ギルダー分欲し、そのうち10%の歩合が私の利益です。何度も往復して走り、950ギルダーで売れ、10%は私のもの。それでとても喜びました、なぜなら無駄にお昼寝なしにはならなかったからです。それからイヤリングを200ギルダーで売り、その他のものでも10%の歩合をもらって売りました。でも一番の重労働はコーヒーを運んで走ったことです。これも今は配給票になり、誰もが蓄えたがっています。私はコーヒー売りから（ニッポンに内緒で）100キロもらうことが出来ました。彼が私のために煎り、挽いてくれます。仕入れ値はキロ当たり1ギルダー40セント、私の売り値はキロ当たり1ギルダー80セントです。私が捕まって券を見せろといわれた時のために、キロ当たり55セントの券を1枚もらいました。出来るだけすばやく売ってしまう必要がありました。それが致命的でした。自転車で走るのではなく、早く、早くという追いつめられた感覚にです！警官が私をみつけたら、私はパニックになるでしょう。…中略…

その他、私は65ギルダーの自転車の車輪1つ注文しました。そうしなければ動かせんし、今は私にプレゼントとして車輪をくれる病気の人もいません。数年前には車輪2本が30ギルダーしたのをものすごく高いと思っていたのを思い出します。家では何も言いませんでした、なぜなら彼らは卒倒してしまうでしょうから。でも数日で200ギルダー稼いだら、許されるでしょう！

ハンペル

1944年7月27日

私は今、食卓用家具をスندا通りにある以前の家のパビリオンで売るのに忙しくしています。みんなもったいないと言います、なぜならこの50年くらいはジャティの樹[チーク材]の家具は手に入らないからです。今現在は200ギルダー手に入ります。ニッポンがまだ私たちのために何をもくろんでいるのか分かりません。200ギルダーは持って行くことができますが、家具は持って行けません。ただニッポン円をたくさん持つことになります。誰もがオランダギルダーを保持しています。銀貨はもう何年もみかけません、この半年には蘭印のお金も見かけません。なぜなら私は人から人にニッポン円を使ってしまうために売っています。理解できません。私たちが自分の

国の言葉を書くことが許されていない時に、なぜニッポンのお金に私たちの国の言葉が載っているのでしょうか？M. T. はネズミの被害にあっています。彼女が賢明ならば、餌を与えるでしょう。シンガポールでは1匹のネズミが1ドルで売られているそうです。

ハンペル

1944年9月16日

こじきが解き放たれたパサール・セネンを見てみるべきです。まるでバッタのようです。通りの一方に満杯のゴミ収集車がいました。こじきがそこを通った時にはすべてなくなっていました。彼らは何でも食べます。それに彼らの衣類。ある人たちは何にも身につけていません。彼らは恥じらいさえありません。今朝グループがいました。3人の痩せた裸の男たちが、カチョン[ここでは露天商]で40セントのものを食べていました。彼らはピサン・ゴレン[焼きバナナ]を全部平らげていました。彼らは支払うことが出来ず、そのまま立ち去ろうとしました。彼らは連行されました。拘禁されることを望みます、なぜなら少なくとも食事と住むところができるからです。

ハンペル

1944年9月28日

あのL. E. はなんという人でしょう。彼は登録証明のお金が払えず、写真なしのカードを持っています。さて、彼は潜伏している男たちにそのカードを5度多額で売りました。彼は、毎回カードを無くしたと申し出たのです。現在彼は写真付きのカードを持っています。だから6名のL. E. が歩き回っているということです。

ハンペル

1944年10月7日

援助金受給者のために働いているPOPの女性たちはなんて優しいのでしょうか。彼女たちは、突然給料として1ヶ月12ギルダ―50セント得ました。彼女たちはそのお金を全部貧困者のための募金箱に入れ、子供のいる母親たちに牛乳やタマゴを買うのです、なぜなら自治体からはのお金はごくわずかなものだからです。また新しい名称になりました。²⁷³どんな？分かりません。彼女たちが忘れないようにときどき口ずさんでいるのを聞きます。

²⁷³ 「コンケツ・ジューミン・イインカイ」混血住民委員会のこと。

ハンペル

1944年10月9日

私たちのお米の配給は1人180グラムと減少しています。闇市のお米は、すでに1リットル1ギルダ―80セントで、コーヒーは3ギルダ―50セントします。哀れな私はまだコーヒーをキロ当り30セントの利益で、1ギルダ―80セントで売っています。前には70セントでした。新しいロットはもう少し高く売ります。

ハンペル

1944年10月29日

今月、コーヒーの売り上げは200ギルダ―相当になりました。今はキロごと5ギルダ―で、どんどん売られています。最近のロットの仕入れ値は、キロ当り4ギルダ―50セントでしたが、もうコーヒー売りの蓄えは空っぽです。中国人たちは蓄えていて、今1000%の儲けで売っています。

ハンペル

1944年12月1日

また今ニッポンは何か新しいことを決めました。タバコが現在クミチョー[組長]によって分配されます。これは災難、なぜなら家ごとにいくらかの箱が配られるからで、配給所では1人1週間に2箱もらえるからです。私は毎日どこかの列に立っていました、それに数軒の配給所では友人たちがいて私のためにいくらか隠しておいてくれましたから。このようにして私は1週間に12箱ほど手に入れ、1ヶ月にタバコをまた売りすることによって35ギルダ―以上の利益を得ていました。もうおしまいですが、なぜならクミチョーからは絶対1週間に12箱もらえないからです。これはただ闇取引を防ぐため何か新しいことを試みているだけです。お店はタバコ1箱で2.3%の利益を得、それは現在政府が取っています。

ハンペル

1944年12月21日

誰も今チャテュテン[闇取引]をしようとしません。通りで捕らえられます。愉快的こと、クリスマスや大晦日、新年が来るというのに。さもなくば私たちは今スペッククックがあったはずなのに。想像できます？おいしいバターでつくった一切れ。100グラムのバターは今2ギルダ―50

セントです。私は時々おいしい食事をしたいと思います。私たちの周りには隣人としてニッポン人の愛人たちがいて、彼女たちの台所から匂ってくる匂いといったら、すばらしい。たとえばパンにバターをつけ、その上にハムが、それに香りの良いコーヒーとミルクがあるのはどんな味がするでしょう？ 考えるべきではありませんね。それに忘れてはならないのはリンゴ、ナシ、ブドウなどなど。ジャガイモは今1個11セントします。今はお米よりジャガイモを食べた方がいいのです。お米は高価すぎます。

ハンペル

1944年12月24日

あんな中国人はなぐってやりたいほど。私はまたコーヒーを欲しいと思いました。彼は「なぜコーヒーを売る必要がある？ 今十分な資本金を持っている。待っていれば後でもっとお金が手に入るよ」かなり話し合っようやく50キロ手に入れました、でもキロ当り75セント高くなっています。だから私の売り値は今キロ当り7ギルダー25セントになります。

ハンペル

1944年12月27日

クリスマスは過ぎました。何と私は食べたことでしょう。コーヒーを持っていけばどこでも、何か食べる必要がありました。おいしい食事と飲み物で腹痛がしているほどです。タルトや砂糖菓子を作って売っている人々は、短期間でかなりの利益がありました。それにものに絵を描いている人々。私は顧客を得ることとすべてを運ぶことで歩合をもらっています。占領が長引くにつれ、人々は賢くなっていきます。

ハンペル

1944年12月29日

彼らは私を見つけました。コーヒーを取りに行きたいと思いました、するとずっと警官が私の後をつけているのを見ました。私はやはり配給所「スラムット」に行く必要があったので、そこにまず入って行きました。その警官もそこで自転車から降りました。大抵私は自転車のかごにカバンを置いていきます。その男にすべてひっくり返させてみました。彼は幸い何も見つけませんでした。彼は中に入り、私は飛び出しました。それからすばやくコーヒー工場に入り、飛び出しました。その50キロのコーヒーを家に持ちかえり、また新しいロットを取りに行きました。翌朝が

スが「注意深くしなければいけませんよ。あの警官が窓からあなたを見ていて、あなたがここをひんぱんに訪れコーヒーをチャチュット[闇取引]していると言いましたよ。でも私はあなたが別のことでここに来ているのだと言っておいたよ！」と言いました。X²⁷⁴夫人のせいかしら？ 私は彼女にコーヒーを届けなければなりませんでしたが、でも彼女はお金を持っていなかったのも、明日戻ることになっていたのです。ちょうど彼女のところには戻るなど言われたようでした。ママは彼女のことを知っています。彼女はスパイで、すでに彼女が届け出た誰かによって転倒させられました。私の守護の天使は、私を今回は見放さなかったのでしょうか。いずれにしても今日また1人待ち伏せしていました。幸い私はコーヒーを取りに行く必要がありません。

ハンペル

1945年6月6日

人口調査がありました。バタビアでは人々がどんどん亡くなっています、3000キロのお米を他より以上割り当てる必要があります。今それを追跡する必要があります。配給所では、人々は全重量を与えません。残りを高く売るので。お米はキロ当り2ギルダー10セント、砂糖はリットル当り2ギルダー50セント、塩は5ギルダー。牛乳1本は2ギルダーです。1日私たちは5ギルダーをタマゴに、タマゴは7つのみです。お肉は高く買えませんし、入手できるのは劣悪なものです。やはり栄養価のあるものを食べる必要がありますから。最近誕生日を訪問して鶏スープを一皿もらいました、鶏は30ギルダーします。…中略… 私の結婚衣裳を450ギルダーで売りました。4ギルダー90セントのバータのハイキング靴を数足70ギルダーで売りました。あとでぜったいもう小額では働きません。価格には驚かされるばかりです。以前カティムン[キュウリ]が1本1.5セントだった時には使いませんでした。1本が30セントから40セントしている今一笑わないで下さいー私は顔面のためにキュウリ風呂に入っています。太陽の下をずっと走っているのも、私の顔はまるで固い皮のようです。…中略…

アザ事務所[字事務所]は、人々を助けるためになんでも安く買えるお店を開設しました。「よろしい、なんでも通常の価格で手に入れることができる。自分で運搬、荷車と人員を用意するならば」とニッポンは言います。それは可能です、でもランポッカーズ[略奪者たち]に襲われます、なぜならヤップの護衛がないからです。そして彼らは武器を携えることが許されないのです。まあ、冒険好きの人々にとっては、ワクワクする時期です。

²⁷⁴ これは彼女の本当のイニシャルではない。

ハンペル

1945年7月1日

お米?!? ニッポンはすべて買い占め、誰かがお米を外で売っているのを見つけたら、罰せられます。1人は実例としてパサールで半死になるほど殴られました。お米は1リットル7ギルダー50セントまで値が上がっています。コーヒー売りは、お百姓は農地から1度に数千ルピア分収穫するが、衣類さえ買うことが出来ない、なぜなら無いからで、お金をどう使えばいいのかわからないと言いました。H.の知人はパパイアを売ることによって土地代を払っています。コーヒー販売に関しても、日本はすでに何か考え出しました。すべて1つの工場にします、だから私にはもうコーヒーを手に入れるチャンスはありません。

でも、私は昨日豆のロットをY²⁷⁵夫人に売り60ギルダーの利益を得ました。彼女が文句を言わないことを願います。誰かが私をそこへ送り出し、私は冷淡にも2倍の値段を求めたのです。誰もが彼女が国家反逆者で、ニッポンの高官やドイツ人たちの味方だということを知っています。まあ、すばらしい家を彼女は持っています。彼女は私にひどくニッポンを罵ることで試そうとし、私は「まあ、奥さん、私たちが彼らの立場だったら、同じことをしているでしょうよ」と言いました。それで彼女は黙ってしまいました。

誰かがスリップを探しています。私は4枚持っています、でもまずそれを私たちのトゥカン・バラン[物売り]に見せました。彼は150ギルダー払うつもり、私は250ギルダー求めました。何度もタワレン[交渉]した後、彼に240ギルダーで売りました。なぜならこれを欲している婦人は、この金額は払えないでしょうから。多額のルピアで家を買占める人々がいます。戦争が終わったら住み続けることができないでしょうに。知人のひとは、彼女の家を18万ギルダーで支払われるとのこと。彼女は「いいでしょう、でもお金も戦後に支払って欲しい」と言いました。するとその男は尻尾をまいて逃げました、それは彼の意図ではなかったからです。彼はニッポンの偽札で投資したかったのです。

ハンペル

1945年7月15日

なんと、これは災難です。数日静かにする必要があります。ある人が410リットルのお米と200リットルのカチャン・イジョ[小粒のグリーンピース]を購入し、貧しい人に与えるよう、そのための名前リストといっしょに250ギルダー私にくれました。私は14日間くたくたになるほど自転車で走りました。お金はきれいになくなり、いたるところで幸福そうな顔がみられました。これは私にとって違った積み荷でした。幸い私はどこでも止められませんでした。私は袋に詰めて

²⁷⁵ これは彼女の本当のイニシャルではない。

自転車のかごに入れて運び、それはよくわかりました。それらを私に運んできたジュワラン[物売り]たちにとっても危険でした。彼らは野菜や果物の下に入れて1度に数リットル持つてくることができました。見つければ、バンタム²⁷⁶で働かねばなりません。幸いT. が仕入れの手助けをしてくれました。彼らは汽車ではもう行けません。なぜなら、汽車が止まるとすぐに警官がお米を運んでいるかどうか見るために入ってくるのです。だから、彼らは歩いて運搬しなければなりません。T. は彼女の働きに7ギルダー50セントのソーセージをもらい、私は50ギルダーもらいました。

ハンペル

1945年8月7日

私たちは新しい米配給票を持っています。現在うまく管理されています。私たちはうちの裏にある配給所から取ってくることができ、街の一方から他方まで自転車で走る必要がなくなりました。

ハンペル

1945年8月13日

今日は私の最後のテーブルクロス2枚とそれぞれ6枚ずつのナプキンをつけて390ギルダーで売りました。どういうものでしょう。でもお金はすぐなくなります。大豆ソース1本が4ギルダー50セント。100グラムのバターが11ギルダーします。毎土曜日に私が購入する必要のある男はずっと値上げしています。私たちは、お隣の奥さんからもらえるバターを待つつもり、彼女は結局ニッポナーと寝ています。

バタビア

ポール

1942年10月26日

配給事務所は、雨後の筍のように出現している。現在は、あらゆるものがおそろしく高くなっている。事務所では時々いくらか安く引き渡されている。

²⁷⁶ 10万人のインドネシア人「ロームシャ」たちはバンタン南にある炭坑拡張及び道路や鉄道の支線を新設する必要があった。(De Jong 11b tweede helft, 532)

ポール

1944年2月18日

ジョージ先生とエーフ先生はぜいたくをしたがり、トイレットペーパーを買いに行った。彼女たちが帰宅し包装紙を取り除くと、こんなステキな紙[貼付：汚れた緑暗色の紙]がでてきたのでとてもびっくり。私はこんな紙で私のお…を拭きたくない。この同じトイレットペーパーは、フォンが配達しているパンを包むのにも使用されている。タバコの箱、シール…いずれにしてもすべて紙で包装されているものは、裏側が印刷されているか、タイプされた紙か、裏側が書かれているノートなのだ。すべて紙不足のため！このトイレットペーパーが、なにから作られているのを知りたいものだ。…中略…

[貼付の手紙]

D. J. M. デ・ホント

公証人

バタビア

事務所：フォールライ・ザウト（ジェムバタン・バトゥ）50

電話. B. 187

自宅：ジャワホテル16号室

電話. W. 4337

2603年8月18日

親愛なるポール夫人、

タイプライターに人々がつけたもっとも高い値段は、25ギルダーです。古い型ですので、人々はこれ以上払わないでしょう。どう思われますか？ 私自身が伺いたいと思いましたが、今のところ無一文なのです。私のタイプライターを受け取りましたか？ 私の方に返事をして下さいますか？ そうすれば出来るだけ迅速に対処することができますので。それから、心から宜しくお伝え下さいとのこと。どなたからかはご存知ですよね？並外れて早急に解決しました。彼はとても元気です、ご心配なされないように。

では、お元気で、さようなら。

ルース・ザイルマンズ様宛て。

このルース・ザイルマンズは、ものすごいおしゃべりだと後から分かった。でも彼女は時々楽しい報せを持って来る。彼女はその反対にたびたび生活を脅かすに十分な恐怖を持って来る。…中略…

オリバー、エーリック、ルドルフ、セッドの少年たちはちょっとした仕事をもらった、すなわちボンカレン[自動車の解体]だ。彼らにとってまた肉体労働し、いくらか稼ぐことはとてもいいことだった。ことにゾッピーにとってはとてもいいことだ。私は彼らが午後帰宅するのを見た。汚れ、不潔で臭く、真っ黒な手、でも満足した顔つき。死ぬほど疲れ、それは本当だ、でも何かを成し遂げたという感覚。私たちは熱狂的な話しも聞かされた。

[貼付の受領書]

No. 74

受領 : ジャワ映画配給社
金額 : 50ギルダ (50ルピア)
作業 : 自動車解体

ポール

1944年2月21日

どうすればあなた²⁷⁷に「少年たち」が裸で、さまざまな自転車で忙しく作業しているのをみるのがいかに楽しかったかはっきり分かるように出来だろう。ノールト/ポール会社の作業！残念ながら、この紙に「ノールト」²⁷⁸が「キャンセルされた」としなければならぬのは、この件をさらに悲しいものにする。

[貼付の手紙]

L. S.

自転車の掃除や油を注すことが必要でしたら、当方にお知らせ下さればお引き受けいたします。その他、小さな修理、すなわちタイヤの修繕、ブレーキシューの備え付けなどもお引き受けいたします。掃除及び注油の料金は、

自在輪付きの自転車	1ギルダ25セント
ドラムブレーキの自転車	1ギルダ50セント
逆転ブレーキの自転車	1ギルダ60セント

²⁷⁷ イルマ・ポールは、日記に二人称で語りかけている。

²⁷⁸ 共同オーナーのオリバー・ファン・ノールトが強制収容されたため。

変速装置付き自転車	1ギルダ－75セント
変速装置及びドラムブレーキの自転車	2ギルダ－
修繕及び掃除アトリエ	
……自転車用……	
ノールトポール[「ノールト」はキャンセルと書かれている]	
ジョハルラーン 14番地、 ジャカルタ	

彼らはかなりのお金を稼いだ。オリバー・ファン・ノールトは、40ギルダ－持ってアデッキに行った。彼は、いかにも母親に30ギルダ－を渡した、でもやはり40ギルダ－は40ギルダ－なのだ！ 私たちのお財布にある3ギルダ－50セントと比べてみて！

ポール

1944年6月26日

私は今、緑十字で募金徴収係として働いている。とてもすばらしい！ 様々な人々に出会うことはステキだ。たびたび私たちは最近みられる途方もない人々をみて笑い転げている。

ポール

1944年7月7日

トコは現在どこも同じだ。スレーオイル[レモン草のオイル]、ヘヤーオイル、石けん、ヤギ草の(すぐに壊れる)靴(11ギルダ－から20ギルダ－)。どこでもアブノーマルな価格で同じガラクタを置いている。現在、私たちは1人当たりお米と油4分の1リットルの配給がある。1ヶ月で1本、もしもらえるとすればだ??!! …中略… 価格をいくつか：1メートルの絹40ギルダ－、蚊帳1メートル20ギルダ－から25ギルダ－、24金のゴールドはグラム当り20ギルダ－から26ギルダ－、15リットルのお米は古いキモノと交換、6個の(マニラ)カモが古いドレスと交換されるなど。ジャガイモ1個10セント、大きなニンジン8セント、米はリットル75セント、ガンデット・ピサン2本で15セント、タマゴ1個16セント、塩漬けたまご1個20セント、クティムン[キューリ]1本8セントなどなど。いくらでも続けることができる。

ポール

1944年10月27日

奥さん、緑十字社のために来ました

フォンと私は緑十字のために募金徴収している、これはすばらしく、気晴らしの源泉だ。私たちが行くわす人々といったら！私たちは今、2人とも新しい地区が加わった、募金徴収者が不足しているからだ。私には、ノールトワイク、ライスワイク、ティボルト通りなどが加わった、すべて近いところにある。とてつもない外国人たちと出会う、旧プンドサックあるいはバラス5番地やコメレル沿い。なんと、私たちは笑ったことだろう！この興味ある地区に比べ、私たちの古い地区は、健全な婦人たちばかりで退屈なだけだ。

ポール

1945年1月4日

葉書から

あなたは、私が自慢するわけではなくステキな絵を画くことが出来るのを知っているでしょ！だから12月になった時、私はしきたり通りに同居者のためにまた葉書数枚に絵を画いた。それでそれらを売ろうというすばらしいアイデアが浮かんだ。そして見て、最初の5枚はとてもうまくいって、すぐに50枚の注文を受けたのだ！1時間内にバザーに出した最初の20枚が売れきれた。その他、知り合いからもたくさん注文を受けた。全部でおよそ120枚の葉書に絵を画き、およそ30ギルダ―稼いだ。ステキでしょ？10ギルダ―を貯金し、残りは一部をプレゼントやスリッパなどすでに費やした。たぶんパーマに10ギルダ―、でも今は15ギルダ―かかる。ともかく、どうなることかみてみることにしよう。ワーイ、私が初めて稼いだお金だ！

ポール

1945年2月4日

物々交換が活発になされている。今日は…中略…ワンピースなどを25リットルのお米と交換。交換した婦人は、すぐに（ワンピースを）身につけ鼻高々で立ち去り、私たちはお米を喜んだ。1枚のブラウスは、350ccの牛乳1ヶ月間と交換される。ママと私はすごく牛乳が飲みたかった、でもお金がなかったのだ！でも悲しまないで、ママは2人用の蚊帳を、金銭の足しになるよう500ギルダ―で売りに出した。

ポール

1945年3月16日

ファン・ホイツにて

私は緑十字の看護婦に申し出た。フォンはすでに4, 5ヶ月働いている。私もようやく働くことが出来る。私たちは初任給1ヶ月7ギルダー50セント稼げる。私たちは、8時に中に入り、1時まで働く、4時にまた戻り8時まで働く。私たちが午後休みがあると、2時にまた中に入ってきて、4時か4時半にまた帰宅する。夜勤は夜の8時から朝の8時半まで。私たちはファン・ホイツ²⁷⁹の部署にいる、ぜいたくな部署だ。緑十字は5つの部署を持っている。重病者のためのチキニ、スバン通りの部署、妊婦のための部署、その他ファン・ホイツとTBCの部署。私たちは入った初日からすでに患者たちを洗い、2ヶ月後には注射を打つ。私たちは3, 4週間後に夜勤を1人です。およそ20名くらいの患者の責任を持つ。でもとってもすばらしい！立派な仕事だ!!!

スマラン

ヒューセン

1942年3月9日

朝のうちに、ジャワ空・陸・海軍の無条件降伏の通告があった！私たちはみんな意気消沈し、LBDの医療班はブトゥール[確かに]解散！スタッレフェルト夫人、ファン・デル・ホルスト医師、グートハルト嬢と2人の少女が慌ただしく選り分けや目録作成をしている。昼食後、私たちは残っている少年たちにレインコート、靴、オーバーオールを分配した。彼らは満足して家に帰る。

ヒューセン

1942年3月10日

朝のうちに、少年たちとグダン2を整理し、ヘルメット、ガスマスクなどを数えた。その間ファン・デル・ホルスト医師は、スタッレフェルト夫人と彼女の娘と共に倉庫の中の薬品などを整理。その他、私たちは緑色のネプロハ²⁸⁰でバランを取りに行くために部署を廻り、まだたくさん見つ

²⁷⁹ この部署は、ファン・ホイツ広場のファン・ホイツブルーバードにあったと思われる。(両方とも名称が変更され、それぞれコア広場、タイショー通りと呼ばれた)

²⁸⁰ 1941年度の電話帳によれば、スマランのランドゥサリ/ガン・ヘルツに「ネプロハ及びガレージ」という名のレンタル会社があった。おそらく「緑のネプロハ」はこの「ネプロハ」会社所有の自動車(トラック)を指していたと思われる。「ネプロハ」はジャワ語「ngepraha」で積荷を運送するという意味。(Th.Pigeaud, Javaans-Nederlands Handwoordenboek, Groningen/Batabia 1938 参照)

ける。帰宅すると、私たちの援助を求めに来た3人の中国人がいた。明日300名の避難民が戻って来るそうだ、すべてを失ったか、ランポッカーズ[略奪者]の被害にあった人々などだ。パサール・マラム「工業」ビルには、50名用の非常ベッドなどが準備されている。…中略… 台車の1台で遺体を取りに行く必要がある…。その後、テラスで楽しくお茶を飲む。その他、変わったことは何もない。

ヒューセン

1942年3月12日

ファン・デル・ホルスト医師は、9時に新しい「ガソリン制限」のため「自治体」に行く。…中略… 12時頃に医師が戻り、「医療班」のために5つの許可書を持ち帰る、すなわち661（医師自身）、551（ハオウィング）、1580（ヒューセン）と2台の台車。それから自治体のワゴンも2台もらえるようだ。その他はもう走行禁止になり、運び去られるだろう。私たちの班は正式に認められるはずで、4月1日までは暫定的に活動する。私たちはとても喜んだ、なぜならこの仕事が突然廃止されるのは残念だと思うから。私たちは現在、残った運転手と幹部のために新しいシフト制を作ることになるだろう。

ヒューセン

1942年3月13日

静かな日。「自治体任務」の書類がある車は、すべて最良のガレージを得る、残りは非常ガレージの管理下。12時半、ちょうど食事をしている時、私たちはパンデアン・ランペルの橋まで、利用できる車で避難民を連れて来るようにとの知らせを受ける。…中略… それは成功、数往復で彼らみんなをパサール・マラムに移送した。

ヒューセン

1942年3月17日

C.P.²⁸¹で、ヤップが建物の前で慌ただしく、この建物を接収すると聞く。だからすばやくユニフォームを着て、荷造りを手伝い、CBZ（中央市民医療施設）にそれを持っていく。これにはかな

²⁸¹ C.P.はCentrale Post van de Medische Dienst（医療班中央部署）の略。（NIOD、蘭印日記コレクション IC 89B, J.J.ヒューセンの日記）

りの時間がかかる。その間、引越し中のルート・Bとバニユマニックに行く。荷造りの真っ只中にヤップが後ろに立って、突然台車で走り去ることを禁じる。私はちょうど立ち去るのに間に合った、台車は残ったまま。ウィリー・ブルックハイセンとアブドゥルスラムがこの件をうまく取りまとめ、CBZにかなりたくさん移動することが出来た。

ヒューセン

1942年3月31日

リーンおばさんのところに自転車で行き、彼女に40ギルダーを支払う。まだ年金の件を何も聞いていない彼女にとってちょうど都合がいい。リース・ファン・レネッセ・ファン・Dは、彼女の家にとどまり、下宿代を支払うだろう。エルンスト・ズーフェルクロップもヘルダ夫人と子供のヘンダといっしょに来る予定。

ヒューセン

1942年4月4日

私はその間、郵便本局でヨー・ビスホップにハガキを出し、600ギルダーの郵便為替を待っていたスワーン夫人から、一度に30ギルダーはもらえるが、それ以上はもらえないと聞いた。彼女は、下町へ20度でも行くことさえいとわなかつもり。貯蓄銀行はまだ閉鎖したまま！

ヒューセン

1942年4月6日

現在、ガス工場にいくらか稼ぐため働きに行くジョージ・ホーヴェンと話す！

ヒューセン

1942年4月10日

エヴェリーン・クラーネンドクは、H. R. ボイケルマンの1ヶ月の給料2000ギルダーが、現在900ギルダーに減少したと話す。私たちにとってはとてつもない金額のよう、私たちはすべて節約し、1セントも無駄遣いしないからには！！

ヒューセン

1942年4月17日

リーンお婆さんは、政庁に行き84ギルダある年金から10ギルダしかもらわなかったと、私に知らせる憤慨の手紙を送ってくる。彼女は、この状況をまだあまり把握できないのだ。

ヒューセン

1942年5月1日

大きな郵便局では「貯蓄銀行」の窓口が開いている、でもインドネシア人のためだけ!!まったくインドネシア人は誰一人お金を下しに来ていなかった!…中略… S.H. ラゴネ嬢と話した。彼女によれば、私たちはおそらく月曜日(5月3日)に給料についてさらにくわしく聞くことが出来るだろうとのこと。クランガン20番地の私の家主(ティオ・チュ・ピアン建設会社)を訪問し、家賃の支払を延期してもらった。私はどこかでお金を受け取り次第、支払いに来るつもり。この心配事もなくなった。…中略… 帰宅すると、フリッツ・レーペルがアルジョの古い自転車を売ることが出来ると聞く。これは予想外の収入になるだろう。

ヒューセン

1942年5月4日

クララ・ハオウィंकと私は…中略…リーンお婆さんのところを通過してそこで登録のためのお金を支払うのは最後まで待つべきだと警告し給料を待ちながら立っているインドネシア人で満杯の政庁まで自転車で行く。私が自転車を見張り、クララが会計課²⁸²に行き、そこで彼女のジョンゴス・セコラ[守衛]は、まだ学校がトウトゥップ[閉鎖]されているのでガジ[給料]がもらえないと聞く。私たちももちろん同様にももらえない。…中略… 夜、ラフリュール夫人がちょっと立ち寄り、ガス会社とANIEMはすべてニッポン当局に引き渡されたが、ホーヴェン氏は、まだ副社長としてすごい給料のままとどまっているなどと話した。

²⁸² D局は、中部ジャワ州の賃金「給与」会計課(法務省:教育及び宗教行事)。この部署はウィルヘルミナ広場の政庁に所在した。

ヒューセン

1942年5月5日

クララの年老いた家主ブリーヴェ氏がやって来たのは、ちょうど私たちが朝食をしようと思っていた時だ。彼は、登録料を支払う目的のため、借家人からいくらかお金を取りつけにクリリガン[一巡する]しているところ。電話代から彼に10ギルダー渡す、今のところこれ以上の余裕はない！近々私たちには一文無しになる！それに、本当は私たちも明後日登録料を支払わねばならないのだ！いろいろ話した後、ブリーヴェ氏が立ち去り、私たちは朝食を摂る。…中略… 明日、私は生徒たちを探しに出かける。結果はどうなるだろう？私は稼ぐ必要がある。

ヒューセン

1942年5月6日

クララはブリーヴェ氏のところへ、私は街へ行く。郵便本局にはまた、インドネシア人だけがお金を引き出せると張り紙がしてある。ローゼンタールとヘンネマンのところでは私はかなり歓迎された。リノとマリウスは、レッスンを受ける子供たちを幾人か探してくれるだろう。明日詳しい話し合いに来る。彼らはもう登録を済ませ、リノは、私は彼の第2の母親として彼の登録料の半分を払うべきだと言う！自治体で、私はジャワ銀行あるいは郵便貯蓄銀行から登録料を引き出すわずかなチャンスがあると聞く。そのために「欧州人地区長」、すなわち元市長H. E. ボアッセヴェンがボジョンのソース「デ・ハーモニー」にいる。私は自転車でそこへ向かう。ゲラッツ夫人²⁸³もそこにいて、申込書を記載するのを手伝っていた。それを手に持って私は並び、様々な人々と話す。ベップ・ニーケルクもやって来て、昨晚のプロデット夫人のところでの盗難について面白い話しをしている。私の書類は、我々の「地区長」によって容認された。明日、解答を取りに来ることができる。うまく行けば、私とクララ、リーンおばさんのためにジャワ銀行からお金が引き出せる。次に私はハネケ・ハイマンス女医といっしょにミス・ファン・オールト女医のところへ自転車で行く。ハネケはまだCBZの給料を見ていないと話す！

ミス・ファン・オールトのところでも語学レッスンのため熱狂的に歓迎される。マウト・ファン・オールトは、子供たちを探す努力をするだろう。すでにヘント・リットマンのところドイツ語レッスンをしているグループがある。私はミスを地区長のところへ送って行き、ルート・ビルケンハウエルとリーンおばさんのところを経由し、2時半によりやくびしょぬれでかなり疲労して家に到着。クララはブリーヴェ氏のところではほとんど目的を果たせなかった、なぜなら彼自身が登録に行っていたから。彼は後で電話してきて、何か計画があることが分かっ

²⁸³ J.ゲラッツ夫人は、日本占領前にはスマランの貧困者擁護と地区看護に関与していた。（スマラン電話帳、1941年）

た。私たちは彼の持っているある家に無料で住むことができ、彼の娘が私たちのところに住むなどなど。私たちは、それに応じるつもりはない。

ヒューセン

1942年5月7日

早朝、また下町へ。ソースは人でいっぱい。ようやく「地区長」がやって来て、郵便貯蓄銀行の件はまだなにも決定していないと聞かされる。でも自分のためだけのお金の引き出しは申し出ることができる！英語のレッスンを受ける数人の少女の名前がリストに載っているミス・ファン・オールトのところちょっと立ち寄る。クララは、ユング一家のところにマンピルト[立ち寄る]、私もローゼンタールへ。リノとマリウスも喜んで参加したいと思っている。明日詳細を話し合う…。

5月6日の*Soerabaiasch Handelsblad*²⁸⁴で、午後郵便貯蓄銀行が欧州人のために開かれるが、登録に入用なお金のためだけだと載っているのを読む。これは、私たちのために5月9日土曜日まで延長される。私は、明日預金通帳2冊を持って行くつもりのヘルダ・ゾーフエルクロップに警告する。

ヒューセン

1942年5月8日

登録のため下町へ。…中略… 自治体庁舎は人込みでとても慌ただしい。7日に申し出た人々は、すぐに終わり、実際郵便貯蓄銀行からお金を引き出せる。6日に申し出た私たちは、書類がみつからず待つ必要がある。…中略… ハネケ・ハイマンズは、今日（CBZの）給料半分をもらい、すぐにクララのために登録料を払おうと申し出る。かなりの人込みなどで長時間待った後、3時ごろに私たちの順番になり、私たちは明日戻って来る必要があると聞かされる！私はリーンおばさんの登録料を引き出そうと試みた。それに関しては明日話し合うことになる。 *Soerabaiasch Handelsblad*で今晚、郵便貯蓄銀行がまた欧州人には閉鎖とあるのを読んだ！明日はどうなるか興味深い。

²⁸⁴ 全ての蘭印の日刊紙の中で1刊のみオランダ語での発刊継続が許可された。これは*Soerabaiasch Handelsblad*(スラバヤ商業新聞)であった。1942年5月には、一部オランダ語で、一部インドネシア語で印刷されたが、6月中旬にはオランダ語の部分が消滅した。(De Jong deel 11b eerste helft, 316)

ヒューセン

1942年5月9日

8時半に自治体庁舎へ。そこではすでに人々が群れをなしている。また人込みにのまれる。幸い9時頃に、郵便貯蓄銀行からお金を引き出すことの出来る幸福な人々が呼び出され始める。私は3番、80ギルダー引き出せる！と書かれてある大きな紙をもらう。私はその場から急いで立ち去り、自転車でまだ人気のないボジョンを通り過ぎていく。実際私たちのために窓口が開いているのが分かる。勝利品を獲得し、自転車で戻り、ソースで分割払いができるよう試みているクラアラを見つける。しばらくそこにとどまり、次にクラアラ、フリッツといっしょに登録証を取りに自治体へ行く。12時半に立ち去る、長くかかり過ぎるのだ。私たちの第2管区で試みるつもり。²⁸⁵ CBZを経由して - そこでファン・デル・ホルスト医師が1ヶ月の給料の半分である250ギルダーを受け取ったと話した - ジョンブランに行く。…中略…

クラアラは、4時近くにやっと帰宅、実際登録証の分割払いをできるようにしてもらった。彼女は、ソースでみつけた日本の国歌を私に持ってくる。ウィリー・ブルックハイセンは、お茶の時間にニッポン紙幣10、5、1セントを持って現われた。彼は新しい腕章をもらうことができれば日本の印のある腕章を私にくれると約束した。

ヒューセン

1942年6月3日

5月の間にいくらかのお金が手に入った。今のところ27.50ギルダー。おそらく明日もいくらか。昨日はイエッティ・ドイツが来て、私たちにトランクを保存するよう手渡し、石けん、ウズラ豆などをプレゼントとしてくれた、これは利用価値がある。クラアラは、今日2度目の登録料を支払った。

ヒューセン

1942年6月6日

今日は5月のレッスン料2.50ギルダーを受け取った、だから全部で30ギルダー。クラアラにも良いニュースがあった。おそらく、6月8日月曜日からリース・レーペル以外にも数人の子供たちが1ヶ月合計8ギルダーで、1週間に3回レッスンを始めることができるだろう。もっと増えるかもしれない！

²⁸⁵ 「日本人による措置と規定」ヒューセンの日記、1942年5月9日参照。

ヒューセン

1942年7月2日

私たちは新たな節約を設定した。つまり電話を外し、ガスを止めた。アランの経費が増えるのを防ごうと、現在1日12セントの牛乳を6セントと半分に減らした。これでまたいくらか違ってくる。

ヒューセン

1942年7月5日

リース・ファン・レネッセ・ファン・ダイヴェンボーデから50ギルダー借りることができた！

ヒューセン

1942年7月12日

クラアラと私はウィーボルスファン・ヴールコムリートマイヤーのところで食事した。まさに欧州の献立。すばらしい豚肉料理、ジャガイモ、豆料理！アンス・ファン・ヴールコムは私にVACのスカートをくれた、これはうまく利用できる、そして襟を修繕する必要があるだけのブラウスも。彼女はボネファース（バタビア）²⁸⁶で白い綿糸の玉を買い、私は木目細かい靴下（1玉150グラムで彼女は1.10ギルダー支払った）用の白色のきれいな細い綿糸をもらった。

ヒューセン

1942年7月19日

驚いたことに、リーンお婆さんは、家に10ギルダーしかないと話す！だからヨー・ビスホップに手紙を書き、私が家計費、水道代、電気代を支払うと申し出るつもり。²⁸⁷ リース・ファン・レネッサも手助けするつもり、でもリーンお婆さんはこの2人に任せないで、ナカル[悪戯な]にすべて使用人とウルスト[手配]するのだ！彼女は節約したがらない！彼女は、私が彼女のことに口出しするといっって憤慨している！

²⁸⁶ 繊維会社ボネファースはノールトワイク42番地（ウェルテフレーデン）に所在した。ここで人々はテーブルクロス、シャツ、下着、蚊帳チュール、家庭用品などを入手することが出来た。

²⁸⁷ 脚注 リーン・スミスお婆さん参照。

ヒューセン

1942年7月26日

本日、ヨー・ビスホッフからのハガキを受け取る。ハウプが、毎月リーンおばさんのために何か送るだろう。

ヒューセン

1942年8月2日

リーンおばさんのところに行ってきた。彼女はハウプから15ギルダーの郵便為替を受け取った。私は水道、電気代に11ギルダー持って行き、すでに15ギルダーの家賃も支払った。

ヒューセン

1942年8月23日

先週、私の宝石 (!) (ネックレス2つ、ブローチ1つ、指輪、長い留め針) をルート・ビルケンハウエルに持っていき、彼女がトネック一家を介して中国人に売ろうと試みるつもり。多くの女性たちは、エコノミスト²⁸⁸たちの家12軒に置くためにNISに家具を売り、かなりの金額をもらっていた。私にとっては幸い、なぜなら彼女たち数人はまだレッスン料を支払い続けることができる、さもなければすでにまったく文無しだったのだ! …中略…

私はかなり裕福な気がする、なぜなら財産「税」を分割払いし (3期)、所得税と戦争税がまだ滞納しているだけだから。そのために家具が接収されたら、別の人のところに同居する。

ヒューセン

1942年9月5日

タガロンボから来て、私はファン・デーヴェンター学校のポーンストラ嬢と話し、イエット・デ・ラウウェレがそこに宿泊していて、私と話したいとのこと。もちろん、私はそこに自転車で立ち寄り、話の仲間に加わった。イエットは興奮していて、まだお金が十分あり、リングジャティ (チレボン上流) に住んでいる。彼女は、5月10日さらに400ギルダーの給料をもらったのだ!

²⁸⁸ 脚注エコノミスト参照。

ヒューセン

1942年10月1日

私のレッスンは、朝8時頃に家を出て、夜8時15分前に帰宅できるように手配した。すべて時間ピッタリ。合間には何も入れることができない。でもかなりの稼ぎになり、リーンおばさんを助けることができる。

ヒューセン

1942年11月1日

ポップ・ウィーボルスと下宿代を精算した。下宿代は25ギルダーだったと彼女は主張したが、後から彼女は5ギルダー差し引きしていたと分かった、なぜなら私が階下で午後食事をしているから！だから30ギルダー支払った、さらに給仕料2.50ギルダー50、少なすぎると私は思うが。

ヒューセン

1942年12月28日

階下で、私は私の飼い犬ハッピーがとても厄介で、リーンおばさんのところには置くことができないと聞かされる。だから彼女は、今日の午後動物病院へ、それ以外の解決法はない！…中略…レッスンの後、ハッピーのことでコバン通りの動物病院へ行く。1日0.40ギルダーかかる、これは貧しく無一文の財布にはかなりの金額だ。でも今朝マスコット1箱（200本のタバコ）を1.90ギルダーで、ケシリルに抑留されている男子のために買ってしまった。

ヒューセン

1943年1月2日

宝石商ティオ²⁸⁹で2本のネックレスを30ギルダーと7.50ギルダーで売った。さて、これで今月もおそらく何とかなるだろう！あとどれくらい？！…中略…アンス・ファン・ウールコムとボジョンで出会う。彼女はまだ解雇されていない、だからもう1度月給を受け取ることができる！テガロンボではフレディー・ファン・ラインがレッスンから脱退、でも彼を下町のレッスンに加え

²⁸⁹ この店は、スマランのボジョンに所在した「宝石・時計商、ジャワアート‘ティオ’」と呼ばれ、中国人ティオ・リオン・ホウィーの所有物であった。この章のヒューセンの日記、1945年5月25日も参照。

ようと試みる。どの生徒も1人だから。幸いデュ・モッシュの2人の少年たちが加わり、彼らをレッスンに入れることができる！

ヒューセン

1943年1月30日

1日中普通にレッスンをしてまたお金をかせぎ、リーンおばさんの家計に前もって30ギルダー渡すことができる。家賃と税金はあとまわしにする。おばさんはまた、お金は充分あると主張する。彼女は、金額は75ギルダーと言う、でも私が見たいと言うと彼女は「利子」を受け取るはずだからと言う。照合することはできない！

ヒューセン

1943年2月10日

ノッベがルート・ビルケンハウエルに、工場がオイル不足のため就業停止になるので石けんがほとんどないと告げた。

ヒューセン

1943年2月16日

今日まで普通にレッスンをする。このまま長期間続けられることを願う。でもその間用心して「収容所」のためにすべて整え、色々なものを買い込んでいる。

ヒューセン

1943年4月8日

苦勞し長く待った後、バクリは古い領収書の提示と古い電球を引き渡し、1つ、ほんとに1つだけ5ワットの小さな電球を買うことができる。まず、くぼんだねじ山、これは良品1つと交換できる！

ヒューセン

1943年4月20日

今晚はファン・フリート一家で食事。大人4人と子供たち6人が食卓について、まさにお祝いの食事！ファン・フリート夫人はベー夫人からクミン入りチーズをもらい、今それを祝っている！

ヒューセン

1943年5月22日

カルト・ジャガが、30セントの火口箱を私に持ってくる。これは今またかなり使われている。ハンシェがパサールでガスを点けるのに適している硫黄マッチを買った。一日中ウペット[導火線]を燃やしている必要がある、これで硫黄マッチに火を点け、それからガスだ。マッチは、もうほとんど手に入らない。

5月20日の木曜日、ポップ・ウィーボルスとエルナ・リーフヘイトが訪問に来た。ポップは、商業銀行で保管していた彼女の銀が全部なくなると話した。ヘルマンがそのことを手紙に書いたが、返答は何もなかった。²⁹⁰ ポップはヘルマンのことを憤慨。ポップはそれを聞いた翌日、ヘルマンを介せず、自分で日本人のチーフと話し合うためジャワ銀行²⁹¹へ行った。彼女は英語で、「あなた方は何でも盗む。私は両親からのものを何も保存できない。小さなスプーンさえ残っていない」などと話した。彼は彼女を単に荒れ狂わせ、何も言わなかった。私にはとてもそんなふうに屈辱を感じさせることはできないだろう！これは、どんな結果を生むことになるだろう？

ヒューセン

1943年5月29日

マリオンは、エーリックの誕生日に何か買うために「下」へ。多くは手に入らない。

²⁹⁰ ヘルマン・ウィーボルスは、スマランにあるNederlandsch Indische Handelsbank N.V.(蘭印商業銀行)のエージェントであった。

²⁹¹ この章のヒューセンの日記、1944年11月25日も参照。

ヒューセン

1943年6月4日

ルート・ビルケンハウエルがやって来る。彼女は私の腕時計を持って行く。ノッベがそれを売るつもり、でも少なくとも50ギルダ―は支払われるべき。…中略… ニッポン人エコノミストは現在1日2リットルのガソリンがもらえるだけで、豪華な車を走らせている人はほとんどいない！…中略… テオ・バウマンがレッスンは受けることができないと言いに来る。彼の母親が彼とヨーピーといっしょにプルウォケルトに行く許可がもらえたからだ、そこで彼女らは会社のバランのウルスン[手配する]をする。

ヒューセン

1943年6月6日

リンケル夫人はチマヒにいる彼女の夫（戦争捕虜の将校）から10ギルダ―の郵便為替を受け取った、これは彼の5月の給料だ！²⁹²

ヒューセン

1943年6月8日

トースが5時半ごろ、またここに到着。彼女はチマヒの夫から15ギルダ―の郵便為替を受け取った。マリオンも1度もらえることを願う！²⁹³

ヒューセン

1943年6月16日

マリオンもちょっとトース・ボーンのところへ立ち寄る、彼女はまだ家において、バランを売ろうとしている。400ギルダ―した冷蔵庫に、アラビア人の1人は、75ギルダ―の値をつけようとする。それに応じるのはもちろんナンセンスだ！

²⁹² 戦争捕虜の将校は日本軍から俸給を受け取る権利があった。大将、海軍大将クラスは月550ギルダ―、中尉クラスは月71ギルダ―に及んだ。この金額から食費、住居費として60ギルダ―差し引かれ、一部が（10ギルダ―から30ギルダ―まで）現金で支払われ、残りは日本の銀行に預金させられた。ジャワに居住していた戦争捕虜将校の家族は、1ヶ月家族1人につき15ギルダ―をこの預金から引き出すことができた。一般的に適応されたかどうか確かではないこの措置は、1943年11月に終了した。（De Jong 11b tweede helft, 602-603）

²⁹³ 彼女の夫も戦争捕虜の将校だった。

ヒューセン

1943年6月25日

12時頃、雨の中ルート・ビルケンハウエルが来る！1日中天気はぐずついていた。彼女は、ノッベが私の腕時計でもらった75ギルダー (!) を持ってくる、私は50ギルダー求めただけなのに！これはまた予想以上。私は、7.50ギルダーをノッベ（彼は確かに報酬を受けるに値する！）に、5ギルダーを7月分のハッピーの世話代として、今すぐルートに手渡す。その他、ルートは私の誕生日のために自家製のクッキーを持ってくる、彼女がそのことを覚えていたとはすばらしい！

ヒューセン

1943年7月4日

現在まだ働いている欧州人トトック[純血]が12名いる、つまり銀行で5名（ウィーボルス、ヒューゲンホルツ、マーセン、スターテマイエル、ホーヴァールス）、ファン・レーウエン（スマラン・蒸気船-プラウ船運輸会社）、ヴォーター、ピート・ファン・オールト、ステーネケル兄弟（コーヒー協会）、デ・クライガー（カリウングの砂糖工場試験農園）、ホイベル（農園）、ゲールロフス（ジャワ木材）、そしてファビウス技師。その他ヒュガイ・フォス（試験場）とT.ホルスヘイマー（ヒュガイの家事手伝い）。

ヒューセン

1943年8月3日

マリオンは所得税の勧告を受け取った、そしてこの件は今朝すぐに手配された。

ヒューセン

1943年8月20日

食事の後、新しいメガネの取っ手が1つ壊れる。テープと添え木で修繕する。

ヒューセン

1943年8月30日

マリオンはお金の換金といくらか買い物をするため下町へ。国庫からはもうほとんど小銭を得ることができず、あるとすれば壊れているものすごく汚れている。だからマリオンはギルダーと、それより高い価値のあるものだけを持って行く。彼女はその他トコでも換金を試みる。ペコジャンで1個0.25ギルダーの小さな南京錠を10個買うが、そのために名前、住所などを申し出る必要がある、それ以上売るとは許されない。その他、彼女は筆記用の石盤（0.50ギルダー）と3冊のノート、薄いでも良質の紙、本当は清書用の紙（1冊0.18ギルダー）を持って帰る。私のメガネ用の新しい枠も、彼女は私に払わそうとしない。だからちょっと待ってからにしよう。

ヒューセン

1943年9月19日

荷造り、整理、リフォームが上手くなる。ハンシェは古いパジャマから作った新しいブラウス、父親の古いズボンを見直して新しいズボンを持っている。23年前マリオンの母親が編んだ古い毛糸のジャケットがほどかれ、新しい絹糸を通してベストを編む！とても古い衣類は細長く切断され、また縫い合わされて床の絨毯にかぎ針編みされる。

ヒューセン

1943年10月3日

占領が長引くほど値段は高くなっていく。使用人たちももうこれ以上買うことができない。以前は60セントのジャケットは、現在3ギルダーかそれ以上。簡素なカイン[巻きスカート用のパティック布]は以前1.50ギルダーだったのが、今は7.50ギルダー。食糧も同様。お米はほとんどもう手に入らない。数ヶ月前マリオンは、ハッサンを介して1袋を12ギルダーで買った。昨夜ハンスは、彼のところで14リットルを10.22ギルダーで買った。おそらくマリオンはもう1袋入手できるだろう。どれくらいになるか私たちにはまだ分からない。ピフテキはカティ[600グラム]当り1ギルダー。私たちは現在以前よりわずかなお肉しか食べない！ジャガイモはほとんどなく、少し前にはカティ当り27セント要求していた！！マリオンは、最近まだかなりタワレン[値切る]して17セントで買うことができた。彼女は、特別な日に変化をつけるために保存している！タマゴは最初10個で29セントだったのが、今は1個5セント（もちろん鶏の病害のせいでもある）。トマトはまた前より多く手に入れることができる。私たちは今すばらしい、1個1.25セントするトマトがあるが、彼らは小さいトマト1個でさえ2セント請求する！パサールではほとんど手に入ら

ない! 私たちはすべての靴や衣類を文字通りすり切れるまで身につけている。新しいものを買うのは不可能なこと。パンとバターはまだ定期的に手に入る。小さなパンが、昔は12セントだったものが20セントである。バター（新鮮な）は250グラム80セント。でもレンス（キースベリーを経由して）では、現在1.20ギルダー要求しているのでその源がなくなる。幸い、ルート・ビルケンハウエルはまだ毎週ランガナン[業者]から小包が送られている。塩は1塊9セント、だからまだいい方。私たちはとても簡素に生活している、でもマリオンは、絶えず変化をつけ常においしく食事し、なんでも充分食べられる方法を知っている。普段の靴は現在1.50ギルダーかそれ以上、だからこれも支払不可能。

ヒューセン

1943年10月5日

今日、私の破れてすりきれたワンピースをまた繕い、大きな布を裏に当てた! 今、ルートのサンダル片方の裏がはがれている。明日修繕しなければ。その間私は絨毯を繕い、どんどんはかどっているし私自身のために靴下を編んでいる、そして粗い編み目の私のブラウスから毛糸の新しいベストを編んでいる、これはマリオンが最近すでにベストを私に編んでいた。

それから価格に関して少し、今日のご飯に豆を食べた。お椀にいっぱい、ちょうど私たちに十分な量、価格は10セント。以前は3セントだったものだ! オートミールは、ほとんどもう手に入らない、でも最近売り手は1缶2.80ギルダー（旧価格は55セント）要求している。お酢はすごく薄めである、もうお酢ではないほど。パサールでは今日ピサンさえなかった! とても大きなパイヤは、今およそ0.20ギルダー（旧価格は3セントから7セント）。

ヒューセン

1943年10月16日

ルート・ビルケンハウエルは今後家賃を払う必要がある、1ヶ月28ギルダー、彼女には打撃である。…中略… アンドレアス・レリカカはハンシェを介して balan - フェント[古着回収者]に楽譜を売らせている、でも私はヘイ・ファン・デル・ホルストのものが数冊あったのを見たので、私はそれを75セントで買った。これはひどいことだと思う。すべて包装紙としてキロあたり35セントで買い占められるのだ。

ヒューセン

1943年10月23日

マリオンといっしょにモーフ夫人からもらったイーストでパンを焼こうとした、でも小麦粉はそれに適さず、残念ながらパンはふくれなかった。でも切ってバターとお砂糖をつけるとなんとか食べられる。カンボン居住者にとっては困難な時期だ。ほとんどお米は手に入らない。彼らは1家族1リットル（サトゥ・メテラン）がもらえるようだ、でもすでに3日間お米はもらえなくて、ウビ、クテラ[キャッサバ]あるいはジャグン[トウモロコシ]を食べなければならない人もいる、それらもあまり多くは手に入らないが。…中略…

今晚（ニッポン時間11時15分）マリオンは、私に悔い改めを勧める説教を施した、彼女によると、私は「殉教者」のようにわずかなお肉しか食べないからだ！私はまず少年たちがお肉やバターや脂肪などを摂るべきだと思う。彼らは成長しなければならないから。私にとっては少なくともいくらか痩せ、だから年としてはみえない（今ほとんど白髪なのは別として！）。

ヒューセン

1943年10月26日

マリオンは、コーヒーに「コロンバイン」、ジャガイモ(!)にビフテキとアンディーブ、それからプリンを2時にごちそうしてくれる、彼女の母親が今日75才になるからだ。少なくともまだ生きていれば、なぜなら彼女はブレーマーハーフェンに住んでいて、そこはもちろん何度も爆撃にあっているからだ。…中略…

私たちは今ラウ嬢（ゴンベルに住んでいる）からパンを再度入手できることをとても喜んだ。でもそれはつかの間の喜びだった。ひどい小麦粉で、今のところもうパンを焼くことができず、コロンバインとケーキだけ焼ける。私たちはまだ22カティ（重量単位、1カティはおよそ600グラム）のジャガイモで、カティ当り14セントを入手できる、だからまあまあ悪くない。

ヒューセン

1943年10月27日

カルト - ジョンゴスがかかなり興奮してやって来て、彼、彼の奥さん、それに多くの人々が夜中の3時に米配給票ために行列をしたと話す。彼らはこのお米を午前中に取りに行くことができる！マリオンは下町に行き、看護婦ウィリー・ラーウィックのところで、そこでは1リットルのお米に15セントから17セント払わなければならなかったと聞く。また彼女は、アランも蓄えておくべきだと忠告する、なぜならそれも不足するだろうから。

ヒューセン

1943年10月29日

午後、ハンシェがチモール人の友人アンドレアスとクペラ・カンポン[地区長]のところへ行き、お米5日分のための書類をもらう。3人分900グラム、だからなんとかなる。それからアンドレアスのケボン[庭師]のキャンプレットが、そのお米を毎日取りに行くことになるだろう。このようにして、私たちはまた先に進む。

ヒューセン

1943年10月31日

マリオンの手助けで、着たことのない私の部屋着を小さくした、今はぴったりだ。その他、ハンズが昨日持って帰ってきたイステイメワ粉²⁹⁴から、クッキーを焼こうと試みた。でもこれもふくれず、生焼けだった。でも味はかなり良く、コーヒーといっしょにおいしく食べた。絨毯に関してはかなり進んでいる。昨日、私たちは黒糸も不足するだろうということが分かった。幸い、真ん中では部分的に二重の糸が使われていて、それをほどき、今は幅広の縁を刺繍するのに十分間に合う。残りは他の黒い糸を見つけた。私は今代用の色で作業している、でも絨毯はステキで、もうすぐ床をすばらしく飾ることになるだろう。

ヒューセン

1943年11月9日

米の販売は減少している。5才以下の子供たちは何ももらえず、ほかの人々は、300グラムの代わりに250グラム。²⁹⁵ …中略… ハンシェは暗くなってからアンドレアスのところに、私たちの分のお米を取りに行く。新しい配給票はまだ配られていない。古い票がまだ続いている！アンドレアスは塩と大豆ソースを蓄え、可能ならばお米もと忠告する。

²⁹⁴ イステイメワは、直訳すると「特別な、並外れた」という意味。ここでは商標として、あるいは「特別な」小麦粉という意味で使われていると思われる。この粉は、50-60%のタピオカ（キャッサバの塊根からのデンプン）、30-40%のトウモロコシ粉及び10-15%の大豆？からなるアジア粉の一種。イステイメワの用語は、「インドネシア人との接触」ヒューセンの日記、1945年6月9日と比較。

²⁹⁵ この時期（1944年初旬まで）、収容所抑留者は300グラムから350グラム（正式な量）を得ていたが、実際には15%から20%少なかった。（Van Velden, 267-268）たうまり収容所での配給は外部とほぼ同量であった、しかし収容所外部では、人々は副収入を得ることや、配給に加えて補充品を買うチャンスがより多かった。1944年3月1日、収容所が軍政管理下に置かれた際、米の配給は1日100グラムに減少した。

ヒューセン

1943年11月11日

原住民はみんな塩と大豆ソースを購入する。塩はほとんど手に入らない。マドゥラでは、製造が遅れているとのこと。²⁹⁶

ヒューセン

1943年11月12日

マリオンはハッサンのところで砂糖を注文、普通の量だ。私たちは、塩が1塊すでに22.5セントすると聞く、最初は9セントだったからかなりの違いだ。マリオンは、ひどい暑さのためかなり意気消沈して帰宅。そういう時に歩くのは大変だ。午後、ハッサンで注文したお砂糖が来る、中には包装紙としてウィンクラー・プリンス百科事典の紙！！嘆かわしいことだ。

ヒューセン

1943年11月13日

私のパジャマのズボンが物干しから盗まれたようだ。現在、私は夜用にはシャツが2枚あるだけ、だから節約しなくては！だから今後、洗濯物に注意を払う必要がある！なぜなら衣類をなくすのは、今はとても大変なことだから！

ヒューセン

1943年12月21日

昨日、こじきたちの一斉検挙があったようだ。すでに飢えによる騒動がある。どうなることか？

²⁹⁶ マドゥラでは人々がボランティアで塩を採掘できた人民のための塩山と国営の塩山があった。マドゥラのカリアンゲットと克蘭ポンには塩を俵型にし、包装する国営工場があった。(Gonggryp, 1563-1564)

ヒューセン

1943年12月29日

私たちはここに体重計を持っている。マリオンは58キロで、私は53キロ。だから時と共に私はかなり痩せたということ、でもすごく健康だと感じる。

ヒューセン

1943年12月31日

すべてが不足してきている。お米はまだほとんど入手できない。牛乳は大瓶が18セントから25セントになった。タマゴはすでに7セント。

ヒューセン

1944年1月1日

食事の最中、年取った野菜ランガナン[売り]がやって来て、マリオンはいくらかニンジン、テロン[ナス]、ダイオウとサラダ菜を合計1.15ギルダで購入。とても高い、でもパサールではほとんど何も手に入らない。

ヒューセン

1944年1月2日

マリー・スホーンホヴェン…中略…は、大晦日と新年1日の間にもものすごいスサー[厄介事]にあった。彼女の母親の部屋（だから以前私がいた部屋）から、いろいろなものが盗まれたのだ。彼らは突き出し窓から中に入り、普通の窓から立ち去ったのだ。盗まれたのは、蚊帳2枚（大型と小型）、大小8枚のベッド用シーツ、テーブルセンター3枚、数枚のグリング[丸枕]のカバー、ソファの掛布、ハンガー用の掛布、絹のキモノ、ネルのパジャマ2枚、全部で少なくとも300ギルダ分。すでに警察には届け出た、でも昨日の早朝にはできなかった、なぜなら警官1人が郵便局に行っていたから。他の警官たちはみんな駅にオルマツト[敬意]の宣誓に行っていた。…中略…ハンスは、政庁の指令書に包装され、楽譜の袋に入ったカチャン・ボンボン[ピーナッツのボンボン]を持って帰った。すべてこんなふう利用、悪用されたりすると考えると実にひどいことだ、。

ヒューセン

1944年1月11日

マリオンは8時半に肉を買い、そしてビルケンハウエル一家へ行くために下町へ。…中略… 1時半、マリオンは素晴らしいお肉1850グラムを1.58ギルダーで購入して戻ってきた、だからランガン[業者]よりずっと安い（1150グラムが1.50ギルダーする）。また彼女は1個10セントの柑橘類の砂糖漬けを4個持ち帰った、それからルート・ビルケンハウエルから素晴らしい脂身をもたらした。…中略… マリオンはまだ少し絹と綿とリネンの端切れを持っている。ファン・フロイテン夫人は、それを1月25日が新年の中国人や嫁入り道具を準備している花嫁に売るつもり。

ヒューセン

1944年1月18日

今朝、ひとりのケンタン[ジャガイモ]売りがここに来、彼からマリオンはキロ30セントのケンタンを12キロ買った（以前は5セントだった）。カッシラはパサールからカチャン・イジョを手いっぱい10セントで買ってきた。ジャガイモ売りは、さらに16.50ギルダーでお米を55キロ持って来る。高い、でも私たちは喜んでいる。

ヒューセン

1944年1月20日

10時半にルート・ビルケンハウエルがやって来る。…中略… 彼女は、端切れ3枚を売ったお金を持って来る、つまり75ギルダー、75ギルダー、そして55ギルダー、ルートの手数料として10%。これはだからうれしい。さらにまだ続くことだろう。…中略… 1時半にマリオンが帰宅。彼女は賃貸し料のためにカンリコウダン[管理公団]に行ってきた、それは28ギルダーだった。…中略… マリオンは長い間バスを待たねばならず、バスが来た時には、エンジンが壊れていたためジョンブランで待つ必要があった。多くのバスは、もう寿命がきている。

ヒューセン

1944年1月24日

バブ・スーが家にお米を取りに行った後、明日から一部がガプレック[乾燥キャッサバ]になるという知らせを持ってやって来た。

ヒューセン

1944年1月26日

ハンスは米配給票を持ってルラー[カンポン長]のところに行った、でも彼はジャティンガラのアシスタント・ウェドノ[副区長]のところに行かなければならなかった。私たちは現在150グラムのお米と50グラムのガプレック[乾燥キャッサバ]をもらっている。…中略… 長引くほどすべてが高くなっていく。アランは、以前はおよそ3セントだったのが、今は1日10セントだ。ココヤシ1個は、以前はおよそ1セントか2セントだったのが、今は11セントだ。ガプレックからカッシラは、グラ・ジャワ[ヤシ砂糖]とサンタン[ココナッツミルク]でつるつるしたタルトみたいなものを作り、なんとか食べられる、少年たちはおいしいとさえ思っている。小さなトマトは1個3セント、タマゴは手に入らない、パンも同様。

ヒューセン

1944年2月3日

ルートは、私の銀メッキのジルメータ²⁹⁷に65ギルダーの値がついたと知らせる手紙を送ってくる。私は、もちろん合意、なぜならまだ儲けになるし、私は4年間使用したのだ！

ヒューセン

1944年2月7日

ハンスとエーリックはまだなにも喪失感がない！彼らの朝食は、ココア、オートミール一皿（カチャン・イジョはおいしくないのでチョコレートを混ぜている！）、半熟タマゴとバターを厚くぬり塩胡椒したクティムン[キュウリ]とトマトをはさんだパン2枚。これはお金持ちの朝食だ、多くの人々は、ほとんど食べる物が手に入らないというのに！これはもちろん彼らにとって素晴らしいことだ、でも彼らは「甘やかされた」少年たちのまま、周囲に広がる欠乏を理解せず、不平さえ言っているのだ、ことにハンスは、この家は昔のようにステキでも大きくもないと愚痴っている。ハンスはの上まだ手元にお金があって、思う存分物を買う。彼が、この時期少なくともお金に価値があるということを学んでいたら良かったのに。

²⁹⁷ 商標Gero Zilmetaで、銀メッキの(フォーク、ナイフからなる)食器一式。

ヒューセン

1944年2月9日

闇米は、現在リットル当り0.45セント。スワルノには、ハンスによれば「人々」は飢えを感じても、話してもいけない、意志を強く持つべしという張り紙があったとのこと！多くのこじきがサプー[清掃]され、グダン[倉庫]に連行されたとのこと。食事さえもらえれば、そうすればそれほど悪いことでもない。…中略… 昨日マリオンは、ハッサンで10箱のExcelsiorのタバコを1ギルダー60セントで手に入れた、要するに値上がり。今晚またキンプル[大きな食用根菜]とお肉のコロッケを食べた、とてもおいしい。…中略… ちょっと気分転換に、マリオンは1時にギムレット[ジンとライムのカクテル]を私たち2人に作り、タバコを吸う。今は必要だ。

ミンナによると、ラジオでガブレックに対する警告（よく洗い、何度もすすぐこと）があったとのこと！ 私たちは青酸中毒が何件もあったからだと考えている！…中略… ミンナの関与で、数克蘭ジャン[かご]のアランを1.10ギルダーで手に入れた、別の人は1.50ギルダー要求し、まして粗悪なものなのだ！…中略… ガス会社ではひどい紙不足のようだ、なぜなら請求書に「ガスを使ってアイロンをあげよう」とオランダ語で書かれた宣伝ビラの裏側を使っているから！

ヒューセン

1944年2月12日

グルガジで一昨日13才の少女トゥレーあるいはトレースが、クテラ・ポホン[キャッサバ]を食べたから突如24時間以内に青酸中毒で死亡。8人の子供がいる家族の1人だった。他の家族員は大丈夫だった。マリオンは、だからただちにハンスとエーリックに家の外で何でもとくにクテラで作ったものを食べないようにと強く言い渡した。他のものが手に入る限り、ガブレックには触れないようにしている。スマラン東部の貧しい印人の状況は、非常に悲惨だとのこと、クドゥスなどの原住民も同様。…中略… ルートから、カーテン5組の代金175ギルダーを受け取ったとの知らせを受け取った。これは合せると大変な金額になる。今私はまた裕福。とても安堵している。

ヒューセン

1944年2月15日

ガス会社の人がかきれいなポスターを持ってきた、それは台所に貼られている。訳すと「ガスを節約せよ！」だ。深刻になっているようだ、なぜなら町の街灯も取り除かれ、支柱は栓で閉鎖されている。カッシラは、人々が入手できる150グラムからオラン・ヤン・ジャガ・ラウト[沿岸警備]

のためにいくらか減少されると話す!! それに今日はガブレックももらえなかった! おそらく死者が多く出すぎたため?

ヒューセン

1944年2月16日

ガス会社から2人来て、今日から15立方メートルのガスのみ使用することが許されると話す!! だからとても深刻になっている。水道料の請求書が届き、マリオンは今1月分6.30ギルダ支払わねばならない、3.30ギルダは水道の噴出によって余分に失った立方メートル分。

ヒューセン

1944年2月17日

デ・クシー夫人がスタートから衣類を受け取った、私たちがそれを子供服に作り替える。おそらくすべてハルマヘイラからのもので、男子がたくさん置いていかねばならなかったものだ。²⁹⁸ 台車から彼らは女性を呼んだが、彼女たちはその衣類を取りに来ることが許されなかった!

ヒューセン

1944年2月22日

食糧は、長引くほど高くなっていく、お金はこんなふうだと飛ぶように出て行く。どうなっていくのだろう?…中略… マリオンは近所のカンポンに住む原住民女性から、最初は3ガンタン²⁹⁹、今まだ5ガンタンの米を買うことができる。ガンタン (=5カティ) 当り2ギルダである。これはものすごい金額だ、でも家にあると安心できる。マリオンは、1リットルのヤシ油に0.40ギルダ支払った、以前はおよそ8セント!

²⁹⁸ ハルマヘイラ II 号収容所の男子と少年たちは、1944年1月22日にバンドン第15大隊に移送された。(Van Velden, 536, 及びVan Dulm e.a.,136)

²⁹⁹ ガンタンは、重量単位で約3kg。

ヒューセン

1944年2月25日

数日前どこかで6人の原住民男子が捕まった、粗悪なガブレックと昔のことを話し合ったためだ。さて、今朝バブ・スーは、パサールでジャングリの60名（男子、女子、子供）がデポックに連行された、同様にガブレックに関して不平をいったため！と聞いた。何にも話してはいけない。私たちは自らいかに粗悪なのか見ている、他の言葉では言い表すことができない。ラジオでも、何とか食べるためには、2日間水に浸しておく必要があると通告していた。

ヒューセン

1944年3月2日

ハンスはダイニングルームに壁用ランプを作った、だからとても便利。エーリックはパチョレン[鉄く]に忙しく、ジャグン[トウモロコシ]、カチャン[豆]や玉ねぎを植えた！このように休暇はうまく利用されている。

[1944年3月15日、マリオンと子供たちが強制収容され、ヒューセン嬢はブランセン一家に下宿する。]

ヒューセン

1944年3月17日

ファン・ブラムセンが、私のために綿糸と毛糸などを取りにルートのところに行く。彼は私が編んだ靴下を数足売り、そしてどこで材料を入手できるか、どんな編み物の作品がもっとも高く売れるかを知ろうとした。私は副収入ができるかもしれないし、すぐに退屈することもなくなるだろう。彼が私に仕事をいくらか持って帰宅することを願う。さもなければ読書をするべきだ、ここにはまだ学習する教材が見つけれられる、それも利点だ！ファン・ブラムセンは私と同様、ものすごい収集家である！

思っていたより早く、ファン・ブラムセンが、私が求めていたものすべてが入ったかごを持って帰ってきた。今、私は毛糸などを使いこなすことができる。彼は、売れ行きの良い靴下や長靴下のサイズも持ってきた。彼がモデルとして持っていった私のグレーと白のものは、小さすぎる。私は今日長くするつもり。3.50ギルダークらいの値になるかもしれない。そうなるとステキ！この後、私はカーキ色の長靴下を編む。モデルは、私が偶然持ってきたマリオンの編み物

の本にある。すべてニッポン人のために編むのは悲しいけれど、この方法でかなり稼ぐことができるなら、やむをえない。

ヒューセン

1944年3月18日

ここの向かい側は米のグダン[倉庫]があり、絶えず貧しい浮浪者が何か食べる物を見つけるために通りのゴミをかき集めている！ 現在ジャワ人たちはかなりの貧困状態である、彼らはボロ布やマットの切れ端を身につけてパサールに並んで横たわって死んでいく。そのつど、死者を運ぶ台車がやって来て、何人かを連れて立ち去る。そしてこれが「大東亜共栄」なのだ！…中略…

ちょうどファン・ブラムセンが帰宅、3.50ギルダーで小さな靴下2足を売った。編み物で私が初めて稼いだお金だ！ とってもうれしい！ 彼らは、ほかには白とカーキ色の靴下だけを欲しがっている！ 白色の長靴下でサイズは25センチ、踵からの長さは44センチ。さっそく綿靴下の編み目をつくろう！

ヒューセン

1944年3月20日

ファン・ブラムセンは、私のメガネをクライン³⁰⁰で修理してもらおう。幸い私はまだ古いメガネ枠があるので、いいレンズを入れるだけである。その他、彼は、最後に残った色落ししていない綿糸の靴下を1足3.75ギルダーで売った。Kooa³⁰¹タバコの20本入りパックは、今すでに60から70セント要求されている。だからもう吸わない！！

ヒューセン

1944年3月25日

私は、ものすごい無駄遣い、*Sumatraantjes*とV.バームの*De Grote schuld*を合計2ギルダーで買う。

³⁰⁰ これは、スマランのボジョン32番地に所在した眼鏡製造者W.Kleinの光学器械工場のこと。

³⁰¹ 1943年1月11日付けの*Kan Po* (官報) no.11で、ジャワで発売され蘭印時代を思い起こす名前のタバコは、日本名に変更されるべきだと発表された。軍政当局は、この目的で懸賞金を出した。1943年12月31日の投書締め切り後、次の名前が選ばれた。「Mascot」はアジアの目覚めという意味の「Kooa」に、「Davros」は「Mizuho」（日本語で穀物の瑞穂）、「Double Ace」は新しい名称「Sekidoo」（赤道）となった。(Brugmans,e.a.,209)

ヒューセン

1944年3月26日

編んで、編んで - おそらく編みすぎ - でも絶えず何もせずよくよしているよりもいい。ファン・ブラムセンは、さっそく私の靴下を町へ持って行き3.50ギルダーで即座に売れた。お花は手に入らなかった、そこではグラジオラスの小さな花束に1ギルダーも要求しているからだ。でも彼は本当に良質のフン・クウェー・小麦粉（カチャン・イジョ）を持って帰宅、昔1袋18セントだったのが今45セントで、別のところでは55セントもする。…中略…

ベッドに行く前に、私はほとんど（親指半分だけを残して）小さな汚い色の靴下1足を仕上げた。これは明日売りに出される。私は現在、収容所が解放されてマリオンが無一文で出てくる時にそなえて、お金（できるだけ蘭印の紙幣）を貯金している。

ヒューセン

1944年3月27日

ファン・ブラムセンと私は物々交換をしている。彼は私のキニーネを25錠と' t *Land der twee rivieren*を交換、もう一度25錠と*Atjeh!* その後、彼は私のためにペトロンガン13番地に私が欲しいと思っているもののリストを持って行き、すぐに全部、タイプライター（エリカ）³⁰²や望遠鏡などを持って帰宅する。それから彼はまた出かけて、望遠鏡や靴下（カーキ色、汚れたグリーン!）を持って、靴下を2.75ギルダーで、望遠鏡（すでに変色し、調整が上手く出来ない）を17.50ギルダーで売る、彼はそのうち手数料として2ギルダー得ることになる！それから彼はもう一度外出し、タイプライターを145ギルダーで売り、そのうち10ギルダーを受け取る。私は、さらにバリ島に関する2冊の本がもらえる。私たちはだから2人とも大満足。私は午前中ずっと古いレースのベッドカバーをほどこうと試みているが、糸はとても薄く腐食している、だからこれからパンツをほどき、それから靴下、あるいは長靴下を編む方がいい。

ヒューセン

1944年3月28日

ファン・ブラムセンはパサールに行き、憤慨して戻ってきた。夜になってもまだ愚痴っている、なぜなら果物はとても高く、そして売り子の女性がひとり彼の髭を笑ったからだ！シシール・ピサン・ラジャ（大きなバナナの房）1つに彼女は60セントも要求している！ジェロック[柑橘類]

³⁰² Erika（エリカ）はポータブルタイプライターの商標名。

は1個10セント。ファン・ブラムセンはパイナップル2個合計35セント、そして15セントのパパイヤを1個持ち帰った。

ヒューセン

1944年4月2日

ファン・ブラムセンは教会で私のために聖書を手に入れようとした、でも売り切れていたと分かった。その後、彼はパサールに行き、果物を買う。とてつもなく高い。だから彼はジャムブー・ビジュー[バンジロー]のみを持ち帰る。小さなパパイヤが今25セントで、小さなパイナップルが15セント！高すぎて支払うことができないほど！現在すでに木製の後部車輪を持つベチャがある。だから車輪不足がだからますます増大している！バブが氷を得るために2度外出したが、まだなかった。5時ごろ（私たちの時間）にファン・ブラムセンが自分で外に出て、本当に10セントの素晴らしい氷の塊を持って帰ってきた。彼が氷の倉庫に到着した時にはまだ何もなかった、だから彼は横のレストランで待った。ちょうど氷が到着し、カチョン[使い走りの少年]がファン・ブラムセンのために取りに行こうとしたが、なにももらえなかった、全部注文分だったのだ。それでファン・ブラムセンは自らおもむいたが、その売り手は再度何も売ろうとしなかった。ちょうどニッポンの兵士がやって来て、ファン・ブラムセンは彼を傍にむりやり連れて来て、彼は瞬く間に素晴らしい氷塊を手に入れたのだ！レストランでさえなにも入手できず、人々はそこでコピョル[ココナッツフレーク入りの飲料]を氷なしで飲んでいた！

ヒューセン

1944年4月4日

午前中、私はマリオンのため少し食糧の蓄えを増やすべきだと考えた、もっとも簡素なものでおよそ2週間分。すぐにファン・ブラムセン夫人とリストを作り、今日から始める！

ヒューセン

1944年4月5日

ファン・ブラムセン夫人はパサールに行き、塩、大豆ソース、豆、砂糖、クルブックなど私のためにいろいろなものを持ち帰った。ファン・ブラムセンはまた外出し、炒め油とホン・クウェー小麦粉を買いに行った。これで蓄えがかなり出来る。それからアラン売りもやって来て、私は1かご買う。全部で6.32ギルダー、そして4.85ギルダーのお米や他のものなど。これで安堵する。

ヒューセン

1944年4月6日

ファン・ブラムセンが街に行き、また私のために購入してくれた。彼はお茶、コーヒー豆、デンデン[乾燥させた味付け肉]を持ち帰った。私が編んだ白い靴下も3ギルダーで売ってくれた、でも彼らは、現在長靴下だけを欲しがっている、それですぐに編み始めた。マリオンの蓄えへの支出があるので、私はすぐにまたなにか副収入を得なければならない。なぜなら彼女が出てきたら、出来るだけたくさんのお金を持っていたいから！ これは唯一彼女のために出来ることだ。近いうちにさらに何か出来ることを願う！ 向かい側の米倉庫はほとんど空っぽのようだ、それにとっても早い時間に閉鎖される。

ヒューセン

1944年4月12日

マリオンが収容所に入ったのはちょうど4週間前だ。ああ神様、長期間にはならないようにして下さい！ 彼女への蓄えは、少しずつ確かに増えている、まだプラスがないだけ、これは唯一私が心配していることだ。明日か明後日、ルートに彼女がもっと購入できるかと手紙を書かなくては、なぜなら、お米をもって家をまわっているとのことだ、でもここには来ない！ …中略…

ファン・ブラムセンはデポック（買手のあら探しなしで！）長靴下を9ギルダーで売った。これはかなりの支払額だ。それは130グラムの重さ、だから材料費に3.90ギルダーかかった。その他運搬代20セント - これはファン・ブラムセンの請求額 - そして私の編み賃4.90ギルダー、これはおよそ4日半編みつづけること。大きな収入を得ることにはならない、でもいずれにせよかなり助かっている！ 私はまた気力を新たにして、次の1足を編み始める！

ヒューセン

1944年4月15日

今朝、ファン・ブラムセン夫人が始めてヒーレン通りのトコで12セントのニュー・スマンガット³⁰³を1箱また入手することが出来た。彼女は、現在定期的に(!!)予備がもらえる、でもとても限定された数箱だけ、それで各自1回に1箱以上はもらえない。彼女たちはファン・ブラムセンのために月曜に2箱保存しておくつもり、それが成功するかどうか興味深々！

³⁰³ これも最初は別の名称で売られていたタバコの新しい（プロパガンダの）名称であろう。Semangatは、魂、自覚、熱狂などたびたび「正しい精神も心構え」という意味で日本のプロパガンダに使用された。Semangat berdjoang = 闘争精神。（Brugmans e.a.,654）脚注 301参照。

ヒューセン

1944年4月17日

ファン・ブラムセンが満足して買い物から帰宅、私は天国にいるほど裕福。チョント[サンプル] (1つ50セントと55セント) としての2缶以外に、彼は5リットルのお米をリットル当り65セントで持ち帰った。これは高い、でも私は天にも昇る気持ち！彼はまたすぐに外出しあと、15リットルと5つの缶を持ち帰る。支出額は全部で16.85ギルダー（私が喜んで支払っている30セントの運搬代込み！）。偶然彼はお米を見つけたのだ、彼とメイドがガン・ロンボックの古道具屋でみつけ、彼は私のために缶を買うのを試みたのだ！だから素晴らしい日！さて、全部缶にいれてしまい、そうすると目下のところ終了。マリオンが早く利用できることを願う！

ヒューセン

1944年4月19日

ファン・ブラムセンとまた物々交換。私が飲む勇気のないキニーネ錠³⁰⁴と *Max Havelaar* とデュ・ペロンの *De man van Lebak*。ファン・ブラムセンは、錠剤を売るだろう、おそらく1錠7セントもらえる。ファン・ブラムセン一家は、お金が非常に必要、でも私はすでに40ギルダー支払い、この時期では多額なので、加えるつもりはない。私はこのような方法で何度か彼に有利になるようにしている。

ヒューセン

1944年4月22日

私は、ファン・ブラムセンはこっそりアラック[蒸留酒]を飲んでいるのではないかと密かに思っている。何度も彼は寝室の戸棚に行き、彼が戻って来ると、お酒の匂いがするのだ。間違っているかもしれない、でも、彼は何度もかごの中に瓶を持って何かを買いに行き、時にはバブも行くという事実と合っている。やはりこの時期には嫌なことだ。費用はあまりかからないかもしれない、でも1日にタバコも1箱吸うのだ。すべてお金がかかるのに！

³⁰⁴ キニーネ中毒症のため。「健康状態と医療状況」ヒューセンの日記、1944年4月10日参照。

ヒューセン

1944年4月24日

ファン・ブラムセン夫人の甥エミールが、私の古いガラクタ、すなわち部屋着、パジャマ、スリッパと履いたことがある靴下2足を売る。何か売れるかどうか興味がある。彼は何ヶ月か以来港では働いていない、というのはそこでは1日0.80ギルダーしかもらえないから、今売ることによって彼はもっと稼ぐことが出来る。

ヒューセン

1944年4月25日

明日までに仕上げたいと思っている白い絹の長靴下を熱心に編んでいる。それは、つまり5月1日に下宿代40ギルダーを集めたいからで、これをちょうど達成することになるだろう！私は、マリオンのために蓄えたものにはなるべく手をつけないでいたい。それはマリオンの所有物だと考えている。でも編み物だけで経費を稼ぐのはかなりつらい仕事だ！…中略… ファン・ブラムセンは、エミールのところに行ってきた、でもエミールによれば、私のガラクタには十分のお金はもらえないとのこと。それでファン・ブラムセンが明日取り戻し、自分で売ろうとしている、10%の手数料で！

ヒューセン

1944年4月26日

今朝早く、ファン・ブラムセンが甥エミールのところに行き、私の古いバランを取り戻した、それは今、突如手数料込みで16.35ギルダーの売り値がついた。あまり悪くない、でもファン・ブラムセンはもっと高く売れるだろうと思い、別の人のところに行く。印人女性で、彼女は手数料を含まずに20ギルダー。今日の午後に結果がわかる！興味深々！…中略…

ファン・ブラムセンは、書籍をロンベン[古着回収業者]にわずかなお金で売ろうとしている。私はもったいないと思い数冊取り出し、彼から買い取った。アルバート・カウルの *'t land van dorst* 45セントと25セントの *Bataviasche Planten-en Dierentuin* だ。私たちがあと何か月かたってまだ貧しく、どうすればいいのかわからなくなったらいつでも売ることが出来る！…中略… 5時にファン・ブラムセンは外出し、私のバランが手数料込みで、18ギルダーで売れるという知らせを持って帰宅。彼にも厄介だったのだ。明日、もう一度試みる、でもこれでもいいと私は思っている。

ヒューセン

1944年4月27日

ファン・ブラムセンが出かける。デポックのお店はすでに長靴下や靴下がたくさんありすぎ（私が怖れていたこと、みんなが編み物をしているから！）、現在長靴下に8.50ギルダ－のみ支払うようだ。もちろんすぐにした。だから私のほどいたパンツは長靴下に変化して8.50ギルダ－。古いガラクタ（パジャマ、スリッパ、部屋着、靴下2足）は手数料込みで18ギルダ－、だから手取り16.20ギルダ－受け取った。これら全部で、手間賃と手数料でファン・ブラムセンに1.45ギルダ－。その他、彼は経済的打撃があった。彼が私のためにクランガンで買ったという2枚のレース編みのベッドカバーは、M嬢にクラインでだまし売りしたようだ、彼はその間私から使用できないものだと知っていたのに！今彼女は怒り、彼は買い戻す必要がある。彼は明日、クランガンで売ってしまう必要があるだろう、だから私は彼に損失を返済する計画。でもこんなもの彼は私に二度とすべきではない！

私は今、5月1日の下宿代と、ルートが私に持ってきた脂身を支払うのにちょうど足りるお金がある、すなわち合計41.50ギルダ－だ！だからへそくりを使う必要はない。来月は編み物ではそんなに稼げないだろう。市場は本当に靴下であふれ、買手はそれほど即座には買わないようだ！

ヒューセン

1944年4月28日

とても驚いたことに、ルートが今朝もう来ていた！すばらしい。…中略… 彼女も色々な品物を売ることは、現在難しくなっていると話す。1人の女性は50ギルダ－の綿糸で昔は100%以上の儲けがあった。でも今はこのロットが売れていない。また金製品なども売るのはとても困難。だからこの不平は一般的なのだ。

ヒューセン

1944年5月18日

ルーウィ・ファン・ブラムセンは私のためにバリ産の指輪を11ギルダ－で売る。彼によると6カラットのみだったとのこと、だから彼は0.50ギルダ－の手数料を受け取る。Kooaタバコももらう。Q夫人³⁰⁵に2.50ギルダ－貸した、彼女はお米を買うお金がなかったから。

³⁰⁵ 教師ヒューセンとファン・ブラムセン一家は、その後Q一家の家に住んでいた。

ヒューセン

1944年5月22日

今日は編み賃1足1ギルダーで靴下を編み始めた。Q夫人はとても貧しく、現在油を買うお金もない、だから彼女の娘ネルは私がすでに彼女に約束していた0.50ギルダーを求めた。だからあと1ギルダー加えた。多くは私には出来ない、そして私の「家族」ファン・ブラムセンには知らされない、さもなければ彼はケンカを仕はじめるから。ファン・ブラムセンが彼らの部屋に行くと（午後8時）、私はまだQたちとダイニングルーム（彼らに食堂と呼ばれている）に坐り、みんなで金銭のために働いている。子供たちはサンコーの袋³⁰⁶を1枚3セントで縫い、ネルはヤッペンのために（指のない）靴下を1足0.30ギルダーで編み、私は普通の靴下を編んでいる。その間私はテルナーテ - バチャン - アンボンの話しを聞いている、2人の小さな甥たちの話しではアンバラワに関する事だ。その言葉遣いは実に素晴らしく、私は楽しんでいる。

ヒューセン

1944年5月28日

聖霊降臨祭！サンコー協会は、現在設立1年目。だから競技場ではその労働者のためのお祝い。サンコーではとても貧しい印人や原住民が働いている。パイナップルの繊維から縄を作り、それで大きな布を編み込む。それは家内工業で袋に縫製され、米、ガプレック、コーヒー豆などを入れる袋として使われる。

ヒューセン

1944年6月7日

ルーウィは、ミシンを担保にしている質屋から持ってくるために45ギルダー私から借りた。

ヒューセン

1944年6月14日

Q夫人の結婚25周年！私はだから貸した10ギルダーは支払わなくてもよいと言い、ネルにクウェ

³⁰⁶ この章のヒューセンの日記、1944年5月28日参照。

ー・タラム[米粉、ココナッツミルク、ヤシ砂糖のプディング]を作らせた。メラ・ファン・ブラムセンのミシンは75ギルダーで売れた、でも彼女は秘密にしている。

ヒューセン

1944年6月22日

編み物と読書以外、私は子供たちの衣類を継ぎ当てるQ夫人の手助けをする。彼らは1枚だけ持っている、ネルと母親は2人で4枚の古いワンピース、私が正しいとすれば、下着は1揃え。私は、ネルに毎日同じ衣類を着けないようネグリジェを与えた! …中略…

夜、私は編み物、Q夫人は出かけ、私のシーツ（私が貸したシーツ!との方がよい）から子供たちのために子供用の寝巻きと何本かのズボンを裁断したいと思っている。私たちは、本当は衣類の継ぎ当てを始めたのだ、ほとんど何もないからだ。工作中、夫人は私に魔術に関してや、いかにそれに抵抗するかを話す。

ヒューセン

1944年6月25日

それからイエチェのシャンプーで私の髪を洗う、なぜなら私は高いものを買いたくないし、だから彼女のをたかる! Q夫人と私は、彼女が出来る限り簡素にし、私のお金を長持ちさせることを約束した。おそらく私から1ヶ月25ギルダー加わるだけでもう十分なはず! 7月1日から試みる必要がある。イエチェは、私の自転車を銀行に給料を取りに行くために借りに来る、そして彼女の最初のお給料を持って喜んで戻って来る、すなわち28.80ギルダー、7月7日にも一度20ギルダーもらえるだろう! さて、彼女は何かおごるためのものを買いにトコ・ウンに行く。彼女は何も買わずに戻って来る。

ヒューセン

1944年6月28日

また中国人が人為的価格上昇をしたために捕らえられる。彼らは盗んだ品物を安く買い、それを法外な値段で売るので!!

ヒューセン

1944年6月30日

Q夫人と、今私は家計費（14.15ギルダー）水道代（44立方メートル5.10ギルダー）そして電気代（1.70ギルダー）プラス食事代10ギルダーを支払うことを約束した。だからファン・ブラムセンのところより9ギルダー少ない。

ヒューセン

1944年7月1日

Q夫人に約束通り31ギルダーを支払った。ネルは、私たちのレース糸売りのところに行き、彼を介して私の古い靴下2足を7ギルダーで売った。これはファン・ブラムセンが私に新しい靴下代として支払ったよりずっと多い！彼はだからずっとかなり儲けていたのだ。

ヒューセン

1944年7月10日

誰もそばにいないと、Q夫人は私のところに話しに来て、もちろんお金を借りるためにだ！私は、家計費、水道代と電気代のほかにさらに1日65セントの食事代と合計40ギルダー支払ったという報告とともに、9ギルダー余計に渡す！今後私は食卓では特別なものを食べない、そして彼女にもっと節約させるようにするつもり、すなわち彼女はもっと節約できるはずなのだ！私の部屋にあるランプの電球もまだない。これは2日以内にもらえるはずだった、でも私は何も尋ねない！イエチェからQ夫人は彼女とハンナにもお金を借りようとしたが、彼女たちは幸い何も貸さなかったと聞く。

ヒューセン

1944年7月11日

今朝はコーヒーを飲んだ、でもすぐに今後コーヒーは高すぎるので紅茶を飲むことになるかと告げる。さっそく朝食もなくなつた。それはいい、私たちがかなり早く食べるから。Q夫人は私のことをあまり親切だとは思っていないだろう、でも数日後にまたお金を借りに来ないようにしているのだ。彼女は今、節約することを学ぶ必要がある！彼女によると、パピリオンの居住者は家賃

(5.50ギルダー)をまだ支払っていない、そして「婦人」³⁰⁷たちもまだ同様に支払っていない。だからすべて私からのお金でまかなわれるはず！私は関与しないが、でもなんでも節約してほしい。

ヒューセン

1944年7月14日

これからアーリがポクウェットに60セントのスレー[レモン草]油を取りに行く、これは必要、ここでは今いたるところマラリアが流行しているから！現在鶏やタマゴにもアントリ[列に並ば]なければならない。鶏1ギルダー、タマゴ1個6セント、商人はみんな不平を言い、ランポッケン[略奪]のことさえ話している！

ヒューセン

1944年7月15日

ミレ・ファン・ウーシックに、彼が私の金製品を売れば、靴下を数足編むことを約束。イエチエは仕事から帰宅し、靴下の6ギルダーを私に持ってきた（ノモッタ系と茶色のDMC糸）。これで8月分は足りる！ガス工場で働いているフレディーは、すでにまた半日休み。仕事がないのだ。マンドゥール[現場監督]のディックおじさん（パビリオンの）も仕事に関して不平を言っている。クーリーたち（他の人々も）は、たいていタバコを吸っている！

ヒューセン

1944年7月25日

フレディーは昨日気分が悪くなって帰宅した。今日は回復、でもママから仕事に行かなくても良いと言われた、なぜなら(!)「どうせ払いが悪いのだから！」、私は彼が解雇されたのではないかと疑問に思っている！私は彼が嘘をつき、だから最後に1週間分30セントだけ持って帰宅したのだ。それに給料袋なしでだ！家の中にはまたいくらのお金がある、だからすべてうやむやになり、ママはなるようにさせている！

³⁰⁷ 1944年7月にQ一家の家に住んでいた2人の「価値の低い婦人たち」のこと。「人間関係」ヒューセンの日記、1944年7月4日とその後参照。

ヒューセン

1944年7月26日

ミレ・ファン・ウーシックは私のために金製の留め針、それからすべて14カラットの金のリング（パズル）1グラム6.75ギルダーを4グラム、だから合計27ギルダーで売った。私は彼に3ギルダーを渡す、だから自らは24ギルダー受け取る。これはルーウィ・ファン・ブラムセンよりずっとましだ！チョウチョは3.7グラムの重さで20カラット、でもまだ売れていない、金の価格が14ギルダー以下だから。ミレはさらに問い合わせるつもり。

ヒューセン

1944年7月27日

ネルは突然木箱から1ギルダーなくした！わずかしか持っていないというのに！現在、彼女はすべて私の部屋に保存している。彼女は映画館に行き、そこで職を得た。1晩1ギルダーもらえる、うまくいけばヤップの映画宣伝としてすべての映画館のために月給で。彼女は、郵便局から私に郵便為替の書類と新しい10セント切手を持ち帰る。

ヘルダを見た。ハンハルト夫人を介して、彼女は私の黒のイブニングドレスを売ろうとしている。ニュー・ホラントのファン・デル・スライスの少年が、長靴下にする編み物用の綿糸を持ってきた。そして私は靴下用のレース編みの糸を取り戻す、二重の糸だ！だから私の休暇は終わった、明日はまたお金のために編む。

ヒューセン

1944年7月28日

現在ここがこんなに不潔でなく、Q夫人がお金に気をつけることができたなら、ここは悪くないのだが。食事は現在徹底して簡素、でも味は悪くない。いかにQ夫人が家計費を手配しているのかは疑問である。昨日の朝、彼女はスタンス・ガトワール（ファン・ウーシック夫人2世）から50セント借り、彼女も何も持っていないので、午後また彼女に返した！その他、ネルから80セントを借り、今朝少なくとも1.50ギルダー持っていたと分かった！私の計算によると、少なくとも20ギルダー家にあるはずなのだ！ネルはハンハルト夫人のところに縫製に行く。彼女にとって、外出しそこで十分な食事がもらえるのはよいことだ！ちょうど今、1日にお砂糖は4セント分しか買えないと聞いた、コーヒーもわずか。長引くほどひどいことになっている。これが米、砂糖、コーヒーなどの国というのに！

ヒューセン

1944年8月4日

ネルがラインダースのところに映画館の件で行って来たが、彼から、日本とドイツの映画が取り止めになり、インドネシアと中国の映画に代替えになるのでその仕事は実行されないと聞かされる！金の価格は現在15ギルダー！中国人は、明らかに彼らのすばらしい紙幣を使いたがるだろう！

ヒューセン

1944年8月7日

Q夫人に今週の食費代3.50ギルダーを渡した。彼女は今たくさんお金があり、今月はこれ以上支払わなくてもいいと私に言う。本当にそうなることを願う！どうなることやら！

ヒューセン

1944年8月8日

アーリがパサール・ジョハルで私のためにグラ・ジャワ10個（ダブル）を0.70ギルダーで、2リットル4分の3のカチャン・イジョを1.50ギルダーで買った（最後はリットル当りすでに65セントだった）。パサールの価格はまだ上昇し、多くはもう手に入らない。お肉はキロ当り1.80ギルダー、お魚も同様に高い、鶏は高すぎる。最近カンボン・セカジョで串焼き肉売りが捕らえられた、彼は猫や犬をたくさん捕まえすぎたからだ！野菜もとても高い。

ヒューセン

1944年8月16日

今朝、熱心に靴下を1枚編んだ、残りのレース糸で編んだ靴下1足は、イエチェが私のためにヤップのチーフに売るつもり。

ヒューセン

1944年8月17日

Q夫人は、サンダルを購入し、また売りするため私から12.50ギルダージョー。彼女が帰宅すると、サンダル12足を売り、3.60ギルダージョーを儲けた！これは半日の仕事としてはすばらしい！私も思わぬ幸運！イエチェが興奮して帰宅、彼女は私のレース編みの靴下を6ギルダージョーで売ったのだ！私は彼女に1ギルダージョー渡し、ピサン・ゴレンをごちそうした！だから私たちにとって幸運な日。イエチェの日本人ボスは、もっとこのような靴下を欲しがり、だから糸を入手しようとする！

ヒューセン

1944年8月28日

ブックおばあさんは、ルーラーで米配給票をなくした。彼女は、1ヶ月以上10人分を11人分に変更しようとしている、イエチェはもうすでに申し出ているのに。

ヒューセン

1944年8月30日

ピートは長袖のパジャマを私のために32.50ギルダージョーで売り、私から2.50ギルダージョー得る。だから良い日！夜、ピートは私以外に別の人からも3.50ギルダージョー得たとのこと。このお金で彼は半日で5ギルダージョー分のお菓子を平らげた。彼は家でも私たちと同じだけもらっているというのに。それを彼は鼻高々お隣で自慢している！こんなやつに何か稼ぐチャンスを与えるなんて！

ヒューセン

1944年9月1日

Q夫人は朝早くハンハルト夫人のところに行き、黒のイブニングドレス代40ギルダージョーを持って来る、おそらくさらにいくらか加わるだろう！私はQ夫人と9月分、すなわち20ギルダージョー（家計費、水道代、電気代）と食事代10ギルダージョー（彼女は9月15日に必要ならばあと10ギルダージョー要求できるというのが暫定的な約束、なぜなら買い物がとても高くなっているから）、防空壕と家のカモフラージュの2ギルダージョー、ドレスを売った手数料4ギルダージョー、これは利益の10%を精算する。私の予備の石けんが変だ、だから使ってしまうべき。アーリは新しい石炭酸石けんを20個1.20ギルダージョーで買う。これはだから新しい蓄えになる。

ヒューセン

1944年9月13日

バタビアの生活はここよりもずっと高い。鶏卵1個が35セント、1缶の肉4.50ギルダー、魚は手に入らない。クドゥスでは米不足、そしてクテラは1個25セント！どうなるのだろうか？その間、インドネシア人は、彼らの管理下になって喜んでいる！³⁰⁸ イェチェは靴下（レース糸）の6ギルダーを持って帰宅、そのうち1ギルダーを私から得る。私は2ギルダーを糸代に支払い、だから3ギルダーの利益。このうちQ夫人に0.50ギルダー渡した。…中略… リーンお婆さんは、預金通帳から月々30%、最高100ギルダーの金額を引き下ろすことができる、だから素晴らしい！

ヒューセン

1944年9月15日

ハンナは50ギルダーで2人用の鉄製ベッドを売った。現在、床の上にマットレスを敷いて眠っている。

ヒューセン

1944年10月1日

タマゴは、現在13個20セントで売られている（どこで売られているかによる）。私たちはもう食べない、お肉も同様。今日だけお肉のスープが2人の誕生日を祝って出た！私の最後の日本円を月初めのためQ夫人に渡した、すなわち21ギルダー。

ヒューセン

1944年10月5日

ハンハルト夫人を介して、390グラムの綿編みのベッドカバーを20ギルダーで購入した。それでもちろん私は出来るだけ早く長靴下を編む必要がある。4足か5足になることを願う。でも今私の最後の金製品（チョウチョ、3.7グラム、22カラット）を売らなければ！ネルが試みるつもり。

³⁰⁸ 日記の作者は、ここではいわゆる小磯声明を指していると思われる。脚注小磯声明参照。

ヒューセン

1944年10月7日

ブローチが70ギルダーで売れた、だからQ夫人に7ギルダーの手数料を払い、63ギルダーが私の分。そのうち20ギルダーをハンハルト夫人に、Q夫人に月の残り分14ギルダーを、0.80ギルダーを靴の修理代としてアーリに、お茶の時間のピサン・ゴレンに1ギルダー、16ギルダーを集合貯金にした。

ヒューセン

1944年10月9日

ネルは、私のために数足の長靴下を15ギルダーで売った、彼女は1.50ギルダー、私は13.50ギルダー。まだ数足仕上がっている、それにまだ3足分の綿糸がある、だから私が綿糸のために支払った20ギルダーから、すべて売ればまた20ギルダーの利益になる。…中略… 現在、布の価格はとても高い。7.5エルの白いドリルに187.50ギルダー支払われた。天幕とレースのついた2人用の小さな蚊帳はおよそ160ギルダー。白い、古い紳士用パンタロンはまだ30ギルダーする。継ぎ当てた下着、昔は0.15ギルダー、今は5ギルダー。カイン[巻きスカート用のバティック布]は昔0.75ギルダー、今はおよそ25ギルダーか30ギルダー。

ヒューセン

1944年10月15日

現在、ハンナ・ウィゲルスのところもより貧しくなっている。ダイニングルームの全ての家具は売られた、それに化粧鏡。私が正しく理解しているとして、全部で420ギルダー。

ヒューセン

1944年11月1日

昨日、イエチェが事務所で自転車の木製車輪2つ（空気タイヤはもうない）をもらった。彼女は、さっそく中国人に2倍の金額で売った！

ヒューセン

1944年11月9日

パサールの価格は日ごとに高くなっている。小さなココヤシ10セント、大きなココヤシ20セントあるいはそれ以上。塩は1塊40セント。砂糖はカティ当り40セント、鶏卵1個18セント、カモのタマゴは25セント、キャベツ1個2ギルダーかそれ以上。ジャガイモはカティ当り80セント！男子への食事を持って行くことが許されている女性がすべて集まるジュルナタンでは、いろいろな取引がされている。1個25セントのクレープが買えるし、オンデ - オンデ[米粉、ココナツと砂糖のダンゴ]は以前1セントが、今は1個10セント、クテラ・ポホン[キャッサバ]ももう高い。お米は米配給票なしでリットル当り1.20ギルダー、気をつけていると必要はないが、余分に買うことはもう不可能だ。…中略…

イエチェから新しい種類のタバコをもらう、特定の事務所のみ当てられているSekidoo³⁰⁹だ。彼女は、彼女のところにひんばんにやって来るマントウリ - ポリシィ[インドネシア警官]からもらったのだ。ハンハルト夫人はハンナのためにフリッツの暗い色の上下服を140ギルダーで売った。以前は35ギルダーしたものだった！14日前にはまだアティ当り55セント（キロ当り95セント）だったウズラ豆は、今はキロ当り2ギルダーだ！配給票の砂糖は、500グラム10セント、でも私たちは8人で1ヶ月に1キロもらえるだけ！だから節約しなければ！

ヒューセン

1944年11月11日

昨晚、Q夫人が私の部屋に話しに来た。彼女は気にかかることがある時のみやってくる。本当にそう。彼女は、私からの収入以外15日以降は11月の収入がないのだ。彼女は、私には2回十分な食事をさせるつもりだったが、彼女と子供たちは1回、なぜなら空腹なのはそれほど苦にならないと思うから！私は彼女に奇妙で愚かなことだと話した、私はそのことに関して話したくないし、思案したくない。私は彼らが食べるものだけ食べ、さもなければ食べないつもり！でも私は彼女にフレディーも、ネルも定期的に働かないし、ピートも同様だということを指摘した。でもそうすると彼女はまるで耳が聞こえないふりをする。

さて、今朝コーヒーで始まった。彼女はコーヒーが用意できた告げる、でも彼女とネルは飲まない、だから私も飲まない。これに関しては、私は頑固になるつもり。私は1ヶ月もう少し余分に払おうと努める、でもお金は次第に私の衣類などから得る必要があるので、気をつけ

³⁰⁹ 旧商標は「ダブル・エース」、この名は日本人によって「Sekidoo」すなわち赤道と変更された。(Brugmans e.a., 209)

なければならない、さもなければ2ヶ月ですべてなくなるし、私は保存しているものには、本当に必要でなければ手をつけたくないから。

ヒューセン

1944年11月15日

Q夫人は、私の新しいイブニングドレスと靴下3足（2足は毛糸、1足はカーキ色の薄い綿糸で周りが毛糸）を持って中国人のところに行く。私たちはお金が必要！でも彼女は、先手を打てばそれほど貧しくないと分かる。彼女はまだバランを持っている、でもそれを売りたいがらない。だからそれで私の同情心を引こうと試みている。今、それが成功しなかったので、彼女はバランを抵当に毎月お金を借りている。

ヒューセン

1944年11月19日

卸売業者は景気が悪く、小売りに戻っている。オリファンツの巻糸1000ヤードが、ちょっと前30ギルダーだったのが、今は17.50ギルダー以上にはならない。H.夫人は1ヶ月前ベッドカバー（大型）を150ギルダーで買ったが、今お金不足で売りたいがっている。でも135ギルダー以上にはならない。

ヒューセン

1944年11月23日

イブニングドレス（スリッパ付き）を、60ギルダーで売る必要がある。中国人タンは、それ以上払いたがらない。ただもっともな言い訳として、もっと値を上げることができれば後で少し加えて支払おうと彼は言う、なぜなら彼の奥さんがこのドレスを、2枚か3枚のドレスに作り変え、それから売るつもりだから。彼らはだから十分儲けるつもりだ！この60ギルダーからQ夫人に6ギルダー手数料を渡し、だから私には54ギルダーのみ残る。

ヒューセン

1944年11月25日

イエチェによると、赤毛のバオマン先生が南方銀行³¹⁰に雇われたとのこと、だからヨーピー・リュバイ・バオマンのはず。彼女はお金がそれほど必要なのかしら？彼女は日本のボスの1人と友人らしいG.先生（総合下等教育の）に助けられたはずなのに！

ヒューセン

1944年11月27日

ネルはルート・ビルケンハウエルのところに行ってきた、そこはすべてまだ良好。ルートは円筒形の砂糖菓子（グレート・キースベラーの作ったチャップ）1個と板チョコ1枚を与えた。これはおいしい！ネルは、私にシシル・ピサン・スー[小さな甘いバナナ]を12本0.25ギルダで買った、だから1本2セント。私はそれを、かなり衰弱気味なので補充食にする。私は紅茶もコーヒーも飲まないし、お砂糖も使わない、それは両方ともカルトゥ・バラス[米配給票]になったので、だから9人分にはあまりたくさんはないのだ。

ヒューセン

1944年11月30日

昨日は様々なロンベンマイデン[古着売りの少女たち]が、人為的価格上昇のため捕らえられた。1人は106ギルダの部屋着を持っていた。こんな品物の取引は、現在悪化している、価格は下がり、人々は金製品のみ欲しがらる。…中略… 安いうちだけ、私は朝食にトマトを摂る。今日は5セントだった。私はいくらか補充すべきだ、なぜなら私が惨めなほど具合が悪くみえるのだから。…中略… ルートの板チョコを楽しみ、午後ベッドに。9人で分配するとわずかなものだ！時々私はなにか甘いものが欲しいと思う。私たちはなんてわがままなのでしょう！

³¹⁰ ナンポー・カイハツ・ギンコー（南方開発銀行）は、日本占領下ジャワ銀行から中央銀行としての機能を引き継いだ。南方銀行はジャワではジャワ銀行とも呼ばれていた。(Brugmans e.a., 257-258, 648)

ヒューセン

1944年12月23日

紳士服の価格はものすごく高い。…中略… 長引くほど多くのインドネシア人がみすぼらしく歩いている、なぜならここで作られたものさえ、かなり高く、とても弱いのだ。この少年たちは、各自新しいイスティメワという種類のスレンダン[風呂敷き]のズボン1本をもらい、それは1週間で見事に擦り切れてしまう。

ヒューセン

1945年1月2日

ベー・クンツが私にまた靴下のための綿糸を手渡す、だから幸いまたいくら仕事ができる！そうすればうれしいことに時間が早く過ぎてくれる！昨日Q夫人に17.50ギルダ支払った。だから彼女の負債12.50ギルダを含め、すでに1月分の30ギルダ。残りの5ギルダは編み物で貯金するつもり！

ヒューセン

1945年1月10日

昨日、Q夫人に私の蓄えからカチャン・イジョ1缶とクルブック1缶を渡した。私はカチャン・イジョの代わりにウズラ豆にするつもり、これはより長く保存できる。お砂糖の蓄えは少しずつ私のお腹の中に消えていった。それは午前中たいてい空腹感があり、1匙のお砂糖が素晴らしい助けになるからだ！

ヒューセン

1945年1月13日

値段が高いため、夫人に私の蓄えのお米を与えた(10リットル)。彼女は何度も買う必要があり、今日、お米の小売り商は1リットル2.10ギルダを要求する。夫人は、それはしなかった。これはとてつもない利益をとることだから！さてこれで何週間か彼女の助けになる。2月1日から私は彼女に40ギルダ渡すつもり。少なくとも、たくさん物資を売ることなしでそのお金を集めることができることを願う。編み物でのお金が余ったら、私はウズラ豆を追加して買う、これはより長く保存できるし、少なくとも同じくらい栄養価がある。マリオンのために蓄えておいたお米だ

が、非常時には、法は破られる。私は、子供たちが飢えているのや、私たち大人が食事したら、十分彼らのために残っているかどうか彼らが欲しそうな目で見るとは耐えられない。

ヒューセン

1945年1月19日

イエチエはハンナ・ウィーゲルスに1ヶ月30ギルダーの下宿代を払っている。ニタ・スレフェルはランドゥサリで、洗濯や部屋掃除も含めて25ギルダー払っている。ティタレイはQ夫人の妹のところまで25ギルダー払っている。そうするとQ夫人は私の40ギルダーでやりくりできるはず、ことにとっても簡素な食事しているのだから。

ヒューセン

1945年1月25日

ブックおばあさんのレース編みをほどこしている時、古着売りの女性がやって来て、私のカーキ色のドレスを買いたがった。彼女は5ギルダーから値をつけ、最終的には私の要求額25ギルダーになった。そのドレスはいたるところ継ぎあてられ、とても薄くなった部分がある。私はその後Q夫人が帰宅すると、今日の午後のピサン・ゴーレンのために2.50ギルダー与える。…中略… パサールではほとんど何も手に入らない。…中略… マッチは1箱すでに75セントする！ジャガイモはキロ1.20ギルダー。アランはかご1杯が7.50ギルダー。

ヒューセン

1945年2月1日

Q夫人からお砂糖1キロ引き取った。彼女は10キロのお砂糖で十分なのだ。彼女は1ヶ月8人分で12キロ入手できる。彼女は、0.12ギルダーが12回、合計で1.44ギルダー支払っている。彼女は、私からお砂糖代として2.20ギルダー受け取った！Q夫人に2月分の40ギルダーを支払った。イエチエは、彼女の鎖の指輪（13グラム）を部屋着2枚と交換した。金の価格は22カラットで30ギルダー。私は彼女にブラウスを編む、さもなければ絶対仕上がらない！ハンナの自転車は250ギルダー（タイヤは粗悪、商標は分からない）のつけ値。

ヒューセン

1945年2月5日

ペテロンガンでランボックパルタイ[略奪]があった。今日、パサールの周辺はたくさんの警官、そして今、突然ジョハルでも略奪、ケンペイタイと警官が対応し、2人のニッポナーが殺され、瞬く間に取り除かれた。これはただ単に飢えからの騒動。こじきたちの様子は悲惨なものだ。鶏卵は現在35セントから40セント、というのは中国人の新年があるからだ。テロル・アシン[塩漬けの固ゆで（カモの）卵]は現在40セント。今では誰が払えるというのだろうか？

ヒューセン

1945年2月6日

パサール・ジョハルは今日、武器を持った兵補と自動車に乗ったニッポン人によって4方から警備されている。売人は誰も外に出てはならない。どこでもこんなふうなのだろう！価格は突然、恐ろしく上昇。テロン1グラムが25セント、お肉はキロ当り6.50ギルダーなどなど。クテラもとても高い。

ヒューセン

1945年2月7日

郵便局でハガキは1人3枚11セントで買える、釣り銭のないよう支払うこと、さもなければ買えない。1日の発行数の合計は300枚。8時から列に並んでいる、そしてハガキを10セント、あるいはそれ以上で売るので！私は絶え間なく空腹、食事のすぐ後でもまた空腹になる。食事は1日2回、それは1皿のご飯と水煮の野菜で、なにか味付けに入っている、でも足りないようだ。イエチュエに時々15セントのナン・ランギ[海魚入りご飯]を持って来てくれるよう頼んだ。でもそれはこっそりする、さもなければまたQ夫人とケンカになるから！

ヒューセン

1945年2月9日

ネルは今、1週間かなり稼いだ。H. 夫人は彼女に中国人のために1枚2ギルダーでワンピースを作る縫製の仕事を持ってきたのだ！（Q夫人は私には1枚1ギルダーと話した）…中略…今日は十分

食べた。イエチェが私のためにナシ・ランギ[海魚入りご飯]（1袋15セント）を2袋持って来てくれた。午後、ベッドに入る前に1袋食べた。

ヒューセン

1945年2月10日

私のバスローブは125ギルダー、手数料分12.50ギルダーをさし引いて112.50ギルダーになった！2年前にマリオンからもらったラヴェンダーのローションは80ギルダー、手数料7ギルダーを引いて73ギルダーになった。だから今とても裕福！Q夫人への貸し1.50ギルダーは払う必要はなくなり、そして4ギルダーで3リットルのお砂糖を購入し、あとジョゴンとサゴ、あるいはアランも購入すると約束した。…中略…今夜バチャン・アシン[塩漬けマンゴのお菓子]をごちそうした、1袋5セントで、その中には20個入っている！

ヒューセン

1945年2月12日

私のパジャマ（ホフマンの綿製品）が50ギルダーで売れた、これも予想以上。Q夫人に15ギルダー渡した、それでアランが買えるように（あるいは家賃を支払うために、なぜならアラビア人の家主はすでに催促しに来ているから！）。イエチェがあまりたくさん渡さないようにと忠告する、彼女は正しい、というのは、ここは底無し井戸だから。

ヒューセン

1945年2月14日

ネルはヒッケルトで1ヶ月30ギルダーの給料でタイピストの職を得ることができる、でも彼女は断った！…中略…ここには、1月1日から中国人が1週間に2度お金を催促に来る。9月にQ夫人は彼から売るためのバランを買ったらしいが、現在彼女は何度も「明日」支払うつもりと約束している。

ヒューセン

1945年3月9日

マウト・ハンハルトのために編んでいた数足の長靴下を、また病気になったネルのために編み上げるつもり。彼女は2ギルダーもらえ、私はそのうち1ギルダー、残りは彼女のもの。私にとっては金銭のためではなく、仕事がより重要なことだ。

ヒューセン

1945年3月12日

午後、私はグニ袋[麻袋]からズボンを縫うのを手伝った。ズボン1本が7セントになる。私は7本縫った。お金は家計費だ。早く進む、でも手にはかなり硬いものだ。

ヒューセン

1945年3月21日

ベー・クンツが靴下のための綿糸を送ってくれる、幸いまた数日働ける！お米はまたいくらか安くなっている、デッサ[村]の人々が入れるようになったからだ。現在リットル当り1.30ギルダーから1.60ギルダー。…中略…お隣ではすべてを含めて1ヶ月180ギルダー必要。これは大人5人と2人の子供たち、だから1人30ギルダー以下で、かなりぜいたくな食事だ。

ヒューセン

1945年3月22日

パサールはゴミでいっぱい。原住民は通りに横たわり、死んでいく。

ヒューセン

1945年3月27日

朝食として、私はクテラ・ランバット[サツマイモ]を摂る、1個5セントから8セント。これは自分で払う。ほかのものは継続して食べるには高過ぎる！2度の食事はお米とサユール[野菜]、あるいは夫人が外出していて、ネルが調理する「気」がないときには、ご飯とタマゴに大豆ソース

が残り物に補充される。現在縫製するズボンがないので、もちろん余分のタマゴやバナナはもうない。

ヒューセン

1945年4月2日

幸い、Q夫人が袋を入手でき、だから私たちはまたズボンを縫製する。ペー・クンツから2ギルダ一靴下代を受け取る。ハンナ・ウィーゲルスは、彼女の一番ステキな戸棚をハンハルト夫人に100ギルダーで売った。あそこは早くもどんどん空っぽになっていく。午後の時間にズボン10本縫製、まだ袋にたくさんお砂糖が入っているのが厄介だ。³¹¹

ヒューセン

1945年4月10日

Q夫人は毎日他人のためにジュラナタンに食事を持って行き、ブセック[竹で編んだかご]を午後取りに行く。それでも彼女はいくらか稼いでいる。…中略… 薄暗くなり、電灯のない部屋に坐ることができる、イエチェが話しに来る。私の古い、暗い色の花模様のある色褪せた部屋着(チャックなし!)は70ギルダーで売れた、だから手取りで63ギルダー。自転車のランプは20ギルダーで売れ、長いスリッパは27ギルダーで売れた。だから私は今のところ大丈夫!

ヒューセン

1945年4月11日

イエチェは、銀行の名前と押印のついた給料値上げ証明をもらう。彼女は今33ギルダーの給料と、同額の食費がある。それで生活できる、彼女はハンナに1ヶ月40ギルダー支払ったし、今のところ衣類もかなりある。…中略… ヒレブラント一家とベルンハルト一家³¹²は家賃と電気代を支払い、(イエチェによると)Q夫人はだから彼女たちにととても親切なのだ!ベルンハルト夫人からクーネンの辞書を5ギルダーで引き取った。彼女は7.50ギルダー要求していたが、私の5ギルダーをととても喜んだ。彼女はまだまだたくさん本を持っている。それらをもうすぐ出してみせるだろうと思う!

³¹¹ ズボンは、砂糖が入っていた麻袋から縫製された。

³¹² 彼らは、4月9日にQ一家のところに入居。「居住」ヒューセンの日記1945年4月9日、4月10日参照。

ヒューセン

1945年4月12日

昨晚、Q夫人とヒレブランド夫人と家主の間で、家賃を支払うことと誰の名前でするかについてかなりの言い争いがあった！Q夫人がそれほど家賃を遅滞していなければ、家主もこんなことを尋ねなかつたらう！新しい人は現在、家賃と電気代半分と余分な水道代を支払う、だからこれは不利なことではない。

ヒューセン

1945年4月14日

またズボン25本を縫った。これは最後のものだ、というのは月曜日からまたミシン作業で、私はそれには加わることはできない。Qのミシンでは、私は縫いたくない。それは整備されていないし、私のせいにされてはかなわない。Q夫人は、一日中外出し様々なものの取引きをしようと試みている。本当にそれは彼女の得意とするところだ。

ヒューセン

1945年4月15日

Q夫人によると、アラビア人の家主が私の自転車に800ギルダーの値をつけたとのこと。でもやはり売らない！

ヒューセン

1945年4月21日

Q夫人がまた私のために編み物の仕事を持ってくる、子供用ズボン1枚とブラウス1枚。でもたくさんは払うつもりがない。でも私は引き受けるだろう。

ヒューセン

1945年4月25日

Q夫人は、セテラン・ダレムのデ・リザー夫人のところで今働き（彼女は「手助けして」）、アーリはセテランのオルトホフのところで。Q夫人は料理などをする必要がある、そこのバブが病気でデ・リザー夫人は戸外に食事を納品しているからだ。Q夫人は1日1.50ギルダー、それにかなりの食事とフレディーのための特食とフルーツを稼いでいる！

ヒューセン

1945年4月30日

ヒレブランド夫人は、先月125ギルダー家計費に支出した（7人分！）と私に話す。Q夫人はまだ1日5ギルダーでブランジャ[家計費]を維持しようとしている、だからもう150ギルダーのはずで、私たちはヒレブランド一家よりひどい食事で、その上、ピートはいっしょに食事しないし、ヤーピーとアーリ、夫人は、1回外で食事している、フレディーは現在病気でCBZだ、だから1度家からの食事をするだけなのだ。だからすこしおおげさ。よりたくさんの食事を供している（お肉など）し、彼女の強制収容された夫フリッツに素晴らしい食事を送っているハンナ・ウィーゲルスは、すべて込みで1ヶ月（7人分）180ギルダー支出している。憶測するとQ夫人は、120ギルダー以上は使っていない、おそらくもっと少ないはず、そのうち彼女は私たちみんなから66.50ギルダー手にしている（私から45ギルダー、ヒレブランドは約15ギルダー、パピリオンが6.50ギルダー）。残りはネルの稼ぎ（ハンハルト夫人から1週間5ギルダー）とフレディー（彼が働けば同じくらい）と夫人（1日1.50ギルダー）が加わるのだ。

ハンナはミモザ屋で私に3.50ギルダーの花を注文。…中略… ベルンハルト夫人は彼女のために編んだブラウスを60ギルダーで売った（彼女はかなり稼いだことになる！）。ユリアナ王女の誕生日だったので特別食を食べた、ジャガイモ・イステイメワ[特別な]（はクテラ[サツマイモ]のこと）とニンジンと豆のサラダ、トマト、タマゴ、そしてジェルックック・ニピス[レモン]の飲み物。ハンハルト夫人のためのブラウス2枚目が仕上がった。これはまだ5ギルダーになり、1ギルダーがネルに、でも5月1日から私は値段を上げた。簡素なブラウスは今6ギルダーに、スポーツ用の靴下は少なくとも2.50ギルダーだ。

ヒューセン

1945年5月12日

ママQがクバヤ[長い丈のブラウス]を30枚持ってきた、でもネルは縫う「気」になっていない。彼女によれば、手動ミシンはのろくて、何度も糸巻きをする必要があるとのこと！昨日ブックが40枚のクバヤ持って行ったお隣とは大違いだ。それらは印人女性たちが裁断し、別の人が縫う。裁断は1枚4セント、縫製は1枚16セント、糸はもらえる。ハンナとブックはたくさん仕事と副収入に大喜びしている！ママQは奇妙、でも彼女は一度始めたら働くことが何かを知っている！私は、ネルはもうハンハルト夫人からほとんど仕事を得ていないと思う、なぜなら彼女は、少ししかしないし、ほとんどが嫌悪感を持ってしているからだ。…中略… 午後、ベー・クンツのブラウスを編み上げた（襟つき）。あとはハンハルトの長靴下だけ、そうすれば注文分が進む。ペーからもう7ギルダー受け取る。お金がどんどん入ってくる。

ヒューセン

1945年5月15日

パサールでは、次のラティハン[訓練]³¹³のため価格がまたものすごく上昇。

ヒューセン

1945年5月17日

ブックおばあさんが私に1個0.50ギルダーで買ったタンケップ[ジャワ産シュロ糖]（2個の半球）を全部平らげた、コーヒーとタマゴ、2個の小さいクテラ・ランバット[サツマイモ]の朝食後もひどく空腹だったからだ。今は幸い空腹感がなくなった。Q夫人はおよそ2ギルダー分のジャワ産の砂糖[シュロ糖]を私に持って来てくれるだろう。白糖を入手するのはとても困難、キロ当たり3.50ギルダーもする。アランは1かご4ギルダーから10ギルダーの間を価格が変動している！玄米は昨日リットル1.30ギルダー、白米は1.90ギルダー、要するにこれもいきなり値上がり。…中略… Q夫人はもうこれ以上長くデ・リザー夫人のところで、彼女が厄介なので働きたくないと思っている。だからこれも短い期間だった。

³¹³ 1945年5月18日から20日まで大規模な訓練があり、訓練日はパサールが閉鎖されたようだ。「日本人による措置と規定」ヒューセンの日記、1945年5月14日参照。

ヒューセン

1945年5月19日

パサールの価格はいくらか下がった。白米リットル当り1.30ギルダー（ペー・クンツは1.90ギルダーで買っていた）。

ヒューセン

1945年5月21日

私たちは、今夜電灯なしで坐ることになるだろう、というのはちょうどANIEMの人が、請求書がまだ支払われていないと言いに来たから。彼はすぐに電気のメーターを閉鎖した。…中略… ママQが今朝請求書を支払うと、ANIEMはまた電気メーターを開いた。

ヒューセン

1945年5月25日

宝石商ティオは守銭奴の汚い詐欺師だとイエチェから聞く。ハンナ・ウィーゲルスの結婚指輪は、彼によって4.2グラム、20カラットと計量され、検査された。ファン・ワイク夫人とトコ・ブリリアントでは両方とも、4.350グラムで22カラット。こんな人は絶対警察に届け出るべきだ！…中略…

午後、ハンハルト夫人が彼女に編んだズボンのことで、それから男性ための靴下の綿糸を持って来てくれる！私は彼女といっしょに行き、彼女の部屋を見、彼女の下宿人スラバヤのファン・ライゲルスベルフ夫人と挨拶し、コーヒーを飲み、大部分がまだ編み代としても10ギルダーを受け取る！彼女は全部私に編んでもらうつもりで、私に他の仕事を引き受けなくて欲しいと言った。だから私は今のところ退屈することはないだろう！彼女によると、Q夫人はデ・リザー夫人の仕事で15ギルダーだけ稼いでいるとのこと。Q夫人は私に、人々が彼女に関して「悪口を言った」ためにクバヤはもうもらえないと言う。私は6月分50ギルダーの代わりに60ギルダー約束した。

ヒューセン

1945年5月30日

ダスターコートからイエチエのためにスカートを作った、古いワンピースから新しい私のもの。リネンのスカート（キュロットスカート）をQ夫人にあげる、そのジャケットは、またマラリアになった時のために自分のために残しておく。そうすると猛暑の日でも寒く感じるから。

ヒューセン

1945年5月31日

Q夫人は、今日はまだ外出していない（1時）、だからデ・リザー夫人のところでは働いていないのだ。ケンカをしてもう長い間そこに現れていないと私は思っている。彼女はキュロットスカートの縫い目をすでにほどき（彼女はほどくことをデデル[縁]と呼ぶ）、そして現在、布をレンダム[水に浸して柔らかくする]している。フレディーのズボン1本とボビーのが1本取れる。とてもステキな強いリネンだが、またしみができているだけ。私は彼女にズボンは売ってはいけなと言った、というのは、彼女は常にそうしたがるからだ。それが、誰ももう彼女に衣類を与えない理由だ！

ヒューセン

1945年6月5日

昨日、ヒレブランド一家はグダンからベッドとトランクを取り出し、ベッドを売り、残りを部屋に詰め込んだ。もう一杯なのに！ブックにヒレブランド老婦人は、彼女はすべてを含み1ヶ月およそ100ギルダー使う、だからバランを少しずつ売っていると話した。古い2人用の蚊帳と四角い天幕とたくさんのヒューズは700ギルダーになった！

ヒューセン

1945年6月7日

パサールでは肉、魚、エビはない。カモのタマゴは現在1個65セント。鶏ももう手に入らない。

ヒューセン

1945年6月12日

私がベーのところ立ち寄ると、彼女はいつも私のために何か持っている、コーヒーだったり、フルーツだったり。さて、私は彼女に、彼女が自分自身のために買う時、1週間に2、3度私のためにフルーツを買うことを依頼した。さもなければ私は人にたかっているような気がするから！

ヒューセン

1945年6月18日

Q夫人は、ここ数日定期的にテンペ・ゴレン・クリング[焼発酵豆腐のステック]、スルンデン[焼いた削りココナッツ]、アチャル[酢漬野菜]、タペ・クテラ[発酵させたクテラ芋]を注文で作っている。彼女はそれで私たちのブランジャ[家計費]のお金を余分に稼いでいる（お米は含まない）、なぜなら私たちはこのようなものだけをご飯に添えて食べているから。

ヒューセン

1945年6月21日

ベルンハルト夫人は、母親の医師からの処方で、母親に毎日2度4分の1リットルの牛乳もらっている。それには20セント払う必要がある。だからリットル当り0.80ギルダー。そしてこれは最善のものでもない、というのは牛も必要なものを摂取していないからだ。

ヒューセン

1945年6月22日

ベーが従姉妹の誕生日から興奮してやって来て、私にクッキーを持って来てくれた。その上、彼女のために2巻きの糸を巻いて玉にする必要がある、つまり彼女はオルトホフでクバヤを64枚取って来て、それは1週間以内に仕上げなければならない。彼女は1枚11セントもらえる、つらい儲け仕事だ。

ヒューセン

1945年6月24日

ベーの従姉妹、ニニ・キック夫人と知り合いになった。彼女は私から35ギルダーで160グラムの白い毛糸を買い、他の168グラムを40ギルダーで、そして100グラムの茶色い毛糸を12.50ギルダーで売ろうとしている。その他、彼女がたくさんもらえば、私たちは何かおいしいものを食べるつもり！…中略… ベーと彼女の買ったキャンディーとブロンドン[堅焼きクッキー]、スンプロン[ワッフル]とテンテン・カチャン2.35ギルダー分を精算する。私たちはまた節約することになる。

ヒューセン

1945年6月26日

ネルは、24日の土曜日から昼夜ハンハルト夫人のところで働いている。どれくらい続くことやら？

ヒューセン

1945年6月27日

ベーといっしょに今夜のヒュッツポットを作るために、朝早くお隣へ。³¹⁴ そのための材料は、すでにベーが買っていた。

3セントのニンジンとネギと豆で合計7ギルダー

ジャガイモ2キロ、8ギルダー

お肉1キロ、16ギルダー

クテラ・ランバット（大、20個）、1.20ギルダー

ベチャ、1ギルダー、合計33.20ギルダー、そして補充物も加わる：

ナシ・クニン[ウコン汁入りご飯]、3.70ギルダー

だから合計で36.90ギルダー

私はジャガイモ、クテラ、ニンジンの皮をむき、ベーは残りをする。…中略… イェチェが4時に事務所から戻って来ると、彼女は1.50ギルダー分のヘアピンを私のために持ってきた！

³¹⁴ 日記の作者の誕生日は6月26日で、翌日の夜食で誕生日を祝った。「教育・娯楽・宗教関係」ヒューセンの日記1945年6月26日参照。

明日からまた節約し、熱心に働く。…中略… 7時（日本時間）に「いい」ワンピースを着てお隣へ、そこでイェチェが私の髪を整え、今までとは別の、でもこれも若く見える。「ヒュッツポット」はみんなおいしく食べた。ジャガイモとクテラの味は区別がつかない！みんな2皿、3皿とお皿一杯に食べる、おいしい証拠だ！その後、私たちはいくらかご飯を食べる、ベーはまだこっそりトマトのオムレツを持ってきた！その後、私は表のベランダの椅子に息切れして倒れ込む。私たちは11時半まで話し、それから満足して帰宅。Q夫人もお皿一杯食べ、とてもおいしいと思った。

ヒューセン

1945年6月29日

私が11時に帰宅すると、Q夫人が彼女の妹のお金に50ギルダーをタンバー[加える]してほしいと求める！そうすれば彼女は「なにか」を買い、また利益を得て売ることができるから！私はもちろん同意した。でも私は彼女がZ.あるいは別の人からの借金を支払うのだと思う！

ヒューセン

1945年6月30日

本当にQ夫人は、朝早く私からの50ギルダーを持って出かける、私は彼女の妹フェーラ・Z.のところだと思う。彼女も、私に姉はこのお金をまずベルンハルト夫人にお願いしたが、彼女は20ギルダーしか残っていなかった！と話した。この話しは1から10まで嘘、なぜなら私は自分でベルンハルト夫人に尋ね、彼女は全く知らないとのことだから！私は、今日そのお金を返却してもらえるかどうか興味深々だ。返してもらったとして、どれくらいの儲け！…中略… 本当に、夕方、52.50ギルダー受け取った、だから2.50ギルダーの利益。

ヒューセン

1945年7月1日

私はQ夫人にあと10ギルダー渡す、だから7月分には70ギルダー支払った。これは部屋代と水道、電気代に10ギルダー、そして60ギルダー、だから食費は日に2ギルダー。ベーには補充食用として25ギルダー渡す、フルーツ、キャンディーと時々食事代だ。私は彼女に常におごってもらいたくはない。ヒレブラント夫人からQ夫人が眠っている時に、ナシ・クニンをもらった。あとか

ら、彼女はQ夫人になにもあげなかったことが分かった！補充食にQ夫人の妹からシシル・ピサンをもらった。彼女はたくさん稼いでいるようだ。

ヒューセン

1945年7月5日

ハンナ・ウィーゲルスから30ギルダーでエナメル皿2枚と蘭印の地図を引き取る。これは彼女の私への借金。ペーは私のためにトコ・ウンで以下のものを買って行った。

ソーセージパイ3個	1個1.25ギルダー	=3.75ギルダー
コロッケ2個	1個0.60ギルダー	=1.20ギルダー
シュークリーム3個	1個0.65ギルダー	=1.95ギルダー
クウェー・ラピス[スペッククック]3個と子供たちのためのキャンディー1かご		
	合計	
	10.28ギルダー	

この中からQ一家、ウィーゲルス一家、ペーとブンケ・クンツと私はそれぞれ1個か2個、そしてペーからはそれぞれソーセージパイ1個とコロッケ1個とシュークリーム1個。戦前の味がする。タマゴは現在パサールでは45セント、うちのタマゴ売りの少女は38セント。

ヒューセン

1945年7月11日

Q夫人は、現在Pekope³¹⁵を介して1ヶ月分のロコック[タバコ]をバラスカシ[米配給]の時に毎月もらえる、それは30セントのKooa2箱、20セントのSemangat2箱、10本入りNegresco³¹⁶葉巻1箱35セント、紙巻タバコ1箱と巻紙で40セント。私はKooa2箱を引き取り、1ギルダー払うだけでよかった。外部では、すでに1箱3ギルダーに上昇している！紙巻タバコはすでに4.50ギルダー支払われる！すべてスタンプが押され、次回には空箱を引き渡す必要がある！

³¹⁵ 脚注Pekope参照。

³¹⁶ Negresco(ネグレスコ)は葉巻の商標名。De fabriek N.V. Tabak Mij Negresco (タバコ株式会社ネグレスコ)は、ジョクジャカルタに所在した。

ヒューセン

1945年7月13日

夜はベーのところで編み物、彼女自身はカバヤを縫った。私は、彼女を励まそうと土曜（7月14日）の夜までに50枚は仕上がらないという賭けを彼女に提案した。仕上がると、私は彼女におごらなければならない！

ヒューセン

1945年7月14日

熱心に編んだ。ベーは本当に50枚縫い上げた。だから明日私がおごる。…中略… ピート・Qは、1ヶ月90ギルダーでスラバヤの生活用品流通センターの職を得たと断言する。彼はそこに引越す！

ヒューセン

1945年7月17日

金は今1グラム62ギルダー！残念、私のものは全部売ってしまった！

ヒューセン

1945年7月19日

今朝早く、コーヒーが切れたので、マグカップ1杯のチョコレートにタマゴを泡立てたものを飲んだ。味はいい、ただ高いだけ、タマゴが45セントするから。1時間後、ベーのところでナシ[ご飯]、スモール[香辛料入り肉ご飯]、タマゴ焼、豆腐とサユール、だからかなりの食事だ！プックは私の古着を整理するだろう、私はコラック・ピサン[シュロ糖とココナッツ入りの蒸しバナナ]をかごにいっぱい約束した。

ヒューセン

1945年7月22日

3人のジャワ女性がココヤシ、ピサン、サウオ[フルーツ]とクズウコン³¹⁷を持ってくる。私たちは36ギルダーで全部買う。私は12ギルダー支払い、Q夫人とベルンハルト夫人にいくらかあげる、残りはベーとハンナが支払う。

ヒューセン

1945年7月23日

ベーに100ギルダー貸す、私が名付けるところの日本円で60ギルダー、インドネシアのお金で40ギルダーだ。

ヒューセン

1945年7月24日

Q夫人は、買い出しのため朝早くパサールに。彼女はお米も買おうとする、というのは蓄えがもうないから!!…中略…パサール・ジョハルには、警官とニッポナーがいる。そのお米は、リットル当たり3ギルダーで売られたが、直ぐに没収される。だからこの件は今解決されることになるだろう。ここの小さなパサールは、お米はキロ1.90ギルダー。これだとなんとかかなりそうだ。

ヒューセン

1945年7月27日

Q夫人は、まだ紳士服をハンハルト夫人のために売ろうとしている、すなわちグレーのショートパンツで、土曜日にはまだ80ギルダーの値がついたが、今は50ギルダー以上にはならない。これは彼女が長く待ち、多すぎる利益を取ろうとしたからだ。紳士用ジャケットは150ギルダーする。その他はほとんど売れない。人々は食べる物を買ひ、衣類はわずかししか買わない。ノール（パビリオン）の息子への茶色い靴下が仕上がる。Q夫人に、8月15日の前に出て行くことになれば、あと日本円50ギルダーと20ギルダー分のオランダのお金を渡すつもりだと約束した。金はまだ売り

³¹⁷ クズウコンあるいはMaranta arundinaceaの根は、食用のデンプンを含んでいる。

やすい。グラム当り60ギルダーから70ギルダーだ。ハンナ・ウィーゲルスは5グラムの結婚指輪を360ギルダー以上で売った。彼女はまた、だから今のところ大丈夫だ。

ヒューセン

1945年8月15日

まず、私たちはみんなで坐って話し、その後いっしょにベーの部屋で。彼女は新しいモデルのカバヤを縫った、前よりも難しいもの、でも現在1枚当り8セントもらえるだけだ。幸い、ベーはまた40ギルダーで売ることが出来るものがある、それにスリップがおそらく80ギルダーになる。ハンナはとても古い白の長ズボン（穴があいている）を古着回収業者に60ギルダーで売った。

健康状態と医療事情

バタビア

ハンベル

1942年6月6日

私たちは半年前にマラリアの予防注射をしました。だから今もう1度する必要があるはず。でも私たちにはオバットゥ[薬]はもうないのです。

ハンベル

1942年6月13日

0. には大きな外傷があります。彼女はインドネシア人医師S. に電話しました。彼は来ることを約束しましたが、彼はやって来ませんでした。彼女はそれから欧州人医師のところに行きました。でも彼は誰も助けることができません、というのは器具が全部持ち去られていたからです。でもあのS医師は処罰すべきです。ある女性は、泥棒が家にいるのを見つけました。彼女は刺され、血を出しながらその医師のところ歩いていきました。彼が何と言ったと思いますか?! 「オランダ人は助けない!」と。こんなことは医師の言うべきことではありません!

ハンベル

1942年7月5日

昨日キニーネを探しに行きました。町中を自転車で走らねばなりませんでしたが、キニーネの産国なのにあきれたこと! もちろんヤップがすべて没収しているのです。

ハンベル

1942年8月1日

チキニ病院³¹⁸にはまだ欧州人医師や看護婦がいます、でもヤップがボスなのです。1度出産のた

³¹⁸ チキニ「エマ女王」病院は、バタビアのラーデン・サレーラーン40番地に所在していた。

めに医師が呼ばれました。ヤップは彼を玄関で気を付けの姿勢で2時間立たせていました。ようやく玄関を通ることが許された時にはすでに赤ん坊は生まれていました。チキニ病院の他の医師ふたりは、CBZ（中央市民医療施設）で手術をする必要がありました。手術後、外に出たいと思いましたが、彼らが誰で何をしたのかを記載している書類を携えていませんでした、そのため殴られました。病院に面会に来る人々は、おそろおそろ監視の前を通ります。監視が不機嫌だと殴り始めます。V.H. 夫人はいつも白いコビムのワンピースを着て行きます、それで彼らは彼女が看護婦だと思いました、なぜなら彼女はいつもごく普通に通ることが許されましたから。その医師たちは番号のついた処方箋を出します。ナンバー1は全額支払い、ナンバー2は少し低額というように。ナンバー4は無料です。

ハンペル

1942年9月30日

チキニ病院の医師たちが彼らに逮捕されました。現在、日本人医師たちと看護婦たちが来ます。

ハンペル

1942年12月31日

CBZ（中央市民医療施設）、チキニ病院、よき牧者会、そしてポロニアのカトリック協会は明け渡さなければなりませんでした。³¹⁹ ヤップは何を望んでいるのでしょうか？病人はただトランクひとつで通りに放り出されました。

ハンペル

1943年1月2日

チキニ病院の向かいに住んでいる人たちのところに行ってきました。明け渡しは「ご立派に」（皮肉）なされました。ベチャを引く男たち[輪タクの運転手]さえ、いかに哀れなブランダ[オランダ人]の病人たちが扱われたか憤慨していました。生まれたばかりの乳児を抱いた母親が、もう歩いているのが見られます。そして監視はものすごくわめき散らしています。でも私たちが昔ヤ

³¹⁹ 「よき牧者」は、メースター・コルネリスのパサル通り所在の未婚の母収容施設を運営していたよき牧者の修道女会を指している。ポロニアのカトリック協会は、おそらくビダラ・チナ（ポロニア地区に位置するメースター・コルネリスの約1キロ南方）のメースター・コルネリスにある女子寄宿舎聖フィンセンティウスのことであろう。（De Vletter その他, 67,71,173）

ップを礼儀正しく扱わず、今仕返しされているのだとのこと。今その罪をあがなわねばならぬ人々は災難です、誰か他の人がなしたことなのに。これはどの国でも同様でしょう。

ハンペル

1943年4月25日

大きな病院がすべて接收され、現在あちこちに庶民のための小さな病院があります。ヤップの下では「ご立派な」（皮肉）ことです。

ハンペル

1943年6月1日

ヤップはあらゆる病院を接收したうえ、薬局も接收しています。今日はオランダの薬局が明け渡されました。³²⁰ もう私は、3名の戦争捕虜たちのためにオバットゥを仕入れ値で手に入れることができません。³²¹ W夫人は解雇されるでしょう。

ハンペル

1943年9月20日

ここで人々は、続々と熱帯性マラリア³²²で死亡しています。S氏もマラリアで亡くなりました。あのインドネシア人医師に尋ねました。本当は話してはいけませんでしたが、でも彼は私の糖蜜の良いお客なのです。

ハンペル

1944年1月1日

O. B. さんが激しい心臓発作を起こしました。私たちはすこしずつ、みんな何らかの病気になります。心臓でなければ、神経あるいはなにか別のもの。そして薬はありません。

³²⁰ オランダ薬局(Nederlandsche Apotheek N.V.)はバタビアのチキノ2番地にあった。

³²¹ ハンペル夫人が「保護」し、定期的に食糧、衣類、薬を供給しているアデックの捕虜3名のこと。

³²² 熱帯性マラリアに伴ない発熱発作が連日起きる。この病気で死に至ることもある。

ハンペル

1944年5月2日

下町で肺ペストが発生しています。汽車か何かであっちの方へ行く際には予防注射されます。彼らは町の全地区を封鎖しました。こんなこともあるのです。

ハンペル

1944年5月14日

R. R. 夫人は病院で臥せています。彼女は近年の病気のひとつになっています、すなわち子宮脱出症です。彼女たちはみんな熱心に、ものすごく、長時間働き過ぎるのです。そして私たちの女王さまは「哀れなオランダの女性たち」についてまだ話しているなんて！ここで私たちが苦境に耐えていることは誰も知らないのです。収容所にいる婦女子はもっと悲惨な状態だということを。インドネシアの人民は続々と死んでいます。14日前、掻きつづけているこじきを見ました。突然彼は気泡でいっぱい。数日後には身体中が白いかさぶたにおおわれ、金曜の午後には道端で死んでいました。年老いた紳士もそうです。彼は土曜の朝亡くなりました。常に同じ場所で同じ人を見ます、そして突然彼らは死亡し、運び去られます。数日後にはまた違う人が横たわっています。ママは偶然その老紳士が連れ去れた時に居合わせ、泣き始めました。私は冷静です、なぜならコーヒー工場の周囲では死にかけている人々が横たわっていますから。毎日のように見かけるのです。

ハンペル

1944年8月7日

とてもびっくり。私の友人、支局の郵便局長が亡くなりました。少し前に話したばかりでした。今朝またそこに行く必要があり、その時ちょうど遺体が運び出されたところでした。もちろんマラリアでした。誰かがほかの病気で亡くなると、ただほっとします。プルワカルタ通りで誰かがオウム病³²³で死亡しました。どんな病気なのか知りません！でもいずれにしてもマラリアや盲腸とは異なる病気です。

³²³ オウム病あるいはプシタコシスは、鳥類を媒介にして感染する肺病に類似した病気である。乾燥した鳥の糞に含まれる細菌 *chlamydia psittaci* の吸引が原因。この疾患は急性で深刻な経過をたどる。(M.B. Coêlho, *Zakwoordenboek der geneeskunde: bevattende de meeste in de geneeskunde voorkomende uitheemse en Nederlandse woorden, uitdrukkingen, afkortingen enz., geheel herzien door G. Kloosterhuis* (23ste druk, Arnhem 1989), 563,649)

ハンペル

1944年10月22日

K. が亡くなりました。彼は奥さんとチピナン刑務所に入っていました。彼が闇で売っている薬をむりやり飲ませられたと人々は思っています。薬を「チャトゥテン」[闇取引]する人は、墮落しています。キニーネ療法などをする必要があります、薬を闇で買わねばならず、でもお金がないと想像してみてください。それは人の命をもてあそぶことです。1錠のキニーネが闇取引では25セントです。ニッポンは薬の闇取引をしている人を検挙すると、自分の薬を飲ませるのです。

スマラン

ヒューセン

1942年5月10日

数日来、私はめまいの発作の厄介になっている。またなくなってくれることを願う。この時期には厄介なことだ。

ヒューセン

1943年3月3日

聖エリザベト病院が明け渡されるとの通知。だからノイベルガー医師はもう手術できないだろう。患者たちは出来るだけ早く回復する必要がある！ミーシェ・ファン・フリートはそこに半分切断された足で臥せている、でもすぐに帰宅できる。看護婦たちはグダンガンの看護婦宿舎に行くことを望んでいる。

ヒューセン

1943年4月15日

聖エリザベト病院は明け渡さなくてもよい、すなわち妥協に達したのだ。また手術が許可され、だから患者を入院させてもよい。でも一部の病棟は負傷者のために整えておく必要がある！ノイベルガー医師はよみがえり、水を得た魚のようだ！

ヒューセン

1943年4月28日

午後、私たちはエリザベト病院が閉鎖されたと聞く。荷物といっしょにヤップの看護婦、数人の医師、日本人教授がひとり到着している。だからやはり閉鎖は決定的ということだろうか？どうなるのだろうか？

ヒューセン

1943年5月6日

マリオンが下町に。フーフエル医師のところに行かねばならない、眼が悪くなったのだ。幸い彼女は、私の予備のメガネフレームを使うことが出来る。でもやはり眼鏡には6ギルダーかかる、この時期では大金である！

ヒューセン

1943年5月9日

ワウドストラ夫人（歯科医）は、「収容所」入りする必要がある、彼女の器具が全部封印された。ケンティー歯科医の器具も運び去られたようだ。バルソニー歯科医から彼らは「いろいろ」借りたのだ！

ヒューセン

1943年5月19日

ハンシェ・ウルフは今具合が悪い。昨日マリオンは、彼といっしょにノイベルガー医師のところに検査に行ってきた。扁桃腺を切る必要があるようだ。今のところほうがいとオバットウを飲むこと。ノイベルガー医師はボロムベルフ薬剤師からまだストレプトジル³²⁴を入手することができた。

³²⁴ 抗細菌性あるいは防腐性の薬品。

ヒューセン

1943年6月4日

ノイベルガー医師は、もうエリザベト病院で手術をしてはいけない。中国人とジャワ人の患者のみ入院可能、彼らはだから日本人医師たちに治療されることになるだろう！

ヒューセン

1943年6月20日

マリオンは、ハンシェについて話すためにノイベルガー医師のところに出かける。彼と共に、ずっと炎症している扁桃腺を切除するためにアンドゥ医師のところに行くことを決めた。ハンシェには、6月22日火曜日の誕生日の後に話すことになるだろう。マリオンはとても神経質になっている。

ヒューセン

1943年7月3日

午後、リニ・カルペンティエール・アルティング（ノイベルガー一家のところに居住している）は、アンドゥ医師が7月5日月曜ニッポン時間5時にハンシェを治療できると電話してきた、と話しにやってきた。

ヒューセン

1943年7月4日

私たちは、部屋着で楽しく編み物をしていた。その時突然、私たちの後方で男性の声が聞こえた！フーフエル医師が入ってきたのだ。ファン・デル・ホルスト医師が彼と私の眼について話し、彼はすこし強めの眼鏡一そろいを持ってきた！私はふたりにとっても感謝、私にとって下に行くのは不可能だから。幸い腕時計を売ったお金を持っていて、新しいメガネを購入することができる。

ヒューセン

1943年7月5日

マリオンは、ハンシェの喉の手術をととても怖れている。10時半、コーヒーを飲み、ニッポン時間12時に食事（スープとパン）、ハンシェは何が待ち受けているかを知っている。彼は平常心を保っている！3時半マリオンが彼と一緒に下に行き、4時半にはすでにアンドゥ医師のところ、そこで半時間表のベランダで待つ必要がある。それからマントゥリ[看護人]が来て、ハンズに錠剤を与える。その後、中に入る。ハンズは麻酔を受けない、でもまずモルヒネ注射。それから喉を洗浄し、部分麻酔のため喉に2本の注射。これが終わると、マリオンは外に出る必要があり、短時間（20分くらい）の後すべて終了。扁桃腺は切り取られ、それは本当にひどかった。ハンシェがベッドに横たわっていると、彼女はしばらく付き添う、でも安静にしておくため、彼女はすぐに立ち去る、それで早く帰宅。

ヒューセン

1943年7月8日

ハンシェが午前中に帰宅、ぐったりしてみえる、まだかなり注意する必要がある。

ヒューセン

1943年7月14日

ロア夫人（ラースカンプ薬局の）は、彼女のところも閉鎖するべきだろうか心配していた。というのは包帯用の布、綿、注射針などが没収されるからだ。今ノイベルガー医師が病気（腰痛）なので、ヘイ・ファン・デル・ホルスト医師が診療所（クリニック）を引き受ける必要がある。彼はペンドリアンの診療所のチーフになろうとは一度も考えたことがなかった!! 今日はお金さえ稼いだ。患者をひとり治療した後、彼はどれくらい払うことができるだろうかと雑用係のサルミンと相談した！外部からの人だとサルミンが追いかけて行って現金で支払うよう求めた。というわけでヘイは今日11ギルダー受け取った！

ヒューセン

1943年7月16日

ヘイ・ファン・デル・ホルスト医師が新しいメガネを持ってくる。値段を聞いて私は仰天、全部合せて（フレーム、レンズ、ケース！）7ギルダー50セント。彼がとても安いのは幸い、さもないと支払いが難しいことになる！これもまた解決した。

ヒューセン

1943年7月30日

マリオンはハンスとエーリックといっしょに下に。少年たちは歯医者へ、彼女は皮膚炎症のためにアンヘネント医師のところへ行く必要があった。おそらくかなり前にバスの中で病気をうつされたのだろう。あまりよい具合ではないようだ、それにオバットゥのために高価なことになりそう。

ヒューセン

1943年8月12日

12時ごろマリオンは、何かあるのでちょっと来て欲しいというノイベルガー夫人の手紙を受け取った。私たちはひどく驚く。1時間後、マリオンが戻り、歯科医のトーマス医師が今朝仕事中に脳卒中の発作で倒れたと話した。家族にとってなんという悲劇!!!…中略…

ニッポン時間7時、マリオンがトーマス一家のところにどんな具合か尋ねに行く。少し後、リュバイ・バウマン夫人がヨーピーとテオといっしょにやって来て、トーマス医師の意識が回復せず、すでに5時には死亡したと私に話す。…中略… マリオンがひどく狼狽して帰宅した時、トーマスが意識をまったく取り戻さず、突然新しい発作に見舞われたと聞く。昨晚、彼はまだ素晴らしい書物を楽しみ、健康だったのに！

ヒューセン

1943年8月14日

トーマス医師は、今日埋葬されるだろう。彼の息子たち、エディーとハリーはバンドンガンからやって来たが、父親をもう見るができなかった。ひつぎはすでに閉じられる必要があったのだ。…中略… 4時半にマリオンが、トーマス夫人、エディー、ハリーとオットイ・テル・ヘーゲ

といっしょにバスで埋葬のため下に行く。彼らがバスに乗っている時、ひつぎと花を乗せた黒い自動車が通り過ぎる。かなりのスピードで壊された道路を揺れながら進む！見ているのはおぞましいほど！ 上記にあげた人々以外には、ボイッセバンとノイベルガー一家、ジャーネ・モーフ・リッケルト夫人、カンブマン夫人、そしてちょうどすべてが終わった後、バーソニー歯科医と夫人、クーベルフ夫人、ファン・ヘット・ホーフト夫人とビュールマン夫人がやって来た、彼らはみんな5時半からだと思っていたのだ！それからハンガリー人何人かも。だからみんな外国人！ ブランダ・トトック[純血オランダ人]は誰もいない！マリオンによれば教会墓地への不気味な埋葬行列で、ひつぎから湿気が滴っていた。熱帯地方で48時間は長すぎる！マリオンは帰宅した時、まだ印象深げだった。それにまだ毎日のように命がけで闘っている何千人もの人を見ると！

ヒューセン

1943年9月14日

マリオンと私は夜まだ一匙のドラムスティックの汁を飲み続けている、とても忌まわしいものだと思っているが、でも効き目がすばらしく、カスカラ³²⁵などの代用になるものだ！ほとんどお金はかからないし、樹木はこの横の空き地にあり、14個を1匙半の水でわずか10分煮立てるだけ。

ヒューセン

1943年10月15日

マリオンはコーヒーを飲んだ後、10時半に下に。まず歯科医のリーム・チュン・ティオンへ、彼女は何度も痛みがあったからだ、彼はなにも見つけることが出来なかった。彼はバーソニー歯科医の診察室などが封鎖されたが、まだなにも持ち去られていないとマリオンに話した。それから彼女は、フィッサー看護婦（ウィリー・ファン・ラーウィック夫人）のところに行く。彼女は困難な生活をしていて、一日3度洗淨のためにゲニーラーンの向かい側の売春宿スプレディッドに行く必要がある。³²⁶ 彼女は多くの出産に立ち会ったが、なんとか生活を維持できる収入があるだけ。

³²⁵ ドラムスティックは、ここではおそらく自ら考えた名前、ある種の樹木（タマリンド？）の熱帯果実あるいは花から作られる下剤。これは*rhamnus purshiana*から取れる苦い下剤のカスカラ（皮あるいは樹皮）の代わりに用いられる。

³²⁶ ゲニーラーン8番地にある元ペンション・スプレディッドは、日本占領時にはスマラン倶楽部という名称の慰安所であった。

ヒューセン

1943年10月27日

ペンドリアンの診療所は、ヤップの医師ひとり、中国人医師ひとり、インドネシア人医師ひとりとアンヘネント医師で再開されたようだ。³²⁷

ヒューセン

1943年11月11日

エーリックが夕暮れ時にドラムスティックの薬の作り方を尋ねにやって来た、というのはボダン-ティガ（エーリックのチモール人友人ダニエルの父親で、トーマス医師の古い家の隣に住むヘック獣医の監視人）もサキット[病気]で、彼も作りたいと思っているからだ。後から、エーリックは、ボダン-ティガがマグカップにいっぱい飲み、おいしいと思ったとも話した。マリオンと私はものすごく愉快だった、私たちの頭の中には彼がすでに走り出しているのが見えるよう。なぜなら私たちは、ベッドに入る前多くても3、4匙飲み、それでもかなりの効き目があるのだから！

ヒューセン

1943年12月8日

ハンシエは病気。彼は昨日の午後、カチョン[街の不良少年]たちが道に石を置いていたのを、気をつけてみていなかったため、牛の通り道で自転車から落ちたのだ。今、彼は胃のあたりが痛くて嘆いている。

ヒューセン

1943年12月21日

モーフ氏は、夜中に具合が悪くなり救急車でCBZ（中央市民医療施設）に運ばれた。おそらく何か変なものをつたべたらしい。医師たちは誰も来る事が出来ず、いつもは上に来るペルマディ医師はちょうどソロにいる病気の義父のところだった。

³²⁷ この診療所は、J.K.W.ノイベルガー医師が逮捕された後、9月に閉鎖されていた（ファン・デル・ホルスト医師は、8月にすでに収容されていた）。

ヒューセン

1943年12月27日

マリオンがフィッサー看護婦（ウィリー・ファン・ラーウィック夫人）のところに行った、彼女は幸い回復していたが、とても疲れていた。³²⁸ 彼女は12月24日になんと3人ものお産をしたばかり。それで彼女は10個の卵を得た、支払いほもつてのほか（日本人の子供）。…中略…

多くの原住民こじきが死んでいる。数日前には、ゲーニーラーンにあるラーウィック夫人の家の前でひとり。昨日は彼女のバブがパサール・ジョハールでふたり横たわっているのを見、カルト - ジョガは、ジョハールやアルーン - アルーン[街の広場]で日に10人は倒れていると話した。チャンジ - タナー・プティーでもすでにおこっている。状況は日ごとに深刻になる。

ヒューセン

1944年2月1日

ルート・ビルケンハウエルが、赤痢にはもうオバットゥがないと話した。ハンスはまだ具合がよくない、赤痢でなければいいが。いずれにせよ私たちは気をつけなければならない。

ヒューセン

1944年2月18日

ハンスがまた数日来腹痛。私はCBZに行くことをすすめた、ちょうどマリオン自身も考えていたことだった。エーリックはジャーネに手紙をもって情報を得に行く。彼が戻ってきたら、マリオンはまずCBZを試み、だめだったら診療所、総合病院の外来へ向かう。…中略…

3時15分前にマリオンとハンスが帰宅。ハンスはアンヘネント医師によると大腸の具合が悪いとのことで、だから特別食（お粥、バナナ）。2月21日月曜日にもう一度戻り、明日大便を送る。彼は外来診療科の1ヵ月診察券をもらい、費用は50セント、薬品用の白い紙とともに2ギルダー50セント。CBZはオバットゥを出さず、アンヘネント医師のところにはまだ充分ある、だからこれが最善なのだ。マリオンはラーウィック（ファン・バプスト・フィッサー）夫人のところにも立ち寄った。彼女は、最後（12月）に会ってからはマラリア発作をおこしていない。収

³²⁸ 彼女は、熱帯性マラリアの発作から回復したばかりであった。

入はとてもわずか。向い側（ここは日本軍の兵卒の売春宿）には、まもなく欧州人女性も収容所から支援に来る。私たちは誰だろうかとても興味がある。³²⁹

ヒューセン

1944年2月21日

ハンスが自転車でアンヘナント医師のところへ行く。彼のお腹はかなり回復。彼は2ギルダーで粉薬ひとそろいをもらい、まだ特別食を続ける必要がある。それで食卓での不機嫌と無作法を引き起こしている。

ヒューセン

1944年2月24日

ハンスはアンヘネント医師のクリニックにまた下に、エーリックと一緒に行く。なぜなら彼は散髪する必要があるから。ハンスはもう戻らなくてもよい、彼の腹痛は回復。1本注射され、力をつけるために飲み薬を1本もらった。彼はまた何を食べても飲んでもよい。私はまたすぐに具合が悪くなることを心配している。このおふざけでマリオンは合計6ギルダー費やした。このままであることを願うばかり。

ヒューセン

1944年2月26日

病院では悲惨なことが多い、何人もの死者、多くの患者が増し、みんなとても重病。

ヒューセン

1944年2月28日

マリオンは、ビルケンハウエル母さんの誕生日のため下町に行く。CBZの傍、ベチャ[輪タク]乗り場で少し待つ必要があり、彼女は衰弱した病気の人々が中に運ばれる悲劇的な行列を見る。そ

³²⁹ ゲニーラーンにあるスプレディッド慰安所のこと。少なくとも36名の欧州人婦女子が、1944年2月末にアンバラワとスマランの強制収容所から連れ出され、スマランでスプレディッドをはじめ4ヶ所の売春宿で売春を強いられた。脚注参照（従軍慰安婦に関する）。

してこれでも足りないかのように、ジャーネが来て、ちょうどふたりの婦人が死亡し、その後ふたりの子供たちがますます悪化していると言う。赤痢が広まっているようだ、細菌性赤痢³³⁰で、ジョルナタンでも。…中略…カンポン社会では14名がガプレック[乾燥キャッサバ]で中毒死している。

ヒューセン

1944年3月3日

木曜日のCBZの面会は、まだ引き続き行なってもよいが、自由な患者のみである。³³¹他の人々は、現在日本人医師の担当だ！…中略…ブンタラン医師はとてもやさしい、他にはどうしようもない、スカルジョ医師も同様。

ヒューセン

1944年3月26日

ファン・ブラムセンがマラリアらしい、そしてキニーネは不足している。私は幸いそこで彼を助けることができる。

ヒューセン

1944年3月28日

ファン・ブラムセンの小さな男の子は、もう2日間めそめそ涙ぐんでいる。彼は時々耳をつんざくような叫び声をあげる。かわいそうにどうしようもない、なぜなら彼は先週の水曜日に予防注射され、現在天然痘になりかけているところだから。

³³⁰ 熱帯地方における大腸の強度の伝染性疾患（血便を伴う下痢あるいは粘液血便）。病状は激しく持続的な下痢で始まる。患者は高熱を出し、時には一日10回から15回粘性血便を排泄する。（Coelho, 209 及び S.P. Smits, *Hoe blijf ik gezond in de tropen* (Amsterdam 1990), 36)

³³¹ 強制収容所からではない患者のこと。

ヒューセン

1944年4月4日

私は具合が悪く、空腹で、熱っぽく、頭が痛い。焼けつくように熱く、もちろん普通の徴候だ！病気になどなれない！ちょうど自らデルマトルで足の指4本にできた水虫を乾かして治したばかり。これにはここでの最初の日からかかり、かなりものでもあった。知らされたことによると以前のバブと子供がひどかったとのこと、今のバブはかかってない。でも風呂場の床がひどく滑りやすいのとごしごし洗ったりしていないので、まだばい菌がいるのだろう。私は今靴やサンダルなしでは床に足を置くのは用心深くしている。バブは他にはないので私たちの風呂場とトイレを使う必要がある。人は順応することを学ぶのだ！いずれにせよそれほどひどいとは思わない！

ヒューセン

1944年4月5日

夜中ずっと気分が悪かった、ものすごい熱だった。幸いアスピリンがあったので飲んだ。朝方には38度5分、だからそれほどひどくない。マラリアだとは思わない。…中略… ファン・ブラムセンは、奥さんが外出した時、彼女がまた明らかに妊娠し、フィッサー看護婦によればもう半ばらしいと話した。だから赤ん坊は8月に生まれるだろう！そのときにはまったく違う時期になっていることを願おう！このようにここでは心配事が増えている！ひとりめの子供は、大きな惨めさのさなかで生まれ、その時彼女はどのようによいかかわからず、実際なにもなかったのだ。

ヒューセン

1944年4月9日

昨日は日記が書けないほど気分が悪かった。キニーネを3錠食後ごとに飲んだ、今日は熱が下がった。ただまだキニーネの影響でいらいらし、そして忌まわしいほど衰弱している。

ヒューセン

1944年4月10日

手足がすごく痒くて一晩中眠れなかった。そして今は体中が痒い。だから私は多分軽いキニーネ

中毒。イライラし、すこし息苦しい、話す時も。でも熱はもうない。これが長続きしなければいいが、なぜなら神経がすり減るから！

ヒューセン

1944年4月11日

ファン・ブラムセンの乳児が、ちょうどCBZに運ばれたところ、スジョノ医師とフィッサー看護婦が強く勧めたのだ。この子は4日間下痢と吐き気があった。ファン・ブラムセンと奥さんは今もちろん意気消沈している、当然のことだろう！

ヒューセン

1944年4月12日

ファン・ブラムセン夫妻はCBZへ赤ん坊を見に行く。彼らが戻って来るのはしばらくかかるだろう。思っていたより面会時間が遅かったので、彼らはかなり遅くなってから帰宅した。赤ん坊の症状はよくなった、熱はない。あとは待つのみ。

ヒューセン

1944年4月13日

今日始めてまた全快した感じがする。背中痛み、頭痛ももうなくなった。

ヒューセン

1944年4月14日

リーム歯科医のところファン・ブラムセンが接続歯を固定してもらった、リームはセメントがまったく手に入らないと嘆いた。彼は米国セメントを一包み50ギルダーでも支払いたいと思っていた!! 抜歯はしたくないと思っていた、なぜなら麻酔剤がもうないから!! この国は繁栄そのもの（皮肉）！ あらゆるものに満たされている（皮肉）!!

ヒューセン

1944年4月19日

ファン・ブラムセン夫妻がCBZへ行く、また赤ん坊を運び込んだ。彼によれば回復するとのこと。
この子はとても衰弱してみえる、本当によくなるのか私は心配。

ヒューセン

1944年4月22日

赤ん坊はよく泣いている、でもいづらか回復したようだ。今日奥さんは、原住民のオバットゥを始めた、彼女によるとスジョノ医師の勧めだとのこと？

ヒューセン

1944年6月21日

6月18日の日曜以来再びマラリアの発作でベッドに臥せているネル・Qは、ここ2日キニーネの錠剤を飲んでいづらか回復している。新しい種類で処方箋を持っている時だけもらえるのだが、幸い安価で15錠が12セント（一回これ以上はもらえない）。

ヒューセン

1944年6月23日

メラ・ファン・ブラムセンが病気、「神経」症も加わったと私たちは思っている！夜中に40度の熱、日中は熱がない！暗くなってからルーウィ・ファン・ブラムセンが私たちのところに来て、Q夫人の横にある長椅子に坐り、今とてもひどい状態で医師に電話したので、医師はもうすぐ来るだろうと話した。多分妻は病院に行く必要がある！そして明かりのためドアを開けたままにできるかと。もちろんだ、私たちは医師が来るまで起きていた。ジーケル医師のようだ。彼はひどい病気だとはみていない、軽いマラリアと憶測して、ムーレマンス³³²で入手できる薬を書き留めた。そしてルーウィが、発熱で出産が早まる場合に病院に入院することについて話し始めると、ジーケル医師はフィッサー看護婦を勧めた。私はルーウィが「彼女を無料の患者とみなす必要は

³³² ムールマンスは、スマランにある薬局の名称。

ありません。私は今支払いする用意があります」というのが聞こえるようだ。それに対してジーケル医師は「そのお金を出産のために使いなさい」と答えた。³³³

ヒューセン

1944年6月24日

ベッドで読書中、私はメラとルーウィが木箱やトランク、戸棚をガタガタイわせ、立ち去るのを聞いた。あとから、彼らがフィッサー看護婦のところに行き、彼女は赤ん坊が逆子だと診断し、それで医師のところに行くべきだということがわかった。でもメラは行きたがらなかった、それでルーウィが医師を呼びに行く。彼らはQ夫人や私に注意を促すことなく、何でも自分たちでする。私たちは助けるつもりだった、でも魔術や迷信を信じ猜疑心のあるメラはもちろん助けを求めようとしな。…中略…

ルーウィが戻ってきて、メラに「ジーケル医師がCBZに行くよう勧めている、救急車がすでに手配されすぐに君を迎えに来る。子供は逆子だ。まだ産月が満ちていない、実は7ヵ月と3週間だ。彼は子宮の拡張を心配している。CBZの医師たちは素晴らしく、必要なものがすべて揃っている。多分治療の後、明日また家に帰れる」と言っているのが聞こえた。本当に5分後CBZの車が家の前に来て、メラがいなくなった。その5分後、ルーウィがQ夫人のところに来て、病状はとてもひどく、彼は妻に話す勇気がないと言った。

ヒューセン

1944年6月25日

ルーウィ・ファン・ブラムセンが出て行く、彼が戻って来るとお隣に立ち寄る。後でハンナから、メラがCBZについてすぐ息子を産んだと聞く。体重5ポンド、妊娠8ヵ月だったので早産児保育器だ。子供は元気、メラは具合があまり良くない。

³³³ 戦後、ジーケル医師は、スマランのゲニーラーンにあるホテル・スプレンドィッドで強制的な売春が行われたことを知っていたと証言した。彼は、日本人にうつされた性病を治療した印欧人の少女からそのことを聞いた。ジーケルは、胃の治療のためにきていた日本人患者を信用し、本当に女性を強制的に売春させている慰安所なのか見に行くよう尋ねることにした。このアオヤギ・マサオという名の日本人は、翌日ジーケルに医師の推測は正しかったと話した。アオヤギ・マサオは、自分のお金とジーケル医師の財政的支援によって少女たち何人かを数夜「予約」（慰安婦を予約するために券が発行された）し、すなわち少女たちが自分自身や友人たちがいずれにせよ数回休養できるようにした。アオヤギ・マサオを通じてジーケル医師は資金だけでなく、薬品、注射器、食糧の小包を少女たちに与えていた。（NIOD, IC 000.238-248 及び004.006-014）

ヒューセン

1944年6月27日

ネルが検査のためCBZへ行って来た、結果は良し、でも衰弱しすぎている。彼女はオバットゥとして7錠の鉄分の丸薬をもらって来た。カンポンはどこでも毎日死者がいて、それはすべてマラリアのせいと言われる！

ハンナ・ウィーゲルスからメラが熱帯性マラリアで、子供はまるで「砂袋」のようだと聞く。ネルは、常時面会者の赤いカードを持ったルーウィをCBZで見かけた、これは重病の証拠。…中略… 午後、CBZから「トゥアン[ご主人]はすぐに来るべきだ！」との通知を携えた警官に呼び出される。夫人がファン・ブランセンを呼び出した。彼は少し後、子供を夫人ではなくバブに任せた後に出発した！後で、注意を促したのは警官ではなく、ガン・ワーグハルスの電話を持っている印人だと聞いた。ルーウィは警官をできるだけ避けたかったのだ！

ヒューセン

1944年6月28日

ファン・ブラムセンの乳児は、今朝CBZから埋葬される。私たちが代表してピート・Qが弔慰を示すために出かけた。それでファン・ブラムセンは、帰宅した時Q夫人に感謝の意を表した。

ヒューセン

1944年7月22日

ピート・Qが病気。リーン医師が来て、検査のためにCBZに行くことを勧める！私は即座にいつネル、アーリと私がチフス、コレラ、赤痢の予防注射に行くことができるのか彼に尋ねる。明日可能で1人当たり1ギルダーかかる。

ヒューセン

1944年7月23日

日本人イノセがふたり乗りの乗り物でやって来る。私は窓からのぞき、彼は奇妙で不潔に見える。Q夫人は、彼からピートが治療されているCBZのために10ギルダーもらう、そしてベチャでピートのところへ行く。ニッポン時間午後7時に、私はアーリといっしょにベチャでレジョサリに行く。ネルは自転車で行く。注射され、自転車で帰る。ドライブは気持ち良かった。

ヒューセン

1944年7月29日

ピートが突然CBZを退院、回復！フレディーはまだ回復していない、Q夫人はせき込み、胃のあたりに痛みを感じ、ネルも気分が良くないと感じている！…中略… この隣でも数名病気、でも何か具合が悪いのは常に虚弱な人たちだ！

ヒューセン

1944年8月9日

ピートがまた病気でイライラしている。午後6時頃、突然彼が横たわっているグダン[物置]から壁を蹴っている音と共に「死んでしまう」という哀れっぽい泣き声と叫び声が聞こえた。私はそこに向かっていくと、そこではピートがヒステリックに泣き声をあげながら自分の髪の毛を引っ張り、壁を蹴って自分を投げ飛ばそうとしながら横たわっていた。見聞きするのも胸が悪くなるほどだ。私はただちにベチャでアーリを医師のところまで走らせたが、その人自身が病気だと分かった。それから医師をさがしにお隣へ。ちょうどそこに着いて「映画のシーン」を話した時、イノセの自動車が前に止まる。ネルはその間自転車で外出。イノセはその若者を後ろの部屋に運び、5ギルダー与えた後立ち去った。ネルは苦労して医師を見つけた、すなわち来る用意のあるガーフェル医師だ（ジーケル医師は忙しすぎ、リーン・ファン・セタラン医師は診療所を閉鎖したところで、もう一人は現金で5ギルダーを払う場合のみ来るつもり）。このガーフェル医師はすぐにマラリア発作だと診断し、お腹の粉薬を処方し、ポリクリニックでもすでに処方箋を書いていた。だからピートはもうシーンを生み出すことはできない。

ヒューセン

1944年10月18日

今日はアーリの誕生日。彼女は足が痛くてまだベッドに臥せている。訪問に来る6人の子供のうち3人もすでに傷がある！

ヒューセン

1944年10月21日

一昨日から喉の痛みと熱、でも日中は出来る限り動きまわっている。今日はもう昨日よりかなり良くなった。私はまた静かに編み物をしている。マラリアではなさそう、なぜならかなり食欲があるし震えがない。

ヒューセン

1944年10月22日

一晩中気分が悪かった。まず発熱、そのあと（偽造のアスピリンを飲んだ後）ずっと汗でびしょぬれ。長続きするとこれも気持ちのいいものではない、そして今、朝10時、まだひどく発汗していて衰弱していると感じる。

ヒューセン

1944年10月27日

10月25日水曜の午後、突然高熱。本当に病気だと感じる。木曜日には何も出来ないほどで、Q夫人が看護婦として振る舞う必要があった。彼女はうまく対処してくれた。突然の震え、だからやはりマラリア。絶望的な勇気をもってキニーネを飲む。熱が少しずつ下がる。今日は熱っぽい、でもベッドにとどまりつづける。おそろしく衰弱している感じ。

ヒューセン

1944年10月29日

はじめてまた動きまわる。まだいっくらかキニーネのせいで奇妙な感じ。またいっくらか裁縫（繕い！といった方がいい！）と編み物ができる。

ヒューセン

1944年11月17日

マラリア再発。11月15日に始まった。でもマラリアではないことを願っていた。だから安静にしてキニーネを飲む。

ヒューセン

1944年11月21日

またかなりのマラリア発作があった。もう終わってくれたらいいのに。おそろしく衰弱している気がする。

ヒューセン

1944年11月28日

突然めまい。目の前が暗くなり、ベッドに横たわるとものすごい吐き気、そして息苦しい。夜には回復する。

ヒューセン

1944年11月29日

いくらか気分がいい、でもすごく疲れている。だからまた休養を多く取る、仕事はないのだから。ブック・ファン・ウーシックによると、現在赤痢でたくさん亡くなっているとのこと。もちろんまたオバットゥが不足しているのだ！

ヒューセン

1944年12月9日

Q夫人は、CBZで赤痢のため亡くなった70才の老女の埋葬に行く。…中略… Q夫人は、今日CBZで120名（すべての人種）死者がいて、ほとんどが赤痢だったと話した！考えられないことだ。この他に今日、強制収容所から14名が埋葬され、毎日のようにひとりかふたり増えている。もう耐えられないほどだ！これはまったくの殺戮である！ああ、いつ終わりが来るのだろうか？

ヒューセン

1944年12月10日

ブックが来て、1週間前にまだレンノ・ウィーゲルスと遊んでいた少年が赤痢で死亡したと話した。このように続いていく！…中略… この少年の埋葬に行くハンナが、今日9件の埋葬があり、そのうち6件がバンコン収容所の人だと話した。そこで流行しているのだろうか？考えているとただ忌まわしいだけだ。

ヒューセン

1944年12月12日

イェット・フォールバーイ・ラケートが彼女の娘とやって来た。彼女たちは私にジャムー[原生の薬草]と強壯剤を購入するつもり。イェットは私が前回よりもっと具合が悪く見えると思っている。

ヒューセン

1944年12月15日

先週の日曜（12月10日）に子供を埋葬したバーレンツ一家では、現在赤ん坊が同じく細菌性赤痢でCBZに臥せている。悲惨なことばかり聞かされる。

ヒューセン

1945年2月1日

イーチェ・マゲナーが細菌性赤痢でCBZに横たわっている。赤いカード、だから危険！彼女はタマゴとカチャン・イジョー[小粒のグリーンピース]とオートミールを食べることが許されている、でも家族が自ら手配する必要がある。CBZは食事を供給することができないのだ！

ヒューセン

1945年2月19日

子供たちはまた傷だらけ。ネルは足が痛む、フレディーも同様。アーリは手に傷がいっぱい、身体にもあるのを見た。リーシェはいつも掻きながら歩いている！私はだからあらゆることに出来る限り注意している、粗悪な石けんにもかかわらずしょっちゅう手を洗う！

ヒューセン

1945年2月20日

マラリアの発作が始まりそうだと感じる、だからジャムを飲む。…中略… 夜ひどい熱。

ヒューセン

1945年2月27日

ディック・ファン・ウーシックが自転車を借り、すぐに私に2本の強壯剤を持ってきた。キニーネを飲むのを止めたらずぐに始めるつもり。そのほか、毎朝タマゴ1個（これは35セント）。高い、でも今は不可欠だ。

ヒューセン

1945年3月9日

うちの隣のカンポンでまた死者。原住民の間で死者がとても多い。とくにパサールでは時々死にそうな人や遺体が横たわっている。

ヒューセン

1945年4月7日

ジョルナタンの赤痢患者がまた3名死亡、あるいはもっと多い。マゲランの刑務所でも大勢死亡している！そこではドイツ人が収容されている！だから意味深い。ここの収容所での死亡率がものすごい。一日にひつぎを2つ乗せた新しい霊柩車（雄牛のチカル[牛車]）が少なくとも2度新ホ

ラント通りを通過して来る！それを私たちは無抵抗に見る必要がある！昼近くに私は突然寒気がし、頭痛、だからマラリア。食後すぐにキニーネを飲んだ。一時的なものだと願う。

ヒューセン

1945年4月8日

気分がいい。かかさずキニーネを飲んでいる！イーチェがケーキ一切れとジャム付きのトウモロコシパンを2枚持ってきてくれ、さっそく私は味わって食べた、なぜならお腹がすいていたから。2個のジュルックス[柑橘類]も。これは明日にとっておく。

ヒューセン

1945年4月19日

マントゥリが来て、フレディーがCBZに工場で受けた腕のけがのため入院したと話す。Q夫人は明日9時に行くことが許される。

ヒューセン

1945年4月20日

Q夫人はCBZに行ってきた。ニッポンが支払う。フレディーはマットレスに横たわっている。歩いてはいけない、腕全体に包帯、でもはっきりと何なのか彼女は知らない。彼は毎日家からの食事が許されている。

ヒューセン

1945年4月21日

フレディーは良くなっている、骨折はない、でも傷と他にもまだある。さて多分彼は、一度きれいに洗われ（彼はボビーやアーリと同様いつも不潔！）、休養し、空腹感なく戻って来る！

ヒューセン

1945年4月24日

(木製の) ひつぎは葬儀社の会員のためにあるだけ。他の人々はガデック[竹で編んだマット]のひつぎあるいはマットで葬られる！

ヒューセン

1945年4月30日

数え切れないほどの子供がまだ産まれている。看護婦フィッサーの診療所はまた満杯。ポチャのフリーダ・ファン・デル・ワウデは金曜(4月27日)に出産し、今日他の人に場所を明け渡すため帰宅する。

ヒューセン

1945年5月4日

またマラリアの発作。先月と同じように簡単に回復することを願う！…中略… フレディーが今日CBZから戻ってきた。ひじのために(右の)腕全体が固定されている！スカルジョ医師やカラモイ医師たちは万策尽きたような印象を受ける。フレディーはまた病院に戻り、あとでまた手術する必要があるかもしれない！

ヒューセン

1945年5月6日

Q母さんとネルはものすごく頭シラミにわずらわされている。いつもものすごく掻く以外にも、朝、昼、晩に何時間も探し出している、ボビーとアーリとヤッピーも手助けしなければならない！前の一家でも南京虫のことも嘆いていたのを私は聞いている！

ヒューセン

1945年5月16日

イーチェがキニーネを持ってきてくれた、15錠入りの包みが2個、1包み12セント。30錠の錠剤（粗悪な製薬）が2ギルダー24セントになる、というのはそれぞれの処方に1ギルダーかかるから。

ヒューセン

1945年5月25日

フレディーは、やはり再度CBZに入院しなければならない、そこで毎日治療を受ける必要がある。また新しい傷が足にできたのだ。彼の腕、あるいはひじと云ったほうがいい、はいまだ具合がよくない。

ヒューセン

1945年6月8日

毎日何度か埋葬地コボンからの死鐘が鳴るのが聞こえる！毎回驚かされる。終戦まであとどれほどの死者が出なければならないのだろうか？最近仕上がった埋葬地の新しい区画は、もうすでに通りまで一杯だ。どれほどの家族が引きさかれてしまうのだろうか、取り返しがつかないことだ。どれほどの人が戦争捕虜や強制収容所、刑務所から出てきたあと、彼らの家族がだれも残っていないことを知らされることになるのだろうか？平和を得るにはすべてを破壊する必要があるのだろうか？

ヒューセン

1945年6月9日

フレディーはあまり具合がよくないようだ。足の指の感染がまだなくなる。夫人はフレディーがジャカルタでもっと治療を受ける必要があるだろうと監視長から聞いた！

ヒューセン

1945年6月13日

オンキーホン医師が、病気のヒレブラント夫人のところを訪れた。やはりマラリア。彼はキニーネの処方箋を与え、そして「ミルク」も、なぜならミルクは現在、乳児ととても年老いた人と病人だけのものだから。

ヒューセン

1945年6月14日

今オイジュニー・ヒレブラントも病気、下痢でとてもひどいもの！赤痢とのこと。

ヒューセン

1945年6月18日

ヒレブラント夫人（表部屋の住人）のところにアンボン人のドゥクン[薬売り]が来る。彼らは花とムンニャン[線香]で働きかける！今、長いことぶつぶつ言うのが聞こえる！ベルンハルト夫人はまさに医師のオバットゥをもらいに薬局に行こうとしている！オイジュニーも今良くなっている。ベルンハルト夫人はキニーネの錠剤なしで戻る、4つの薬局でも手に入らない！おそらく明後日もう一度！長引くほどオバットゥがなくなっていく。ほとんどの処方箋はもう用意することができないのだ！

ヒューセン

1945年6月25日

年老いたヒレブラント夫人は重病。ベルンハルト夫人がオンキーホン医師を連れてくる、彼はマラリアだけでなく口峡炎もみつけた！

ヒューセン

1945年7月4日

フレディー・Qの足の指が1本切断された。それでまだCBZにとどまる必要がある。

ヒューセン

1945年7月18日

またマラリアの発作、でもひどくない。ベルンハルト夫人、アニー・W、ブングケ・クンツもなっている！だからまた急増。

ヒューセン

1945年7月19日

よく眠れた夜のあと、かなり気分がいい、かかさずキニーネを飲む。

ヒューセン

1945年7月21日

まだ打ちのめされている気分、でももう病気ではない。イーチェ・メイヤースはもっとひどく、とても神経質だ。彼女は医師を欲している、でもオンキーホン医師は日曜には来ない。そしてニタ・スレフェルが日曜日に電話した時、彼はちょうど出かけようとしているところで、月曜日に「多分」来ることができるだろうとのこと。

ヒューセン

1945年7月24日

イーチェは昨晚私から（古い）アスピリンをもらい、すぐにもう熱が下がった。今もまだ低熱。…中略… ベルンハルト母さんは病気になっていた、コキ[料理人]は中に入って来ず、ルートはものすごい風邪。だから至るところ何かになっている。うちではマウチェ・ベルンハルトが病気。この隣ではイーチェ以外にも、レンノが病気でブックは咳がひどい。…中略… フレディーは今日帰宅する、CBZには彼の居場所はないのだ。³³⁴

³³⁴ 病院はスマランにおける連合軍爆撃により負傷者で満杯だった。「戦況に関する報道と流言」ヒューセンの日記、1945年7月22、23、24日参照。

ヒューセン

1945年7月25日

イーチェに医者処方箋を取りに行ってもらうのに10ギルダー渡した。彼女はマラリア。フレディーは、CBZで大勢の負傷者を見、負傷者の誰かの腸が床に引きずられていると話した。彼はまだ興奮していた。

ヒューセン

1945年8月2日

午後、また発熱しだした。…中略… 暗くなる前に、私はベエー・クンツのところに行き、夜中もそこにとどまるつもり（午後ずっとそこで眠っていた）、そこでピート・Qが面会人を接待し、私は今面会できる状態でないという。…中略… 私は体温が39度3分あるらしく、すぐにベエーのベッドに入る。1時間後には汗びっしょり、熱は38度5分に下がった。ベエー自身もずっと汗をかいていて、とても弱っている。

ヒューセン

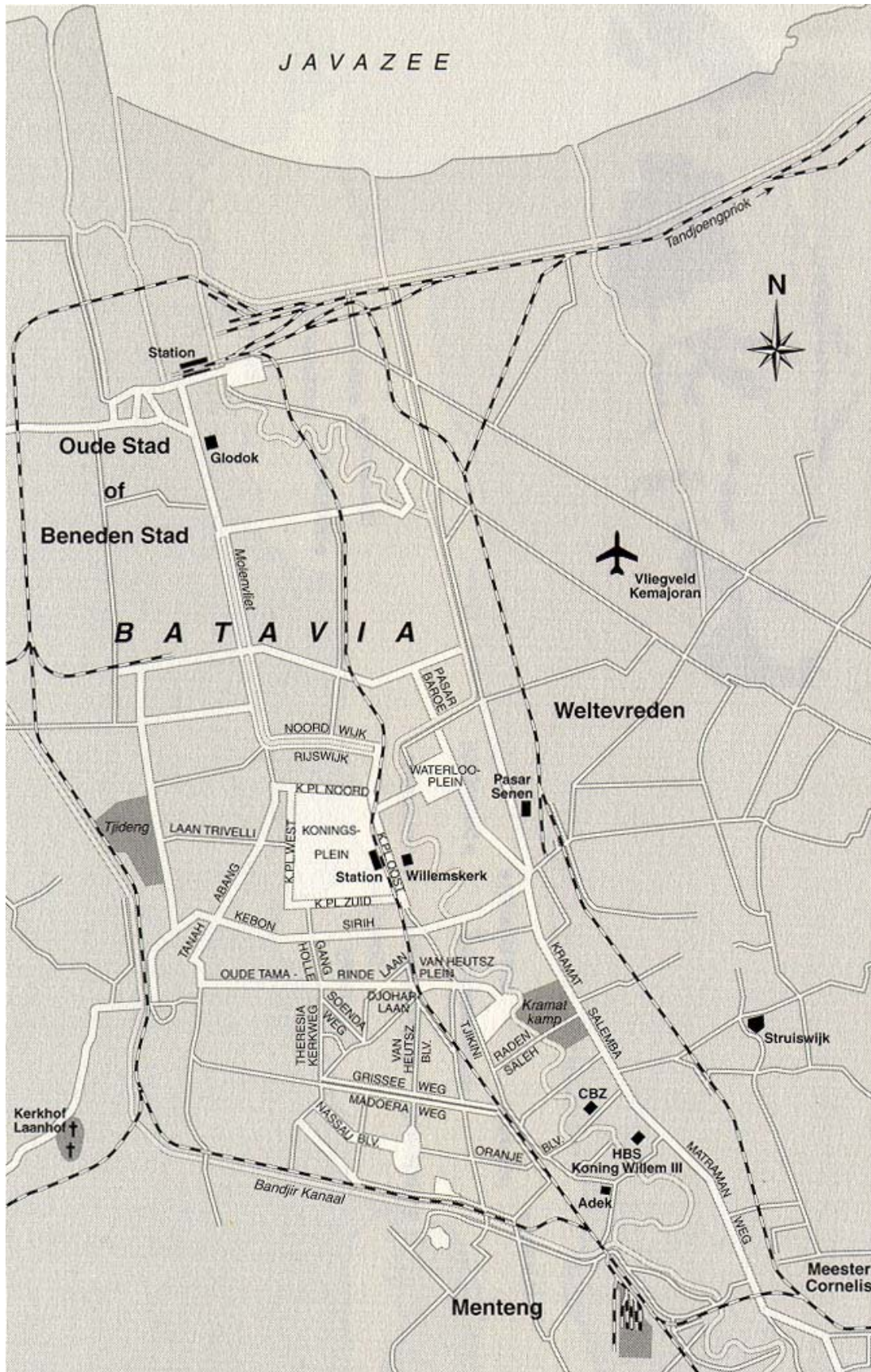
1945年8月5日

ベエーと私はふたりとも回復。

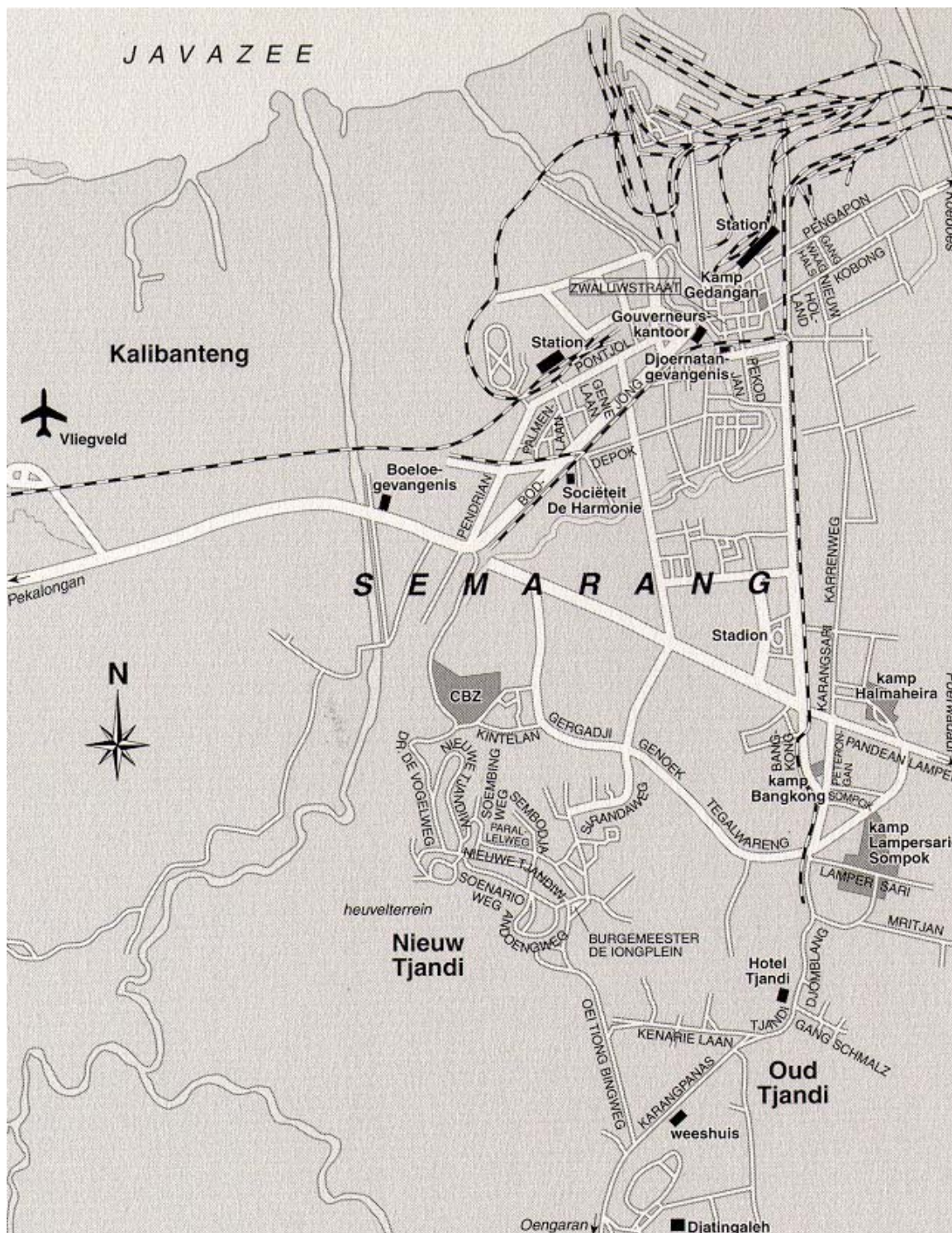
ヒューセン

1945年8月11日

Q夫人は、ようやくフレディーとアンハネント医師のところを訪れた。CBZで爪床を切断した足の指は、すでに14日間とても奇妙に見える。彼は、治療での恐怖と痛みから母親に噛み付き、看護婦を殴り、監視を蹴った、この少年は17才なのだ！ブック・ファン・ウーシクも病気。私たちはみんなここで順次に病気になる。でも町全体でマラリアが流行しているようだ。



バタビアの地図



セマランの地図

教育・娯楽・宗教関係

バタビア

ハンペル

1942年3月17日

R. は、今日授業に出なければなりませんでしたが、学校の扉の上にニッポンの封を見たのでした。³³⁵ そこで私たちはパパと一緒にパサール・セネンへ向かい、そのあとパサール・バルーでアイスクリームを食べました。

ハンペル

1942年4月17日

修道院に何人かのお偉方が来て学校を訪問。児童たちは彼らに向かってとても丁寧に「皆様こんにちは」と言わなければなりませんでしたが、そのあと帰宅を許されて、日本の教科書が届くまで待ちます。

ハンペル

1942年7月1日

日本人はきつとここに長くいるつもりです。彼らはそのようにあれこれ用意しています。現在ライスワイクで写真展をやっています。私たちも見に行きました。素晴らしい写真だったことは正直に私も認めます。日本からのもので、その勝利の様子とか、工場などの写真です。欧州人はB. と私だけでした。残りは原住民の男性とヤップが何人か。B. はハンカチをなくしてしまいました。私たちの横にいたひとりのヤップが突然、彼がちょうどトイレを使用中のような変な音をたて、落ちたハンカチを指しました。パパにそこへ行ったことを話したら、パパはかんかんに怒りました。そこへ行かないほうが良かったようです。でもなぜかしら？ たくさんためになることがあるのです。

³³⁵ 学校が閉鎖されたことを示す。

ハンペル

1942年7月11日

M. B. がここを訪れ、彼女の甥のことを話しました。学校は全部閉鎖されてしまいましたが、その子がいる幼稚園はまだあって、ヤッペンが子供たちと遊ぶためによくここに来ます。ある日その子は「生まれたばかりのヤップ」と遊んだと言ったそうです。ヤップの目は十分に開いていなく、まだ切れ目があっただけだったと。また、ある時その子はヤッペンがクチバシを持っているのかと尋ねました。彼の母親は、「ないのよ」と答えました。「それなら、ヤッペンは何を使って男の人たちをつかまえるの？」

ハンペル

1942年7月12日

B. は日本の軽快な唱歌を知っています。そのメロディーはすてきです。でも、彼女はパパが出かけている時だけ歌うことができるのです。なぜならば、彼は自宅でそんな歌を聴いたらば、かんかんに怒ってしまうからです。

ハンペル

1942年9月3日

いろいろなことで忙しくて、日記を書く時間がほとんどありません。2冊の日記ともほっぽりばなし。1冊はあなたのパパとママ用にと実のところ思ったのですが、そうしたら一日中書き続けることになります。だから、あなたとカナダ³³⁶に宛ててだけ。

ハンペル

1942年12月2日

そうね、昨日で私たちが結婚して5年になり、今、6年目に入りましたね。早くまた一緒に暮らせることを願うばかりです。当日はとても穏やかに過ぎていったのですよ。写真の横にお花を飾っただけでしたけれど。でも、V. H. 一家からはケーキが届いたし、そこにR. の描いたものも付いていました。このケーキはK. 夫人が作ったのですが、ドキドキしながら仕事をしています。という

³³⁶ カナダにはハンペル夫人の親戚が住んでいた模様。

のは、私はまだそれを見てはいけなかったし、私が彼女のところにいくつか注文しにすぐにも来ると思っているからです。ケーキは、戦時中のやり方で作ってありましたが、おいしかったです。

ハンペル

1942年12月26日

昨夜、R. と私はV.H. 一家のところでクリスマスを祝いました。とても楽しかったです。私たちは燻製ミート、ソーセージ、レパースペースト、チーズ入りのサンドウィッチを食べ、ココアを一杯飲みました。フー、私たちはこれ全部をもう何ヵ月も食べたことはありませんでした。水っぽい粗食だけとっていましたから。

ハンペル

1943年1月15日

万事快方に

それは黄色くなった葉っぱ
秋の葉っぱだと思った。
しかし、それはチョウチョ
私の道の上にとまるチョウだった。

私は思った。大嵐が襲い
たくさんの心配事をもたらすと。
しかし、反対に
あとで「創造」がよみがえるのを見た。

何一つ思うとおりにならず
気落ちして困惑していた。
しかし、それは真っ直ぐな道
幸福の一本の道だとわかった。

私は思いにはせた… しかし、私が思ったことは
絶対確実なことでない。
神の御加護にまかせよう

御知恵は測りがたき。

神の御意志にまかせ

御指示に従おう。

最初に不治と見られたことが

私をいやしてくれることがわかった。

ハンペル

1943年1月27日

今日は私の誕生日。でも、ここではE. 夫人とH. 夫人のドラマチックなことが。ふたりとも私が防水キャップを売ったことを知らなかったのです。…中略… H. は私の誕生日に防水キャップをプレゼントしたかったようです。彼女はそのことをE. に話しました。E. はいいアイデアだと見たけれど、自分で贈りたがりました。H. は何も言うことができず、争いを避けるため彼女のやりたいようにさせました。その翌日、私はH. のところへ行き、私の防水キャップを買わないかと彼女に尋ねた。今になって、彼女がどっと笑い出した訳がわかりました。そこでE. はくすねたアイデアに縛られてしまい、H. はキャップを注文しなかったことに満足していた。H. はそのアイデアを打ち出したことで、E. からあとで怒られてしまった。H. は自作のガウンを私にプレゼントにくれた。V. H. 家からは銀のおたまをですよ。すばらしいと思いませんか？ どうせヤップにひたたくられてしまうでしょうが。だから、私は売りに出すのです。誕生日にはチキンをご馳走になりました。私たちはロントン[バナナの葉で包んだ蒸ご飯]を食べました。とってもおいしかったのよ！

ハンペル

1943年2月16日

映画を見に行くお金がまだある人々がいます。映画館では上映前に短編映画を見せられました。まずニッポンの艦隊がスクリーンに映し出されました。その時少し拍手がありました。続いてアメリカの艦隊が映し出されました。そしたら全員拍手喝采しました。そのあと何が起こるか誰も知りません。照明がとまり、観客は席を立たなければなりませんでした。でも大したことにはなりませんでした。彼らは当然全員を連行できなかったからです。

ハンペル

1943年6月17日

あなたにはここにどんな不良少年がいるかあまりわからないでしょうね。彼らは収容所の中では学校へ行くが、勉強もほとんどしません。³³⁷ 母親の中には子供を原住民学校に入れさせるほどひどい状態にあります。子供たちのオランダ語は当然廃退しています。こんな事態がいつになったら終わるのでしょうか？

ハンペル

1943年9月26日

聖テレジア教会³³⁸の神父全員は牢屋に入れられています。6人のプラナカン[印欧人]シスターが現在司祭館におり、今度、ある原住民の神父が告解を聞き、2回のミサを行うことになります。神父さんはさぞかし忙しくなりましょう。要するに人間はこのような罪深い人生を送ってはならないのです！

ハンペル

1943年12月16日

とても古いのですがまだ1本のフィルムを私たちは持っていたので、写真を撮りました。その内の3枚だけを焼き付けることができます。なぜならば、写真はケンペイタイを通過しなければなりません。現像しなかったものはあとで焼き付けさせます。1枚の写真にはパパが映っているし、もし彼らがまだ男子が外に残っているのを見たら、きっとその彼を捕らえに来るでしょう。もう1枚の写真には、禁じられていることであるショートパンツをはいた私が映っているのです。私の部屋も見られてしまうし、ベッドも映っています。ヤップはこのようなモデルベッドが大好きなのです。要するに、このベッドを接収しに来る可能性があるのです。

³³⁷ ジャワの婦女子収容所では、当初から日本人は教育に関する規制を敷いた。バタビアのクラマツ及びチデン収容所では最初の頃には小等教育は許可されていたが、マレー語で行われる必要があった。しかしながら、コンドー収容所長は、視察の際にのみマレー語が公用語であることがわかれば十分であるとした。正式の学校はクラマツとチデンでは1943年1月から8月まで存在した。これらの学校が閉鎖されたあと、授業を行うことは禁止され、教科書の使用さえできなくなった。(Van Velden, 264-265)

³³⁸ 聖テレジア教会は、バタビアのテレジア教会通り11番地にあった。

ハンペル

1944年1月13日

シリーズ物の本に夢中です。個人的に引きつけられます。全く引きつけられます。内に秘められた威力。夢遊病的霊媒術。催眠術。暗示。テレパシー。私の読後感は一切どういうものでしょうか。

ハンペル

1944年4月13日

今日はあなたの誕生日。³³⁹ おめでとう。相変わらずあなたは在宅してないけれど、無事航海中のことと願います。私たちは気をもみながらケーキを食べました。ケーキは以前とは比べものにならないけれどまずまずです。たまには変わったことをしないと、耐えがたいからです。

ハンペル

1944年8月2日

現在はたくさん時間があります。ママがやってるシロップ工場がストップしました。どこにも砂糖がないのです。本を借りました。ウィリー・コルサリの「*En in die sneeuwbal zit ik*」。一日で終わりまで読んでしまいました。元気づいた気持ちになります。愉快的な本です。以前は読書する時間がほとんどありませんでした。

ハンペル

1944年10月13日

映画館へ行った知人がニッポン映画について話しました。ひとりのニッポン兵が11発打たれましたが死にませんでした。でも、彼らは1発でアメリカ兵を殺しました。ニップの死体は回収されますが、アメリカ兵の死体はそのままほったらかしにします。また、アメリカ兵がニッポンのお腹へ銃剣を突き刺す場面もありました。その知人はその時「スクル[ありがたい]！」と叫んだので平手打ちを食わされる場所でした。

³³⁹ ハンペル夫人の夫の誕生日。

ハンペル

1944年12月24日

すばらしいクリスマス。…中略… 何と「感動」したことでしょう。何かを持って行った時にこのクリスマスツリーの下の「ドイツラント」³⁴⁰のそばに私にあてた小包がありました。O. H. から私たちはおいしいケーキをもらいました。K. からは自家製のパウンドケーキ、そして私は特別にカレンダーと犬の頭部が描かれている木製のカップももらいました。…中略… 私たちはほかの人からもコーヒー、砂糖、紅茶をクリスマスプレゼントとしてもらいました。

ハンペル

1945年1月3日

そうです。私たちは新年の三が日を過ごしています。K. N. から大晦日にはロシア風卵料理が送られてきました。とってもおいしかったし、O. H. からはまたまたケーキをもらいました。彼女はきっとチャトゥット[闇取引]で儲けたお金があるのです。K. N. の幼なじみ（クボン[庭師]の息子）は、大きなニッポン・パンを1個彼女にあげました。そのパンは腐った小麦粉の味がしました。知人たちの何人かは大晦日の夜の12時に月明かりの中を歩きました。この12時はジャワ時間かニッポン時間かはわかりません。お月様はきれいでした。道路や家々は明かりがついていないので、お月様なしでは真っ暗です。ここでは人々は編み合わせたサブット・クラッパ[ココヤシの繊維]の火縄を持って歩いたり走ったりして、それを燃やし続ける目的で振るため、時々火の粉が飛びます。

ハンペル

1945年5月21日

1月にプラナカンの学校が開設されました。子供たちは再び通学できましょう。

³⁴⁰ ハンペル夫人のドイツ人顧客。

バタビア

ポール

1942年8月1日

私たちの学校がニッポン学校になる。日本語だけで授業が行われる。うまく行くだろうか？

ポール

1942年10月26日

[貼付：解答「小さな心を持った大きな人」付き絵パズル]

狂った「バス」がエーリックのためにこの絵パズルを作った。エーリックは私たちと一緒に「ダット・ナイト・イン・リオ」を見に勇気がなかったからだ。リッフエ、ゾッピー、リリィそして私と4人でとても楽しんだ。バスはもう5回もこの映画を見たのだ。彼はせりふを全部暗唱できる。「マイ・ネーム・イズ・マニユエル。マイ・ワイフ・セシリア。マイ・サーバント“ペドロ”」等々。それで、私たちはまったく笑い転げてしまうのだ。…中略…

[貼付の新聞の切り抜き]

Film-film jang di pertjoendjoekan oleh bioskoop di Djakarta.

Ini malam & besok malam (26 & 27 sept. 2602).

[ジャカルタの映画館で上映される映画。

今日と明日の夕方 (1942年9月26日・27日)

ミナト・エイガ・ゲキジョウ [映画劇場]³⁴¹ - タンジョンプリオク

アラン・アラン [葦]

モハメッド・モホター - Film Melajoe [マレー映画]

シンカ・エイガ・ゲキジョウ - マンガ・ブサール

ヤンク・アット・オックスフォード

ロバート・テーラー - Kotjak [喜劇]

³⁴¹ 映画館は全部日本語名が付けられた。ニュース映画では始終日本のプロパガンダが上映された。(De Jong 11b eerste helft, 245)

ギンセイ・エイガ・ゲキジョウ - グロドック
テストパイロット
クラーク・ゲーブル - Tjerita di oedara [宇宙物語]

ナンケイ・エイガ・ゲキジョウ - パンチョラン
メイタイム
ジャネッテ・マクドナルド - Njanji [歌曲]
Besok malam : [明日の夕方]
パスポート・ツー・ヘル
エリッサ・ランディ - Pertjintaan [恋物語]

これらが上映中の映画だ。私たちは「テストパイロット」も見に行った。

ポール
1943年1月20日

私たちはとってもすばらしい聖ニコラス祭、クリスマス、大晦日を過ごした。ああ、そのほかは、
事実（一見したところ）相変わらずだ。ヴォネケとの友情がとてもためになってるわ。

[貼付の聖ニコラス祭の詩]

最初の警報で、エーリック！ ヤップたちが！
すると、彼は空気をパクン
2回ジャンプして彼は穴のところにいながら
「まいった！まいった！」とそこに留まり、ため息をつきながら
何てことだ。ものすごく臭いし
ビスー³⁴² の匂いかな？それともこやし？
タバコを吸ったらどう。パイプもあるわよ。
これは退屈さを追い払うし、匂いもだ。本当だわよ。
シントより

³⁴² ビスーは、イルマ・ポールの親戚に家で幼年の時から養われていたろうあのインドネシア人（「ビスー」とは、おしで話せないことを意味する）。ビスーは、イルマの叔母のハウスピーパーとなった。戦争が始まる数年前に同叔母はオランダへ発ち、ビスーはポール家に同居することになった。彼女はイルマの母親と手まねで上手に対話することができた。1945年中旬に、ポール一家が軟禁された時、ビスーは家族の面倒をみた。（「序」参照）

ポール

1943年3月8日

私たちの学校が完全に廃止され、³⁴³ 今後何もしてはならないのだ。

ポール

1943年3月30日

この匿名の手紙は、糸ノコで切り抜いたかわいらしいパグちゃん³⁴⁴と一緒にスラバヤのヘルガからもらった。

[貼付の手紙]

スラバヤ

親愛なるインペルへ

お誕生日おめでとう。

この次は、お父さんも家に帰り、もっと良い状況のもと祝えるよう願っています。

あなたに全部オランダ語でお便りできてとても満足しています。でも、短い手紙だけ書くことを許されているので、本当に短いです。

同封したギルダーはママからです。あなたが好きなものに使ってください。

パグちゃんは、私からですがあなたのお部屋に飾ってね。

ジョーク：「いや、私は透明の糸でだけ編んでいるの。このセーターは偽装部隊用だ」。

私はこのマスコットを作り、売ってもう34ギルダーもうけました。すごいでしょ？

では、すばらしいお誕生日をお過ごしくださいね。

たくさんのキスを

ヘルガ

ポール

1943年12月31日

[1943年6月26日には]赤十字社を助けるリリィ・クラウスのコンサートがあった。³⁴⁵ とても楽しかったし、多数のブランダ[オランダ人]の間において家庭的な気分を満喫した。その翌日リリ

³⁴³ ここではジョージン・デ・フリースが行っていた授業を意味する。「序」参照。

³⁴⁴ 糸ノコで切り抜いた(パグ)犬のマスコットか？

イ・クラウスは連行された。なぜか？日本の国歌を演奏しなかったため？彼女がユダヤ人だからか？その夕べはこれまでの占領期の中で私にとって一番すてきな夕べだった。その夕べは抜群だった。音楽はとっっても見事だったし、加えて全体のムードもだ。すべてがものすごく良かった。何の無理をすることなく、すべて欧州人に囲まれて再び本物の外出したという気持ちは以前にあったときのようにとても気楽であった。私にとってその夕べは特別な思い出となった。休憩に私たちはサインをしてもらうためにリリィ・クラウスのところへ行った。彼女はとっっても親切ですぐにサインしてくれた。あんなに立派に演奏できる人が今は独房に閉じ込められていること思うと！彼女のこれまでの経歴もこれで多分無にされるのだ。

ポール

1944年1月30日

私たちが経験した一番すばらしいパーティーのうちのひとつについての内容「1943年7月4日のラッメルス夫人の誕生日」。今（1944年1月30日）その時を思い出すと、私たちはみんないかに幸せで、いかに気楽に楽しむことができたか悟るのだ。そう、確かにたくさんの男子が戦争捕虜収容所にいたのだ。そこに出席していたすべての婦人はどこかの収容所に夫がいたのであった。ああ、当時私自身はそうでなくて何と良かったことか。今になってそれがわかったわ。

私たちの大きなテーブルが部屋の真ん中に移動された。全員がとっっても礼儀正しかった。実際これは内輪のパーティーだったが、全員が盛大なディナーパーティーとして一番すてきなドレスを着ていた。私たちはキャンドルを灯し食事したので、全体的にさらに気持ち良い親密感が生まれた。とっっても快適で同調的なムードに満ちていた。みんなの顔には満足感が現われていた。食事はとっってもおいしかったし、私たちはすでに満足な食事でありつけていなかっただけに全員が称賛したのだ。テーブルはピンクのガーベラで飾られていた。各自の名札には同じ花がついていた。あとで私はその花を髪に刺した。ウィリアムは、ゴルトマン夫人が大急ぎで作成した非常にすばらしいスピーチをした。彼はそれをとっっても上手に読み上げたのだ。

食後に私たち若者はダンスした。男子がいないこの時期に、まだたくさんの若い連中に囲まれて過ごせるのはすばらしかった。エリックはエーフ先生と見事なアフリカダンスを披露したので、私たちは大笑いせずにいられなかった。ああ、うまく書き表すことができないけど、すべてが最高だった。あらゆるおかしな物を使ってパンジュール遊びさえしたのだ。オリビ

³⁴⁵ 日記に添付されていたプログラムには、コンサートの収益は貧窮する印人への扶助を行っていたPOBIM (Pertolongan Orang Blanda-Indo Miskin 貧困印欧人のための援助) に役立たせると記されている。リリィ・クラウス (1918年生まれ) は、ハンガリー出身の英国人ピアニストであった。彼女は世界各地を演奏ツアー中、日本軍が進軍した時にはちょうどジャワにいた。リリィ・クラウスは強制収容所へ収監されてしまった。

アはとっさにみんなにキッスしたくなる気分になった。(本当は彼は私がこの日記に彼の名前を書くのを好まなかった。奥さんがあとで嫉妬するから)。

ポール

1944年2月18日

私たちの最高の映画の夕べについて少し話すわね。ああ、あの気持ち、日記君わかる？16歳の年頃で男の子、それも好意を抱いている背の高い白人で金髪の男の子たちと外出し、自分自身はすてきなドレスを着て、薄化粧したりして。ああ、1943年は最高の年。

どの映画をみんなで見たか、誰と行ったか忘れたけれど、その時の夕べはどれも最高だったことは覚えている。でも私は「Hotel du Nord」「La mort du cygne」そして特別に忘れたくない「La dernière façade」の夕べのことだけは思う。ああ、日記君、細かいことはもうはっきり覚えてないのよ。でも、真に重要な出来事は、あとで役立てたり忘れるため、あるいは、うれしさいっぱいに再現したり、この[貼付のポスター]若いダンサーのように幸福な瞬間をよみがえらせるために私の記憶と心の中に大切にしまっておくのよ。ああ、日記君。

[貼付のポスター2枚]これらのポスターは、言うまでもなく「La mort du cygne」だ。そのすばらしい音楽、そう特にバレエを十分に満喫した。その次の「La mort du cygne」の夕べは、ルースと行った。彼が当時私を連れて行ってくれたことに今でもとても感謝している。

その後、1944年にはヴォンと私はアニー・ゼッペルトからバレエのレッスンを受けた。レッスンは最高。自分自身はといえば素質は少しあっても全然才能がないことはわかっている。でも、ステップを踏むのがどんなにか難しく、疲れるか自分でもわかっていたらあとになって本物のバレエももっともっと満喫することができるかも。

ポール

1944年3月24日

あまり乗り気でなかった私の誕生日は非常に楽しく過ごせた。まず第一に、特別扱いされみんなが私にやさしくしてくれた。さらに夕方にはダンスをしたりたくさんのごちそうを食べてとてもなごやかなパーティーをした。でもオリーブがいなくて寂しかった。彼とはとてもすばらしくダンスできたのに。16歳の時のようにこの17歳の私が幸せになれるように。

ポール

1944年6月17日

私たちはかなりよく映画を見に行く。恥ずべきことだが、とても気晴らしになる。上部に[貼付]映画館の入場券。裏に注意して！[日本のプロパガンダ] 加えて電気路面電車の切符。私たちはそんな時気分転換に映画館へ行くのに再び路面電車に乗っていると圧倒される気持ちになる。

ポール

1944年6月26日

私は近頃カルバン派の教会の合唱隊にいる。これは昇天祭で歌わなければならなかった聖歌だ。第2連はとてもびったりだ。

[貼付：「アンブロジーオ聖歌」の第2連]

主よ、我らを哀れみ給え

御手を広げ

御加護をお与えください

我らが謙虚に望むごとくに

主のみに忠誠ありし

我らをお救いください

[…]

私たちはつい最近の晩にすてきな映画を2本見た。「Stadt Anatol」いい映画だ。フレー、セッド、エーリック、ヴォンと私とでまったくすばらしい夕べを過ごした。大笑いしたのだ。また、土曜日の夕方には、「Robert Kick」を。とても美しい。10点だ！…中略… 時々そのような映画を見るのは気持ちがいい。多くの人々がそれを非難する。ああ、でも今の私たちにはこの「美しき」年頃に向いたものがとっても少ないのだ。私たち若者がひととき外出することで、たとえそれがドイツ野郎の映画であっても、少しは楽しませてくださいな。私たちは楽しい夕べをたくさん過ごしたわ。オリビアとル्यूトが発ったあとも。退屈する夕べもしばしばあったけれど、ほとんどの場合すばらしかった。

ポール

1944年7月7日

洋画が上映されると映画館はいっぱいになる。私たちはいい映画とおもわれているものだけ見に行く。いい席を取りたいならば、一時間前に行かなければだめよ。それとも強引に押し入らなければならぬけど、なんとか席は確保できる。

ポール

1944年9月10日

ある日、私たちは芸術祭を開く[1944年5月27日]という楽しいアイデアが浮かんだ。招待された者は全員演劇、音楽、声楽や何かほかにもできることを披露しなければならなかった。…中略… 第1回目の「DE」³⁴⁶は好調だった。すばらしい夕べだった。ヴォン、マウトと私が最初に開会の挨拶をした。…中略… 私たちはその時とてもビューティフルな装いをしていた。本当よ！ガービーは私たちの芸術の基準のすべてに従って化粧したのですごく印象付けた。また、私たちは白いドレスを着て、陽気な彩りをしたガーベラの花を首に飾った。本当に、すべてが意外なものだった。ところで、第1回目の「DE」は全体的にびっくりさせることだったのだ。各ナンバーとも真実味があった。残念ながらプログラムが見つからないので、記憶をよみがえらせてナンバーをいくつか書きとめよう。その他のことも続いて教えてあげるね。日記君。

ピアノ演奏

- パブティスト嬢とティネケM.

バンド

- 単純だったが、チンピラを装った男の子がいたことで最高！

老人

- 私はその全編をまだ持っている。クラーラは涙を流して感動していた（私たちも）

デ・フリースの近い将来における出合い

- この作品もまだ持っている。すばらしい！
- 3人のジョージ・デ・フリース、かわいらしかった！

フレーのダンス

- エレガントで筋肉質のすてきなフレーに笑い転げた。

ウィリアムのジョーク

- 予想外に大当たり！無邪気な潔白さ。

クラーラのレビュー

- 私たち女の子と狂ったようなセッドにより大成功

幼児たちの民俗舞踊

- かわいらしい！

³⁴⁶ イルマ・ポールの日記中では「DE」芸術祭を示す。

このすばらしい夕べを思い出すと、ああ、何か楽しいことを2度繰り返してもいいくらいだ。ジョージが「平和」の女神として全身に白衣をまとい、白くて長い手袋、きらめくネックレスと王冠をつけてその場に立っていた時を思うと。また、それと反対に「戦争」役で黒いレインコート、ゲートルとヘルメットを付けたエーフ先生。老人の劇で濃紺のドレスを着て立つママが何とかわいらしかったかを思うと。そして、フレーがおかしなバレエ用のスカートをはき、助走付きでむちゃくちゃなピルエットをしながら、彼独自のほほえみを口元にたたえてた。要するに、日記君、あとでもっと詳しく話してあげるね。本当よ！

ポール

1944年10月11日

[貼付：1944年7月22日の第2回「芸術的才能のある者の芸術祭」プログラム]

- | | |
|--|--|
| 1. 開会の挨拶 | G. デ・フリース嬢 |
| 2. ピアノ2重奏曲：Caprice Hongrois - Ketterer | A. バプティスト嬢、マウト |
| 3. ジョーク | ウィリアム |
| 4. 国際連盟 ³⁴⁷ が失敗すると決まっていることの証明 | G. デ・フォス嬢 |
| 5. お母さん、なぜ？ | レネー&エレン |
| 6. マズルカ - Karganoff
ピエレッテ - Chaminade | ティネケ |
| 7. ゾンデルファン氏を殺したのは誰か？ | リーケルク夫人、ファン・ウォリンヘン夫人、ポール夫人、ラッメルス夫人、E. デ・フリース嬢、G. デ・フリース嬢 |
| —休憩— | |
| 8. ヴェラ・パブロワ | イルマ&イヴォンネ |
| 9. ラジオ・ファン | C. フェルノウト夫人、エーリック、フレー、レネー、エレン |
| 10. リオバンバ | ジョーン&ヘレン |
| 11. 女性も「今」決定する | イルマ、レネー、マウト、イヴォンネ、エレン |
| 12. a. Goro-Goro né | ジャカルタ・オールスターズ： |
| b. Panama-Rumba | C. バスティアーンズ：ドラム |

³⁴⁷ 第一次世界大戦から第二次世界大戦までの期間にわたる国際連合の前身組織。

- c. Pata tjenké
- d. Mama eu quero

- E. ポール： オカリナ
- N. ペーターズ： ハーモニカ
- F. ファン・デル・ルスト： ピアノ
- F. ファン・ウォリンヘン： コントラバス
- ????????

13. 王子様³⁴⁸

この2回目の「DE」は、1回目よりももっと芸術的だったけれどとっぴさに欠けていた。開会の挨拶の際、ジョージは美しいダリアを2本もらった。エーフが「ジョージ、泣かないで」と会場内に叫んだ。彼女にとってまったく不意なことだったのだ。バプティストとマウトのピアノ2重奏曲はすばらしかったが、私は彼女たちが間違えるのではないかとひどく不安だった。幸いにも、無事終了した。ウィリアムのジョークは、上手に語られたし愉快だった。僕ちゃん上出来だよ！その次のガービーによる国際連盟の失敗。ものすごく良かった。彼女は熱狂的な身振りで演じた。すばらしい。きれいにお化粧してかわいらしかった。レネーとエレンの「お母さん、なぜ？」は、とっても感動的だった。特にせりふが最高だった。ティネケのピアノ演奏はいつものように見事で上手だった。でも、私は相変わらず彼女が「習い覚えた」感覚でなく、彼女「独自の」感覚で演奏することを期待している。彼女の今の演奏では、そのテクニックと几帳面さにおいては感心するが、感動的にはならない。

「ゾンデルファン殺害」はすばらしかった。特にエーフとリーケルク夫人の愉快的な演技が楽しさの源となった。戦後にも日記君に詳しく話せることができるような記憶力を望むわ。ヴォン、フレーそして私がやった「ヴェラ・パブロワ」は、私の感じではかなり良かった。ヴォンと私は2枚のシーツを使って自分で作った美しいバレエ衣装を着た。フレーは彼の「カーリーヘア」に2本のガーベラを刺してかわいかった。結局、残りのことに関しては、私の記憶は当てにならない。第2回DEも成功裡を収めたとしかいいようがない。

ポール

1944年11月18日

ある日ヴォンと私はコンサートへ行きたい気分になった。なぜなら、イイダ・ノブオ「教授」率いるNIRROMオーケストラのコンサートが毎月開かれているのだ。³⁴⁹ 私たちもコンサートへ行か

³⁴⁸ 日記内に貼付：「ボンズ [犬] 王子殿下は後方にいるが、彼なしでは『芸術的才能のある者の会』は存続せず」。ボンズはみんなから好かれ甘やかされていたので「王子様」と呼ばれたのである。

³⁴⁹ 日記内に添付された1944年10月28日、29日に開催されたコンサートのプログラムには、「Radio Orkes Djakarta (ジャカルタ放送局オーケストラ)」と記されてある。飯田信夫は作曲家かつ指揮者で、宣伝部及び宣伝班に従事していた。(Jansen, 425)

なくては！この戦争で起こっていることを全部見て知りたいのだ。ものすごく苦勞してやっと4枚のチケットを手に入れた。そして、大いに期待して、よそ行きの服を着て出かけたのだ。

会場は超満員。聴衆はまずまずだった。そこここにドイツ野郎がいて、ヤップと原住民が少しいたほかは全部プラナカン。みんなが盛装していた。3年の占領下、大半の人がきれいにお化粧する（チャプ・バビ[原意：豚の品種、ここでは：悪質]まったくもって）チャンスを得て、アメリカ製の衣装を着て現われた。ヴォンと私は粗末なベンベルグ³⁵⁰ やレーヨン地の服を着て、あちこちに何とかメイクをほどこしていたのでみすぼらしく感じた。

オーケストラは30人編成で、驚いたことに1曲目にモーツアルトの交響曲を試みた。まったく私は喝采しようと努めたが、「そう悪くもないし、すばらしいと思えないのは自分次第である」と私自身に言い続けていた。でも日記君、絶望的だったのよ。本当に。あんなひどい団員を使ってモーツアルトの交響曲なぞ演奏させないほうがいいのに！モーツアルトの作品の演奏中、一時も引きつけられることや感動することはなかった。

ヌヌ・アルフェス・サンチオニがステージに現われた時、そして、どうでしょう。笑いの爆発が会場内に起こった。みんながクスクス笑ったりしていた。ささやき声の音や歓声が突風のように会場に行き渡った。ヌヌも笑い出したくなるような姿をしていた。彼女はすごくデブなんだから。まるでソーセージみたいな、わかる？そんな彼女がもっとデブに見える白い、そう、まるでパラシュートみたいな白い衣装を着ていた。こんな感じよ。[日記の作者は歌手のスケッチをこの部分に描いた] そして、彼女のものすごく巨大な胸部に大きな赤い花束をかざし、合わせた手に持つ赤いハンカチを神経質にいじりまわしていた。彼女は赤毛だったので全体的に実に不釣り合いだった。

彼女が歌い始めると、絶望的なわめき声に私たちは腹をかかえて笑った。もうたまらなかつた。本人にとってはかわいそう。でも、彼女はかなり上手に歌った。ドビュッシーのパートは驚くほどうまかった。要するに力はあるのだ。それだけに、私は行って良かったと思っている。そのあと彼らのお気に入りのシュトラウスが始まった。でもシュトラウスは少なくとも100人いるオーケストラでないと上手に演奏できないと私は思うのだ。そうでないと、ブンチャッチャ・ブンチャッチャという調子になるし、実際にもそうってしまった。でも、私たちは満足して帰宅した。私たちは「満喫」し、大いに笑ったのだ。

ポール

1944年12月28日

ヴォンと私はふたりとも特別な人間なのだ。自分の写真を撮らせようというアイデアを普通どんな人が抱くだろう。ボーイフレンドや母親に贈るためになら、それはそれで結構だが、全然そん

³⁵⁰ イルマ・ポールは、ベンベルグすなわち人絹で作ったドレスを意味している。

なことではないのだから。私たちは感光板に自身を記録させるのだ。全く独りで。そう狂ってるね。そんなことするのは私たちだけよ。これが私たちの肖像よ。[貼付：2枚の旅券用写真] 戦争の苦悩が私たちのばかげた顔つきを磨いてくれる！でも愉快だったし、それだけで十分なのよ。

次はクリスマスについて。ハガキに絵を描いてすごくたくさんお金をかせいだ。このクリスマスのベル（上手な仕上げでないが）とキノコは好評な作品のひとつだ。こうして自分でかせいだお金を持つのはでも楽しいものだ。ともかく、あとでこのことについてもっと話すわね。クリスマスにはすごくおいしいディナーをとったのよ。…中略… とっても楽しかったし、特に親愛なるフレーが感情をあからさまに表現したことが私を楽しませてくれた。ああ、ごめんなさい。満足したのだ。彼は素直でかわいい男の子だが、パーティーに多すぎるほど行くことが唯一の短所だ。ともかく、彼は私に「悪女」との出会いを正確に話した。小さい時から一緒に育ってきただけのことはある。クリスマスについて続けると、私たちは9時15分にテーブルにつき、11時半になってやっと立ち上がったのである。要するに、2時間半弱も食べておしゃべりしていたのだ。この苦しい時期に、バイエルおばあさんが一番楽しいことをした昔話に耳を傾けることはいい気持ちにさせてくれる。…中略…

聖ニコラス祭。ジョージからこの詩とおいしい砂糖菓子をもらった。私はもうずっと病気だった。まだすっかり良くなっていない。親愛なる日記君、なぜこの3年間に11月と12月が私にとって困難な月日となったのかしら？おセンチな日記にはしたくないし、実際に私と関係することは絶対に書かないし、書いたとしても隠語を使うわ。

スマラン

ヒューセン

1942年3月16日

6時頃、バクりに起こされた。ぐっすり眠った。その必要があるのだ。なぜならば、8時に学校 [HBS] へ向かわなければならないから。在任している職員は、ファン・デル・ウェルフ校長、ルート・ビルケンハウエル、エヴェリーン・クラネンドク、スヘッフエネル、ハーヴァー、ウィリー・フォス・ファン・ザーリングン、クラセンス、スラバヤのコリー・テン・カーテだけ。講堂での校長の訓話のあと、私たちは生徒全員を記録する。それに続く会議で、私たちの予想以上の約310人の生徒が来るらしい。校長は新たに組替えを行う予定で、その際私はオランダ語を教えることになるようだ。そのあと私たちは家路に就く。

ヒューセン

1942年3月17日

エヴェリーン・クラネンドンクが学校へ向けて同乗した。そのあと、ファン・デル・ウェルフ校長を迎えに行き、ヤップがHBSを接収したと聞いた。³⁵¹ 子供たちと私たちはそのため家に帰された。

ヒューセン

1942年3月19日

午後は4時半まで休憩し、そのあとお茶を飲み、特報で全校が今後の指令まで閉鎖されることを知った。³⁵²

ヒューセン

1942年3月23日

今度、NIROM講座の学習書からマレー語を毎日1レッスン、そして日本語は特報の中から毎日1行分の単語を勉強するつもりだ。³⁵³

ヒューセン

1942年4月9日

教育監査局のヨングマン調査官のもとへ寄る。³⁵⁴ この人は彼の3人の息子に関する朗報を得ていた。彼の話によると、バタビアの中高等学校の主任と校長が全員監獄に留置されているということだ。ここでは全校の書籍を引渡さなければならない。…中略… ハン・ワルメンホーフエンは…中略… ドイツ語の本、できるなら「ファウスト」を求めている。これは少し難解なので、私は彼にもっと簡単な本を9冊持っていかせた。彼の妹とルディ・デ・ブールにラテン語の学習を手伝っている。たくましい子供たちは何とかやって行けるのだ。

³⁵¹ 脚注 11参照。

³⁵² 学校は欧州人学校を除いて1942年の日本国天皇の誕生日（4月29日）に再び開かれた。通学する生徒はそのため在宅していなければならなかった。若干の教師は、秘密に授業を行った。教師らは自宅や生徒の家庭で小さな学習グループを受け持った。（De Jong 11b eerste helft, 316-318 参照）

³⁵³ Nederlandsch-Indische Radio Omroep（オランダ領東インドラジオ放送会社）が編纂した講座。教師ヒューセンは、日本語の学習は1日だけ果たしたことを後の日記に記した。

³⁵⁴ これは、Westersch Lager Onderwijs（ウェステルス初等教育の監査局）であった。

ヒューセン

1942年5月12日

何人かの子供の授業を調整するため、ボジョンのローゼンタール一家へ向かった。私はここで火曜日、木曜日、金曜日³⁵⁵に9時15分前から1時15分まで（フランス語、ドイツ語、英語と続けて）教える予定だ。…中略… グルガジ13番地のブロンベルフ薬剤師ともアポイントを取った。私は月曜日、水曜日、金曜日の8時半から1時15分までそこへ向かう予定だ。いろいろと面倒な割り当て作業だったが、もう大丈夫だ。

ヒューセン

1942年5月13日

早朝に出かける。8時半にブロンベルフ家に。授業は楽しく進行した。私は子供たちがやる気を持つようになると信じている。1時15分に終了し、家路に向かう。

ヒューセン

1942年5月14日

昇天日。初めて授業を行うためにローゼンタール家へ。楽しく順調に進んだ。…中略… イェーンチェ・デ・ヨングとバブス・オースターリングが祝日のため出かけることを許されず、4時間目の授業は行われなかった。

ヒューセン

1942年5月15日

夕方にマレー語を一生懸命勉強した。

³⁵⁵ 彼女の日記に記された時間割によると、ボジョン通りでは金曜日ではなく土曜日に授業を行っていた。この章のヒューセンの日記 1942年5月20日参照。

ヒューセン

1942年5月16日

次々に生徒が新たに加わる。子供たちが有益なことに従事しているのを両親たちは喜んでいる。

ヒューセン

1942年5月20日

授業の時間割は次の通り：

月曜日・水曜日・金曜日 グルガジ13番地のブロムベルフ家で

- a. 8:30 - 9:30 フランス語（1年生）：ヘンク・ブロムベルフ、リーンチェ・ブロムベルフ、グレート・ハーヴァー、イェーンチェ・デ・ヨング、マーリウス・ローゼンタール、バプス・オースターリング、ディルク・ガウトベルフ
- b. 9:45 - 10:45 英語（入門）：リーンチェ・ブロムベルフ、グレート・ハーヴァー、ヘンク・ブロムベルフ、ディルク・ガウトベルフ
- c. 11 - 12 ドイツ語（全員）入門：リーンチェ・ブロムベルフ、ヘンク・ブロムベルフ、グレート・ハーヴァー、ディルク・ガウトベルフ 上級：ディック・ブロムベルフ、ケース・ブロムベルフ、ヨセ・テル・ブルフ
- d. 12:15 - 1:15 英語（上級）ディック・ブロムベルフ、ケース・ブロムベルフ、ヨセ・テル・ブルフ、デニーゼ・ステファン

火曜日・木曜日・土曜日 ポジジョンのローゼンタール家[「メゾン・マリノ」]

- a. 8:45 - 9:45 フランス語（2年生）：デニーゼ・ステファン、ヨセ・テル・ブルフ、マウト・ファン・オールト、リノ・ローゼンタール、ヤン・バニング、マーリウス・ローゼンタール、パウル・シースウェルダ
- b. 10 - 11 英語（2年生）：L. フェルミューレン、M. ファン・オールト、K. ファン・スキーフェーン、ニューシェ・オースターリング、エラ・オースターリング、リノ・ローゼンタール、ヤン・バニング、テオ・リュバイ・バウマン、パウル・シースウェルダ
- c. 11:15 - 12:15 ドイツ語（入門・上級）：リノ・ローゼンタール、マーリウス・ローゼンタール、パウル・シースウェルダ
- d. 12:15 - 1:15 英語（入門）：イェーンチェ・デ・ヨング、バプス・オースターリング、マーリウス・ローゼンタール

だんだんとクラスは一杯になるが、1クラス生徒10人が限度とすると今はちょうどいい。さらに生徒が増えるとすれば、私は午後にも授業を行わなければならなくなる。生徒ひとりにつき月謝を2.50ギルダーとる。それで金持ちになる必要はないけれど、私と叔母リーンにとってちょうど足りればいいのだ。

ヒューセン

1942年5月21日

午前中に何人かの生徒からの申込みがあった。つまり、フリーダ・フロール、アラート兄弟、ヒュープ・ミウレットだ。午後パウル・シースウェルダに授業したあと、バニング夫人がお茶に訪れた。フリッツが今朝ドイツ語の練習問題を7つタイプした。ちょうどいい具合だ。なぜならば大半が本を手に入れることができないから。

ヒューセン

1942年5月29日

今は定時に仕事をしているので、時間が飛ぶように過ぎて行く。毎日生徒からの申込みがある。現在の総数はすでに30人！次の月曜日[6月1日]から、クナリーラーンのホフステーデ夫人の家でお教室が始まる。これ対象にすでに6人の1年生が申し込んだ。

水曜日の午後[5月27日]、クナリーラーンからちょうど戻って来た時に、エヴェリーン・クラネンドンクが私のところにやって来た。彼女はHBSの3年生と4年生全員が英会話も望んでいるので、彼らにそのような英語の授業を行えるように私から英会話のレッスンを受けたがった。彼女はこれらの生徒も全員受け持ちたいからだ。私にはもう全然時間に余裕がないし、しかもそれに適していない。私は英語のM.O. - Aを取得するために一生懸命に勉強し、手持のお金を費やしなけばならなかったのだ。まず私に楽しみと特典を持たせてくださいな。³⁵⁶

ヒューセン

1942年6月3日

申込み済みの生徒数はすでに41人で、そのうちの35人が支払いによる。今度、テガロンボ10番地

³⁵⁶ 教師ヒューセンは、1941年12月22日にバタビアのファン・ホイツ広場にあるM.O.監査局でM.O.-A英語の口頭試験を受けた。(NIOD、蘭印日記コレクション IC 89B J.J.Huussenの日記)

のウェストラ家で2年生のお教室が木曜日と土曜日の午後であり、明日から始まる。各月曜日・水曜日・金曜日の午後：クナリーラン21番地のホフステーデ家。そこへは今日2回行った。思っていたより疲れなかったし、また、そこで授業をするのは楽しい。

ヒューセン

1942年6月23日

このところ、午前と午後の授業をあせらずにやっている。疲れるけれども心地よい。お金は別として、たくさんの子供や親たちを助けているので充足感も持てるからだ。

ヒューセン

1942年6月27日

昨日は私の誕生日だった。混乱した時期にもかかわらず、にぎやかで楽しい誕生日だった。起床すると、クララから彼女が自分で作ったのだが、まだ完全に仕上がっていないハンカチをもらった。フリッツからは登録証明書用のケースをもらった。ヨー・ビスホップからは大分前にハンカチが同封された手紙をもらった。ブロンベルフ家では祝辞とともに迎えられた。あとでわかったのだが、ファン・デル・ホルスト医師から聞いたらしい。ブロンベルク氏は洗濯石けんを1個自分で持って来てくれた。あとで、夫人からは箱入りのラベンダーの化粧石けんをもらい、ちょうど帰宅しようとしていた2時にジャーネ・ワラウとイエチュエ・カラモイがメモ帳を持って来てくれた。

帰宅すると、叔母リーン、ヘルダと彼女の娘ヘンダからの花が花瓶に生かっていた。白いグラジオラスだ。マウトとピート・ファン・オールトがもう来てて、ヴールマン夫人が焼いたケーキを届けてくれた。そのあとミースが訪れ、ドレス用の美しい布地をくれた。この時勢にあってはすばらしいプレゼントだ。そして、古風なチキンなどのインドネシア料理を食べ始めた。5時10分前に偶然私は時計に目をやり、急いで立ち上がった。なぜならば、5時にクナリーランで授業があったからだ。もちろんそこへは遅れて到着したにもかかわらず、私がすぐに戻ると叔母リーンに約束していたため早めに引き揚げた。

「灯火管制」が予定されていたため、急いで自転車をこいだ。ほとんど満月でとても明るかったのでランプをつけずに走った。私の自転車をグダン[物置]に入れたと同時に、サイレンが鳴り始めた。灯火管制下の薄明かりの中、びっくりしたことに家の前にファン・デル・ホルストがいた。彼が訪れるとは全然思っていなかった。しばらくして、彼はカバンから取り出し始めた。ポートワイン1本、ジャム1瓶、カドベリーのチョコレート1缶、そしておまけに、ヤードレーのオールドイングリッシュ・ラベンダーも。それはぜひいたくな眺めだった。下で声がするの

を聴いたと思ったら、ヘント・リットマンとベップ・デ・ブールが現われた。エヴェリーン・クラネンドクは病気だった。ヘントは化粧石けんを1個、ベップは固形洗濯石けんを持って来たし、エヴェリーンからは1缶のアセム[タマリンドの実]のクッキーをもらった！

午後になって、さらにルート・ビルケンハウエルから上等なバウムクーヘンが届いた。また、ヒルデ・ブラシエスとマランのママ・ビスホップから誕生日祝福のハガキが届き、みんな幸いにも元気ようだ。ファン・デル・ホルストは急いで整えた客用の寝室に泊まることになったので、夜遅くまで過ごした。この時勢にこんなにもなごやかな誕生日を祝えるとは思ってもいなかった。

今日、ローゼンタール家での授業をやめる予定と決めた。リノが「スト中」なのだ。それに関する解決策を見出さなければならないし、生徒全員には火曜日[6月30日]前までに通告しなければ！難しくなろう。

ヒューセン

1942年6月28日

今日は、ルート・ビルケンハウエルのところでインドネシア料理、それもロントンをごちそうになった。楽しかった！それに2回も誕生日を祝うことはすばらしい。ベップ・ニーケルクは私の誕生日を忘れてしまって、あとになって自分で作ったケーキを1切れ送ってきた。私は甘やかされた気分がする。

ヒューセン

1942年8月2日

クスマー・アトマジヤ氏の子供たちエマとイキンに授業をする予定になっているペテロンガン26番地に立寄った。

ヒューセン

1942年8月9日

この1週間ずっとものすごく忙しかった。日に10回授業を行っている。英語4回、フランス語4回、ドイツ語2回！パルメンラン西7番地も何人か増えた。イキンとエマには、英語とドイツ語が遅れているため週に3回夕方に補習授業をする。

ヒューセン

1942年8月23日

あっという間に時が過ぎて行く。ひとりの生徒がバトゥーへ引越す。デニーゼ・ステファンだ。いい生徒だったので残念だ。また、フェリー・テーヌーは支払ができない。私は彼女にそのまま授業を続けて受けるように言った。彼女の代わりにヤン・アーベルスが加わり、半分グルガジ、半分パルメンラーンで行う。さらに、グルガジのプラモノ・スティックノとボジョンのリアン・タンが。Sekolah Menengah Pertama³⁵⁷ が開校される予定にもかかわらず盛況だ。クスマー・アトマジャ氏は、彼の子供たちがすでにいわゆるムロに通っているにもかかわらず、授業を続けさせたいのだがと私に尋ねた。リアンの父親である水利局の役人のタン氏は、中国人の生徒は当座のところ中学校に行かれないことや、どのような教師がそこで授業を受け持つべきかも知っている。カラモイ夫人はイエチェを私の授業に出させてもいいかと尋ねに来た。その子はまだムロへの入学が許されていなく、多分8ヶ月したらできるのだ。混乱状態だ！多くの人がこんな方法の教育は絶対に失敗すると憂慮している。

ヒューセン

1942年8月27日

悪いことは何も予期せず、今朝上機嫌で …中略… [ボジョン77番地の]「第1級室内装飾業者」のところに到着したら、すぐに社長のボーラント氏から、奥さんが売子の子で彼女に請求された判決を理由に、クスマーの家に出向いたことがきっかけとなった奥さんとクスマーとその娘エマとの喧嘩話を聞かされた。即ちクスマーは当売子に対して有利な判決を下し、ボーラント夫人によると完全に不当なのである。彼女が言うことには、クスマー氏の家で彼女はエマに不親切に扱われたので、もうその子を家の敷地内に入れたくないのだ！私は彼女と冷静に話し合い、その件を私が何とか都合つけると言った。グレートの子の父親アンヘネント医師にメモを送ったあとの授業中10分してグレートは朗報をもたらした。今後は、週に3回アンヘネント家で授業を行うことにした。開校予定の中学校のことに關しては、再び閉鎖される通告と教師をまだ探していて、上層部の指示を待っているのが当分のところ定かでないことを知った。

³⁵⁷ Sekolah Menengah Pertama（基礎中学校）は、中学校の基礎課程（3年）であった。そのあと、高等学校（3年）であるSekolah Menengah Tinggi（同じく Sekolah Menengah Atas）が続いた。日本占領中に導入されたこの制度は現在のインドネシアでも存続している。

ヒューセン

1942年8月29日

アンヘネント医師は授業料が安すぎるのではと言ったが、私はそれでお金をかせぐつもりはなく、親たちを助けたいのだと彼を説得した。

ヒューセン

1942年9月2日

クナリーラーン21番地に到着すると、その家はすでにほとんど空だった。ホフステーデ夫人は急にパラレル通りのファン・ダイク一家と同居することになった。私は今まだ授業を行うことができるが、今回は他のテンパット[場所]が必要だ。ホフステーデ夫人は、パラレル通り6番地のグライダヌス - リップス夫人の家を提案した。私は即座に断った。遠すぎるから。これは実施されない。休み時間にウルフ - ケルケンベルフ夫人を訪ねたら、彼女のところを使うよう私にただちに申し出た。これで万時整った。

ヒューセン

1942年9月4日

上級クラスへさらにふたりの生徒が加わった。3年生の中国人少年だ。現在再び一杯になった。

ヒューセン

1942年9月5日

ペロラン8番地のリーム家で初めての授業。ヘリィとレニィと一緒に。

ヒューセン

1942年9月8日

パルメンラーン西でストック夫人に出会ったら、彼女は今週中にジョカ近辺の製糖工場へ引越すと言っていた。ということはこの授業もなくなる。そんなにひどいとも思わない。なぜならば、

レニィとヘリィ・リームを火曜日と木曜日に入れるようにすることができるからだ。そうおかしなことでもないだろう。

ヒューセン

1942年9月9日

グルガジでの授業を変更した。1年生の英語のクラスが一杯になった。今度は45分の授業と5分の休み時間。また、来週から上級用のフランス語（毎回30分）も加えて始める予定だ。

ヒューセン

1942年9月11日

今朝、プラモノ・スティックノはムロが明日開校されると語った。そうしたら、私は若干の生徒を失うことになる。しかし、時間割りにはニッポン語とマレー語以外は何も語学がない。即ち、ニッポン語9時間、体育6時間、ニッポン史3時間、算数6時間だ。残りのものに対しては教師が見つからないようだ。

ヒューセン

1942年9月14日

夕方にクスマーが訪れ、彼の子供たちと他に何人か一緒に月25ギルダーで授業を続けて行ってくれないかと私に尋ねた。彼は子供たちをムロへ通学させる義務があるが、乗り気がしないのだ。長い間彼といろいろと話し合った。その結果、何回下へ出向くかを私自身が決めることになった。これに対して25ギルダーもらう。当座のところはクナリーランで終了後2回できるとあとになって思い巡らした。ブラット[困難]になるだろうが、彼を喜んで助けたいし、子供たちをクラスと同じレベルにすることを約束したのだ。

ヒューセン

1942年9月16日

グルガジでレア・カラモイとイエチェ・ラシッドが英語とドイツ語の授業を今度また受けられるかと尋ねに来た。手伝ってあげたい気持ちは十分あるが、私の家で夕方に週1回だけ2時間続けて

二人分で月10ギルダーならできると言った。彼女たちは家族と相談し、あとで私に連絡するようだ。

ヒューセン

1942年10月23日

忙しすぎて日記を几帳面に綴れない。朝早く出かけ、夕方帰宅すると大抵は疲れすぎて編物やおしゃべりしてくつろぐ以外何もしない。

ヒューセン

1942年10月28日

ノールドフック少年たちから今日たくさんの本をもらった。私の教科の授業材料だ。なかなか励ましとなるのだ。

ヒューセン

1942年12月5日

聖ニコラス祭だ。夕方、マリオン・ウルフのところでもらった包みを開いた。みんなからちょっとしたものが入っていた。マリオンからは彼女が自分で作った柔らかいスウェード革のお財布、ハンスからはペーパーナイフ、エーリックからはしおりが。

ヒューセン

1942年12月26日

クリスマスの翌日。ヘルマンズとアンスはそれぞれの仕事へ出向いた。ポップと私は昔の思い出にひたり、時間と戦争を忘れた。このことでも気持ちが安らぐ。そのあと、私は荷造りしたトランクを持って下へ行く。私はブロムベルフ家に泊まる予定だ。…中略… G. ファン・デル・ホルスト医師もブロムベルフのところにいる。私はお魚を二人分いただいてしまったすばらしいディナーで締めくくられた楽しい日であった。

ヒューセン

1943年1月24日

シランダ³⁵⁸の使い走りの少年は、彼がそこで見つけたHBSの写真を1枚持って来てくれた。彼らは実際あらゆるものを焼却している。HBSにはヤッペンがいる。全ての理科と化学の器具が廃棄され、ベンチは除かれ、書類は燃やされている。

ヒューセン

1943年2月2日

午後の授業のあと、急いで水浴びして着替え、ディックの誕生日のパーティーを手伝うためにソンプック通りのガウトベルフ家へ行った。彼は両親からすばらしいポケットナイフをもらい、私は彼のためにメモ帳を持って行った。まだ戸棚にそれがあったのだ。今何か買い求めることはできない。彼のところでワインを一杯飲みお菓子を食べた。こういうことに私は真に満喫するのである。

ヒューセン

1943年2月3日

「上級」クラスのふたりの中国人生徒は、他のひとりを介してもう来ないことを伝えた。彼らは昨日修道士のところで授業を受けていたら、ケンペイタイのひとりが訪れたらしい。それで、彼らは恐ろしくなってしまった。というのは、その男は、オランダ語でなくマレー語だけで授業することが許されていると言ったからだ。リーム・チュン・ティオンとタン・チョン・リアムは残った。ふたりはあまり心配性でないようだ。

ヒューセン

1943年2月5日

ソンプック通り18番地のガウトベルフ一家での授業中にホフステーデ夫人から彼女たちがバトゥーへ引越す旨の手紙を受け取った。要するにまた3人生徒を失うことになる。今朝アラルト兄弟が来て、母親とともに「収容所」へ行かされるので止めると告げた。

³⁵⁸ 「トコ・シランダ」は、チャンディ方面の丘陵にあった商店の名称。

ヒューセン

1943年2月17日

ベー・ブロムベルフと彼女の夫は、大きなクラスに反対している。午後、クナリーラーンのドウ・モッス夫人も同上。ブロムベルフ家では「急襲」がされた修道士のことを知り、ドウ・モッス夫人はヤーブ・レーベルがハガキに、切手収集の意味で「クンプラン」³⁵⁹ という言葉を使ったために、捜査されている話を持ち込んだ。そのため、数人の少年たちのクンプラン[集会]さえ禁じられることになった。

ヒューセン

1943年2月18日

ゴー（リーム・プロラン）のところへ呼ばれた。彼の息子とグーイ・リアンがグルガジの授業を止める。彼らはひどくおびえているのだ。私は本当のところうれしかった。なぜならば、残りをふたつの小さいクラスに分けれるからだ。…中略… 夕方、新しい時間割を作成し、全てのクラスを分割した。

ヒューセン

1943年2月24日

授業は当座のところ中止すると生徒全員に通知した。³⁶⁰ …中略… レックス・ファン・デル・ウィルデが私のために授業料を集金してくれる。いい子だ！トム・レーシクは別れの挨拶に来た。ゲー・デ・グラウヴェも同じく。また、リーム一家とクスマー一家へも通知したら授業料が届いた。…中略… マリオンは私が来ることを喜んでいる。とっても疲れてしまい授業ができないので金曜日、月曜日、水曜日の午前に移行した。でも時間が今十分あって、ハンス、エルス・ファン・フリート、リーン・ファン・フリート、アン・ドウ・モッスとの授業はそのまま続けられる。みんなすぐ近くに住んでいるのだ。

³⁵⁹ クンプランという用語は、「収集」の他に「集会」「会合」を意味する。

³⁶⁰ 教師ヒューセンは、マリオン・ウルフと彼女の息子ハンスとエーリックのもとに隠れ潜む決心をした。「日本人による措置と規定」ヒューセンの日記 1943年2月23日・24日参照。

ヒューセン

1943年3月1日

昨晚初めて革細工をした。すばらしい。あとでそれに必要なものを全部入手しよう。私の頭の中にはもういろいろと考えが浮かんでいる。

ヒューセン

1943年3月3日

ポップ・ウィーボルスの誕生日！彼女に贈るプレゼントはないが、手紙は送った。自分でそこへ出向くことは残念ながら不可能だ。彼女がここへ来るとの返事もらった。そこで私は子供たちの授業を早めに終わりにしたら、10時にポップが訪れた。コーヒーを楽しみながら1時間以上もゆっくりとあれやこれやとおしゃべりした。

ヒューセン

1943年3月14日

夕方、ドイツ語を朗読し、マリオンと一緒に英語をした。ふたりでこのことを今後毎日行うつもりだ。

ヒューセン

1943年3月21日

リュバイ・バウマン-デ・ブラウンへ宛て、エーリックとハンスのために援護と本を願った私の手紙に対して親切な返事もらった。事実彼女は午後にたくさんの本を自ら持って来てくれた。そこで私は長い休暇の前に終わらせなければならない方策を知り得るのだ。

ヒューセン

1943年3月23日

ハンスとエーリックはたくさんある授業に慣れ始めた。彼らは毎日午前中ずっと私の指導で勉強している。エーリックは、フランス語、英語、算数、語学、歴史、地理をする。ハンスは、フラ

ンス語、英語、代数、幾何学、算数、語学をする。また、しばらくしたら、歴史、地理、復習を。

ヒューセン

1943年3月24日

ファン・フリート夫人は、ハンスが借りている幾何学の教科書を返して欲しいと言った。つまり私は昨日彼女の娘ミーシェにはフランス語と英語は教えるが、その他の科目はエーリックとハンスが苦勞することになるから行わないと言ったのだ。だから、私たちは他の幾何学の教科書を手に入れなければならない。

ヒューセン

1943年4月1日

また1ヶ月が過ぎた。私にとってここでは時間がゆっくり経つと言う訳ではない。少年たちの勉強に大忙しで、毎日ニッポン時間の9時半から2時まで、時には午後もだ。でもはかどっている。ハンスはてこずっているが、ペースづいてきている。でも、私は、彼が全てに対してのんびりしていて出来が悪い日にはとてもいらいらしてくる。マリオンと彼女の夫ハンスに対して、私は是非一度功績を示したいのだ。

ヒューセン

1943年4月25日

復活祭！昨日から月曜日[4月26日]まで子供たちには休日だ。マリオンと私は手芸、おしゃべり、読書で過ごす。マリオンは私にペルシャ絨毯の作り方を教えてくれる。古物で彼女自身が編んで、カーペットに布切れを縫い合わせるのだ。マリオンはトコ・ウンからみんなにそれぞれイースターバニーからのチョコレートを届けさせる。

ヒューセン

1943年5月3日

「大ハンス」³⁶¹の誕生日。エルナ・リーフヘイトはおいしそうなケーキを送り届けたが、自ら訪れることができない。なぜならば、明日「収容所」へ行かされるエヴェース先生が彼女のところにいるからだ。トースは私たちふたりからの花束を買わせるためにカルト - ジャガを下へ向かわせた。午前中にこの花束が本当に届いた。…中略…

毎晩私はマリオンに*Manja* [アンナ・ライナー作*Roman um fünf Kinder*] のオランダ語訳を朗読している。私たちはお互いにそれを楽しんでいる。食後すぐに私はいつも*Werdegeschichte*から朗読し、「アテネ」まですでに行った。他の者も同じように関心を示している。「ギリシャ神話」(HBSの教材)はまだ戻ってない。

ヒューセン

1943年5月10日

ミラ・シュルツ嬢がお茶に訪れ、第4管区で特定の教科書を求めていると語った。特に出版社ワルターズなどのを。彼らはすでにリントナー夫人と彼女のところを訪れた。スラバヤでの授業は今完全に禁じられた。

ヒューセン

1943年5月21日

ハンス君のために新しい時間割を作成した。彼が現在フランス語と英語に良好な成績を示したのでこれができるのだ。でも、彼はもっと気を引き締め、あまり「のろま」でないことを要する。…中略… 午後、テオ・リュバイ・バウマンから、彼が私から授業を相変わらず受けていることをアンネ・ドゥ・モッスがある誕生日のパーティーで何人かの子供に話したことを知った。だから、私はできるだけ早く彼の母親に授業は終了したことを知らせようと思う。この様なことは今時とても危険なのだ。何か気付かれると私だけでなく、マリオンも危なくなるのだ。

³⁶¹ マリオン・ウルフの夫。

ヒューセン

1943年5月27日

リースベト・リンケルの4歳の誕生日。私は彼女のために白いソックスを編んだ。…中略… 8
時頃、そのパーティーにファン・フリート家へ向かった。11人で食事して楽しかった。誕生日を
迎えたリースベトはプレゼントに満足して、私たちのそばにある彼女用に飾った椅子に座ろうと
しなかった。スープのあと、ソーセージ、トマト、エビ入りのサンドウィッチが出て、そのあと
はパンケーキ。最後に家の前でお茶とケーキとタバコ、そして1杯のシロップを。楽しい夕べだ
ったし、10時半に満足して家路に就いた。

ヒューセン

1943年6月1日

日曜日はエーリックの誕生日。11歳になった。たくさんのプレゼントとお菓子でなごやかで楽し
い日となる。マリオンは生クリームとジャムをはさんだおいしそうなラム酒入りスポンジケーキ
を作った。エルナ・リーフヘイトは来ないが、手紙とチョコレートをエーリックに送った。…中
略… トース・ボーンも来ないが、手紙とチョコレートを送ってきた。彼女たちは週末に上へ来
る予定だ。午後に、マリオンと私は一緒に卵、ソーセージ、肉類、クティムン[キュウリ]、サラ
ダ菜、トマト、ピーナッツバター入りの（バターは付いてないがおいしい）サンドウィッチを何
皿か作った。夕方に、エリー・ファン・フリートとリンケル夫人と4人の子供たちが訪れ、11時
までいた。私たちは裏庭に座っていた。とてもなごやかであつという間に夕時が過ぎて行った。

ヒューセン

1943年6月3日

ミーシェ・ファン・フリートは週に午後3回算数の授業も私のところで受けている。今日初めて
やって来た。彼女の得意とすることでない。

ヒューセン

1943年6月21日

ハンス君の誕生日!当日は小雨で明けた。ハンス君は今度14歳に。彼は甘やかされ、もらったプ
レゼントに喜んでいる。私からは大きな鉄製のハンマー、マリオンがパサール・ジョハールで0.55

ギルダーで買ってきてくれた。その他幾つかの船の組立セット。彼はとても手先が器用な工作好きな子だ。

9時半から11時までふたりは授業があるが、そのあとは一日中フリーだ。午後にはふたり一緒に自転車で町へ行き、トコ・エレクトロンでセットのひとつを取り替えたり買物するためだ。マリオンはおいしいケーキを作り、その一切れをバンコンへ送った。

ヒューセン

1943年6月26日

降伏後私の2回目の誕生日。最初に私を祝福してくれたのはマリオン、そのあとカルト・ジャガが握手で、そしてエーリックとハンス君が続いた。9時に私が知らないうちに誕生日を祝うテーブルが用意され花々が飾られた。全てが整うと、マリオンが私を呼びに来て、歌で迎えられた。それに続いてプレゼントの品定めが。マリオンからは美しい蝶の模様が付いた中国製のテーブルセンター（カケモノ）。私はそれに困惑した。なぜなら、私は彼女自身もこれにとっても愛着を持っていることを知っているからだ。もう1枚彼女が作った小さなテーブルセンターも。そして、彼女が焼いたクッキーとグラリ[砂糖で固めたお菓子]のパックもだ！エーリックとハンス君からは自分たちで作ったボートを。でも、まだ仕上げをしなければならない。そのため、彼らの午前中の授業を休みにしたら喜んでいて。エルス・ファン・フリートからはすでに小包が届いていて、開けて見たら、上手に自分で作った本の表紙カバーとそれにぴったり合ったしおりが入っていた。さらに、ルートからはケーキが。みんな私を忘れていなかったのだ。

午前中にゲー・ファン・デル・ホルストが訪れたが、彼は偶然立寄ったようだ。私の誕生日を忘れていたのだ。彼は私たちの読書用に何冊か本を持って来た。マリオンが「ケーキ付き」のコーヒーを持って来た時、彼は誰かの誕生日であるはずと悟ったのだ。私たちがなごやかにおしゃべりしていると、トース・ボーンのカルトが小包2つと手紙を持って来た。ピート・ズワーンからは1枚のお札（バカ！）とタバコ3箱。トースからはトコ・ウンの板チョコが4枚。マリオン宛ての手紙の中で、彼女はひどく病み、落ち込んでいると書いていた。…中略… マリオンにはとても感謝している穏やかで楽しい誕生日だった。騒音やお遊びは現在の私たちにはまったく耐えられるはずがない。

ヒューセン

1943年6月29日

ゲー・ファン・デル・ホルスト医師がコーヒーに訪れ、ブロムベルフ一家からの私の誕生日プレゼントを持って来てくれた。ハンカチとタバコ1箱、10本のマッチ棒が入ったマッチ箱。時勢を

表わすものだ！でも愉快的ベー・ブロムベルフ！

ヒューセン

1943年7月16日

ルート・ビルケンハウエルはハンス君に図画の授業を行う予定だ。これこそ彼が唯一興味を持っている授業であるに違いない。エーリックは覚えが早いので教えるのが楽しい。ハンス君とは月曜日[7月19日]に再び苦勞しなければなるまい。ほとんど満月だったので、閉まった玄関の間に座っていたが、10時過ぎになって外に座り、イチジクとタマリンドの木々やシダの上に差す美しい明かりを満喫した。

ヒューセン

1943年7月17日

午後早いうちに入浴し着替えた。マリオンがまだ起きていないので、私は自室に留まりマレー語を勉強した。突然声がし、そこには「ウイークエンド」を過ごすつもりートのース・ボーンがいた。楽しいことだ。

ヒューセン

1943年8月16日

午前10時半に授業を打ち切った。マリオンと少年たちを廊下に呼び出し、双方の少年とも進級する旨通達した。これで彼らの肩の荷が下りることになるし、成績もまずまずだ。そのあとは彼らには1週間の休暇となる。このことをおいしいコーヒーとマリオンが明日のパーティーのために作ったニュルンベルク風レープクーヘンで祝った。私はその間に、つまり私の仕事の合間にマリオンのための二つ目のプレゼントであるグレーのDMC³⁶² ソックスを1足仕上げた。一つ目の毛糸でスカラップした古生地テーブルセンターはもうすでに仕上がっていた。三つ目はベルトだが、それ用のバックルをマリオンから明日もらうことになっている。

午後、うれしいことにトース・ボーンが来た。ハンスとエーリックは各所の庭で草花を探しに行く。私はそれを買うことができないからだ。彼らのプレゼントを觀賞するために、私

³⁶² 「DMC」社の糸で作られたこと。

は何度もハンスの勉強部屋へ行かなければならなかった。彼らは各自ボートを作り、ハンスはさらにランプ、竹製の編み棒1対、火口箱を。エーリックは、非常に苦勞して鍵箱を。

ヒューセン

1943年8月17日

マリオンの誕生日！彼女にとってはもちろん大ハンスのいない嫌な日だが、立派に振る舞っていた。コーヒーを1杯飲んだあと、私は少年たちと一緒に花と私たちからのプレゼントやトースからのスペキュラース1缶とピート・ズワーンからの小包（Davros³⁶³ 5箱入り）を添えて誕生日を祝うテーブルを用意した。テーブルはいっぱいで、マリオンは大喜びした。11時半にノイベルガー夫人がリニとヘンク君を連れて来た。彼女たちはプレゼントをたくさん持って来た。即ち、チーズ半分（！）、リニが自分でデザインし、とてもうまく出来た蔵書票とヘンクイエが手放すことを渋ったサボテンの花束。これも全部誕生日のテーブルに置く。同じく、あとでトースから送られてきたグラジオラスも。裏のベランダの外で夕食を取った。ソーセージとチーズのサンドイッチ！

ヒューセン

1943年9月6日

マリオンと一緒に、「*Little Lord Fauntleroy*」を読んだ。この本のあと、私たちはまず彼女の用語知識を計画的に広げて行くつもりだ。

ヒューセン

1943年9月8日

今日はずっといらいらしどうしで、そのためハンス君との授業も完全に裏目に出てしまった。マリオンとその件について話し合い、そのあとハンス君とは今後お互いに頑張ることを約束した。

少年たちを教える仕事に成果を上げたいし、それができるはずなのだ。

³⁶³ 脚注 302参照。

ヒューセン

1943年9月24日

再び、カーペット作りに熱中している。今度、私たちは白くて細いノモッタのコードウールを使って新たにグレーの毛糸を作った。今お互いに賭けをしている。私は戦争が終わってもカーペットを仕上げるができないとしている。というのは、それをする時間が少なすぎるし、あと幅の広いおよそ50段を織り上げなければならないからだ。マリオンは、私が容易に仕上げられるとしている。私たちは良書に賭けている。私が勝つことを心から願っている。ハンス君は隣の人からもらった新しいピンボードを持ち帰った。

ヒューセン

1943年10月1日

ジャワの新年！でも、お祭りの気配を何も感じさせない。カンポンでは物音ひとつしないし、大半の人は新しい服さえ買うことができないのだ！³⁶⁴ パサール・マラムは昨夜オープンし、照明が全体についていたが、11時（ニッポン時間）に全ての灯りが消えたのを目にした。大混雑か？それとも群集の集結に不安なのかな？

ヒューセン

1943年10月22日

ハンスとエーリックは今朝通信簿をもらった。まずまずだ。今また休暇が始まり、それも11月2日の月曜日までだ。

ヒューセン

1943年11月7日

幸いにも授業なし。こんなフリーの日はすばらしい。ハンス君に勉強を教えるのはとても骨が折れる。なぜならば、彼は自主的にほとんどできないし、全然進まないから。また、エーリックには彼を7年生に進ませるためにオランダ語と算数を特別に早くやるようにしているが、算数に向けた能力はさほど持ってないし、「思考」問題となると必ず間違える。

³⁶⁴ 断食終了を祝うイスラム教の祭りルバランを意味する。その際、各種料理が用意され大半の人々が新調した服を着る。

ヒューセン

1943年11月11日

マリオンはルート・ビルケンハウエルの誕生日にお祝いの挨拶をしに私たち3人からのプレゼントを持って下へ行った。即ち、マリオンからはハンカチの収納袋、私からはテーブルセンター、ハンスからは小さいボートをだ。ルートはとても喜び、マリオンはこの老婦人と長々とあれこれ語り合ったのだ。

ヒューセン

1943年11月16日

ハンスとエーリックは良く働いた。今日ゴバン[2.50セント硬貨]を6枚稼いだハンスは特にだ。エーリックは、仕事が少しやっかいになり、努力を必要とするようになると渋ってぶっきらぼうになるようなまだまだ非常に甘えん坊だ。彼は一番年下の男の子としては背がとても高いのだけれど、全てできる訳ではないし、する必要もないのでマリオンを利用する要領を心得ている。彼はほらを吹くが、たくましさがない。これからも印人的なチンタ[気まぐれ]をやめなければならぬ。ハンスは相変わらず反応が鈍くて、集中力が非常に乏しい。何かを学習中には半分夢の中にいるようで、「むずかしいからできない」とすぐに言い出す。多くの場合、困難にしり込みしてもどうにもならないのに。

ヒューセン

1943年11月21日

今晚トランプでペイシェンスをしていたら2回続いて13を引いてしまいあとの「インテリジェンツ」でも1回あった。きっと何か良いことを意味しているに違いない。というのは、もう何ヶ月も13が一度も出なかったからだ。

ヒューセン

1943年12月5日

聖ニコラス祭。私たちはもちろんこの時勢を考えて何も祝わない。でも、マリオンは焼き菓子をふたつ作った。各お菓子の材料は、ガチョウの卵3個、カチャン[豆]1カティ、砂糖大さじ数杯、

フィリングにはチョコレートと少量のラム酒を混ぜて！子供たちは月曜日[12月6日]には勉強する必要がないので丸二日休みだ。

ヒューセン

1943年12月10日

ハンスは再び授業を受けていてまずまずというところだ。ドイツ語復習：6。エーリックはフランス語復習：7。つまり、前回よりずっと良くなった。

ヒューセン

1943年12月11日

マリオンはこっそりとあらゆる種類の布切れをカギ棒で編んだり刺繍しているようだが、私がのぞくことは禁じられている。私はその度に自室へ行き、マリオンのためにテーブルセンターとベルトを作り、今は彼女のためにオーチャード綿でズボンを作り始めた。彼女があとでムルバブ山³⁶⁵ を登る時にはけるように。

ヒューセン

1943年12月24日

しばらく休んだあとすぐに子供たちへのクリスマスプレゼントを音を立てないように注意して包んだ。ハンスとエーリックにはそれぞれ通信簿と、ハンスへはプレゼントを買うために1ギルダの軍票と25セント。エーリックへは50セントの軍票を付けた。さらに二人にはそれぞれ2.50ギルダの軍票とトコ・ウンのために作っているグレート・キースベリーのところで買った砂糖菓子の棒1本。マリオンへはムルバブ山登りに使う（柔らかい）オーチャード綿のズボン、古生地で作った丸いテーブルセンター、カギ棒編みのベルト（バックルなし）、砂糖菓子の棒1本、ベルト・キースベリーからもらったスマンガットのタバコを3箱。全部マリー・スホーンホヴェンの紙で包んだ。見かけもなかなかいい。今晚、一緒にいられたらいいのだが。³⁶⁶

³⁶⁵ ムルバブ火山 (3142 m) は、スマラン、スラカルタ、クドゥの境界線上にある。(Gonggryp, 829)

³⁶⁶ 教師ヒューセンは、マリオン・ウルフと子供たちがクナリーラン19番地の家を日本人により追い立てられたために、1943年12月20日から25日までカランプナス62番地のA.M. (マリー) スホーンホヴェン-グートハルト未亡人の家に身を潜めていた。

今朝アンネ・ファン・フリースの「*Bartje*」を読み上げ、そのあとソックスを2足繕った。こんな具合に午前中はゆっくり過ぎて行く。2時に、私は突然窓の外で中をのぞいているバブの顔を見て死ぬほどびっくりした。それからは窓の木戸を閉めたままにしておいた。訪問前の午後は少し遅れる。私はその間に出れ、マリオンのところでもクリスマスを祝えることを願いながら荷を詰めていた。しかし、その願いもエーリックが彩り豊かなクリスマスプレゼントを入れたカバンを持って現われた時に打ち砕かれた。感動で胸がいっぱいになった。マリオンがそこまで考えていてくれたとは。

彼女からは急須カバーとナプキン入れ、ハンスからは日本語を学ぶための本と編み棒1セット（自転車のスパイク）、エリックからは自分で作った編み棒6本。全部赤いセロハン紙で包まれており、クリスマス用のリボンで結ばれ2本のグリーンの枝が付いていた。新居に私をまだ迎えることができないとの彼女の手紙を添えて。エーリックは、ANIEMがやっと来たが家中で3個きりコンセントがないと話した。そういうこともあり得る。冷蔵庫も作動している。よかった。食品のことを考えると大分違うから。その家は倉庫と同じ状態。

ヒューセン

1943年12月25日

クリスマスの当日、それに加えて特別な日に。私は財政が許せばできるだけ早い時期にハンスとエーリックにそれぞれ新しい自転車をあげるつもりである。それを彼らは私から当然受けるに値する。私は近いうちにこのことが実現することを願う。…中略…

3時近くに、クリスマスを祝うごちそうを食べた。ガチョウ肉のジャガイモ、グリーンピース、ニンジン付きだ。今日はたくさん読書しペイシェンスをして遊んだ。7時半過ぎに部屋を出ると、そこにはマリオンが私を待っていた。彼女は、「あなたを迎えに来たのよ」と言って私を出迎えた。私は天にも昇る気持ちを、マリーに気付かれないようにした。暗くなり始めた8時に、カンボンを通してマリオンと歩いていった。再び外で何かを目にすることのすばらしさ。私たちはたくさんおしゃべりしてたらすぐにも家に着いた。³⁶⁷ …中略…

クリスマスのため、晩に(ルート・ビルケンハウエルからの)クリスマスのお菓子とルートとモーフ・リュケルト夫人と私からの砂糖菓子を。そして、私たちは11時半までおしゃべりして起きていた。マリオンはすっかり疲れきっている。でも、彼女は見事に演出し、立派にがんばっているとの一言に尽きる。

³⁶⁷ F.シーウェルツ・ファン・レーセマー家が以前住んでいたクナリーラン22a番地の新居。

ヒューセン

1943年12月31日

晩には、不愉快さや心配事ばかりあるにもかかわらず起きていた。少年たちも同じようにしていたが、エーリックは9時にはもう泣きべそをかいていた。もう耐えられないのだ。そのため、私たちは10時にグラス1杯のワインと一緒にコロッケを食べた。エーリックはワインを嫌がったが、ハンスは一気に飲み込んだ。そのあと、エーリックはケーキ食べ、レモネードを飲んでからベッドに入った。マリオンと私はおしゃべりを続けていたら、12時半にハンスが来てベッドへ行くと言って眠ってしまった。そのあと、マリオンはアドヴェンツクランツの4本のロウソクを灯した。部屋の電灯を消し、ゆっくりくつろげるロウソクの灯りの中に座って、私たちが何も消息を知らない家族や友人を想った。戦争中3回目の大晦日である。1時半（つまり私たちの時間では12時）に新年幸あれと乾杯した。そして、ロウソクの炎がひとつずつ消えていくまで起きていた。3時に私は寢床に就いた。もう1944年だ。今年は私たちに何をもたらすのだろうか？

ヒューセン

1944年1月16日

この日は、コーヒーのおかわりとタバコのおまけ付きで始まった。でも、カルト - ジャガの不意の発言によりマリオンの息子エーリックが古い草刈機を盗み、ミン（カルトの愛息）が昨晚カンポンへ持って行き、そこで売ろうとしていることを彼女が知ったとたんまるで異なる驚きとなった。ハンスとカルトは泥棒君を探しに出かけた。やっと11時半になって、彼は草刈機を持って戻った。もちろん彼は、カルトとミン君に強要されてそうしたのだろうが、このことで彼があまり信頼できない面もあることが判明した。彼はその他にもミス・ファン・フリートの自転車のタイヤも盗んで売ってしまったことがわかった。そのタイヤはまだ戻っていない。³⁶⁸ …中略… もしマリオンが厳しくし、（困難な時期であるからと）全てに目をつぶらなければ、何とかまたうまくいくだらう。

³⁶⁸ ファン・フェルデンによると、「特に年長の少年たちは、全体的に混乱した社会生活に耐えられず、盗みや無法行為などを犯し、よりたやすく誤った道にはいつてしまった。好んで行われたのは、アジアで昔から盛んになされてきた商いであり、あまり苦勞せずにもうけることができる中古品の取引、つまりインドネシア語で『チャトゥット』と呼ばれることであった」(Van Velden, 450-451)

ヒューセン

1944年2月17日

5時にエーリックは盗んだタイヤを売った原住民のもとへ行ったが、また売られてしまったという知らせを持って戻って来た。エーリックは8ギルダー手に入れたが、もうそのお金も使ってしまった。そのタイヤに関係した男は、カルトの義理の息子の友人だ。要するに何もかもブスク[不正]なのだ。

ヒューセン

1944年2月19日

ハンスは本当は授業中なのだが、マリオンが彼は腹痛のためあまり無理して勉強させないで言うので、たるんで張り合えない状態だった。コーヒーのあと、(11時)マリオンは牛を飼っているマリーのところでハンスにあげる牛乳を分けてもらうために姿を消した。彼女は「すぐに」戻る予定で、今日は土曜日で私も早く終わるのでうれしいと思っていた。しかし、楽しんでいる模様だ。そこで、彼女はジョカからきた誰か(ファン・デルデン夫人)や(今日の午後当然訪れなくなる)ジャーネ・モーフ、そのあとはキースベリー一家に会うのだ。マリオンは食事の時間である2時にまだ戻らないので、おしゃべりに夢中なようだ。たくさん外出できることは彼女にとっていいことだ。いつも家の中にいるのはつらい!

ヒューセン

1944年2月20日

ルートは英語の幾つかに質問があり、私が教えることになったのは、「*Versions annotes*」で、一方、彼女はペテロンガン13番地から私の「*Introduction to English Literature*」を持ってきてくれる。

ヒューセン

1944年2月24日

私がここに滞在して1周年のため、私たちはギムレット・カクテルを飲み、タバコをもう1本吸った。今日はジャーネ・モーフの誕生日なので、マリオンはあとでそこへ行く予定だ。しかし、雨

が激しく降っていたのでマリオンは出かけなかったが、ハンスが雨の合間に私たちを代表して彼女におめでとう、そしてママは明日来ると言うためにキングサリの花束を持って自転車でいった。

ヒューセン

1944年2月28日

母親ビルケンハウエルの誕生日のため、マリオンは美しいアングレック・ブラン[胡蝶蘭]、彼女からの石けん、私からハンカチを持って下へ向かった。…中略… 母親ビルケンハウエルはマリオンの訪問に喜んだ。午後に少年たちが同じく花（さそり蘭）と砂糖菓子の棒を持って行く。

ヒューセン

1944年4月13日

今日の午後の5時半（私たちの時間）にファン・ブラムセン夫人と通りをいくつか初めて散歩した。³⁶⁹ 4週間後に屋根を目にし、今再び地面を歩き、周りの人々を見ることは独特な気持ちだ。快い気分にくれた。再び木曜日だったので、線香が焚かれていた。³⁷⁰ 夫人は迷信を信じないといつも言い張っているが、あらゆるしるし、夢、兆しを真から信じているのである。

ヒューセン

1944年4月14日

今日の午後6時に、再びファン・ブラムセン夫人と一緒に少し散歩した。薄明かりの中を路面電車の駅、元のオースターワル通り、ヤップでいっぱい、照明が全体についているホテル・ヤンセン³⁷¹ のあるヘーレン通り、そのすぐ近くの反対側にある商船学校に沿っても。建物や家々は全て荒廃し、空で味気ない様子をしており、貧しい中国人といくらかのジャガ[見張り]の暮らし

³⁶⁹ その後、マリオン・ウルフと子供たちは強制収容され、教師ヒューセンはファン・ブラムセン一家のもとに下宿（潜伏）した。

³⁷⁰ 木曜日の晩は、ジャワ人にとりある特別な魔術的意味を持つ。この「Malam ju'mat」（字義：金曜日の前晩）に与えられた魔力により、木曜日の晩に線香や花々の香りを供えたり、クリスに油を差して手入れして、霊魂を良好な気分にする。また、魔術師もその儀式をほとんど木曜日に実施する。箴言を通して例えば病気になることもある。生氣ある物体、人間に対する霊界の力を崇拝するこの（アニミズム的）信仰は、「kejawan」という。キリスト教またはイスラム教を信仰するジャワ人も多くの場合、この魔術と不安への信仰を除外することはない。（「インドネシア人との接触」ヒューセンの日記 1944年6月6日参照）

³⁷¹ スマランのヘーレン通り38番地沿いのホテル・ヤンセンは、日本占領中、ジャワ・軍抑留所の第三分所となっていた。（Van Dulm 他., 134）

ぶりがそここに感じられるわびしい家並み。また、全てが汚れ廃退している。でも、懸命に編物し、たくさん考え込んでいた一日の終わりにするこのような散歩は私を元気付けてくれる。

ヒューセン

1944年4月16日

ファン・ブラムセン夫人と私は少し散歩し、30分後に新鮮な気分に戻った。でも、心のそこでは私がしていることに対する不安を抱いているが、これでいいのだ。なぜなら、こんな状況がまだ長く続くとすると、私はきっとここでは耐えられないだろうから。

ヒューセン

1944年4月26日

今日の午後、「*Max HaveLaar*」を読んだ。明日、私はデ・ペロン作の「*De man van Lebak*」を読み始めることにする。その間にも私は「*Kunstgeschiedenis*」と（グリムの）「*Michelangelo*」の一部も読んでいる。こうして一日を過ごし、晩には気分転換のためにペイシェンスをして遊ぶ。

ヒューセン

1944年5月17日

私は現在たびたび聖書を読んでいるし、何が手に入れば他の本も時々読む。また、Q.夫人³⁷²の長女ネルが働いているところのお針子からもらってきてくれたはぎれ端切れを使ってカーペットも織っている。

ヒューセン

1944年6月14日

本日は、Q.夫人の結婚25周年記念日だ。今晚はスラムタン[感謝の食事]があり、若者たちにはダンスを伴う楽しい夕べとなるはずだ。一日中、みんな料理に大忙し。各自が何か持参し、貯蔵品がいっぱいだ。ケーキ、砂糖、シロップ、クウェー・タラム[米粉、ココナッツミルク、シュロ

³⁷² 教師ヒューセンはその後、Q.一家のもとへ引越した。「居住」ヒューセンの日記 1944年5月6日参照)

糖入りプディング]とコーヒーの他にメニューには、トゥトルガ[トリ肉料理]、クレープ、ブームプ[辛味ソース]、ルジャック[辛味のフルーツサラダ]。全てがとってもおいしい。玄関の間にいるファン・ブラムセン家は、彼女のおかしな態度が原因で中途半端に招待されているが、私はQ.夫人と一緒に配膳を準備する予定だ。

お客は29番地の住人全員で、プレーゲルス一家、エティ・ファン・ウーシック、エミール・ファン・ウーシック、ノノ・ファン・ウーシック、イエチェ・メーヤースだ。ファン・ウーシック老婦人(ブックさん)は病気である。私は彼女の様子を見に行く。その他ここには、ブンキ・ラーゲフェーン(イエチェの友人)、私にはあまり好感が持てないドウ・ヴィレヌーヴ夫人、アルトマン少女とその弟がいる。ルーウイ・ファン・ブラムセンは欲の深い目つきで女の子たちを見つめ、やさしくあろうとしている。彼の妻メラは食堂の長椅子の上に座り、全てを不機嫌な顔つきで観察している。ピート・Q.が今朝パーティーの許可を申請したので、ケンペイタイからふたりの男が来た。なぜならば、たくさんの人が集まってはならないからだ。…中略…夕べはなごやかに過ぎていき、若い連中が去った時はもう大分遅かった。そのあと私たちはさらに片付けした。ルーウイとメラはずっと前に寝床に就いてしまった!

本日、聖書を読み終えた。

ヒューセン

1944年6月26日

Q.夫人、ネル、イエチェが私を祝ってくれた。今日はお祝いで、イエチェは最初の給料があったとことちょうど19歳半だということでごちそうしてくれた。彼女は12月26日が誕生日だ。…中略…私の部屋でゆっくり編物をしていた時、誰かを呼ぶ声がしたら、しばらくしてQ.夫人がベセック[カゴ]と小さな紙を持って入って来た。トコ・ウンから20個のケーキがあるようで、手紙はルートと彼女の母親からだ。夫人と私は涙を浮かべた。いろいろなことがあるにもかかわらず、彼女たちは私の誕生日を思ってくれたのだ。マリオンと子供たちのことを思い出す。少しでもともに過ごせたらいいのに。…中略…

食後に、夫人とネルは続けて(祝宴の)食事を準備し、私はしばらく休んだ。そのあと全員にルートからのケーキ付きでお茶を飲んだ。私たちはこれに満喫し、子供たちは顔を輝していた。隣人たちも一緒に試食した。その最中に、イエチェが花(ブーゲンビレアとキョウチクトウ)で飾った包みを持って来た。それは私へのプレゼントで、フェミナ製の(化粧)石けんが2個入っていたので、私は彼女に感謝の気持ちを伝えた。さらに私はコロッケの中身を試食した。今晚はとてにぎやかになろう。暗くなるまで、ネルは焼くことに忙しくしていたが、その他にも彼女はピサン・ゴレン[焼きバナナ]も作ったのだ。イエチェはさらにコーヒーキャンディーもごちそうしてくれた。その夕べは順調に過ぎたが、雨が降りだし、若い連中は食べ過ぎてしまい、蒸暑い天候であったためにダンスはあまり活気なかった。ファン・ブラムセンは非常に早く寝床

に就き再び姿を見せなかった。Q. 夫人は、全ての必需品と食事の料金表を私のために作ってくれた。

ヒューセン

1944年8月6日

昨夜遅くにブック、ミレ、リリィ・ウィーゲルス夫人と神父について語った。リリィ・ウィーゲルスは約7ヵ月前に彼女の夫が連行された時に初めて信者になり、今ではジャワ人の神父の言うことを全部無条件に信じており、またカトリックの聖職者全員の誤りのないことをもた。彼女と同じようにカトリック信者であるブックとミレはこのことをもって自然に見ており、そのため私たちにはたくさん語り合うことがあった。

ヒューセン

1944年8月13日

レンノ・ウィーゲルスの誕生日。4歳になった。私は彼に95セントしたサーベルと60セントで甘い物を彼とアドリチェとあげた。合計1.55ギルダー。

ヒューセン

1944年9月10日

ハンナ・ウィーゲルスから、平面幾何学の本1冊、植物学の本1冊、年表1冊、速記の本1冊をまとめて5.50ギルダーで買取った。彼女は残念ながら、彼女の夫フリッツのものだからとクーネンの辞書を手離そうとしなかった。私はハンスがあとでこれで大きな成果を上げれるように願う。

ヒューセン

1944年9月29日

Q. 夫人の誕生日。誕生日のプレゼントとして彼女に貸してあった10ギルダー（商いの資本）を免除した。明後日は幼いリーシェが誕生日なので、私たちがこちそうする。

ヒューセン

1944年10月1日

ピートQ. が私のためにカイゼルス・クルツの植物学第2巻の中古本を3.25ギルダで買ってきてくれるので、この部門は完璧となる。平面幾何学では、ハンナの本にはないのでファン・タインからの章の幾つかを書き写しているが、紙が十分がないので手間がかかる。私たちにはペンとインクもないが、幸いにも複写用鉛筆はまだある。私たちは全てにおいて間に合わせることを学ぶのだ。

ヒューセン

1944年10月7日

ネルと一緒にスマラン東を歩いてかなり長く散歩した。暗かったが、あまり暑くなかった。このことをこれから度々することにした。

ヒューセン

1944年12月1日

今日の午後は読書した。ここ数日前からまたペイシェンスをやっている。編物がないし、読書ばかりやってもいられないからだ。加えて、周辺にある蔵書数が底をついてしまった。

ヒューセン

1944年12月5日

[聖ニコラス祭] 幼いリーシェの靴に入れるためにおいしいものを少し取り寄せた (30セントの板チョコ1枚、コーヒーキャンディー1箱、フルーツドロップ1本)。

ヒューセン

1944年12月24日

ネルはルートのところへ。私は母親ビルケンハウエルのために針刺しを作り、これと一緒に編物の図案、速記帳、地図帳を持たせた。ネルは今晚、つまりクリスマスの夕べに私たちの心を奪う

であろう大きなケーキを持ち帰った。3回目の奇妙なクリスマスである。一体マリオンと彼女の子供たちはどうしているのだろうか？私はこれについてあまり考え過ぎないほうがよさそうだ。
…中略…

午後になって、イエチェ・メイヤースはV.家へ行くために自転車を借りに来た。暗くなる頃に彼女は戻り、同時にクリスマスプレゼントを4つ私に持って来た。すなわち、イエチェとルークからは帳面ホルダーとしおりと針刺し、ペニーとブックからはカレンダーとブックが描いたクリスマス用キャンドルだ。とてもすてきで全部自分で作り、きれいに仕上げている。私は全くまごついてしまうのだ。イエチェはその後私が長い間とても欲しかった本を2冊彼女からのクリスマスプレゼントとして私に持って来た。「*Toen de wateren afnamen*」と「*Geboorte*」である。その間に、Q.夫人はコーヒーを沸かし、イエチェがルートからのケーキを開く手伝いをし、私たち全員でそれをおいしくいただいた。あとで私は子供たちのためにクリスマスツリーが飾ってあるお隣りさんのところへ行った。クリスマス気分が全然しなかった私だけけれど、この夕べは他の晩とは違って良い気持ちにさせた。

ヒューセン

1944年12月26日

イエチェ・メイヤースの誕生日。私は早めに彼女におめでとうを言いに行き、私の白いハンカチをあげた。私は何か買うことができないから。…中略… 午後6時頃、ルークとペニーがおめでとうを言いを訪れ、私のところへ立寄った。ペニーは私にカーネーションの花束と私がすぐに平らげてしまった春巻をふたつ持って来てくれた。おいしかった！彼女たちと一緒に隣りへ行き、ケーキを1切れとシャンパン・サイダーをごちそうになった。たくさんおしゃべりしていたら時間があつという間に過ぎた。…中略…

暗くなってから隣へまた行った。なぜなら、私は「食事」に誘われていたからだ。かなりたくさんの方がいて、玄関の間の楽な椅子に座りメニューを供された。インゲン豆スープ、イエチェがプレゼントにもらった酢漬けミックスピクルス入り) ロシア風サラダ、バニラソース付きプリン。少し疲れたので、10時半に自室に戻った。

ヒューセン

1944年12月31日

大晦日！…中略… 11時にブックとペニーが訪れ、おいしい物を持って来た。小さなカゴの中には彩り豊かな小型のケーキとトコ・ウンのはちみつ入りケーキ3枚が。私は彼女たちにあまり無駄遣いしてはだめだと言ったら、彼女たちの母親がいるジュルナタンへも送らなければならな

ったし、私にもくれたのだ。甘い物を食べるのは特にあまり入手できない現在はすばらしいが、自分のことを思ってくれたことを考えるともっとうれしくなるのだ。…中略…

Q. 夫人と彼女の姉、そしてたくさんの子供たちが7時に教会へ行く。片方の靴下を編み上げて表へ出るとすぐにケーキとシロップをもらった。彼女たちは私の食事も勘定に入れていたのだ。Q. 夫人の帰りが遅くなると、私は事実おいしいインゲン豆（本格仕込み）食べたあとは、添え物付きナシ・クニン[ウコン汁入りご飯たっぷり]だ。最初のはベエー・クンツからで、あとはハンナからだ。

Q. 一家が帰宅すると、私も家に戻る。ネルと子供たちはウィニーおばさんのところへ行ったが、私はQ. 夫人と話し続けていた。1時半（ニッポン時間）、私たちには真夜中にお互いに幸あれと挨拶を交わし、私は同じ目的でお隣さんへ向かった。そこで（ちょっぴり本物のポートワインの味がする）ワインが出された。2時半に寝床に就いたが、あまり眠れなかった。目下、私の頭の中にはいろいろなことが思い浮かぶのだ。

ピート・Q. はファン・ティーネンのところで「祝い」、今晚用の買物に120ギルダー負わされた。彼が夜中に帰宅した時、彼は酔っぱらったふりをした。この近辺はまるで雰囲気がなかったが、幸いにもまた過ぎ去った。

ヒューセン

1945年1月2日

ピートから、私のところに集まった新年の「パーティー」にはイジン[許可]をもらっていた。彼によると、ファン・アルケルを含む酔った少年3人の持ち込んだ古いウイスキーとポートワインそれぞれ1本を飲んだ全員（40人だ）が酔っぱらっていたということだ。めちゃめちゃであったようだ。酔った少年たちは家に閉じ込められた！ピートは彼の母親と私にまだ新年の挨拶をしていない。マナーを全然知らないのだ！イエチェ・メイヤースはそのパーティーに招かれた少女たちのひとりと話しをしていたが、この少女はことがとても奇妙に運んだため早々と家へ帰ってしまった。

ヒューセン

1945年1月23日

動物学を勉強し、イエチェが私のために借りてきてくれた物理学の本からも学んでいる。そうすれば、あとでハンスにもっと上手に教えることができるから。

ヒューセン

1945年1月30日

昨晚からネルは聖書を読み始め、今朝からは、ほとんど読むことができないフレッディとヤーピーもそうしなければならなかった。信じられないけれど！私が思うところ、このことは最近、私がQ. 夫人に彼女の意見がきっかけとなって彼女に対して「真のクリスチャン」でないと言ったためだ。このことがひどく彼女に衝撃となったらしい。なぜならば、彼女はイエチェにもこのことを告げ口したから。

ヒューセン

1945年2月12日

イエチェは本を交換するためにイエットおばさんのところへ向かったので、あとで私はまた蔵書できる。

ヒューセン

1945年3月28日

読書することはすばらしいが、蔵書が底をついてしまった。食堂の電球が不良となり、今ここにあるのは私のだけだ。私はその電球を就寝する時まで使い、そのあとはQ. 夫人に渡す。私は食堂ですっとそれを使ったらどうかと提案したが、夫人は望まず、むしろ暗いところにいるほうがいいらしい。誰も読書しない。本は彼女にとっては罪深いものであり、だから電球がとても必要でもないのだ。

ヒューセン

1945年4月1日

9時半頃、（教会へ行く前にカトリックの）ベエー・クンツが私に葉っぱの中にイースターバニーとコーヒーキャンディー6個入った小さなカゴを持って急いでやって来た。うれしかった！イエチェが10時半に自分で焼いたカチャンケーキ[豆粉で作ったケーキ]をルートに届けるために自転車を取りに来た。私はベエー・クンツ用の靴下を編み続けた。…中略…

6時にイエチェが戻り、私にイースターバニー、別名ルートからもチョコレート1個、カチャンケーキ1切れ、タバコ2箱を持ってきてくれた。また、ネルを通して注文のあったブラウ

スを私が作り始められるように編み棒とノートも！晩の9時にイエチェが再び来て、今度は私のカバンの中に本をいっぱい詰めて持ってきたと思ったら、本は1冊だけで残りはナン・クニンが1皿入っていた。Q.夫人のことで私が行くことができないので、彼女は今日ごちそうしてくれたのだ。嫉妬をかきたてないように、彼女は私にこっそり持ってきた。その予定で7時半に少しきり食べなくて良かった。この企ても完全に成功し、誰も何も気付かなかった。…中略…

この時勢を考えてみても、私にはとてもすばらしい復活祭だった。

ヒューセン

1945年4月21日

月夜にお隣さんと一緒に橋の前に座っていた。このこと自体が、Q.夫人によると本当は禁じられているが、私は灯りのない部屋の中にいつまでもじっとしてられない。

ヒューセン

1945年4月26日

ブックは私のためにトマス・ア・ケンピス作の「*De navolging van Christus*」を手に入れるために努力してくれる。…中略… 1時ごろリーンに編物の図案を渡すことを口実として隣りへ行った。ヨーピー・リュバイ・バウマンもボジャからの親戚もそこにいたので大にぎわいだっただ。とてもたくさんおしゃべりし、(約束していた！)軽食を一緒にいただいた。私は床の上にヘッテマの歴史地図帳が2冊あるのを見つけ、ハンナの1冊を5ギルダーで買取った。彼女はそのお金を役立てることができるのだ。

ヒューセン

1945年5月1日

イエチェが正式に婚約した。…中略… 私は6時に隣りへ行ったら、そこには他の人に混じってグース・リュバイ・バウマン-デ・ブラウンと彼女の息子テオもすでにいた。ヨーピーは営業時間からすでにそこにいた。しばらくして、ルークとブック・レーベルトが来て、イエット・フォーールバイ-ラケットとペニーT. がベチャ[輪タク]で到着した。イエットは私の手の中にいくつかの小さな包みを押し込んだ。つまりは、長い鉛筆1本(現在ではぜいたくな物!)、ジェルック[柑橘類]4個とコーヒーキャンディーだ。ペニーからもコーヒーキャンディーとカチャン[ピーナツ]をもらった。彼女たちが私のことをこんなにも思っていてくれてとても感激する。…中略…

だんだんと大勢の少女たちが中に入り、7時過ぎに全員が小さいグラス1杯のポートワインをもらい、正式に婚約がなされた。その際、イエチェの戦時の母親としてイエットは短いが温かい心からのスピーチをディックに贈った。そのあとで指輪の交換と乾杯。私たちが再び着席した時に、ペニーが描いたカードが回ってきて、その上に全員がサインした。そのあと、最初の料理が出てきて、まず、おいしいインゲン豆スープ、その次にチキンパイが。暗くなる頃にグースB. とテオ、イエットV. と少女3人が去った。ヨーピーとたくさんおしゃべりした。彼女は変り、とても良い面で強くなった。9時に2コース目の料理ナシ・ゴレン。10時に家へ帰った。

ヒューセン

1945年5月7日

本日はネルQ. の誕生日。私から彼女には5ギルダー、シロップ2本、卵2個とお花を少し。私たちはとても親しい間柄だ。…中略… 夕方に特別な食事をいただいた。早々と、コラック[シュロ糖とココナッツ入りのフルーツムース]で始まり、小1時間すると(チキン)スープ、特別に上等なサユール[野菜料理]付きご飯、グラ・ジャワ[シュロ糖]付きのクタン[もち米]。バナナ1本、タペ・クタン[発酵もち米のお菓子]、プリン(ブルーレシュガー付き)、ココア1杯。私たち(全員同居人で、訪問客はいない)は食堂に座っていた。というのは、雨が激しく降り、前後の部屋はとても寒くて湿っているからだ。私は話しに楽しみ、特にピートが話し出すと！彼は自分のガールフレンドの手紙さえ、愉快と思っているオイスとリーケに読ませたり、くすんだ紫色のビロードのカーテン地で作られたランバージャケットのようなものを暑い中(私自身暑かった)見せばらかしていた。彼によるとこれが最新の流行だそうだ。

ヒューセン

1945年5月26日

ベルンハルト夫人から22冊の本を合計20ギルダーで買取った。これは買得だったのだ。なぜならば、良いものが入っていたから。今また読み物を得たのだ。

ヒューセン

1945年6月14日

[木曜日]ヒレブラント夫人とベルンハルト夫人が住んでいる玄関の間のドアにチョークで書かれたかぎ十字をQ. 夫人と私は目にした時、Q. 夫人がふきだした。なぜならば、彼女が言うことに

は、それはセタン[悪魔]を追い払うことを意味しているから！人々はことのほか迷信深いのに、それでも教会へ通い聖書を読んでいる！

ヒューセン

1945年6月18日

ブンケ・クンツから、今各地の学校で歌わされているマレー語の歌集を借りた。

ヒューセン

1945年6月24日

午後にルートが不意に訪れた。彼女は風邪をひき、寝込んでほと心配していた。すぐに私が彼女の目前で平らげてしまったほどおいしいサラダを持って来てくれた。とてもおいしい味がして、ランプステーキさえ付いていた本当に戦前風！その他に誕生日のプレゼントとして、ジェットと彼女の娘がボゴル[ヤシの葉]と布片で作った器で私はとても気に入っていき、その少女から1切れのバウムクーヘンもだ。私に代わって買ってもらった品物の精算も同時に行った。その間に、ブンケ・クンツが来て、誕生日のプレゼントに鉛筆を1本持って来てくれた。彼は火曜日[6月26日]に来られないかもしれないと不安だった。同じく、プックおばあさんも訪れ、彼女が作ったドレスを試着しに来ないかと尋ねた。そのドレスはぴったり合い、ベエーは私を彼女の部屋へ招いて、新しいドレス用に縁がかぎ針で編まれ、「J.H.」と装飾文字が付いた美しいハンカチを私にくれた。まだまだ誕生日でないのに、もうこんなにたくさんのプレゼントが！

ヒューセン

1945年6月25日

食後に、Q. 夫人が外出すると、私はお隣りさんのところへ行き、皿洗いを手伝い、甘い物を食べてコーヒーをいれて飲むのだ。その間に、プックおばあさんがパサールから戻り、私の誕生日のプレゼントに初等教育1年生の本(Menoedjoe kelas Indonesia)³⁷³を持って来てくれた。そして、ハンナが私のレポート用または日記帳にと分厚いノートをプレゼントに持って来てくれた。そのあとにプックおばあさんがほぼ仕上がった私のドレスに手を加えていた。ベエーは、明日ごちそうできるようにと1本2.40ギルダのシロップを2本と1パック1.35ギルダのジパン[もち米と砂

³⁷³ インドネシア語教育用教科書。

糖のお菓子]を2パック私に代わって買ってきてくれた。Q. 夫人が祝宴のための買物から戻り、あとで私に必要なことを全て書き留める予定だ。

ヒューセン

1945年6月26日

Q. 夫人から一番初めに祝福され、その次に子供たちから。私はコーヒーに砂糖を余計に入れて、各自にジパン[もち米と砂糖のお菓子]を2つずつあげた。6時前にベエーが早くも祝福しにきた。そのあと私は彼女に連れ立って、プックおばあさん、ハンナ、エティ、ウィーゲルス老人、イエチェによる祝い「に」行った。イエチェからはムスティカ化粧石けんを2個プレゼントされた。…中略… さらにベエーからは大きなタペ[発酵もち米]のケーキをプレゼントされたのだ！…中略…

私は一日中休む暇もなく、31番地と29番地の間を行ったり来たりしていた。その間に、私たちはタペ・クタン[発酵もち米のお菓子]とシロップをいただいた。そのあと、ベエーとハンナがパサールで28ギルダー費やして帰宅した。私は食事に帰り、各自にタペ・ケーキを1切れずつ持参して戻った。しばらくして、イエチェとヨーピーが訪れ、それぞれルート・ビルケンハウエルからのケーキとロシヤ風焼き菓子、また、J. H. v. B.³⁷⁴の文字付きの帳面、そして鉛筆を1本私に届けてくれた。でも、こんなに甘やかされた「貧しき者」のすばらしさ。私たちはまたシロップを飲んでケーキを食べ騒いだ。そのあと、1時(N.T.)に女の子たちは事務所へ戻って行った。ああ、何たること！私は再びベエーのところで、ご飯とボゴール風レシピによるテカル・アシン[塩漬けの固ゆで卵]の野菜料理(とってもおいしい)とお肉をごちそうになった。最後にカティ[パパイヤ]半分もだ！家に帰る時に、お皿を8枚、コップを1個とスプーンを1本持って行った。なぜならば、私たちのところにはもう何も食器セットがないから。陰気な想いを一時でも追い払うために、私たちには食べて騒いで笑うことが必要なのだ。収容所の霊柩車が大きくされ、今は同時に4つの棺が入れられることを聞いたりすると、すぐにも心臓が締め付けられ、顔にかげりがさしてしまうが、私たちは何とか頑張らなければならないし、それだからこそ少しははめをはずすのだ。

昨夜は満月でとてもいい天気だった。10時に月食が始まり、ほとんど影に隠れる11時半頃まで続いた。四方八方からクトンガン[信号盤]の音がした。ヨー・ビスホップが編んでくれた古いブラウスをモデルにして作った私の新しい青いブラウスに付けるために、ベエーから青いボタンを5つもらった。ぴったりだ。

³⁷⁴ 教師ヒューセンはルーイ・ファン・ブラムセンのバンドンにいた姉Jane Harriet van Bramsenを装っていたためこの頭文字がなされた。(「居住」ヒューセンの日記 1944年5月2日参照)

午後6時 (N. T.) にガウンを着て隣りの家へ行った。ぴったりと合って、とても細身に見える新しいドレスを着た私は、イエチェに髪の後ろをひとつのまげに結ってもらったら、みんなが驚くほど見違えたようになり、10歳も若く見えると誰もが認めたほどだった。ベエーの口紅と香水をつけて全て完了。暗くなって食事となる。Q. 夫人はすばらしいナシ・クニンを作っていてくれて、全部とてもおいしくて結局すっかり平らげてしまった。また、シロップ、ケーキ、焼きバナナと、まるで舌がとろけるようだった。さらにブンキ・ラーゲフェーンからも、イエチェが私のために買ったシャンプーをもらった。まだ祝福に訪れていないのはネルだけだが、それでもプレゼントにナシ・クニンが届いた。みんなが帰宅した時はまだそんなに遅くなかった。

ヒューセン

1945年6月27日

Q. 夫人にパーティーでかかった費用を全て書いたリストを求めた。ナシ・クニンは合計26.85ギルダールしたことがわかり、即ち1人当たり1ギルダールを上回る。なぜならば合計26人で食べたからだ。焼きバナナは全部を外で買ったとしたら合計8.70ギルダールだが、この焼きバナナと米は券で手に入れたものだから高くても合計2ギルダールだ。…中略…

ベエーは自転車でニニ (キック夫人) のところへ行き、私に黄色がかかった白い毛糸に35ギルダールを持って戻り、私が土曜日に白い純毛をもらえるとのことづけ、ニニから私の誕生日の祝福のことばとともにプレゼントとしてコア印のタバコを1箱を持ち帰った。私が自転車を家に戻そうとした時、手を広げて、「先生 (!) お誕生日のご挨拶をしなければなりません」と述べるネルに衝突しそうになった。昨日彼女が来なかったことを変だと思ったのをきくと老婦人が言ったに違いない。

ヒューセン

1945年7月7日

夕方はベエーのところでブンケ・クンツと一緒に食事した。献立はトマトのオムレツ、おいしいサユール[野菜料理]、豆腐とパイアだ。雰囲気は上々で、プックが来た時に私たちは笑っては甘い物を食べたのだ！私は「ラック」と「レック」のことで彼女たちを冷やかしたら、彼女たちは本物のインドネシア語を話し始めた。ことばに関してはここでたくさん覚えたが、インドネシア語のことば遣いをまだ十分にはわかっていない。

ヒューセン

1945年7月16日

誰もが賭けをするためにパサール・マラムへ行く！イエチェが私にルーレット場の入場券をくれた。料金2.50ギルダー（損した分は含まれず！）勝つ人もいるにはいるが。…中略… ベエーは良きカトリック信者で教会へいつも通っているが、彼女は神様と人間に対しあまり信頼感を抱いていない。私はこの点に関して彼女を助けようと思う。

ヒューセン

1945年8月9日

ラテン語を再び始めたが、思ったより難しい。

ヒューセン

1945年8月13日

すでに朝早く、レンノの5歳の誕生日を祝うため隣りの家へ行った。ハンハルト夫人もちょうど訪れ、彼女の息子がすぐにも帰省するから祝ってもらいたがった。そのあと、私は家に戻り、私の茶色の毛糸のソックスを編み上げ、ラテン語を少し勉強してから11時半頃に再び隣りへ行った。私は1時にベエーのところで食べ、夕食はハンナのところでだ。ニニ・キックも来て、クテラ[キヤッサバ]の下準備や調理中にたくさんおしゃべりして笑った。マリー・ファン・デル・ワウデもハンナのところに立寄り、輪タクの男が彼女に言ったジョークを語った。「スカラン・ビラン “サヨナラ・サン”³⁷⁵ スディキット・ハリ・ラギ・ビラン “ハロー ビル” [今は “サヨナラさん” と言うが、数日後には “ハロー ビル “と言うのだ]」ベエーのところでの食事は簡単なものだったけれど、とてもおいしかった。ご飯と一緒にサユール・ボゴール[ボゴール風野菜料理]、豆腐、チュプロック[目玉焼き]3分の1、テロル・アシン[塩漬けの固ゆで卵]、カチャンソース[ピーナツバターソース]、デザートに次々に果物、つまりパパイヤ、パイナップル、バナナだ。しばらくして、クライ[キュウリ的一种]のサラダと未熟なマンガ[マンゴ]が出た。

³⁷⁵ 「サヨナラ」は日本語で「別れ」を意味し、「サン」は人名に添えて敬意を表わす。インドネシア人住民による「サヨナラ」ということばの誤用は、1942年には次のような警告の記事が3月30日付の*Soerabaiasch Handelsblad*に掲載される結果となった。『特に子供がニッポン兵士に対面すると「サヨナラ」と大きな声で頻繁に言っているが、これは「別れ」を意味するので間違ったことば遣いである』（Brugmans 他., 184）

雰囲気 / 終戦後の生活への想い

バタビア

ハンベル

1942年3月10日

バタビアはパニックに陥りました。私はマドゥラ通りにいました。突如、A. 夫人がやって来て、「彼らが水道水を汚染したから飲んでではだめよ。もう死者が何人か出た！」と。みんなが元栓を閉じて、ノリット³⁷⁶ を服用したのです。私はこのことをかなり馬鹿げていると思いました。なぜならば、ヤッペンもそうしたら飲めないことになるから！知人全員が私たちに電話をしてきました。スندا通りでは、隣家の人が私にそのことを知らせるために駆け寄ってきました。しばらくしてから、ラジオでこれは誤報だったと聴かされたのです。そのうちに、雨が降り始め、みんなが雨水を溜めていました。

ハンベル

1942年3月21日

L. 夫人はある女性の占師を訪れたら、その占師は、…中略… ヤッペンはここに6月か7月まで留まるであろうと語りました。もっとも、私たちがある日ヤッペンの支配下に置かれるとすでに書物³⁷⁷ に出ています。英国は支配力を失い、米国はナンバーワンとなるようです。あなたがすぐにも帰還なされば、どんな予言も関係ありません。ヤッペンが決して退散しないということすら。あなたがここにいさえすれば、私にはどうでもいいことなのです。このように離れ離れにいるより、一緒のほうが全てのことにより良く耐えることができるのです。

ハンベル

1942年4月15日

あなたは6月に戻ります。どうして私がそれを知っているか？あなたが戻り、最初の日ですでにあなたの知人たちがあなたに会いに来た夢を見たのです。その時、私はとても怒ってしまいまし

³⁷⁶ 胃腸障害薬として使用されるカーボン錠剤の商品名。

³⁷⁷ おそらく、「ジョヨボヨの予言」のこと。脚注 58参照。

た。あとでまた来るようにと言って、彼らを追い返したのです。あなたは私だけのもの、もう5ヶ月もあなたに会えなかったのですもの。

ハンペル

1942年5月22日

哀れな私たち！私たちはふたつの精神的重荷にはさまれています。つまり原住民とヤップ。両方とも私たちに対して親分を演じたがっています。ママP. が二、三日ここに来ました。彼女はバンドンからやって来たのです。そして、彼女もこの町の嫌な雰囲気を感じ取りました。死のような静けさ、それでもまるで何かが宙に浮いているようなのです。

ハンペル

1942年6月12日

パパは自分の衣類、葉巻、タバコ、ひげそり用石けん等々を全部包みにしました。彼らにランパス〔略奪〕される場合を考えてです。この包みを彼はそこここに隠すのです。それらは毎回違う場所に移され、彼は長々と探しては全てをひっくり返してしまうのです。今度は、そここの包み毎に記録している最中です。私のタンスにも幾つか包みがあります。

ハンペル

1942年7月20日

欧州人の乳児は補充食として缶ミルクをもらえません。これは原住民の乳児だけに提供されるのです。時には、オランダでドイツ野郎のもとにいたいくらいです。なぜならばここでは気が狂いそうだからです。この点、オランダでも同じでしょうが、そこでは全てがオランダ的なのです。

ハンペル

1942年10月14日

昨夜あなたのことを夢に見ました。あなたが私のところへヤップの将校になって来たのです。その服装のあなたは奇妙な様子でした。私たちは映画を見に行きました。そして、私はあなたに言ったのです。「あなたがこのまま戻ったら、みんながV.H. 夫人も独りぼっちのようだ。夫がいな

いので、今度はヤップと一緒に外出だときつと言うわよ」と。そしたら、あなたはこれを最高におもしろがっていたわ。楽しくなり始めた時に、目が覚めてしまいました。

ハンペル

1942年11月7日

落ち着いた気分です。もし私たちが家を追い出されることになったら、私は同じような気分で見られるかしら？私はすでに自己の感性をのり越えているし、東インドの典型的な言い方で私も、「スダー、構うな、それがだめなら、だめでいい」と言えるのでしょ。この時勢には、何も持っていない者がむしろ一番幸運なのです。

ハンペル

1942年11月29日

12月1日で、私たちが結婚して5年になります。でも、ほとんど1年もあなたから何も便りがありません。だから、私たちは12月1日を祝えないでしょうね。実のところ、私が未亡人であるかどうかもわからないのです。いやだ、そんなこと。…中略… ここには神経症になった女性たちがうろついていることをご存知？ある女性は、自由の身でいるどの男性に対しても、「もしあなたが逮捕されたら、私の夫によろしくね。彼はどこそこにいる」と話しかけるのです。他のひとはナイフを持って歩き回り、オレンジ色の花を全部切り取り「Oranje boven, leve de koningin (オランイエ・ボーヴェン 女王万歳)とさげびます。ある女性は路上のタバコの吸殻を拾いながら歩きます。

ハンペル

1942年12月31日

一年の最後の日。明日から新しい年が始まります。一体新年は私たちに何をもたらすでしょうか？全般的には、今年は私たちにとって満足な年であったと言えましょう。私たちには他の家族に比べてあまり災難が訪れませんでした。

ハンペル

1942年3月1日

V. R. 夫人は気が狂い始めています。そのようなことを体験しなければならないのは非常に辛いです。彼女はヤップに殺されるという妄想を抱いて歩き回り、みんなにその気分を感染させているのです。

ハンペル

1942年7月29日

ある時突然全てに飽き飽きしてくることがあり、そんな時には一日中泣くこと以外には何もしたくないのです。でもね。人間は強くなければならぬし、自分に負わされたことに耐えなければならぬので、私たちは再び前進していくのです。しかし、全てが終了し、あなたが帰還したならば、私は自分の好きなだけ一日中泣いて叫ぶわよ。そして、喜びにむせて全部粉々にしてしまう？そのつもりであなたもご承知のこと。

ハンペル

1943年12月1日

つまり今日は私たちの結婚6周年。お互いに年をとりますね。7年目には再会できることを望むばかり。同じことを私は去年にも願いましたが。

ハンペル

1943年12月20日

非常に落ち込んでいますし、この状態がそのまま続くでしょう。なぜならば、そこからはい上がっても何の助けにもならないからです。また同じようにすぐにも落ち込んでしまうからです。

ハンペル

1943年12月27日

何と興奮するロンドンからのラジオニュースでしょう。我らの海軍大将³⁷⁸ が、私たちはあと一年この状況に耐えなければならぬと語ったのです。彼らはこのことと同じようにオランダでもラジオを取り上げているのです。私たちの知人のひとりも狂いかけています。私たちは到底一年もちません。あなたたちも私たちと同じようにつらいと思います。私たちがまだ生存中であるかどうかともわからないとは。

ハンペル

1944年4月8日

なぜ私はこの頃神経がこうも高ぶっているのでしょうか？私は誰をも嫌い、彼らが望むことと反対のことをしたくなるのです。

ハンペル

1944年4月18日

私はそんなにニッポンが好きではありません。しかし、彼らを計略にひっかきたいと思ったら、じっくり考えなければなりません。欧州人とはまだ話すことはできますが、この連中とはできません。でも彼らは少しヨーロッパ的である場合はできます。オランダの状況とこのそれとは異なります。オランダは一民族ですが、ここでは全く絶望的です。パダンガの人を嫌うジャワ人。このことがひとつあって、さらに人種間での裏切りや、私たちプラナカン [印欧人] がその間にはさまれています。西洋人の血が混じっている私たちを好まない東洋人。東洋人の血が混じっている私たちを憎む西洋人。私にはどうでもいいことです。私は西洋人であろうが東洋人であろうが好感の持てる人と接します。

ハンペル

1944年12月31日

要するに、明日1945年を迎えることになりましたが、私たちは解放されるのでしょうか？1944年ま

³⁷⁸ J.Th.フルストネル大将のこと。フルストネルは、在ロンドン政府の海軍省長官かつ海軍司令官（大将）であり、世界中に配属されていたオランダ軍の総指揮官でもあった。

る一年がもう過ぎ、1945年は私たちに何をもたらすのでしょうか？「来年、我らの男たち帰還する」と私たちはもう言いません。大半の人は、ただ静観するだけです。多くの人に絶望の様子が見受けられます。

バタビア

ポール

1942年9月20日

目下のような状況では神経が参ってしまう。私自身がもうさっぱり理解できない。多分、私だけではないのだろうが、それでも私だけがとてもバカだということもありえる。ヴォンとは一緒に何でもないことに大笑いできるけれど、ずっと気分を滅入らせている。一日中歌ったり口笛を吹いている。なぜか？同じように一日中泣くこともできるのだ。だから、さっぱり見当がつかないのよ。

今ちょうどノンおばさんが来て、誰かにかぎつけられたことをエーリックに注意するようにと私に頼んだ。私はすぐに塀を越えてスミットのところへ向かい、エーリックに今はまだ家に戻らないようにと警告しに走った。一体何という情勢なのかと自問してしまう。私は歌曲集に夢中で、次々に曲を歌っている。でも、私は陽気になれない。私だけではないとは思いうけれど。

「私の太平洋戦争」はありのままの記録となるはずで、誰もが読めるものでなければならないが、このページは私だけのもの。なぜならば、明日にでも私は自分を軽蔑して、「イルマ、何てあなたは間抜けな子」と思ってしまうことを確実に知っているからだ。深く考えると、私はそうなのだ。ヨープおじさんがある時ぴったりのことばを私に言った。「泣く者は大抵、自分自身に哀れみを感じているのだ」と。事実、私は私自身に哀れみを感じている。でもまだ泣いてはいないけれど。これは確かにこの時勢における偉業なのだ。

この私の感情をあからさまにすることが続けられるだろうけれど、それができないのだ。誰にも何も話さない。誰にもだ。少なくともこのつまらない日記には何かを。でも全く許されないけど、誰かがそれを読むという可能性があるけれど。あとで、私がこれを読み返したら、私の分別ある頭を振りながら把握し、「おや、まあ、何て私は気が狂っていたのか」と言うであろう。結局、年齢に関係しているのかもしれない。あとでここから去りたい。このいやな国から去るのだ。私が知っている全ての人々から去るのだ。でも、きっとそうできないだろう。このことは別問題だけど。

ポール

1943年3月30日

私が日記を書くのは、多分これが最後だ。この日記帳は地中に埋められる。家宅捜査がより一層ひどくなっている。仮に、彼らがこの日記で見つけたことで、私が犠牲になることをを思ってみて。…中略… それでね、日記君。私は君にさよならを言わなければならないのよ。時には君が私をなぐさめてくれたし、君のことを想う時はいつもすばらしくて愉快的気持ちになった。日記君、私は君にとっても親しみを抱くようになったので、これからは日記君に何も書くことがなく、面白おかしいものやまじめなものを君に貼りつけることが決してできないと思うだけで泣けてくるわ。君にまた会えることを願うのだ。ああ、日記君、なぜ私は君と別れなければならないのだろう。日記君、全部君に無駄に話したのかもしれないとは、思うつもりはないのよ。君を片付けるべきかどうか、まだ私は迷っているが、そしたら、おそらく君を完全に失ってしまう可能性もあるのだ。…中略… 日記君に別れを告げることなど私にはむずかしい。ああ、いつ君にまた会えるのだろうか。決してない。日記君、君に再会することは決してないと感じているの。でも、日記君、私は希望を抱いている。希望は命の糧。さようなら、日記君。

[1944年10月10日付のメモ]

まだ君に余白があるから、ちょっと走り書きを。一年半後の今、私は冷たく、湿った地中から君をすくい上げ、私自身の絶望的な別れの金切り声を読み取った。再び何が起こったかということは、君の後釜の家族に書いてある！忠実なる君よ。君に再会できてものすごくうれしいわ。

ポール

1944年2月21日

さて、最愛なる日記君。私が16歳の生涯でこれまで経験した最大の悲劇を書くわね。これから先の人生において現時点を思い出してみると、きっとこれは今までに体験した最も小さい悲しみだと日記君は言うだろうことは承知している。でも、日記君、ひどい苦痛、それも多分私の人生で初めてこのいやな別れで経験した心痛であるということを知っているの。これに関して詳しく書くつもりはない。あの紙切れ³⁷⁹と同じように、私はあとになって書こうと思う。何かを書き留めるために、多分幸せな心持で、また、多分悲しみに満ちた心持でもって。だから、ここから書きたいことは、日記君よ、私は時間と神様に任せるのだ。

[貼付：おそらく当時強制収容されてしまったニッポンワーカーの「赤丸」が付いた腕章]

³⁷⁹ これが何を意味するのかは確かでない。

再び、日記的なことになってしまったけれど、日記君、私はこのようなおべっかいなことには君に関係させないと約束したのを知っているわ。

ポール

1944年7月24日

町。東洋の我らが女王、我らの輝かしいバタビヤは、今度は正式に当然ジャカルタと呼ばれる。東洋的な町になってしまった。乱雑で、汚く、埃っぽく、飢えでやせこけ、衣類などが不足して半分裸の原住民や臭い乞食でいっぱいだ。道路は穴ぼこやでこぼこがっぱいでじつに酷い。一組（外側と内側）のタイヤが180ギルダーするのにだ。要するに、揺れてはぶつかり、打たれることには慣れるし、特に、でこぼこのでき具合をうまく操作すれば。確かに路上をジグザグ走行するのだけれども、これはそいやかなことではない。みんながしているし、交通規則はもうないのだ。

街灯の支柱はもうとっくにない。だから、夜間にランプなしで走るのは本当に危険だ。逮捕されることがでなく、穴ぼこがだ！思っても見ない時に、突然落ち込むと変な気持ちをする。要するに、人間は全てに慣れるもので、ジャカルタのどんな道路でさえも。道路の名前が変った。例えば、ユリアナラーンは「ジャラン・カパス」に！パサールは近頃路上の至るところにある。そうよ、私たちは大東亜に暮らしているのだ。自動車は時々ヤップを乗せて飛ぶように通り過ぎる。その他、交通はプラナカンが乗った自転車、少女を抱いたドイツ野郎や時々医師が乗ったペチャ〔輪タク〕からなる。こんなドイツ野郎はもうそんなに見かけないのよ。かわいそうな奴らに少しは最後の快樂をさせてやろう！³⁸⁰

ポール

1945年1月1日

おめでとう。新年明けましておめでとう！今年こそ、幸福と喜び多かれと願う！³⁸¹ 神様が1945年の健康、人生の喜びと力をお与えくださることを祈りつつ。自分が他の何百万の人々と比べてももっとも恵まれているかを考えてみよ。いかなる苦悩に悩まされ、いかなる過酷な悲惨さや冷たさかを考えてみよ。どのくらい人生を失なわないでいられるか。こんなにたくさんすてきな年月を失うことは悲惨だ。このすばらしい年齢を楽しむこともできずに今年18歳になるのはみじめである。でも、何を望むのか。たくさん少女たちがしていると同じように、敵の人間と一緒にデートしたいのか。できれば、もう少し待ったほうがいい。ああ、あなたにもすてきな時間

³⁸⁰ 脚注 230参照。

³⁸¹ イルマ・ポールは自分自身のためにこの年賀を書き記した。

が今年こそ訪れることを願うわ。おお、神様、どうか私の願いをかなえてください。自信とこの年齢と姿にふさわしい暮らし方が得られることを！むずかしいかもしれないが、陽気に楽しくものを見るようにせよ！あとできっと、すばらしい将来に向かって進むことができるから。そうよ、とても行ってみたい国々を見て回れるだろう。旅行、旅行。ああ、神様、旅をし、たくさん、たくさん、美を満喫するチャンスをお与えください。ああ、神様、私は美しい音楽やダンスなど美しいものが大好きです。ああ、神様、私にたくさん、たくさんダンスを見させてください。神様、私たちをお助けください。私たちにご加護とお力をお与えください。1945年には幸せになりますことを。

ポール

1945年1月4日

新年おめでとう。幸多かれ。我らの男たちがやっとのことで家に帰ってくることをね？」「そうね、本当に。あなたにも幸福とあなたの望みがかなうことを願っているわ。そうよね。今年も男なしで迎えるとは誰が思ったでしょうね」「でも、今年はまだ1945年なのよ」「私たちは同じことを1944年も言っていたわ」

このように、新年のあいさつは1942年、1943年、1944年にわたっていつも繰り返されてきた。ああ、神様、1945年にはまた同じ状態にならないようにお願いします。今年こそ戦争の最後の年でありますように。私たちの神経と体力はもう尽きた。本当に、もうこれ以上我慢できない。私たちは今年ケンペイタイと収容所、飢えと病気から逃れられるであろうか？ああ、神様、今年もがんばれるように、私たちに力と勇気をお与えください。

ここバタビアのある淑女が、大晦日に割れんばかりの仮面舞踏会を開いた。同じ日の晩に、女性たちがほんの少しの衣類だけを持って、どしゃぶりの雨の中をトラックで輸送された。同じ日の晩に、何千人かの死者が発見され、我らの男たちは強制収容所で陰気な、暗い想いを抱いていた。また、同じ日の晩に、その「淑女」が仮面舞踏会を開いたのである。「ああ、かわいそうなお主人ね。もう一杯パンチをいかが？ さあ、楽しいレコードをかけなさいよ！」楽しみはいろいろ！

メリー・クリスマス

アンド・ア

ハッピー・ニュー・イヤー！

スマラン

ヒューセン

1942年9月8日

もう6ヶ月。あとどれくらいか？でも私たちは勇気を失わない。

ヒューセン

1942年12月31日

夜早く寢床に就く。なぜならば、寢ずに起きていると思い出がよみがえるし、私たちはおセンチになりたくないから！

ヒューセン

1943年1月11日

ボップ・ウィーボルス - ファン・デル・ワルはこの頃ひどくみじめな様子をしており、ほとんど手のつけようがない。ずっと家において、ヤップに追い出されるのを待つことはつらいし、そのうちに彼女をすっかり参らせてしまう。

ヒューセン

1943年3月14日

兄ベルトの誕生日。オランダの様子は一体どうなのか！彼らはどこにいるのだろうか、また、どんな状況にあるのかしら？³⁸²

³⁸² 1898年3月14日スホーンホーフェン生れのガイスペルトゥス・アードリアヌス・ヤコーブス・ヒューセンは、ハーグで株式仲買人をしていた。彼は、ルド・ファン・ハーメルの抵抗運動グループの一員であるとしてアムステルダムで1942年7月25日に逮捕された。彼はスヘーフェニンゲン刑務所に拘置され、1944年3月22日にアルザス地方のナッツヴァイラー強制収容所で死亡した。教師ヒューセンは、1945年11月13日になって初めてハーグの母親から送られてきた赤十字製のハガキで兄ベルトの死を知った。(F.Visser, *De zaak Anthonius van der Waals*, (Den Haag 1974), 229; *In memoriam. 307 verzetslieden van den O.D.* ('s-Gravenhage 1950), 53; NIOD, Collectie aanvragformulier Erelijst; NIOD. 蘭印日記コレクション J.J.Huussenの日記)

ヒューセン

1943年5月5日

もうマリオンのところに来て10週間になる。あとどのくらいか？マリオンにとって時たま長すぎるし、困難すぎる！その上、私は彼女のために何もしてあげられない。私が彼女の息子たちに行っていることは、彼女も快く思ってくれているが、彼女が負っている多大な負担と夫ハンスに対する激しい渴望を和らげることには全然ならないのだ。

ヒューセン

1943年6月6日

ヴォーターはひどく恐怖に耐えている様子だ。彼は明日第4管区に出頭しなければならないのだけど、何のためにかわからない。マリオンは少し落ち込んでいる。彼女は平常心を保っているが、私には彼女が気をもんでいることがわかる。マリオンが夫ハンスの生きてる証を得ることができさえしたらばいいのだが！こうして待つことは、マリオンにとって耐えられない！

ヒューセン

1943年6月24日

特別なことはなし。ただ、午後の四時頃から、私は緊張気味。夕方からは、何かが起こるのではないかと、それがもっとひどくなった。でも、町中の明かりが何回かついたり消えたりしただけで何も起こらなかった。

ヒューセン

1943年6月30日

午後にひとりの印人の婦人がマリオンを訪れ、苦境を訴えた。スマラン東にいる大勢の人が途方に暮れている。困難になる！至るところで、悲惨さ、貧困、ひどい苦しみがはびこっている。

ヒューセン

1943年9月23日

昨夜は奇妙な夢を見た。私が誰かに包帯をしているのだ。頭部の傷で、絆創膏が不足していたため、ヒモかテープが必要だった。私はしゃがんで木綿糸を拾い上げようとしたのだが、それはどこかに引っかかっていた。重たい物を注意深く私の前に寄せたら、椅子かベッドの下から1羽の白い鳩が現われ、糸が血に染まっていて、かわいそうな生き物は窒息しそうになるほど全身を血に染まったが木綿糸の中にもつれていた。ためらうこともなく、私はハサミをつかんで、一度に糸の太い部分を切り落とした。私の胸元に組んだ腕の中でこの生き物は深いため息をつくとき、血のついた糸の締め付けがなくなり、すぐにもすっかり安心した鳩は飛び去った。その時、私は「全て快方に！」との気持ちでほっとして目が覚めたのだ。

ヒューセン

1944年1月6日

お茶の時間に、マリオンはキースベリー家とマリー・スホーンホヴェンのところへ向かった。彼女は遅くなって戻り、私は退屈してみじめな気分であららしていたのに、彼女はかなり陽気に帰宅した。彼女は手ぶらで戻らなかった。再び3箱のタバコを持って来たし、読書用に「*Warwick Deeping*」もだ。とても遅く寝床に就いた。つまり、子供たちが寝入ったあと、私たちはずっと玄関の間に座っていた。マリオンは、私の神経の緊張を解くコツを知っているのだ。

ヒューセン

1944年1月28日

ジャーネ・モーフがお茶に訪れる。このことはいつもとても楽しい。彼女は陽気であり、その要領で私たちをもいい気分させてくれる。少し遅くなると、彼女はクボン[庭師]がもう彼女の自転車を上にあげてくれないことを心配して出て行くのだ。

ヒューセン

1944年2月8日

11時半頃にジャーネ・モーフが立ち寄った。彼女はマリオンが彼女のところで作らせた燻製のベ

ーコンを持ってきたのだ。なぜなら彼女は一日に一度は表へ出ないと我慢ならないのだ。彼女のご主人は家にいるし、自分の自由な時間を持っているのである！

ヒューセン

1944年2月15日

ハンス君は髪をカットさせ、ルート・ビルケンハウエルに何冊か本を届けるために下へ向かった。彼はルートからの手紙を持ち帰り、その中に私の愛犬ハッピーが4時に死んだと記されてあった。ハッピーは午前中まだ元気で快活であったが、午後に突然おかしくなり、もう飲み込むことができず、足が硬直してしまった。ルートがそばに留まり、4時には逝ってしまった。ハッピーはコボン墓地に埋められて、そこに名前入りの石が置かれるらしい。ひどく嫌な想いだ。つまりこうして段々とみんな姿を消していくのだ。私はハッピーに一年も会っていなかったが、依然として愛犬を再び家に連れ戻し、そして、できれば仔犬が生まれればいいのだがとの幻想を抱いていた!! いつもいつも動物に愛着を感じてしまう私も愚かなのだが、ハッピーは忠実でなついていたし、私はハッピーを度々懐かしく思った。³⁸³

ヒューセン

1944年3月6日

午前中にマリー・スホーンホーフエンが訪れた。彼女はとても不安にしており、特に盗みのあと³⁸⁴ と何度も変わる彼女の使用人のことでだ。

ヒューセン

1944年3月7日

この待つことは私たちにとって長く続き、そのため絶え間なく緊張するのだ。一応平常心を保っているが、もう本当に難しくなった！

³⁸³ 教師ヒューセンは、目立つチャウチャウ犬の存在により彼女が見識されることを恐れて隠れ家へ愛犬ハッピーを連れて行く勇気がなかった。(NIOD 蘭印日記コレクション、J.J.Huussenの日記)

³⁸⁴ 「食糧・物資事情及び就労状況」ヒューセンの日記 1944年1月2日参照。

ヒューセン

1944年3月15日

今、仕事さえ見つければいいのだが。なぜならば、四六時中マリオンと彼女の子供たちのことを考えないでいられるから。³⁸⁵ なぜ彼女はこれを免れることができなかったのか？彼女が元気にしていることを知ればいいのだが！でも、彼女はたくましいタイプだ。体力が続きさえすれば、彼女は乗り切れるのだ。彼らは彼女を精神的に打ち砕くことはできない。この点について私はすっかり安心しているのだ。今になって彼女だけが私の「真の」友人であることがわかったし、あとで彼女を実際に手助けできることを願うのだ。それもできるだけ早い時期に。

ヒューセン

1944年3月18日

今朝縫い物を少しし、そのあとコナン・ドイル作の「*The Maracot Deep*」を読み終えた。これは、進行する無気力感に屈するためにルートのところではじめたHBS用の本だ。どのようになっても、私たちは勇気を抱き続けなければならない！彼らは私たちを決して打ちのめしてはならない。このことをマリオンの場合においても望むし、かかる点は確信しているのだが！

ヒューセン

1944年3月24日

いつもと同じ一日。何も起こらないのだから！また、編み物と読書し、目を開いたまま夢を見た。

ヒューセン

1944年3月25日

町の中、特にボジョンはまったく空っぽで、ファン・ブラムセンによると無気味であったのだ。もし私が勘違いしていなければ、再び満月である。星がたくさん出ていて、かなり明るいのが、何かを予期するには暗すぎる。もし私が懸命に編み物しなかったら、もっと気落ちしてしまうだろう。マリオンとほかの人の宿命に私はとても悩まされるが、私は丈夫であり続けたいし、気力を落とすたくはないのだ。同じことをマリオンにも願うとともに期待している。

³⁸⁵ マリオン・ウルフと彼女の子供たちは当時すでに強制収容されていた。

ヒューセン

1944年3月29日

マリオンが収容所に入れられて既に2週間。彼女はもちろんなんとか切り抜けるだろうが、一体どんな気持ちでいるのだろうか？また、その状況はどうであるのだろうか？彼女はまだ自分でやっけて行かれるのだろうか？私は毎夜急いで荷造りしたり、たくさんの物を後に残し、タンカップ[逮捕]の夢を見る。日中、私は歯向かうことができ、仕事をたくさんする。ほどいた短パンの糸で私の最初の長いソックスを1足作っているが、あまりすてきでない！その途中に、バリについての本を楽しみ、全てに再び共鳴したのだ。

ヒューセン

1944年4月1日

変化に富んだ忙しい朝だった。また、午前中に髪を洗い、マリオンの教訓を忘れないで、爪を同じ長さにするため念入りに手入れした！実は、ペテロンガンでキューテックスのマニキュアを見つけたので、持ち帰ったのだ。人間は年を取れば取るほど、ばかなことをするもの！私はとても快活になり、早急な変化を望むのみ！

ヒューセン

1944年4月7日

毎日ヘーレン通りを行く一、二台、時には三台もの霊柩車を見る。車などとは言えないもので、木製の車輪が付いた犬が引く大きいリヤカーのようなもので、黒く塗られていて、その前と後ろに黒い服を着た3人の男たちがいるが、後を続ける人は誰もいない。中央市民医療施設（CBZ）を消息なしに去った収容所からの人かも知れないと、私は心臓が止まる思いがする！ああ、一体いつ終わりが来るのだろうか？私たちはみんな勇気を失いたくないのだが、ひど過ぎてこれ以上は耐え切れない。

ヒューセン

1944年4月30日

母とユリアナ王女の誕生日。それなのに何も起こらない！ああ、神様、あとどれくらい？戦争で悲惨にも亡くなった人々、収容所の人々に哀れみを感じる。もう終りになってほしい！このこと

を思うと、私の胸は締め付けられるのだ。でも、私は勇気を失わない。終わりは来るはずだし、私はまだ願っている。近日中に！ 私が行う勇気のない唯一のことは将来の計画を立てることである。マリオンが出所したら彼女を手助けすることだけを考えるようにしており、その他、将来のことは何も考えつかない。私が相変わらず美しくて立派すぎ、ここ最近の失望で私はしり込みしていると彼女は見ると思う！

ヒューセン

1944年8月19日

イエチェ・メイヤースが事務所から早めに帰宅した。彼女は気分が悪く、とても気落ちしてもしいる。夕方にそれが爆発し、彼女は泣きじゃくって言った。彼女は暖かいもてなしを求め、孤独であり、そんなことを知られた時に笑いものになるのを恐れている。私は何とか彼女を慰めた。父親、継母、弟や妹たちはアンボンにおり、彼女は戦争が勃発した時には、休暇で母親の住むグンディを訪れていたのだ。戦争中に、彼女の母親は亡くなり、ジャワ人の継父と何人かの義兄弟や妹とともにあとに残された。継父が彼女と結婚したがったので、そこからスマランへ去った。彼女はいろいろと身をもって体験したのだが、気丈にしている。ただ、時々騒々し過ぎるが、私の考えではこのことに対する反応と彼女の本当の気持ちを隠すためである。

ヒューセン

1944年9月18日

本日、マリー・コレッリ作の「*De ware christen*」を読み終えた。現時点で私の心を深く動かす最もまじめな読み物と同じように、この本に私はとても感動した。ああ、私自身どんなにかもつと良い、すばらしい人生を送りたいことか。私自身をどんなにか人間性に対して捧げたいことか。でも、私はちっぽけで、つまらな過ぎるので、何か言う勇気がでた時に、笑いものにされるだけだろう。私はまるで能弁でないこと、私がたくさん話す時は内心に潜む確信を隠すためであることは十分わかっている。

ヒューセン

1945年4月1日

復活祭の第一日目！ああ、神様、あとどれくらい？と考えるのみ。あと何人死亡することになるのか？あと何人が絶望的にあとに残されるのか？あと何人が欠乏と悲慘さのためだんだんと死

に至るのか？私たちの罪をまだ償っていないのだろうか？どんなにか私はこの復活祭の快晴の朝に山頂に立ち、ちっぽけな人間の行いのはるか彼方、神と御心に支えられ、この世の中の卑しさを忘れて。

ヒューセン

1945年8月12日

ベエー・クンツは一日中出かけており、タペ[発酵もち米]のケーキを送り届けた。彼女は姪ニニのところで食事し、午後に帰宅する。私がそこに6時頃（ニッポン時間）歩きつくと、彼女たちは陽気ではしゃいだ気分できて、私をその中へ引き入れた。私たちは騒ぐのである。夕刻もまだまだ私たちは静まることを知らない。

人間関係

バタビア

ハンベル

1942年7月6日

J. K. は昨日ヤッペン腕章³⁸⁶をしてここに来ました。彼はかんかんに怒っています。ブランダ[オランダ人]女性の近くに寄るとどこでも、彼は「国家への反逆者」と耳にするのです。

ハンベル

1942年7月12日

どこかである女性が卒倒したそうです。彼女は中に運ばれました。戦況がとても悪く、それに彼女はひどくこたえたのだと話しました。家主の婦人は親切にも彼女が海外から傍受したことをその女性に話しました。その女性は去り、しばらくして家主の婦人は牢屋へ入れられてしまいました。スパイだったのです。このことをW. 家の隣家の女性が何人かのご婦人たちに話しました。そのうちの一人が偽りの情報を広めるその隣家の女性を通報しました。この女性も牢屋にいます。愉快になりましょう。

ハンベル

1942年7月13日

誰も信用できません。その人からは、まったく予想もつかないことをする幾多の人々を見聞きするし、母親が子供のためにお金をどのようにして手に入れる用意があるのか全然わかりません。要するに、完全に口を閉ざすのです。

³⁸⁶ 彼は依然就労中であり強制収容がなされないための目印。脚注 36参照。

ハンペル

1942年7月15日

何とAはほらすきなのでしょうか！彼は、いまましい純血人を東インドから追い出すべきだと主張しています。彼らのせいでヤッペンがここに駐留すると。彼はあれこれしようとしています。でも、犬のトリキシ―とカザンが彼の近くに寄ろうものなら、彼は真っ青になって一歩も進めないのです。「犬をどけろ！」と叫ぶだけです。私は純血人がこのようなトラシ人間³⁸⁷を憎むのをある程度理解できます。

ハンペル

1942年7月29日

何と嫌な女。ケンペイタイのところへ行き、自由の身にある男性の居場所を告げる女性たちがいます。なぜ彼女たちの夫が牢屋に捕らわれ、他の夫たちはそうでないのでしょうか？

ハンペル

1942年9月9日

ママは現在援助組織で働いています。そこに来る人々の種類を一度見てみると良いかもしれません。とても貧しいお年寄りがいる一方、見るに耐えない様子の人々も来ます。ママは特定量の油とお米を扱っています。本当の貧乏人には多目に、そして、いかがわしい人には少なめ目にですが、結局かすめられてしまうのです。プイ、何て嫌な人たちでしょう。

私は顧客を得るためにD家の知人のところへも販売リストを巡回してもらえないかと彼女たちに尋ねました。配達する必要は彼女たちにはありませんでした。そのことはだめ。彼女たちはもちろんもっと安く供給することができるなどなど。また、いくらマージンをそれで取るか。プイ、何と強欲な人。彼女たちは相変わらずドレスを買ったり、髪をカールさせることができるのに、他人を援助することとなると。。。R.は違います。でも彼女は顧客にリストを見せることをいつも忘れてしまいます。彼女たちの顧客のうち何人が私から得たのでしょうか？あきれたことには、私はただ彼女たちのために配っているのです。K.夫人も、たくさんの顧客を得るために彼女たちに協力しました。ああ、もう不平を言うことはやめましょう。

³⁸⁷ このトラシ人間ということばは、原住民と同一視し、トラシ（強力な匂いを持つ魚またはエビのエキス）を使った「インドネシア風に調理された食べ物を食べる」人を示す軽蔑した表現。

ハンペル

1942年9月16日

ああ、それでも女性なのですから。一体ニッポンが私たちのことをどう思うかしら？昨日は捕虜となっている夫たち向けの小包発送の日で、非常に強引なご婦人たちがいました。他の数人の女性はそれに激怒して、泥を拾い上げその人たちに塗り始めました。本当に乱闘騒ぎになりました。もちろん全ての小包はストップされました。原住民さえも捕らえられ、その女性たちにより溝の中へ投げられました。

ハンペル

1942年10月5日

K. 夫人は結局、早急に収容所へ入らなければならないのです。…中略… でも彼女は私と同じようにプラナカン[印欧人]ですが、純血オランダ人としてやり通すつもりです。彼女の13歳の娘に私が収容所へ行くかと尋ねられました。私が「いいえ」と言ったら、彼女は何て答えたと思います。「じゃ、ママも印人なのだ」。K. 夫人は、「いいえ、それはまた違うのよ」と娘に言いました。そうよ、ただひとつの違いは、私をもっと教養のある印人家族出身ということです。でも、彼女が「トトック[純血]」でいたいのなら、勝手にさせておきましょう。

ハンペル

1943年1月11日

A. 夫人の意地悪なさま。全てのことにに関して、彼女は意見するのです。私はピンを親しい知人だけに赤・白・青の小さな木靴やバケツの形にして売っています。彼女はバケツのものを注文しました。誰もがそのまま受け取ります。でも、この意地悪な人は、「なぜこう吊るすの、こうしなければいけないんじゃないの？本当は、木靴が欲しかった！」と。それで、私は違う人にそれを売ってしまった。今度彼女はR. のところで黒ん坊の人形を注文しました。彼女がどんな意見をするか興味あります。私たちはもう練習しています。口元がだめ、もちろん鼻も目もだめだ。イヤリングについてもきつと何か文句をつけるでしょう。彼女の夫は航海に出ると幸せな気分をいただくのです。なぜならば、彼も彼女にはうんざりしているでしょうから。

ハンペル

1943年3月1日

私たちのある知人がひとりの中国人と話して、彼女たちが私と会いました。私たちはしばらく一緒に話しました。その中国人は私が誰か知っていたようです。知人は翌日私には気をつけるようにと彼から言われたそうです。なぜならば、私はスパイで、町でも悪名高いからです。至る所で私の姿を見られ、³⁸⁸ バタビア全域がそれを知っていました。そういう訳で、私はJ.R. と握手できるのです。彼女もスパイだと呼ばれ、私はそこによく行くからです。

ハンペル

1943年3月17日

相変わらず、E. 一家からの注文を受け入れている私は実際のところ愚かです。私はハートの上に看護婦の頭部とその横に兵士の頭部を貼ったピンを売っています。水兵付きの看護婦、KPM社員、または飛行士の付いているものも注文できます。そして、ある看護婦がハートものを二つ注文し、ひとつは下士官付きの看護婦で、もうひとつはKPM社員付きの看護婦があるものをです。それが仕上がった時には、彼女はケンペイタイのところに監禁されてしまいました。また、彼女がそこから出られるかどうか、またいつ出られるか全然わかりませんので、私は立て替えていたこともあって、他の人にそれを売ってしまいました。彼女が出所した時に、私は彼女のために再度注文しました。痛い目にあいました。彼女の姉はそれを欲しがらず、彼女自身も醜いと思ったのです。彼女たちのところで、注文が無事に達成されたことは一度もありません。全てのことに彼女たちは何か意見するのです。勝手にしなさい。今度彼女たちは夫の写真を撮らせようとしています。私は彼女たちに無理だと冷たく言いました。

ハンペル

1943年5月11日

Z.³⁸⁹ は彼の友人と一緒に釈放されました。彼らは5ヶ月間も警察本署に監禁されていました。ふたりには海外放送を傍受した疑いがかかけられました。やつらは逃亡した兵士として逮捕したいと思っていました。彼らは個別に尋問され、ひとりが他方を裏切ったことや彼らの兵士の姿をした写真も見つかりました。しかし、彼らがそれを見せてくれるよう願ったのにそれはされませんでした。やつらはお芝居をし、彼らの上司に電話して尋ねることもできると言いました。そして、

³⁸⁸ 販売をしていたため。

³⁸⁹ この頭文字は彼の本名のものではない。

やつらはそれを行いました。幸いにも、その人は彼らが兵士でなかったと答えました。彼らは1日あたり1.50ギルダでスパイになりました。でも、彼らはそれを欲しませんでした。はっきり言って、私は彼らがそれに適格だと思いますが。これまでに150ギルダの登録料を支払わなければ誰一人として釈放されませんでした。でも、このふたりはどのようにして釈放されたのでしょうか？彼らが生粋のごろつきだということは町中に知れ渡っています。時が来ればわかるでしょう。静観するのみ。

ハンペル

1943年5月30日

パパがかぎ十字をつけて歩き回っていると誰かが誰かに言ったそうです。そんな訳でパパはかんに怒り、私がその人を探さなければなりません。それはD.L. とかいう女でアイクマン公園に住んでいます。何番地かは知りませんが。彼女に連絡がつけたいのですが。彼女は初めそれを見たと言いましたが、今では「彼女はそれを聞いた」と。今度パパは彼女が誰からそれを聞いたのか私に探させます。もういいかげんにして下さいな。探偵ごっこをするには徹夜で働かなければならないし、そんなことはしたくありません。

ハンペル

1943年8月24日

ばかな女性もいるものです。お金さえあれば、髪をカールさせに行くのです。「夫が帰ったらば私は美しくなっている！」と彼女たちは言います。そこで私は、「あるがままのあなたを示して下さい。なぜならば彼は帰宅したことで十分満足しているから。愛情が薄れていたならきれいにしたら！」と言いました。

ハンペル

1944年7月2日

E. は、彼に衣食を提供するために血眼になって働いている既婚の女性と暮らして。彼女の夫は戦争捕虜です。E. は彼女のところに住み込みました。彼女にはかわいいふたりの子供がいます。さらに彼には懸命に養ってあげている婚約者がいます。この双方の女性はお互いにそれを知りました。殴ったり髪を引っばたりして大喧嘩がありました。彼は公然と既婚の女性を選びました。彼女が一番たくさんお金を持っているのですから当然です。彼はあとで彼女と結婚したいと思っ

ていますが、彼女はそれを望みません。教育程度と年齢では彼は彼女をはるかに劣っていますし、彼女は今男が必要としているだけなのです。そして私はその真っ直中であって、文句を全部聞かされます。男性として女性から迷惑をかけられるのはご免だとT. は不満を言います。時として悲惨であり、まったくばかばかしいことも。

ハンペル

1944年8月2日

その間に、M. T. のところで大変なことが起こりました。彼女には明日引越すM. J. という同居女性がいました。もう少しで喧嘩が始まるころでした。ふたりとも自業自得というところだし、お互いの立場から見たら両者とも正しいといえましょう。でもふたりともうまくいきません。彼らが一年間も持ちこたえたのはまずまずです。私はまったく意地悪ですが、彼らのことをふんだんに楽しんでます。彼らの非難とすることはまったく事実です。彼らは今後それぞれ別に生活するつもりだし、私たちはM. J. は新しい下宿屋でどうなるか静観するのみです。

ハンペル

1944年10月9日

M. 氏のことを理解できますか？最初に彼が連合軍の放送で聴いたことを誰にも伝えるな、特におしゃべりな女T. にはと言いました。それでもM. は、彼が海外から聴いたことを毎日彼女に話しています。彼はL. 氏がいつも他の人にすぐに全てを話し、また誰からそれを聞いたのも話すことを知っているの、そのため、L. にはもう何も聞かされません。でも、昨日彼はまたL. に全てを話しているのを聞きました。彼らは地図さえ用意していました。L. はインポテンツなのか、変なのか知れませんが、このような男性はおしゃべりなふたりの女性よりもっと嫌らしいです。もしかしたら、彼はスパイかも。

ハンペル

1944年10月29日

通りを走っていたらある男に無理やり停止させられました。私は彼が道を知りたいのだと思いました。彼は私がスダ通りのパピリオンに住んでいたことがあるか、名前は何か、私の夫は大きい人かと尋ねました。その時、彼が誰かに告げる情報を持っているのだと思いました。本当に注意しなければいけませんね。彼は私が「Q.」夫人ではないかと尋ねました。私は自分の名前を告

げずに去りました。150ギルダの登録料を払ったら、夫が釈放されると女性たちに言い回っている一団がいます。大半の女性がそれに引っかかります。

バタビア

ポール

1944年6月26日

[ジュハールラン14番地のC. ポール - ファン・リンブルフ・スティルム夫人宛のバタビア・プロテスタント長老会からの封筒]

‘04[1944]年2月9日

子供の保護家庭に関して

拝啓 ポール様

当方は、1歳の男の子のために無料の保護家庭を探しております。父親は昨年12月以来拘束されています。母親はその子をこれから養う気持ちがありません。父親の国籍はスカンジナビア、母親はプラナカンです。

以上の事情ではありますが、ご自身でなくともあなた様の知人とご相談され、このことが実現できれば幸いに存じます。

これをもって何ほどご高配をいただけることを願う次第であります。

敬具

ドクター・ハルストより

[この手紙の裏にイルマ・ポールが記したこと]

この男の子は、幸いにも自己の「役目」に非常に執着したヒュフ夫人の行き届いた愛情深い手にゆだねられた。茶色の髪の毛をして、黒い瞳の頑丈で太ったかわいい子だ。

ポール

1945年1月30日

フォンシエ

もう君も知っているように、私の兄エーリックはマトラマン病院³⁹⁰ で働いている。ある日彼は次のような悲しい話を持って帰宅した。病気ではなく、全身が異常に飢餓状態だったために入院している男の子がいた。その間に病院は超満員となり、病気でないフォンシエは、まだものすごくやせこけているのに結局出されてしまうのだ。「ママ」とエーリックが言った。「少しの間でも彼をここに置いて、太らせてあげてくれない」。ママは、「だめ、うちではできないわ」と答えた。しかし、エーリックが彼を発音もできないようなあるカンポンにある(フォンシエ)の家に送り届ける途中にうちに寄った。年寄りの顔つきとからだに発疹した男の子が顔をしわくぢゃにして泣いている姿を見て私たちは全員ただ涙するだけだった。私たちが彼を初めて目にした時、フォンシエは私たちのところに留まるべきだとの決心がついていたのだ。そう言うわけで、フォンシエ・ブラウンはエーリックの自転車の後ろに乗って寒さでからだを振るわせながら12月30日に私たちのところへやって来た。彼はみるみる回復していった。太ってきただけでなく、陽気で幸福になり、楽しそうに生き生きとして家中をかけ回っている。日ごとに一層いたずらで元気になっていく。彼の声帯には穴が開いているのであまりはっきりしないマレー語を話す。彼はオランダ語を聞いて理解することはできる。本当に良い子だった！彼の父親はプラナカンで母親は原住民だ。この両親から15人も子供が生まれ、そのうち3人がもう亡くなった。でも(悪漢の両親) とも赤ちゃんが生まれる予定なのだ。あーあ、きっと、どうにもならないのよ、カトリックだから。生めよ増やせよ！

フォンシエが家に戻らなければならなくなった時には父親が迎えにきた。彼が父親を見たら、顔をこわばらせ、泣き出してしまった。ああ、何とかかわいそうな！この無礼な父親は子供にシャツがあるかとだけ尋ねて、フォンシエのことや世話になったお礼のことばは一言もなかった。彼(フォンシエ)は、15キロにもなって丸いほほ、丈夫な手足をしてとても立派な様子をしていた。つまり、彼は生涯で幸せな1ヶ月を体験することができたのだ。

ポール

1945年3月16日

ドイツ野郎とプラナカン少女の振るまいについて

知っていると思うけれど、町にはとても親切なドイツ野郎³⁹¹ でいっぱいだ。彼らには元の「遊女キャンプ」³⁹² があてがわれている。良い住まいだが、場所が足りないの、さらにキャン

³⁹⁰ おそらく日記の作者は、マトラマン通りの小児科医院を指しているものとおもわれる。

³⁹¹ 脚注 ? 参照。

プの外、つまりテロック・ベトン通りの何軒かの家々も与えられる。また、彼らには酒場、ごめんダンス場や病院や何人かのプラナカン少女があてがわれる。ドイツ野郎に抱きしめられている少女がベチャ[輪タク]に親密そうに腰掛けているすばらしい場面をよく目にする。町の中を恥じる様子もなく気持ち良さそうに走りぬけるのだ。私は少女のことを言ってるのよ。ドイツ野郎にたいしては気晴らしを一時求めているのだろうから悪くは思えないし、彼が心の底では嫌悪していることだろうヒンドゥー教徒とのハーブと一緒にいてもだ。純粹のアリア人の血を持った彼氏！こんな人間がベチャでのドライブのあと行うことはここでは詳しく書くべきことでない。

ヴォンと私が土手から近道であったテロック・ベトン通りを行った時に、ヴォンが大声で「ヒャー、あなたも後ろを見てごらん。すごいわよ」と叫びました。振り向くと、通り過ぎようとしていたドイツ野郎が立ちどまり、私が彼を求めているかのように考えていた。ヴォンがショックを感じている酒場へ私を連れて行く気なのか。要するにそのような男に払わさせて、楽しく遊びに出るのは特別にこつがあるわけでもないのだ。きっかけを作るってあげて。。パイ、不潔。収容所に夫や婚約者がいるというのに敵の腕に巻かれダンスするという少女や女性。軽率だわね。

スマラン

ヒューセン

1942年8月23日

クララ・ハオウィnkはまだここに住んでいる。彼女の「愛人」が四六時中訪れては、子犬のように彼女のあとに付きまどっている。私はふたりにいらいらするのだが、私は前側のふたりのところに、彼女たちも私のところに一度も居合わせないのだから、私たちは良き友達としていられる。引越や家をたたむことが私にとって最善となれば、彼女たちは明け渡さねばならない。彼女からの月15ギルダーは私にとって何の得にもならないし、彼女がいなくても十分やっていかれる。多分むしろ良いかもしれない。なぜならば、彼女と彼によって私は余計に経費がかかるから。居心地が良いことは絶対にないのだから、そうしても無駄なのだ！

³⁹² おそらく日記の作者は、バタビアの南部のテロックベトン通りにあった軍専用の慰安所「テレジア倶楽部」または「将校倶楽部」を指しているとおもわれる。この慰安所に向けて強制収容所内外から少女や女性が集められた。この倶楽部がいつ廃止されたか、または移転されたかは不明である。(Tweede Kamer der Staten-Generaal, *Gedwongen prostitutie van Nederlandse vrouwen in voormalig Nederlands-Indië*, vergaderjaar 1993-1994, 23.607, nr.1. 8. Brigitte Ars, *Troostmeisjes. Verkrachting in naam van de keizer*, (Amsterdam/Antwerpen 2000), 134-135)

ヒューセン

1942年9月14日

テガロンボでの土曜日午後の授業のあと、すぐにポップのところへ行った。彼女は私が来たことを喜んでくれ、アンスもだ。変だけど、私がVACで彼女と知り合った時から彼女に関心を持つようになったのだ。それがいつまでも続くであろう友情にまで発展した。彼女たちは私がそこへ同居するよう勧めてくれたが、まだ問題がありすぎるのだ。でも、できるだけ「週末」には行こうと思う。今回私たちは十分に語り合ったのでお互いにもっと親密になれた。私が本当にここにふさわしいという感じがするのだ。

ヒューセン

1942年10月1日

アンスは再び私のためにいろいろと手配してくれ、ANIEM、水道、ガス、税務署へ行った。彼女はありがたい人だ。

ヒューセン

1942年10月23日

夜中の12時 (N. T.)。とても興奮させられる日だった！リーンおばさんのところでヘルダは、リース・ファン・レネッセ・ファン・ダイヴェンボーデと一つの屋根の下にいるのはもう耐えられないから、荷物をまとめる予定だと私に話した。その女性と彼女の部屋に行った私は、あまり心地よくなかったこともあって、ここを出て行け、それもできるだけ早くと言ってしまった。彼女は怒って涙を流していた！私は彼女が早急に行き、二度と見たくないと思う！

ヒューセン

1942年10月28日

今日の午後、ペテロンガン13番地の雰囲気はかなり良くなっていた。ファン・レネッセ・ファン・ダイヴェンボーデ(リース)嬢は連絡先も告げずに去った。彼女はリーンおばさんにだけは挨拶した。その空気は突如軽やかになり、ヘルダもずっと快活になった！

ヒューセン

1942年11月1日

アンスはますます神経質になり、自分にとっても哀れみを感じていて非常に幼稚な振る舞いをする。実際のところ彼女には一度きつく言う必要があるのだ。彼女が10日に彼女の夫ディルクに会えるなら！³⁹³ そうでないと彼女にとって絶望的な状況になる。ポップはいい人で、彼女には何でも大したことはなく、つまり彼女は「権力」より優っているのである。彼女は、全てがその周りを回転している軸なのである。

ヒューセン

1942年11月4日

11月2日月曜日から今朝まで、ハンスとエーリックの面倒をみるためにクナリーラン19番地のウルフ家に泊まった。マリオン・ウルフは、彼女の夫との面会を何とか実現させようとスラバヤへ向かったのだ。しかし、彼女は昨晚早くも戻り、非常に落ち込んでいる。少年たちが寝床に就いたあと、私たちはとても遅くまで語り合い、彼女が抱く一番不愉快なことをきり出した。彼女は親切で、シンプル、温かくて利発だ。彼女のことはまだたくさんドイツ語が残っていて、ふとした時におもしろおかしく表現されることがある。

ヒューセン

1942年12月28日

その間に、ファン・ダイク一家とホフステデー一家がパラレル通り27番地を3日以内に立ち退きさせられ、ファン・ダイク夫人は自分のバラン[見回り品]の一部を手に入れた以外は何もないが、ホフステデー夫人の場合はまるで何もなく、そのため彼女はとても腹を立てており、意気消沈している！それで、今からは「戦争」と「大騒動」となるに違いない。やり方もまずいのだ。なぜホフステデー夫人はそばに残らないのだろうか？そうすれば、どんなことが起こるかわかるのに。今、イエッティー・ホフステデーは、ミス・ファン・ダイクは自分のバランのことだけを考えていて、彼女のためには何もしたがないと言い張っている。ポップは今日、完全に打ちひしがれ、興奮してやって来た。

³⁹³ ディルク・ファン・ウールコムが強制収容されていたクシリールでの面会日。「市外との接触／戦争捕虜・民間人被抑留者との接触」ヒューセンの日記 1942年11月10日参照。

ヒューセン

1943年4月1日

私はマリオンの家での逃亡生活を拘留としては感じない。私たちは一緒にたくさん話し合うことができるし、大きな違いはあっても共通点が多く、万事が容易に運び、私の気持ちでは、短い間に私たちは真の友人となった。この友情に対して誰も一切干渉することがないだろう。

ヒューセン

1943年4月3日

ピート・ズワーンが私たちのところを訪れた。1年間彼は隠れ住んでいたが、ある欧州人の「淑女」が彼を告発したのだ。4月9日に彼はハルマヘラ収容所へ行かされる。

ヒューセン

1943年5月21日

マリオンは今日エリー・ファン・フリートとハウトザーヘル夫人とともに、戦争捕虜の夫たちに送る食糧などと信じ込ませて、みんなからかなりの金額をだまし取った「夫人」の「K. 事件」における証言をするため下へ行った。そこでの宣誓は、「オランダ語」でなされた。その「淑女」は、9ヶ月を申し渡された。

ヒューセン

1943年6月7日

そのX.氏は他の人からあまり好評を得てない。ホーヴァールスは、マーセンが1942年3月1日にX.のところを訪れた際に、家は閉ざされていて、一家全員は上に白旗が掲げられている防空壕の中にいたとその時の状況を語った。X.はカトリックで、繁栄の日々には全然何もしなかったが、今はまた神父のあとを動き回っているらしい。ボアッセヴェン元市長はかなりよくズワーンのところ話し合いを訪れた。彼らは、皆が彼ともうすっきり手を切ったし、誰にも人気がないことが今よくわかったようになったこの弱虫に同情心を抱いているのだ。

ヒューセン

1943年6月16日

マリオンは下町で買物中にM.嬢に出会った。彼女は、物のように酷く扱われ、もうこれ以上耐えられないのでL.夫人のところから出たいのである。L.「夫人」は原住民と一心同体であると感じており、「あなたたち欧州人とは一緒に収容所へ入りたくない」と言うのである。彼女は、その間にもすぐに使い果たしてしまうだろうが、バルソニー医師に100ギルダー借りるチャンスを得た。どうせカンポンに移るお金を誰一人としてあげようとはしない。

ヒューセン

1943年12月18日

イエッティ・ホフステーデは、とても手に負えない15歳の少年であるリヌス・ファン・ダイクが大嫌いなサブ[掃き掃除]について意見したことでイエッティに拳を掲げてせまり、様々な非難と偽りの告発が行われたことでファン・ダイク夫人と喧嘩している。ファン・ダイクは彼の腕をとっさのところでは捕らえることができた。もちろん、それで全てが終了せず、イエッティとファン・ダイク夫人がこれに関して話し合った時に、イエッティがリヌスのことを「ならず者」とことばを発したため、ファン・ダイク夫人は完全にリヌスの側に立ち、この若僧は「そう言うただろ」などと言ったのだ。その結果、イエッティは身を引いてから隣家を巻き込んだ。ファン・ダイク夫人は自分とリヌスを弁護しようとした。

ヒューセン

1944年2月16日

マリオンは朝食後モーフ家を訪れて、2時に帰宅した際に、ジャーネ・モーフが中央市民医療施設(CBZ)で「グルガジの婦人たち」の関与によりスサー[厄介事]を体験したと語った。ワイブルによると、「他人の世話をよくする立派な女性たち」だ！デエー・ゼーゲルス、グートハルト嬢、そして他にふたりの女性がよくCBZへ訪れ、欧州人に果物やごちそうを届けている。彼女たちは病室に他の人々がいることを忘れ、「私たちが逮捕されないように注意してね。でないと誰がこの人々の面倒を見なければならないの!!」と非常におおげさに告げたりするのである。病人の世話がうまくいくかどうかは彼女たちにかかっているのだ！プルリンドゥンガン[保護区]からの病人向けのごちそうをファン・メーヘン夫人とヘリッツェン夫人は他の患者にだがいろいろあげているが、ウィリィ・デ・ローイとアンバラワのもうひとりはそのをたらふく食べ、残りを腐らせている！このことをマントゥリ[看護婦]と患者が怒っていたが、まったく当然だ！

ヘリツェン夫人はジャーネを呼び出し、このようなことではCBZにおける欧州人のことを完全に損ねるため、今後そうしないようグルガジの婦人たちに命令するよう頼んだのだ。ジャーネがそこで出会ったスカルジョ医師もこれを認めた。おおげさに自分だけ良い印象を与えようとするのは、常に他の人にとっては不利となると。プンタラン・マルトアモジョ医師はジャーネの許可を支持している。彼女のやり方はうまくいっており、病室の他の患者も喜んでいる。彼女は愛情を持ってこれをしているが、「グルガジの婦人たち」は、あとで「苦悩する欧州人の収容所住人の救助者」として見なされるよう自分の榮譽のためにだ。既述の婦人たちによると、ジャーネ・モーフはやってることはやってるが、まだまだ十分でないとい！

ヒューセン

1944年3月23日

ファン・ブラムセン一家のもとに来て1週間になる。毎晩、また一日が過ぎることを神に感謝している。話す機会はここではほとんどない。彼は耳が聞こえないし、彼女はばかだから。そして、赤ん坊が時々泣きわめくし、でもそれは最悪なことではない。…中略… ファン・ブラムセンにはいらいらさせられる。彼は一日中うろついていて、全く何もしないし読書することもなく、タバコばかりたくさん吸っている。

ヒューセン

1944年4月1日

ある老婦人を助けるために、切手のコレクションを5ギルダーで買った。これらは現在あまり、いや全然価値はないけれども、その女性はとてもお金を必要としているようだったので。

ヒューセン

1944年4月23日

家の中はあまり気持ち良い雰囲気が漂っていない。この夫婦はしょっちゅう不快で子供じみた仕草で口げんかしている。彼らは私が気付かないと思っているようだが、全てがわかるほどこの家は狭い！あまり愉快でも快適でもない！マリオンの家での調和した居心地の良い雰囲気とは何と異なるのだろうか。ここのは幼稚で、不愉快で、心の狭いブルジョアの振る舞いだ。彼だけでなく彼女もだ。私に対しては彼らはやさしく丁寧だが、私は彼らと話ができない。

ヒューセン

1944年5月18日³⁹⁴

ルーウイ・ファン・ブラムセンのシャツが物干し用のロープから消え失せた。厄介だ。得に、彼がこの家の誰かを疑っている場合には！

ヒューセン

1944年5月23日

晩に私たちが一緒に座っていた際に、Q. 夫人は私の「義理の姉」メラ・ファン・ブラムセンがこの家に入居する時、私は当然のことと思って自己紹介したが、夫人にそれもせず、無作法に振る舞ったから好きでないとやった！Q. 夫人はそのため私の「兄」にできるだけ早い時期に他の家を探すように要求するつもりだ。私は彼女を落ち着かせ、さらに喧嘩を生み出すようなことはしないようにとお願いした。でも、Q. 夫人は、メラを疑い深いとし、彼女（Q. 夫人）がテルナテ島人でかなり短気なので、もうこれ以上がまんならないのだ！

ヒューセン

1944年6月15日

記憶すべき日！早くからイエチェ・メイヤースが訪れた。彼女は私にミズホ・タバコを1箱持って来てくれた。私のは昨晚配ってしまったから。³⁹⁵ これに関連してメラとルーウイは、イエチェが無視したために怒ってしまった。私はこのトラブル自体を何も知らないので介入しないことにする。私はイエチェに好意を寄せているので、他の人と同じように彼女に対してはいつも通りにやさしくしている。それは相互関係である。なぜならばQ. 一家も隣家の人たちも、パビリオンに住むインドネシア人も私に親切だから！ルーウイは以前に一度私をその「下宿」を解約し、他の下宿を探す努力をするよう強要したことがある。私はそうしなかったために、彼とメラは強引に私を追い払おうとしていることが感じられた！

イエチェ・メイヤースは、ジャワ銀行での半日（木曜日）就業のため早く帰宅した。私は何も予期せずに、メラ、Q. 夫人、バブと一緒に台所にいた一方、子供たちは全員中庭でうろついていた。その時ルーウイが怒った様相で私に近寄り、「僕はイエチェ嬢をひどく思い知らせ

³⁹⁴ ファン・ブラムセン一家とヒューセンは1944年5月6日以降、ペンガボンのQ.一家の家に住んでいた。1944年5月17日から6月8日までの期間、教師ヒューセンは、ルーウイ・ファン・ブラムセンがかぎ回っていたため、日記をドイツ式の書体を使ってドイツ語で書き、日記を彼に簡単に解読されることを予防しようとした。日記をタイプで打ち直した際に、その部分はオランダ語に書き替えられた。「序」参照。

³⁹⁵ Q.夫人の結婚25周年を記念したパーティーにおいて。「教育・娯楽・宗教関係」1944年6月14日参照。

てやった。僕と家内をあんなでしゃばりで生意気な女に侮辱されたくない。彼女は我々を無視しているが、あんたにはいやに愛想がいい。もう我慢ならない。あんたに言うが、僕は7月1日をもって下宿を解約することとする！」と告げたのだ。もうたくさん。明らかにQ.夫人に対して私がどのような人間かを知らせたかったのだ。私は何の反応を示さなかったが、この事件を静め、丸く収める目的ですぐに29番地のイエチェのところへ向かった！

イエチェは、彼女についてファン・ブラムセン夫人が変なことを言ったのでファン・ブラムセン一家に対してそう行っただと私に語った。私のお願いで、彼女は事をこれ以上荒ら立てないことといつも通りにすることを約束してくれた。しかし、その必要もなくなった。なぜならば、メラは彼女がイエチェに言ったことをもっと知っている、むしろすでに忘れてしまったと言い張ったため、ルーウイとメラが数時間後（休憩後）に29番地を訪れたからだ。イエチェは返事を拒否した。この点に関してはイエチェが正しい。というのは私がその話を聞いた時も、さらにこのことを掘りかえし言うのは卑怯だと思ったからだ。ルーウイはほぼ50歳で見かけもあまりこざっぱりとしてなく、いかさないのに若い女の子には努めて印象付けようとするため、メラは強い嫉妬にかられて言ったのである。

彼らがイエチェに拒否されたあとは、また私の番となった。私は釈明を要求されて表の橋の上に呼び出され、再び7月1日をもって下宿が解約され、明日すぐにもそれに必要な処置を取るよう通告された。私はごく冷静を保ち、彼は私が「十分に従順であった」と認めさせたのだ。私は何もかも知り尽くしていた。私は快く去らなかったので、今度はいやおうなしにさせられるのだ。彼は自分の最新インド・チャプ[印人用スタンプ]をその申請のために呼び出されたのにまだ所持していないため、警察を死ぬほど恐れているのだ！

食後すぐに、ルーウイとメラはいつものように寢床に就くのだが、メラは不機嫌な顔をして私に、「あなたはまだ寝ないの？」と問いざるをえなかった。私はそれに対して「もちろん、まだよ。いつも遅く寝るし、Q.一家と一緒に台所で編物をするから！」と答えた。しかし、メラはいつも「くだらない話」にびくびくしている。彼女自身のこそこそとやる性分が彼女を疑い深くしているのだ。木曜日なので、メラは再びムンニャン[線香]を焚いた。彼女はちっともすばらしくないことを私のために願ったに違いない。それは本当に「魔術」³⁹⁶と呼ばれるものでありえるのだ。メラは、線香をたいてる時に願ったことはブトゥール[本当に]起こったと数日前に私に話したのだ。彼女はその他に、私たちがここへの引越作業中にノノ・ファン・ウーシクが万年筆を盗んだ疑いがあるために、重い病気にかかることを願った。事実、ノノは重症の熱帯性マラリアからまだ回復していない。メラは私を不安にさせようとしているのだと思う。私は将来と神様に確固たる信頼を寄せているので、彼女が私に対して行うことは成功しないのだ。

³⁹⁶ 脚注 371参照。

ヒューセン

1944年6月16日

一日は比較的平穩に過ぎていったが、緊張の気配いがしたのだ。午後の休憩のあと、Q. 夫人はルーウイとメラに話があると要求し、その際彼女はオランダ語を上手に話すことができないし、ルーウイは難聴なのでファン・ウーシックの助けを自ら受けることにした。ルーウイがその場に私を置きたがらなかったため、私は自室に留まった。そこで編物していても、話の内容は理解できなかったが、ファン・ウーシック夫人がルーウイに対して状況をもう一度明らかにさせるために大声で言った最後のことはとてもはっきりと聞こえた。そのことは次のようである。「要するに、現状のままではどうにもならないので、Q. 夫人はあなたとあなたの奥さんがここを出るか、それともあの先生が出るかを提案しているのです」。そのあと会議は終了した。

しばらくして、ルーウイが浴室へ行く途中に私の部屋に入ってきて、「いや、我々全員追い出されるのだ！」と告げた。そのことばに対して私は、「そんなことはない。というのは、ファン・ウーシック夫人が大声で『あなたたち、それとも私のどちらか！』と言うのを聞いたから」と返答した。ちょうどQ. 夫人もそばに来てこのことを認めた。私はとっさに続けて、「それなら、私はQ. 夫人に留まっていいか頼みますからね！」と言った。これに関して、ルーウイは率直に話せばよかったのにそうしなかった。晩に私はQ. 夫人と話し、全てを説明してから7月1日から夫人のもとに下宿していいか尋ねた。夫人がこれを了承したので、私はほっとした気持ちで寢床に就いた。

ヒューセン

1944年6月17日

ルーウイは外出した。彼が戻ると、Q. 夫人はメラと彼のもとへ行き、私が7月1日から彼女のところに下宿することに同意したと話した。そのあと私も彼らのところへ行き、再び同じことを告げた。そうしたら彼は、私のために違う下宿を探すのに十分努力したこと（いつものように私が知らない間にだ！）、イエチエは巧妙な悪女だということ（彼女はこの件には何も関係ないのに！）、私は大陰謀家であり、全ては私の過剰な不寛容さにより起ったこと、私が第1ラウンド終了時に勝ったこととどなり散らした。彼は今、ヤップが言うごとく、面目を失ってしまったこと、そして、このことが男として非常にまずいことを認めたのである。

しばらくして、彼は私に13 x 1.33ギルダー、つまり17.40ギルダーを返しに来た。なぜならば、私は明日からQ. 夫人のもとに下宿することになるので、争いを未然に防ぐためなのだ。そこで私はすぐに今月の残りの分として20ギルダーをQ. 夫人に渡した。5分もしないうちに彼は戻ってきて、10日間の家賃に当たる12.50ギルダーの3分の1、つまり4.33ギルダーの返済を要求した。彼はおつりをすでに用意していた！あとでわかったことだが、メラは私が高価なコーヒー

とミルク、たくさん肉、卵、楊枝、これは嫌でこれは好きなどと要求した私によって全てに経費が増したとして、大分以前から企てていたようだ。彼らは私が面倒を引き起こすため注意しなければならなかったなどと。ルーウイはその日のうちに私に対して、「きっと君が後悔するであろうと僕は君をあわれんでいる」とどなりつけた。また、Q. 夫人には「彼女は（スブル[災難]）をもたらす」と。昼食と夕食を私はひとりで食べ、メラは私のあとに、そしてルーウイは何もとらなかったか、それとも部屋の中で食事をとったのか。

ヒューセン

1944年6月18日

私の新しい下宿での初日！食べるのも暮らすのも裏側になって、まるで「自宅」にいる感じだ。圧迫感がなくなったし、メラのバブ（彼女は私がこのように扱われていることに涙していた）だけでなく、インドネシア人家族や隣人も私に共感していることを全ての面で気づかせてくれるのだ。ルーウイがこっそりお酒をたくさん飲んでたことも彼らはずっと前から知っていた。というのは、少年たち（ピートQ. とノノ・ファン・ウーシック）は、ルーウイが引越の際に空の家の中で飲んだくれ、ひっくり返ってしまったことを隠すことができなかったからだ！また、彼らはメラがどういう人間であるかをすでに知っていた。さらに、彼らはルーウイが私に代わって何かを売った時に、私に金額を偽ったやり方に怒っていた。彼らはこのことを非常に卑劣と思っていたために、私が玄関の通路にいる時には彼らはだんだんと外で値段のことを話すようになった。イエチェもそういう訳でバランスを私に代わって売ることを申し出た！ルーウイはピートQ. に対して、「君が僕の妹に代わって何か売る必要がある時は、安い値段を言わなければならないのだ。つまり、君が2.50ギルダーもらったら、1ギルダーと言うのだ！」とさえ告げるほどのずうずうしさだった。このようにあとになって私はこのすばらしき夫妻の卑劣な策略を多数耳にするのだ。Q. 夫人は、最初の日、当然なことと思って私はQ. 夫人に会った時にした自己紹介をメラは彼女にしようとすらしなくて、彼女を無視したために初めからメラに我慢ならなかったのである！

ヒューセン

1944年6月22日

Q. 夫人がメラに裏の廊下からテーブルを片付けるように尋ねたが、メラはそれをしなかった。メラによると戸棚をずらす必要があるのだ。彼女たちは家も部屋も見つからないと装っているが、私たちの見るところ、その努力もしていない。…中略… 木曜日なので、メラはまたムンニャン[線香]を焚きたがるだろうし、するとQ. 夫人は彼女たちのところへ行き、彼女の敷地内ではしないでくれと言う。それをするると魔術を意味するムンニャン・アイテム[魔術用線香]であることを十

分に知っているからだ。メラはあきれたことにノノのことを私に話したのにももちろん知らないと主張するのだ。また、ちょうど郵便が届いて、前側の部屋の元住人であるW.嬢が7月7日に再び住みに来てもいいかとのハガキがあった。彼女には実際のところその権利がある。なぜならば、この家は本来彼女が借りていたから！ファン・ブラムセン一家はすぐに「その淑女（私のこと！）を出せば、場所が空きますよ！」と言うのだ。これに関してはもちろんたくさん話しが続き、ファン・ブラムセン一家はQ.夫人からはっきり真実が告げられ、厳しくしかられた。私たちは今晚実際にムンニャンを見なかったし、その匂いもしなかった。

Q.夫人、ネルと私は隅の私たちの小さなテーブルで早めに食事を取り、イエチェが訪れた時にはまだ食べ終わっていなく、彼女も一緒に食べ座ったままで話しを続けた。ハンナ・ウィーゲルスも加わり、とても大騒ぎとなった。その間に、ルーウイが玄関の通路を行ったり来たりしていた。彼とメラは私たちが場を離れない限り食事をしたくない様子だ。しかし、彼らには食堂にいる権利が全くないので、私たちは自分たちのコーナーでそのまま話しを続けた。そして、彼とメラは自分たちの食事を皿に盛り、玄関の通路へ行った。食後に彼は私たちのところへ来て、Q.夫人に言った。「奥さん、あなたは私の妻にテーブルをどけるようにと頼んだことを今初めて聞きました。僕はこのことについて何も知りませんでした、明日には全てのバランを取り除くことと我々が7月7日前までに引越することを勘定に入れておいてください」。そして、私に向かったもう一度、「では、お嬢さん、ですから、明日全てのバランがなくなることをご存知ですね！」と言った。これに対して私だけが同意する目的でうなずいた。彼と彼女と縁が切れる。私たちの部屋から急にネルが無表情な顔をして現われ、「Q.夫人、私たちは7月7日にはまだ出ることができないことを伝えにきました」と。それで大笑い！

ヒューセン

1944年7月3日

ピートQ. はあまり信用がおけないようだ。昨日彼はファン・ブラムセンのトランクからハサミをこっそり盗んだが、引越業者のマンドール[現場監督]がそれを目撃したために返させられた。午前中には一組の中国人が訪れ、その一人は援護のためで他はケンペイタイの者だった。ピートがある中国人の衣類をロンベン[古着回収業者]に売ってしまったから！私はどういう結果になるか興味ある。私は、ピートがポケットにたくさんのお金を持っていたり、ここの家では困窮しているというのに、映画やトコ・ウン（これは彼のところで3.75ギルダの領収書を見た）などでもてなしているのに驚かされているからだ！…中略…

プックおばあさんとジャーネは、ピートがなくなしたお金(!)を返せるようにと、彼がハンナ・ウィーゲルスのところで27ギルダ借りたことを告げに来た。ピートはフレddieが持っているただ一枚のワイシャツ（Q.夫人が約3週間前に10ギルダで買ったもの）を売ってしま

った！幸いにも、私は白地の余りがあるし、ブラス[米]の白い袋でさっそくワイシャツを作ることができるのだ。…中略…

夕食後、ひとりのニッポン兵士が家を訪れ、「涙いているチンタ[愛人]」と「ガン・ワグハルス」について話した時に、私はハンナとイエチェと一緒に橋の上に座っていたが、彼がQ. という名前を挙げるまで、私たちは何のことか全然わからなかった。そして、Q. 夫人はそこへ向い、本当は一緒に戻る勇気のないほどに恥じているピートをイエチェの手助けで帰宅させた。彼はケンペイタイに相当たたかれたために、よたよた歩き、ひどい状態をきたしている。ハンナ、ミーレらはピートが無罪であったと言おうとしたが、彼はそうでないのだ。彼はそそのかされ、その弱気さがもとですぐにも加担してしまったのだ。

ヒューセン

1944年7月4日

5時頃にふたりの「淑女」がやって来た。そのひとりにはファンW. 夫人のようで、他はクディリ出身の姪だ。ホテル・ファン・ブリュッセル³⁹⁷ のバーでかつて働いていたこの「婦人」は、出産のため3ヶ月スラバヤにいた。その子供は5月15日に生まれ（Q. 夫人によると、ヤップの子供たち用の施設に収容され）、ここに再び戻ろうとしているのだ。私は表の部屋をネルと私だけで保有すべく、また当然そうなるようにQ. 夫人に直接頼んだ。このふたりは全然付き合うタイプでない。ファン・W. 夫人は海軍に夫がいて、ふたりの子持ちだ！

ヒューセン

1944年7月5日

あとでわかったことだが、ファンW. 夫人の赤ん坊はニップのではなく、ジョンゴス[下男]のだった！また、その子はクディリにいる彼女の母親のもとにいる。彼女はある中国人にその子をあげることを考えている。もちろん代償つきでだ！

³⁹⁷ 新チャンディ通り34番地に所在したホテル・ファン・ブリュッセルはスマラン倶楽部という名の慰安所として使用された。この慰安所は以前にはグニーラーン8番地のホテル・スプレディッドにあった。(Mayumi Yamamoto 及び William Bradley Horton, 「Comfort Women in Indonesia: A Report on Dutch Archival Materials」(未刊行 september 1998) 11)

ヒューセン

1944年7月6日

早朝から今日は家の中で喧嘩があった。Q. 夫人は遅く起き、頭痛、ピートのことで神経が張り詰め、加えてふたりの女性の来訪、そのため子供全員がその報いを受けなければならなかった。ネルでさえも、彼女が私とコーヒーを飲んでいる時に笑い、編物をしていたために！この子はいろいろなことを片付けて配慮したのにだ！私はどなったり殴ったりしたこと自体不当で、ネルを病気にさせるようなものだと思う！

ヒューセン

1944年7月14日

午後、アーリが私のところで計算問題を解いている時に、ポケット氏（フランス語圏のスイス人）が訪れ、ファン・ブラムセンを尋ねた。この人は15ギルダー彼に対して負債があるのだ。ファン・ブラムセンは働いているので（！）、それを22日以降に支払うはずであったが、まだ実現していない。Q. 夫人は新しい住所をあげた。ファン・ブラムセンはこのようにいかなる人もだまし、その日暮しをしている困窮したかわいそうな人さえもだ。

ヒューセン

1944年7月16日

ファンW. 夫人がいわゆる彼女の「里親」（！）のところに泊まって、新しいドレスを持って午後帰宅！

ヒューセン

1944年7月28日

Q. 夫人は、「淑女たち」の一番若いM. I. が夫人のバッグに触れ1.50ギルダーをかすめようとしていた現場を捕らえた！夫人はファンW. にこのことを話したら、今日この「淑女たち」はクディリに向かって去った。昨日ファン・W. 夫人宛のハガキが届き、生まれたばかりの赤ん坊はすでにジャワ人に「あげた」と記されていた！。考えてもごらん下さい。また、一方の「淑女」は父親に帰宅するよう告げられた！私たちにはこの件から解放されたのである。

ヒューセン

1944年7月31日

午後、ここに2回警官が訪れ、その騒音で私たちは昼寝から起こされた。彼らは、イジン[許可証]を申請しなかったために、発っていない「淑女たち」を探していた！私たちは、彼女たちが慰安所へ消えたのだらうと思っている！

ヒューセン

1944年8月4日

Q. 夫人は彼女のいわゆる「良い評判」を心配しているが、私たちが再び「淑女たち」を宿泊させた事実は変わらないのである。泥棒でバーのホステスであるI. 嬢は、昨晚かなり遅くなって同じ種族の「デブ」と一緒に突然やって来た。当然Q. 夫人は彼女たちを2日間泊めることに同意した。幸いにも、私は隣家にいたが、これからはできるだけ自室にいることにしよう。デブがここに来て1時間も経っていないというのに、ピートが私たちのところに来て、彼女をチンタとして欲しがっているひとりのニップを探してくれるようにピートに尋ねたと話した。ピートはまた、S. 嬢はイノセのチンタでファンW. はオノ（伍長！）のチンタであると話した。彼女は事実クディリへ行き、数日前に戻って今はカレン通りに住んでいて、オノから「内金」300ギルダーもらったのである。³⁹⁸ 印人女性の4分の3が勝手気ままな生活をしている！I. 夫人は彼女のところに住み込んだM. F. と同棲している。成人した娘がいる（この裏に住む）M. は19歳の若者と同棲している。きりがないのである！

ヒューセン

1944年8月5日

私は何も関与しないようにし、「淑女たち」を全く無視するのだ。でも、いろいろとあって、Q. 夫人はI. 嬢と一緒に管区へ行った。彼女たちが戻ると、私はW. の罪、慰安所、300ギルダーなどのことばを耳にした。私は定刻に自室で食事した。慰安所やバーの事件に巻き込まれないことを願うのだ！私はネルから事の真相を聞いた。W. 夫人はスプレディッド（グニーラーン）慰安所のために6ヶ月の契約書にサインして300ギルダーもらった！彼女はI. もそこで働かせようとしたが、父親の介入があって失敗した。「W.」はつまりオノのチンタではなく、ただ他の人たちを

³⁹⁸ 幾多の女性は常連の日本人男性と交友関係を持ち、そのような関係は慰安所での仕事より好まれた。(Van Poelgeest, 14-15)

すっかり信じ込ませていただけなのだ。警察管区とは、この事件も今はうまくいった。そこでは、ファンW. 夫人とI. が引越部担当のスナリオからののしられた。

今晚I. と他の女性クディリ出身のC. もパサール・マラムへ行く。このC. はもう2年間もケンペイタイの男性に養われ、彼の子供がひとりいて、現在はここに来るために6日間の休暇をもらったとネルとQ. 夫人に話した。

ヒューセン

1944年8月6日

食前にひとりの警官が来て、C. 嬢を管区に呼び出した。彼女が帰宅すると、私は彼女が荷造りする音を聞いた。彼女と他の若い女性が去ると、Q. 夫人は私に、C. 嬢が同時に75ギルダー以上の郵便為替を送ったクディリにいる彼女のチンタ[愛人]によりケンペイタイに呼び出されたことを話してくれた！

ヒューセン

1944年8月11日

隣の少女は昨晚、私に何も告げずにH. 少年たちとパサール・マラムへ出かけた。彼女が今朝私に全てを話しに来た時に、私はとてもがっかりしたと彼女に言ってやった。この頃、欧州人は己の身を大切に思ってパサール・マラムへは誰一人行かないのだ。彼女は私が見たところでは他の印人より優っていたがるだけに、それ相応に行動しなければいけないのだ。

隣家では今日また激しい喧嘩があった。彼女が彼の食事を時間通りに用意しなかったために、彼は今朝仕事に行かなかった。そして、彼女はうちには食べていくのに一銭もないなどと言っているのに、借金(5ギルダー)をして髪にパーマネントをかけに今床屋(!)へ行行った!! それでもふたりの幼い子供の母親なのである! まったくの醜態だ。彼女はほとんど何も持っていない人からそのお金を借りたのだが、自分の母親がここへ来た時に、彼女からそれをもたらえると思っている!

ここでは盗みがたびたび起きている。私の大きなアルミ製のお皿が裏の食器棚から姿を消し、パビリオンからは一枚のお皿も! ピートであるはずがない。彼はまだ病床にあるから。

399

³⁹⁹ 「健康状態と医療事情」 ヒューセンの日記 1944年8月9日参照。

ヒューセン

1944年8月22日

この家の中から再三小さな物品がなくなる。二枚のお皿のあと、ピートがポップに売らせたビン二本も！また、昨日は楕円型の鉢。今は全部室内にしまい込んでいる。そんな子供を持つのはさぞ大変だろう。彼は仕事も持っていないようだ。なぜならば、彼は一日中ぶらぶらしているからだ。私は隣りの人に注意したが、そこでもコップ1個とズボンが1枚なくなったようだ。ミーレ・ファン・ウーシックはピートが持って行った腕時計を求めている！

ヒューセン

1944年9月10日

私は先週何度もQ. 夫人と話した。彼女は、ジャワ生れの印人は変に混乱しているし、勝手気ままに生活していて、他人のことは何でもねたみ、しょっちゅう面倒を引き起こそうと狙っているのだと確信している。彼女はハンナだけは例外としている。だから、私はまだ毎晩そこへ行くが、以前よりも少しの間だけ。

ヒューセン

1944年9月15日

人々がお互いにもっと寛容になりさえしたらいいのに。例えば、私はほとんど毎日Q. 一家が何か隣りの人について言うが、（常にほぼこき下ろして）、反対に隣りの人が何かQ. 一家について言うことを耳にする。それでも双方はクリスチャンと呼ばれている。

ヒューセン

1944年9月18日

今朝、ペンドリアンにある医師会の元会計士（すでに死亡）と離婚した女性であるB. 夫人なる人がここを訪れた。彼女はお金を得るのにあくせくすることにうんざりしていて、子供たち（3人いるとのこと）は、彼女によるとあまりにも無作法なので、それを直させるために親戚のもとに住ませることに係わっている。ハンハルト夫人は、彼女の最年少の男の子でなく、家事と裁縫の手伝いをさせるために一番年上の女の子（ほぼ12歳）なら置きたがっている。B. 夫人は、「家政婦」として金持ちの中国人に自ら志願することを熱望しているようだ。一体スマラン東は何と

いう状況なのだろう！ここで私は最も特異な関係についてまるで普通のことのように話されているのを耳にする。

ここの隣りでもまたいろいろな物が消え失せた。跡形もなくだ。今はひとりのバブも雇っていないのに。スタンスは9枚のオムツを失い、イエチェは自分のショートパンツだ。でも、これはかなり短かったので私はあまりひどいと思わない。数日前、イエチェのバックからタバコと30セントがなくなった。ピートはこの隣りの部屋に横になり（日中に）、とても不快に吐いている。彼は多分またアイスクリームや駄物をたくさん食べたのだろう。なぜならば、私たちのうち誰一人としてお腹の具合が悪くないからだ。ネルはまた激しい頭痛のためハンハルト夫人のところでの仕事を離れ帰宅した。さらに、昼食前にサイコロ遊びに行くためにハンハルト夫人を若い男が呼びに来た。多くの人間が何という暮らし方をしているのだろう。この時勢に！

ヒューセン

1944年9月21日

昨日、隣家でたくさんの物を盗んだ泥棒は同居人のひとりであったことが判明した。ハンナは彼を彼女の家での同居を拒否した。この若者はこれからどうなるのだろうか？彼が主張していたように週10ギルダールではなく、5.50ギルダールきり稼いでいないようだ。彼は自活しなければならぬので、彼自身によるとどうにもならないのだ。そこの家計は全体的にちょっと奇妙だ。全員が自分自身のために生活している。

ヒューセン

1944年10月15日

イエチェは、今になってミーレがハンナを手伝えるほど取引をして十分稼いでいると私が言うごとに、彼のことをよく思わない。私はQ. 夫人からミーレがハンナのために最近売ったもので、30ギルダール稼いで、さらに彼女から10%を懐に入れた！これこそ困った時の真の救い主！

ヒューセン

1944年10月19日

昼休みの真っ最中に私たちの後ろの家に住むマグナー夫人（アンボン人）が突如訪れ、ピートのところまで直進した。なぜなら、彼はその家で再びブラウスを盗むチャンスを得たが、バブがそれを目撃し夫人に告げたのだ。ピートはお腹が空いているのでそれをやるとずうずうしくも彼女に

嘘をついたのだ。彼の自宅では食事をもらっているのだから。しかし、ここの食事は彼にとっておいしさに欠けるのである。彼が病気となり、そのため吐く結果となる外からの様々な物が必要なのだ！彼の母親にとっては惨いことである！彼は仕事をしながらないし、一日中横になって本を読んでいる。

ヒューセン

1944年11月1日

私は、アンヘネント医師にとっても世話になっているとQ. 夫人がいつも言っているので、彼女に衣服か物資をその医師に頼んでみるように勧めた！しかし、彼女はそこへ行きたがらない。なぜならば、彼に援助してもらった人はみんな毎日曜日に新チャンディ通りにある「彼の教会」へ行かされるからだ！それは正真正銘のキリスト教だ。アンヘネント医師はまだ新約聖書をよく理解していないようだ！

ヒューセン

1944年11月18日

ネルはH. 夫人から、W. 氏にはまたまた新しい「奥さん」がいて、つまりファッションデザイナーとして稼ぎ、お金をまだ持っているB. 夫人であることを聞いた。それで、彼は数日前から現在では相当値の張る新しい帽子とワイシャツと靴を装っている！

ヒューセン

1944年11月26日

イエチェ・メイヤースはハンナのところでまたまた衣服が消え失せたと話した。つまり、リースベトの丈夫なズボンと私がフリッツに編んであげた長い靴下1足が！この靴下はほとんどいつも閉まっているタンスから！今回の犯人は誰か？

ヒューセン

1944年11月30日

隣りの家で11時頃まで楽しくおしゃべりした。H. 夫人の「善良さ」についてのすばらしい話なども聞いたのだ。イエチエが、ひどく泣きはらした様子をしたE. T. と一緒に中に入って来た。原因：E. (D. の女の子) は彼女の叔母に代わって金のブレスレットを売らなければならなかった。それで900ギルダー以上の売上があった時には、その超過分が彼女のものになった。D. はE. を説得して彼の母親[H. 夫人]を介して売ることに成功した。利益を一緒に分けることで同意された。H. 夫人は事実それを売り、E. には「ブレスレットで975ギルダーの売上があったので、この35ギルダーがあなたの分よ」と告げた。その翌日E. は彼女がピアノを教えているリーム家へ行ったら、生徒の手首にそのブレスレットが付けられているのを目にした。彼女はそれについて話をしたら、彼女がぞっとするほど驚いたことに、リームはそれをH. 夫人から1,200ギルダーで買ったと知ったのだ。この「善良な」H. 夫人は要するに彼女の分に115ギルダー不足してあげたのだ！T. 家は非常に貧しく、母親は油を売る内職をして稼ぎ、月に55ギルダーでどうにかやっついていこうとしているのだ。E. は怒ってH. 夫人にお金のことで文句を言った。私にはこのことが汚い、卑劣な策略と思う。特に、このH. 「夫人」は彼女がしているたくさんの善行についていつも大口をはいているだけに。…中略… 私は最初からH. 夫人は信頼できないと言っていたが、彼女たちはみんな彼女がとても親切だと思っている！

ヒューセン

1944年12月22日

エティ・ファン・ウーシックはQ. 夫人を訪れ、エティの名前が付いていたのに、木綿地とサンコーの糸(それに対して1.26ギルダー支払う必要がある)を勝手に保持してしまったネルを責めた。彼女はこのことをある少年から聞いたのだ。Q. 夫人はネルを呼んでこさせたが、彼女から何の返答がなかった。あとで夫人は私に、エティがヴォーフト夫人から誤りを指摘されたこと、もし生地が届くならば(ということは彼女によるとまだ何ももらってないのだ)、これはネルのものとなると話した。しかし、彼女は中々問題の核心に触れたがらないので、私は事実生地が届いたのだと推測している。私は薄い木綿の白地あるいはポップリン地と巻糸を実際目にしたのだ。

ヒューセン

1944年12月23日

Q. 夫人の甥ボビーがサンコー一家のところからここを訪れ、彼は、「ネルは泥棒で、君のおばさんもだ」と彼に言ったエティに出会ったと告げた。ふー、こんなことを小さな子供に言うとはあまり感心したことでない。Q. 夫人ももちろんひどく気分を害した！フレddieは今日新しい下着 - 新しいパンツ - をつけていて、夫人は今ブラウスを縫っている！まったくいつもいろいろと体験させられる！…中略…

ブックおばあさんによると、Q. 夫人は今朝ネルに代わりサンコー家へ行ったようで、そこでこのことは詐欺であり、もうすでに裁断してしまってもその生地を返さなければならないと聞いた。それは、2.5エルのポプリン地とかだ。

ヒューセン

1944年12月25日

私には話し相手がいなく退屈なので、12時にブックのところへおしゃべりしに寄った。彼女は、ネルがエティに責任を負わせるようサンコー家の話をハンハルト夫人に告げたと書いた！また、ネルは、私がドレスをロンベン[古着回収業者]に17.50ギルダで売ったとも彼女に言ったのだ。要するに、私もネルのととてもおしゃべりなことに気を付けなければならない。真に信頼できる人はここに誰もいないようだ。

ヒューセン

1945年1月9日

8時半にイノセが玄関に乗りつけて、ピートと話した。…中略… ベエー・クンツは、ピートが危険なスパイとして知られているために、この家に近づく勇気がない。ヤン・デK. は、40ギルダ一彼から借りて、返そうとしないピートに対してミーレに苦情を言った！加えて、ヤンはピートに長ズボンを貸したが、なかなか返さなかったのであげてしまった。ピートはヤンをマタ・マタ[スパイ]としてイノセのところへ届け出た。ヤンはこのことを非常に不愉快に感じている。

また、当時アップルが逮捕されて、衣類などをもらってもよかった件がある。ピートはそれを受け取るはずで、その際いろいろとあったようだ。あとでひとりのニップが衣類や毛布などを取りに家族のもとを訪れた。ピートはそれを届けていなかったことが判明した！私は、この若者は時勢が変るととても厄介なことになると思う。

ヒューセン

1945年1月10日

Q. 夫人は頭痛がする。ネルもだ。雰囲気は昨日よりももっと下がってマイナスだ。朝早くから、フレddieは殴ぐりかかったのである。昨日と同じように、私が言ったこと全部を「私は知らない」と夫人からの返事を聞くだけだったし、ネルは頭を振るのみ！だから私は自分の部屋に入り、黙っていることにしよう。…中略…

夕食後、Q. 夫人と私との間で突然大変な事態になった。彼女はどなって興奮していたが、私は落ち着き払っていた。というのは、私は彼女とネルの態度ではくだらない話と嫉妬に帰すだろうと既に思ったからだ。隣りの人が私はそこへ行っては、たらふく食べ、毎日朝食を摂りに来るなど、食べ物のご無駄事を話したらしい！私は朝そこへ行くことはほとんどないのだ！ファン・ティーネン夫人とハンハルト夫人は、すでにこのお話をQ. 夫人にしゃべったらしい。そのお金がQ. 夫人の狙いではないのだ。なぜならば、35ギルダーでは彼女によると私の食事には全然足りないのだ。彼女は私がこの横の家に引越ことを望んでいる。一度もそんなことで心配したことがなかったのに！また、彼女はさらに管区の話を持ち出したが、私にはそんなことはありそうもないように思える。私がことばに詰まってしまったこの「楽しい」会話のあと、外へでたら、そこにイエチェがいた。私は彼女に簡単にそのことを説明した。イエチェは今まで通り私のところに来てもいいが、これから隣りの家を避ける必要がある。こんなことで喧嘩なぞしたくない。この世の中にはたくさん悲惨なことがあるのだから。Q. 夫人は相変わらず、彼女がたくさんのバランをまだ持っていて、高貴な家柄の出身だと話している。私は、彼女が嫉妬心と劣等感を強く抱いているのだと思う。面倒なことだ！

ヒューセン

1945年1月11日

ネルと夫人は今日はいくらか好意的だ。ネルは「機嫌の悪さ」が軽くなり、昨晚の「わめき散らすこと」で、夫人も少しよくなった。私はできるだけ自室に残る！夕方イエチェがQ. 夫人のもとへ（後者の願いで）来て、彼女からサンコー事件について全容も聞いた。私たちはそのことに関してもう何も話さない。私の思うところでは、一方ではネルの罪だが、他方エティは信頼できず、加えて、私や他の人についての陰口は卑怯なのである。

ヒューセン

1945年1月14日

イエチェは時々おしゃべりしに来る。その他私は何も気晴らしがない。なぜならば、Q. 一家はこのところ親切だが、まるで私の話し相手にはならない。

ヒューセン

1945年1月20日

雰囲気は相変わらず悪い。私がパサールでの値段を尋ねると、返事がないか、「他の人はもっと安くあがるから、それについては話したくない！」と。（私にはイエチェ以外、誰とも話す人がいない！）。食堂を通過してトイレへ行けば、スパイしているとされ、みんな去るかささやき声で言っている。全てが疑がわれるばかり。回収業者へ古缶などが売られている傍に立っていれば、私が夫人をコントロールしたいのだということになる。全てがこんな調子だ。これ以上長引いてはならない。

ヒューセン

1945年1月21日

ネルは数日前から食事に来ないので、私は、隅に座っていてほとんど、いや、全く口をきかない。Q. 夫人と一緒に食事をする。私はもう大分前から、私は全てに黙って従い、ここでの生活を何か私自身の外に取り巻くものとして、自己の社会にある状況とは違うところに置かれることにより、判断力を得るために私にとって必要だったのだと思っている。ネルがあとで私のところへ来て泊まるようなことはない、私はすでにわかっている。

ヒューセン

1945年2月4日

この家では盗みばかりある。昨晚、私はQ. 夫人が30セント足りないというのを聞いた。今日は各0.60セントのアラン[木炭]を2回取りに行かなければならなかったが、ボビーは毎回50セント分を買い、10セントをひったくった！子供たちはいつもお金を持っているが、夫人によると、ピートからもらっているのだ！

ヒューセン

1945年2月9日

Q. 夫人は1月にハンハルト夫人から20ギルダ―借りた。彼女はお嬢さん（私！）が下宿代を払ったらすぐにこれを返すはずだった！現在まで、ハンハルト夫人は一銭も受け取っていない。また、Q. 夫人は、まるで私が大食いで何でも平らげ、そのために彼女が借金しなければならないと言って隣りの家や他でも思い込ませている！

ヒューセン

1945年2月13日

Q. 夫人とネルさえも再び親切になった。

ヒューセン

1945年3月19日

イエチェは、私が隔離生活になって初めて夕方に訪れた。私たちはQ. 夫人を機嫌よく保とうとし、彼女は、きっと激しい嫉妬心のため、イエチェを私から離れたがるので、私たちは政治的になったものだ。約10日前に夫人は、私がイエチェに対して「恐れ」ていたのだと私を非難し、それには私はただうつろな驚きを表わす以外なかった。私は今度からイエチェの名前を全然言わないだけの良識がある。

ヒューセン

1945年3月23日

他の者には何もないか、ほんの少しだけなのに、Q. 夫人が頻繁に食事をしたり、甘い物を食べている（ほとんどが一番年下のリーシェと）ことにたびたび気付く。ここでは、「初めに子供、そのあとに大人」ということは通用しない。他の者が盗みを始めたり、パサーのお金をかすめたり、外であらゆる駄物を買うことも不思議でないだろう！

ヒューセン

1945年4月1日

時折、私はカンポンのそばでなく、そのど真ん中に住んでいる感じを受ける。例えばだが、Q. 夫人（！）が食事の時、あるいは、みんなが一緒の席でけっぶをたくさんしたり、毎日起こることで、道家族がお互いの頭のシラミを道端で見られると全く同じようにして駆除しているのだ。彼女らが退屈するとこれが始まるのだ。小さい子は母親とネルのその重要な仕事を手伝う。授業はもう行われていない。

ヒューセン

1945年4月2日

ピートQ. は、先日なくなってしまった靴下をロンベン[古着回収業者]のところで見つけ、フレディとボビーがその犯人であることを探り出した。夫人はこのことについて余り話さない。また、古いズボンも彼らは安売りしてしまった。

ヒューセン

1945年4月29日

またまた嫌な日曜気分！Q. 夫人と喧嘩！彼女はファイゼル一家を訪れ、私が編んだズボンを持って帰った。小さ過ぎたのだ！彼女によると、型紙よりも大き目でないといけないと、彼女が私に言ったようだ。私によれば、彼女はそのことを何も言わなかった！彼女は「またまた」誤りを指摘されたので怒ってしまった。彼女は私のことを何でも同意するイエチエでないなど！私はそれに対して何も返答せず、私の部屋へ行った。また、ファイゼル一家からのケーキはちっともねたんでいないと思われているので、それをもらうのを拒否したのだ。昨晚には、私に（ヒレブラント夫人が作った）シロップをトコで注文した方がましなのにと言った。その人たちをねたんでいいのかしら？ここで障害をさけることは難しい。ネルとは現在うまく行っているが、次々に変わるのである！…中略…

ヒレブラント夫人は、誤解の同一性に関しては私と同じ体験をしたのである！ヒレブラント夫人から注文した4本のシロップを受け取り、10ギルダー支払った。午後Q. 夫人が帰宅し、コップを1個2.50ギルダーで私に買って来て、ズボンの制作費として1.50ギルダーをくれようとしたが、私はそれを編み直さない限りはともらうのを拒否したのだ。このことはともかく成されなければならないのである。要するに、喧嘩は収まった。

ヒューセン

1945年5月10日

近所の常習的恥ずべきこと：S.嬢のE.との婚約は破棄された。というのは、彼女が毎晩ニップの訪問を受けていたことを彼が知ったからだ。その際、R.がジャガ[夜警]の仕事をする！この若者は、彼の母親が未だにニップの間でラクー[ひっぱりだこ]なことを誇りにしている！他のスマランの淑女も身売りした！こうしてどんどんと続くのだ！

ヒューセン

1945年5月12日

Q.夫人は一度も誰もだましたことがないと断言している！しかし、彼女は昨日パサールでサブ[ほうき]を2本買ったが、彼女は1本1ギルダーだと主張した。H.夫人が彼女に注文したらしい！私が傍にいた時に、Q.夫人は1本0.80ギルダーだと思わず漏らしてしまった！このことを私はだましたと見るのだ！これは人から「だまし取る」ことだ。些細なことで行う者は、確実に大きなことでも行うのだ！

ヒューセン

1945年5月19日

イエチェからふたりのご婦人ホフステーデとファン・エンクについてのすばらしいお話を聞いた。バウマン夫人が数日前にドクター・デ・フォーゲル通りでファン・エンク夫人に出会った。ファン・エンク夫人は、近日中に彼女の家で誰かが殺されても何も手立てできないと警察に警告するために第4管区へ行く途中だった！この事件は次のようないきさつになっている。ホフステーデ夫人は家の前半分に住んでいて、裏庭の彼女の半分に当たるところに垣根で境を付けさせ、垣根はいつも閉じなければいけないと告げた。ファン・エンクの息子のひとり（ロップ）があるときこれを忘れたら、ヒューブM.が彼に向かって突進し、垣根を閉じるように彼に命令した。それに対して、ロップは「自分でやれ」と言った。これに続いて、ヒューブが彼を殴り倒したら、ホフステーデ「夫人」がヒューブを応援したのだ！

しばらくして、同じことがファン・エンクの他の息子に起こった。その結果、ファン・エンク夫人が、ホフステーデ夫人の賃貸を断ったら、ホフステーデ夫人はこのことをフドーサン(カンリコーダン)[不動産管理公団]に苦情を言った。そのあとに、ファン・エンク夫人は嫌な手紙を受け取り、この事件を説明するために事務所へ出向いた。彼らは全部調査する予定だということだが、現在まで何もなせれていない。しかし、その間にファン・エンクの息子たちは、私も

彼らが正しいと認める復讐をたくらんだのだ。ホフステーデ夫人はこの出来事でありレディーにふさわしくない振る舞いをし、完全に「彼女の身分」にそぐっていなかったようだ。

ヒューセン

1945年6月2日

Q. 夫人は、彼女がデ・リザーらのところでもう働けなことを路上でブックに詳しく述べた。その訳は、デ・リザーのところではパサーのお金のこと、オルトホフのところでは、カバヤ[長い丈のブラウス]のことで彼女が信用されてなく、アーリが口やかましくとがめられていることにある！そう、私はアーリを決して家の中に置きたくない。生意気で、せんさく好き、卑しくて信頼できない。Q. 夫人は、相変わらず誰も彼女を信用していないことを繰り返し、神様と聖書をその際引用する。私たちは彼女の絶え間なく続く嘘を見破るのだが。…中略… 彼女が商売をしてあげていたヴェラZ. も、独り言のように「借金して返さず、うそと欺き」とぼやいて去ってしまったのをイエチェと私が聞いた時以来、もう来なくなった。

私はQ. 夫人に同情するが、もし彼女が言ったこと全てをでっちあげなければ、全く異なって彼女に向かい合うことになる。ネルも同じで、その上はなはだしく怠惰だ。今日、彼女は何も本当に全く何もしなかったのだ。一方では、子供たちは破れた衣服で歩き回っているし、母親はダガン・ダガン[取引をする]ために外出しているし、リーシェはさわれないほど汚れているのだ。その上、彼女は家の中を片付けたり掃除することもできるだろうに！その代わりに、おしゃべり、頭のシラミ退治、オイジェニーと散歩、おしゃべり、食事（母親が外出する前に用意したもの）、眠るのだ！

ヒューセン

1945年6月5日

玄関の間の住人とQ. 夫人との間でますます不和が生じている！あとどのくらいうまくいくか興味あり！

ヒューセン

1945年6月8日

ハンハルト夫人が来て、…中略… Q. 夫人が昨日ハンハルト夫人のところか、手伝いに行ったハンハルト夫人の姉ショルス夫人のところかで、ロープからハンカチを盗もうとしたことを、（さ

さやき声で、時々編物のことは大声で！) 私に話した。ハンカチが彼女のポケットから落ちた！私はほとんど理解できないが、彼女がピートのものをあれこれ取ったことを疑ったことがあるのだ！

ベエー・クンツからおいしいコロッケとソーセージ入りパンの一種と一杯のコーヒーをいただいた。彼女は私にとっても同調しているみたいだ。今度私はイエチェに気を付けなければならない。なぜならば、彼女は多少嫉妬する性格だから。このことを私はすでにいろいろなことで感じたのだ！何とそのような人は自分自身を困難に陥らせるのだろうか。でも、他人をもだ！

ヒューセン

1945年6月9日

クナリーラーンでの勤労奉仕の最中に、トイレから一緒に出て来た17歳の少年とある「淑女」が捕まった。要するに、勤労奉仕は意欲のない、節度のない分子によって悪用されている！印人はそれがため、自分たちの評判を低下させるのだ。トトックはもう歩き回っていない！

ヒューセン

1945年6月13日

食後、1時に隣りの家へ行き、私を招いてくれたが、まだ食事が済んでいないベエー・クンツェのところにとどまった。私はこの招待を喜んで応じるのだ。なぜならば、彼女がそれを快いと感じているのを知っているからだ。ベエーは意見を述べることができる相手を必要としているのだ。私自身も時には外で食事を好んでする。とても気晴らしとなる。

ヒューセン

1945年6月29日

今日の午後、Q. 夫人は他の者からとても酷く扱われると言って泣いていた。アラブ人の家主と牧師が昨日訪れ、ヒレブラント夫人の病気は事実Q. 夫人の責任であると責めた。ヒレブラント夫人は私たちに6ヶ月分の賃貸料を提供することで追い出そうとしたが、私は、家主がイノセとケンペイタイを恐れてする勇気がないと思う。夕方になって、私はヒレブラント一家がカンボン・パティックにこの家の半分の大きさをした小さな家を借りたことを知った。ベルンハルト夫人はむしろ独居したいのだが、彼女の母親と妹たちは彼女なしではやって行けない。

ヒューセン

1945年7月1日

私はベエーから、オイジェニー・ヒレブランドが最近私の糸を15ギルダーでなく、20ギルダーで売ったことを偶然聞いた。彼女は私にはウントゥン[利益]が何もないと断言していたのだけど！なぜこの近辺のみんなが嘘をつくのだろうか？私はそれには時々むかついてくる。

ヒューセン

1945年7月3日

Q. 夫人がちょうど出かけていた時に、ファイゼル家の親戚の年老いたカイザー夫人（ディカおばさん）が訪れ、Q. 夫人が売るために彼女から預けられた（すでに2ヶ月以上）大きなフライパンを私に尋ねたが、ディカおばさんは現在までお金ももらってなく、フライパンも見当たらない。ディカおばさんによると、Q. 夫人はこのことに嘘をついているようだ。こんな風に以前にもしたし、そのため、ピートや他の子供もこんなようになったのも不思議でない！…中略…

Q. 夫人はそう簡単にこのことを解決することができないようだ。なぜならば、ディカおばさん、同年配のご婦人、ヴェラZ. が暗くなって訪れたからだ。私は食堂の灯りを付け、私のを消して去った。なぜならば、この事に関係したくないから。事実、未だに欺きやフライパンのことについての話し声が聞こえる！

ヒューセン

1945年7月5日

イエチェは機嫌が悪い。彼女はベエー（ニッポンの愛人であるG. 嬢）の訪問による話し声で目覚めされたのだ。イエチェはその時全然丁重でない次のようなことばを発したのだ。「売春宿のみんなの訪問を受ければ、こんなに騒音がするのも不思議でない」。彼女の腕を両脇に添えてこのことばを！

ヒューセン

1945年7月6日

未だにここでは、「老婦人たち」もお互いにいじめ合っている。Q. 夫人は、玄関のドアを外から開けられないようにドアの上部にかんぬきをいつも差している。このことについてヒレブランドと

老婦人が苦情を言った家主は彼女と話し合った！Q. 夫人は私に謝ったが、私はこれで彼女が正しいと認めることは全くできない。彼女は実際にこそこそとしたやり方でいじめるのだ。何と人間は自らを困難に陥らせるのだろうか。しかし、Q. 夫人は貧乏なことで彼女の側に問題があり、それだけに、より多くの物を所有し、少なくとも非常に貧しくはないヒレブランド夫人に対しては頭を下げたくないのである！また、この老婦人は自分の側の力を示したいのである。ベルンハルト夫人と私は中立の立場を保つように試みた。彼女たちがいつ引越するのかまだわからない。

ヒューセン

1945年7月10日

午後に再びその人の前側の「老人」と「後ろ側」のその人との間で喧嘩が。Q. 夫人は、私たち全員にコラック[ショロ糖とココナッツ入りのフルーツムース]をくれ、ジョニーとマウトにもだが、前側の他の人にはあげなかった。そこでヒレブランド夫人はこれを「魔術」だと断言している！双方の当事者がともにそれを死ぬほど恐れているらしい。もちろん、またチュチ・カクス[便所掃除]のことで不平が続くのだ。Q. 夫人は「彼女たち」を追い出したかった。それは「彼女の名誉」の喪失であった。私は彼女に落ち着き、彼女の名誉を保つよう何もし返すべきでないと指摘して激怒を静めた。

ヒューセン

1945年7月12日

午後に、私がQ. 夫人と子供たちと裏庭で一杯のココヤシ・コピョル[ココナッツフレーク入りの飲料]を楽しんでいると、ヒレブランド夫人が私たちのところへ寄ってきて、カンボン・パティックにある家の件が実行されないと話した。彼女はひどく優しく、控え目に留まる許しを訊ねた。Q. 夫人、ジョニーもリーケも迷惑ならば真実を告げたほうがよい。私はとっさにジョニーは時たま嘘をつくことがあるので、彼がいつも正しいことを認めるべきでないと言ったのだ。…中略…ヴォニーは無作法な振る舞いを謝ったが、このことは何だかとてもおかしいので、私は心の中でクスクスと笑わずにはいられなかった。ヤーピーも同じように感じているらしく、私に向かって笑いを浮かべていた。どのくらいの間、この家での円満さが保たれるのだろうか？

ヒューセン

1945年7月25日

ピートQ. が、イエチエのオバットウ[薬]を私に代わって取りに薬局へ行った。彼は番号札を持って帰り、3ギルダーしたと告げた。偶然、ブンキ・ラーゲフェーンが午後を訪れたので、彼に薬を取りに行かせた。なぜならば、ピートはそのために私の自転車を貸してくれるか頼んだし（あきれたことに彼のはここに置いてあるのに）、私の自転車の前輪に空気をまだ入れてなかったからだ。ブンキ・ラーゲフェーンはすぐにも薬を持ち帰り、2ギルダーしただけだと知らせた！何と卑劣なことを！しかも、彼はその買い物のお駄賃として私から1ギルダーも手に入れたのにだ。あとで私はQ. 夫人から2ギルダー返してもらった。ピートがそれを自分でしたのではなく、ヒーケルトの使い走りの少年がしたからだ。

ヒューセン

1945年7月29日

ピートQ. は、パサール・マラムでの賭け事とそこでの窃盗において自白させるために、数人の男たち（インドネシア人と中国人）との殴打で彼の実力を自慢する以外は何もしない。

ヒューセン

1945年8月8日

Q. 夫人は自分の姉妹にさえもバランの販売でだますのだ。ウィニー（問題の姉）は販売用に4セットのスプーンとフォークを彼女にあげた。彼女はウィニーに、この4セットに対して15ギルダー得たと言ったのにもかかわらず、彼女は3セットで18ギルダー得たのである。要するに、彼女も他人からお金をだまし取るH. 夫人と少しも優れたところがないのだ。

ヒューセン

1945年8月15日

平和が正式に通告された。…中略… ベエーは、私が彼女をすぐにも忘れてしまうのではないかと心配している。彼女は最後の月々に私をとて手助けしてくれたので、それを心配する必要が全くないのである。私は彼女のためにこれからたくさんしてあげられたらと願っている。ベエーの姪ニニも今では私を「おばちゃん」と呼ぶし、彼女にもそう呼ばれることに快く思っている！

印人委員会

バタビア

ハンベル

1943年8月7日

彼らがブレンダ[オランダ人]の封じ込めを完了すると、今度は印人の番になります。ジョクジャ通りとラーン・トリヴェリ沿いの兵舎は竹で封鎖されました。一体そこに何がくるのでしょうか？ダーラーが、「印人の利益のために！」事務局を開設しました。⁴⁰⁰ 彼は、印人全員を強制収容所から出そうとさえします。そして、これが完了すると、当然彼らはヤップに協力して戦わねばならないと言うのです。

ハンベル

1943年9月20日

モハメッドD. が昨日演説しました。彼はプラナカン[印欧人]ではありますが、インドネシア人であると自称する親日派です。彼によると、プラナカンは祖国を持たないのです。彼らは少しブラダの血が混じっている故に、ブラダとして威張る必要はないのです。私たちはインドネシア[インドネシア人]として協力などしなければならぬと言われていました。現在、みんなが緊張しています。インドネシア人側に立つB. さえ、それも彼の娘の義父であるのにモハメッドD. を嫌っています。今日、プラナカンのリーダーは回答しなければなりません。ここでは大いにプラナカンに関係しています。彼らが私たちをインドネシア人として扱いたいならば、まず私たちに登録料を返還する用意があり、私たちは戦争税も支払う必要もなくなるのです。

ハンベル

1944年9月14日

16歳から23歳までのプラナカンの若者たちが召集されます。彼らはともに戦わなければならないのです。ある者にはこれを、また、他の者には違うことを要求されます。私たちは弱虫、水溜りではえざるカエルなどと呼ばれています。初めの日はそれをマレー語で言われました。何人かは

⁴⁰⁰ Kantor Oeroesan Peranakan (KOP) 「混血人のための事務局」。「序」参照。

そのことを理解できなかつたと言いました。だから私たちは愚か者なのです。何人かの少年たちは、何を尋ねられたのか全然理解せずに全ての質問に「はい」と答え、他の者は「いいえ」と言ったのです。彼らは、「いいえと言ったら君の家族が見舞われるべきことを熟慮せよ」と告げられたのです。一方で、「ニッポンには協力したいが、インドネシア人にはしたくない！」と言った者がいたのです。それでその者たちはあごを打たれました。彼ら全員が「いいえ」と言ったならば、全員が強制収容されてしまうでしょう。現在、彼らは兵隊さんごっこをやらされ、当然、蚊で死に至らされるようなどこかの地へ送られるのです。

ハンペル

1944年9月16日

プラナカンの召集はより好調になりました。彼らは今オランダ語を話し、ののしりませんでした。少年たちは兵士になる必要はありません。なぜならばニッポンは彼らを信用してないからです。ニッポンはインドネシア人が現在何を狙いとしているのかあまり分かっていないようです。彼らはインドネシア人のラパット・ブサール[大集会]へ誰が出席したかと尋ねます。ある少年は、「僕たちはインドネシア人でなく、プラナカンです！」と言いました。アッ、その時大変なことが待ち構えていました。あとに来た少年たちは何を尋ねられるかを知っていて、すでに答えを用意していたのです。

ハンペル

1944年9月19日

昨日、またプラナカンの青少年たちが出頭させられました。それはまるで大虐殺のような結果になりました。尋問した紳士たちは親ニッポン派の釈放されたプラナカンの兵士だったのです。P. ダーラーを加えた7人の紳士は武装した護衛なしにはもう外出する勇気がありません。彼らは至るところでやじられます。「親ニッポン派」の若者のうち多くが、今は「反ニッポン派」になりました。その場にいたニッポンは何もすることができませんでした。若者たちのひとりがもし我々の立場にあつたらどうするかと彼に尋ねました。自分たちの父親や兄弟が収容所に捕らえられているのに親ニッポン派でいられるのでしょうか？彼はその若者が正しいことを認めました。彼らは全員刑務所入りのために衣類を入れた袋を既に持参していました。今度、9月23日土曜日に彼らはまた出頭しなければなりません。

母親のひとは当然のこのようにプラナカンの反逆者を平手打ちしました。若者たちはふざけ気分でした。ひとりの反逆者がテーブルの上に上がり、「静粛に。君たちはまるでアヒルのようなだ！」と叫んだら、とっさに全員が「ガー・ガー・ガー」と鳴き声を発しました。

それに対して彼らは全く悪ふざけをしたのです。「何の病気にかかっているか？」との質問に、彼らは「婦人病」と言ったのです。「どうしてそれにかかったのか？」との質問には、「ああ、近頃の女性はですね。実は、ニッポンに病気を移されるのですよ！」と彼らは答えたのです。これが私たちの若者なのです。ひどいものです。G. は入ってくると、彼らに質問される前に自から、「アンチ、アンチ。僕はアンチだ！情勢について僕が思うこと？くそ食らえ！」と言って、からかったのです。何人かは全く度が過ぎました。仕事についての質問には、「ああ、チャトゥット（闇取引）とでも記入してくださいよ」と。彼らは強制収容にと脅かされると、「すごい。おやじと兄貴のところに行こうぜ」と金切り声で叫びました。何人かは質問に対して、「ああ、それはうちに帰って聞いてみる。僕はまだまだ成年でないから」と答えたのです。祖国インドネシアのために協力する意志があるかとの質問には、「僕の祖国オランダと植民地のためには常に戦うことを望んでいるが、インドネシアのためにはしない！」

ハンペル

1944年9月27日

今朝、とても早いうちに「アンチ」インドネシアとニッポンであるプラナカンの若者たちが寝ているところを逮捕、連行され、家宅捜査が行われました。見つかってしまったものは、武器、銃弾、禁じられている本や雑誌、オランダ国旗。そこでインドネシアの旗は十分にあります。彼らは青色の部分の切り落とすだけでいいのです。暫定的に彼らは警察管区に収容されています。そのあとどこへ連れて行かれるのか私たちにはわかりません。彼らは確かに度が過ぎたようです。国家への反逆者ダーラーには葬儀用の花輪が自宅に配達されました。ニッポンは、「私は、自分の意見を正直に発言する勇気があるプラナカンがいることをとてもうれしく思う！」と言いました。彼らはアンチであったひとりの若者を片隅に3時間立たせたあと、その若者に未だにアンチであるか問いました。彼は、「今、僕はそれ以上だ」と言ったのです。

ハンペル

1944年9月28日

やれやれ、その家宅捜査はものすごかったです。彼らは全部揃った兵器を見つけたのです。銃や弾丸もです。ある知人は刑務所入りが適用される息子を3人持っています。彼らはそのうちのひとりだけを連行し、家をごちゃごちゃにし、もちろんしてはならないことですが、お金も持って行ってしまいました。何か言おうものなら、彼らは残りの息子たちも連行してしまいます。毎回息子をひとり連行し、家をごちゃごちゃにされてはたまりません。家宅捜査の際に、ひとりの警官がいて、その男は三人兄弟の妹に対して、「彼らがこれからどこへ行かされるかを知りたいの

なら、お前は今日、俺と外出するのだ！」と言ったのです。もし、そのような者と…ないならば！…中略… 彼らは若者たちの連行を全く狂ったように進めています。私が思うところ、彼らは悪質な「アンチたち」を捕らえたようです。R. J. は召集された第二グループに属しています。しかし、彼らは変な質問は何もしませんでした。

ハンペル

1944年10月2日

連行された若者たちが釈放されました。ニッポンは大勢を現在統制下に置いています。その目的は彼らを職に就けるためでした。なぜならば、とてもたくさんの「ニッポン・エコノミスト」⁴⁰¹は戦わなければならない、インドネシア人はその仕事ができないので、プラナカンが代わりに受け継がなくてはならないのです。

ハンペル

1944年10月7日

彼らは長時間にわたる会議をニッポンと開きました。ニッポンは二人の若い女性、つまりひとりを前に、他のひとりを後ろに乗せた一台のすばらしい車でやって来ました。ムルデカ（自由）とは、彼らがこの国をインドネシア人だけに与えたことでなく、アラブ人、中国人、プラナカンにも与えたことなのです。⁴⁰² 国家への反逆者ダーラーによると、私たちはもうプラナカンでなく、インド-インドネシア人なのです。彼らはいろいろと無駄なことを何時間も話し合ったのです。若者たちの逮捕は間違いによるとニッポンは言っています。私たちが十分に待っていれば、彼らは、強制収容されているプラナカンも同じく釈放されるのです。ニッポンは全てのことに對して時間を要求します。ニッポンに自転車の新しいタイヤを要求した人がいます。手に入れることはできましょう。でもいつ？

ハンペル

1944年12月15日

12月15日には、収容所から男子を出所させる願いを再び申請することができました。そのためには、国家への反逆者ダーラーのもとへ行かねばなりません。M. 夫人がそこへ出向いたら、「私た

⁴⁰¹ 脚注 35参照。

⁴⁰² 1944年9月7日に行われた小磯首相の発表を意味する。脚注 225参照。

ちは何も知りません。彼らを釈放することは私たちの責任ではなく、ニッポン政府にあるのです！」と聞かされました。

バタビア

ポール

1944年2月18日

この2枚の紙切れは、私たちのところにまだ置いてあったがらくたラジオを回収させるために必要であった。ママはそれを持って行かせた方がもっと安全であると思ったのだ。それでその先のことを管理するためにペルツァーおじさんが起用されて実行された。この2枚の紙切れは事実上同じである。違いはその一方にはオットー・ペルツァーのサインがされていること。⁴⁰³

[貼付：片方の書中にはサインがされている以外同一の手紙2通]

Djakarta, 18 Hachigatsu 2603

1943年8月18日 於ジャカルタ

Keterangan

Saja, jang bertanda tangan dibawah ini menerangkan saja soedah kabarkan kepada

Kempeitai (toewan Morimoto),

Njonja Pool maoe serahkan barang-barang

radio jang tida bergoena lagi kepada Kempeitai. 本状をもってご通知いたします。

Toewan Morimoto kasih tahoe sama saja,

dia sendiri nanti datang di roemah njonja Pool 同ラジオを引き取りにうかがう予定ですので

boewat ambil itoe baran.

0. Peltzer.

通告書

私、署名者は、

ポール夫人は既に使用されていないラジオを

ケンペイタイへ引き渡す用意のある旨、

ケンペイタイ（モリモト氏）に告げましたことを

尚、モリモト氏自身がポール夫人の自宅へ直接

同ラジオを引き取りにうかがう予定ですので

宜しく願ひいたします。

0. ペルツァー

⁴⁰³ 「序」参照。

ポール

1944年3月16日

ガービーが輝くばかりの顔つきで私たちの部屋へそっと入って来た時、ママと私は並んで横になり、心地よくうたた寝していた。彼女はアデッキからラジオを持って出て来たパパを見たのだった。彼女は逮捕されたばかりのある少年を最後に「元気づけに」そこに偶然いた。デンクラールがこれに気づき、PID[政治情報局]とペルツァーとPOPと他にも何だか私は知らないけれども、すごいプルカラ[問題]が生じたのだ。ペルツァーは激怒し、誠実だが、確かに向こう見ずなPOPの従業員であったガービーを解雇した。特に私たちの男子に対して行った彼女の善意に感謝して、聖ニコラス祭のためにすばらしく描かれているビンとジョージン・デ・フリースが作ったこのすてきな詩をその上に付けて彼女に贈るために私たちはお金を集めた。

[貼付：詩]

昔、ひとりの女性がいました。彼女はプラナカンでした。
故に、神聖ニッポンの完全なるムス[敵]ではありませんでした。
彼女はそのため自由の身にあり、心から喜びと温もりが満ちていました。
彼女はテンノー[天皇]の腕の中で安心と幸せを感じていました。

でも、この女性は不安となり、温もりの場を去りました。
彼女はアデッキの男子たちを助けることに身を捧げました。
また、彼女はこのことを徹底的に行い、少しも困難と思いませんでした。
彼女はカナン[右]からキリ[左]へと動き回りましたが、少しも災難を恐れませんでした。

しかし、彼女は忘れていたことがひとつありました。プラナカンを保護する汝よ
テンノー・ヘイカの腕は、バービ・ブタ[盲目の豚]⁴⁰⁴ でもあることを。
汝が多くを語り過ぎたと彼に知られると
ためらうことなく、汝の口を彼の小指でふさがれてしまったのです。

しかし、テンノーは親切であり、情け深いのです。
彼はそのためこのプレゼントを贈り、彼の名前で感謝の気持ちを伝えるよう
早々にズワルテピートと聖ニコラスへ依頼したのです。

⁴⁰⁴ 「Babi boeta」（盲目の豚）は、おそらく盲目の豚のごとく行為する意味である「membabi boeta」の派生語とおもわれる。

ポール

1944年10月11日

「親」と「アンチ」

これからドラマ、その日に一番話題となったドラマについて話すわね！このばかげた新聞記事がもとで、何たるスサー[トラブル]、何たる騒々しさ、何たる悲しみと不安が。

[貼付：新聞の切り抜き]

Pendaftaran pemoeda peranakan
Orang Peranakan (Indo) laki-laki di Djakarta jang soedah

印欧人青少年の登録

tjoekoep 16 tahoen sampai tjoekoep 23 haroes datang

ジャカルタ在住の16歳から
23歳までの

kepada KANTOR OEROESAN PERANAKAN, Nishiki Doori
(Rijswijk) 3, pada hari dan djam jang terseboet
dibawah ini:

印欧人青少年は、以下の日時に
ニシキ・ドーリ（ライ
スワイク）3番地所在「混血
人のための事務局（KOP）」
まで出頭のこと。

Raboe 13 september:

9月13日水曜日:

poekoel 9.30 Jang namanja moelai dengan hoeroef
A sampai D.

9時半 名前がAからD
で始まる者

poekoel 14. - Jang namanja moelai dengan
hoeroef E sampai H.

14時 名前がEからHで
始まる者

Kamis 14 september:

9月14日木曜日

poekoel 9. - Jang namanja moelai dengan
hoeroef I sampai M.

9時 名前がIからMで始まる
者

poekoel 14. - Jang namanja moelai dengan hoeroef N tot R.

14時 名前がNからRで
始まる者

Djoem' at 15 september:

9月15日金曜日

poekoel 9. - Jang namanja moelai dengan hoeroef S sampai U.

9時 名前がSからUで
始まる者

poekoel 14. - Jang namanja moelai dengan hoeroef V
sampai Z.

14時 名前がVからZで
始まる者

つまり、16歳から23歳の青少年は全員プラナカン事務局で登録しなければならなかった。初日のあと、つまり9月13日には、すでに町中にもものすごい噂が広がった。彼らに質問されたことをご存知？親日派それとも反日派かと尋ねられたのだ。あるいは「枢軸」⁴⁰⁵に共感するか？ニッポンを敵視しているか？依然、自らを欧州人と見ているか？などなど。このひどい質問に加えて、彼らは仕事を望むかと尋ねられた。もちろん全員がそうありたかった。上記の質問に対して否定的な答えをすることは「アンチ」を意味した。そして、働くが「アンチ」であることは通用しなかった！最も恥ずべきは、16歳になったばかりの少年たちに質問したことだ。そのひとりとは即座に、「あなたがお尋ねの件は決議権のない未成年に許されていますか？」と述べた。それでね。「アンチ」の者は再びスピーチを受けるために、9月18日月曜日にまた出頭しなければならなかった。でも、若者たちの雰囲気は非常に緊張していた。一方が他方をけしかけ、「親日派」に同調した若者たちが路上で襲撃された。月曜日になって、兄エーリックとフレーはママとレネーに付き添われて早々とプラナカン事務局へ行った。

様々な少年たちには、「働きたいか？」とだけ質問されたことについて少し話すわね。その様な少年の返事が確認されるとその者の名前のあとに×印か「親」と記されたのだ。この「親」と書き加えられた意味をあとで知った少年たちはほとんど全員が変更させに再び出向いた。「僕はきのう間違えましたので、変更していただけますか？僕はアンチです！」

[貼付：新聞の切り抜き]

PENDAFTARAN PEMOEDA PERANAKAN
Orang Peranakan (Indo) di Djakarta jang beroemoer
16-23 tahoen, jang beloem dapat didaftarkan pada hari
jang ditentoekan, masih ada kesempatan itoe pada hari
Sabtoe 16 hari boelan ini, moelai poekoel 9.30 pagi
di KANTOR OEROESAN PERANAKAN, Nishiki
Doori (Rijswijk) 3.

印欧人青少年の登録
ジャカルタ在住の16歳から
23歳までの印欧人
青少年のうち依然規定の日
時に登録していない者には
今月16日土曜日の午前9時半
から
ニシキ・ドーリ（ライスワイ
ク）3番地所在
「混血人のための事務局」に
て特別に登録を受け付ける。

⁴⁰⁵ ドイツナチス党とイタリアファシスト党と締結され、のちに日本が加わったいわゆる「ローマ＝ベルリン枢軸」のこと。

9月16日土曜日は、また病人、遅滞者、「間違えた者」のための登録日でもあった。雰囲気は金曜日、そのあとの最終日である土曜日は当然、「アンチ」以上であった。若者の中には、何かを質問される前に、「全部をアンチとしておいてください」と言う者がいた。同じ様な質問、それも「戦争捕虜」によって尋ねられる大変不名誉な質問のあとなのだから理解もできる。若者のひとりがその様な男に向かって言ったのである。「あなたがここにおられるということは、あなたのメンタリティーに有利に働かない」。それはNSB戦争捕虜であったのかも!!

ともかくも、9月18日月曜日のことについて。ライスワイクは母親や姉たちなどと一緒の少年たちで満杯だった。雰囲気は非常に悪かった。荷車を押しながら通りかかった1組の若者たちは、「ダーラーはどこにいる？エックホウト⁴⁰⁶はどこだ？出て来い弱虫め」などと言っていた。同時に、彼らはその様な悪いことをベチャ[輪タク]に乗っている何の疑いもないドイツ野郎へ向かって叫ぶと、その人は誰が一体自分を侮辱するのかと真っ赤になって怒り、泡を吹いて振りかえって見るのだ!! 当然笑いと絶叫が響き渡る。ペルツァーがやって来たときも、それ相応の叫び声が彼に向かってなされた。演説が始まると、何の手もつけようがなかった。繰り返し演説が中断されてしまった。

「我々はプラナカンに好意を持っている！」

「なぜ君たちは我々の男子たちを連行し、我々を家から追い出し、我々を解雇したのか？合法的な民間人捕虜を作ることを、あとどれくらいやるつもりだ?!」

要するに、ひどい騒動だった。しかし、この善意の演説は何も達成されなかった。興奮して彼らは家に戻り、もちろんたくさん話を持ち帰った。ああ、そう、ひとりの青年が壇上に飛び上がり、「諸君、我々のインドネシア人の血を捨てさせてはならないし、ことに我々のブランドの血はだ！」と叫んだ。君はどう思う？1週間後の水曜日に町中のあちらこちらで若者が逮捕され連行された。噂では合計46人から80人くらいだ。現在まで彼らはまだ釈放されていない。彼らは町のいろいろな管区（部署）別に分けられた。そしてそこに入れられているままなのだ。一体何のため、なぜ？私にはわからないわ。

ポール

1944年11月18日

またもあのいざこざが

まだ満足しなかったようで、エーリックは他の大勢とともに再び出頭の呼び出しをもらった。再びいつものお決まりのことで、「親」と「アンチ」に関する同じたわごとだった。バリサン[軍

⁴⁰⁶ P.F.ダーラー及びP.H.ファン・デン・エックホウト。「序」参照。

務]に就きたいか?いいえ!日本語を習い、日本の風俗習慣を知りたいか?いいえ!じゃあ、君はアンチか?変わりありません!煩わされ、いじめられ、からかわられ、いさこごと面倒が。一体彼らは私たちに何を望んでいるのか?[貼付:エーリック・ポール宛のインドネシア語で書かれた呼び出し状]

ライスワイク3番地プラナカン事務局⁴⁰⁷での対話。歴史的

登場人物:P.H. ファン・デン・エックホウトと私の長靴と同じように真っ黒なプラナカン

エ: 君は働いていないんだね?バリサン[軍務]に就きたいかね?

プ: もちろんです。喜んで!

エ: 立派な若者だ。うれしく思う。君はニッポンに協力したいのだね?

プ: ああ、そうですよ。何でもやりますよ。

エ: よろしい。君はしっかり者だな。ふーん、君は枢軸に共感しているか?

プ: 僕のベ・ス・トな友人ですよ。非常に素晴らしい人たちです。

エ: それでは全部の項目に君が「親」であると記すことにするが?

プ: どうぞおかまえなく。全部に「親」としておいてくださいよ。

エ: 君は正しく勇気のあるプラナカンだ。君は若者の模範に値するが、もうひとつ尋ねたいことがある。要するに君に流れる血の最後の一滴までダイ・ニッポン[大日本]のために戦うつもりなのだね?(大声で)

プ: 血の一滴?違いますよ。骨肉ともですよ。(輝くばかりに)

エ: 君は立派な男だよ。

エックホウトは彼の肩を叩き、優しく握手し、とても好意的に言った。「じゃあ、あとで知らせるからね」。プラナカンはその場を去ったが、ドアの横で振り返り、「すみませんが、ひとつ質問してもいいですか?」

エ: もちろんだよ。何だね?

プ: ひとつ間違えました。「親」を「アンチ」と書き換えていただけますか?

結局、その若者は騒々しく事務局を追い出された。ファン・デン・エックホウトが腹立たしくなったことには、外で彼の話が他の者たちに伝えられると、大きな歓声があがったのだ。この話は本当かどうか私は知らないけれど。私が嘘をつくとしたら、委託されて嘘をつく。私はこの話で一番面白いことは、当のプラナカンの若者が本当に真っ黒だったことにあると思う。

⁴⁰⁷ KOP (Kantor Oeroesan Peranakan 「混血人のための事務局」)のこと。

スマラン

ヒューセン

1945年5月13日

4月12日土曜日には、印人のリーダーがスマランを訪れ、新しいインドネシア政府(!)においては印人とインドネシア人が対等化されると発表された！私思うにこれは良くない！このすばらしきことは、5月19日に有効となるらしい！

市外との接触 / 戦争捕虜・民間人被抑留者との接触

バタビア

ハンベル

1942年3月25日

それは、あなたも体験したらわかったと思うけど酷かったのですよ。捕虜にされたグロドックの市警備隊員と警察官がストリウスウェイクへ移されました。彼らは歩かされ、スダ通り沿いにやって来たのです。その妻たちも全員そばと一緒に歩き、果物や衣類を夫たちに投げかけました。彼らは大分汚れていましたが、元気そうで、全員ヒゲをはやしていました。でも、それは泣きたいくらい酷かったのです。B.氏は列を離れて歩いていました。彼の子供たちが父親に近寄ったら、見張りに追い払われてしまいました。…中略… このことが過ぎ去ったあと、私はもうぐったりとしてしまいました。まったく泣くだけ！この移動の知らせが何と早く町中に伝わったことでしょう。道路脇ではどこも涙する女性を目にしました。

ハンベル

1942年3月29日

女性たちがストリウスウェイクにいる夫たちに一体いつ洗濯した衣服を持っていかれるかご存知？朝6時から6時15分まで。B.夫人はまだ真っ暗い5時半に発ちましたが、夜間外出禁止令は6時になって終了したのです。ドアの前は人でいっぱい、一日に20個の小包だけ受け付けられるのです。それに外れた女性は翌日同じことを繰り返します。B.夫人は彼女の小包が受け付けられるまで2日続けて通いました。

ハンベル

1942年4月4日

中央市民医療施設（CBZ）に捕らえられているBe.に会いに行きました。⁴⁰⁸そこへはニッポン時間の10時から午後1時、つまりジャワ時間では午前8時半から11時半までに訪れることを許されて

⁴⁰⁸ この日記の続きの部分から推測して、Be.氏は石油会社に勤めていたとおもわれる。日本人は石油の採掘をできるだけ早急に再開させようとし、鉱油施設に従事していた全員の呼び出しをラジオを通して行った。その従業員とともに、中には蘭印軍の戦争捕虜もいた模様で、彼らは最初バタビア（CBZ）に集結させら

います。私は9時半に着きました。そこにはもうたくさんの方がいました。正門の前にはヤッペンと日本語を話すひとりの原住民がいました。私たちは10時まで待たされ、そして、自分の名前と面会を希望する人を書き込まなければなりませんでした。一枚の紙に15人の名前が記されました。それが全部書き込まれると、警官に大部屋へ連れて行かれました。しばらく待ったあとに、彼らが姿を現しました。女性たちが首を長くして立つ様子を想像できますか。勝手に近寄ることができたのです。Be. が来た時、私は握手しましたが、彼は私の頬にキスしました。彼は訪問を受けたことにとっても喜んでいたので。大部屋には160人が収容されていて、面会に来た人がいない者は、大部屋を離れることができませんでした。

彼はそこに4月1日からいます。他に着るものがない者はユニホームをつけて過ごしています。私は彼に浴用石けん、洗濯石けん、歯ブラシ、練り歯磨、ハンカチ、タオル、タルカムパウダー、クッキーを持って行きました。彼らは4月1日、ジャワ時間の午後6時にバンドンから現地に到着しました。そして、夜中になってCBZへ移されたのです。残念ですが、私はあなたの衣服を彼にあげることができません。なぜなら、彼にはだぶだぶだからです。明日の復活祭には、いくつかのイースターエッグとチョコレートを彼にあげます。彼はカチャン[ピーナッツ]とタバコを欲しがりました。カチャンはもう手に入らず、タバコを求めて私は町中を走り回りました。でも、どこにもありませんでした。妻たちが自分の夫のもとへ飛ぶようにして駆け寄った様子を想像できますか。彼らがいつ自由の身になれるのかまだわかりません。NKPMとBPM⁴⁰⁹ の全員がCBZに収容されています。何人かは自分の任地へ帰されました。彼らの給料と以前の職種が記録されました。…中略… 女性たちに対しては、あまり話してはならないと言われていました。なぜならば、釈放されたNSB党員がこっそりと中に入れられたからです。

バタビアを知っていて、面会を受けられない収容中の人は、平服で町へ買物に行かされます。しかし、彼らはまとまっていなければならないので、名前がリストに記されています。さもなければ、ちょっと知人を訪問することもできるから。もし、彼らが釈放されたら、Be. は、マドゥラ通りに必要なだけ泊まってもいいのです。私はそこにニッポン時間の1時までいませんでした。せいぜい1時間ほどでした。彼に合うかどうかわからないけれど、明日は私のブラウスを持っていきます。…中略… 私たちは全員ひとつの部屋に入れられました。だから自分の妻に優しいことばなど言えないのです。CBZの職員は親日派です。誰かが職員に手紙を届けるよう頼んだら、続いてこのことが通報されてしまいました。

れた。1942年4月、彼らのうちのおよそ300人がパレンバン近郊の採掘現場及び精油所へ移送された。(De Jong 11b eerste helft, 290)

⁴⁰⁹ Nederlandse Koloniale Petroleum Maatschappij N.V. 及びBataafsche Petroleum Maatschappij N.V.。

ハンペル

1942年4月5日

またBe.を訪ねました。…中略… 彼らは明後日パレンバンへ向けて出発します。妻たちは、全てが整った時点で、訪ねることを許されています。バンドンにいる夫に会いに、はるばるスラバヤからやってきた女性がいました。彼女は彼がここにいると聞き、彼は彼女がバンドンにいると聞いたからです。そんな訳で、彼はバンドンへ行き、彼女はバタビアへ向かってしまったのです。彼女は真っ青になってしまったのですよ。でも、他のNKPMの社員が彼女を手伝いました。明日、彼らは一日だけ自由の身にされます。彼らには50ギルダーが与えられ、衣服を買ってここで全部使い果たさなければなりません。

ハンペル

1942年4月15日

野営地での面会はもうできません。というのは、非常に多数の男たちが女性の服装をして逃げたからです。今後、ストリウスウェイクにいる市警備隊員も家から食事をもらうことができません。何人かの女性が中に手紙を隠し入れるからです。衣類についてはすでに中止されました。

ハンペル

1942年4月30日

結局、市警備隊員はストリウスウェイクに閉じ込められてしまっているので、女性たちは食事を持って行くことを許されたのでしょうか？でも、かなりの道のりです。それで、彼女たちは「ストリウスウェイク・エクスプレス」を創設しました。これは自転車の後ろに小さなトレーラーを付けて走る少年たちです。少年たちは食べ物の入ったランタン[鍋]を受け取りに行き、空のを持ち帰ります。このことに鍋1個につき1週間に25セント必要で、荷台にランタンが10個入ります。

ハンペル

1942年5月15日

ママはI. d. V. からマレー語で書いたハガキをもらいました。彼女はオランダ語で「tante (叔母)」

と書きましたが、「tante」のところはどこも下に赤い線が引かれていました。⁴¹⁰

ハンペル

1942年5月18日

まったく幼稚です。W.が出したハガキが戻ってきました。「breien (編物)」と「stomme idiot (ばか野郎)」と書いてあっただけです。でも、マレー語で何というのかしら？

ハンペル

1942年5月29日

オーストラリア人⁴¹¹のために甘い物を受け取りに家々を訪れている人たちがいます。上手に日本語を話せるある婦人は、戦争捕虜に何か届ける許しを得たのです。この場合は、ここに家族がいない捕虜のために送付する特別の贈り物です。ここに家族がいる者は、みんな歯医者へ行きます。もちろん、護衛つきですが。これは民間人捕虜です。歯医者のところまでこっそりと家族宛にハガキを書き、女性たちは歯医者宛に手紙を送ります。手助けする親切な人もいるものです。

ハンペル

1942年6月26日

S.氏はストリウスウェイクから出されました。人々はそこでは白いご飯と毎回違うサユール[野菜料理]を食べました。妻たちが届けたチョコレートやタバコを夫たちはひとつも受け取りませんでした。でも、彼らは看守から1個25セントで買ったのです。それを開けると手紙が中に入っていたそうです。しかし、そこには呼名だけが書いてあったので、誰に宛てたものかわかりませんでした。また、以前は届けることが許されていたランタン[鍋]に入った食べ物も彼らは探ぐったようですが、食べ物はそのままでいじりませんでした。つまり、ご飯の下に手紙を隠し入れた人の夫たちはそれを受け取ることができたのです。…中略…

⁴¹⁰ 欧州人はマレー語のみで記したハガキを出すことを許された。（「日本人による措置と規定」ハンペルの日記 1942年4月30日参照）

⁴¹¹ ここでいうオーストラリア人戦争捕虜の収容場所ははっきりわかっていない。おそらく、数千人の連合軍捕虜がいたバタビアの元蘭印軍基地大駐屯場第10大隊に収容されていた可能性がある。しかしながら、タンジョンプリオクの港湾労働者用の元野営地で、主にオーストラリア人を対象とする労働キャンプがあったカンボン・コジャからの人々であったことも考えられる。（De Vletter 他., 70-71 及び Van Dulm 他., 92-93）

S.氏も当分表に出ることはできません。気の毒です。なぜならば、彼は同じところにいた捕虜たちからその妻宛に手紙をたくさん託されていたからです。そして、私が今歩き回って忙しくしています。…中略… その女性たちを捜し回るのに何と苦勞したことでしょう。彼女たちはほとんどみんな引越してしまいました。スダン通りで私は1軒の家の中へ入りました。「スパダ[人民よ]！」と私は大声で言いました。ジョンゴス[下男]が現われ、私にすぐに去るようにととても恐怖に満ちた目つきで言いました。なぜならば、その家をちょうど今ニッポン人が占拠したからです。そこで、私は大急ぎで去りました。でも、その女性の住所をもらうことができたのです。しかし、ひとりの女性は跡形もなく姿を消してしまいました。知らせをもたらしたことにとても感激した女性もいれば、冷たくあしらう女性たちもいました。そんな女性は夫が捕らえられていることをうれしく思っているのでしょうか。きっと、結婚して大分長いのです。

ハンペル

1942年7月1日

オーストラリア人が大勢外にいました。以前には、彼らから挨拶してくれましたが、今は反対方向に目をそらします。というのは、挨拶を受けた女性は、たちまち彼らの目の前で叩かれてしまし、白人としてそれを見ていられないからです。W.N.がある時彼らから手紙を受け取りましたが、そこには、糖蜜付きのご飯以外何も食べさせてもらえないので、塩が欲しいと書いてありました。そのあと彼女は塩を入れた小包を彼らに送りました。彼女は叩かれ溝に投げられました。しかし、彼女はそれにも我慢してW.がW.であると言いませんでした。彼女は、オーストラリア人は隠れているようにと言いつづけました。その後、彼女はどこかのヤップのところに連れて行かれ、そこで、原住民も好まないような食べ物をその男の人たちにあげるのは恥ずべきことだとヤップたちに言ったのでした。そのことが役に立ったことを願います。いずれにしても、彼女はその時の傷跡を相当からだに残しています。

ハンペル

1942年8月10日

他の場所へ移らなければならない人は、大抵知人からその知人宛の手紙をたくさん持って行きます。そういうのは、マレー語でのハガキにはあまり十分に書くことができないからです。そして、その手紙を町中を回って届ける人が必ずいるものです。その事を実行した15歳の少女がいました。彼女は手紙を持って行きました。これは罪に値しますし、その上彼女は見つかってしまいました。警察のひとり、彼女はまだ若いので釈放するようと言いました。しかし、他のひとは容赦しませんでした。というのは彼女を連行したことでお金がもらえるからです。そんな訳で、彼ら

はこの少女を一日留置しました。ヤップ自らこれをしていることは彼らもわかっているはずなのに。ここに住んでいる家族の手紙を、他の場所に住む家族に持って行く人々もいるのです。

ハンペル

1942年8月25日

今日はまた被抑留者向けの小包の日でした。該当日は5日、15日、25日です。15日の分は全部を彼らは中に通しましたが、今日全部を引き取りに来させました。彼らはまさにいじめにかかったのです。女性たちを一日中立たせたままにしました。初めは午前中でした。そして、突如「何時に戻って来るように」と言うのです。列の最後部に立っていた婦人がいました。彼女は中断された時には、ほとんど彼女の番になっていました。一番目に受け付けてもらえるように、彼女は午後まで待たれば、何と彼らは後ろから始めたのです！

ハンペル

1942年9月12日

ある印人の少年がアデックから出所しました。少年は彼を出させた母親を怒っています。アデックにはオランダ人学校があるのです。ひとりの教師は、書店コルフ&Coから教科書をもらったので、授業を行っています。その意味では少年たちを捕らえることはかなり良いのです。ここでは彼らは乱れていくからです。収容所の少年たちは、「パー」と呼ばれるヤップのもとにいて、その人からヤップ語を学びます。

ハンペル

1942年10月15日

K. 夫人はあるヤップから平手打ちを何回か受けました。彼女はいつもオーストラリア人が働いているところのそばを通ります。彼らに挨拶してはいけないのですが、彼女はそれをしてしまったのです。また、今度もです。監視所の前を通りすぎてから挨拶しました。反対側に監視が立っていたのを知りませんでした。その監視が叫ぶと、木の後ろから大きな石を持った他の監視が現われました。ストップ！当然、彼女はブレーキをかけませんでした。彼女の自転車に向かってその石が投げられました。その間に、オーストラリア人が中へ連れて行かれました。ひとりだけ行きたがらず、酷く殴られました。そのあと彼女の番になりました。なぜ挨拶したのか？彼女は片足を自転車のペダルに置いていました。彼女のすねを蹴りました。彼女は登録証明書を提示しなければ

ばなりませんでした。そうしたらば、パーン・パーン・パーンと始まりました。彼女はヤップをしっかりと見続けました。彼女は乳房を強打されました。彼女は非常に冷静に、「なぜ私を叩くのか？あんたたち男は私たちより強いくせに！」と言いました。彼はまた叩こうとしましたがあきらめました。そのあと彼女は行く許しを受けました。戦争捕虜に出会ったら気を付けなければならないのです。その時、ちょっとした手や指の動きでも、何かサインを送ったのだと彼らは思うのですから。

捕虜となっている自分の夫に会いに下町へ行った女性たちは、そこで捕まってしまう、2列に並ばされ、男たちのすぐそばでお互い同士殴打させられました。見ない方がいいでしょう。夫にとっては全然愉快なことではないのですから。ああ、でも、あなたがそばにいたら、私も多分同じことをしたでしょう。

ハンペル

1942年10月18日

婦人たちは狂いかけています。私たちの若者がみんなタンジョンプリオクへ連れて行かれます。線路に沿っていたるところに女性たちが首を長くして自分の男たちの様子を一目見ようとしています。彼らは日本へ移されると言う人がいる一方、アチェとか、ギスチン⁴¹² へとか、タイへとか言う人もいます。彼らはタイへ行くとヤップから実際に聞いたと言う人さえいました。私は R. S. のところを訪れました。彼女は駅の裏手に住んでいて、線路のそばで立ちます。少年たちは、スプーンや石を包んだ手紙を窓から投げます。家族に宛てた手紙です。でも、そこには侵略前の住所が書いてあるので、さてその人々は今どこに住んでいるのでしょうか？今では誰かに出会うと、「この人を知っている？この人たちに宛てた手紙を電車の窓から拾ったか？」と尋ねるのです。S. 老婦人は、少年たちに近寄りすぎたためヤップに追いかけられました。彼女はそのために14日間も病気でした。

ハンペル

1942年10月20日

私たちの若者たちがどこへ行かされるかまだわかりません。K. のバーのマダムでさえ、彼女のパビリオンで何も聞き出せないのです。現在のところ、酔っぱらっては、口が軽くなるヤップの誰も彼もが黙りこんでいます。彼女のヤップちゃんでも何も言いません。そのバーのマダムは、

⁴¹² 印欧連盟が印欧人に農業を奨励する目的で開設した南スマトラの大農園。

「必要でなければ、もうヤップなんかご免だ。まるでけだものだ！」と言います。彼女はでも随分なすりつけています。彼女の給料は月に15ギルダーです。

ハンペル

1942年11月3日

今日はまた何とかの祝日です。⁴¹³ 祝うヤップの一隊に出くわしました。何と悪臭が！でも、彼らは優しくもありました。女性は男子収容所へ何でも持って行くことを許されたのです。このことは放送されませんでした。突然町はたくさんの小包を抱えて収容所へ駆け足で行く女性でいっぱいでした。かなり大量に中に通されました。何人かの女性は、ケーキ、ローストチキン、卵、そしておいしい物を全部あげたのです。V.H. 夫人は、シロップを1ビン正門に手渡しました。今回は、これら全てを受け取るためにヤップが4人いました。ひとりが何かを通そうともしませんでした。私たちが違う人のところで試すと、そこでは受け取ってくれました。

ハンペル

1942年11月4日

その女性たちを殴らないのでしょうか？アデックやストリウスウェイクなどへ何でも持って行くことが許された昨日の祝日に、彼女たちは砂糖が何かの中に手紙を隠し入れたのです。このことは禁じられています。罰として、もう何も持って行かれません。本当は彼らは、「手紙を隠し入れた女性はみんなその夫が叩かれる」と言わなければなりませんでした。そしたら、彼女たちはそれをやめたでしょう。でも、夫を嫌っていて、いじめるために入れる女性がいたらどうでしょうか？

ハンペル

1942年12月18日

最新のアデック版ジョークを知っていますか？あるご婦人がクリスマスツリーを持って正門に着きました。彼女はこれを夫に渡してと頼みました。何のためかと監視が尋ねました。クリスマスのため。クリスマスが何だか知っているはずなのに。彼女はそれを4ヶ国語で言いましたが、ヤップは全然わかりませんでした。彼女は、これはイエス・キリストのためだと言いました。身

⁴¹³ 明治天皇の誕生日11月3日を祝う「明治節」であった。(Jansen, XLVIII)

振りのようなものをしてながら、彼は名簿を見て言いました。「イエズス・クリストス・チダ・アダ・ディ・シニ。チャリ・サジャ・ディ・シニ。チャリ・サジャ・ディ・ストリウスウェイク・アパ・ディ・ブキドーリ[イエス・キリストはここにはいない。こっちで捜しなさい。ストリウスウェイクかブキドーリで捜しなさい]」。

ハンペル

1942年12月27日

今日、T. W. 夫人は、生まれたばかりの赤ちゃんをアデックにいる彼女の夫に見せることを許されました。捕らわれている男子たちの面倒をよく見ているひとりの婦人[W. 夫人]がいて、彼女が仲介者の役目を果たしています。しかし、彼女はいつもそばにいるようにとヤップから言われています。彼女たちは部屋に通されました。夫が一方の隅に、妻が反対側の隅に座りました。彼はこの生まれたばかりの娘をあやすだけで、妻とは話しをすることは許されませんでした。でも彼の横に座っていたW. 夫人からは、彼の妻が夫人に言ったことが全て伝えられました。30分後に彼女たちは去らなければなりませんでした。幸いにも、パパは娘をママに渡すことをヤップから許されました。

T. W. 夫人は彼女の夫をCBZで週に3回会います。彼は目の治療中とかで来院します。このようなことをたくさんの夫婦がしています。夫が何かの病気にかかります。そのためにCBZへ行かされ、そこで妻に会うのです。ゼスパイパー⁴¹⁴ 護衛車が来る頃は、女性たちが待ち構えています。面会のために偶然病院に来た女性がいました。彼女がゼスパイパーから降りる者を目にしたらば、実際に治療のために訪れた彼女の夫だったのです。ふたりはとっさに抱き合いました。幸いにも、そばにいたのは親切なヤップでした。そうでなければ、彼女たちは殴られたはずでした。

B. 氏は他の1組の男性と一緒にどこかでタイプを打つ仕事をしていますが、彼らはゼスパイパーでそこへ運ばれます。B. 夫人と他の夫人たちは必ずその頃、その建物のそばに行きます。見張りが注意していない時に、夫は手紙を落とすことがあります。

ハンペル

1942年12月29日

昨日の午後は、アデックの男子からの手紙を妻たちに配ることに専心してました。私にとっては簡単なのです。何かを販売する要領でやりますから。

⁴¹⁴ 屋根の上の昔からの空气管のことで、護衛車を意味する隠語。

ハンペル

1943年1月12日

フレー！妻たちは戦争捕虜に便りすることが許されました。しかし、彼女たちはまず夫からのハガキを待たなければなりません。みんな収容所にいるし、それもどこのかはわからないので、彼女たちは自分の住所を赤十字に届け出なければなりません。混雑しています。夫が外国に逃亡してまだ生存中の場合は残った者も一緒に行かれますが、あまりにも遠すぎます。夫が生存していることがわかれば？英語、マレー語、ヤップ語のいずれかで便りできます。英語が一番上になっているので何とかかかります。でも、その3カ国語のいずれも理解できない場合には、どうしたらいいのでしょうか？

ハンペル

1943年1月16日

婦女子収容所は1月20日水曜日に封鎖されます。どのようにして小包の日に夫へ届けたいのでしょうか？事務所で働いている男性は営業時間の1時間前に出て、営業時間終了後の1時間以内に戻らなければなりません。このこともあとどれくらい許されるのでしょうか？当然、みんなが仕事をしようとします。…中略… 収容所の封鎖は痛手です。私たちはもう何も売ることができないし、私は戦時の男たち⁴¹⁵ のために何も買うことができないのです。

今度は何が起こったのでしょうか？J.R. は、私が尾行されていると言いました。私が表に出ると、すぐにも原住民が私のあとを追います。J.R. も警戒されています。というのは、そこには男子収容所の手紙を配り、手渡すひとりの少年がたびたび来るからです。きっと彼らは私を尾行するのはちょっと厄介でしょう。私がJ.R. のところから出たあと、サレンバ近くでクラマツト婦女子収容所へ方向を変え、ラーデン・サレー近くに出て進むのです。私のあとを追いついて、きっと彼らは真っ赤なお尻をさせていることでしょう。私はもう何時間も自転車を走らせていたのですから。…中略…

昨日、アデッキで小包の日について劇的な場面が展開されました。L. 夫人は彼女の夫が死にかけていることを知りました。彼女はヤップ同伴で彼に面会することを許されました。昨日、彼女が小包を手渡した時に、彼が亡くなったことを聞かされました。彼女は大変激しくむせび泣いたので、そのヤップが彼女を慰めるほどでした。

⁴¹⁵ ハンペル夫人が「保護」し、定期的に食糧、衣料、薬品を手配していたアデッキの三人の捕虜。

ハンペル

1943年4月9日

ストリウスウェイクとブキドーリでは早くも復活祭においしいものを得ることを許されていて、内訳は、角砂糖、砂糖菓子、テンテン・カチャン[ピーナツクッキー]、板チョコ、乾燥菓子、グラリ[砂糖で固めたお菓子]、グラ・ジャワ[シュロ糖]、カチャン・ゴレン[炒ったピーナツ]。

ハンペル

1943年4月11日

私には新しい名前があります。「第5管区の甘ったれ」。そう、そこで私が監禁されたことで、⁴¹⁶クラマットの正門で監視をしている警察の連中をたくさん知りました。彼らから私はカワット[鉄条網]のそばで他の女性たちよりも長く話すことを許されています。でも、嫌な奴もいて、私をものすごい勢いで追いやるのですよ。しかし、数人のやきもち焼きのおばさん連中が長く話しをする私を見たので、また愚痴をこぼしているのです。

ハンペル

1943年4月23日

戦時の男たち用の甘い物を入れた私のケースが出来あがりました。リストにあったものは、角砂糖以外は手配しました。どこにもないのです。ヤップは、戦争捕虜のために多すぎるほどの甘い物が届いたことに腹を立てています。「甘い物にこんなにたくさん金を使えるのに、自分たちの税金は払わない!」と。ピアノが1台要求されました。そしたら、彼らは10台も手に入れたのです。ごく近いうちにヤップが負けることを望みたくもなります。こんな状態が続いてはとうとうならないからです。

ハンペル

1943年5月5日

彼らはもう婦女子収容所の正門前で私の姿を見ることはないのです。考えてもごらんください。私がお米、バター等々を中へ持ち入れたと警官のひとりに言うきっかけとなったらばどうでしょう

⁴¹⁶ 「逮捕と家宅捜査」ハンペルの日記 1942年8月3日、7日参照。

か。こういうものを彼女たちは居住地内のトコで買わなければならない、トコ以外は誰も収容所の住人に供給してはならないのです。

ハンペル

1943年6月1日

今日私たちはO. A. から4月1日付のハガキを受け取りました。つまり、大分長くかかったのです。彼はヌガウイの第3班31号室に収容されています。⁴¹⁷ 「班」についてはまだ現地語がついてませんが、「部屋」についてはあります。もちろん彼は元気です。そう書くより仕方がないのでしょうから。

ハンペル

1943年6月16日

V. R. 夫人はご主人からハガキをもらいました。夫はまだ生存中だと彼女としては実際には確信したいのでしょうか。でも違うのです。彼女は彼の書体を虫眼鏡で調べました。そして、彼女によると彼のものではないのです。

ハンペル

1943年6月22日

驚き。パレンバンから義理の兄R. のオランダ語で書いたハガキを受け取りました。「Servie des Prisonniers de Guerre」と記されています。彼はこれを3月14日に書き、私が受け取ったのは6月21日です。要するに、3カ月経っているだけです。彼はパレンバンの民間人男子強制収容所にいます。⁴¹⁸ 彼は元気です。彼はマランの奥さんに6回便りし、1度はお金を送ったようですが、彼女からは何の知らせがありませんでした。さらに、「我々は1月16日以来パレンバンにおり、その前はプラジョーにいたが、相変わらず仕事がなかった」と書いていました。⁴¹⁹

⁴¹⁷ ヌガウイの北東部にあった「ファン・デン・ボス要塞」は、1943年2月から1944年2月まで中部及び東部ジャワからの欧州人男子を集結するための強制収容所であった。これら男子は要塞内の刑務所及び要塞の前庭にあった「収容所別館」に収容された。後に、彼らはチマヒの第4及び第9大隊へ移された。(Van Dulm 他, 162)

⁴¹⁸ プンチャック・セクーニン (パレンバン) にあった通称兵舎収容所を意味する。(Van Dulm, 他, 76)

⁴¹⁹ 脚注 175参照。

ハンペル

1943年7月1日

マランのM.H.に彼女の夫から便りを受けたことを書いた手紙を出しました。でも、その手紙は戻ってきてしまいました。一体彼女はどのようにしているのでしょうか？それで、私は彼女の姉C.の知らせを待つのみです。ハガキには「ブルリンドゥンガン[保護居住区]」とか書かれてあります。これは強制収容を意味します。つまり、彼女もすでに！

ハンペル

1943年7月3日

C.からハガキをもらいました。彼女の妹は引越したそうで、そのことを私に伝えていなかったのです。そのため私が出した手紙が戻って来たのです。でも、彼女は郵便局へ引越を届け出なかったのかしら？そこでも当然彼女も収容所に入れられたと思うでしょうけれど。

ハンペル

1943年8月20日

ヤップはまたそれなりに親切でした。11歳までの子供は収容所の父親に会うことが許されたのです。新しい知らせをいっぱい持って帰宅した子供もいました。「パパはこんなひげをはやしていたよ！」。パパはね、パパはねとあれこれと。しかし、泣き出して、父親を受け付けない子供もいました。父親はあまりにも変わった様子をしていましたからです。それはもうその子のパパではなかったのです。今突然父親との面会は中止されました。

ハンペル

1943年11月25日

私たちはまたジャワ第I収容所からR.のハガキをもらいました。日付やサインはありません。彼はD.について何か書きました。でも、所々が消しゴムで消されていました。彼はボクシングを教えています。何人かの女性はタイプで打ったハガキをもらいましたが、そこにもサインはありませんでした。この様な人の場合には、神経がほとんどまいってしまいます。彼女たちは誰か違う人がタイプしたのだと思うのです。しかし、自分の夫が死亡したならば、その通知がくるはずです。

夫のお墓参りに行くことを許され、そのためにお金とパスをもらった女性さえいて、彼女たちは夫の所持品を持って帰ったのでした。

ハンベル

1943年12月12日

外国では私たちのことをあまりにも知らなすぎます。バタビアではお米、オバットウ[薬]、衣類等々がないとか、ラジオ受信機が木に吊り下がっているとか⁴²⁰ 放送されています。

ハンベル

1943年12月25日

そう、今日はクリスマスです。普通の小包は受け付けてもらえます。私は知らなかったのですが、小包に飾りを付けてもよかったのです。そしてカレンダーを入れることも許されていました。もちろん再びまさしくヤップ的なことが。小包を手渡すことが許されている時間が終了する頃になって、「甘い物もよろしい」と告げられました。女性たちは全員お店へ飛んで行きました。ほとんどのお店が閉まっていた。このことは個人名義で行ってはならず、共同で出資するので。当然私はそのことを遅くなって知りました。それが許された場合ならたくさん蓄えがあったのに。それなら、全部私たちが平らげましょう。

ハンベル

1944年1月1日

昨日、ここに家族がいる男子の挨拶が外国から放送されました。あなたがそれに入っていなかったのは残念です。多分、偶然私が聴いていない間にあなたもいたのかも知れませんね。

⁴²⁰ おそらく、これは通称「歌う木」と呼ばれた、日本軍がそのプロパガンダを広めるためにジャワの町々に設置した拡声器付きの受信機のこと。(De Jong 11b eerste helft, 243)

ハンペル

1944年1月27日

本当なのです。アデックとストリウスウェイクでは移動が行われています。どこへ？様々なことが言われています。依然収容所の外に暮らしている女性はニッポンにとって大きな負担をもたらしたのです。彼らは彼女たちのブンダフタラン（登録証明書）を奪い、PIDのところに取りに来させました。そこでは、60回ほどのむち打ちのあとそれを返してもらえるのです。目元やからだにアザ跡をした女性たちを路上で見受けます。警察はこの殴打で疲れていないのでしょうか？男子たちが行く沿道から女性たちを排除することができなかつたのです。そのため彼らは他の道を通って男子たちを運ばせました。アデック班はマンガライ駅から数キロのところ曲がって違う方向へ向かったのです。ストリウスウェイク班はR. の家の前を通りましたが見てはいけませんでした。家々はどこも完全に閉じていなければならず、彼らは全てを封鎖しています。こんなことを彼らはもう1週間も続けて行っています。W. は彼女の父親と弟を見ました。H. は彼女の婚約者を見た時、その彼氏は「バンドン、バンドン」と大声で言ったのです。でも、一体彼らは空っぽの収容所をどうするのでしょうか？「軍隊に対してサインしないプラナカン[印欧人]用に」⁴²¹ と一方では言われているし、「ブランダ[オランダ人]と結婚したプラナカンの女性用に」と他方では言われています。彼らが何をしようが、どうせどれもこれも悪いことばかりなのです。

ハンペル

1944年4月17日

4月14日にまたゴロンタロからのハガキを受け取りました。⁴²² あちらからも同じく早々と。私が最初に出したのは1月6日です。つまり返事が行ったり来たりして大体3ヶ月です。私はハガキを2枚使って出しました。たくさん知らせることがあったからです。私のパサール[下手な]マレー語が理解できたかしら？オランダ語のものは配達されまいのですから。手紙は依然出すことを禁じられています。

ハンペル

1944年4月23日

ママは水曜日にボイテンゾルグの両親のところへ一日がかりで行きますが、そのために2日前に

⁴²¹ 印欧人の間では、インドネシア人ヘイホ（兵補）のように強制的に日本軍の軍務に就かされるかもしれないという不安を抱いていた。

⁴²² ゴロンタロ（北セレベス）には、ハンペル夫人の義理の両親が住んでいた。

PIDへ出向かなければなりませんでした。私が思うところでは、彼女は自分の両親にもう2年も会っていないのです。彼らは容態が悪くなっています。彼女の父親は特に。

ハンベル

1944年6月26日

ここではどのようにして電報を送るかご存知？マレー語で打つのです。それを彼らがニッポン語に訳してから、発信されてあとでまたマレー語に直すのです。その結果、かなり遅く着き、打った文面とは全然違うものなのです。

ハンベル

1944年8月20日

おやおや、またゴロンタロからハガキが。日付が黒く塗られていますが、何とか判読できました。6月18日から8月17日まで。何と早いのでしょうか。2ヶ月しかかからなかったのです。女性の中には戦争捕虜から12月のハガキを受け取るとは考えさせられます。しかし、ハガキははるばる「ジャパン」から出されるのです。時には、女性たちが働いているワーターロー広場で自分の夫に会うこともあります。

ハンベル

1944年9月24日

タンシ[兵舎]C. Q.⁴²³ は便りすることを許されました。K. N. とT.、他にもたくさんの方の知人が25語書かれたハガキをもらいました。⁴²⁴ 以前にアデックとストリウスウェイクにいた人たちからです。チキニで働いている夫を見た婦人たちは何も便りを受け取りませんでした。C. Q. はどこなのでしょう？多分、バンドンか？…中略… いろいろなことが起こります。先月の24日と今月の23日にゴロンタロのあなたのご両親へ郵便為替を送りました。このことは特別な本に記入して行われます。1ヶ月間に外地⁴²⁵ へ向けて2回の為替送金がなされました。

⁴²³ 「ジャワC.Q.」は、日本側の管理上、チマヒ／バンドン地域にある収容所を意味した。

⁴²⁴ これは戦争捕虜がハガキに書くことを許された最高字数であった。文章は日本語あるいはマレー語で書かなければならなかった。(De Jong, 11b tweede helft, 812)

⁴²⁵ 「外地」または「外領」はオランダ領東インドのジャワ及びマドゥラ以外の地域を指す。

ハンペル

1944年10月22日

ああ、何とご親切な！ニッポンに占領されている地域の人々は、1.50ギルダー払って英語または日本語またはインドネシア語で外国へ便りできると新聞に出ていました。一家族に付きひとりだけ2ヶ月毎に書くことが許されています。そのインフォメーションを得るためにどこそこへ行くようになっていて、そこへ出向くと、「ああ、そう。私たちも新聞で読みましたが、何も聞いてない！」と言うのです。まったくあきれます。

ハンペル

1944年11月7日

私たちはC.P. 収容所から便りをもらいました。しかし、C.P. 収容所はジャワ全土に広まっていると言われてます。⁴²⁶ 彼らは女性と子供たちに対しても、度々引越させて男子とまったく同じようにしています。

ハンペル

1945年5月28日

何という惨事でしょう。L.N. のご主人が行方不明と伝えられています。彼らは戦争捕虜を再び何艘かの船で移送中です。そのうち1艘の船が魚雷の攻撃を受けました。たくさんの人々がおぼれて死亡したり、助かった人がいたり、行方不明になった人がいます。R.M. にはそのことを知らせられません。なぜならば、彼女のご主人もその船に乗っているからです。彼女たちは同じところに住んでいます。L.N. は私たちの家に来て存分に泣いたのです。ある女性は彼女のご主人は負傷していないという旨のハガキを受け取りました。

ハンペル

1945年7月1日

収容所では続々と死亡者が出ています。収容所のひとつのそばに立って霊柩車が出る時に居合せてごらん下さい。ティカール[ござ]に包まった遺体が積み重なっているのです。木製の棺はもう

⁴²⁶ C.P.は、日本側の管理上、中部ジャワにある収容所を意味する。

ありません。G. O. [ハンペル夫人の叔父]も同じようにして埋葬されたと言われています。A. はボイテンズルグから来て、ペタンブーラン⁴²⁷ でG. O. のお墓を偶然見つけました。彼はある人のお墓を捜していて、その名前が目に入ったのです。G. O. の奥さんはまだ通知を受けていませんので、彼は亡くなったばかりなのでしょう。というのは、普通半年してその通知が届くからです。ママは彼女の兄が埋葬されている状態を見たがっています。…中略… 今日またグロドック収容所でふたりの少年が亡くなりましたが、そのひとり私には知っています。C. 一家はそこでふたりの息子を失いました。とても惨いことです。

ハンペル

1945年7月25日

驚きました。ゴロンタロの義理の両親からまたハガキを受け取ったのです。日付は黒く塗られていましたが、ふたりは11月28日と12月27日に送った郵便為替のお礼を書いていました。つまり、このことは幸いにもうまくいったのです。

ハンペル

1945年8月7日

O. G. は5月20日に収容所で亡くなったことをお話したかしら？彼の奥さんがその通知をもらったのです。結構早く届いたのです。ご主人とふたりの息子の死亡通知を受けたある女性と話しました。

バタビア

ポール

1942年6月29日

ベン・ホーヴァールスはジョクジャカルタの家に帰りたかったのだが、彼の電報に対してこれ[電信局のインドネシア語の通告]と青色の返信を受けた。

[貼付された手紙文]

⁴²⁷ ペタンブーラン（バタビア）には欧州人及びインドネシア人キリスト教信者の墓地「ラーンホフ」があった。

親愛なるベンへ

君が当地に来てはならないという訳を簡単に説明したいと思う。
ニッペン⁴²⁸は突如17歳から59歳までの男子を全員捕らえることを行っている。
スラット[手紙]をもらった男子だけは違う。ダケ氏もその必要がない。
みんなフレーデブルフ要塞⁴²⁸ に閉じ込められている。
パパは依然監禁されている。かわいそうに！ここが少しは安全になるまで、
君が今いるところにいなさい。必ず、知らせるから。
なぜもう君はドディのところにはいないのかね？
ポール夫人と彼女の子供たちによろしく。
私たちみんなから愛をこめて

ウィムより

つまりジョクジャカルタはここと同じようにむちゃくちゃなのだ。いかにヤッペンが恐れている
ことがわかるでしょ。ニッポン領東インドが再びオランダ領東インドとなる日は、もう長くはな
いだろう。すぐにもそうなることを祈ろう。

ポール

1942年8月1日

私たちは7月25日の午後にあデックへ小包を持って行くことを許された。幸いにも、今のところ
10日毎にこれができるのだ。毎日8時に、20人から30人の少年があデックの前庭を掃除しに来る。
すると、警官とヤッペンに見張られているのに、その少年たちと話をしようとする婦人や少女で
いっぱいになる。彼ら（少年たち）の中にたくさん知っている子を見た。私はパパによろしく言
ってくれと頼むことすらできたし、けさ、その返事もらったのだ。彼の生意気な娘がそれを頼
んだことを彼が知ったらば、パパの顔はすぐにも殴られてしまうし、即座に、彼女も叩かれる。
彼はおそらくうれしく思ったかもしれない。私はあデックの建物の屋根を望遠鏡で見ようとした。
見えた！あきれたことに、若者たちは日本語の命令を受けるのだ。彼らは日本語で数を数えさせ
られる！（番号）

⁴²⁸ 1942年6月15日にジョクジャカルタでは約500人の民間のオランダ人が強制収容された。日本人は彼らを
フレーデブルフ要塞に収容し、6月21日にはジョクジャカルタの刑務所にいた官吏をそこへ移動させた。
(M.P. van Bruggen 他., *Djokja en Solo. Beeld van de Vorsteden*. (Purmerend 1998), 66)

ポール

1943年12月31日

[貼付：1943年6月11日、チマヒ - バンドン間の旅券]チマヒからバタビア行きフレ・ファン・ウォリンヘンの旅券。このパスは父親または息子に会うために特別に必要なのだ。これはフレがチマヒに滞在するために持ってなければならなかったパスだ。そうなの。この混乱した時期にはまず最初に許可を得なければ他の地域に移動してはならないのだ。その際、14日以上してやっとパスをもらうために、理由を届け出なければならぬ。旅から戻ってきたら、24時間以内にサインしてもらわなければならない。それをしなかった場合には、最大なスカー[トラブル]をこうむることになる。フレは理由として、彼の叔母が病気で、彼をとてなつかしがついて、彼もそんな彼女を元気づける必要があるためと申し出たのだ。彼が2週間後に本当の目的、つまり父親とも兄のヨスとも会えずにいたため、延長を要求したらこの[貼付した]手紙をもらったのだ。ヨスには会えたが、父親とは会えなかった。ああ、これが人生。絶対にすべてを得ることはできないのだ。

ポール

1944年2月18日

これを全部貼っていた時に、アデックについて少し書くことにした。アデックはもうアデックでないので私にとって難しい。⁴²⁹ だから、これに関してはあとで。今回はまず全体的な見取図だ。[1から15まで番号を付けてスケッチされたアデックの地図]これは毎月5日、15日、25日に上演されたお芝居の地図である。朝、とても早くママ、ラッメルス、ヴォン、私の4人で自転車に乗っていく。寒さで震えながら乗りつくと(1)、すでに歩道の上で辛抱強く待っている人でいっぱいだった(2)。私たちの自転車をピカウリィさん(3)のところに置いたあと、私たちのうち二人が番号の箱を取りに行った。まず初めに、監視所の看守に挨拶をし(4)、そのあとタム[客]間へ向けて行き(5)、(丁寧に担当のマントゥリ[監視員]に尋ねるのだ)。私たちは箱をのせるテーブルをガレージから持ってきた(6)。テーブルがすごく汚れてしまったので、あとになって、もうこのことはしなくなった。

私たちが番号の箱を取ってくると、それを今度は配るのだ。人々はカリ(7)に沿って歩道(2)の上で待ち、自分の番号(赤、左側。青、右側)をもらう。番号をもらった人は、大抵、看守とマントゥリとヤップから太陽とニッポンの旗による挨拶を受けた。30分以上したら、マントゥリがテーブルを置いた。お偉方ヤッペンがそこに座るのだ。ママ、ヒュフ夫人、ラッメルス夫人(以前はファン・グルペン夫人)、(ガービー)、ハンセン夫人が各所のテーブルの横に立つ

⁴²⁹ 日記の作者は、アデックの男子が1944年2月2日から9日の間にバンドンの強制収容所第15大隊へ移送されたことを言っている。(この章のポールの日記 1944年6月12日参照)

(9)。私たち女の子（リーザ、エリー、ヘニー、マウト、ヴォン、私）は、人々が番号を出したあとテーブルへ導くために各自の持ち場についた。混乱しないように、パルテ夫人が中央のテーブルで手伝い、エリーとリーザは番号を回収した。ヘニーと私は各所のテーブルへと人々を割り振ったのだ。…中略… テーブルから小包がマトゥリによりタム間へと「だましとられた」。そこから、私たちの少年が受け取り、分類する部屋（10）へと運ばれた。ヴォンは番号が配られる時にいなくて、それをもらってない人々のための番号を置いたテーブル(11)にいた。地図の12番は、私たちの少年たちによって後に作られた花壇である。13番は私たちからの小包と赤十字の看護婦からのものだ。また、13番は大抵マトゥリがいる部屋だ。この図の中では開いている窓はほとんどいつも閉まっていた。14番は私たちが男子たちを見たことがある廊下だ！（でも、用心深い連中）。15番はガレージで、以前はそこの後ろ側が開いていたため、時々私たちの少年たちを見ることができた。初めの頃、私はヴォンの持ち場において、これらの手紙をジョンゴスからもらった。

[貼付：手紙3通]

本状を提示する者は、
私どもの下男であり、
H. D. デ・フォス宛の
小包を所持しております。

拝啓

これをもちまして、
スラメットと称する
私どものジョンゴスに
番号をご配慮くださいませ。
まずは願まで。

敬具 [サイン読解不能]

Dengan hormat,
Saja harap, diterima ini kiriman
jaitoe boeat L. Cordesius jang beranda di Adek ini.

Saja membillang banjak terima kasih.
[*...*] Cordesius

拝啓
アデックに在所する
L. コルデシウス宛のこの小包を
お受けくださることを
ここにお願いする次第です。
[*...*] コルデシウス

このような手紙なしには、私は番号をあげてはいけなかった。後には、もうあまり厳しくなくなった。…中略… ひっきりなしに、誕生日の夫や息子のためにお花をもって来る婦人たちがいた。でも一度として許可されたことがない。ある時、ヤップのひとりが三色スマレのつぼみを持って現われた。このつぼみは男子が自分たちで栽培したのに摘み取ってしまったものだと彼は真剣な顔つきで告げた。私たちはもちろん力を尽くしたのだ。アデック産の花なんて、考えてもみて。あとでわかったことだが、そのヤップは、夫の誕生日に花を贈ることを拒否された婦人たちのひとりからそれをもたらしたのだ。

貼ってあるJ. W. ベックからの封筒は、私たちがたくさんもらった写真入りの封筒のうちの1枚である。何とみんなでいつもこれを楽しんだことだろう。特に写真だ！すごくおかしなのがかったし。日記君、これがアデックの説明よ。私たちがそこに最後にいた当時の様子だ。

[貼付：手紙]

7月20日火曜日

代筆

ジャワ通り36番地在住のペニング夫人は、

今朝元気な女の子を無事出産しました。

すべて順調。母娘ともに健康。

ウィルヘルミナ・ビクトリア

ジャワ通り36番地、P. P. ペニング氏宛

ある日、ルドルフがこの紙切れを持って駆け込んできた時は、私たちはジョージン・デ・フリースのところまで授業を受けていた。すぐにもこれを伝えに行く必要がある。付けられたすてきな名前を見てごらん。父親はアデックにいて、その日のうちにこれを知らせてあげるべきだった。そんな訳で、私はPOP⁴³⁰ かアデックにいるはずのママに連絡するために自転車で急いだ。その途中、私の自転車のチェーンが外れてしまった。いろいろ苦勞して、それをはめてから走っていたら、アデックからちょうど帰ってきたばかりのママに出合ったのだ。ママはその知らせを渡すために飛ぶようにして引き返した。いつかウィルヘルミナ・ビクトリアに会えたらいいのにな！

⁴³⁰ POPは、Pertolongan Orang Peranakan（混血人への援助）の略称。

ポール

1944年3月1日

[貼付：手紙]

Adekkeimusho

Djatinegara

Kepada Jth. Toean Komendan Perlindoengan

TJIDENG

DJAKARTA

(dengan perantaraan Palang Merah)

Dengan hormat,

Dengan ini saja mohon atas perintah Kantokukan Adekkeimusho perkakas moesik, jang diminta dengan perantaraan Palang Merah, deberikan kepada Adekkeimusho.

Pengoeroes Adekkeimusho

Djatinegara, 20-10-2603 [20-10-1943]

ジャティネガラ

チデン

ジャカルタ

保護居住区所長殿

(赤十字社の仲介により)

拝啓

アデック刑務所監督官の命令によって、赤十字社を介して要望されている楽器をアデック刑務所にて引き取りに出向くようここにお願いする次第です。敬具

アデック刑務所責任者

[署名読解不可]

於：ジャティネガラ 1943年10月20日

このすばらしい手紙をママがある朝受け取った。その日の午後、私たち（ママ、フレ、私）は「提供されている」楽器を獲得するためにチデンへ向かった。最初、フレと私は引越作業のこ

とについて話すためにディルヴェンのところへ行った。私たちがチデンに到着すると、ママはすぐにもヤップと交渉したのだ。ヤップはこの手紙の意に反して、いろいろと異議があったのだ。やっとのことでママは楽器を手配する予定であるエージェントのムッテルト夫人が引き取ることでこの件を解決した。結局、大混乱したあとに、私たちは収容所からいくつか運び出したのだ。でも、待っては待たされた！ひどく！フレーと私は結局ゆっくり歩いて家へ帰った。なぜならば、ひどい気まぐれに襲われたからだ。そんな訳で、かわいそうなママは全部ひとりで運ばなければならなかった。フレーは途中でたくさんの秘め事を私に話してくれた。要するに、日記よ、君には何も関係ないのよ。

ポール

1944年6月12日

噂、噂、そしてまた噂が。アデックがなくなる！アデックの人がデポック、スマトラ、プリオクなどなどへ移る。人々は、アデックについてのひどくばかげた噂にみんな気が狂ったようになっている。このいやな話は1943年11月にもうあったのだ。せきたてられた人々がたびたびママのところへ来て、「信頼できる」筋から聞いたけど、アデックはホノルルへ移らされるとか、もっとナンセンスなニュースを涙ながらに話している。相変わらずたくさんの噂が漂い続け、しつこく付きまとい、そして私たちの心臓がどきっとするようなことを次々と聞いた時までは。

1944年1月15日以後、町中の人がお互いに25日は小包の日でないらしいと話していた。その時はもう男子たちが去っているはずだからだ。でも、ママは25日が小包の日であると書いてある張り紙（次のページ参照 [貼付の紙切れ：1月25日通常通りアデック対象の小包の日]）を根拠に言い張った。でも...25日の当日には、私たちヘルパーがここで仕事をするのは最後であろうと聞いたのだ。噂を聞いた女性たちはウール製品や薬をものすごくたくさん持ってきた。というのは最後のニュースでは「バンドン」と言われていたから。ああ、女性たちよ、何と賢明であったことか！彼ら、我々の男たちはバンドンへ行ってしまった。気が狂いそうな日だった。2回も3回も往復し、衣類などを持ってきた女性がたくさんいた。私たちヘルパーは、立って指示を与えて声はかれてくたくたになってしまった。突如、大きな驚きが。「男の人たちが...行く。裏から！」。それを知った人々の間でパニックが。大勢が見に行った。私たちもだ。でも、もちろんこれはまたナンセンスな「カバル・アンギン」つまり噂のひとつだった。私たちはほって汗をかきかき、落ち着きなく気まぐれに走り回った。女性たちの波は絶え間なく続いた。「あのネ、私の夫は[ケパック・ライチャ？]が好物なのだけど、彼に持って来てもいいのかしら？」。当日に何千回と尋ねられたこのようなつまらない質問に味気のない笑みを浮かべ、深いため息をもらさないようにして、担当である私たちのひとりが答えることは、「いいえ」という本当に疲れさせる返事であった。この日が終わった時には、私たちはくたくたに疲れてしまった。

ゆでだこのように日焼けして、私たちはここで最後の時を過ごし、私たちの男の人たちにしてあげられるのもこれが最後であったのだと認めざるをえない嫌な気分でのろのろと家路に就いた。2月2日から9日までの間に、彼らはグループになって発った。私たちはそれを見に行かなかった。苦勞の甲斐がないのだ。なぜならば、どうせ見えやしないし、平手打ちを食らう危険にさらされるだけだから。

ポール

1944年6月26日

以下はアデックの男の人たちがテンノーの誕生日⁴³¹ に得ることを許された品物のリストである。

[貼付：手紙]

ブリトン通りのタワナン・ミリテール [戦争捕虜] 事務局のT. イチカワ氏は、来たる4月29日の祝日にバンドン及びチマヒにある民間人男子強制収容所への差し入れ（衣類、食品、タバコ等）を許可した。

このことは共同で行われ、つまり個人的ではない故、小包には名前を記載することなく、特に手紙やその他類似のものを中に入れることのないようしてください。金銭は受け付けません。尚、差し入れ品は、ダゴ通り34番地及びダゴ通り41番地へお持ちください。4月28日のニッポン時間1時以後はいかなる小包を受け付けることはできません。

他の人にもお伝えください。

砂糖	果物
紅茶	ビスケット
コーヒー	その他
塩付タマゴ	
グラ・ジャワ（アレン） [シヨロ糖]	石けん（浴用・洗濯用・石炭酸）
ベーコン	歯ブラシ
ソーセージ	スリッパ
カチャン [豆類]	木靴
塩	タオル
缶入りゼリー	その他 <u>各種衣類</u>
デンデン [味付け乾燥肉]	
イカン・アシン [塩干し魚]	

⁴³¹ 日本の裕仁天皇の誕生日である4月29日の天長節。

T. イチカワ氏のもとに直接連絡なさることはご遠慮ください。

幸いにも、我々の男子は信じられないほどたくさんもらいました。でも、私たち自身で何もあげることができなくて残念だった。何にも個人的にはしてあげられなかった。私たちはみんなで彼らのために十二分に行ったのだ。遠くから時々彼らについてのはっきりしない噂を耳にする。

ポール

1944年7月3日

私たちはアデック宛に便りをだすことを試みた。私たちの手紙はもう1ヶ月前に返信したのに、まだ、そのその手紙が戻って来ない。要するに、希望は命の糧。

スマラン

ヒューセン

1942年4月4日

ベップ・ノールダムは、…中略… ジュルナタンで [オランダ] 警察の制服、マットレス、蚊帳を所持することが許されていると話した。クララ・ハオウイックは夕方ガブリエルセ夫人から市警備隊が制服、チョコレート、タバコ、手紙（タイプしたものまたは活字体で書いたもの）ももらうことを許されていると聞いた。このことに関しては、デ・ヨング牧師が手配する。

ヒューセン

1942年4月15日

被抑留者は事実スラバヤへ向けて発った。⁴³² 女性たちはタウン駅で別れを告げることができた。…中略… クララと私は町の大勢と同じようにとても印象づけられた。

⁴³² これらの人々は、欧州人戦争捕虜であった。スラバヤでは年の市会場にあった収容所に収監された。(Brommer 他., 43)

ヒューセン

1942年5月3日

「ランドストルム」の女性たちは全員、スラバヤにいる夫たちに面会した。そこの収容所では砂糖、タバコ、しょう油が不足しているらしい。

ヒューセン

1942年5月6日

私が送ったハガキがたくさん戻ってきた。インドネシア語等で書くことだけが許されている。

ヒューセン

1942年5月14日

ローゼンタール夫人はスラバヤの収容所にいる夫を訪問することが許された。彼はマラリアにかかり、とても神経質になっていた。彼女は行かれたことをとてもうれしく思っていた。

ヒューセン

1942年7月10日

全ての女性たちは自分の夫に面会に行った。このことは、ジャチンガレー、カリバンテン（英国人も収容されているところ）、またはスラバヤ（年の市会場 - HBS - ブブタン）でなされた。⁴³³ 全てが順調に進行し、食糧などの荷物も全部受け入れられた。3時間以上もともに語り合えた女性もいた。ほぼ全員が楽観的な気持ちを抱いていた。

ヒューセン

1942年8月9日

8月6日木曜日には、(ジャチンガレーに収容されている)官吏たちがスラバヤへ移されるだろうという知らせに私たちはみんな驚かされた。そのため、土曜日には面会が許されたのだった。その

⁴³³ 年の市会場及びHBSの校舎は戦争捕虜の収容所として利用された。ブブタン刑務所には、1942年4月に官吏が監禁された。同刑務所は1942年7月にはまた、クシリールにある大農園へ移送される人々の集結場所となった。(A.C.Broeshart 他., *Soerabaja. Beeld van een stad.* (Purmerend 1994), 41 及び Van Dulm 他., 169)

他の収容所ではどこも面会が中止された。全ての女性の間で大変な驚きが！ヘルダ・ズーフエルクロップも上へ向かい、食べ物と衣類を持って行くことができた。今朝、自転車でリーンおばさんのところへ行き、そこから男子たちが発つのを見にタウン駅へ向かった。それはとても悲しい光景で、多くの女性たちが涙を浮かべていた。踏切へは遠回りして行った。なぜならば、ホームに上がってはならなかったからだ。みんなにハンカチを振り、彼らは6両の大きな車両で去った。私たちはあとで、全員がクシリールへ向かったことを聞いた。これから何が起こるのだろうか？これは始まりであったのか、それとも終わりなのか？

ヒューセン

1942年8月23日

今朝、ヘルダから「ブブタン」に収容されている官吏たちは、叩かれることももうないし、もっと自由に食事も優っていて、かなり良い状況にあることを聞いたのだ。クシリールから多数のハガキが出されている。全員元気ようだ。それが本当ならば？このことについてはあとでわかるだろう。

ヒューセン

1942年9月9日

スラバヤから戻ったブロムベルフ夫人は、クシリールを訪れた婦人たちと話をした。長い旅をして、自ら構内へ入ることを許されず、夫たちが外に呼び出されるのである。

ヒューセン

1942年9月21日

一体いつヘルマン・ウィーボルスが帰宅するのかと、私たちは依然はらはらしている。彼は釈放され、スラバヤで命令を待つ必要がある旨、9月16日水曜日に妻のポップに電報を送ったのである。ポップは強気に振る舞っているが、相当緊張している。今日もまだ新しいことはわかっていない。すなわち、9月18日金曜日に、ヘルマンはゼーゲルスと数人のヤップとともにプルウォケルトなどを「ツアー」しなければならないとのハガキがスラバヤから届いたきり。

ヒューセン

1942年9月22日

ポップはプルウォケルトからヘルマンの電話を受け、明日デュー・ゼーゲルスと一緒にそこへ向かう。彼女にとってはすばらしいこと！

ヒューセン

1942年9月27日

食事のあと、アンス・ファン・ウールコムはポップとヘルマンを迎えるために下へ行く。彼らは早くも戻り、快活で元気であったが、疲れていてお腹を空かし汚れていた。さっそくお茶を飲んで、いろいろと話にわいた。ヘルマンはその「収容所生活」についての話に夢中だ。ディルク・ウールコムはとても元気だ。彼はバラック長で、相変わらずこざっぱりとして、陽気で立派な人だ。アンスにとっては良いことだし、このふたりはよく頑張った。アンスはこの良い知らせにまた少し元気づいた。

ヒューセン

1942年10月1日

ヘルマンは、クシリールについての情報を知りたがる女性たちのお相手で大忙し。彼は進んで説明し、女性たちをかなり安心させている。

ヒューセン

1942年11月6日

午後3時。何度も驚く。昨晚、クシリールでの面会は11月10日でなく8日となったとの知らせが入った。私たちは準備を整えた。今日は、ファン・ペルニスから電話があって正式に11月10日と！けれども、私たちは5時13分前発の午後の列車でスラバヤへ向かうことにした。⁴³⁴

⁴³⁴ クシリールへの旅は、当時の状況を考慮しても、数日を費やさなければならないほど不便であった。スマランからは列車でスラバヤへ行き、翌日マランを経由して終点のベンチュールクで下車したあとも、さらに収容所までは35キロの道のりがあった。この区間は荷車を使って行った。面会時間は約20分に制限されていた。(De Jong 11b tweede helft, 846)

とてもたくさんの荷物！3時半にデ・イオン市長広場から市バスでボジョン（ANIEM）まで0.03ギルダーで、そしてベチャ〔輪タク〕でポンチョル駅まで。クーリーも含めて一人につき36セント払った。ヘティ・リートメイヤーとアンス・ファン・ウールコムと一緒に付いて来て、私たちは駅でボイケルマン、ブルックハイセンと娘さんたち、マリー・ハッカー、ブロンベルフ夫人、ローゼンタールとヘネマン両夫人、その他たくさんの婦人たちに会った。

5時13分前に（バタビアから）急行の3等車で割増料金5ギルダー払いスラバヤへ向けて発った。私はポップ・ファン・デル・レンストのためにソックスをあと2足編み上げたかったので、編物をたくさんした。車内はたくさんのリプト〔騒ぎ〕で愉快。9時頃スラバヤのパサール・トゥリ駅に。どこも真っ暗、灯火管制だ。ドカル〔馬車〕でバンカ通りへ行くと、そこではコル・ファン・デル・レンスト・カルプがポップのための荷造りに忙しくしていた。たくさんおしゃべりし、近況を豊富に知った。早めに寢床に就いた。

ヒューセン

1942年11月7日

コルがテアと一緒に私をコタ駅まで送ってくれた。アンス・ファン・ウールコムとヘティ・リートメイヤーは私たちのあとに着いた。駅は非常に混んでいた。11時25分発の列車は満員だったので、3等車の代わりに2等車に乗り、あとで清算しなければならなかった（3等車が3.20ギルダー、加えて5.20ギルダーの追加料金）。ほとんどすべてのスマランの婦人たちが一緒に座っており、ベエー・ブロンベルフも私たちとともにいた。何回も停車し、たくさんのリプト〔騒ぎ〕の中、路面電車に乗換えしなければならない真っ暗なボゴジャンビに到着した。バラン〔荷物〕を窓から投げ出し、古い家畜小屋のランタンが灯る路面電車の中でできるだけ早く席を探し、見つけたのだ。

ベンチュールク駅はどこも真っ暗で、馬車に向けて突進。私たちは混雑が一段落するまで待った。2台の馬車に13個のバランを積んで、ラーゲルウェイ夫人とストック氏の小屋へ向かった。そこはとても混雑しているので、ひそひそと話さなければならない。倉庫の長い壁に沿って左右にマットレスとその上から蚊帳。真ん中は地面の上にマットレスが敷かれ、きゅうきゅうになって横たわる。アンス・ファン・ウールコムはすぐにもくつろいでいたが、ヘティと私とベエー・ブロンベルフはそれができなかった。私たちは、ここから少し行ったところに、ダブルベッドと蚊帳付きの部屋をふたつ持っている原住民の家があると、ファン・デルデン氏から助言を受けた。私たちはそこへ行くことにした。そこは小さなトコを持っているM. A. H. ウィロディハルジョー、チェルリンのところらしい。私が思い違いしてなければ、マントゥリ・パサール〔市場の親方〕なのだ。私たち三人はそこが気に入ったが、アンスは怒って、神経を高ぶらせ混雑したところに留まりたがった。私たちは決めてとてもスナン〔満足している〕！アンスとは話にならず、小走りし騒いで、誰でも手助けしては利用されている。私たちは彼女を落ち着かせようとしたが、とても頑固だし、具合があまり良くない様子だ。

私たちは最初の夜にぐっすり眠れた。ベエーと私がひとつの部屋に、ヘティは独りでだ。私たちの部屋にはドアがなく、カーテンが吊り下がっている。夜にはその前にマットを。浴室はあるが、少々お粗末！トイレは川なので、ラーゲルウェイのところへ行って用事を足さなければならない。夜間用にヘティは違う方法を考え出した。つまり、小さい穴がたくさんある茶色のポットを使うのだ。

ヒューセン

1942年11月8日

私たちはクシリールでの面会日であることをずっと心の中で願っていた。でも、違っていたのだ。その代わりに、男子たちのためのカゴを赤十字のところに手渡して検査させるのだ。この荷物が11月9日月曜日の午後に4台のチカール[トラック]に積まれクシリールへ向かう。私はポップ・ファン・デル・レンストとアンドレ・ブルースハルトのためにカゴをふたつ持っている。熱い中の作業が終わって、私たちはうれしく思う。続いて編物をしてゆっくり過ごした。ポップ用のソックス2足が仕上がった。日曜日のお昼から夕方にかけて、ますますたくさんの女性たちが到着した。まるで嵐のように。私たちのところのインドネシア人女主人は、サラティエガからふたりの婦人の来訪を予定している。私たちが彼女とオモン[おしゃべり]していたら、ハガキを送ったひとりにはペーレン夫人だということがわかった。私たちは自分たちのベッドを確保する努力をした。私たちの部屋をそのまま保持するよう彼女と取引したが駄目だった。

ペーレン夫人は事実厳しい歩調を速めて入って来て、「彼女」の部屋がふさがっていることに少し腹を立てたので、結局妥協することにした。ヘティとベエーがドア付きの部屋に泊まり、ペーレン夫人とフェヒテル夫人(デブで陽気なおばさん)がドアなしの部屋、私は中廊下のベッドで休むことにした。フェヒテル夫人は愉快的ななまりがみられ、私たちに笑いの種をまいてくれる。

ヒューセン

1942年11月9日

まだ面会日ではなく、至るところがひどくいっぱいだ。どうなることやら！すでにこの国際都市に少なくとも500人の女性は到着！ラーデマーカー夫人はここで彼女のご主人がクシリールで亡くなったとの知らせを受け、トラックで葬式に参列することを許された。みんな意気消沈してしまった。彼女が戻ると、男子全員が元気ない様子であることなどを聞いたのだ。何人かの女性はそれを聞いてすぐにも落ち込んでしまった。…中略… 私たちはここの女主人に夜中の1時にク

シリール行きの荷車を2台、14.50ギルダーで手配することを約束させた。通常の料金は1台5ギルダーだ。

ヒューセン

1942年11月10日

夜中の1時に私たちは着替えた。全員すでに目を覚ましていて、「私たちの」荷車を乗っ取られないように見張りをつけた。トラックが提供されるとも言われていたが、私はむしろ万事自分で整えたかった。やっとのことで、荷車が1台到着し、1時間後にもう1台が。そして乗車。私は幸いにも一緒に乗っていくことになったアンスを迎えに行った。彼女は、ヘティに言わせると「疲れきっている」ので、喜んでついて来た。

3時に30キロの夜間走行が始まった。幸運にも天候は良好であった。暗い道に沿って長く列をなす小さな灯りが揺れ動く光景を見るのはすばらしかった。私たちはほとんど平らな河辺を走り、クシリールの近くで坂を下ってから下車した。道路はまだ湿っているためほこりが立たない。何回も停車して、6時半頃（ニッポン時間）クシリールに到着した。…中略… 私たちはニッポン所長の家に行かなければならなかった。最初間違えて橋方向に進んでしまったが、7時半にやっと目的とするところに着いた。私たちは長い列に並ばされ、バランを広げて置かなければならなかった。数人のニッポン将校は迅速に検査した。検査のあと、私たちは番号付きの証明書をもらった。私は37番の黒をもらった。これを持って、私たちは、名前、年齢、面会を希望する人などを書き記す欧州人が3人いる長いテーブルへ向かわなければならなかった。

私は9時15分前に済み、およそ50人いる第2グループと一緒に通過を許された。ヘティも私と一緒に。私たちは再び橋に向かう。そこからは遠くに立っている大勢の男子や少年たちの姿が見えた。誰かが監視所のところで、中に入ることを許可されている女性たちの名前を読み上げた。幸いにも私はそれに含まれていて、すぐにもポップの友人であるアンドレ・ブルースハルトを目にした。しばらくしてポップも見えた。少年たちは目を輝やしていた。広場に向けて歩いて行くと、屋根の上に「ようこそクシリールへ」と書かれている真ん中の開け放された倉庫の沿って自分たちの妻を待っている男たちの長い列があった。ボイケルマンに話しかけられた私は、幸いにも彼の奥さんとクラールチェが来ていると告げることができた。

私たちはすでに大勢が集まっている開け放された倉庫に沿って歩いた。アンスは彼氏のディルクに会え、ヘティはもうフリッツのところにいる。こんな具合にたくさんの嬉しそうな人々を目にする。太陽がすべてを明るく色づけ、雰囲気は良好だ。少年たちはあまり日が照りつけない、梁の上の良い場所を私のために探してくれた。すると、彼らは口々にそこの生活についてや小屋のこと、敷地や少年たちのこと、少年たちの親友でもあるらしいリーダーのスローン氏について盛んに話し出した。ポップとアンドレは洗練されており、健康そうだったので、私はこのふたりと一緒に歩き回ることに誇りを感じた。彼らの小屋は第9 - I棟で、NSB党员がいる第9

- II棟のすぐそばだ。彼らは橋から約6キロ離れたところに住んでいて、自転車を欲しがっている。私はそのために何とかしてあげたいと思う。

小包は橋の近くで受け取りがなされるので、私たちはそこへ向かった。そう、あったのだ。ベンチュールクから3台の荷車で運ばれた約350個の小包とともにそのふたつの小包が。少年たちが大量のものを眺め、文字通り「全部を」気に入った彼らの輝くような顔つきを見ることは何と楽しいことか。砂糖菓子とクッキーはすぐにも賞味された。アンドレがバナナの葉に入れたえんどう豆のスープを私に持って来てくれた。私はそれをリュックの中にあったヘティのコップで飲んだ。しばらくしてお茶ももらい、私はアンスとヘティにも飲み物が出されていることを教えてあげた。

その間にも、大勢が私に挨拶しに来てくれた。ファン・フリート氏は私がお金と薬を彼に持ってきたことを感謝していた。彼は元気そうで快活で、もう順応したようだ。彼は毎日スタールチェスと誰かある船員と一緒に最近キシリアルにレストラン(!)を始めた中国人の家庭のところへ食事に行くのである。ポップがここで牧師をしている(有給で)ロンボックからの伝道師ケーネマンを私に紹介した。彼は私にラワンに住んでいる彼の奥さんと子供たちのためにチョコレートが入ったバックを手渡した。ディック・グロートホフとしばらくおしゃべりしたが、元気そうだった。ラクロワがうろつき回り、私を抱きしめようとした。ブロムベルフ夫人は息子のディックと一緒に私たちの近くで座っていた。その少年たちはたくましく、とても元気そうで少し肥りさえもした。

ローゼンタール夫人が「2番目の母親」に是非とも挨拶したがるリノを連れて現われ、おいしい半熟卵と彼の水筒からココアを一口私にくれた。ヘンネマン夫人が彼女のご主人と一緒に来た。リノによると、彼はしゃべり過ぎると言うことだ。リノは箱入りタバコに喜んでおり、家では吸うことを禁じられているはずのポップとアンドレもだ。ドルフ・ファン・デル・ウェルフは暗い顔をして座っていた。母親はまだ来ないからだ。しかし、私は幸いにも彼の母親はベンチュールクには到着したが、多分何台かのトラックで1時ごろにここへ連れてこられる最後の分隊の女性たちと一緒になのだろうと説明してあげることができた。

野原はどこもいっぱいなので、私たちは道の上を少し散歩していたが、あまり進まないうちに呼び戻された。橋の下を流れるカリ[川]は、海まで続く「植民地化」の境界線だ。ポップは海から約3キロのところに収容されていて、時折泳ぐことを許されるのだ。⁴³⁵ その他、彼らには飲み水用の井戸と浴用の水は小屋の近くにある。(ポップは彼の妹たちとハニイ・バーケルスとアンケ・ウィールスマ、3b組の全員に私が届ける必要がある板チョコを収容所で買ったのだ!) 少年たちは様々な板を使って棚付きの戸棚を作ったことや、テーブルの上に古い布をかけたことをとても自慢げに話していた。それを知らなくて残念だ。

⁴³⁵ 収容所監督ワクウィッツの戦後のレポートによると、海水浴は禁止されていたが、毎日曜日に浜辺に出ることは許されていた。(J.G.Wackwitz, *Kesilir: juli 1942-september 1943. Rapport van de leider der Kolonisatie.* ('s Gravenhage 1988), 12)

このようにして午前中は飛ぶように過ぎて行き、2時に呼び出しがあると、あとで来た人以外は面会時間が終了し、私たちはゆっくりと橋へ向かった。別れの際、ポップは今回頬にキスするほど大きくは感じてなく、アンドレも同じだった。涙が彼らの目に浮かんでいたが、とても嬉しそうだった。彼らは私が見えなくなるまで手を振り続けていた。暗い空模様となったが、荷車に乗るまで雨は降らなかった。ベエー・ブロムベルフ、アンス、ヘティもすでにそこにいたので、私たちは急いで走り去った。私はこの面会で少年たちに次もまた来ることを約束したのでとても満足している。

帰路は長く、濡れていた。私は半分、いや、すっかり眠ってしまったが、幸い内側に座っていたので落ちることはなかった。ベンチュールクは乾いていたので、私たちは運が良かった。ヘティは私が彼女を乾かし、こすって温かくしてあげなければならないほど、ずぶ濡れで冷たくなっていた。ガウンと毛布にくるまって温かいお茶を飲んだ彼女はだんだん元気を取り戻してきた。私はラーゲルウェイのところ立寄ったが、そこでグリーデ夫人、テル・ベルフ夫人、スターペル夫人を含むほとんど全ての女性たちからの熱情的な話を聞いた。ぶらぶらと歩き回るアンスは、喜びで狂わんばかりではあるが、とても元気がない様子だ。私は早めに寢床に就く。なぜならば、列車は6時18分（ニッポン時間）に発車するし、5時頃には混雑し始めることが予測されているからだ。

ヒューセン

1942年11月11日

1時頃に私は起きようとするペーレン夫人らによって目が覚めた。なぜならば、すでに列車に向かう女性たちをいっぱい乗せた馬車がたくさん通過していたからだ。しばらくして、アンスが同じ情報とともに駆けつけた。そこで私たちも落ち着いて用意を完了した。昨夜、私は1日に付き5ギルダーの私たち三人分の料金を既に支払っておいた。これはラーゲルウェイのところより2ギルダー増したが、寝心地が良かったし、特別に払う価値があったことは確実だ。4時頃に私たちは駅に到着した。7両編成の列車はすでに満員だったが、私たちは最後部の車両に席を取ることができた。私はラーゲルウェイのところで突然腹痛を起こして「小部屋[トイレ]」へ行かなければならなかったので少し遅れた。列車の横を荷物を持って歩き、「ヘティ・リートメイヤー」と呼ぶ声を聞いて同伴の人たちを見つけた。6時18分に列車は発車したが、私たちは長く待たされたためにみんな疲れきっていた。

ベンチュールクでは乗換えする必要があって、ヘティと私はホームにいる人の最後部にたどり着いた。しばらくしたら、列車がホームに入って来て、空の3等車が私たちの足元に止まった。そんな訳で、私たちは窓際のすばらしい席を確保することができた。その後、ローゼンタール夫人とヘンネマン夫人も私たちのところに来たので、スラバヤまでの帰路を一緒に楽しく過ごすことができた。駅のひとつで、アンスが列車に沿って駆けだし、それがかなりのスピード

だったために、彼女は閉まっているガードの前のトラップに飛び入ってしまった。こういう馬鹿げたことは、またまた他の人のために走り回るようなアンスに限って起こることなのだ。スラバヤのグベン駅で私たちはみんな下車し、それぞれの道を行った。コル・ファン・デル・レンストは、ポップが元気なことを聞いて喜んでいて。その午後はゆっくりする時間がなく（私が間違えてなければ、列車は4時頃に到着したのだ）、夕方早くも眠くなってしまった。コルは私のために8カセの木綿を0.85ギルダーで、4カセの絹を0.85ギルダーで、5リールの絹を1.75ギルダーでうまく手に入れるチャンスを得たのだ。私は、すでに20ギルダーで注文したアンスとヘティにチョント[モデル]を送った。

ヒューセン

1942年11月15日

コルは私を列車まで送り届け、馬車で路面電車の停留所まで戻った。まだ相変わらず雨！9時12分前にスマラン経由のバタバ行きの発車する。3等車3.50ギルダーと割増料金1.50ギルダー。私は心地よく座って、窓から雨であふれる畑やカンポンを眺めていた。どこも同じように悲しげな光景だ。スマラン付近では、-列車はタワン駅付近を1時36分に-雨が降っていなかったが、嵐となってベチャではパサール・ジョハールまで私を運ぶのはほとんど無理のようだった。それでも私はバスに乗り移ることができて、デ・イオン市長広場まで0.10ギルダーと荷物代1.10ギルダーで行ったのだ。

ヒューセン

1942年12月8日

[二度目のクシリールへの旅] 8時のバスで荷物（ショッピングバック1つ、リュック1つ、カゴ1つ）を持って下へ。エリー・ガウトベルフはすれすれのところで駅へ缶詰をひとつ持ってきた。彼女はグンセイブ[軍政部]の非番の日なので下へ行く必要がなかったのだけれども。タワン駅でヘンネマン夫人が彼女の夫とリノ・ローゼンタールのために大きなカゴを持ってすでに待っていた。彼女はカゴが大き過ぎて、とても重くなってしまったと謝ったが、私は喜んで持っていくのだ。たくさんあればあるほど良いから。イット・スキッペルが月曜日[12月7日]にトコ・メゾン・マリノを訪れ、そんな物お金をあげても誰も持っていくはずがないと言って、彼女を心配にさせたのだ。

ブルックハイセン一家とボイケルマン一家も到着。スターペル夫人は昨日もう発った。雨を恐れたり何やらで思いとどまったのか、クシリールに向かうスマランの婦人はそう多くない。ホームでバランを検査させる必要があった。イエットは運悪く荷物を全部開けて出さなければな

らなかった。私の場合はいくらか順調に進んだ。アンスとヘンネマン夫人は列車までついて行くことを許されたので、私たちは列車が発車する9時13分前まで楽しくおしゃべりした。1時半頃にスラバヤに到着すると、ヨー・ビスホップがもう何日か泊まっているバンカ通り16番地へ荷車で直行する。コル・ファン・デル・レンストは残念ながら今度も病気で、腎臓があまり良くないようできるだけ安静にしている必要がある。…中略… 冷たいものを飲んだあとすぐに食事。私たちは車内でパンと卵を食べただけど、お腹を空かしていた。そのあと一休み。私は折りたたみ式ベッドでぐっすり眠った。他の人のことは何も耳にしなかった。夕方、ヨー・ビスホップと私とでカゴ4つとリュックを2つ持っていたので、カゴを詰め替えた。イト・スキッペルはカゴ1つとトランク1つだった。たくさん運ぶことに不安だったのだ。

ヒューセン

1942年12月9日

スラバヤのコタ駅で8時9分発の列車でジェンベルへ向かい、そこからベンチュールク用の特別車両が連結されたバニユワンギ行きの列車に乗り換える。そこには4時半頃に到着した。この列車の中には、およそ11年前にマランの私の家でイェット・デ・ラウウェルと一緒に食事したプルウォレジョのホーイスマ夫人も乗っていた。⁴³⁶ …中略… ラゴジャンピで急いでこの最後の区間の切符を新たに0.14ギルダーで買った。これでこの列車の旅は合計3.20ギルダーかかったのだ。車内で私たちは、オーストフックからの女性の被抑留者は全員マランへ移らなければならなかったと聞いた。農園企業の管理者約35名を含む大勢の男子（約100名）がボンドウォソに監禁されている。私たちは、そこに3週間収容されていて、また釈放されて家路に向かうラーゲルウェイと話した。

今度は前の時より女性の数が少ない。その理由は、マランでは灯火管制に伴い行かないようにと正式に警告が出されたためらしい。このことがたくさんの人に影響を及ぼし、何人かはラワンで下車して引き返してしまった。私たちはベンチュールクに早く着き、馬車で（ヨー・ビスホップと私が一緒に、イト・スキッペルはホーイスマ夫人と）ベンチュールクを走っている時に、インドネシア人のところに婦人たちが立っているのを見た。そこで、私たちはラーゲルウェイの小屋を通り過ぎ、前回の私の男友達のところへ直行した。彼女たちは私の部屋を空けさせておいたらしい。ヨー・ビスホップと私はすぐに入った。あとで食堂に寝ることをゆるされたイトを迎えにいった。ペーレン夫人もまだひとりの婦人と一緒にいる。

⁴³⁶ ホーイスマ夫人の夫R. ホーイスマ氏はプルウォレジョの「オランダ・中国人学校」の校長であった。

ローゼンタールの大きなカゴをちょうど良いところで赤十字の荷車に渡すことができ、⁴³⁷ 私はほっとした。というのは、ヨー・ビスホップと私とほかに残ったものとで1台の馬車で行かれるからだ。イットは食事時にご飯を食べたがらず、私が明朝のために用意しておいたパンを欲しがった。でも、これはやらなかった！再び7.25ギルダーの馬車を予約し、もう周りはずっかり闇に包まれていたので早めに寝床に就いた。曇っていたけれど、天候はまずまずだ。

ヒューセン

1942年12月10日

まだ暗い朝の4時頃にカゴ3つとリュック2つ、そしてヨー・ビスホップとで1台の馬車に。少し窮屈だったが、うまくいった。相変わらず雨でない。車のライトは赤色だったので、道端のカーブでまたたく光は見えなかったけれども、赤くゆらぐ長い線は、ちょっとは幻想的だった。クリシール近辺ですぐにニッポンハウスへ直行した。私たちは第1班に属し、そのまま列に並んだ。スピーチ終了後、しばらくして長いテーブルのところに番号を取りに行き、ひとりのニッポニーズに検査され、各列の前にはひとりの見張りが。私たちはお金とオバトウを渡さなければならなかった。私は5人分のお金が入った封筒を持っていたので、それを渡した。番号が付いた紙に自分で記入することができた。その際、私の包みの検査が忘れられた。おかげで私のは早く事が片付いた。私たち第1班全員はクーリーとともに荷物のことで行進して行った。彼らは太い道を行っていたが、私たちは「近道」を行こうとした。もちろん、私たちは、少し戸惑いながらあとをついて来たふたりのヤップ兵士にされぎられた。そんな訳で、私たちは橋のところで後部でなく前部に立っていた。

私たちは4人ずつ中に入ることを許された。私はすぐにもリノ、ヘンネマン、ディルク・ファン・ウールコム、リートメイヤーや他にもたくさんの人に出会い、ヨー・ビスホップはボップとアンドレに会えた。ひどい曇り空だったため、私は「ようこそクリシールへ」倉庫に座席を探し、そこで少年たちや男子みんなを迎えた。みんな家からの知らせや小包に喜んでいて。現在、250人の兵士が沿岸警備にあたっており、収容所内も厳しくなった。でも、雰囲気は良かったが、彼らはこの生活が終わることを強く望んでいる。その朝は飛ぶように過ぎて、ミルク入りのコーヒーやナシ・ゴレンなど食べ物と飲み物をもらった。ディルクとフリッツのために、私はアセム・ゴレン[タマリンドの実を入れて焼いた]チキンを1羽持ってきた。それをふたりはおいしそうに平らげた。リノとヘンネマン用のカゴは遅れたが、私たちは1時にそれを取りに行くことができたし、検査されたのに全部入っていたようだ。リノは彼の母親宛の、ヘンネマンは妻宛の手紙を私に託したので、それを私の靴の中に隠した！

⁴³⁷ 赤十字社は、クシリール向けの食糧の小包の輸送を援護した。同機関は、その目的でベンチュールクに、赤十字社のザイドホッフ氏と救世軍のF. シーフェルス氏が従事する郵便局を設けていた。特にザイドホッフ氏は食糧の買上げと配送、郵便と小包の配達などクシリールを対象に多く携わっていた。(Wackwitz, 37)

2時きっかりに帰り道に。出口で突如検査があった。女性の数は今回500人くらいいたらしい。私たちは2時38分にスラバヤに到着予定の臨時列車が朝5時半に出るらしいと聞いた。疲れたが満足してベンチュールクに到着。ヨー・ビスホップはボップとアンドレとの再会をととても楽しんでいた。…中略… ベンチュールクでは灯りがいっぱい。灯火管制は終了したのだ。私は女主人にお勘定をし、ひとりにつき2.50ギルダーとチキン1羽あたり0.50ギルダーを払った。私は9時に就寝した。ヨー・ビスホップとイットは切符を取ってくる。イエットは、テル・ベルフがいろいろなオバトゥを返してしまったことを怒っていた。

ヒューセン

1942年12月11日

真夜中に起きた。既に1時には気違いが駅へ向かった。私たちが5時頃そこへ到着したら、10両編成の長い列車を見た。5両がスラバヤ方面で5両がマラン方面で、強い灯りがともされ、すでに約8割は満席だった。私たちは良い席をとれた。ヨー・ビスホップと私は、愉快的旅の道連れである様子のスターペル夫人の前に座った。この老婦人がマンガ[マンゴ]をむいて、私たち6人が3本のフォークでそれを平らげるほどにまで親しくなった。…中略… スラバヤまでの旅も順調に進行し、私たち3人は再びバンカ通り16番地に到着したのだ。もちろん私たちはたくさん食べ物を頂き、たくさんおしゃべりした。でも、私は気持ち良く温いお風呂につかったあと、すぐに寢床に就いて眠った。コル・ファン・デル・レンストは元気がない。彼女はまた腎臓が悪く、本当は寝ていなければならないのだ。彼女には、ご主人のフィックがヨー・ビスホップと私が今回クシリールを訪れたこと、私が前回にも行ったことを喜んでいと知らせた。11時に私は結局寢床に向かい、眠り込んでしまった。コルはさらに木綿の編み糸（光沢のあるもの）を15巻手に入れたのだ。私たちは要するにまた続けれるのだ。そこで明日これをどう持っていこうかと思っている。私はそれを靴の中などに入れて、できるだけ見えないようにした。

ヒューセン

1942年12月12日

早く起床。パサール・トゥリ駅から9時18分前発のバタバ急行で（5ギルダー）。途中何も特別なことはなく、かなりのスピードで走る。スマランのタウン駅でトランクの検査があった。私は木綿糸のことが心配だったが、無事にパスした。もし、ニップが私のショッピングバックを指したら、こっそりと丸めて、空の片方の靴を高く上げよう！大分混んできたので、私は出易いようにはかる。ベチャで急いでバスに乗るためにパサール・ジョハールへ向かう。バスは超満員だったので、男の人たちの間や上に座ってしまうほどだった。…中略… 午後、私はブロムベルフと

ノールドフックのところと、ローゼンタールとヘンネマンのところを訪れ、みんな朗報を聞いてとても喜んでいた。ここではまだ数日続いている灯火管制のため、暗くなる前に家へ戻った。

ヒューセン

1942年12月13日

午前9時半から午後2時までの間に、他にクシリールで私が話したご主人や息子の家に行って用事を全部済ませた。

ヒューセン

1942年12月24日

夕方、クシリールのリノ・ローゼンタールからハガキをもらった。アンスは夫のディルクからのハガキを予期していたのだが、非常に不自然な態度をして、早々と寢床に就いてしまった。彼女があまりおセンチにならないようにしてほしい。こんな状態は耐えられない。

ヒューセン

1942年12月26日

ノールドフック夫人が強制収容されている息子のヤンに会うためにサラティエガへ向かった。…中略… ノールドフック夫人はヤンにきっかり10分だけ話することを許された。このことは今後家族で許可証をもっている者のみ、毎月土曜日に1回許される予定となっている。

ヒューセン

1943年1月8日

アンス・ファン・ウールコム、ベエー・ブロムベルフ他にも大勢がクシリールへ向けて出発した。私はお金がないのでしばらく行かない。そのために他の人から一銭も受け取りたくない。

ヒューセン

1943年1月11日

大分早く、グルガジでの授業の前にランペルサリ収容所へ自転車でヘティに彼女の本と、ムリア通りに390kgの重さの木箱のあとにまだ残っていた最後のバラン[品物]を持って行った。ランペルサリで私はそのまま入ることができたが、牛乳やその他のランガナン[業者]は柵のところで待たなければならなかった。子供や婦人たちがミルク鍋で運んでいた。ヘティは昨日買物をしたのだが、とても神経を尖らせていた。長いスラックスをラレース⁴³⁸ で買い（おつりをもらうのを忘れたらしいが、幸いにもあとでもらった）、また、テン・ウォルデ製の板チョコ⁴³⁹ 60枚入りの箱なども補助食として！バブは今日去らねばならず、彼女はこれから幼いエレンとともに独りで何もかもしなければならぬ。ドゥフラポント嬢は何の役にもならないからだ。

今日、彼女のところへはバイテン夫人も厄介な6歳位の子供と2カ月のこれまた人工栄養児である赤ん坊を連れて来る。食事は全部中央調理場からだ。明日からは誰一人として出入りすることができない。ヘティはラトカンブ薬局だけで手に入れることができるネストロフィートを欲しがった。私が何とかしようとして約束した。ポップ・ウィーボルスもみんなに挨拶するために早く下へ行った。私は医師の処方箋なしでも、うまくネストロフィートを（授業の合間に）手に入れた。また、パサール・ジョハールでカーキ色のスーツ用のボタンを見つけたので、いっぺんに何ダースか買った。

午後、クスマー・アトマジヤとガウトベルフ一家のところでの授業の合間に、再び収容所へ行った。これが最後だ。またまた雨でないので、私は運が良かった。レインコートを上に乗けたままだから。ヘティはもっと神経質になっていた。ちょうど私がそこにいた時に、トラックが前を走り、ミシン、タイプライター、冷蔵庫などを運び去っていた。ガスレンジは明日持って行かれるそうで、ガスが止められてしまう。ヘティは彼女の3匹の飼い犬のことで困っている。彼女は狭い部屋でエレンと3匹の犬と寝ているので、衛生性について言っているのだ。バブはもう中に入ることを禁じられたので、一日中泣きながらうろたえている。全部が今度から管理部を通さなければならない。

ヒューセン

1943年1月12日

アンス・ファン・ウールコムがクシリールから戻った。現地では万事が良好で、みんな元気にしており、小包も全部渡すことができたし、私が少年たちにと持って行かせたタバコもだ。

⁴³⁸ 「Larees ラレース」は、スマランのボジョン通り21番地にあった中国人ゴー・ティアン・キートが営業する服飾品専門店。

⁴³⁹ 「Ten Wolde テン・ウォルデ」は、スラバヤのココア・チョコレート製造会社の社名。

ヒューセン

1943年1月20日

数人の女性が強制収容されている夫からのハガキを受け取った。マリオンは英語で書かれたものを。

ヒューセン

1943年2月6日

4時半にコペンラーン11番地に立寄った。アンスはまだクシリール行きの許可証をもらえない。ディッセ夫人は1枚持っているが、「噂」ではそれは何の価値がないということだ。ファン・ディンテレンの12歳の少年は小児マヒで寝ている。彼の父親はクシリールにいる。他の5歳の子供が亡くなって、父親はクリシールから会いに来ることを許された。ローゼンタール夫人は軍政部で思い存分笑われた。アンスはたらい回しにされた。シランダ通りで、ジフテリテイス⁴⁴⁰で聖エリザベト病院に収容されている妹の見舞いに行く途中の「収容所」からそのために出されたウィリィ・スキリング夫人に出会った。彼女によると「収容所」の食事はまずまずだが、油分が少な過ぎる。雰囲気は楽観的。

ヒューセン

1943年2月8日

アンス・ファン・ウールコム、ベエー・ブロムベルフ、ディッセ夫人は事実スラバヤ行きの列車に乗れたらしい。彼女たちはホームでブロムベルフの子供たちに見つけられた。

ヒューセン

1943年2月11日

ボップ・ウィーボルスは昨日11時から12時まで「ランペルサリ」用の許可証を得た。そのため彼女はまだ興奮気味で、そこでたくさんのお話をしなければならなかった。彼女はヘティ・リートメイヤーのところを訪れ、他の人たちをそこに来させた。本当は、事務所だけで誰かと話すことが許されているのだが、彼女はヘティが病気だと届け出たのだ。全般的に女性たちはまずまず

⁴⁴⁰ 正しい表記はジフテリアである。

の様子だった。ヘティは今日誕生日だ！（バウマン夫人の家にいる）マッセリング夫人が、フェルリンデン夫人と赤ん坊の手助けをするために「収容所」を訪れた。クーリーと一緒に連れて行った下男がベッドの組立を手伝おうとしたら、とっさに警官から平手打ちを食らった。何という英雄的行為！新しい規則！

ヒューセン

1943年2月13日

7時半にアンス・ファン・ウールコムのところへ行き、クシリール話を聞いた。およそ500名の女性がそこへ行ったそう。マランの女性たちは、封印された許可証やその類のものもなく、クシリールへ向かったそう。一体彼女たちはどのようにして戻ったのだろうか？それは彼女たちにはどうでもいいことだった。アンスとベエーはスラバヤで封印された許可証を取りに行かなくてはならず、何とかそれに間に合った。2月10日はどしゃ降りの雨だったので、彼女たちはずぶ濡れになってクシリールに到着した。こんな入場では気が滅入る。でも、誰一人としてそこへ出向いたことに後悔していなかった。なぜならば。。。これが最後だということらしい。1時半に全員集合させられ、男子とは別にされ、警官が間に、演台の上のひとり（ ）⁴⁴¹ が訳もわからない叫び声をあげ、そのあとひとりの（ ）がマレー語で同様に。もちろん私たちに向けたのしりが何回もあり、そして、男子は今後強制収容され、面会はもう行われぬとの通達があった！そのあと、女性たちは別れの挨拶もすることを許されずに追い払われた。雰囲気は、非常に落ち込んでいた。しかし、突如、赤十字の人⁴⁴² が叫んだ。「ヒープ・ヒープ・フラワー」と。みんながそれに続いたら、その（ ）はあつけに取られて立っていた。アンスは彼女の夫ディルクとすばらしい時を過ごせて、とても満足していた。彼女は、まだ幸いにも元気そうだったポップ・ファン・デル・レンストからの私によるしくということばを伝えてくれた。

ヒューセン

1943年3月21日

午後、使用人バクリがF. ズーフェルクロップ宛（！）のマランのドラからのハガキを上を持ってきた。つまり私宛（彼らは私が「潜伏中」であることをすでに知っているのだから本名では郵便を受け取れないから）、その中でドラは、リーンおばさんには金銭的に助けてあげることができないが、スラバヤかマランへは行かれると記した。[リーンおばさんのところに住んでいる]ヘル・ズーフェルクロップはできるだけ節約して暮らし、できるだけ頑張ろうとするつもりらしい。

⁴⁴¹ 日記の作者は、「日本人」を記号の括弧で表わした。

⁴⁴² ザイドホッフ氏のこととおもわれる。脚注 438参照。

ヒューセン

1943年3月22日

マリオンは、ご主人がケンペイタイのところに4週間もいるヒルデリング夫人のために情報を得ようと下の赤十字へ向かった。マリオンは現在、赤十字に関与していて、毎週月曜日と金曜日に各地の収容所に向けた小包の管理を手伝う予定だ。彼女は、ボーン・ファン・オスターデ夫人のところも立寄り、そこで逮捕されたボーン・フォン・オスターデ医師がまだここにいることを聞いた。彼とともに監獄にいて、今は釈放されたひとりが彼女のところを訪れ、彼は元気になっていると告げたのだ。彼女は衣類を送ることができる。何とほっとさせることか。

ヒューセン

1943年4月12日

マリオンは、パラン・メラール（赤十字）は現在まだ少しは収容所への送達が許されているが、捕虜（被抑留者）が「食べ過ぎかつ仕事をしな過ぎる」(!)のために、これを目下のところ中止するといわれたとの情報を持って帰宅した。この先どうなるか興味あり。

ヒューセン

1943年4月19日

残念ながら、アンバラワ向けの小包が全部ここパラン・メラールに戻された。⁴⁴³

ヒューセン

1943年4月22日

トーマス夫人が来て、パラン・メラールが完全に閉鎖されたと告げた。要するに、もう各所の収容所のために何も行えないことになる！

⁴⁴³ アンバラワ第6収容所に強制収容されていたM.C.C.チャックス-フレイン夫人及びA.モドー夫人は、各々1943年25日、27日付の日記で、赤十字社の配送が理由も不明のまま中止されたこと、駅から収容所入口まで運搬された大量の小包が収容所内への搬入を許されず、差出人に返送されたと記した。(Heijmans-van Bruggen, 313-314)

ヒューセン

1943年5月21日

ピート・ファン・オールトは、…中略… 彼の母親ミースは事実バラタアのチピナンに捕らわれていて、判決がまだ下されていないために便りをするのを禁じられていると話した。⁴⁴⁴ 彼女は元気になっているようで、働くことも許されている。見張りはメナド人である。その他、そこには布林ビン通りにご主人（60歳）が収容されているルーロフス・ファルク - ドゥフォールもいた。ご主人は、熱湯を足に浴びせられ、CBZに1ヶ月間入院していた。収容所の食事はまずまず。数人の女性が喧嘩しているのだが。彼女たちは未だに何もわかっていないのだ。

ヒューセン

1943年5月25日

マリオンはエルナ・リーフヘイトを訪れた。彼女は病気で、また腎臓が不全なのだ。もっとも、彼女は「ランペルサリ収容所」のために大分無理して運んだのだ。そのお返しは何なのだろう？ 彼らは「外」にいる女性たちにどなりつける。収容所のご婦人たちがお金のことで銀行へ行った。借りるのではなく、もらうのだ！ 彼らは狂っている！ ヤップは私たちに笑いこけるだけだ。（パラレル通りの）ワイブルは、グロバック[牛車]に食糧をいっぱい載せてアンバラワ婦女子収容所の中に入る機会を得た。彼はそこへ行き、警官が混じることなく、ヤップ当局の許可証をもらって中に入ったのだ。5月23日日曜日の出来事！

ヒューセン

1943年6月11日

ゲエー・ファン・デル・ホルスト医師も、ピート・ファン・オールトがバタビアに行き、母親と話したことを告げた。彼女には懲役5年が下されチピナン刑務所にいる。そこにはジャワ人の親切な医師がいて、彼女は看護婦として手伝っているが、独房ではマットの上に寝るのだ。ピートは彼女と5分間話すことを許され、毎月このことができるようだ。

⁴⁴⁴ 脚注 193参照。

ヒューセン

1943年7月20日

マリオンに次の内容のハガキが郵送された（次のページ参照）。私たちはこれをあまり信じないけど。

[中国の切手が貼られているハガキの宛先と文面（原文：ドイツ語）]

ジャワ、スマラン

ドイツ領事館気付

マリオン・ウルフ - ケルケンブルグ様

この挨拶状の転送による

正確性及び完全性に対する

保証は致しかねます。

ハイル・ヒットラー！

ドイツ放送局

X G. R. S.,

上海

グレート・ウエスタンロード3

[ハガキ裏面の文面（原文：ドイツ語）]

ベルリンからのご挨拶

あなた宛にベルリンのドイツ短波放送局より

ご挨拶が1943年5月5日に送信されます。

「お元気ですか？家族全員があなたたちのことを

真に想い続け、再会が間近なことを

喜んで待っています。みなさんによろしく。

母より

私たちは、あとで詳しいことがわかることを望んでいる。トーマス夫人もこれと似たような便りをライデンにいる長男ハンスと姉妹のゲルマイネとイルゼから受けた。でもそこには少なくとも名前が記されていた。

ヒューセン

1943年8月10日

テオ・リュバイ・バウマンは、彼の母親とハルトツホとトース・ボーン・ファン・オスターデ両婦人が戦争捕虜の夫たちからハガキをもらったと語った。マリオンにはまだ何も届いていない。

ヒューセン

1943年10月19日

午後、モーフ夫人と息子アーレントのことでとても落ち込んでいるモーイ夫人をお茶に招いた。この息子は他の大勢と一緒にジュルナタン刑務所に捕らわれていて、ひとつの場所に15人でののだ。彼らは第一日曜日と第三日曜日に食糧、洗いたての衣類、タバコ2箱を所持することが許されている。面会はできない。

ヒューセン

1943年11月13日

リュバイ・バウマン夫人は、…中略… 日本からの(?) 英語で書かれたファン・レーウエン氏(丘陵⁴⁴⁵ 中立校の教師)の手紙を私たちに見せた。その手紙の中で、彼は奥さんの死亡の事情について尋ねていた。要するに、男の人たちは本当に日本、タイ、ビルマ、台湾へ移送されたのか? 若いトビアス夫人(オリーヴェの娘)は彼女の夫がシンガポールで死亡したとの通知を受けた。このようにして、戦争捕虜収容所からまだいくつか正式に通知が届いたらしい。私でもぞつとする!

ヒューセン

1943年12月13日

ジュルナタンではもらう食事も良くなり、入浴を許されているし、より少ない人数で独房にいて、いわゆるサンコ⁴⁴⁶ を作るために働かされている。また、少女たちのグループとリーダーがアンバラワからジュルナタンへ移された。彼女たちは、ある寸劇の夕べに反日的なことを演じたために、3ヶ月の刑に処された。馬鹿なことをしたものだ! それでもって何を達成しようとする気か!

447

⁴⁴⁵ 「丘陵」はスマラン市の山の手を示す。

⁴⁴⁶ 脚注 241参照。

⁴⁴⁷ 1943年1月に、アンバラワ第六収容所である祭りの夜に、「昇ったお日様がどんなに高くあっても、いずれは沈むであろう」という1節のある歌が歌われた。ひとりの被抑留者の女性がこの歌の内容が書かれた紙切れを密かに収容所外部へ持ち出そうとしたところをジャワ人の警官に取り上げられてしまった。1943年9月には、収容所リーダー、その夕べを指揮した女性、そしてその歌を歌った少女たちはスマランの刑務所へ移された。(Heijmans-Van Bruggen, 11, 135-139)

ヒューセン

1944年1月25日

ハルマヘラから去ってしまった夫たちを持つ妻たちはとても滅入った気持ちでいるが、私の場合は、ほとんどが、各地の収容所で14歳の息子を手放さなければならない母親に同情するのだ。何はともあれまだまだ小さいのである。⁴⁴⁸ ランペルサリ、アンバラワ、スモウォノ⁴⁴⁹ などからの子供たちには収容所で面倒を見てくれる父親がいない。女性たちにとっては気も狂う想いでしよう。

ヒューセン

1944年2月5日

リュバイ・バウマン夫人のマランへの旅は問題なしには済まなかった。今は全方向に一日に1本の列車だけ運行されるため、幹線バタビア - スラバヤ急行は運休してしまった。列車は、主に中国人が大勢いて超満員。スラバヤ - マラン間は三回も目隠しが施され、つまりグベン - ウォノクロモ、バンギルを通過してプリンビン - マランと。マランの婦女子収容所は非常に良好である。パサールもあるし、お金もある。マラン - バトゥー区間の通り沿いに住む人たちの一部が去った。他の人は何もそれを知らない。⁴⁵⁰

ヒューセン

1944年2月20日

全ての男子が南部ジャワから去ったらしい。印人はバンドン、トトック [純血オランダ人] はバタビアへ。

⁴⁴⁸ 婦女子収容所にいた少年たちは、ある特定な年齢に達すると男子収容所または少年収容所へ移された。1944年7月以降は、10歳及びそれ以上の年齢の少年たちされも母親の元から連れ去られた。(Zwitzer, 70から)

⁴⁴⁹ スモウォノ収容所は、ソロの北西部から約25キロ離れた蘭印軍の元野営地に設置された。1942年12月から1944年3月までは、ソロとその近郊の婦女子が抑留されていた。その後、彼女たちはアンバラワの第六・第七収容所へ移された。(Van Dulm 他, 149及び Van Bruggen及び R.S. Wassing, 67)

⁴⁵⁰ マランの大規模な婦女子収容所は、町の北西部ベルゲン地域にあった。この収容所の北側の一部は、1943年12月まで就労中の男子(ニッポンワーカー)とその家族の住居として利用されていた。日本当局からこれら従業員が解雇されたあと、男子はマランの海軍野営地(男子収容所)へ移された。1943年11月以降、日本人は南部ジャワにある収容所へ婦女子の移送を開始した。最終のグループは1944年8月に発った。(Van Dulm, 他., 178)

ヒューセン

1944年3月10日

3時20分前に、タウン方向からジョンブランへ向かう婦女子の輸送が。このことは5時半頃までずっと続き、最後の30分はバランだけが。合計超満員のトラックが10台とバスが29台だったので、確実に1,200人、あるいはそれ以上だ！さらに、トランク、カバン、大きな荷物入れを積んだトラックがたくさん。一体どこから来て、どこへ行くのだろうか？午後ずっと私はそれを注意深く見ていたが、良い気晴らしだった。

ヒューセン

1944年3月15日

グレート・ハーヴァーは、ジュルナタンに収容されていたアンバラワ第六収容所からの少女と路上で話したと言った。彼女には今度1年の刑が言い渡され、警官の護衛でブル刑務所へ向かう途中だ。

ヒューセン

1944年4月10日

ワイブルはCBZ中央市民医療施設にいる収容所から来た病人（現在52名）に毎日1回栄養のある食事を手配する許可を得た。たくさんの苦労の末、このことを許され、何人かの婦人が各自5人分を手配しており、ワイブルはそのためのお金を集めている。

ヒューセン

1944年5月23日

ネルと母親Q. は、下士官と結婚した長女からメダン発のカードを受け取った。私はそのハガキの1枚をもらえるらしい。赤い切手が貼ってあるし、ジャワのとは違うからだ。

ヒューセン

1944年6月1日

Q. 夫人は昨日、戦争捕虜収容所から彼女の夫（職業軍人）のハガキを受け取った。

ヒューセン

1944年6月8日

本日、靴下の編物代2ギルダーを稼いだので、このお金をQ. 夫人が彼女のご主人のために自分の写真を撮らせることができるようにとプレゼントした。

ヒューセン

1944年6月14日

ピートQ. は、父親に送ることを許されているQ. 夫人、アーリ、リーシェの写真にチャップ [スタンプ] を早速押してもらってきた。そのあとこの写真を封筒に入れ（手紙はだめ）2セントで収容所へ届けられる。違う文字を記載しなければならないので、⁴⁵¹ 1月に場所が変わったこと以外は、そこがどこだか誰も知らない。

ヒューセン

1944年 8月 3日

ハンナ・ウィーゲルスの誕生日。…中略… ハンナは有頂天で刑務所から帰宅した。なぜならば、彼女の夫フリッツが誕生日を思ってくれたから！彼が送ってくれたハンカチに、8月3日 P. F. [proficiatおめでとうの略]と刺繍がしてあったのだ…！ もちろん彼は今日特別にごちそうしてもらえる。今度、ハンナは、プルウォレジョから他に8人の欧州人と一緒にここに移された彼女の兄のために毎日食事を送ることも許されたのだ。

⁴⁵¹ 日本人は収容所を示す2文字の暗号を使用した。

ヒューセン

1944年8月8日

旅行用のイジン〔許可証〕は、今後本当に特別な場合のみに交付される。要するに、大勢は家に留まらなければならないのだ。また、延長も受け付けてもらえない。

ヒューセン

1944年8月19日

フリッツ・ウィーゲルスと他のリクユ〔陸輸〕の大勢とともに逮捕されて今日で6ヶ月だ。⁴⁵²他の場所のリクユ職員を加えて、ここジュルナタンには100人は収容されているはずだ。大方の人が未だにこの件で調査されている！ハンナ・ウィーゲルスは今日運が良かった。彼女が食事を持ってジュルナタンで待っていると、エヌマタが現われ、彼女と他の6人の婦人が中に入り、夫と話を許可を受けたのだ。フリッツは元気そうで、良く手入れして長い髪（坊主頭に剃られてはいない）！

ヒューセン

1944年8月29日

オルトマンズ夫人と他に約20人のリクユの女性〔陸輸職員の妻たち〕は、今日ジュルナタンにいる夫たちからの衣類などを返された。ウィーゲルスはそこに含まれていない。彼女たちはそれできり乱しているし、何もわからないのだ。

ヒューセン

1944年9月10日

ハンナ・ウィーゲルスはたくさんのブセック〔カゴ〕を持ってジュルナタンへ。どのブセックも花で飾られ、おいしいものが詰っている。晴々しい様子。彼女は誕生日である夫のフリッツに会うことをエヌマタが許してくれるだろうと願いながら子供も一緒に連れて行った。収容所において何も夫や息子たちのことを知らない他の多くの女性たちと比べたら、何と彼女はまだ運が良いの

⁴⁵² この男子たちは、鉄道の推測されている妨害工作に関連して逮捕された。（「序」参照。同じく、Brugmans 他., 243-244及びFrans van Dompseleer *Een Indische Nederlander in Nederlands-Indië* (Scheveningen 1997), 109-199 参照)

だろう！…中略… ハンナはフリッツに会うことができなかった。ケンペイタイ員が来なかったからだ。

ヒューセン

1944年9月28日

L. フォールバイがイエチェに会いに来た。彼女は、モーフが収容所で亡くなったことを聞いた。⁴⁵³ さらに、全ての女性と少女がバンコンからグダンガンとランペルサリへ移され、ハルマヘラの女性たちも同じように。男子と12歳以上の少年は全員バンコンに収容された。きっとマリオンはエーリックも手放さなければならなかったのだろうか？⁴⁵⁴

ヒューセン

1944年9月29日

ハンナとブックは、子供ふたりを連れてジャクサ [判事] (ボジョン) のもとへフリッツと一緒に歩いて行けるようにすでに8時 (ニッポン時間) にジュルナタンへ向かった。たくさんの男子がいる場合には、彼らは腰をロープでつないで固定するか、手錠をかけるのだ！…中略… ハンナはまた彼女の夫に会うことができなかった。すなわち、明日また様子を見るのである！

ヒューセン

1944年9月30日

やっとのことで、フリッツは (手錠をかけられ) 他の数人とジャクサ [判事] のもとへ連れて行かれた。ふたりの子供は午前中ずっと彼のところに留まることを許されたが、他の家族は順番にであった。全員元気な様子だった。

フレddie Q. は昨日バタビア方向へ向かう機関車を2両付けた列車を見た。髭と目出し帽を付けた被抑留者で満員のだ。

⁴⁵³ W.モーフ氏は1944年9月5日享年61歳でスマランのバンコン収容所で死亡した。(Zwitzer, 347)

⁴⁵⁴ 息子ハンスはすでに婦女子収容所からバンコンへ移されていた。

ヒューセン

1944年10月19日

ボビーX. は昨日グダンガン収容所の一部の人たちがトラックに積み込まれているのを見た。今度はどこへか？また、誰がそこに居合せているのだろうか？同じく、ヘルマヘラ収容所も全く空になったらしい！まったく盛んに女子供を移動させていること！

ヒューセン

1944年10月27日

昨日Q. 一家は孫からの5.50ギルダーが入ったメダンからの手紙を受け取った。私はその切手付きの封筒をもらった。

ヒューセン

1944年11月12日

ネルは、外で働かされる半ズボンだけを付けたバンコンの少年たちが乗ったトラックを何台か見た。彼らは陽気だったが、大半が青白い顔をしていた。彼らははしゃぐことを許され、通行人に挨拶した。少年たちにとっては良い気晴らしになるようだ！

ヒューセン

1944年12月6日

女子供をいっぱい乗せた列車がまた到着した。バンドンかららしい。⁴⁵⁵ 荷物の運搬は厄介だし、家族はさらにばらばらに引き離される。

ヒューセン

1944年12月15日

アンバラワの刑務所⁴⁵⁶ では一日の死亡者数が10人へと増加した。原因：栄養不良！今度は妻た

⁴⁵⁵ 1944年11月から12月には、事実、バンドンの収容所であるチハピットとカレーズから婦女子の中部ジャワへの輸送が行われた。（Van Velden, 534）

ちが自分の夫に食べ物を届けることが許された。

ヒューセン

1945年1月14日

リクユ [陸輸] 職員の妻たちは、ジュルナタンへ呼び出された。しかし、これはジャクサ [判事] のリストにある者でなく、ケンペイタイのリストに載っているオルトマンやティーウェ・ナーヘルを含む22人の男子を対象にしたものらしい。妻たちは自分の夫がジョクジャカルタへ移されるので、別れを告げることを許された。

ヒューセン

1945年3月25日

お昼の郵便で、Q. 老人 (!)、そしてポップとヤーピーの父親からと2枚のハガキが届いた。両方とも12月のものだ! ジャワW. (バタビア) 発だ。⁴⁵⁷ 彼らはまだ生存中! 大きな喜びと興奮が。

ヒューセン

1945年5月16日

ここに1月23日付けのメダンからのハガキが届く! 要するに、4ヶ月も経過していた。

ヒューセン

1945年6月7日

アンバラワのリクユ職員はBPMのビルに向かう。再び尋問を受けるのか? 彼らはとても元気なく、そのひとりほとんど歩けなく他の人に助けられていたし、他のひとは話すことが全然できないでいる。そのビルの前で彼らは食べることを許されたが、その食べ物も簡単に路上に投げら

⁴⁵⁶ これは、ウィレム一世要塞を意味する。この要塞は1942年3月から日本降伏までの間、政治犯、その他全住民層からの罪人や容疑者対象の刑務所として使用された。ここの囚人総計約1000人のうち、少なくとも150人、おそらくそれ以上の人が死亡した。(Van Dulm, 他., 145-146)

⁴⁵⁷ 脚注 452参照。

れたのだ！彼らは最後の粒まで路上からあさっていたし、ブロッグ氏もその中にいたが、全員にまだその驚きを残こすことだった。

ヒューセン

1945年6月8日

イエチェからリスツ夫人は彼女の夫がジャカルタ（チピナン刑務所）で死亡したとの通知を数日前にケンペイタイから受け取ったことを聞いた。私は度々この夫婦についての奇妙な話に笑っていたが、こんな目に合って非常に痛ましいことだと思う。ふたりはとても愛し合っていたのだ。

ヒューセン

1945年6月11日

ハンナ・ウィーゲルスはプックらを連れて再び急いでジュルナタンへ向かった。多分フリッツはまた表に出てくるかもしれないのだ。土曜日には48人全員が再びBPMを訪れたが、彼らと話すことも食べ物を渡すことも全然できなかった！…中略… マリー・ヒューベル-レップル（動物病院）は少し前に彼女の父親（当時はハルマヘラ収容所の被収容者）にハガキを送ったら、そのハガキの上に、「スダー・ラマ・マティ [大分前に死亡] 」と記されて送り返された！今は何ともすばらしい統治下！

ヒューセン

1945年6月14日

3時（N.T.）にハンナと子供たちが帰宅したが、フリッツについての詳細はまだ何も知らない。30分ほどしてプックが戻り、食べ物の許可が撤回されたと告げた。フリッツと大半の人が5年の刑を受け、二、三人が6年から7年の刑を！彼らは今度、当然アンバラワへ行かされる。ハンナは病床にある。もちろんその反動で！

ヒューセン

1945年6月20日

隣家にウィーゲルス老人（フリッツの父親）が旅の途中に泊まりに来て、イエチェ・メイヤースに〔彼女の婚約者〕ディック・ファン・ウーシックからの分厚い手紙を持って来て、私にはコレクション用の色々なものをだ。つまり、*Nippon Times*⁴⁵⁸、絵ハガキ、2枚のハガキ（本物のニッポン製）、子供新聞、スラバヤで飲み水用の井戸（爆撃の結果、時々水道管が不良となるのだ）がある家々に貼られている「ピサ・ディミヌム〔飲める〕」というようなトナリグミ〔隣組〕のポスター。

ヒューセン

1945年6月26日

数週間前にご主人が亡くなった知らせをもらったリスツ夫人に、今度はご主人は心臓が悪いので、ソロに彼を訪ねよとの呼び出しが届いた。この知らせを受けた者は、おそらくリスツがまだ生存していることを言わない配慮をしたのだろうが、これはケンペイタイの組織に関係していたのだ。このことはウルス〔手配〕したのは、あるバーの女給で、リスツ夫人について行くつもりだ。どういう結果になるか、私たちは興味津々だ！

ヒューセン

1945年7月2日

イエチェ・メイヤースは朝の列車でアンバラワから戻った。⁴⁵⁹ 刑務所の状況はとても悪い。ハンハルトとかいう夫人（このハンハルト夫人の義理の姉）は、間に合わなかった。彼女のご主人はもう亡くなっていたからだ。フリッツ・ウィーゲルスはまだまだ元気のようにだが、ネス・ファン・ウーシックは非常に痩せこけたが快活にしている。彼らは自宅からお金とオバットゥを受け取ることを許されたが、今後面会と食べ物のキリマン〔差し入れ〕は3ヶ月毎に1回となった。依然、戦争捕虜も収容されていて、また、アンバラワとバニュビルの女性も。⁴⁶⁰

⁴⁵⁸ 日本軍のプロパガンダ用英字新聞。

⁴⁵⁹ 彼女は、刑務所にいる判決を下された陸輸局職員を訪ねにアンバラワへ行った。

⁴⁶⁰ バニュビル第十収容所（元収容所）及びバニュビル第十一収容所（元兵舎）は、1944年後半からはジャワ全土からの婦女子対象の集結用収容所であった。（Van Dulm 他., 150-151 及びRichard N. Voorneman, *Banjoe Biroe XI. Een vrouwenkamp op Java.* (Kampen 1995)参照）

ヒューセン

1945年7月3日

お昼の列車でハンナが帰宅し、アンバラワと彼女の夫フリッツについてたくさんもたらした。…中略… 捕虜たちは月に1回30ギルダの郵便為替を受け取ることが許されている。しかし、大勢が看守に賄賂を贈るために100ギルダ～300ギルダを欲しがっている。彼らはそのお金で牛乳や卵を買うことができる。彼らは全員RP服（RPはルマー・ブンジャラ [刑務所]⁴⁶¹ のこと）を着て中庭で食事していた。そこで病棟を担当しているススマン・スモサトロ医師によると、一般的に人々は病気が原因でなく、飢えが原因で死亡するということだ。今は肝油などオバトゥを送ってもいいことになっている。でもそれをどのようにしたら手にすることができるやら？ 1ビンに対して約100ギルダ払えば手に入れることができるのだが、中国人が全部しっかり保持しているのだ！

ハンナは6月2日月曜日には幸運だった。彼女は9時半から2時までフリッツが現われるのを待たなければならなかったが、彼と30分も話すことができた。すなわちそこには「お偉方」がいなかったのだ！ハンナは自分と息子レンノ、そしてイエチェの旅費とフリッツのためのキリマン [小包] で全部合わせて100ギルダ費やした。でも彼女は今、全てがわかったのであまり高くつかないのだ。第3日曜日に彼女は再び行くつもりだが、面会が許されているのかあまり確かでない。フリッツは30ギルダ欲しがった。彼の命に係わっているので、彼女は彼の衣類を全部売るつもりだ。

ヒューセン

1945年7月4日

Q. 夫人とX. の子供たち（ヤーピーとボビー）は、' 05 [1945年] 5月26日・27日付けの戦争捕虜収容所からのハガキを1枚受け取った。つまりかなり早く届いたのだ。（ジャワW.N. 収容所）。

ヒューセン

1945年7月5日

イエチェが事務所から悪いニュースを持ちかえった。ヨーピー・リュバイ・バウマンがジャワW.N. 収容所から彼女の父親のハガキを受け取り喜んでいた。しかし、彼女がそれを読んでいる時に泣き出してしまった。なぜならば、父親は病院にいてとても重い病気を患っていると書いてあった

⁴⁶¹ ウィレム一世要塞のこと。（脚注 458参照）

からだ。彼女はあまりこのことを心配しないほうがいいのだ。全てを神の御手にゆだねるのだから。ハガキは5月26日付けた。彼がすでに亡くなってしまったとは誰が知ろう。ますます悲惨なニュースが伝わってくる。

ヒューセン

1945年7月16日

ハンナとイエチェがアンバラワから戻った。ハンナはまた幸運だった。フリッツは面会を許されていなかったが、彼の兄トーンはできたのだ。ウィーゲルスの名が呼ばれた時に、トーンの後ろにフリッツが歩み寄った。食べ物が入った大きなカゴは各自とネス・ファン・ウーシック宛てに受け入れられた。つまり、お米、カチャン・イジョ [小粒グリーンピース]、バナナ、テロル・アシン [塩漬けの固ゆで (アヒルの) 卵]、デンデン [乾燥肉]、肉とベーコン等、一人分15ギルダーとたいしたものだ。さらに、明日までは夜勤に実行するある看守を介して毎日夕飯が少し。また、ハンナも手紙を1通もらい、その看守を通して返事が送られた。フリッツはこっそりと1ヶ月に100ギルダーを欲しがり、ネスも同じだ。トーンは150ギルダー以上を払い、中国人は500～1000ギルダー払うのだ。彼らはそれを事実秘密に手に入れ、それでもって密かにあらゆる物を得ることができるのだ。

イエチェはアンバラワで病気になり、何もできなかった。ポルティール夫人と他にたくさんの方たちは、捕虜のために立派に活動している。イエチェはある収容所から5つの棺が運ばれるのを見た！フリッツとトーンとブロッグは病棟に臥している。病名は不明 (予防拘禁棟)！そのため、彼らにとっては都合が良いし、もっと楽なのだ！彼らは少し痩せたが、前回よりはもっと元気なようだ。彼らは全員が14日後にはもう面会が許可されないと予期している。

ヒューセン

1945年7月30日

ハンナは、ネス・ファン・ウーシックが重病に臥しているとアンバラワのポルティール夫人を通して知らせを受けた。病人をたくさん載せたリストがある。こっそりと食べ物とお金を送ることは当分駄目になった。なぜならば、全てが発見され、何人かの看守がケンペイタイのもとに連れて行かれたからだ。女性たちは生意気で、不注意になりすぎたのだと私は思っている。

ヒューセン

1945年7月31日

1月25日の被抑留者⁴⁶² が今収容されているヌガウイでは死亡者が続出している。これらの人々の70%がすでに亡くなっただけだ。

ヒューセン

1945年8月6日

12時にハンナ・ウィーゲルスがアンバラワから戻った。以前よりもさらに厳しかったようだ。イステイメワ刑務所（政治犯を対象とした特別刑務所）は今後面会と食べ物を受けてはならない。一方、トーン・ウィーゲルス（彼女の義兄）等のような人は面会を月に3回許されているが、家族の者とだけだ。リリィ・ウィーゲルスもそこを訪れ、もちろん食べ物が入ったカゴをトーンに持って行った。ハンナも彼に頼んで、いっぱいのカゴを渡し、それがフリッツに宛てたものだと告げたのだ。それに対してトーンは、フリッツがマラリヤで臥しているため、一度も会うことができなかったと言った。ネスへのお金などは、ハンナがポルティール夫人に渡した。都合が良いことに、彼の妻（リーン）からのハガキも届き、彼女はポルティール夫人により全てが手配されることを望んでいた。アンバラワでは、ここ2週間にスタール氏、フレデリックス（すでに亡くなったヒューゴの父親か？）、そしてカレン通りにいたスミット親子（父親と息子）が亡くなった。アンバラワでハンナは、スマランから来た病人と医師ひとりと看護婦たちからなるおそらく200人ほどの女子被抑留者の一隊に出会った。担架も何台もあり、茶色の布で覆われたていたのもあった。

ヒューセン

1945年8月15日

アンバラワのネスから手紙が届き、彼はその中で、例のお金を手助けとなり、また、フリッツ・ウィーゲルスも大いに助けてくれたと記していた。要するに、役に立った訳だ。イエチェはヌガウイに関しての嫌なニュースをもたらした。現地では、アーレント・モーイを含む、スマランに今年の1月25日に強制収容された何人かが亡くなっただけだ。

⁴⁶² 1945年1月末から日本降伏後の数週間にわたり、ヌガウイにあったファン・デン・ボス要塞の刑務所には、印欧人少年男子と若干数の若い女性が強制収容されていた。彼らは1945年初旬に行われた一斉検挙の際に、反日グループの容疑で中部及び南部ジャワの各地で逮捕された。(Van Dulm 他., 162)。 「逮捕と家宅捜査」ヒューセンの日記 1945年1月25日参照。

戦況の報道と流言

バタビア

ハンベル

1942年4月2日

私たちが今どんな挨拶をしているかご存知？「Juni（6月）」です。予言によれば、私たちは6月に解放されるとのこと！ JuniはJappen Uit Nederlands Indië（ヤップは蘭印から撤退せよ）という意味です。

ハンベル

1942年5月5日

バンタムで反乱が勃発したみたいです。負傷したヤップの一団を見ます。彼らの鼻や耳を切断したのです。これは報復です、なぜならヤップがランポッカーズ[略奪者たち]の手を切り落としたからです。

ハンベル

1942年5月8日

今日なんて私たちは、ナンセンスなニュースを面白がったことでしょう。B夫人と彼女の知り合いがここにやって来ました、その男性は千里眼とのことです。…中略… さて彼は言います。私たちは、5月15日以降は通りに出てはいけない、通りでは戦闘があるだろう、私たちは少なくとも1週間分の食糧を家に蓄えておくべきだと。⁴⁶³ そして6月20日か21日以降は、もうヤップはいなくなると。このようなおしゃべりが全部実現するかどうか見てみましょう。

バンタムのどこかで、原住民がオーストラリア人を刑務所から連れ出し、一部はもうヤップ手中にはありません。ヤッペンがモスクを封印したり、ハジたちにブタを屠殺させる習わしです。⁴⁶⁴ 今晚、通りで銃声がするのが聞こえました。それが何だったのか分かりません。見に行かない方がいいのです。…中略… 一部の人はなんてあらゆることをでっちあげることでしょう。極端なうわさ話しが広がっています。海外放送では何ひとつ語りません。

⁴⁶³ 多くの人々は、ジョヨボヨの伝説をもとに日本占領は3ヶ月以上も続かないであろうと信じていた。

⁴⁶⁴ 「日本人との接触」ポールの日記、1942年5月10日参照。

ハンペル

1942年5月15日

バンザイ、アンボン湾を爆撃しました。早くここまで来てほしい。私たちは味方が来るのを待ち望んでいます。

ハンペル

1942年5月23日

ほらね、人々がこんなふう話すのを聞いていると、蘭印はもう米軍の占領地になったかのようです。もちろんバタビアを除いてですけどね。

ハンペル

1942年5月27日

今、この中からはまた何が真実なのでしょう？夜中の1時にいつもどこかの放送を盗聴している女性が、ヤップ全員のお腹が膨れ死亡するように、アンボンでアンボン人が飲料水に毒を入れたと話しました。ここバタビアで起こった事件のようなものかしら。⁴⁶⁵そしてここでは、誰かがドイツ人とヤップの話し合いを盗聴し、日本は「爆撃された」ので思案にくれていると言っていたといううわさ話も広がっています。天皇はこの戦争を望まなかったし、日本ではまた地震があったとのこと。何が真実なのかしら？

ハンペル

1942年7月3日

パパのラジオは封印されました。…中略… その結果、彼のラジオはまったく動かなくなりました。もちろん彼は不満です。ラジオを解体してこっちのネジを緩めたり、あっちのねじを緩めたり。ちょっとペンチも加わります。パチン、ようやく正しい周波数になりました。その時、私たちはセレベス島のクンダルが爆撃されたと聴きました。ワーイ！ようやく彼らは始めたのです。あなたが今晚私の傍に横たわっていないのは幸い、なぜなら私はいっしょに闘っていた夢を見た

⁴⁶⁵ 「雰囲気/戦後生活への想い」ハンペルの日記、1942年3月10日参照。

のです。とてもすばらしかったわ。でもラジオを毎回また正しい周波数にするのは面倒です、でも労は惜しむべきではないのです。

ハンベル

1942年7月13日

ママBはまた奇妙な話しを知っています。サバンとパダンが米国の手中にあるはずだとのこと。パパがフリスコ（サンフランシスコラジオ）を聴こうとしないのは残念です。なぜなら蘭印のことを時々報道していますから。その放送は10分後に始まり、マレー語—オランダ語—マレー語が聴けるのです。このニュース報道には、私のラジオをつける必要があります、さもなければ彼のラジオをいじくりまわさなければならぬからです。私はオランダ語が始まったら電源を入れ、終わったらすぐに止めなければなりません。もちろんママBには、私たちが海外放送で2つの都市に関しては何か聴いているとは言えません、なぜなら彼女がスパイでないとは分かりませんし、このようにして彼らは常にスパイを誘導するからです。

ハンベル

1942年7月20日

マレーラジオが小スンダ列島は明け渡されたということ認め、「海外放送」も敵側に手の内を見せないよう、勝利に関して多くは報道したがらないとのこと。フー、ヤップはまるで占領地で何が起きているのか全く知らないかのようです。そしてこれは面白いわさ。アンボンにいるヤップは、夜中にその島では眠りたがらないとのこと。彼らは夜6時に乗船して、朝6時にまた戻ってきます。これはすべてその島では夜中にお腹が膨れるというグナーグナ[魔術]のせいです。バンドンでヤップはとても神経質になっています。上空は飛行機でいっぱいです。みんな一方から飛び立ち、戻って来ると数が減っています。何が起きているのでしょうか？

ハンベル

1942年7月27日

ある人は、連合軍が占領したマカッサルでは、5時から6時の間周波数51で聴けると言い、ある人は夜10時に周波数57で聴けると言います。そして今、パパと私はラジオでそれをそれぞれ探しています。時々私たちは同じ放送局が聴けたり、時にはすこし違った放送局だったりします。スラバヤへの鉄道が脱線したとのうわさも広まっています。郵便が戻ってきて本局で差し止められて

います。…中略… 今日のはじめて防空訓練がありました。メイドはちょうどパサールにいて、彼女はヤップに避難するよう命令されました。彼女は、どこに行けばいいのかと尋ねました、というのはニッポンがすべての塹壕を取り除いてしまったからです。最初の救援飛行機が上空にいるのを見たら、どんな気持ちがするのでしょうか!?

ハンペル

1942年8月15日

ニッポンは、今日どうしたのでしょうか？4度空襲警報、普段は毎日12時の時報としてだけなのに。なんと飛行機が上空に何機もいました。全速力で一方向に飛んでいきました。尾部に赤い印を吊り下げていました。どういう意味なのでしょう？「危険だ」ということでしょうか。またおおげさなうわさが広まっています。フロレスとティモールがすでに陥落したとのこと。救援が早く来ることを願います。…中略… 私たちは今のところ5日間の一部灯火管制。空襲警報が鳴ると灯りを消さなければなりません。夜中の12時前は自分たちで消さねばならず、12時を過ぎると中央電力会社が全部消します。

ハンペル

1942年8月17日

日本はいったいどうなっているのでしょうか？多くの人が愚痴をこぼしているのが聞こえてきます。なぜなら現在、BBCやフリスコ（サンフランシスコ放送）が流れると、彼らはラジオに電気が流れないように中央で電源を切ります。ストリウスウェイクの男子たちが不平を言っているのが聞こえます、なぜならそこではラジオが封印されていないからです。電池で聞けるラジオがあるとうれしい。彼らの戦況が悪化しているのかしら、それで私たちはラジオを聴くことが許されないの？…中略… 配電網が切れたので、私たちは日本のニュース報道をいくらか後になって受信しました。それは「米国は決してここに現れない、しかし我々は注意するべきである」と始まりました。彼はあらゆる空襲警報に日本名をつけています。「何々チャーとか、これこれチャーとか」⁴⁶⁶ 突然警報が聞こえなくなり、ヤップが日本語で何か言うのが聞こえました。そのアナウンサーは明らかに間違った「ハ-チャー」だったので。その後、音楽が聞こえ、それからパパはラジオを消しました。残念、もっと音楽が聴きたかったのに。私たちのラジオがないのは寂しいです。やはりよい音楽を聴くのは楽しいですから。こんな時期に、突然まったく異なった気持ちをするのです。明るくなります！

⁴⁶⁶ 日本の空襲警報。「日本人による措置と規定」ポールの日記、1944年2月18日も参照。

ハンペル

1942年8月29日

うわさを信じ他人に伝えるのに人々が疲れないとは。女王様が、フリスコ（サンフランシスコ放送）でマカッサルがまた解放されたが、とても多くの血が流れたのは残念だと言われたとのこと。哀れなマカッサル、何度あの街は解放されたことでしょう。

ハンペル

1942年10月16日

ママは、私たちはここではほとんど解放を感知することはないだろうと言います。すべては外領でなされ、だからここで戦闘はないだろうと。真実だろうことを願う。でも早くやってきてほしい。見ている限り、ここにはそれほど多くのヤップはいないようです。

ハンペル

1942年10月17日

イタリアに関して、みんながうわさしていることは本当かしら？イタリアが降伏？3日前、パパは老紳士C氏と話し、彼は、イタリアはもうそれほど長続きしないだろうと言いました。さて、あとはドイツ、それからもちろん日本が続きます。

ハンペル

1942年10月19日

イタリアのうわさは間違いだと、まだラジオを盗聴できる人々が言っています。

ハンペル

1942年10月25日

救援は近づいているのかしら？Bさんの向かいに住む一家は、1週間にヤップの非常配給のために数千もの袋を作っています。それに調理された食事と水を入れます。その周りは別の袋で囲まれます。これですべて数日間保存します。小包は全部、外領にいるヤップのため飛行機から投下さ

れます。長引くほど悪化します。現在、それは中止されました。それから何を予測できるでしょうか？彼らは外領地から追い出されたのでしょうか、それとも彼らが大勝して通常の方法で手に入れることが出来るのでしょうか？…中略…その袋作りをしている一家のところに、ひとりのヤップが来て、その人は、日本人が蘭印は「デ・ブラウン一族（インドネシア人）」に贈り物をするだろう、それから日本に引返すだろうと話しました。そして米国がここに来ることになれば、彼らは「デ・ブラウン一族は我々が撤退しても、また国を再度占領されるほどとても愚かだ」と言えるのです。そんなふうには毅然と彼らは出発しました。

ハンペル

1942年11月10日

米国のモロッコ上陸については、一度もニュースでは放送されませんでした。昨夜ニュース解説者がそのことを話していました。失言することがよくあるのです。ロンメル⁴⁶⁷が降参したというのは本当かしら？ロシアと日本が戦争しているとのうわさも広まっています。流布しているうわさで時々気が狂いそうです。どこで聞いてくるのでしょうか？

ハンペル

1942年12月25日

味方は前進していますよ。サバンがすでに母船の飛行機によって爆撃されました。来年には夫が帰宅。

ハンペル

1943年1月8日

海外放送は口を封じています。ヤップの船がたくさん爆撃されただけ、どこにも上陸していません。急いで欲しい、雨期が始まりました。

⁴⁶⁷ ドイツのE.ロンメル将軍のこと。

ハンペル

1943年2月14日

タンゲラン通りでヤップの飛行機が墜落しました。柵の上方を揺れながら、T一家の表のベランダに墜落しました。年長の子供たちはうちの近所のP.V.⁴⁶⁸にいました。だから私は、またうわさを広める他人を介したのではなく、直接知りました。すべて燃焼しました。その父親は向かって来たのを見、家族といっしょに裏に逃げました。幸い、その家族は誰も事故にあいませんでした。ただその飛行機は、通りを歩いていた原住民何人かの頭を翼で切断しました。その飛行機に乗っていた5人のニッポン人は焼死しました。*Asia Raya*⁴⁶⁹の新聞には何一つ載っていませんでした。メイドによると、その日には、タンジョンプリオクとバンドンにも墜落したとのこと。チデン収容所の女性たちは、閃光を見ることができ、みんなカワット[鉄条網の柵]の前に立って見ていました。そしてヤップはすぐに映画を撮影しました。どんなプロバガンダを作るつもりなのでしょう？この事故のうわさは、町中に雪崩れのように広がりました。

ハンペル

1943年2月16日

M.S.のインドネシア人メイドが、私に言いました。「奥さん、信じられないかもしれませんが、私が幼く父が亡くなる時、彼は私がネネック[老女]になるまでにいろんな経験をするだろうと言いました。私たちは3年と3ヶ月外国人に占領されるだろうと！」まあなんと、3年と3ヶ月。どうして暮らせばいいのでしょうか？

ハンペル

1943年4月23日

*Asia Raya*に、英国が平和協定を結ぶつもりだと載っていました。チュニスではドイツ軍が36時間続けて攻撃しています。海外放送では少し異なって放送しています。急いでいるのかしら？でもここではアンボンが爆撃されただけ。ここに何か投下すればいいのに。そうすれば気分が違おうでしょう、少なくとも私たちのことを考えてくれていることが分かるからです。

⁴⁶⁸ ボーイスカウトの略称。

⁴⁶⁹ 日本人によって検閲されたマレー語の日刊紙アジア・ラヤ*Asia Raya*は、日本占領中バタビアで出版された。(De Jong 11b eerste helft, 242)

ハンペル

1943年5月8日

彼らはなんて言っていますか？チュニスが降伏？本当？彼らはここ2日間ラジオで何も話していませんでした、そして今朝英国が10キロ先に来ていると言いました。*Asia Raya*でどう書かれるのか興味があります。…中略… 私たちはどうなるでしょう、チュニスが陥落したとすると？彼らは私たちを解放しに来るのでしょうか？素晴らしいことです。売り物をすべて片隅に放り出し、また何時間も読書したり、太ることにしよう。こんなに痩せているのはやはり好ましくないですからね。

ハンペル

1943年7月14日

また面倒なこと。16日から25日まで灯火管制。その他、彼らは焼夷弾とかいうものを投下するらしい。人々は防空壕を作り、水と砂を用意しておく必要があります。そうしないと、400ギルダの罰金あるいは何ヶ月も刑期を務めることになります。建物はまた灰色にしなければなりません。ちょうどすべて取り壊し、白く塗ったところなのです。ご勝手にどうぞ！

ハンペル

1943年7月23日

昨日の朝4時にスラバヤが爆撃されてから、私たちはサイレンを聞いていません。だからスパイの働きは素晴らしい、彼らが攻撃を仕掛けることを知っていたのです。最初は訓練で、今回は本気。ヤップは武器をもって町中を走っています。そう、ここに爆弾が投下されたら、インドネシア人が誰よりも先にランパッセン[略奪]をするでしょう。コーニングスプレインの美術館前には高射砲が用意され、兵士たちがいます。ホッ、私たちはジャワで1ヶ所爆撃があったことで気持ちが軽くなります。新聞によると、死者がでたとのこと。コーヒー売りが読み聞かせ、訳してくれました。

ハンペル

1943年7月28日

今日の話題は何でしょう？ムッソリーニ—イタリア!!⁴⁷⁰ いつヒトラーが続くのでしょうか？

ハンペル

1943年11月18日

バンザイ、夜中2時に初めてのサイレンを伴った空襲警報がありました。これは上空にムス[敵]がいるという合図です。まずまた悲鳴、それから突然サイレン、そして飛行機が上空に。ジャワ時間の4時半に終わりました。何が起こっていたのか、私たちにはまだ分かりません。人々はスラバヤが爆撃されたのだと言います。味方もたくさん死んでいくのは残念なことです。新聞には味方がまた海戦に破れ、報復にスラバヤを爆撃したのだと書いてありました。⁴⁷¹ そしてその報復に、ヤップはきつと収容所にミルクを供給するのを止めます。赤ん坊にさえも。もうあれもこれももらえないのです。哀れなことです。…中略… ある女性が、すでに使い走りの少年から海外放送を聞いたと言いました。カンポンには盗聴クラブがあります。原住民たちは海外ニュースを10セントで聴くことができ、それを20セントでブランダ[オランダ人]に売ります、でもヤップのエコノミストには40セントで売ります。…中略… ただ私が理解できないこと？なぜ私たちはまだ灯りをつけっぱなしにして坐っていることが許されているのでしょうか。空襲警報の際だけ、すべて暗くする必要があるのです。

ハンペル

1944年1月1日

連合軍は、私たちが解放するまでにまだ1年はかかると海外放送でも伝えていきます。まずドイツが陥落しなければなりません。それですぐに意気消沈。考えられないことです。もう1年続くなんで！

⁴⁷⁰ ムッソリーニの失脚とイタリアの降伏。

⁴⁷¹ 1943年11月17日、18日、連合軍は東部ジャワとバリ島を空襲。スラバヤ、スラバヤ港（タンジュン・ペラック）、チェブ、及びデン・パサール（バリ島）が爆撃された。これは、3度目の空爆で、東部ジャワ最大の襲撃であった。（A.G.Vromans, 'Algemene Indische Chronologie 1936-1949' (NIOD); 1943, no.49)

ハンペル

1944年2月19日

酔ったヤップが、戦闘を続けることが出来なくて、そして4月終結が予想していると口を滑らせました。なんとまあ、本当だったらいいのに。もうすべてに飽き飽きしています！

ハンペル

1944年3月8日

もう2年この困った状態が続いています。あとどれくらい続くのでしょうか？ファン・モークは、解放されるまでまだ時間がかかりそうだと行ったとのこと。「オランダが解放されれば、我々は全力を尽してあなた方を解放する！」フー、まるでオランダ人がまだ蘭印に行きたがっているみたい。こんな話しは信じられないですよ。みんなは「私たちが解放されたら、蘭印にはもう住みたくない」と言っています。でもどこで収入を得ることが出来るのでしょうか？オランダ人がそう言うのは分かります、でも印人が言うなんて？あまり多くは約束しない方がいいでしょう、まずここでの出来事を考えることです。

「蘭印の人々、頑張れ！

なぜならここは恵まれているから！」

このように3年目に入りました。今年はどうなるのでしょうか？もちろんそれほどいいことはありません。今年あまりお祭り事ありません。去年は3月1日から10日まで旗を掲揚していましたが、今年3月8日から10日まで。それをトコ・マンパンのボスに言うと、彼はびっくりして「シーッ、話してはいけませんよ、見聞するだけにしなさいよ！」と言いました。いたるところに彼らは防空壕を作っています。素晴らしい！

ハンペル

1944年3月9日

バンザイ、チカンペックで暴動があるとのこと。宗教的暴動、でも飢えが原因でしょう。50名のニッポン人に対して原住民が500名死亡したようです、ちょうどお祭り気分の時なのに。⁴⁷²

⁴⁷² 2月中旬及び3月初旬、タシックマラヤ（ガルーの南東）近辺の地区で深刻な暴動があった。（De Jong, 11b tweede helft, 556）

ハンペル

1944年5月2日

極端なことが聞こえてきます。サバンさえも味方の手中に落ちたようです。でも何も返事をしてはいけません、なぜなら自分自身のために聞くだけにするのです。ホランディアは味方の兵士によって奪還されたとか、もっとナンセンスなこと。でも哀れなクリスマス島は、この占領時代、もう何百回も味方の手中です。そして毎回何かを加えられ、常にそれは「信頼できる」のです。

ハンペル

1944年6月6日

ワーイ!!!いつも私が言ってたでしょ。「ローマが落ちれば、連合軍が西ヨーロッパに侵攻すると」昨日の午後のラジオでローマが陥没し、今日の午後ラジオでは侵攻したとのこと。⁴⁷³ そしてこれはいつも「私がどこでこういうナンセンスなこと聞いてきたか」でした。私にだって予測できます。

ハンペル

1944年6月26日

ドイツが連合軍の封鎖を通り抜けることが出来なかったと、最初に私に話す人を笑ったやるつもり。私の前には1943年12月14日火曜日のベルリン新聞*Volkischer Beobachter*があります。だからそれほど古いものではありません。それに私はもっと手に入ります。ドイツ語だとしても、ニッポン語やインドネシア語とは違います。ようやく新聞に欧州人たちの顔がでています。やはり全部ナンセンスなことが載っています。3つの放送局はすべてニッポン艦隊の敗北を異なって放送しています。何が真実なのでしょう？

ハンペル

1944年7月24日

ドイツはよし！それが私たちには必要、反逆。⁴⁷⁴ さもなければドイツは長続きし過ぎます。さて今度はニッポンでの反逆。毎月島1つでは長くかかりすぎます。ラジオを封印したり接收する

⁴⁷³ ノルマンディーへの連合軍上陸。

⁴⁷⁴ 1944年7月20日、ヒトラー暗殺が企てられたが失敗に終わった。

のも助けにはなりません。うわさは雪崩れのように町中に広がり、彼らは毎回何かをでっち上げます。

ハンペル

1944年9月6日

奇妙なことを聞きます。私たちは現在連合軍がブレーダを通過したことだけを知っています。リンブルフ州とロッテルダムに侵入したとのこと。「人々」によれば、ユリアナ王女は現在女王だとのこと。いずれにしても、ドイツはここで文書を燃やすことに慌ただしく、なぜならドイツが陥落すると、日本が何も手に入れることが許されないから。欧州の戦争が終結すれば、私たちもすぐに解放されるのかしら？…中略… まあ、新聞では、連合軍はまだバリに達しただけとのこと。もちろんインドネシア人は彼らがどこにいるのか正確に知っていますよ。

ハンペル

1944年9月24日

おや、まあ。まだ鳥肌が立っていて、私が出会う人々も、ある人は発作的に泣いています。ジャワ時間の朝7時半にサイレン。8時半に解除、しばらくしてLが真っ青で震えながら自転車でやって来た。何が起こったのでしょうか？サレンバにある彼女の家のすぐ上を、赤、白、青の旗をつけた飛行機が飛んで、オレンジ色の雨（パンフレット）を降らせたのです。⁴⁷⁵ ああ、私が居合わせたらよかったのに！彼女はなにも拾い上げる勇気がありませんでした。なぜならケイボウダンが近くにいる、すべて拾い集め、回収していたからです。M夫人は公共の防空壕にいました。それが終わった後、彼女は「残念、終わってしまったなんて！」と言いました。その結果は、現在彼女はPIDにいます。でもケンペイタイでないだけ彼女は喜ぶべきです。

ハンペル

1944年9月27日

オレンジ色の雨（パンフレット）の後、彼らは通りの少年たちをPIDに連行しました。彼らは放り出された紙を9月28日に動植物園で燃やしました。ああ、あの人たち！現在、ニッポンがあ

⁴⁷⁵ 1944年9月24日、2機の蘭軍爆撃機がプレアンガーとバタビア上空に30万冊のパンフレットを投下した。そのパンフレットには、戦況報道及びオーストラリアのオランダ当局からの通達が掲載されていた。(De Jong, 11b tweede helft, 827-828)

パンフレットを落下させたというわさが広がっています。人々がどのように反応するかをみるためです。一包みが閉じたまま通りに落下しました。1人の「カチャン・イジョー」（インドネシア兵）⁴⁷⁶がそれを拾い上げ、静かに配りました。そのオレンジ色のパンフレットに50ギルダー払いたがる人々がいます。そう、私たちには紙が不足しているのです、いずれにせよ彼らは燃やすのですから。

ハンペル

1944年12月8日

なんと、ファン・デル・プラス⁴⁷⁷、私たちが次の12月8日には、ニッポンの手中にないと言うことに何か意味があるのですか？去年もそう放送されなかったですか？そして私たちがここで耐えていることをようやく分かりはじめたのですか？ケンペイタイという言葉も理解できたのですね。もっと多くの島が解放されるのを待てば、そうすればなにか聞くことが出来るでしょう。ラジオニッポンはまた米国をさんざんのしっています。理解できないのは幸いです。

ハンペル

1945年5月25日

ニュースはもう聴けません、ラジオがないからです。何か知っている人が、私にケンペイタイに捕まっていたため⁴⁷⁸近づくなと言いました。

ハンペル

1945年8月13日

何を耳にしたと思います？ロシアが日本に開戦？ああ、3年前にもすでにうわさになっていました。

⁴⁷⁶ カチャン・イジョーは小粒のグリーンピースで、ここでは、緑色のユニフォームのためインドネシア補助兵につけられた呼び名。

⁴⁷⁷ 蘭印参議会の一員ファン・デル・プラス（Ch.O. van der Plas）は、1942年オーストラリアに亡命した。彼はオーストラリア及びニュージーランドの蘭印委員会の議長であった。（Jansen, 436）

⁴⁷⁸ 「逮捕と家宅捜査」ハンペルの日記、1945年5月21日参照。

バタビア

ポール

1942年5月10日

米軍がジャワ島南岸に上陸したというのでたらめなうわさが広まっている。希望を持ってうわさしている人々は、翌日には他人から同じ話を揺るぎのない事実として聞くことになる。バタビアはすべてが滞っているためにうわさだけが広まる。誰も働いていない、だからおしゃべりするだけ、なにもほかにすることがないからだ。原住民の間には、だんだん不満が起こっている。解放者は、彼らが思っていたほど高潔でも良心的でもなかった。人々は不平を言った。その不平から私たちは多くを期待する。すなわち反乱、反乱が起こるべきだ。うわさ好きのバタビアは、バタム（大反乱）、ジョカ、スマランに関してささやいていた。結局、何を信じればいいのかろう？

ポール

1942年11月22日

誰もが楽観的、なぜならどこでもうまく行っているから。みんな今年末には解放されるだろうと望んでいる。そう願いたいものだ！

ポール

1943年1月20日

ユリアナ王女が妊娠、ある人たちによるとすでに女の子が生まれたとのこと。見てみたいものだ！ 確実をきすために明日赤・白・青かオレンジ色の洋服を着るつもり。オレンジの印をもった人と何人ぐらい出会うか興味がある。…中略… 王女は娘を産んだ。彼女はビクトリアという名、だと思う。退屈、娘。

ポール

1944年9月10日

[新しいノート] ノートさん、あなたを書き尽くしてしまわないことを望んでいると話しても侮辱だとは思わないでね。私は本当にあなたの名前「最後の一冊」が良い選択だということを願って

いる。私はこのガーベラを貼り付けることで未来に希望をもっている。でも私はあなたに確か最初のページはお祝いだけで満たすしかしないと言ったことがある。そしてこれ、今私が話そうとしていることは、最大のお祝い事！オレンジの花は意味がないなんて言わないで、特にリボンは、そして私が慌てふためいてピンクとオレンジ色のガーベラを買い、一日中お祭り気分だったと話すのを意味がないとは言わないでね！⁴⁷⁹ ともかく、あなたには理解できるでしょう。さて、これに関してはもう終わりにします。あなたには理解できた、だからこれで終わりにします。

スマラン

ヒューセン

1942年6月23日

昨日新聞（最初の全部マレー語のナンバー）に女王がカナダにいると載っていた。でたらめなうわさが飛び交っている。

ヒューセン

1943年3月26日

ルート・ビルケンハウエルがやって来た。私は *Sinar Baroe*⁴⁸⁰ を解約して、彼女が4月1日から講読すると取り決めた。ペトロンガン13番地には新聞がかなり不定期に配達されるからだ。

ヒューセン

1943年4月16日

ルート・ビルケンハウエルによると、セテラン広場にある彼女の家の前に2列の長いガレージが建ち、パサール・マランビル、一種の兵舎になる。昨日（15日）ルックス映画館でヤップの大クンプラン[集会]があった。なにか起こっているのかしら？

⁴⁷⁹ オランダの一部解放に関する通達のため。

⁴⁸⁰ 脚注シナル・バルー参照。

ヒューセン

1943年4月19日

今朝は空にとっても奇妙なものが見えた。明るい雲の大きな輪で、周りに太陽のような明るい斑点が4つあった。何を示しているのだろうか？

ヒューセン

1943年5月8日

ヘイ・ファン・デル・ホルスト医師は、チュニスが陥落したなどの話しをした。彼やジャーネ・ノイベルガーがやってくると、いつもニュースがある。私たちは自分では聴かない、でもヴォーテー氏とトーマス医師はしょっちゅう聴いている。

ヒューセン

1943年6月3日

エリー・ファン・フリートによると、ジャワの伝説に5つの太陽が空にある話がある。私たちは2ヶ月ほど前、良く似たものを見たことを思い出した。本当の太陽の周りに大きな輪を持つ4つの太陽だった。私のノートでは4月19日だったことが分かった！でもジャワの伝説では、その100日後に解放が来るとのこと（だから7月28日！）。⁴⁸¹ 聖書にもこのような太陽が出現するとどこかに書いてある。どこにあるか探してみなければ。

ヒューセン

1943年7月22日

今日の新聞にスラバヤが爆撃されたとある！明け方近くの空襲警報と合致する。今回は本当に30秒間5度あったので、みんな気がついた！新聞によるとあまり深刻ではなかったとのこと、飛行機が2機か3機、駅に爆弾が数個落ち、数名の負傷者と死者。私たちは16日に始まった灯火管制がずっと続くものか、あるいは日曜（25日）に解除するのか興味がある。

⁴⁸¹ ジョヨボヨの伝説を意味する。12世紀の後半クディリ王国を支配していた王侯ジョヨボヨによる予言である。人々は様々な説明が可能なこの伝説をもとに、戦況を推定したり出来事を解釈しようとした。この伝説をもとにジャワの人々は、日本の占領が短期間（トウモロコシが収穫されるまでの時間）、すなわち3ヶ月続くだろうと信じた。その他この伝説では火山噴火なども予言した。（この章のヒューセンの日記、1943年7月23、24日も参照）（Brugmans など、143 - 144）

ヒューセン

1943年7月23日

ちょうどマリオンと私は、ニッポン時間12時10分前にベッドに入ろうとして、私がワンピースを脱いだ時家中がぐらぐら揺れ出した。すぐにガウンをつけドアを開け通路に出た。少年たちもすでに起き出していた。揺れは続き、私たちは外に出てどうなるかたたずんでいた。マリオンと私は3回揺れが続いたと思った。私たちは、ジャワの予言者が話したリンドゥ[地震]かと疑った。最初はバンジール[洪水]があるはず、それは1月から2月にあった。その後リンドゥ。でも何度？明日詳しく問い合せてみよう。時計はすべて止まってしまった！

ヒューセン

1943年7月24日

誰もどれほどのリンドゥーリンドゥになるべきなのか知らない。その他、なにも起こらなかった。

ヒューセン

1943年8月18日

また、何も起こらなかった日！私はとっても望んでいたのに！

ヒューセン

1943年8月20日

ニッポン時間の今朝6時、月明かりの中、上方でモーターのうなりがする。私はベッドから抜け出し外に。カルト・ジョガも外に立って見ている。明かりのついた6機の飛行機のように、だから日本のものだとのこと。マリオンとハンスも外に出てきた。しばらくして、飛行機は消え去ったが、また戻って来た。その後、それを最後に東の方に消えた。こんなに朝早く私たちが飛行機の音を聞いたのは初めてである。10時近くにルート・ビルケンハウエルがやってきて、下町は大丈夫、彼女も飛行機の音を聞いた。その上、12時から夜中の2時まで満杯の兵補たち⁴⁸²を乗せた15台のトラックがセタラン沿いにボジョンに向けて走ったとのこと。ミンナによると、年長の警官もたくさんいなくなっただらしい。

⁴⁸² 兵補は、木製の武器/棒のみで武装していた。

ヒューセン

1943年8月26日

私は遅くまで *Toen de zon schuil ging* の本を読んでいた、ニッポン時間の夜1時過ぎになってからベッドに入った、それから2時10分前にサイレンのけたたましい音でまた目が覚めた。5回、だから空襲警報！マリオンも直ちに子供たちとともに起きた。すばやく明かりを全部消し、裏のベランダで坐って見た。下町もすべて暗くなっていた。たくさんの車が四方八方下町に走っていくのが聞こえた、でもほかには何も起こらなかった。だから半時間後またベッドに入った。朝7時15分サイレンが1度鳴った、空襲警報解除の合図だ！

ヒューセン

1943年9月26日

明け方5時10分前また呼び声、「Lampoe mati！[消灯]」カルト - ジャガはとても遅い、7時から8時半までスボンジャで待つ必要があったのだ、彼が歩き進もうとした時、警官が彼に石を投げつけたからだ！…中略… 通りは異常なほど静かだ。もうバスが走っているのも聞こえない、アンドレアス・レリカカによればもう走っていないとのこと。エーリックもゴルフ場のマンドゥール [現場監督] から、ニッポンの紳士たちもゴルフをするのが許されず、ハリ・セラサ [火曜日] のみ許されていると聞いた！これはどんな意味があるのだろうか？ただの訓練、それとも…？

ヒューセン

1943年11月12日

昨日の新聞には、スラバヤが一昨日爆撃されたが、それほど深刻ではなく、クラカーとウォノクロモなどに爆弾が投下されたと載っていた。

ヒューセン

1943年11月17日

12時頃ベッドに行きようやく眠りについた時、7回も鳴り続けるサイレンの音にびっくり！マリオンと私は外に出る。かなり明るい、でも曇り空、2時20分くらい。直ちに私たちは、汽車がバタバタの方へ全速力で走っていくのを聞く、その他ヤップを下町に送りどけるトラック、いたるところ死んだような静けさ、心地よい静寂。3時、またベッドに戻り、朝方再度解除の合図に

なるサイレンの音に起こされる。新聞が楽しみだ！新聞によるとボジョネゴロ、マディオオン、チエプーとタンジョン（スラバヤの）が爆撃されたとのこと。⁴⁸³

ヒューセン

1943年11月20日

むなしくサイレンを待つ。期待していると、もちろんやってこない！待つことは私たちにとって少し長くなりすぎている！

ヒューセン

1944年1月19日

ミンナは、2月1日までまた灯火管制だと話す。マリオンはモーフ一家のところに行き、それが事実だと聞く。そこには下町の女性がまだ数人いて、みんなとても悲観的な雰囲気。私たちは楽天的でいるつもり。昨日の新聞はさらに多くを通報。また飛行機がラバウルで落とされ、だからまだそこは戦闘中。

ヒューセン

1944年2月10日

数日前、ゲニーラーンの住民が呼び集められ、爆撃があった家の人に住居、衣類、食糧を与える義務に関しての話があった。だからかなりのことが期待されているのだ。

ヒューセン

1944年2月19日

3時に突然ジャチンガレーにサイレンが鳴り始める、少なくとも30分は続いていた、だから私たちは電気がショートしたのだと推測している。偶然？飛行機が上空に、雲の中から聞こえるが、見えない。一昨日の夜中、空襲警報があったようだ。ジャングリの多くの日本人が、その時1時半に車で下町へ走り、テアの父親が外に出て、飛行機の音を聞いた。

⁴⁸³ 東部ジャワでの空襲。ハンペルの日記、1943年11月18日参照。

ヒューセン

1944年2月23日

新聞に、トラック諸島⁴⁸⁴ですごい戦闘があり、日本が敗戦、巡洋艦2隻、駆逐艦数隻、輸送船8隻、50機の飛行機を損失したとある。でも…そこに艦隊はいないはず！日本の近海にいるはず！…中略… ニッポン人によるクンプラン[集会]があり、任務についている軍の将校たちは、どんな状況になっても捕虜になってはいけないという通告があったらしい。なぜなら日本に戻った時に斬首されるからだ。だから、戦い続けるかハラキリである。

ヒューセン

1944年3月2日

また早朝、薄明るくなり始めると、カナリーランとウイ・チョン・ビン通りは慌ただしい。カナリーランではエコノミスト⁴⁸⁵たちが集まるようだ。明るくなると彼らはうちの隣のゴルフ場で演説を受ける、それからみんな故郷に。…中略… テア・キースベリーもレオン・デッカーの敷地にあるANIEMで水を汲み出す手助けなどをする必要がある。そこで大急ぎで塹壕を作らねばならない。夜間グループも組織された、他の事務所でも同様。現在警備が続いている。新聞にはサイレンが鳴ると、betoel moesoeh datang[敵が本当に進軍中]ということだ！

ヒューセン

1944年3月4日

まだ演習もある！明るくなる前、通りにまたたくさんの車、そして私がベッドで聞ける日本人の演説！…中略…

テアは、ANIEMの「紳士たち」は不機嫌で、今晚3時に太鼓を叩いて集められたと話した！塹壕作りもそこでは急いでいる様子、というのは中国人の少年が休息して、速度が落ちた時、監督していた日本人が米国はすぐ近くにいるぞ！と叫んだのだ。さて、私たちにはまだ何も気がつかないが。

⁴⁸⁴ 1944年2月16日、17日、太平洋における日本艦隊の大基地であるトラック諸島は、連合軍による大空襲にあった。(E. van Witsen, *Krijgsgevangen in de Pacific-oorlog* (1941-1945), (Franeker 1971) 45)

⁴⁸⁵ エコノミスト参照。

ヒューセン

1944年3月18日

今晚ニッポン時間の1時、あるいは11時半（旧時間）、またサイレンが鳴り、慌ただしくヒーレン通り⁴⁸⁶にニッポン人の隊列などが来た。すべて真っ暗闇、なぜなら街灯はもうないからだ。残念ながら他には何も起こらなかった。でも私たちにとって何か良いことを意味することを願う、そしてマリオンに支援と力を与えられることも願っている。4時（旧時間）、解除の合図となった。…中略… 今朝はたくさんの飛行機、演習あるいは深刻？この飛行は、山の手ではほとんど気がつかない。

ヒューセン

1944年3月19日

新聞によれば、3月15日、16日の空襲警報は、スラバヤ攻撃のせいだ。確かに命中したようだ。

ヒューセン

1944年4月2日

州知事事務所の屋根に、今日は突然「屋上観察者」がいた。そこでサイレンがなくなったいたのだ。それからまさに暗くなって、私たちが明かりをつけた時、ズワリュウ通りとヒーレン通りの角で自動車が止まり、男が「Lampoe mati[消灯]！」と叫んだ。だからまた灯火管制！また望みを持つ！でも満月とかなり澄み切った夜で用心のためだろう！

ヒューセン

1944年4月3日

残念ながらとっても静かな夜だった！今朝9時15分前（旧時間）突然自転車に乗って棒を持った男からのグトロン[呼び出し]。みんな通りから離れる必要があり、クダ[馬]から馬具を取り外さねばならなかった！9時半、また普通に、なにも起こらなかった！演習？真剣に思えた！

⁴⁸⁶ ヒューセンは当時、マリオン・ウルフがすでに強制収容されたため下町のファン・ブラムセン一家と同居していた。

ヒューセン

1944年4月15日

10時にあるデーケンス夫人が訪問に来た、私は私室に消える。話し声からすると、まさに印人！彼女は、スカルノ（あるいはブン・カルノ⁴⁸⁷）たちがまた演説して、現在非常に真剣になっていて、結束して闘う（スマンガット[熱狂的]！）必要があると警告したと話した。その真剣さがはっきり分かればいいのに！！

ヒューセン

1944年4月22日

スラバヤがまた爆撃にあったらしい、タンジュン・ペラックでもかなりの中したようだ。マディオンも攻撃されたが、残念ながら爆弾は飛行場の外にある水田に落下した、25メートルの深さ、だからかなりだ！チモールは5日前ほどに、一日中手中に。港のチモール人がみんなここで投獄された！⁴⁸⁸

ヒューセン

1944年4月28日

新聞によると、サバンが爆撃にあい、飛行機が10機落とされたとのこと。

ヒューセン

1944年5月18日

ネルQが、スラバヤは昨日2度爆撃されたと新聞に載っていたと話す。

ヒューセン

1944年5月21日

灯火管制は、現在通りの角に旗を掲げることによって告知される。まだ赤と白、だから危険だ。

⁴⁸⁷ 脚注スカルノ/ブン・カルノ参照。

⁴⁸⁸ おそらく不法活動の疑惑で。「逮捕と家宅捜査」ハンペルの日記、1943年2月10日参照。

今日は師団の輸送列車が通り抜けるようだ、だからバタビアとスラバヤ間は汽車が一台走るだけなのだろう。

ヒューセン

1944年6月8日

新聞に「欧州の第3前線⁴⁸⁹」について何か掲載されている。でもその他は理解できない。

ヒューセン

1944年6月11日

夜10時にサイレン。予感がしていた。近く（通りの角）にあるマレー語のラジオが、敵の艦船がジャカルタとバンタムの前方に横たわっているが、攻撃には防戦した！と告げた。

ヒューセン

1944年7月16日

本日（日本時間9時）、コバンとガン・ワーハルスに赤・白・赤の旗が吊り下がっている、だから上空危険だということ。…中略…日本時間4時ごろ、まだ赤・白・赤の旗がなびいている。一日中飛行機が上空を飛んでいた。イエチュエが事務所からやって来て、彼女のボスは、警報があったので夜中に事務所を監視する必要があると話した。

ヒューセン

1944年7月18日

ゲーニー⁴⁹⁰とタワン駅で脱線事故があった。サボタージュだ。⁴⁹¹

⁴⁸⁹ 1944年6月6日の連合軍ノルマンディー上陸に関する報道が伝わったようである。

⁴⁹⁰ ゲーニーあるいはグンディックは、スマラン理事州のプールウォダディ南にある鉄道駅と市電の駅であった。(B. Wieringa, *Beknopt Aardrijkskundig woordenboek van Nederlandsch-Indië* (Haarlem 1917), 100)

⁴⁹¹ 本来の鉄道職員が未熟な人員に交替させられてから、おそらく無知と不注意のせいで鉄道事故が頻繁に起こったため、日本人はこれを妨害行為とみなし、かなりの鉄道労働者が逮捕され、拷問、処刑された。「序」参照。

ヒューセン

1944年7月22日

ファン・ウーシック夫人から、街はとても厳戒で誰も歩いてはいけない、頻繁に人々が路上検閲されていると聞いた。多くのオートバイや自動車が街を行き交っている。だから大まじめ！私たちのサイレンが長時間鳴っているだけでなく、他のものも全部！なにか起こっているのだろうか？他の日と同様、飛行機はまた空を絶え間なく飛んでいる。

ヒューセン

1944年9月8日

*Sinar Baroel*には、「敵」がすでにアントワープ、シャルルビルーのマース流域、ソーヌ川の谷間にいる、とあった。アドリア海とブグ（東プロイセン？）でも闘っている。⁴⁹²

ヒューセン

1944年9月12日

ちょうど朝とても早く食事を終えた時、イエットが娘とやって来た。もちろんいろいろ話した。彼女は、私がすでに収容所で死んだなどと聞いた。寿命が長いってことかしら?!

ヒューセン

1944年9月16日

*Sinar Baroel*によると欧州では激しい戦闘だとのこと。「敵」はアーヘン、モーゼル、東プロイセン、ルーマニア、ブルガリアで、その間アルノ川とアドリア海でも戦闘しているとのこと。

⁴⁹² ブグはポーランドの東を流れる川。川の一部は、現在白ロシアとウクライナの国境線になっている。

ヒューセン

1944年9月23日

数日前の*Sinar Baroe*では、「ムス[敵]」はハルマヘラ北のモロタイ島に上陸したとあり、そこで1師団が上陸し、激しい戦闘になるためおよそ60隻の船を持っていると伝えている。

ヒューセン

1944年9月26日

ネル・Qが帰宅して、ムス[敵]がジャカルタ上空でパンフレットを投下し、それにはオランダ政府が直ぐに戻って来ることと「返事」を9月28日あるいは29日に予想していると書かれているとマレーのラジオ放送が伝えたと言った。なんの返事なのか知らされなかった。…中略… ニッポン時間の9時ごろに、「Lampoe brongsong[電灯を覆え]」と呼びまわっている、だからまた灯火管制！本当に何かが起こっているようだ！

ヒューセン

1944年9月27日

ピート・Qが、テルナーテは陥落したが、まだ激しく戦闘しているのとのラジオ報道を携えて帰宅！私たちは緊張の日々を過ごしている！

ヒューセン

1944年9月28日

新聞に、蘭印は3ヶ月以内にユートピアと同様になると掲載されていた。そう願わない！今晚ブン・カルノ及びその他によるラジオ演説がある。これは、ジャカルタ上空ではなく(!)スラバヤ上空に落とされたパンフレットに、オランダはよみがえった、蘭印はまもなくよみがえるだろうと書かれていたからだ。⁴⁹³ これに関し原住民に前政府に戻りたいかと問われたので、ブン・カルノのプラジュリッツ[闘志]たちが「tidak mau[反対]」と叫んでいた。そのパンフレットはフ

⁴⁹³ このパンフレットは、スラバヤ上空ではなく、やはりバタビア（及びプレアンガー）上空で投下された。脚注パンフレット参照。

ファン・デル・プラス⁴⁹⁴からのものらしい。それからモロタイが陥落したとも書いてあった。スカ
ルノは、それが9月5日に起こったことを認めている！

ヒューセン

1944年9月30日

スタンス・ガトアの父親が、数ヶ月前死の床で15日になる最初の日曜日に平和が来ると言った。
だとすると10月15日のはず！神様、そうでありますように！

ヒューセン

1944年10月4日

イエチェ・メイヤースが、彼女ともう一ヶ所の事務所の偉いボスたちが長期間！ジャカルタにい
ると話す。また緊迫？イエチェの課長によると、彼らは義勇軍に入る必要があるとのこと！

ヒューセン

1944年10月7日

*Sinar Baroel*によればオランダは解放され、フィリピンでは激しい戦闘とのこと。イエチェのボ
スは坊主頭で事務所に現れた。すべてが戦争を示している！

ヒューセン

1944年10月19日

戦況速報が配られた、その中には10月15日に台湾が多数の飛行機で爆撃されたことが通達、その
うち56機が落とされ、バリックパパン上空でも落とされたとある。敵は撃退している！

⁴⁹⁴ 蘭印参議会のファン・デル・プラスは、1942年オーストラリアに亡命していた。彼は、植民地省大臣H.J.
ファン・モークによって1942年9月に設立されたオーストラリアのオランダ委員会のメンバーだった。
(Jansen, 436)

ヒューセン

1944年10月21日

新聞では、台湾とマニラの戦闘に関して話している。そこでは米軍艦隊が惨敗したはずで、我らインドネシアのプラジュリッツ[闘志!!たちは勇敢だった!とのこと。だからもう日本の兵士はあまりいないということ!!

ヒューセン

1944年10月25日

日曜の午後、チレボンを出発した3つの機関車と貨車40台の大きな汽車がクンダルセで脱線した。200名の兵補と数名の市民が亡くなったはず。バタビアからの汽車らしい!前方の貨車に手榴弾が積まれている軍事用の汽車だ。

ヒューセン

1944年11月11日

新聞によると、シンガポールが攻撃されたが、撃退され、マッカーサー将軍がマニラにいるとのこと!前線はだから接近している!

ヒューセン

1944年11月30日

12月1日からジャワには戒厳令がしかれている。これは考えさせられる!イエチェも防空訓練のため、現在毎日9時半でなく9時に事務所に入っていなければならない。カランパナス孤児院は明け渡された。婦女子はトラックで下町に運ばれ、どこに行くのかは私たちには分からない。ゴンベル、ボジャなどでも戒厳令がしかれていて、防御体制らしい。

ヒューセン

1944年12月5日

夜、隣にちょっと立ち寄る。そこでまた「演習」があると聞く。だからサイレンが予想される！
いまだに飛行機がすでに朝の5時から上空を飛んでいる。新聞によれば、ビルマがムス[敵]の手
中にあり、東京が爆撃され、ハルマヘラのあたりで戦闘しているとのこと。

ヒューセン

1944年12月26日

新聞には、ここでサイレンが鳴っていた間、マラン、マディオオン及びほかの場所がムス[敵]の訪
問にあったと載っていた。

ヒューセン

1945年1月28日

午前8時15分、サイレンが7回鳴った！8時半に飛行機が低空飛行、遠くでもモーターの音。カミ
ナリみたいな大砲の砲声に機関銃の音が続く。通りでは「Masook perlindoengan[防空壕へ]！」
という叫び声。それから静寂！またラティハン[演習]?!カリバンタンの方角。…中略… 10時に
解除。…中略… ずっとその日は飛行機が上空にいた。何か予期されるのだろうか？低空飛行の
飛行機は明らかに米軍機だ、なぜならパンフレットを投下しているから。クミチョー[組長]たち
がそれを回収するために送り出され、プレゼントを与える。この近くでパンフレットは見なかつ
た。

ヒューセン

1945年2月6日

1月28日HBSの裏の建物とカリバンテン飛行場に爆弾が落ちたはず。低空飛行の飛行機はだから正
確なやり方を心得ていた。⁴⁹⁵ 今晚は「大演習」、だから特別な灯火管制！

⁴⁹⁵ HBSは日本占領時代、軍の職員事務所やスマランの駐屯地として使われていた。

ヒューセン

1945年2月8日

スマランは日本人と日本の軍用車で満杯だ。クラブはものすごく慌ただしい。兵士と兵補たちはみんな白いハチマキ。これはなんの意味なのか疑問に思う。昨日のように一日中飛行機が街の上空を飛んでいる。…中略… ジャワ全土で演習！チアンジにはスカブミからの師団が来ていた！まだサイレンはない。

ヒューセン

1945年2月10日

新聞に、ロシア軍がベルリンから40キロの地点にいるとあった。

ヒューセン

1945年3月18日

ブン・カルノはスマランにいて、アルーン[街の広場]での大演説で、非常にたくさんのカパル・カパル ムス[敵の艦船]が破壊され、敵はバビ・ブタ[盲目のブタ]のように彼らの行くべき場所はまだ分からないなどと言った。

ヒューセン

1945年4月19日

ルーズベルト大統領が死亡、あるトゥルーマンが後継者。東京では御所がやられ、日光とかそういう名の祭壇にも命中した。

ヒューセン

1945年5月4日

新聞にはヒトラーが死んだとある。これは欧州の悲惨さの終りを意味するのだろうか？

ヒューセン

1945年5月8日

マルイェナー夫人（メナド系ドイツ人）がドイツの援助が廃止されるとの通知を受け取った。手紙の下の方にもう「ハイル・ヒットラー」とは書かれていなかった。だから変化している証拠！Q夫人はもう2ヶ月以上メダンにいる娘さんからの報せを受け取っていない。そこで何か起こっているのだろうか？

ヒューセン

1945年5月12日

新聞とラジオで、ドイツが無条件降伏をしたと認めている！だからこれは欧州での戦争終結、でもそのすべての悲惨さも終わるのかしら？ヒットラーとムサートは死んだ。⁴⁹⁶ 5月5日女王はオランダに戻った！

ヒューセン

1945年6月8日

一晩中飛行機が一機上空に、もう何日も続いている、月明かりがない日にも。戦艦が近くにいるのかしら？私たちは待つ緊張と怖れ、そして希望の中で生活している。周囲ではだんだんと気分が落ち込み始めている。

ヒューセン

1945年7月14日

ピート・Qが突然スラバヤから帰宅。…中略… スラバヤは現在、定期的に戦闘機と小型爆撃機が訪れている、もう大型機は飛び交っていない。…中略… ラワンは激しい攻撃を受け、メランのクタ・ラマ（旧市街）とレース場の周囲もだ。

⁴⁹⁶ アントン・ムサート、ドイツと協力するオランダのファシスト的な政党NSB（民族社会主義党）のリーダーであった。彼が死んだという報道は誤りであった。ムサートは、戦後死刑を宣告され、1946年に死刑に処された。

ヒューセン

1945年7月22日

いい日だった。12時半（私たちの時間で）飛行機の音を聞いた。ヤップのではない。近づいてくるブーンという音が少し異なっている…そして突然サイレン、だから遅れすぎる。私は急いで青いワンピースを身につけ、ソックスと靴を探し、そしてお金を集めた。それからすぐに間近が爆撃されたのを聞く。ブン、ブン、ブンと何度も機関銃の音。それからマゲランの方向に8機か9機の爆撃機が通り過ぎる。私は彼らが戻って来るだろうと予想していた、本当に騒音は何回か聞こえた、でもいくらか弱くなっている。それから消えた。…中略…しばらくして、解除の合図。ノール（パビリオンの居住者）が真っ青になって帰宅。工場に命中し、死者と負傷者。数人のブラヤランの男たち[船員]が泥の中私たちの家の前で休んだ。彼らの船に命中し、彼らは泳いで助かったのだ！かなりたってから、ブンキ・ラーゲフェーンがやって来た。彼は港（Sugenko⁴⁹⁷）で働いていた。彼らの本社に命中し、多くのジャワ人死亡者と負傷者がでた。

灯台の後ろ側の建物にもすべて命中、時限爆弾も加わっている。多くが燃焼。彼によると、カンボン・ペルバランも実にひどくなっているとのこと。私たちはここでもものすごく驚いたのだ、港にいたり工場の中にいた人々はどんなに驚いたことだろう！私たちは早めにベッドに入る。…中略…

11時（私たちの時間で）、突然サイレン、一度だけで長く続く、態勢を整えよとの警告サイレンだ。私たちは衣類を身につけ、バラン[荷物]をいくらか集める。明かりは消した、でも満月に近い、だから外は明るい！ちょうど支度を終えた時、サイレンがまた鳴り出し、私たちは再度遠くにエンジンの音を聞く。そのエンジンは特有の音を立てている。私たちは家の横手に行き、蔭で坐ったり横たわったりした。バランは表のベランダで整えられている。ピート・Qはスレッコだ。⁴⁹⁸それから飛行機が私たちの頭上のすぐ傍を飛び、少し後3回かそれ以上の激しい爆音、また火の海の港が命中した。飛行機は陸へ向かい、月明かりと明るい雲なので良く見える、まるで陰気な黒い鳥のようだ。

15分ほどしてから戻ってきて、リクユ[鉄道]と港の上方を回転している。まるで何かを探しているかのようだ。また立ち去る、また待機と緊張。ちょっと隣を見に行く。そこではみんな表のベランダで坐っている。イエチェは床の上で毛布を巻いて。またエンジンの音。私は戻り、ピートと表を見に行った。それからヤピーと家の横を見た。飛行機が私たちを通り越した時、突然ヒューヒューという音を聞いた、そしてベンに身をかがめるよう注意した。その後3つの爆音。窓やドアがガタガタいう。またしても上方が火の海で、街の方にも広がる。それから飛行機が立ち去る、しかし私たちが終わったと思い、私たちの周囲がすべて死んだような静けさになると、

⁴⁹⁷ 「スゲン」の字義は港。おそらくスゲンは日本のコード名でスマランを指した。もう一つ、スゲンコーは日本語の「ゾーセンジョ」すなわち造船所がなまったものだという可能性もある。

⁴⁹⁸ スレッコ展望台。旧植民地にあった港湾事務所の信号所。スレッコの傍には警察の詰所が設置されていた。（Brommer など、127, 131）

遠く東の方からエンジンの騒音が聞こえる。これは違う飛行機、これはエンジンの音がしないから。また恐ろしく緊張、でもみんな冷静だった。

ピートと私はまだ外に立っていた、他の人たちは表のベランダ。私たちのすぐ前、リクユ[鉄道]の上方、黒い飛行機が火のたいまつを落下させた。それは澄み切った光である程度の高さを保っていた！彼らはまだ十分見ていなかったとみえて、また飛行機が戻り、火のたいまつを私たちの前にあるチャマラ[トウヒノキ]の上に落下した。それで私たちは、注意する必要がある。危険が近づいている、緊張が張り詰める！そう、戻ってきて翼の下にある地点から真っ赤な爆弾を撃ち、私たちの前の鉄道に並べて斜線状に投下した。投下としぼんだ光線は、次第に激しい爆音に続き、3回から6回くらい続いた。飛行機は回転しているよう、なぜなら円周をえがいている。これは3回続き、3回目にはピートと私はペンガポンのすぐ上方に黒い飛行機を見、だから後方に下がり（私たちはまだ家の前を見ていた）、ちょうど間に合った、なぜなら爆音は今私たちのすぐ傍で、恐怖心を増し、緊張させられる。それから騒音を出す飛行機はついにいなくなった。すでに遅くなっていて私たちは寒くて空腹だ。ようやく3時ごろ（私たちの時間で）解除の合図になったら、私はベーといっしょに行き、数個のピサンとテンテン・カチャン[ピーナツクッキー]を食べ、その後31番地に、ベッドに入る。

ヒューセン

1945年7月23日

遅く起き出す。鉄道の動きはない、だからわずかな人々しか中にいない。ブンキ・ラーゲフェーンが、私たちがどうしているか聞きに来た。彼はベッドの中において、かなり情報不足なのだ。…中略…それからウィニーおばさん（Q夫人の妹）とネルが、ヴェルテンブルグ兵舎（警察）、トコ・モース⁴⁹⁹（ペコジャン）とジュルナタンの中央調理所がやられたという報せを持ってきた。いたるところパニック状態になっている。ベーがブランジャ[買物]に行く、B夫人は2人の子供たちと母親を見に行く、そしてQ夫人は外出。私は4人の子供たちととどまり、家を見守る。外はすべてなぞめいた静けさだ！

エティール・ファン・ウーシクがちょうどペコジャンから戻ってきた。オガワ⁵⁰⁰（薬局）は正面がやられ、カウンターがひっくり返り、オバットウ[薬]はもうない！トコ・モーフも同様にやられ、刑務所の裏側もだ。でもヴェルテンブルグ兵舎は命中しなかった。後から、Q夫人が、赤丸入りの貯金通帳を現金にすることが許されて学童たちが家に送り帰されたと話す。⁵⁰¹

⁴⁹⁹ おそらくペコジャン9 - 11にあった中国人リー・キム・チンのトコ・M.O.T.を指している。（スマラン電話帳 1941）

⁵⁰⁰ ペコジャン50番地にあったオガワ・ヨーコーは、持ち主T.オガワの事務所の名前だった。日本占領期にはここに薬局があったようだ。（スマラン電話帳 1941）

⁵⁰¹ これはおそらく日本当局が貯金を促進する方法の一つであった。流通紙幣を回収することによって、インフレに対処しようとした。貯蓄への活発なプロパガンダがなされ、また強制的な貯金もさせられた。（Brugmansその他、508, De Jong 11b tweede helft, 549）

ノール（パビリオンの印人居住者）が帰宅した時、彼はグダン・バラス[米の保管庫]とグダン・グラ[砂糖保管庫]、それに彼らの仕事場（リンデテベス）がなくなると話した！もう仕事がない！Q夫人は負傷者や障害者に関する不愉快な話を聞いた。ブンキ・ラーゲフェーンが昨日見たことを話したのと同様の話した。私は、昨晚パニック状態を避けるため賢明にも沈黙していた。ヴェルテンブルグ兵舎は真ん中の壁がやられ、崩壊した。収監者には命中しなかった。通りのあちこちで、避難民のグループが山の手に行きたがっている。事務所は平常通り動いている。

ピート・Qは、港を訪れた後で帰宅して、私たちの前の鉄道はもう動かない、すぐ裏は私たちも見る事が出来るように全部破壊されているからだと話した。おそらくだから赤い爆弾、ピートによれば「口紅」爆弾によるものだ。彼らは屋根に穴を開け、それで爆弾がはじけ、すべて連なって破壊してしまうのだ。これはトコ・ムーフとオガワでも起こった、でもそれは確実にヴェルテンブルグ兵舎を狙ったものだ。ブンキ・ラーゲフェーンから港に投下された爆弾の破片をもらう。彼らは今日働いてはいけない。みんな休みだ。ベルンハルト夫人は知り合いから、ジャチングラの野営地がやられ、人々は下町に避難したと聞いた。ペンガボンなどから彼らは逃げ出している。ジオルジ夫人はすでに去った、ハンハルト夫人も続くだろう！私たち、そしてお隣もとどまる。…中略…今日の*Sinar Baroel*には爆撃のことが少しでている、でも何がいったい起こったのかはどこにも掲載されていない。

ヒューセン

1945年7月24日

ブンキ・ラーゲフェーンによると、赤い爆弾は口紅爆弾ではなく、白熱爆弾だとのこと。…中略…12時前ごろ（私たちの時間）サイレンが3回鳴った、だからまだ遠い。でも私たちはすでに15分間飛行機の音を聞いている。おそらくカリバンテン飛行場から敵に向かって飛び立つ水上飛行機だろう。12時頃にはすべて解除。ちょうど食事が終わった時、またサイレンが鳴る。今回は5回、1時15分前だ、1時に解除。その他なにも聞いたり見たりしなかった、だから「雨（パンフレット）」はどこか違う場所に投下されたのだろう。…中略…ピート・Qによると、飛行機は沿岸にいて、4つの煙の柱を見た、だから敵の戦艦が近くにいるとのこと。今日の夜中にもサイレンが予想される。

Q夫人がCBZ（中央市民医療施設）に行き、そのホールに負傷者がたくさん横たわっているのを見た、軽傷者も簡易寝台1台2人に横たわっていた。霊安室にさえ横たわっていた。ペラジャカンの男[船員]たちが、血が充満した担架を担いでいる。ブンタラン医師がニップと一緒に彼女を通り越し、彼女は彼が「latihan keras[深刻な演習]だ」というのを聞いた。街ではもうほとんど民間人はみられない。いたるところ日本人と戦備態勢の兵補でいっぱい。山の手から彼らはトラックいっぱいの日本人を乗せてやってくる、おそらく港が目標であろう。…中略…今日はカリバンテンが爆撃された。避難に関してささやかれている。

ヒューセン

1945年7月25日

マゲランとペカロンガン(師団)は、昨日かなりの被害が出たようだ。チェピリン(保管庫)も。…中略… ちょうど食後、7時15分前(私たちの時間)、サイレンが1回、これは「態勢を整えよ」の合図。日本の飛行機が2機マゲランから海の方角に通り過ぎる。ピートは、スラバヤはマディウン、マゲラン、チェピリンに42機の飛行機で訪れたと話す。何かありそうだ。…中略… 一晩中静かだった、でも解除のサインは出なかった。

ヒューセン

1945年7月28日

5時半(私たちの時間)にサイレンが1回、だから態勢を整える合図だけだ。私たちはゆっくり食事し、すべて片付ける。私はお金をエプロンに隠した、それからまた待機。…中略… ブンキ・ラーゲフェーンも先週日曜(7月22日)の爆撃の際、逃げなかったので「スラット・ブジャン[宣誓書]」と4メートル半の縞模様の布をもらった。私のために彼は港の区域でみつけた焼夷弾の破片を持ってきた、だから私たちがシューシューという音を聞いたもののひとつだ。それからずっと夜中は静かに眠った。ここは何も起こらなかった。

ヒューセン

1945年7月31日

パンフレットによると、現在無条件降伏の最後通牒があった、だから明日は大祭典が始まるとのこと。

ヒューセン

1945年8月1日

パサールやいたるところ静寂、まるで誰もが緊張して待機しているようだ。…中略… みんなはニッポンが闘い続けると決心したと言う。どうなることやら。

ヒューセン

1945年8月2日

12時ごろ、港と工場にいる人々がパニックになって逃げ出した。もちろん海か空に何かを見たのだらう。パサール・ジョホールで突然爆音が聞こえた、ちょうどそこにQ夫人がいた時だ。パニック、みんな逃げる。警察とニップがあらゆるものを検閲し、その後人々がまた入ることができた。だからいたるところパニック状態。ベアの卵のメイドは彼女の最後10個の卵をすばやく柵から手渡したがった、普段は何時間もおしゃべりしているのに。

ヒューセン

1945年8月10日

スラバヤでは、パサール・トゥリ駅が命中したようだ。後どれくらい？

ヒューセン

1945年8月13日

暗くなって、またお隣に行く。ブンケ・クンツもいて、*Sinar Baroe*を持って来ていた、その中には8月8日に、ロシアが8月9日から戦争を始めるよう日本に宣戦布告したとの通告がでていた!! 何がまた起こるのだろうか？

ヒューセン

1945年8月14日

いろいろなところから私たちが知る報道は、ほとんど信じられないものだ。ウィニーおばさんが今晚ここに来て、アンボン倶楽部を介して、停戦になり、兵補とペタ兵は全員米国が上陸するまでとどまる必要があるとの正式な通告があったと話した。彼らはすべてが平穏にとどまるようにする必要がある。今すべてが終わるのだらうとはほとんど信じられない。旧友の誰が収容所から生きて戻って来るだらう？オランダから何を聞くことができるだらう？ここにはいるのはもうあと何日？私たちはみんなとても高揚した気持ち、そしてお隣で1時（ニッポン時間）まで話した後、家ではQ夫人とまた話し始めた。今日は編み物をする暇がなかった。

平和通告

バタビア

ハンベル

1945年8月15日

私たちは既に数日間を神経質な気分で過ごしています。全く狂ったことを耳にするのですよ。でも、もう私たち自らラジオを聴くことができないのは残念です。新聞はソ連との宣戦布告を明示しています。何人かの女性は夫の帰還を思って、私のところで何キロもコーヒーを買い求めます。ある知人は女性たちのために、「米軍が来た時のために」ドレスを作ります。ママはいつも私に、「もし米軍が来た時には、あなたは家の中で寝ることになるでしょう。あなたはいつも戸を開けたままで寝ているから、あとになってあなたの寝床に誰かが横になっていたりを経験することになるでしょう」と言います。でも、私がガレージの戸を閉めてしまうと、窓がないので窒息してしまいます。そして、犬たちもきつと騒々しい音を立てることでしょう。

昨日のお昼にタンジョンプリオクの方で「ドカーン・ドカーン・ドカーン」と音がしました。航空機が飛来したけれども、停電していたために私たちは空襲警報を受けませんでした。今朝も「ドカーン・ドカーン・ドカーン」としたら、しばらくしてG. は神経を高ぶらせて入って来ました。「米軍が訪れた！」私は雑巾がけをしている最中で、そのまま掃除を続けていたら、彼女は依然私が冷静にしていたので怒りました。彼女の向かいの奥さんは、彼らがこの大半を移管したことをラジオで知ったのです。私たちは冷静を保つべきことなどをです。この向かいの奥さんはA. へのところへ行き、そのA. がG. を訪れ、彼女が私たちのところに来たのです。この会談は総督の宮殿で行われました。J. 夫人はグダン[物置]からご主人の制服を取り出しました。彼は軍隊の大尉です。みんなとても歓声を上げていました。私は本当かどうかを知るために町に出ました。何だったと思います？スマトラ、セベレス、ボルネオからの代表団がそのムルデカ[独立]について話し合うために到着したのです！ 私たちは8月18日まで国旗を揚げなければなりません。カンポンでは、米軍が明日到着すると言われていました。

ハンベル

1945年8月16日

残念、本当に残念だ。自分でラジオを聴けないことは。全く狂ったことを耳にするのですよ。彼らは相変わらず人々を連行しています。3年間も女装して過ごしていて、ラジオを聴き続け、今また、いつも通りに歩き回る男子がいることを知ります。ほとんどの人を信用することができま

せん。以前、私たちがラジオに自ら耳を傾けていた時には、何となしにおかしなことを耳にして、「どこからそんな馬鹿げた話が？」と思いました。ヨシワラ⁵⁰² は解体中だそうで、要するにヤップは降伏したのです。しかし、人々が互いに笑みをかわす以外は平常通りです。冷静に様子を見るのみ。

ハンペル

1945年8月17日

しかしながら、町は静かなささやき声で包み隠されました。私たちは何も知らされてはいませんが、みんなそれを知っているのです。8月18日まで国旗を揚げなくてはなりません、至るところで既に旗が降ろされました。赤白の下に青色を縫い付けるためとも言われています。あなたの衣類を、一まだ持っているものを一私も洗濯したり、空気にさらすためにタンスから取り出したりしています。

スマラン

ヒューセン

1945年8月15日

ベエー・クンツェが7時（ニッポン時間）に私を迎えに来る。ベエーの姪ニニが来たのだ。平和が公式に通告されたが。。。本当なのかしら？イエチェ・メイヤースはその知らせを否認している。私たちは一体何を信じたらいいのだろうか？私は非常に興奮し、ほとんど冷静に考えることができない。

⁵⁰² 日本軍の将校倶楽部または慰安所を意味する。

バタビア

ポール

1945年8月22日

「ジョハールラン14番地からの感謝の歌」 (曲：「お日様が我々に別れを告げる」)

お日様ニッポンが我々から去る。
オレンジみたいな赤い光が我々を再び包む。
災難と屈辱が今消え去った。
神様にこのことを感謝しよう。
時計が再び力強い音色で響き渡ることを。
我々の心は謙虚な感謝の気持ちがあふれ出る。
時計が再び響き渡り続けることを。
これから我々は邪魔されずに暮らせることを！

R. B. v. S.

1945年8月22日 於バタビア中央

Staff Diary project:

Elisabeth Broers (editor Dutch)
Mariska Heijmans-van Bruggen (project co-ordinator)
Jeroen Kemperman (project assistant)
Elly Touwen-Bouwsma (programme director)
Richard Voorneman (editor Dutch)

Members Advisory Committee for the Diary project:

Dhr. R. Boekholt
Drs. E. Derksen (Stichting Tong Tong)
Dhr. F.N.J. van Dijk
Dr. mr. G. Jungslager (Stichting Japanse Ereschulden)
Dr. E.B. Locher-Scholten (Universiteit Utrecht)
Dr. Osamu Namba
Dhr. H.R. Toorop (Voormalig Verzet Oost-Azie)
Dr. H.L. Zwitzer